

---

# バカとテストと召喚獣～ドジな天才？あらわる～

三日月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜ドジな天才？あらわる〜

### 【Nコード】

N0343S

### 【作者名】

三日月

### 【あらすじ】

「今回我が家で実行するのは、サバイバルゲームです！」  
亜矢のこの一言で、場が騒然となる。  
優勝賞品は「ありとあらゆる願いを金の力で叶えてみせる」というものだった。

この賞品を巡り、俺達の壮絶な戦いが始まったのだ……！  
これは俺とクラスメイト、幼馴染との激闘を描いたデッド・オア・アライブなサバゲーコメディー！

## ～主人公設定～

### 主人公設定

名前 浅斬直貴あさぎりなおき 16歳 誕生日 5月 9日  
身長 168cm 体重55kg  
趣味 ゲーム、運動、読書、お菓子作り  
特技 家事全般、運動全般（剣道と柔道とバスケをやっている）  
性格 強気、優しい、勘違いしやすい、オープンスケベ、KY（本人の自覚ナシ）  
好きな物 正義感の強い人、一生懸命な人、面白い人  
嫌いな物 裏切る人、自分のためなら何でもする人（自分がたまになる） 一生懸命な人を邪魔する人  
容姿 髪の毛の長さは明久くらい。少し天パで漆黒の色。目つきは少し釣り目で、ダークブルーが印象的。

好きな女性のタイプ 美人（最優先事項）で話しやすい人

本作の主人公。常識人で優しいが、ひとたび自分や仲間が傷つけられれば自慢の格闘術で相手を病院送りにする。ただし、滅多なことでは使わないが。（後々警察沙汰になった事があるからだ）

性格は、基本的には優しいときもあれば怒りっぽいときもあり、あるときは涙もろいときもある。まるで季節の移り変わりのような人である。ムツツリー二ほどでは無いにしても変態で、オープンなスケベである。

優しい反面、どこか腹黒いところがあり自分の身の安全のためなら明久や雄二を簡単に売る。だが、そのせいもあるからなのか浅斬も

明久や雄二によく売られる。前の学校ではKYで有名だったが、文月学園ではあまり目立たない。かなりの運の悪さで背中にミニサイズ死神（名前はリユージュらしい）を乗っけているらしい。

そして最後に『超』がつくほどのドジである。何も無いところで転ぶのはもちろん、階段から落ちるのは当たり前。某マンガ、ドラマもののノ○太にも引けをとらないドジっぷりである。そのせいで10メートルにはねられたこともあったが、2日で正常という恐ろしい回復力も持っている。だが退院の日に、階段から落ちて再入院という経歴も持っている。

家族構成は父、母、姉、弟、直貴の五人家族である。父母は仕事で別の場所に長期滞在中。姉は一人暮らしで都心に住んでいるが、たまに心配して電話を掛けてきてくれる。弟は小学生だが明久よりは頭がいいらしい（本人談）

過去は色々と問題児で勉強も全くしないようなヤツで大変だった。高校生になってからはそういった行為は見られず、平穏な毎日を送っている。昔とある不良グループを一夜にして壊滅させ前の学校では、『暴君剣士』、『柔道魔人』、他の不良グループには『超不運狼』などと呼ばれ恐れられていた。

#### ・召喚獣

装備は日本刀と軽装の鎧。背中に点数分の本数の日本刀や刀、小太刀などが入ったかごを担いでいる。刀の持ち方は片手に三本ずつ日本刀を持った、BASRAの伊達さんのような持ち方である。

〜主人公設定〜（後書き）

これが初投稿です！

これからも頑張っ  
て続けていくんで、  
コメントや応援をよろしくお  
願いします！



を付けるな、いらつくううう。

そういうのはキチンと連絡が欲しかったよ。全く・・・  
学校にも言わなきゃだめだな。あ、友達にも言っとかないと。

「んで、いつ引越すの？」

『明日』

ほうほう明日か、ならすぐに準備しないと・・・って、

「明日あ！？」

おかしい！ 二、三週間後を予想していた俺がバカだった・・・  
この両親には常識が通用しない！

まずは学校に連絡しなきゃ、あと友達にも言わなきゃ。

忙しく俺のケータイが鳴る。大体の人に連絡を終えた頃には8時を  
回っていた。

荷造りもしなきゃ駄目だな。あと弟の駿しゅんの学校にも連絡しなきゃ。

そんなことを考えながら階段を駆け上がって・・・ん？

違和感に気づく。あれ？

駆け上が、

ツルツ

むかつく位のきれいな音がして、俺は階段を駆け下りた。  
頭から。

気がつくとも見覚えの無い知らない部屋にいた。

ココはどこだろう？

そんなことを考えていると見覚えの無いソファの横の見覚えの無いテーブルの上に

こんな手紙が置いてあった。

そこには、見覚えのある字で憎たらしくこう書かれていた。

『学校までの道のりは、書いておくからね。あと、駿のことよろしくね。』

俺は一呼吸おいてこう叫んだ。

「あんのバカ親あああああ！……！」

こうして俺は文月学園に転校をしたのであった……

## プロローグ（後書き）

こんにちは！初投稿です！

イヤじゃなければこれからも読んでくださいな。

〈第一部開始〉第1話 重要書類の名前の書き忘れにご注意ください (前書き)

>新設 青春ポイント合計<

・相談もなしに転校させられる - 2

・階段から落ちる - 1

・見知らぬ部屋にいる - 2

現在の青春ポイント合計 - 5

〜第一部開始〜第1話 重要書類の名前の書き忘れにご注意ください

第一部スタート！

俺が今日から転校することになっているこの学園は、何でも世界初の何とかシステムって奴を取り入れて有名な学校らしい。試験校というだけあって多くのスポンサーがついており、学費も非常に安い。（だから両親はココを選んだようだ）

そのシステムって言うのが『試験召喚システム』というらしい。オカルトと化学と偶然が重なって出来たそれは召喚獣と呼ばれる自分そっくりのキャラが出てくるらしい。しかも、その召喚獣を使って戦争も起こせるそうだ。召喚獣の強さは本人のテストの点数に比例していて、点数がよければいいほど強い召喚獣が出てくるそうだ。テストの点数で召喚獣だけじゃなく本人のクラスも振り分けられる。そうなので頭がよければAクラス、悪けりゃFクラスと言った具合になっている。

戦争にはルールがあるらしいがどうにも面倒なので聞き流した。

「大体のことは分かったか？浅斬？」

筋骨隆々という言葉はこの人のためにあるのか、と思うくらい立派な大男が説明を終えた後に俺にむかって言ってきた。

「はい、ありがとうございますね。西村先生。」

大男の名前は西村宗一というらしい。生活指導の先生で見た目は熱血教師、といった具合だろうか。

「ところで、振り分け試験はこれからですか、先生？」

「ああ、これから補修室で特別試験を行う。勉強道具を持って早めに来なさい。」

「分かりました。」

俺は勉強道具を持ち、補修室に向かった。補修室に行く途中、何人か生徒を見かけたが俺が補修室に入ろうとしたときに、

『あいつ、鉄人の根城に入っていくぞ!!』

『なにをやらかしたんだ、あの子?』

と聞こえたがあまり気にしないようにした。ここで気にしたら相手になめられるような感じがしたからだ。席に着き勉強道具をセットして俺はテストを受けた。

なんだ。意外に簡単じゃないか。難しいと思っていたがそれほどのものでもないな。

テストを受け終わり、席を立とうとすると突然、西村先生に声をかけられた。

「おい、浅斬。お前はFクラスだ。」

といわれた。

そつかそつか、『F』か。いや、テストが全然出来なかったのか・・・  
ってはい?

え? まじで? 何で? って、ええええええええええええ!!!

「先生! それはおかしいです! 俺ちゃんと自己採点もして結構高い点数だったんですよ!」

「いや、お前がFになる決定的証拠がある。答案用紙をしてみる。」



Fクラス、ずいぶんとボロツちいなあ・・・教室の前に立った俺は眉間にしわを寄せて低く唸っていた。Fクラスの担任である福原先生が言うには自給自足がココのクラスの基本らしい。何の話かさっぱり分からなかったが入った途端、俺の疑問は一瞬で消えた。なぜなら教室内がハンパなく汚かったからだ。なるほどな、この空間で過ごすには自分で何とかしろ、と言うことか・・・

「それでは浅斬君、自己紹介をお願いします。」  
「あ、はい。分かりました。」

教室を見渡しているうちにいつの間にか自己紹介にまで話が進んでいたようだ。早く何か言わなきゃ。え〜と・・・

「俺の名前は浅斬直貴。<sup>アサギリナオキ</sup>ナオって呼んでくれ。趣味は勉強、スポーツ、読書、あとゲームが好きだな。」

ここまで説明したとき、<sup>ちゃいだい</sup>席の方から、

「あつ、僕も好きだよ！」

と言う声が聞こえてきた。

「明久。人が自己紹介するときぐらいその不細工な口を閉じろ。」

「うるさいな、雄二は！」

なるほど。こっちの2人の名前は明久と雄二って言うのか。明久ってやつは、話が合いそうだからあとで話しかけてみよう。

「特技ってほどじゃないけど、家事全般が得意であとバスケットを前の学校ではやってた。これから一年間よろしくな！」

そんな2人の口論を聞き流し、俺は自己紹介を終えた。とても楽しいクラスにようだ。一年間は退屈しないですむな。

そう、このときはあまり考えもしなかった。確かに退屈はしないが、このクラスが普通のクラスじゃないことに・・・

第2話 人の話はよく聞いて覚えておきましょう(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 5

・新世界への高揚感 + 3

・名前の未記入で0点に - 3

・そのせいでFクラス(最低クラス)に - 2

・話の合いそうなヤツを見つける + 1

現在の青春ポイント合計 - 6

## 第2話 人の話はよく聞いて覚えておきましょう

自己紹介も終わり、俺は自分の畳とちゃぶ台の場所に腰を下ろした。クラスの奴らと交流を深めていこうかな、と思つたときに先ほどの明久という奴と秀吉という奴から声をかけられた。

「僕の名前は吉井明久。よろしくね。『観察処分者』っていう学年一の恥さらしの肩書を持っているよ。』ってやめて、秀吉！ 僕の声マネして後ろで話すの！」

「何を言っておるのじゃ、明久。これでお主のこの学校での立ち位置が伝わったじゃろう？ わしは木下秀吉じゃ。特技はモノマネで、演劇部所属じゃ。よく間違われるがワシは男じゃからのう。よろしく頼むぞ。」

うわ、すごいな、この秀吉って奴。まるで吉井が喋っているようだった。

そして、ものすごく美人……いや美男子だな。外見だけならよく間違われるのも納得だ。

突っ込んだら怒られるだろうか。いや、まだ仲良くなつてない時点でそんなことをしたら嫌われるに決まっている。やめておこう。

「おう、よろしく。自己紹介どうりナオって呼んでくれよ。」

2人は挨拶を終えると自分の席に戻っていった。

次にこのクラスの代表、もとい先ほど明久と話していた雄二と言う奴が声をかけてきた。

「俺はこのクラスの代表、坂本雄二だ。そして……今、姫路のスカートを頑張つて覗こうとしてる奴が土屋康太。またの名を

寡黙なる性識者だ。<sup>ムツツリーニ</sup>」

「……！」ブンブン！！（否定のポーズでもげそうなくらい手を振っている）

「否定はしてるけど、まだスカートの方を見てるな……」

「ああ。だからムツツリーニと呼ばれている。」

まあ俺もそういうのは大好きだけど、あそこまで分かりやすく見たりはしないな。

もっとバレないようにやる！ 絶対にな！

「ところで、坂本。このクラスは試召戦争をやっているのか？」

俺は心の中にあつた疑問を聞いてみた。

「ああ、今はBクラスとやりあっている真つ最中だ。」

「でも、こんな最弱クラスなんかで勝てるのか？見たところ頭のいい奴は誰一人としていないようだ。」

「いや、今のところは難しい。Bクラスの代表は卑怯で有名なからな。」

「こんな学力のクラスでそんなことやりあつて勝算はあつたのか？」

「ああ。勝てる。いや、勝ってみせる。俺達のクラスは……最強だ。」

とても自信に満ち溢れた顔でそう言われた。そんな顔で言われたら信じるしかないじゃないか。

「分かった。俺も力になれることがあつたら全力を出そう。」

「おう。期待してるぞ。」

雄二が席に戻ったので俺はクラス内で2人しかいない女子に声をかけてみた。

「転校してきた浅斬だ。趣味はさっき言ったけど読書とかだ。よろしく。」

「あつ、はい。姫路瑞希といます。趣味はお料理です。よろしくお願いします。」

うお〜。趣味が料理だつてさこの子。かわいいなあ〜。ん？ 向こうで俺達の会話を聞いた明久たちが何か話してるな？  
しかもなんとなく青ざめているような・・・  
まあ、気のせいだな。うん。

「へえ〜。料理が趣味なんだ。今度、食べさせてもらってもいい？」  
「はい、分かりました！ 明日にでも作ってきますから吉井君たちも誘って一緒に食べましょう。」

いい子だ。この子。まじで優しいよ！ 良かったな〜。明久たち！  
こんな可愛い子の料理と一緒に食べれて。  
ん？ 吉井たちが何か叫んでるな？ ちよつと聞いてみよう。

「「「いやああああ！！！！ まだ死にたくないいい！！！！」」」  
(明久、秀吉、雄二、無言で土屋)

あとで理由を聞いておこう。俺の生死にかかわりそうだ。

「ウチの名前は島田美波。ウチは外国育ちで日常会話は出来るけど

日本語の読み書きが苦手です。趣味は・・・」

この子もかわいいなあ。スタイルもいいし。モデルみたいだ。ぜひともお近づきに、

「アキを殴ることです。」

前言撤回。あまりお近づきにはならないほうがいいと思う。自分の身のためにも。

でも、なんて言ったらいいかな？ え〜と、頑張れ！俺！

そうだ！ さつきみたいに返せばいいんだ。えーと確か・・・

「へえ〜。明久を殴るのが趣味なんだ。今度、見せてもらっていい？」

こんな感じでどうだ！ ってこれだと明久が大変なことに！ 逃げてえ〜明久！

「うん、わかった！ 今度と言わず今、見せてあげるね。」

「明久あ！ 逃げる！ 今逃げないと死ぬぞ！」

「ん、ナオ？ どうし・・・って美波。なんで僕の肩をつかんで逃げられないようにした後、右側頭部に拳を叩き込むような動作をとっているの？」

「ん？ ナオに私の趣味をみせてあげようと思って。」

「え、美波の趣味って確か、僕の右側頭部が銃弾で貫かれたように痛い痛い！！！！」

ああ、尊い命がひとつ、散っていった・・・

「死なないようにしておいたから。」

良かった！ まだ、脈はある！ 助かるぞ。  
ある意味では、この子も優しい子みたいだ。死なないように手加減  
をしていたなんて。

まあ、このクラスはとっても面白いな。明日は姫路が料理を振舞っ  
てくれるみたいだし。楽しいことがたくさんあるな。ん？ 何か忘  
れてるような・・・ま、いいか。

ここで俺は思い出すべきだったんだ。姫路の趣味を聞いた後の明久  
たちの青ざめた顔を・・・

**第3話 努力すればいいことあるかも？（前書き）**

前回の青春ポイント合計 - 6

・新たな友達ができる + 3

・自分の一言で新たな友人が生死の危機に - 2

現在の青春ポイント合計 - 5

### 第3話 努力すればいいことあるかも？

自己紹介も終わって一通りの手続きを済ませた俺は西村先生に頼んで特別に召喚許可をもらい、召喚獣の操作の練習をしていた。

オレは今日、転校したばかりなので試召戦争に参加できないと西村先生が言っていた。

だから、自分にも出来ることはないか先生に聞いたら練習をしていけ、と言われ今に至る。

FクラスがBクラスに勝てるかどうかは内心もの凄く不安だった。

だが坂本の、あの自信に溢れた一言から俺は心のどこかで勝利を確信していた。

そして、結果はBクラスの代表に何かされたのか、怒った明久が隣の教室からBクラスまでの壁を破壊。驚いた相手は明久たちに集中攻撃を仕掛けたがムツツリー二の窓からの奇襲によりFクラスが勝利を収めた、という結果だった。

俺はその話を聞いたとき、ものすごく明久に感動を覚えた。

壁を壊すのはどうかと言ったが、そこまでしてクラスの勝利に貢献しようとした心はえらいと思う。

まあ、話を聞く前にあれを見なかったらもつと感動をしていたのにな……

時を少し遡り、召喚獣の練習を終えた頃、戦争の結果を聞こうと坂本を探しているときだった。坂本を見つけて声をかけようとしたとき、俺はあるものを見た。

女装をしたBクラスの代表がAクラスを目指してあるいていたのだ。

「なんでだああ!!!!」

「おう、ナオ。勝ったぞ。どうかしたか？」

「どうもこうもねえよ！ 何だよこれ！ 何がどうしてこうなった！」

「いや明久が根本の制服を欲しがっていたから、ちょうど女物の制服もあつたし悪さが出来ないように写真撮影もして脅迫のネタにしようと思つてな。」

「お前、本当に人間か？ 俺が生きてきた中でお前みたいな奴ひとりもいなかったよ！」

「まあ、そんなことはどうでもいい。ついでに根本はAクラスに競争の意思があると今伝えに行っている。」

「代表をそんな目に合わせてBクラスは怒らないのか？」

「いや、Bクラスも全面協力してくれているから問題はない。」

「ああ・・・そう・・・なのか。」

なんて複雑な心境だ。たとえ嫌いな奴でもそこまでするか？

それにしても・・・根本って奴は女装が似合わないな。吐き気がする。

あ、根本が帰ってきた。可愛そうな奴・・・

『ほら、さつさと歩け！これから撮影会の準備もあるんだからな。』

『さっ、撮影会だと！そんな話きいてないぞ！』

もう駄目だ。ここにいたら俺の常識が崩れ去ってしまう。早いとこ

抜け出そう。

俺はそんなことを思いながらその場を後にした。

この日は俺の常識が丸々ぶち壊され明久の感動ストーリーもあまり良い話には聞こえなかった。

なんで明久は根本の制服なんか欲しがってたんだ？  
俺だったら女子の制服の方が断然いいのに。

そんなことを考えて俺は、学校から帰った。

弟の晩飯のためにも早めに家に帰ることにし、弟のリクエストを聞いて俺は商店街に向かうことにした。

そこで俺は、運命(?)の出会いがあったんだ……………

**第4話 人違いというミスは誰にでもある(前書き)**

前回の青春ポイント合計 - 5

・初の召喚獣の呼び出しでテンションUP + 2

・女装姿のBクラス代表を目撃 - 5

・自分の常識が崩れ去っていいを感じる - 2

現在の青春ポイント合計 - 10

#### 第4話 人違いというミスは誰にでもある

学校から帰った俺は夕飯調達のため、商店街に向かうことにした。

「ん〜と、鶏肉はあるかなあ〜つと。」

駿のリクエストではから揚げが食べたいとのことだったので、明日の弁当のおかずにもなるし買おうと考えていた。

晩飯やその他のものを買い終わった後の帰り道、俺は見覚えのある後ろ姿を見つけた。

え〜と、確か木下だったかな？

「よっ、木下。」

木下は重そうな荷物をもって俺の方向に向き合った。

俺に声をかけられた木下は次の言葉を発した。

「え……………あんた誰？」

誰って言われた……俺そんなに影薄いかな？　ここでアピールしておくか。

「誰って、同じクラスの浅斬だよ。今日あったばっかりなのにもう忘れた？　まったく困ったちゃんだな。」

「え、ええ。そうだったわね。ごめんなさい、忘れてて。」

やっぱ忘れられていた。すんごく傷ついたなあ……………

「まったく、これからは気をつけるよ？」

「ふふ。はい、わかりました。」

うわ、やべ、笑った顔がハンパなく可愛い。女子に間違われるのも納得だ。全人類に男しかいなくなったら、木下の取り合いになるだろうな。って俺！ 何を考えてんだ！ 木下は男。木下は男。木下は……

「どうしたの？大丈夫？」

やべ、話しかけられた。どうしよう。え〜と、

「いや、木下の笑った顔が可愛すぎてちょっと取り乱したただけだ。」

「そう？ あ、ありがと……」

うわ、照れた顔も可愛い……じゃなくて何やってんだよ俺！ 男相手に褒めるとか、絶対に今ので友達としての距離とられるな。ごまかせ！ 俺！

「荷物重そうだな。もう遅いし、家まで送っていくよ。」

「え？そうね、じゃあお願いしようかしら。」

よし、きつとごまかせた！ ナイス俺の判断力！

それにしても、学校にいる時とは違って物凄く可愛く見えたな……なんでだろ？

きつと暗いからだな。そくに違いはない。

そうじゃなかったら俺はもう終わりだな……

俺はその後、木下を家まで送り（意外と近所だった）

弟の晩飯を作った後、転校の疲れもあったせいかすぐに眠ってしまった。

## 優子SIDE

今日は色んなことがあって疲れたわ……

Bクラスの代表に女装姿で宣戦布告まがいの事言われたり、他の男子に秀吉と間違われたり。

忘れようとして買い物をしたまではよかったけれど、重くて中々帰れなかったり。

いろんなことがありすぎよ。全く……

でも、浅斬君に声をかけられたのは嬉しかったな。荷物もってくれたし。

私、浅斬君と同じクラスらしいのに全く覚えてなかったなんて凄く申し訳ないわ……

秀吉じゃなくて『私』を面と向かって褒めてくれたのは高校生になつてからは今のところ浅斬君だけだったのに。

そういう考えていたら、あつというまに家についてしまった。

もうちょっといろんなこと話したかったのにな。

「んじゃ、また明日な。木下。」

「あ、うん。また明日ね。」

そっか。まだ明日があるし、いつでも話す機会があるよね。  
また、明日ね。浅斬君・・・

その日の朝。私は浅斬君を見かけて声をかけようとしたが、  
浅斬君は黒尽くめの覆面達に連れ去られてどこかに行ってしまった。  
・・・

## 第5話 誤解される位ならするな(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 10

・商店街で友達と遭遇 + 1

・自己紹介不足で忘れ去られる - 1

・男のはずなのに違和感を感じる ± 0

・フワフワした雰囲気になる + 3

・一緒に帰る + 2

現在の青春ポイント合計 - 5

## 第5話 誤解される位ならするな

『諸君。ここはどこだ?』

『『最後の審判を下す法廷だ!』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

『宜しい。これより 21F 異端審問会を開催する!』

話は少し前に遡る。

俺は朝のゴミだしを終え、そのまま学校に行こうとしたときだ。不意に何者かに後ろから襲われたかと思ったらロープでグルグル巻きにされ、気づけば暗幕で真っ暗になった教室に転がされていた。

何故こんなことになった？ まだ頭がぼやけているのか？

『・・・罪状を読み上げたまえ。』

話がいつの間にか進んでいるな。罪状だって？ 俺そんな悪いことしたかな。

『はっ。須川会長。』

須川の差し金か。後で捻り潰すから覚悟しておけよ。

『えー、被告、浅斬直貴（以下この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は背信行為、および不純異性交遊である。先日未明、甲は商店街にて女子と親しげに会話をしているところを我らの同胞が目撃。甲は女子と会話をしながら家まで送り届けるという行為をおこない、現在に至る。今後、甲とその女子の関係に対して充分な調査を行った後、甲に然<sup>しか</sup>るべき対応を――』

『御託はいい。結論だけ述べたまえ。』

『イチヤイチャしながら一緒に帰っていたので羨ましいであります  
』！

『うむ。実にわかりやすい報告だ。』

なるほど。俺と木下が昨日話しているところを見かけて、それを羨ましがってるだけか。

って、何でそれだけのことで俺は今こんなことになっているんだ！  
チクショウ！ なんとか誤解を解かないと。

「待て、誤解だ！ そんな訳あるか！ 何で俺が木下と一緒に帰っただけでこんな事になるんだ！」

「御託はいい。さつさと裁きを受けるのだ!」

拙い! このままだと何かされる! 神よ、お助け……

バタンツ

そのとき、教室の扉が開き担任の福原先生が入ってきた。

「はい、みなさんおはよう。これからHLを……本ムルムってなにをしてるんですか。君達は。」

助かった、これも日ごろの行いがいいからだ! ありがとう、神様!

「先生、丁度いいところに! 助けて! このままだと殺される!」

「違います! これは学内の風紀を守るための聖戦です!」

ここまで来てまだ言い訳をするか、貴様らああ!

「そんなことどうでもいいですから、早く浅斬君の縄を解いて始めますよ……」

「チツ!」

ありがとう、福原先生! 貴方のおかげで助かったけど、どうでもいいはないんじゃない?

HLも終わり、無事?に一日がスタートしていくことができた。

昼飯が始まって俺は明久たちと姫路のお弁当を食べることになった。俺が姫路の弁当を食いそうになり、その危険性についてじっくりと説明を受けた俺は、いいことを思いついた。その作戦のために、姫

路にはばれないように弁当は俺が全部貰い受けることにした。

さて、と・・・・・・・・須川君にはさっきのお礼をしなくちゃな・・・

## 優子SIDE

私は教室にいつでも浅斬君に会うことが出来なかった。

同じクラスだって言ってたけど・・・・・・・・朝のあれが原因なのかな？

クラス中探してみたけど、浅斬君に関するものは何一つわからなかった。

何でだろ？ 同じクラスの筈なのになあ・・・・・・・・

今日は結局、浅斬君に会うことが出来ずに一日が終わってしまった。でも、私はあることがきっかけでまた浅斬君に会うことができた。

Fクラス対Aクラスとの戦争のときに・・・・・・・・

**第6話 団結力は何事にも重要です（前書き）**

前回の青春ポイント合計 - 5

・朝、拉致に遭う - 3

・必死の弁解も空しく死刑宣告 - 2

・須川に姫路の特製弁当かがくへいきを食べさせて鬱憤を晴らす + 3

現在の青春ポイント合計 - 7

## 第6話 団結力は何事にも重要です

Bクラス戦から2日たち、Fクラス全員の点数補給も終えた俺たちはAクラス戦への戦闘に気合を入れるべく代表の話聞いていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにもかかわらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったこそだ。感謝している。」

「雄二。ついに僕達、ここまで来たんだね？」

「ああ、明久。ここまでできた以上、負けるわけにはいかない。俺も全力を出そう。俺達が勉強するのはこの汚らしい教室じゃない・・・目指すはAクラスのシステムデスクだ！」

「……………おおおおおー！……………」

さすが、代表なだけあるな。このクラスを纏め上げるには相当な力が必要なはずだ。

坂本はやっぱり、スゴイ奴だったんだなあ。

「そのAクラス戦では、代表同士の一騎打ちで決めたいと思う。俺はAクラス代表の翔子と戦おうと思っている。」

「バカな雄二が霧島さんに勝てるわけ無いじゃなあああ！！！」

明久が余計なことを言って坂本にカッターを投げつけられている。こいつら本当に親友なのか？時々ふしぎに思うぞ。

「次は耳だ。」

どうやら友達ですらないようだ。

「それより坂本。そんな勝負で挑むってことは勝算があるのか？」  
「ああ、それじゃこれから作戦を説明するぞ。」

作戦はこうだ。俺達が一騎打ちで戦い、最低でも2対2までに試合を持っていけばあとは坂本がA代表との点数勝負をする、とのことだ。しかもただ点数で勝負するのではなく、小学生レベルの日本史の問題で上限ありで勝負するらしい。しかもA代表は大化の改新の問題が出れば絶対に間違えるそうだ。

どこで知ったんだ、そんな情報？

まあそれまでに勝負がついてしまえば、勝利は確定だけだな。

「あの坂本君。」

姫路が坂本に何か聞いてるぞ？ なんだろ。

「ん？ どうした姫路。」

「坂本君はその……霧島さんと仲が良いんですか？」

「ああ、あいつとは幼馴染だ。」

ああ、なるほど。それなら翔子と呼んでいたのも納得

「総員狙えええ！」

え？

「どうして明久の号令で全員が上履きを脱いで俺を狙うんだ！」

「黙れ、男の敵め！……須川君、靴下はまだ早い。それは押さえつけた後に口に押し込むものだ。」

「明久、待て！ いまココで坂本を殺したら作戦どころか戦争自体がなくなるだろ！」

「止めないで、ナオ！ Aクラスの前にあいつを殺す。」

「さっきまでの団結力はどこに行ったんだ！ いや、団結はしてるがその力は普通Aクラス戦で使えよ！」

まとまってはいるが、方向性がとんでもないところに！

「あの吉井君。」

「ん、何？ 姫路さん」

おお、姫路！ 明久を止めようとしてくれるなんて俺、感激

「吉井君は霧島さんのような人が好みなんですか？」

「そりゃ、まあ美人だし……ってえ？なんで姫路さんは僕に攻撃態勢を取るの？そして美波はなんでそんな危険な物を僕に投げつけようとしているの？」

できそうもない。まあFクラスはFクラスか……

こんなんで本当にAクラスなんか勝てるのかよ。

その後、木下が何とか場を沈めて事態は何とか終結の方向性に向か  
っていった。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えた  
んだ」

「それが、大化の改新か？」

「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、  
学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！  
そうしたら俺達の机は………」

「……システムデスクだ！」「」

第7話 あれ？短くね？この話 (前書き)

前回の青春ポイント合計 - 7

・団結力に酔いしれる + 3

・そして後悔する - 2

・勝利へのテンションUP + 2

現在の青春ポイント合計 - 4

## 第7話 あれ？短くね？この話。

「今から宣戦布告に行くぞ、お前らも準備しろ。」

俺達はAクラスに宣戦布告をしに行くべく、Aクラス教室を目指していた。

「それにしてもすごい教室だな明久。」

「だよな。」

巨大サイズのプラズマディスプレイ、人数分用意されたシステムデスクにリクライニングシート。

パソコンや個人用エアコンや冷蔵庫まであり、その中身も学園側で管理されている。

俺は登校初日にこのすごい設備を見せ付けられ、変な気分になっていた。

Aに入ることばかり考えていたせいで、名前を書き忘れるという失態をしてな。

「僕この教室になれるなら食費を全部ほかの事に使っちゃおうよ。」

「お前はこの教室じゃなくても水と塩だけだろ？」

「全く雄二は失礼な！ちゃんと砂糖も食べてるよ！」

「明久、それは食べるとは言わないよ。」

「舐めるが表現としては正解じゃな。」

そんな会話を終えて、俺達はAクラスに入っていった。

第7話 あれ？短くね？この話。(後書き)

なんか短くてすみません。あまり思いつかなかったモンで・・・  
次は優子と浅斬の再開の話です。

**第8話 本音と建前は使い分ける（前書き）**

前回の青春ポイント合計 - 4

・ Aクラスの奪取に燃える + 1

現在の青春ポイント合計 - 3

## 第8話 本音と建前は使い分ける

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二を筆頭に、俺、明久、姫路、秀吉、土屋とでAクラスに来ていた。

「毎回こうしてたら僕の制服は繕いだらけにならなかつたんじゃない？」

なに？明久は宣戦布告のたびに繕いだらけになつてたのか？可愛そうだ、今度そんなことがあつたら一緒に行ってやろう。

「一体何が狙いな？」

雄二と交渉のテーブルについているのは木下の双子の姉の木下優子。ソックリだな……。って、ん？どこかで見ることがあるような……。いや、秀吉に似てるとかそんなんじゃないやなくて一度逢ったことがあるような。

「ん？」

木下姉がこっちを見てきた。

「ああああ！ アンタは！」

え？ 俺？ 俺を指差してる？ ナニカシマシタカ？

「代表！ ちょっと席変わってもらえない？」

「………うん。わかった。」

木下姉はそういうと俺のところにもズンズン歩いてきた。ああ、顔が心なしか怒ってるようにみえる！ ごめんなさい！ 昨日ちょっとだけ夜更かしました！ もうしないから助けて！ 気が動転していたのか、全く訳のわからない懺悔<sup>ざんげ</sup>を俺は心の中でした。

木下姉は、俺に向かってこう言ってきた。

「アンタ、浅斬君でしょ？」

「………はい？」

「あなたは浅斬君かって聞いているの！」

「は、はいいい！」

おもった以上に拍子抜けだ。なにされるのかとおもったよ。

「浅斬君は、何でFクラスにいるの？」

「いや、何でと言われましても元々Fクラスですが？」

「え？ そ、そうだったの？」

「そうだったよ。何でそんなこと聞くんだ？」

「だ、だってアンタが最初に会ったとき私と同じクラスだっていつたから………」

ん？ 何かおかしい。この子の言っていることはどこか俺と食い違っている。

もしかして、あの夕飯を買いに行ったときに逢ったのは木下じゃなくて……姉の方？

「聞いてる？」

「どわ!？」

いきなり顔を近づけるな! ドキドキすんだろっが!

「あ、ああ。それは多分俺の勘違いだ。」

「勘違い? ということは、まさか秀吉と間違えたの?」

「いや間違えたというよりも、お前だったから声をかけたんだ。」

「えっ? それってどういうことなの?」

「俺が道端で声をかけるのは女子だけだからな!」

つて、ああああああ! なに言ってるんだ俺! 絶対に今ので引かれた……

これから話しかけづらくなったな……。どうしよ……

「秀吉じゃなくて、ちゃんと私を見てくれてたんだ……」

「? 何か言ったか?」

「いや! なんでもない! それより話はずいたかしら、代表?」

何かをはぐらかされたような……。うーん、今度聞いてみよう。

そうしてるうちに話は決まっていたようだ。A代表はルールを説明してくれた。

「……うん、5対5の一騎打ちに決まったから。」

~~~~~回想シーン~~~~~

## FクラスSIDE

ナオが秀吉のお姉さんに連れて行かれた後、僕達は霧島さんとルルについて話し合っていた。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「……時間を取られたけど、それだけのことだった。……」

「……何の問題もない。」

やっぱりCクラスごときじゃ、Aクラスには勝てないのか……

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスを攻めたCクラス。決着は半日もかからず、Cクラスの設備はDクラスの設備にランクダウンしたそうだ。(ムツツリー二談)

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「……Bクラスって……昨日来てたあの代表のクラス？」

女装姿をした根本君の姿が思い出される……うえ、吐きそう。

「ああ。アレが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだ。さてさて。どうなることやら。」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間がないと再戦はできないはず……」

これは試召戦争のルールの一つ。戦争に負けたクラスは三ヶ月の間、自分から宣戦布告できない。これは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しない為の取り決めだ。

「知ってるだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は和平交渉にて終結、という形になってることを。規約にはなんの問題もない。……そしてDクラスもだ。」

「……それは脅迫？」

「いや、お願いといったほうが正しいとかもな。」

一つ間をおいた後、霧島さんはこう切り出してきた。

「……一騎打ち、受けてもいい。」

霧島さんはやけに自信たつぷりだ。

「わかった、じゃあ俺の話した通りに高橋女史には伝えておくぞ。」

「……ちょっと待って。その代わりに、条件がある。」

「条件？」

「……こちらからもルールの提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、お互い五人ずつ選んで一騎打ちを五回、先に三勝した方の勝ちにすること。それと……」

霧島さんは雄二を見た後に姫路さんをゆっくりと観察した。もう一度雄二に顔を向けて言い放つ。

「……負けたほうは何でも一つ言う事を聞く。」

「……！（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！」

これは、やはりあの噂通りということなのかな？  
霧島さんのあの態度をみたら、そういう趣味があるというのも納得だ。

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんが了承してないじゃないか。」

「明久。何を想像してるか知らんが少し落ち着け。」

「これが、落ち着いていられるか！」

「心配するな。姫路に迷惑はかけない。」

自信満々の台詞。それだけ勝つことに自身があるということか。

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハ  
ンデはあってもいいはずだ。」

「……………わかった。でも、教科選択は交互でお願い。」

「そうだな。それくらいならいいだろう。」

「……………勝負はいつ？」

「やる気のような。なら、10時からでいいか？」

「……………わかった。」

「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ。」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする。あとは十時まで待つだけだ。

## 第8話 本音と建前は使い分ける（後書き）

えーと、毎度読んでもらってありがとうございます。

まだまだ駆け出しなので、ココをこころしたほうがいいというアドバイスがある方は感想ページにて指摘して下さいと嬉しいです。

第9話 女子の扱いには危険がともなう(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 3

・商店街で出会った木下の双子の姉、優子に再開 + 2

・気になる人になる + 2

現在の青春ポイント合計 + 1

## 第9話 女子の扱いには危険がともなう

（開戦予定時刻 10時）

「では、両者共準備は良いですか？」

立会人を務めるのはAクラスの担任で学年主任の高橋教諭。（通称、高橋女史というらしい）

「ああ。」

「……問題ない。」

一騎打ちの会場はAクラスで執り行われることになった。理由は簡単。Fクラスだと汚いからだ。

「それでは先鋒の方、どうぞ。」

「では、わしが行こうかのう。」

「どうせ結果は見えてるもの。さっさと片付けるわ。」

Aクラス先鋒は木下姉。姉妹対決？ か。

「科目は何にしますか？」

「では、この教科で……」

「ちよつと待つて。秀吉。」

そのとき、木下姉が秀吉の教科選択を遮った。

「？ ……どうしたのじゃ、姉上？」

「ちよつと話があるんだけど、良いかな秀吉？」

「別に構わんがどうしたのじゃ姉上？」

「大丈夫よ、すぐ終わるから。」

あれ、おかしいな？ 木下姉、顔は笑ってるけど目が笑ってない・・・

「姉上、本当にどうしたのじゃ？ 勝負は って姉上。何故わしの腕をつかんでおるのじゃ？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしてる事になってるのかなあ？」

「それは、姉上の本性をワシなりに推測して・・・あ、姉上！ ちがつ、その関節はそっちには曲がらなっ・・・！！！！」

ぎゃー！！！！！！！！！！

ガラガラ！！

「秀吉、急用ができたから帰るってさ。」

「あ、ああ。そうか。」

返り血を拭いながら木下姉が雄二に話しかけたもんだから、雄二はビビりながらそういった。

「で、どうするの？ 代わりに誰が出る？」

だが、だれも名乗り出ようとする人はいない。まあ、何されるかわかんないしね。

「どうするの？ 出ないの？」

「お、俺らの不戦勝で・・・」

『しょうがないな、俺が出てやるよ!』

俺は堂々と声を出した。不戦勝にするぐらいだったら俺が出てやるよ。

全く、みんな情けないなあ。この程度で怖気づくなよ。

「ナ、ナオ!? いいの?」

「おう、任せてくれ!」

「すまない、ナオ。召喚獣の扱いに慣れていないお前をココで出すなんて。」

「なあに、いいってことよ。まあココは任せてくれ。」

「わかった。期待してるぞ。」

「話は終わったかしら、浅斬君?」

「ああ、待たせて悪かったな。」

「……改めて、教科の選択をお願いします。」

高橋女史に言われた俺は迷うことなく教科を選択した。

「俺の得意教科、科学で行かせてもらおう。」

俺の得意教科が明らかになったのは多分、ここが初めてだろう。みんなにはテストは0点だったとしか言っていないからな。

「覚悟はいいかしら?」

「ずいぶん自信满满だな?その余裕すぐに失くしてやるぜ。」

「それはこっちの台詞よ! 浅斬君、かかってきなさい!」

「それでは、始めてください。」

「「サモン!!」」

Fクラス 浅斬直貴 科学 586点

VS

Aクラス 木下優子 科学 376点

「「何だ、あの点数は！！！！」」

「ねえ、浅斬君。なんでそんな点数なのにFクラスなの？」

「それは俺がFクラスに入る確固たる理由があったからだよ。」

「確固たる理由？ 何それ？」

「俺に勝てたら教えてあげるよ。」

「召喚獣の扱いに慣れていないのにそんなこと言っているのかしら？」

「負ける気がしないからな、かかって来い！」

こうして俺と木下姉の戦闘バトルがはじまった・・・

「ねえ、姫路さん。」

「何ですか、吉井君。」

「姫路さんは科学のテストは何点だったの？」

「結構自信があっただんですが……浅斬君の点数には敵いませんでした。」

「え？ それじゃあ……」

実質、Fクラスで一番強いのは姫路さんじゃなくて……才？

「ナオ、君って凄かったんだね！君にはツツコミしか才能が無いと思ってたよ！」

「うおい、明久！お前俺のこといままでどんな目で見てきたんだ！」

俺の評価基準はツツコミだけですか？ チクショウ！

「余所見する暇があるとは、いい度胸ね。」

「何！？ うおっと！」

危なかった。今に当たっていたら完璧にやられていた。

「まあ、今のは危なかったな。」

「まだまだ、余裕ね。……覚悟しなさい！」

木下姉の召喚獣は西洋風の鎧に、やけに大きいランスという装備だった。

それに対する俺の召喚獣は

日本の侍姿に、背中に日本刀を数百本背負っているという格好だ。  
(刀の本数は点数と同じ)  
そして両手に日本刀を3本ずつ持っている六刀流装備だ。

俺は徐々に木下姉のペースを乱して、俺のペースに持っていった。

「はっ！ その程度か、木下姉！」  
「くっ！ この、この！」

木下姉は焦って冷静さを失ってランスをただ突き出すだけの動作をとっていた。

「それっ！」  
「遅い！」  
「え？ きゃあ！」

俺は木下姉が反応するより早く、刀でランスを頭上高くに弾き飛ばした。

「勝負あつたな、木下姉。」  
「………悔しいけど、そのようね。」  
「トドメだ。」

俺は日本刀を振り上げ木下姉にトドメをさした。  
そして先鋒戦はFクラスの勝利………

「両者ともに戦死、よってこの勝負は引き分けとします。」  
「……ええ〜!!!!!!」

に思えた。

俺は完全に気を抜いていた。

頭上に吹き飛ばしたランスのことをすっかり忘れて。

勝利したと思った俺は、頭上を全く見ていなかった。俺の召喚獣は降ってきたランスに直撃し、一撃で戦死になってしまった。

俺の召喚獣と木下姉の召喚獣は同時にやられ、勝負は引き分けになっってしまった。

「ナオ、引き分けだなんて！ らしくないよ。」

「すまん……明久。これが俺の実力だ。」

「明久、ナオはよくやってくれた。Aクラス相手に引き分けなんてたいした物じゃないか。」

「ありがとう、坂本。お前の優しさには涙が出るよ。」

坂本はいい奴だ。今度困っていたら助けてやろう。

「それでは、先鋒の戦死者は補習室に向かったださい。」  
「わかりました……」

俺は先ほどのことにショックを受けつつ、補習室に向かった。

そして、不意に声をかけられた。

「ちょっと、あんまりショック受けないでくれる？ 落ち込みたいのはこっちなんだから。」

木下姉だ。彼女も戦死扱いなので、補習室に向かっているところだろう。

「だって、あんな無様に負けたんだぜ？ ショックに決まってるだろ。」

「バーカ。アタシなんて一方的にやられてたんだから。こっちのがショックよ。」

やばっ、バーカのあたりでちょっとドキッとした。(別にMじゃないぞ?)

「ん？ どうしたの？」

「い、いや。なんでもない！ なんでもないから……」

「怪しいわね？ 教えなさい！」

「い、イヤだ。ってやめろ！ 首は人体の中で一番大事な、ごぶつ・苦し、やめっ……」

首が、絞まる……こお〜ひゅ〜……うえっ。

「教えてくれる？」

「わか……った。教え……るから放し……て。」

くっ、とっさに言ったとはいえ可愛かったなんて口が裂けきって体が真っ二つになっても言えない！

「で、なんて言おうとしたの？」

集中力を研ぎ澄ませ！ 言い訳を考えると。

………思いついた、これならいける！

「いや、ほらさ。勝負の前に俺がFクラスに入った理由があるって言ったじゃん？」

「うん、そうだね。でも勝負は引き分けだから教えてくれないんでしょ？」

「いや、まあいい勝負だったし教えてあげようかなあ〜って。」

「ホント！ なになにに何でどうして？」

よし食いついた！これで誤魔化せるぞ。

「興味津々だな……まあいいや。俺がFクラスに入った理由は……」

「理由は……？」

溜めて溜めて。引き伸ばしてからのお。．．．．．。

「ただの名前の書き忘れです。」

間が空いて、

「それだけ？」

「それだけ。」

そしてまた間が空き、

「．．．．．アンタ、バカね。」

言われた．．．．．。

「俺だって好きで行ったんじゃないぞ！ 本当はお前と同じクラスになりたかったんだから！」

もちろんAクラスの設備がいいに決まってるさ。それはFクラスの奴ら全員の気持ちだろう。

「な、私と同じがいつて．．．．．もう、素直なんだから．．．．．」

「ああ、もちろんだろ？ 誰だってそう思うよ。」

「そ、そう？ 嬉しいこと言ってくれるじゃない。」

「ん？ なんで照れてんの？ 俺は普通のこと言っただけだぞ、木下姉。」

「あ、ちょっといい？ ．．．．．木下姉って言うのをやめてくれない？」

「え？　なんで、そっちのがわかりやすすくない？」

何か理由があるのかな？

「ほ、ほら。木下姉って言う他跟人行儀で変じゃない？」

他人行儀もなにも他人じゃんか……Fクラス以外も面白い人が多いなあ。

「じゃあさ、何て呼べばいいの？」

「優子。優子でいいわよ。」

「え、ちよっとそれは恥ずかしいかな……」

「何で？　仲のいい子は皆こう呼んでいるわよ。」

いや、女の子を名前で呼ぶのにはちよっと抵抗があるというか。

「どうしても、いや？」

うわ、これは拙い。上目遣いで涙目だ。超可愛い。

「ゆ、優子……って呼べばいいか？」

「う、うん……」

「じゃあ、俺のこともナオって呼んでくれないか？」

「え？　それはちよっと恥ずかしいわね……」

何言ってるんだ！　俺は頑張ってる優子って呼んでいるのに……

「ゆ、優子は俺にだけこう呼ばせておいて自分は呼ばないつもりか？」

「わ、わかったわよ！　……ナオ、って呼べばいいんでし

「よ。」

やば、想像以上に恥ずかしい。優子って呼ぶより恥ずかしいかも。あ、補習室に行かなきゃ……………

「きのし……………ゆ、優子。補習室行こうぜ。」

「わかったわ、あさ……………。ナ、ナオ。行きましょう。」

お互い慣れるまできつと大変だろうなあ。ま、いいけど。

## 第9話 女子の扱いには危険がともなう（後書き）

ここで初めてナオの召喚獣を出すことが出来ましたよ。

いつだそうか・・・どんな感じにしようか悩んだ末の刀まみれ（笑）  
刀の持ち方は戦国BASARAの伊達政宗風で考えてくれればいい  
です。

優子の呼び方を変えるのをいつにしようか、大変でした・・・

次回はAクラスとFクラスの最終決戦でメたいと思います。

次回は原作どりのストーリーで行きますね。

第10話 自分自身を過大評価してはいけない(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 1

・殺人現場を目撃 - 2

・召喚獣同士での初めての戦闘 + 2

・自分の不注意で引き分けに - 2

・木下優子に殺害されかける - 1

・名前で呼び合う仲になる + 3

現在の青春ポイント合計 + 1

## 第10話 自分自身を過大評価してはいけない

〈FクラスSIDE〉

「では、次の方どうぞ。」

ナオが先鋒戦で引き分けになって補習室に行った後、二回戦が幕を開けようとしていた。

「Aクラスの佐藤美穂です。科目は物理でお願いします。」

Fクラスから出るのは

「よし、頼んだぞ明久。」

「え！？ 僕！？」

雄二が僕を推薦した。相手が科目を選択したと言う事はほぼ間違いなく得意科目だ。ここで雄二が僕を推薦するってことは……………

「大丈夫だ。俺はお前を信じている。」

雄二……………君って奴は。

「ふう……………やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。この場に全員に、お前の本気を見せてやれ。」

「おい、吉井って実は凄いのか？」

「いや、そんな話は聞いたことないが。」  
「いつものジョークだろ？」

味方であるFクラスからの声。ふん、実はそのまさかさ。

「吉井君、でしたか？ あなた、まさか・・・」

対戦相手の佐藤さんが僕を見て怖気づいた。ふふ、そうさ！

「あれ、気づいた？ ご名答。今までの僕はぜんぜん本気を出しちやいない。」

「それじゃ、あなたは・・・！！」

「そうさ。君の想像通りだよ今まで隠してたけど、実は僕・・・  
・左利きなんだ。」

そのときクラス内の温度がすごく下がった気がする。

Fクラス 吉井明久 物理 62点

VS

Aクラス 佐藤美穂 物理 389点

僕は一瞬で木っ端微塵にされた。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係にでしょうが！」

「み、美波！ フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁してー！」

僕らのやり取りを無視し、雄二が口を開く。

「勝負はここからだ！」

「ちよつと雄二！ アンタ僕をぜんぜん信頼してなかったでしょう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

「貴様に本気の左を食らわせたい！」

そのやり取りの後に高橋先生が三回戦について説明している。

「それでは、三人目の方どうぞ。」

「……（スック）」

ムツツリーニが立ち上がる。ここで科目選択権が活きてくる。ムツツリーニがほとんどの科目において僕以下の点数だけど、保健体育のみAクラスの基準を遥かに凌ぐ。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからは色の薄い髪をショートにした女子が現れた。見た感じ少し男の子っぽくも見えるが。あまりみた事がない。

「一年の終盤に転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

「教科は何にしますか？」

「………保健体育。」

高橋先生の質問に対し迷わず答えるムツツリーニ。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤さんがムツツリーニに声をかけている。すごく妖しいしゃべり

方だ。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　・・・・・・・・君と違って、実技でね」

保健体育の実技が得意？　僕はあっちの意味であってほしいとドキドキしているよ。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？　勉強苦手そっだし保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？　もちろん実技でね。」

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育なんて要らないのよ！」

「そうです！　永遠に必要ありません！」

「・・・・・・・・」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが。」

僕もうお婿に行けない・・・・・・・・

「あらためて、召喚してください。」

高橋先生の指示でようやく三回戦が始まる。土屋は小太刀の二刀流。工藤の召喚獣は

「なんだあの巨大な斧は！」

僕は驚きの声を上げた。オマケに例の腕輪も装備している。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんが笑いかけると同時に腕輪が光り召喚獣が動く、かなりのスピードで。大斧に雷光をまとい土屋の召喚獣に襲い掛かる。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん。」

「………加速」

ムツツリーニがそう呟いた時、召喚獣の腕輪が輝き、ムツツリーニの召喚獣がブレた。

「………え？」

戸惑う工藤。ムツツリーニの召喚獣は工藤さんの射程外にいた。

「……加速、終了」

ムツツリーニがもう一度呟く。次の瞬間、工藤さんの召喚獣が全身から血を噴出して倒れた。

Fクラス 土屋康太 保健体育 572点

VS

Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点

表示された点数は僕の保健体育の十倍程の高さだった。工藤さんも驚異的な高さだがムツツリーニはそれすら大きく越えていた。

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな」

驚く僕に雄二が説明する。他の科目では僕が勝っているのになんだ

か負けた気分だ。

「そ、そんな・・・！この、ボクが・・・！」

工藤さんはショックのあまり床に膝をついた。

「これで対一ですね。次の方は？」

高橋女史はそれに構う事無く作業を進める。

「あ、は、はいっ。私です」

こちらからは姫路さんが出る。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから出てきたのは学年次席の久保利光君。

「やはり来たか、学年次席。」

雄二の言うとおり、奴は姫路さんに次ぐ学年三位の実力者で姫路さんが振り分け試験を途中退席したため、学年次席の地位になっている。

「ここが一番の心配どころだ。」

雄二の心配には理由がある。久保君と姫路さんの実力はほぼ互角。総合点数ではせいぜい20点程の違いでしかなく。科目次第では負ける可能性が否定できない。

「科目はどうしますか？」  
「総合科目でお願いします」

高橋女史が二人に尋ねるとすぐに久保君が答えた。

「ちよつと待った！ 何を勝手に」

「構いません。」

「姫路さん!？」

僕の抗議の声を姫路さんが遮る。

「それでは……………」

Fクラス 姫路瑞希 総合科目 4409点

VS

Aクラス 久保利光 総合科目 3997点

勝ったのは姫路さんだった。点数差は400点以上。至る所から驚きの声があがる。

「くつ……………姫路さん、いつのまにどうしてそんなに強くなつたんだ……………」

久保君が悔しそうに姫路さんに尋ねる。以前まで僅差だった実力がいつの間にかこれだけの差をつけられた事が相当ショックのようだった。

「……………私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生

懸命な皆のいる、このクラスが。だから、頑張れるんです。」

姫路さん……そんな風に考えてくれてたんだ。僕も頑張らなくちゃ。」

「これで二対一ですね……………」

高橋先生もこの展開には流石に驚いたのか若干表情が曇り気味だった。

「学年代表の霧島さん、どうぞ。」

「……………はい。」

Aクラス最後の砦、霧島さん。そしてFクラスからは当然、

「俺の出番だな。」

我等が代表、雄二が出る。

「教科は何にしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで百点満点方式だ。」

雄二の宣言でAクラスがざわついた。

「わかりました。そうなると問題を用意する必要があるので少々このままでお待ちください。」

高橋先生は教室を出て行く。僕は雄二に近づく。

「雄二、あとは任せたよ。」

「ああ、任された。」

僕達は拳をぶつけ合った。

「……………（ススッ）」

ムツツリーニが歩み寄り雄二にピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けられた、感謝する。」

「……………（ニヤッ）」

ムツツリーニは口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻る。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久の事が。気にするな、あとは頑張れよ。」

「はいっ。」

「では、代表戦は日本史で行います。霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かつて下さい。」

「……………はい。」

霧島さんが短い返事をし教室を出て行く。

「じゃ、行ってくるぞ。」

雄二は皆に声をかけて教室をあとにした。

「皆さんはここにあるモニターで試合の途中経過を見ていてください。」

高橋先生が機械を操作すると壁にディスプレイに視聴覚室の様子が

映し出された。

「では、問題を配ります。制限時間は五十分。100点満点です。では始めてください。」

二人の手によって問題用紙が表にされる。勝敗あの問題が出るにかかっている。

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

( ) 年 平城京に遷都

( ) 年 平安京に遷都

小学生レベルとだけあって簡単な問題が出題される。

( ) 年 鎌倉幕府

( ) 年 大化の改新

「あ……………」

「よ、吉井君っ!」

「うん。」

「これで、私たち……………」

「僕らの卓袱台が、」

「システムデスクに!」

Fクラスの声が揃った。そして、教室を揺るがすような歓喜の声。

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

延長戦の勝負はFクラスの男子がAクラスの女子に負けて、  
Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

〜第一部閉幕〜第11話 友達には親切になろう(前書き)

得点変動イベントなし +1

第一部閉幕 第11話 友達には親切になろう

ナオSIDE

「優子はどっちが勝つと思う?」

「えっ?」

「えっ? じゃないよ、勝負だよ勝負。AとFどっちが勝つかだよ。」

「

俺たちは勝敗を見に行くため、補習室を後にした。

「俺はさ、正直言つとあんまりFクラスには勝つて欲しくないんだよね。」

「何で? 自分のクラスなのに勝つて欲しくないの?」

「うーん、確かに勝つては欲しいけどな。」

「だって、俺たちがAクラスに勝つたらお前達がFクラスの教室になっちゃうだろ。」

「でも、それがこの学校の方針だしね。別に負けちゃったら負けちゃったでいいじゃない。」

「お前にあんな汚い教室を使わせるかよ。確かに勝ちたいけど、それで優子たちの体調が悪くなったらそっちの方がやだよ。」

「ナオ……」

あんなかび臭くてキノコ生えてる教室で優子に勉強なんかさせたら体調を崩すどころか、登校拒否になってしまうもおかしくは無いからな。

「俺は毎日、優子の元気な顔を見ていたいからな。」

「もう、照れるようなことばかり言わないでよ！　もう……」

「え？　あ、ああごめん。」

何か変なことといったかな？　Fクラスには女子が少ないし、元気な女子の顔は見るだけでも嬉しいもんだと男は思うけどな。

「ま、代表が負けるとは思っていないから安心してね。」

「おう、それでこそ優子だな。」

俺たちはそんな話をしながら結果を見るためにAクラスの教室に向かった。

教室のスクリーンには大きな文字で代表同士の点数を映し出していた。

Fクラス　代表坂本雄二　53点

Aクラス　代表霧島翔子　97点

俺の言った通りに話が進んでしまって、なぜかすごく悲しくなった俺だった。

問題（歴史） 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。  
『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです

FクラスSIDE

「三対二でAクラスの勝利です。」

Fクラスの男子が負けて勝負は三対二の敗北。

「……………雄二、私の勝ち。」

床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る。

「……………殺せ。」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

姫路さんが僕を止めに入った。しょうがない……………姫路さんのために止まってやるか。

「でも雄二。0点なら名前の書き忘れとかが考えられるけど、53点てのはやっぱ」

「いかにも俺の全力だ。」

「この阿呆があーっ！」

僕は叫んだ。僕は雄二の事を本当にとんでもない切れ者だと感心してバカだなんて思わなかった。だから今から雄二への評価を改める。こいつは死に値する大バカ野郎だ。

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

僕は堂々と答えた。当たり前じゃないか！

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ!」

「くっ! なぜ止めるんだ姫路さんに美波! この馬鹿には喉笛を  
引き裂くと言っ体罰が必要なのに!」

「それって体罰じゃなくて処刑です!」

『お前らは本当に何やってんだ?』

そこにナオが秀吉のお姉さんと一緒にやってきた。

## ナオSIDE

明久は姫路に説得されようやく雄二に飛びかかりはしなくなった。

「……………でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油  
断してなければ負けてた。」

「言い訳はしねえ。」

開き直るんじゃないよ。勝って欲しくないとは言ったけど。

「……………ところで、約束。」

そう言えば、何でも言う事聞くと約束していたな。

A代表には色々噂があるが……………一体どんなこと言うんだ？

「……………！（カチャカチャカチャカチャ！）」

鬼気迫る顔で撮影の準備を始めるムツツリーニ。そんなに撮りたいか？ 盗撮は犯罪なんだぞ！

「ムツツリーニ、盗撮は犯罪だからやめような。」

「ナオ！ そう言いつつも手から千円札が出てるのは完璧に買う気満々じゃないか！」

「うるさい、明久！ これは需要と供給が成り立ってるからこれは立派な商売だ！」

「盗撮は犯罪って言うておいて何言ってるんだ君は……………ムツツリーニ後でニダース買おう。」

「お前も買う気満々じゃん！」

「お前ら。まだ話の途中だぞ。」

坂本がそう言うて俺たちの会話を止めた。

「約束だろ？ わかっている。何でも言え。」

潔い雄二の返事。負けたくせにカツコイイから腹立つな、なぜか。

「……………それじゃ」

A代表が姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

「……………雄二、私と付き合って。」

はい？

多分この場にいる坂本とA代表以外は全員この反応をとっただろう。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き。」

ようするに、結局噂はガセでA代表は幼馴染の坂本がずっと好きだったんだ。姫路を見ていたのは、坂本の近くにいる異性を警戒していただけのようだ。

……………なんて一途なんだろう。

「拒否権は？」

「……………ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあつ！ 放せ！ やっぱこの約束はなかったことに、そ、そうだなオ！ 助けてくれ！ 困ったことがあったら助けてくれるっていつてたよな！？」

「ゴメン、坂本。今のお前は困ってるどころか幸せにしか見えない。」

だってあんなに可愛い幼馴染を彼女に出来る時点で最高じゃないか。

「裏切り者おー！ー！！！！」

グッ！ ズルズルズル………

いやぁー！ー！ 助けてくれえー！ー！

A代表は坂本の服を掴み、教室を出て行った。

「……………」

「……………」

「……………」

あまりの出来事に誰も言葉が出ず、教室にしばしの沈黙が訪れる。完全に熱が冷めた俺はそれに構う事無く、視聴覚室を出ようとするが、扉の前には筋骨隆々の大男。生活指導の西村先生の姿があった。

「Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ。」

西村先生の声に他の連中が振り向く。

「なんですか西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思っ  
てな。」

我がFクラス？ 西村先生、Fクラスの担任は福原先生ですよ。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ。」

「「「なにい！！」「」」

俺以外の男子全員が悲鳴をあげる。何で？ 別に担任が変わるだけじゃん。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つだ。ないがしろにしているものじゃない。」

西村先生の言ったとおりで負けた今、誰も反論できない。

「諦めないというなら、三カ月後に宣戦布告の禁止が解禁されるまで勉強するがいい。いやお前達の場合は補習の量を何倍にもして鍛えたほうがいいかも知れんな。とにかく精進することだ！」

まあ、西村先生の言うとおりだな。何事にも精進しないとな。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の『観察処分者』と『A級戦犯』だからな。」

あーあ。明久、普段頑張っておかないからこういうことになるんだ。

「そうは行きませんよ！ なんとかしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活をエンジョイしてみせます！」

「お前はもっと勉強してくれ明久……頼むから。」

「……お前らには悔い改めるといふ発想はないのか。」

西村先生は盛大に溜息をついた。……なんかすみませんね。

「とりあえず明日からは授業とは別に補習の時間を二時間設けてやる。」

「二時間も！？ 学園生活の放課後は大切なんだ！絶対に逃げ切ってみせる！」

「あ、明久。そういえばお前勝負に負けた後、補習室に行ったか？」

補習室で思い出した。勝負が終わるまで補習室で補習を受けるといふことを。

「え？ あ、そういえば……」

「……吉井は補習の時間を倍にしよう。」

「そんな！ そんなことをしたら僕の頭が大変なこと！」

「まあ、明久。補習は明日からみただし今日は帰ってじっくり休みを……」

そこまで言ったとき、島田から、

「さあ、アキ。補修は明日からみただし、今日は約束通りクレープを食べに行きましょうか？」

そんなことを言ってきた。

「え？ 美波、それは週末の話じゃ……」

いつそんな約束をしたんだ？　というか仲がいいなあ〜こいつら。羨ましくなるぜ……

「んで、明久。これからクレープを食べに行くのか？」

「週末の話だった気がするから二度奢らせられるのかな？」

「別にいいじゃん。可愛い女子とのデートを二回もできるって考えると安いだろ？」

島田はあの暴力癖さえなければ、ほとんどモデルみたいなもんだからな。

「だ、ダメです！　吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？　姫路さん、それは話題にすら上がってないよ!？」

あ、明久って以外にモテるな……さらに羨ましい。

あんな女子2人とデートが出来るなんて最高じゃないか。

「よかつたじゃないか明久。両手に花だぞ？」

「それよりも僕の食費が、西村先生！　明日からと言わず、補習は今日からやりましょう！　思い立ったが仏滅です!！」

吉日だよ、バカ。

「吉日だ、バカ。」

あ、ハモった。

「そんなことはどうでもいいですから！」

「うーん。お前にやる気が出たのは嬉しいが」

明久と島田と姫路を見る西村先生。

「無理することはない。今日は存分に休むがいい。」

そしてニヤニヤと嫌な笑顔で明久をみた。

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！ こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ。」

「アキ！ こんな時だけやる気を見せて逃げようたって、そうはいかないんだからね！」

「ち、違うよ！ 本当にやる気が出ているんだってば！」

「吉井君！ その前に私と映画に行くんですっ！」

「姫路さん、それは雄二とじゃなくて僕となの！？」

「坂本君？ なんのことですか？ 私は吉井君のことがずっと

「

「アキ！ いいから来なさい！」

「あがあっ！ 美波、首は致命傷になるから優しく

「

「ほら、早くクレープ食べに行くわよ！」

「わ、私と映画にいくんですよね！」

「いやああっ！ 生活費が！ 僕の栄養があっ！」

「明久。」

俺は明久に声をかけた。

「ナオ？」

「楽しんでこいよ。」

俺は明久に千円札を二枚、島田たちに見えないように握らせた。

「お前の分はともかく、女子2人には食わせてやれよ？」

「ありがとう、ナオ！ 君は命の恩人だ！ 僕は最高の友達を持つたよ。」

「そのかわり、俺が困ったときがあったら助けてくれよ？」

「うん、分かったよ！」

そういつて明久は島田たちと教室を出て行った。

俺も帰りますか、うーん……疲れた。

「じゃあ私たちも帰りましょう、ナオ。」

「ああ、そうだな……って優子!？」

いつからそこに!？

「あと、今日の午後4時に駅前のクレープ屋さんでクレープ奢ってね？」

「な、なんでいきなりそんな話になるんだよ！ 別にそんな約束してないだろ？」

「だって言ってたじゃない。敗者クラスは勝者クラスに何でも言うことを聞くって。」

「なんか微妙に変わってない？」

というか俺、ムツツリー二に千円、明久に二千円渡したから残り千円ぐらいしか残ってないんだけど。

「まあ、そんなことはどうでもいいから早く帰りましょっつ。」

「あ、ああ。そうだな、準備するよ。」

帰る準備を・・・って、

「一緒に帰るのか？」

「当たり前じゃない。なに言ってるの？」

女子と一緒に下校なんてしたことねえ！ やばい、どうしよう。

「い、ごめん。帰ろうか優子。」

後ろで覆面被ったFクラスのメンバーが『夜道に気をつけるよ』と言ってきたが、俺は聞こえない振りしてその場を後にした。

その後、俺は優子と雑談をしながら家に帰りその後また外に出て優子と一緒にクレープを食べて帰るといっ一日だった。

一日が最近物凄く濃密になってきた気がするな。俺、このクラスになってよかったかも。

番外編 あいつと暴徒とラブレター ～前編～（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 1

・ 試召戦争で負ける - 3

・ 担任が代わり、補習時間が増える - 3

・ でもあまり悪い気はしない + 2

・ 優子との放課後デートを楽しむ + 3

・ Fクラスが少しだけ好きになる + 1

現在の青春ポイント合計 + 1

番外編 あいつと暴徒とラブレター ～前編～

あくる日の朝、俺たちは出席を取られていた。

担任も変更になって今は西村先生がFの担当になっている。

「浅斬」「はい」

「稲葉」「はい」

チャイムと同時に明久が教室に駆け込んできた。ギリギリまで西村先生に雑用をさせられてたようだ。

「近藤」「はい」

「斉藤」「はい」

それにしても昨日は楽しかったな。優子がホッペにクリーム付けたまま帰りそうになったりして。

あと、優子のアドレス貰っちゃった……女子のアドレスなんてあんまり貰ったこと無かったから凄く嬉しかったなあ。

静かな教室に平穏な時間が流れている。この幸せな時間がたまらないんだよ。

俺は昨日のことで頭をいっぱいにしながら今日も一日楽しい日になることを祈った。

「坂本」

「……明久がラブレターを貰い、昨日ナオは秀吉の姉とデートを楽しんでいたようだ。」

『『殺せええっ!!!』』』

坂本の一言で今日の俺の幸せは壊れた。

「ゆ、雄二！ いきなりなんて言い出すのさ！」

「坂本！ なんてこと言ってくれたんだ！」

慌てて坂本に駆け寄る明久と俺。明らかに小声だったのにクラスのほとんどが聞き逃さなかったようだ。どういうことだ！ なんで俺まで！

「どういうことだ！？ 吉井がそんな物貰うなんて！」

「なぜだ！ ナオだけがそんな幸せなことをするなんて。」

「それなら俺達だって貰ったり誘われてもおおかしくないはずだ！ 自分の席の近くを探してみろ！」

「ダメだ！ 腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！」

「もつとよく探せ！」

腐ってるのは貴様らの頭だああ！

「………出てきたっ！ 未開封のパンだ！」

「お前は何を探しているんだ!？」

朝の幸せな雰囲気はどこえやら。

怒号が飛び交う教室内。クラスの連中は明久と俺に妬みの視線を送る。

やめてくれえ。視線だけで殺されそうだ。

「お前らっ！静かにしろ！」

鉄人の一喝でクラスに静寂が戻る。ああ、やっぱり頼りになるのは先生だけだ。

「それでは出欠確認を続けるぞ。」

「手塚」「吉井コロス」

「藤堂」「浅斬コロス」

「戸沢」「吉井コロス」

返事が「吉井コロス」か「浅斬コロス」になっていた。

「皆落ち着くんだ！　なぜだか返事が「吉井コロス」に変わっているよ！」

「お前らやめてくれ！　何故俺もそんな呼ばれ方されなきゃいけないんだ！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意すべき相手は僕じゃないでしょう！？　このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！　あと、ついでにナオも喋ってたじゃないですか！」

ここで俺の名前を出しても無駄だ、明久！　そんなことよりどうするか考える！

「新田」「浅斬コロス」

「布田」「吉井マジ殺す」

「根岸」「浅斬ブチ殺す」

教師といえどFクラスに対する扱いの悪さは最悪といったところだろつか。

優等生の俺ですら出席の返事に対する注意は行われなかった。

「よし、遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように。」

「待つて先生！ 行かないで！ 可愛い生徒を見殺しにしないで！」

「本当に待つてください、先生！ 俺まで殺されたら弟の世話は誰が見るんですか！」

「吉井、勘違いするな。」

鉄人が扉に手をかけて言った。勘違いとは何の事だ？

「お前は不細工だ。あと浅斬、俺は人の家庭事情に首を突っ込むこととはしないからな。」

そう言うことかよ……俺らに死ねってか！

「不細工とは言われるとは思わなかったよバカ！」

「俺が死にそうになったら遺書に“西村先生の所為です”って書いてやる！」

「授業は真面目に受けるように。」

「先生待つて！ せんせーい！」

俺と明久の叫びも空しく、鉄人は教室を出て行く。この教室で暴動が発生するのはもう止められない。

「アキ、ちょくつと話を聞かせてもらえる？」

誰よりも先に明久の肩を掴んだのは島田。

「あ、あはは……。。美波、顔が怖いよ。」

「手紙を貰ったの？ 誰からのの？ どんな手紙なの？」

明久を鋭い眼光で睨みつけ、質問攻めにする島田。ポニーテールが角に見えてくるよ。

「あー、えっと、そのー。」

「いいから、おとなしく指の骨を じゃなくて、手紙を見せなさい。」

断れば明久の指はあられもない方向に曲がっちゃうな。

「あの、吉井君。」

そこに現れたのは姫路。 姫路も気になるのか？

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです……」

姫路までもが明久の手紙を見たがる。好きだからか？ やっぱ。

「その……いめん。」

断る明久。 まあ、普通そうだろう。

「でも、でも……………」

それでもしつこく食い下がってくる姫路。はあ、しつこい女は嫌われるぞ？

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばかりは、」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです！」

姫路も明久に暴力を振るうつもりか！？ Fクラスの影響受けすぎだよ！

「ちよつと待つて！ 姫路さんまで僕に暴力を加えることが前提なの！？」

ついに姫路も最低学力を誇るFクラスの影響を受けてきたようだ。

「皆、ちよつと落ち着け。」

そんな中、坂本が教卓を叩く。まさか坂本……………

「今、問題なのは明久の手紙を見ることやナオを殺すことじゃない。」

坂本がクラスの連中に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。やっぱり腐っても友達だな。

この期に及んで助けて……………

「問題は、明久とナオをどうグロテスクに殺すかだ。」

……………くれるヤツはこのクラスにはいないようだ。

「前提条件が間違ってたよ畜生！」

「坂本、後で覚悟しておけよ！ 霧島に結婚式の式場のパンフレット渡してやるからな！」

俺たちは荷物を持って教室から逃走した。

「逃がすなあつ！ 追撃隊を組織しろ！」

「手紙を奪え！ 吉井を殺せ！ 浅斬は紐なしバンジーの刑だ！」

「サーチ&デス！」

「そこはせめてデストロイで！」

廊下に響いてくる声を聞いて、最悪な団結力を持ったクラスだと改めて実感した明久と俺だった。

『いたぞ！ 吉井と浅斬だ！ 空き教室に向かったぞ！』

『了解だ！ 見逃さないように追ってくれ！ こっちは全部隊に連絡を取る！』

『オーケー！ B部隊は正面から、C部隊は逆側から回って挟み撃

ちにするんだ！」

『応っ！』

廊下を走っていると後ろの方からそんな会話が聞こえてくる。まさかこの短時間で部隊編成まで済ませて俺たちを襲うなんて、無駄に行動力の高いクラスだな。よっぽど俺たちを殺りたいらしい。上等だ！ そっちがその気ならこちらもやっつてやる！

「明久！　なんか作戦あるか？」

「うん！　一緒に生きよう、ナオ！」

俺たちは走りながら作戦を確認し、逃走を続けた。

「吉井！　観念して手紙をよこせ！」

「自分だけ幸せになろうなんて甘いんだよ！浅斬！」

目の前に五人のクラスメイトが立ち塞がった。先ほど話していた挟み撃ちの連中だろう。後ろからも追いかけてきている奴らがいる。このままでは逃げ場がなくなるので空き教室へと逃げ込む俺たち。敵は全員俺らを狙って教室に群がってきた。

教室に入ってきた瞬間、入り口が限られているので向こうは一ヶ所に固まらなければいけない。

その時、明久の作戦が決行された。

「よいしょっ。」

用意していたトラップを発動した。

今朝、西村先生に雑用で頼まれて外しておいたサッカーのネットが皆の頭に覆いかぶさる。

「な、なんだ!？」

「落ち着け! ただのネットだ! 端に近いヤツから抜け出して吉井と浅斬を確保しろ!」

「くっ! このネット、びしょびしょに濡れているから身体に張り付いて」

「一瞬戸惑ったのに、大した奴等だね。」

「ああ、だが」

「チエツクメイトだ!!」

俺は用意していた護身のスタンガンの電源を入れ、投げつけた。

(この前襲われたときから持つてる)

「保健室のベッドでゆっくりしてくるんだね。」

「離れる! 全員ネットから離れる!」

「おやすみ、皆。」

バチバチという激しい音と少しの焦げ臭い香りがして、

「「「ぎゃあああ! ! !」」」

悲鳴がした。俺たちはその悲鳴を聞きながらその空き教室を後にした。

『どこだ？ 確かにこっちに来たはずだが。』  
『気をつけろ。きつと近くに潜んでいるぞ。』  
『F部隊とG部隊もやられたらしい。向こうは二人だが、油断するなよ。』

旧校舎の古書保管庫。その中で緊張した様子のクラスメイトが囁き合っている。

二人のコンビネーションで敵を撃破したので随分と俺たちを警戒しているようだ。身を潜ませている本棚の陰から様子を窺うと、互いに背中を合わせて死角を潰している姿が見えた。

一カ所に集まっているなら都合だぜ。

俺は明久と合図を取り合った。

「俺ならここにいるぜ！」

俺は飛び出て敵の注意を引いた。

『くっ！ 浅斬か！』

『油断せずに行くぞ！』

今だ！ 明久！

「せえーのっ！」

明久は相手の後ろにある本棚を倒した。

『なっ……っ！』

『しまっ　　！』

クラスの連中は俺に気をとられていたので反応が鈍い。結果的に俺以外のクラスメイトは全員本棚の下敷きになった。

「ハッハー！ 人の恋路を邪魔しようとするからそんな目に遭うのさ！」

明久………今、すごく悪い顔してるぞ。ドラマに出てくる悪役みたいだ。

脱出しようともがく彼らを尻目に俺たちは古書保管庫から出た。

『おのれ！ 吉井、浅斬！ 裏切り者め！』

『覚えていろ！ お前らの幸せは必ずブチ壊す！』

「……本当、どこまで歪んだクラスメイトなんだろ。」

俺と明久はそう言ってトドメにモップで出入り口を封鎖した。これで追っ手はほとんど始末したはずだ。

「さて、と。残ってるヤツらは　　っとおおお！？」

不意に何か俺に飛んできた。すると、先ほどまで俺が立っていた場所にボールペンやシャーペンが深々と突き刺さっていた。

驚いた明久が、

「誰だっ！」

すると、

「……裏切り者には、死を。」

手に各種文房具を構えたムツツリーニが立っていた。

「危ねえだろ！ 俺じゃなきゃ死んでたぞ！」

今回はムツツリーニも敵か！ くそっ、あいつ相手だと手加減が出来そうもないな。

そうこう考えているうちに明久がムツツリーニに飛びかかっていた。

「ムツツリーニ、覚悟！」

拳を固め、ダッシュをかける明久。ん？ ムツツリーニが袋からなにか出したぞ？

「……次はカッターを投げる。」

「よし。まずは話し合いをしようじゃないか。」

友人に向かって躊躇いなくカッターを投げようとするとは、やるな。

「……わかった。」

「それじゃ、まずはそっちの要求を聞かせて欲しい。」

明久、向こうの要求は手紙の処分だと思っただが。そんなんで交渉

なんてできんのか？

「・・・・・・・・・・こちらの要求は」

ムツツリーニは静かに要求を告げた。

「グロテスク。」

「待つて！ それは既に僕らが処刑される方法の話になっている！」

そんな要求あるか！？ とにかく逃げなくては！

「・・・・・・・・・・交渉決裂。」

「くっ！ やっぱりやるしかないのか！」

構えられたカッターに集中する明久。

それにしても、普通ラブレター一通のために友達に向かって刃物を投げつけるだろうか。

「・・・・・・・・・・大丈夫。目は狙わない。」

「ムツツリーニ。それだけで安心できるほど明久はバカじゃないぞ？」

「・・・・・・・・・・そう。」

ヒュッ

風切り音をあげてカッターが明久に飛んでいく。その目標は明久の右目！？

「う、嘘つきいっ!」

咄嗟に手を使ってガードする。カッターは、かしゃつと軽い音を立てて床に落ちた。

刺さらない? 刃を出していなかったのか!?

「………隙あり。」

「っ!」

呆気にとられていた明久は一瞬でムツツリー二に接近されていた。

「ムツツリー二! 姫路さんの胸のサイズを知っているか!」

咄嗟に身を守るため、明久はムツツリー二の好むような話題を振った。

食いつけば………ってか、そんなんでいいの!?

「………そんなものは、常識………!」

しまった! ヤツにかかればそんなもの簡単にわかってしまう。

というか常識なのかよ! 俺は知らないよ!

「じゃあじゃあ、もし僕に彼女ができたら、秘蔵のコレクションを贈呈するから!」

なんだそりゃ! そんなんでムツツリー二が食いつくわけが………

「………ピタッ」

明久の目の前でムツツリー二の動きが止まった。嘘っ!? 食いついた!

「……………いつ?」

すごいムツツリ精神だな。量や内容を確認せず、いきなり受け渡し日時から話に入るとは。

「えーっと、今週の週末にでも。」

「……………交渉成立。」

買収は恐ろしいほど簡単に終わった。俺も敵に回られたらこの手を使おうか。

「それじゃ、僕達は先を急ぐね。」

と、この場を立ち去ろうとする俺らにムツツリー二が手で制する。どうした?

「……………護身用に。」

そう言いながら小さな袋を渡してきた。

「護身用って?」

明久が聞いた。

「……………中に刃物が入っている。いざというときに使つとい  
い。」

正直な話、護身用に刃物なんか使いたくは無いが背に腹は変えられない。貰っておこう。

「ありがとう。困ったら使わせてもらおうな。」

「……………(グッ)」

親指を立て、俺らに背を向けるムツツリーニ。俺らは「グッ」しやられない。

早いとこ他の奴らも倒して安全を確保しなければ。

〈後編に続く〉

番外編 あいつと暴徒とラブレター ～後編～（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 1

・優子からアドレスを貰う + 1

・朝のゆっくりとした幸せの雰囲気陶醉しれる + 2

・その幸せが壊れる音を聞く - 3

・その所為で授業を受けられなくなる - 1

・Fクラスの恐ろしさを再確認する - 1

・ムッツリーニの懐柔方法を知る + 1

現在の青春ポイント合計 ± 0

番外編 あいつと暴徒とラブレター ― 後編 ―

俺と明久は逃げる算段を考えていた。

「そつだ。屋上に行こう。」

「は？」

何だ？ その京都に行こう、みたいなノリは。

「下見も兼ねて行こうと思って。」

「ふーん。そうなのか。ちなみにそれは誰から貰ったんだ？」

「え？ まだ見てないからわかんないよ。それに……………」

そこまで話していたときだった。

「アキっ！ 見つけたわよ！」

「げっ！ 美波！？」

明久の天敵、島田美波が登場した。

肌に伝わってくるビリビリとした殺気と雰囲気。

俺たちは階段の踊り場で向こうの出方を見る。すると、島田は意外に落ち着いた足取りで明久に歩み寄り、こんな選択をしてきた。

「おとなしく手紙を渡して殺されるか、殺されてから手紙を奪われるか、好きな方を選びなさい。」

おかしい！ その選択肢の中には明久が生きる要素が入っていない！

「どうしてそんなにこの手紙にこだわるのさ！ 美波には関係ない

じゃないか！」

明久。それだと余計に相手を挑発しているようにしか見えないんだが。

「ウチには関係ないって、酷い………！ アキは本当にそう思ってるの？」

「え………？」

島田が急に傷ついたような表情になる。

なんだ、島田も明久のことが好きだったのか？  
モテる男は辛いね………。

「まさか、それって。」

「だって、今まで恥ずかしくて言えなかったけど、ウチはアンタの………」

ええ！？ ここでまさかの告白か?! どうするんだ明久……

「アンタのせいで、『彼女にしたいくない女子ランキング』の三位になってるんだからああ！」

ちがう！ これは愛の告白ではなく、死刑宣告だ！

「明久あ！ 逃げろあ!!！」

「さらばだっ！」

告白のような雰囲気から一変、いきなり殺意のムードに変わってしまった。俺たちは本能の赴くまま逃走行動に移る俺たち。

ていうかこれは俺、逃げなくてもいいんじゃない？ と思ったが明久

に、

「生きる時が一緒なら死ぬときも一緒だよ！」

と言われてしまった。畜生！裏切った後が恐ろしい！

「逃がすもんですか！人をこんな立場にしておきながら自分達だけ幸せになるうなんて、そんなこと許さないわよ！」

「まだ上に二人いて良かったじゃないかっ！」

「いいわけないでしょう！？下には何人いると思ってるのよ！」

えっと、二年生は全員で三百人くらいだろ。すると、

「百五十人ぐらいか？」

「ひゃく」・・・！ どうしてくれんのよっ！責任取りなさい！」

「責任と言われても！」

「とにかく、手紙を渡しなさい！」

「嫌だ！絶対破かれるから！」

「そんなことしないわ！再発防止のためにコピーをとって校内にばら撒くだけ！」

「そっちのが酷いだろ！」

というか一生懸命書いて明久に出したのに、その女の子が可愛そう  
だろ！

それにしても全然引き離せない。俺は五十メートル6秒台だぞ！

「明久！ なにか作戦を！」

「ところで美波！階段を走っていてわかったんだけど！」

「なによー！」

「今日は白なんだねっ！」

「なっ………!!」

まじか!? そうなのか!? 本当か!?

「バカめ! こんな状況で見る余裕なんてあるわけないじゃないか!」

ああ………そうだったの。………なんか残念。

「おりやあああつ!!!!」

島田がスカート裾を押さえてるうちに距離を稼ぐ。チャンスはここだけだ!  
階段ダッシュが終わり、今度は廊下を駆け抜ける。

「あつ。吉井君に浅斬君。廊下は走っちゃ駄目ですよ。」

この時間は授業がないのか、廊下を歩いている英語の先生がやんわりと俺らに注意してきた。遠藤先生か。ん? 明久がなにか思いついたようだな。

「すみません、遠藤先生。ちょっと用事を頼まれていたもので。」

先生の前で止まり、頭を下げる俺達。別にそんな用事はない。

「用事ですか?」

「はい。急いで空き教室から机を持ってくるように。」

もちろん嘘だろう。だが遠藤先生は疑うことなく納得してくれた。

「そうですか。でも、廊下は走ってはいけませんよ。」  
「気をつけます。それでお願いがあるんですけど。」  
「はい、なんでしょう?」

お願い? いくら先生でも島田の事は止められないと思うけどな。

「召喚許可を貰えますか? ちょっと荷物が重そうなので。」

うまい! 明久! それで島田と応戦するつもりだな。

召喚獣を呼び出すには先生の許可が不可欠だからな。

『アキいつ! よくも騙してくれたわね!』

やばっ! もう来たのか!

「明久、早く!」

「先生、とにかくこっちへ!」

「え? あ、はい。」

空き教室に入り、

「さあ先生! 早く許可を!」

召喚許可を求めた。

「はぁ………。よくわかりませんが、許可します。」  
「よっしゃ! 試験サモン召喚っ!」

明久が呼び出したとき、ちょうど教室のドアが開いた。

「今日はライトグリーンなんだから、白が見えるわけないでしょうが！」

島田登場。それにしても……………

「島田……………わざわざ言わなくても良いんじゃないか？」

「あ……………っ！」

俺の指摘を受け、赤面する島田。ムツツリーニと一緒にいたら今頃血の海になっていただろう。

「隙ありっ！」

「きやつ。」

動揺していた島田の背中を押し、教室の隅に追いやる。そして、

「いよいよしょおっ！」

教室の後ろに設置されている生徒用ロッカーを召喚獣に持たせ、バリケードを作った。

「こ、こらっ！ 卑怯よ！ 出なさい！」

ガンガンと叩く音が聞こえる。これで一時的には何とかなっただはすだ。

ごめん……………島田。

「吉井君、何をしていますんですかっ！」

その様子を見ていた先生が俺達を叱責した。

まあ普通そうだろう。

「すみません！ 緊急事態なもので！」

「本当にすみませんでした！ あとでちゃんとあやまらせに行かせますから！」

「あつ！ 待ちなさい！」

先生の制止を振りきり、再び廊下に戻る俺達。  
もう少して安全地帯だ！ 助かる！

そして、二回を通過して三階の廊下。

「吉井、浅斬、待っていたぞ。」

そこにはFFF団会長こと、須川が待ち受けていた。

「須川……お前まで俺達の邪魔をするのか？」

「無論だ。吉井と浅斬にはここで死んでもらう。」

そう告げて、彼は背中から何かを取り出した。

「木刀か……卑怯なマネしやがる。」

「卑怯？ それは敗者の戯言だっ！」

「うわっ！ とつとー！ー！」

須川がいきなり斬りつけてきた。今のは完全に本気だったな……

「吉井、お前は手紙を渡し、浅斬には紐なしバンジーをやってもら  
う！」

「くっ……！！！」

相手が悪い。まさか木刀を使ってくるとは思わなかった。畜生！  
こっちにも武器があれば……ん？ 武器？

「明久！ そういえばムツツリーニから貰ったあれがあるぞ！」

「そういえばそうだった！」

明久はポッケに手を突っ込み、刃物の入った袋を取り出した。

「くっ！ 丸腰じゃなかったのか！」

袋を見たとき、須川表情から余裕が消え、焦りを見せていた。

「よし！ こっちにはナオもいるし、勝負は僕達の方が有利だ！」

袋から刃物を取り出し、須川との距離を詰める。

「くそっ！ 俺はまだ負けたわけじゃない！」

須川が木刀を繰り出してきた。だが、

「甘いっ！」

半歩横にステップした明久にその攻撃は届かない。そして、無防備になった須川にありつた力の力を込めて爪切りを……

「つて、爪切りで勝てるわけないだろバカあつ！」

「本当だ！ 爪切りだ！」

気付けよ！ そんなことくらい！

「吉井……。お前つて 本当にバカだなあ……」

俺もそう思う……

「ち、畜生！ こうなったら爪切りでもやってやる！ 素手よりマシなはずだ！」

「いや、明らかに素手のほうがマシだろう！？」

「黙れええっ！」

旧校舎の三階で明久と須川の怒号がぶつかった。

「ぐうう……！！ 爪が、爪がああ……！！」

廊下に倒れたのはなんと木刀の須川だった。まさか、勝つとは思わなかったな……。あまりの変な勝負に呆気に取られていたが、軍配があがったのは明久のほうだった。これはこれで明久の才能がこわいなあ。

「よ、吉井……裏切り者……」

深爪しか外傷がないはずなのに息も絶え絶えの須川。なぜだ……

俺達は階段を昇った。屋上まではもう少し！  
ここまで来れば

「やはりここまで来たか、明久、ナオ。」

「吉井君、言うことを聞いてください。」

「雄二に姫路さん……」

「坂本に姫路……」

屋上へと続く階段。その前に立っていたのは坂本と姫路だった。

「どうして僕達がここに来ると？」

「屋上はこの学校の告白スポットだからな。単純なお前達なら下見

も兼ねてここに来ると思っていた。」

くそつ。さすが坂本だ。明久の低い頭脳を完全に読んでいる。

「トイレにでも行けば、誰にも邪魔されずに読めるはずなんだがな。」

あ。

「ゴメン、雄二。僕、ちょっとおなかが痛いからトイレに行ってくるね。」

「吉井君、ずっと気付かなかったんですか………?」

それに関しては触れてやるな。さっきまで爪切りで戦ってたんだから。

「雄二、どうしてそこまで僕の邪魔をするのさ！ そんなことをしても、雄二にとってのメリットは何もないはずなのに！」

「そうだ！ 俺だってお前に何かしたわけじゃないのに、皆にあんなこと言いやがって！ 一体何の恨みがあってこんなことをした！」

「そうだな。確かにお前らの言うとおり、こんな行動は俺にとってなんのメリットもない。いや、それ以前に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない。」

「嘘つけ！ 昨日A代表と仲睦まじく帰っていただろ！」

「肘間接取られながら無理やり一緒に帰らされた俺の気持ちがお前らにわかるか！ そういう問題じゃないんだよ、お前ら。俺はただ、純粹に………」

坂本はゆっくりと感情を込めて言葉を紡ぎだす。

「お前らの幸せがム力つくんだよ！」

「「アンタは最低の友達だよ!!」」

むしろこんなヤツ友達ですらない!

「さてお前ら。『おとなしく手紙をよこせ』や『紐なしバンジーをやれ』だなんてことは言わねえ。本気でかかって来い。」

坂本は学生服の上着を脱ぎ、ネクタイを外した。改めてみると、坂本の身体はしなやかで無駄のない理想的な筋肉のつきかたをしていた。

「姫路。上着を持っていてくれるか？」

「あ、はい。」

姫路に上着を渡した雄二は構えを取って軽くシャドーをしてみせた。シュツと鋭い風切り音がする。あれは喧嘩をやりなれてるヤツのそれだ。

間違いない。……………ヤツは本気だ。

「吉井君たち、やめておいた方が……………」

姫路が明久に近づき心配そうに見ている。

……………ここは俺の出番じゃなさそうだ。

「明久、応援してるぞ！」

「え、ナオは戦わないの？」

「ああ、でも一つだけ明久に言いたいことがある。」

「なんだい？」

「……俺はお前を信じてるぞ。」

「うん。わかった。」

「どうやら信じてよさそうだ。」

「姫路さん。　　っと。これ、僕のも持っていてもらえろ？」

「負けるほうに、な。」

「あ、はい。」

明久は上着を脱いでしまった。最初に言っておくべきだったな……

「……明久。」

「雄二、勝負だ！」

拳を握って構えを取った明久だったが、

「……お前、バカだろう。」

「へ？」

呆れたような俺と坂本の視線。その先にあるのは　　先ほど明久が姫路に渡した制服の上着だ。

「あ、あの、手紙がポケットに入っているみたいなんですけど……」

・・・見ちゃってもいいんですか・・・?」

「だ、ダメだよッ！ 戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうか！」

俺もそう思う。

「やれ、姫路！ その手紙を始末するんだ！」

坂本が明久を羽交い絞めにして、身動きを取れなくしてきた。

明久はもがくが、全然解けない。

「・・・あれ？ こ、これってまさか・・・?」

ん？ 姫路が何かに気付いたぞ？ なんだろう。

「姫路さん！」

明久が姫路に声をかけてきた。

「えっ!? あ、はい。なんですか？」

「僕にはわかってるよ。優しい姫路さんは手紙に込められた人の気持ちを踏みにじることなんて出来ないってこと。だから、おとなしく 『手紙を細切れにするんだ。』 違うっ！ そうじゃない！」

雄二、卑怯だぞ！ そうやって僕の台詞みたいにつなぐのは反則だ！」

「はいっ！ わかりました！」

「いや、『はいっ！』 じゃないよ姫路さんってああああっ！ そんなに丁寧の手紙を裂かなくても！ それじゃあもう絶対読めないよね!？ 返してっ！ 僕の幸せな未来と大切なラブレターと六行前

の台詞を返してえっ！」

叫んでいる間にも破られていく手紙。

「まさか、本当に破るとは思わなかった。……………すまん、明久。」

坂本が驚いた顔で明久に謝る。

俺も破るとは思わなかった。予想外だ。

「せめてもの詫びだ。」

坂本が廊下中に散らばった紙クズ、もとい手紙を集めて持ってきた。まさか つなぎ合わせるつもりか？

「未練を断つてやる。」

シュボツ

メラメラメラメラ……………

ああ、暖かい……………。まるで心まで温まるようだ。つて違うっ！ 何してんの！？ 絶対に読めないじゃん！

「明久。お前は知らなかっただろうが、」

「なに！？ なんでもいいから早く水持ってきて！」

「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ。」

「知ってるよバカ！ ちくしょー！」

必死の消火活動も空しく、手紙は灰になった。

「坂本君は手紙の主が誰だか気にならないんですか？」

いや、気になるだろ。普通は。

「全然興味がないな。俺は明久の幸せが妨害できたからそれでいい。もっともー」

「は、はい。なんですか？」

「誰からの手紙だが、目星はついたがな。」

マジか！？ 明久にラブレター書いたやつか！

「確かに、“他人の書いた手紙”を破り捨てたら問題があるよな？」

なるほど。ということはあの手紙を書いたのは姫路………？

「そ、それは、その………」

姫路が動揺しているな。なるほど凶星だな。

「雄二！ その話、もっと詳しく」

「あああ吉井君は聞いちゃダメですっ！」

「いっぺっ！？」

ぎゃー！！！！ 明久の顔が90度回転した！

「い、ごめんなさいっ！ 私、大変なことを！」

「まあ気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだからな。」

ん？ 連中………？

『ア〜キ〜〜！ アンタよくもやってくれたわね〜〜！』

『吉井いつ！ 浅斬いつ！ 絶対殺すううっ！』

『ガンホー！ ガンホー！』

どうやら逃げ切るのは難しいらしい。

「逃げるぞっ！ 明久！」

俺は明久を背負い、階段を猛ダツシュで駆け下りてそして、

ツルツ

すっころんだ。

ごめん………明久………

番外編 あいつと暴徒とラブレター 〱後編〱(後書き)

番外編は長かったです・・・  
泣きたい。

↳ 第二部開始↳ 第12話 何事も真剣にやりましたよ(前書き)

前回の青春ポイント合計 ±0

・ Fクラスの歪みを再確認する - 3

現在の青春ポイント合計 - 3

〜第二部開始〜第12話 何事も真剣にやりましよう

「清涼祭？ なんだそりゃ？」

俺は優子と一緒に下校しているときに清涼祭について聞かされた。

「なんだそりゃって・・・知らなかったの？」

「いや、まったく。」

Fクラスにいるときは清涼祭には全く触れられていないからだ。

「呆れた・・・あと一週間もないのよ？そんなんでどうすんのよ？」

「まあ、ウチの代表がなんとかしてくれるさ。」

坂本は自慢の統率力でなんとかするだろう。そんなことより・・・

「清涼祭の日は暇？」

「えっ？うーん、二日あるからそのうちの一日は暇かな？」

「じゃあ、一緒に出し物回るうぜ？何か一つくらいは奢ってやるよ。」

「えっ！？い、一緒に回るの？」

「い、嫌か？」

一瞬、ビククリしてたな。嫌だったのかな？

「ぜ、全然！ナオに誘ってもらえたのが嬉しかったから・・・」

よかった。そう言ってもらえると俺も嬉しい。

「じゃあ、空いた日が決まったら連絡くれよ？」  
「うん！わかったわ。」

俺はいつもよりちょっと上機嫌で晩御飯を作っていた。  
弟に『兄ちゃんちょっと変！』って言われたけど知ったことか。  
ああ。清涼祭、楽しみだなあ。

俺が文月学園に転校してもう1カ月。肌寒かった気候もだんだん暖かくなってきた暑いくらいになった。俺が転校してきた最初の行事、『清涼祭』が始まるうとしていた。

お化け屋敷にクレープ屋、『試験召喚システム』の展示をするクラス  
・ 行事の準備で皆は活気立つ中、俺らのFクラスは……………

「勝負だ、須川君！」

「来い！吉井、お前の球なんて場外に飛ばしてやる！」

「言ったな！？意地でも打たせるものか！」

準備そつちのけで野球をしていた……………。窓から見ていた俺は明久たちの野球風景を見ていた。  
まったく、準備どうすんだよ……………

坂本から吉井へ野球の定番、サインが送られていた。えーっと、何々？ 次の球は、カーブを、バッターの頭に……ってだめだろ、それ！ 完璧に反則だ！

「貴様ら学園祭の準備をサボって何をしている！」

マズイ、西村先生だ。これで明久は捕まったな。

「吉井！ 貴様がサボりの主犯か！」

明らかに他の生徒もいるはずなのに、なぜか明久をターゲットにする西村先生。

なぜ明久だけなんだろう。観察処分者だからだろうか。

「ち、違います！ どうして僕をいつも目の敵にするんですか！？」

どうしてって言われても、普段の生活態度が原因だろ。

「ゆ、雄二！ 提案したのは雄二でしょ！ 何とかしてよ！」

うわっ……あっさりバラしやがった。明久……お前ってヤツはん？ 坂本が何か明久にサインを送ってる……。お前を売った明久を助けるのか？  
んーっと、なにになに？ フォークを、鉄人の股間に、って怒られるだろそれ！

「全員教室に戻れ！この時期になって学園祭の出し物が決まって無いのはうちだけだぞ！」

西村先生に怒鳴られた奴らはみんな教室に強制送還された。

「さて、そろそろ清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない時期だなんだが……とりあえず議事進行及び実行委員に誰かを任命する。そいつに全権委ねるので、後は任せた。」

坂本……興味がないからって全部押し付けて寝るつもりか！？

俺はその実行委員はできないな。俺にも予定と言つものはある。なぜなら優子と一緒に清涼祭を回る予定だからだ。楽しみだ。

「吉井君、坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

姫路が明久に聞いている。うん、あの反応を見ればわかると思うが。

「うん……楽しみってことはなさそうだね。試召戦争の時とは全然違つし。」

まあ、そうだろうな。坂本は別にそういうの好きそうじゃないし。

「そうですか……残念です。」

別に残念がるほどのものでもないだろう。

「吉井君も学園祭に興味が無いんですか？」

「うーん、別にそこまで何かをしたいって訳でもないかな……？」

「私は吉井君と一緒に学園祭の思い出を作りたいです……。」

うわっ、明久。よかったな。姫路がお前にアタックしてるぞ。

こうして見ると、いいカップルだよなあ。

「吉井君は知っていますか？学園祭では幸せなカップルができやす  
いって噂が……ケホケホッ」

「姫路さんどうしたの、風邪？大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

風邪じゃなくて恐らく設備が不衛生で姫路の体に良くない影響を与  
えているんだと思う。

「そのうち何とかしないとな……。」

明久が教室を見回して言った。まあ、こんな教室だとなあ……。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田と言う事でいいか？」

いつのまにか話が進んでいた。

「え、ウチがやるの？うーん、ウチは召喚大会に出るからちょっと  
困るかな……。」

「あれ、実行委員なら美波より姫路さんの方が適任じゃないの？」  
「いや、姫路の性格だと全員の意見を丁寧聞いて回るだろうから、この場合少し強引にでも皆をきっちり締められる事が出来る島田の方が良い。時間も無いことだし速度重視ってことだろ、坂本？」

「そういうことだ。」

「それにね、瑞希も召喚大会に出るのよ。」

えっと確か試験召喚システムの宣伝が目的なんだよな。他の人も来る文化祭などではいい宣伝になるのだろう。優勝賞品は今、話題の【如月グランドパークのプレオープンチケット】と試験召喚システムの技術の粋を集めて新しく開発した【白銀の腕輪】だったけ？ あと召喚獣

「え、そうなの？」

「はい、お父さんがFクラスって理由だけで皆の事を何も分かってないのにバカにするんです！ 許せません！ 召喚大会で優勝して見返してあげるんです！」

「……………」

気持ちは嬉しいんだけど、俺もFクラスはバカの集まりだと思う。

…………… 注意力のない俺も含めてな。

「話を戻そう、島田。実行委員の話だけど引き受けてくれないか？ ああ、召喚大会との両立が大変だったら副実行委員を付けよう。」

「んっ……………。副実行委員次第で受けてもいいけど……………」

島田は吉井を見た。まあ明久は暇だしそれ位いいだろう。

「俺は吉井明久に一票！」

「ワシも明久が適任じゃと思うぞ。」

俺と木下がそう言った。

「ちよつと二人とも！ 僕に面倒事を全部押し付けるつもり!？」

「わかつたよ、明久。じゃあ皆で他に候補を挙げてもらつて、お前も含めてその中から選ぶつてのでどうだ？」

「それならいいけど……」

「それじゃあ、皆意見を聞かせてくれ。」

俺は皆に意見を言つてもらつ。これが一番手っ取り早い。

『吉井がいいと思う。』

『やはり坂本に……』

『ナオでもいいじゃないか？』

『いっそのこと須川でも……』

『姫路さん、結婚して。』

なんだか一人おかしいのがいなかったか？ 　つて吉井！ 　そんな怖い顔すんなよ！ 　ビックリしただろ！

「それじゃあ島田。今の中から候補を2人選んでくれ。」

「うん、わかつた。」

島田が黒板に候補を書き上げていった。

候補？ 吉井、

つと、もう一人はだれかな。

候補？明久

「そこまでするかあ！？」

『どっちがいいと思う？』

『どっちもクズだしなあ……………』

皆は俺の叫びを無視して相談に入り始めた。つてか実質的には一人だから相談の必要なくね？

「こらあ！ 真面目に悩んでいるふりをするんじゃない！ あとクラスメイトを平然とクズ呼ばわりするなんて君たちは人間のクズだ！」

「明久、その理屈でいくとお前もクズになるんだけど……………」  
「ほらほら、アキ。グダグダ言っでないでウチとあんたでやる事に決まっただから前に出て議事をしないと。」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされているような気がするよ……………」

貧乏くじ？ 何言っでんの。こんな美人（暴力女）と一緒に出来るなんて、俺なんか恐れ多くて（いろんな意味で）できないよ。

こうして俺たちの清涼祭の出し物が決められることになったのだっ  
た……………

第13話 化学兵器はこの世から抹殺すべきだと思えます！（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 3

・優子と一緒に清涼祭を回る約束をする + 2

・清涼祭へのやる気が見られないFクラスに脱帽 - 2

・清涼祭へのやる気が高まる + 1

現在の青春ポイント合計 - 2

### 第13話 化学兵器はこの世から抹殺すべきだと思います！

「ウチが議事進行をやるからアキは板書をお願いね。さあ、さつさと決めるわよ。クラスの出し物でやりたい物があれば挙手してもらえ。」

あ、ムツツリーニが手を挙げたぞ。

「……………写真館。」

「土屋の言う写真館ってかなり危険な香りがするんだけど……………」

確かに……………。あんなものやこんなもの……………涎が止まらないぜ。

あ、明久……………そのネーミングセンスは俺も予想外だ。

『候補1 写真館「秘密の覗き部屋」』

……………なんて斬新？ なんだ……………

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します。」

なんか欲望丸出しだな。ここのクラスは。

「ウェディング喫茶？それってどうなの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着てるんだ。」

ようするに着ている衣装が違うという事だ。さほどメイド喫茶とは変わりないだろう。

『斬新ではあるな。』

『憧れる女子も多そうだ。』

『でも、ウェディングドレスって動きにくくないか？』

『調達するのも大変そうだぞ？』

『それに、男は嫌がらないか？人生の墓場、とか言うぐらいだしな。』

そんな意見に、クラスの中が少しざわめく。

「ほら、アキ。今の意見も黒板に書いて。」

「あ、うん。」

島田に促された明久は黒板に横溝の提案を書く。

『候補2 ウェディング喫茶「人生の墓場」』

明久………お前頭に残った文字とイメージしか書いてないだろ。

「さて、他に意見は。はい、須川。」

「俺は中華喫茶を提案する。」

そう言いながら須川が立ち上がる。

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようって言うの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中国ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というのは……」

「途中、俺も訳がわからなくなった。なんかすごい熱弁してくれたのは嬉しいんだけど。」

「中国の食文化がヨーロッパに淘汰がどうたらの辺りで訳が分からなく……」

「アキ、それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん。」

『候補3 中華喫茶「ヨーロッパ」』

中華喫茶なのにヨーロッパって……ぶっ。

あはは！ もう笑うしかねえ！

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

その時、西村先生が教室にはいつてきた。

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです。」

あ、やばい。黒板には……………

『候補1 写真館「秘密の覗き部屋」』

『候補2 ウエディング喫茶「人生の墓場」』

『候補3 中華喫茶「ヨーロッパ」』

「……………補習の時間を倍にしたほうがいいかもしれんな。」

俺らの時が、一瞬、止まった気がした。

そんなことされたら優子と一緒に帰れないじゃないかあ！！！！

「西村先生、違います！ それは明久が適当に書きちゃったものであつて決して俺らがバカな訳ではありません！」

「ちよつと、ナオ！僕を売るの！？」

「当たり前だ！」

「真顔で言わないでよ！」

『『『浅斬の言う通りです！決して俺たちが馬鹿なわけではないです！』』』

「ちよつと、皆まで、」

「馬鹿者！ くだらん言い訳をするな！」

ちっ！ さすがに西村先生には敵わないか……

「先生はバカな吉井を選んだこと自体を馬鹿な行動だと言っているんだ！」

なんて人だ……明久を売ろうとした俺が言うのもなんだけどな。あ、明久……そんなに泣くな。畳がビショビショになってるぞ。

「全くお前らは……。稼ぎをだして教室の設備を向上させようとは思わんのか？」

『『『その手があつたか！！』』』

え？ そんなこととしてオツケーなの？

『それで、どうする？ 利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が。』

『それだと、運営委員会の見周りで、営業停止処分を受ける可能性もあるぞ。』

お、皆にもやる気が出始めてきた。

『中華喫茶ならハズレはないだろ。』

『それだと真新しさに欠けるな。汚い所為であまり人が来ない旧校舎だと、その特徴の無さは致命的じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった2日の清涼祭じゃ、儲けは出ないんじゃないか？』

『リスクが高いからこそ、リターンも大きいはずだ！』

「お、おい。お前ら、ちょっと落ち着……………」

『お化け屋敷にしよう!』

『簡単なカジノを作ろう!』

『焼きとうもろこしを売ろう!』

駄目だ。西村先生が言ってからみんなの団結力が壊れた。

「はいはい！ ちょっと静かにして!」

島田の一喝で皆が静かになる。坂本が実行委員に選んだ理由がちょっとわかったかも。

「ほらっ、ブーブー言わないの！ この3つの中から1つだけ選んで手を上げる事！ 良いわね!？」

多少強引だが皆も纏まっている。坂本の人選のセンスはかなりのモノだな。

「それじゃ、写真館に賛成の人！ はい、次はウェディング喫茶！ 中華喫茶!」

多少の差はあったが、Fクラスの出し物は中華喫茶に決定した。

「Fクラスの出し物は、中華喫茶にします！ 全員、協力するよう  
に!」

「それならお茶と飲茶は俺が引き受けるよ。」

「……………(スック)」

厨房担当を引き受けたのは須川と・・・ムツツリー二!?

「二人は料理が得意なのか？」

「任せておけ。提案したぐらいだ。自信くらいある。」

「・・・・・・紳士の嗜み。」

紳士は中華料理を嗜むものなのか？それとちょっと危険な匂いがする・・・・・・

「じゃあまず、厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところを集まってね。」

えーと、俺も自分の好きなところに・・・・・・

「それじゃ私は、厨房班に・・・・・・」

「ダメだ姫路さん！ 君はホール班じゃないと!!」

「そうだ姫路！ 二人しかいない女子はホールに回って貰わないと！」

行く前に姫路を止めなきゃ！ 俺らと客の命が！危ないところだった。このまま放っておいたら食中毒で大変なことに！心なしか寝ている坂本も小刻みに震えているような・・・・・・

「え？ 吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

無邪気な化学兵器製造機は俺たちに問いかけてきた。

拙いな、お前の料理が化学兵器だって言うわけにはいかないし・・・

「あ、えーと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接したほうがお店として利益が痛っ！ み、美波！ 僕の背中は大バツクじゃないよ!?」

姫路を止めるために言った一言で明久は自分の寿命すら止めようとした。

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ！」

俺は厨房班にしよう。姫路が絶対に入ってくられないように……  
……な。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん、適任だと思う。」

お前、デリカシーないな。

「それなら、ワシも厨房にしようかの。」

「秀吉、何を馬鹿なことを言ってるのさ！ そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃあっ！ み、美波！ 折れる！ 背骨が！ 僕の命が！」

プラス、大馬鹿だ。台詞のチョイスを完璧に間違えている。

「ウチもホールにするわ。」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

この調子で大丈夫か？ 清涼祭。

## アンケート&amp;アンケート(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 2

・この学園の出し物についての不信感が高まる - 1

・それでもやはり清涼祭への気持ちが高まる + 2

現在の青春ポイント合計 - 1

## アンケート&amp;アンケート

### 清涼祭アンケート

第一問 学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか?』

### 姫路瑞樹の答え

『クラスメイトとの思い出』

### 教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物がいちかも知れませんが。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

147

### 土屋康太の答え

『Hな本(訂正) 成人向けの写真集』

### 教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

### 吉井明久の答え

『カローリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

浅斬直貴の答え

『Fクラスを生き残る生命力』

教師のコメント

なんとも言えませんが・・・頑張ってください。

姫路瑞樹の答え

『家庭用のエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

浅斬直貴の答え

『可愛かったらなんでもありだろ！そもそもミニスカって言うのは  
だな  
』

教師のコメント

あなたはこんなキャラでしたか？自分を見つめなおし、もとのあなたに戻ってきてください。アンケート云々はその後でしょう。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品をたもつ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを

』

教師のコメント

裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久のコメント

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

第三問 学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのよう

ぶべきですか？

【？可愛らしさ ？統率力 ？行動力 ？その他（ ）】  
また、そのときのリーダーの候補も挙げてください  
『

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞樹&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞樹（訂正）、木下秀吉（訂正）、島田美波』

教師のコメント

用紙に付いている血痕が気になります。

浅斬直貴の答え

『【？可愛らしさ】 候補……木下優子』

教師のコメント

確かに木下さんは気品もありますし、そういったことにもちゃんとできる子でしょう。

君が冷静になってくれて助かります。

坂本雄二の答え

『【?その他(結婚相手)】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

## アンケート&amp;アンケート(後書き)

アンケートって難しいですね。

なかなか思いつかないので大変でした。

次はちゃんと14話行きますね。

## 第14話 お婆ちゃんの知恵袋！

「アキ、浅斬、ちよっといい？」

放課後、俺と明久は島田に声をかけられた。妙に神妙な面持ちだな。どうしたんだ？

「なんの話じゃ？」

木下も俺たちの話に混ざってきた。

「なんでも島田が俺たちに頼みたいことがあるらしい。」

島田は木下も含めた五人で話し合いを始めた。

「坂本を何とか引つ張り出せない？ あんた達が頼めば動いてくれるでしょ？」

「僕達が頼んでも雄二の考えは変わらないと思うよ？」

「俺も明久の言う通りだと思っけどな。」

「だってあんたたち愛し合ってるんでしょ？」

「「なんでだ!!」」

この話の流れでどうしてそこに行くんだ！おかしいだろ！

「誰が雄二なんかと！ だったら僕は、断然秀吉の方が良いよ！」

「……あつ、明久？」

木下が動きを止めた。

「そ、その……お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われてもワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ、年の差とか……」

「年の差以前に性別が同じということに気づけ！」

……

「全く……んで？ どうしてそこまで成功させたいんだ？」  
「……本人には誰にも言わないでほしいって言われてたんだけど、事情が事情だし……けど、秘密の話だから、誰にも言わないでね？」

一瞬の間が空いた。そして島田が話をはじめた。

「瑞希が、このままだと転校するかもしれないの……。」  
「ほえ？」

ピーーーーー……！！！！ ボンツッ！

「む、拙い！ 明久が処理落ちしかけておるぞ！」

「このおバカ！ 突然の事に弱いんだから！」

「落ち着け！ まずは手の角度を45度にしてちょっと強めに頭を叩けば……」

「壊れかけのテレビじゃないんじゃないぞ!？」  
「てやつ!?!?!」

パソコン!

「う、うう………」

「嘘! 戻った!」

「お婆ちゃんの知恵袋、その一だぜ!」

「明久、大丈夫か?」

「秀吉………、モヒカンになった僕でも、好きになってくれるかい………」

「駄目よ! データが飛んじやったわ!」

「くっ! ならば知恵袋、その二! ロケットパンチ!」

「ごはあつ!」

「これで大丈夫だ!」

「もはや、ただ殴っただけじゃぞ!」

「ナオ………君って容赦ないね。(がくっ)」

「あ、明久? しっかりしろ! あきひ……カムバアアアアアーツ  
ク、明久あああ!?!?!」

「ごめん、ちょっと取り乱した。」

ああ、本当だ。戻すの大変だったんだぞ？

「全く、迷惑ばっかかけやがって」

「美波！ 姫路さんが転校って、どういう事さ!？」

「人の話を聞けえっ！」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は、転校しちゃうかもしれないの」

無視か、このやろう。まあそうだよな。

「島田。姫路の転校の理由って、もしかしてFクラスが原因なのか？」

「そうなのよ。正確にはFクラスの問題なんだけど。」

「まあ、この設備と姫路の体調をみればわかるだろ。」

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたのじゃな。」

木下が言っていることにも納得だ。

「うん。瑞希も抵抗して召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおうとか考えているみたいんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと。」

Fクラスはバカの集まりだからというのが転校を勧められる理由の一つだろう。姫路の行動も間違っではないが、やはりそれ以上に姫

路の健康の方が問題になるはずだ。

「……………アキはその……………瑞希が転校したりとか嫌だよね……………?」

島田が明久に言う。まあ、普通に考えたらそうだよな。

「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉であつても！」

「明久……………俺は？」

「あつ、ごめん。もちろんナオもだよ！」

忘れられたのがちよこつとショックだったが明久はやっぱりいいやつだ。

「そっか……………うん、アンタはそうだよね！」

島田も嬉しそうに頷く。名前を挙げたヤツ以外でも明久は同じことを考えているはずだ。

坂本は……………? どうだろうな。

「そうと決まれば明久、坂本をなんとしてでも協力させるぞ？」

「うん、わかつたよ！」

俺たちは坂本を焚きつけるために行動を起こした。

第15話 本音？冗談？どろっちだ！（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 1

・知恵袋発動により明久を蘇らせることに成功 + 2

・坂本を焚きつけるためにいい事を思いつく + 1

現在の青春ポイント合計 + 2

第15話 本音？冗談？どくつちだ！

ブルルルル……

俺たちは坂本を呼び出すために、電話をかけていた。

『はい、もしもし。』

「あ、雄二ちよつと話が、」

『明久か、ちようどよかった。悪いがオレのカバンを後で届けにーげつ、翔子……！』

ブツツ！ ツー、ツー、ツー……

何だ今の……？

「坂本はなんて言ってた？」

「えっと、“鞆を頼む”とか“げつ、翔子！”って言ってた」

なるほど、そういうことか。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているんじゃない。あれはああ見えて、異性には滅法弱いからの」

木下が俺に代わって説明する。最近、坂本の姿が見えなくなるのはその所為だと思われる。

「そうすると、坂本と連絡を取るのには難しいわね。」

いや、そうでもないと思うぞ……

「そうでもないさ。むしろ、これはチャンスと見ても良い。」

明久が俺と同じことを考えていたようだ。

「明久……楽しくいこうや。」（ニヤリ）

「そうだね、ナオ。」（ニヤリ）

「あんたたち……今すごい悪い顔してるわよ。」

「ワシでもあの顔は難しいぞい。」

こうして俺たちは坂本を焚きつけるために行動を起こしたのであった……

俺たちは作戦を実行するため、坂本を探していた。

「じゃあ、こっちは俺が探すから明久は向こうをよろしく。」  
「わかったよ、ナオ。」

作業の効率を上げるため俺は体育館外、明久は体育館内を捜すことにした。

「さてと、どこから……」

坂本を探そうとした瞬間だった。

「先生！覗きです！変態です！」

明久と別れてから五分も経たないうちにそんな声が聞こえてきた。

この声は……優子？

声のした方（明久の探していた方）に走っていくと優子が更衣室を指差して叫んでいた。

「優子！？ どうした！」

「ナオ！ 吉井君と坂本君が覗きを！」

「はあっ?!」

指を差しているほうを見ると、先ほど分かれた明久と探していた坂本がいた。

「お前ら何してんだ……」

「ナオ！ これには深い訳が、」

「明久、逃げるぞ！ 鉄人が来た！」

坂本がそういうと向こうの方から西村先生がマッハの速度でダッシュしてきた。

「吉井！ 坂本！ またお前達か！」

「逃げるぞ！ 明久！」

「ごめんね、ナオ！ 後で事情を話すから！」

そう言つて二人は窓から消えていった。

「何なのよ、まったく……………」

優子が言つた。全くだ。

「そういえば、覗かれたみたいだったけど大丈夫なの？」

「えっ？ うん、うん。更衣室に入ったら見つけて……………ビツクリして声出しちゃった。」

「そうなんだ。よかったあ。」

覗かれたつて言うから着替えている所かと……………

「心配してくれてありがと。」

「ほへっ？」

やばっ。不意に声かけられたから変な声出ちゃった。

「ふふっ……………」

「あ、あはは……………」

なんだ、この感じ。早く抜け出したい……………

「じゃ、じゃあ俺は教室に帰るな。」

「あ、うん。またね。」

そろそろ作戦の頃だし、教室に戻らないと。  
その前に……………

「あ、そうそう。」

「何？」

「体操服、似合ってるぞ。」

「なっ……………!!」

さっき優子を見て思ったことを言っておこう。

「今なんでそんなこと言うのよ！ バ、バカ！」

「あははっ！ また後でな！」

さて、冗談はこの辺にしてさっさと教室に戻るか。

こうして俺は教室に戻り、作戦を遂行したのだった……………

「そうか。姫路の転校か……………」

教室に戻った俺たちは坂本に事情を話した。

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな。」

「不十分？どうして？」

明久が疑問を投げかける。

「姫路が転校を勧めた要因は恐らく三つほどある。」

そう言つて坂本は指を立てて見せた。

「まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したらなんとかなるだろう。」

まあ、そういうことだろうな。でも他には何が？

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ。」

「一つ目は道具で二つ目は教室自体ってこと？」

「確かに。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善できそうにないな。教室全体の改修となると学校側の協力が必要になるな。」

坂本が恐らく言おうとしていたことを俺が言う。

「そして、三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない教育環境だ。」

なるほど・・・そういうことか。確かに教室自体が綺麗でも、クラスメイトが駄目なら転校の理由には充分だ。

「参ったね。随分と問題だらけだ。」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しい

のう。」

明久と秀吉が不安そうに言う。

「そうでもないさ。二つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろ？」

そういえば朝、そんなことを言っていたような気もする。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見せ物にされるだけみたいで嫌だけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「翔子が参加するようなら優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう。」

それなら安心だな。A代表はかなりの強さだし、本気でこられたら俺でも危ないだろう。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどうするの？」

二つ目の問題は教室の改修。これは喫茶店だけでどうにかなる問題じゃない。

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

雄二は当然のように言った。それだけでいいの？

「それだけ？ 僕らが学園長に言ったくらいで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とは

言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ。」

本当か？ 坂本はそう言うけど学園長は捻くれ者で有名ならしいぞ。

「そうと決まれば早速学園長室にいきましょうよ。」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人が来たら俺達は帰ったと伝えてくれ。」

そういえばさつきも追いかけてたな。

「うむ。了解じゃ。鉄人をついでに霧島翔子にも見かけたらそう伝えておこう。」

「アキ、しっかりやってきなさいよ。」

「オッケー。任せといてよ。」

こうして俺たちは学園長室に乗り込んで行くのであった……………

**第15話 本音？冗談？どろっちだ！（後書き）**

更新遅れてすみません。

色々と立て込んで・・・

これから頑張って更新していきますので応援よろしくです。

第16話 優勝って響き・・・なんかいいね(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 2

・友人の覗き現場を目撃 - 1

・優子の体操服姿を目撃 + 3

現在の青春ポイント合計 + 4

## 第16話 優勝って響き……なんかいいね

『……賞品の……として隠し……』  
『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

新校舎の一角、学園長室の前に着くと扉の向こうからなにやら不穏当な会話が聞こえてきた。

賞品？ 如月ハイランド？ なんのことだろう。

「どうした、ナオに明久。」

「いや、何か中から聞こえるんだけど。」

「話し声か？ つまり学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。」

坂本……そういうのは相手の立場を考えてだな、

「失礼しまーす！」

つて聞けよ！

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ。」

はあ……すみませんね、なんか。

でも、初対面でいきなりガキどもって言うのは少々そちらも失礼じゃないのかな？

「やれやれ、取り込み中だと言うのにとんだ来客ですね、これでは

話を続けることもできません。……まさかあなたの差し金ですか？」

不穏な会話の相手は教頭の竹原さんだったようだ。

俺、あんましこういうタイプの人って好きじゃないんだよね。特に目の辺りとか。

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？ 負い目があると云う訳でもないのに。」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意の様ですから。」

怪しい会話が続く………って俺たちまだ部屋にいるんですけど？

「さっきから言っているように、隠し事なんて無いね。あんたの見当違いだよ。」

「………そうですね。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう。」

そういうと、教頭は部屋の隅を一瞥し、

「それでは、この場は失礼させていただきます。」

踵を返して部屋を出て行った。ふーむ………さっきの視線がなんか怪しいな。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

ガキガキって、うるせーな。切れるぞ！ ババアっ！

「今日は学園長にお話があつて来ました。」

俺は心の中で罵つたのに……坂本はちゃんと喋ってる。……坂本つて敬語使えたんだ。ちよつとビツクリ。

「私は今忙しいんだよ。学園の経営に関する事なら教頭の竹原に言いな。それとまず名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えときな。」

この常識人の俺がこんなババアに説教されるとは夢にも思わなかつた。

「失礼しました。オレは2年F組代表坂本雄二、こつちは同クラスの最高成績者の……」

「浅斬直貴です。」

「知ってるよ。なんせ名前の書き忘れてFクラス行きという無様な大失態を犯したバカだからね。」

「無様で悪かつたですね。（怒）」（ニコリ）

「それでこつちが……二年を代表するバカです。」

わあゝ凄くわかりやすい自己紹介だね！ 明久だつて事が一瞬でわかつたよ。

……わかつてしまつのが凄く悲しいけど。

「ほう……そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と浅斬と吉井かい。」

学園長ですら一発でわかつてしまつほど、この学園での明久の認知度はとても高いようだ。

「ちょっと待って学園長！ 僕はまだ名前を言ってませんよね！？」  
「明久、あきらめろ。お前は学年一のバカだ。」

終わってる。二つの意味で。

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじゃないか。」

「ありがとうございます。」

「礼を言う暇があったらさっさと要件をいいな、ウスノ口。」

さきほどまで礼儀がどうたら言っていた人とは思えない台詞だな。

「分かりました。」

こうして坂本は交渉を始めていった……のだが。

「……要するに、隙間風が吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソバア、というワケです。」

交渉と呼ぶには相応しくない単語を使いまくって、坂本は話を終えた。

こんなんで本当に教室の改修をしてもらう気があるのか？

「あの、学園長……？」

明久が心配そうに声をかけている。というか心配しない方がおかしい。

そのとき学園長がボソッと何かを呟っていた。

「よしよし、お前たちの言いたいことは良く分かった。」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね？」

なるほど。ここは曲がりなりにも教育機関のようだ。これで姫路たちも安心して授業が、

「却下だね。」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨てて来よう。」

「いや、明久。そんなことをしたらコンクリが可愛そうだ。そのまま捨てよう。」

「アンタら学園長を何だと思ってるんだい？」

「……お前ら。もう少し態度には気を遣え。」

明久。しまった！ って顔されても困る。

俺も同じ様なこと言っちゃったけどな……

「まったく、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア。」

「そうですね。教えてください、ババア。」

「そつだ。理由言えよババア。」

「お前たち本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

「……すみません。……って言ったの俺だけ!？」

お前らも謝れよ！　なんか俺だけバカみたいじゃん！

「理由も何も、設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタぬかすんじゃないよ、このなまっちょろいガキども。」

「確かにそうですね、僕達はともかく体の弱い生徒が……」

「……と、いつもなら言っているんだけどね。可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなり相談に乗ってやるうじゃないか。」

なるほど、交換条件というわけか。うん？　坂本が黙り込んでしまったぞ。どうしたんだらう。

「その条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ。」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

優勝賞品とは、“賞状”と“トロフィー”と“白金の腕輪”。そして副賞として、如月グランドパークプレオープンプレミアムペアチケットがあるらしい。

準優勝者にも賞品はあり、こちらには“賞状”と“召喚獣限定解除装置”が貰えるらしい。

こちらにも、プレオープンチケットは授与される。

チケットの話が出た瞬間、坂本の態度が急変した。

「な、何！？ プレオープンチケットだと！？」

坂本が声をいきなり張り上げた。

「どうしたのさ、雄二？」

やばい、やばい、やばいって連呼してるけど大丈夫か？

「そう。そのチケットが問題なのさ。」

坂本の声を無視し、話を進めていく学園長。

「この副賞のチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ。」

「回収？ それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか。」

「そうできるならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳にはいかないだよ。」

「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから。」

全く持つてその通りだ。

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！ それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね。」

「で、悪い噂ってのは？」

「如月グループは、如月ランドパークに1つのジnkクスを作ろうとしているのさ。“ここを訪れたカップルは幸せになれる”ってジnkクスをね。」

「ジnkクス？ ……どうやってです？」

「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコーディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてもね。」

「な、何だと!!!!」

「さつきからどうしたの？ 雄二。」

「慌てるに決まってるだろうが！ 今ババアが言った事は“プレオ―プンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に“結婚させる”ってことだぞ!?”」

「別に言い直さずとも、わかるけど？」

「その2組のカップルを出す候補が、我が文月学園つてわけさ。」

文月学園は、数多くのスポンサーが存在する。如月グループも、そのスポンサーの1つだそうだ。

「くそつ、うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もたっぷりだからな。学生から結婚まで行けばジंकクスとして申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか。」

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか。」

そうはいつでも坂本の慌てぶりを見たら……頭悪そうにしか見えん。

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知ってるんだから、行かなきゃ済む話じゃないか。」

「……………絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる……………。行けば結婚、行かなくても“約束を破ったから”と結婚……………。俺の、将来は……………!!」

「明久。坂本にとつたらこれは死活問題だ。勝たなきゃ……恐らく坂本に明日は来ない。」

虚ろになる坂本を横目に、俺は話を続けることにした。

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視してうちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ。」

「つまり、交換条件ってのは」

「そうさね。『召喚大会の優秀者賞品』と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか。」

続けざまに学園長が言う。

「無論、優勝者や準優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ？ 譲って貰う事も不可だ。アタシはお前たちに召喚大会で優勝、準優勝しろ、と言っているんだからね。」

なんて難しいんだろう。人数も一人足りないし。

「じゃあ僕たちが決勝進出したら、教室の改修と設備の向上は約束してくれるんですね？」

あ、明久……やる気なのか？ どこまで友達思いなんだ……

「何を言っているんだい？ やってやるのは教室の改修だけで、設備についてはうちの教育方針だ。変えてやる気はないよ。」

それにしても、このババアは……本当に教育者か？ でも、まあこんな事で設備を変えては、他のクラスに申し訳ないだろう。

そんなことをしてはこの学校の存続自体危ういだろう。

「ただし、清涼祭の利益でどうにかするのは別さね。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいい。」

なるほどな。そのくらいなら別にオーケーということか。

「……わかりました。この話、引き受けます。」

「そうかい。それなら、交渉成立だね。」

「ただし、こちらからも提案がある。」

坂本が一つ、提案を考えているようだ。

「何だい？ 言ってみな。」

「召喚大会は2対2のタッグマッチ。形式はトーナメント所為で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている。」

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい。」

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか。」

ふむ、そこまで協力してくれるのか。それならこの二人でもいけるかな？

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、決勝戦まで進めるんだろっかね？」

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

坂本の不敵な笑み。 試召戦争のときにもこんな顔をしていたはずだ。

「絶対に優勝して見せます。 そっちこそ、約束を忘れないように！」

明久もやる気だけは一人前のようだ。

「それじゃ、ボウズども。 任せたよ。」

「」「おうよっ！！！」

こうして俺たちの清涼祭は幕を開けたのだった……………

……………その前に俺は一体誰とペアを組めばいいんだ？

第17話 知恵袋、再び（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 4

・友人の礼儀の無さに驚く - 1

・学園長の礼儀の無さにも驚く - 1

・優勝賞品に対する興味がわく + 1

現在の青春ポイント合計 + 3

## 第17話 知恵袋、再び

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね。」

「ホント、いつもはただのバカなのにな。」

「自分の人生かかってたらそのぐらいするだろ、普通。」

清涼祭初日の朝。

俺らの教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ。」

教室内に設置されているテーブル。実は、俺らの教室にあるみかん箱だったりする。巧く積み重ねて小綺麗なクロスをかけることで、汚い箱は立派なテーブルに変身していた。

「あ、それはさつき木下が作った。どっかからクロス持ってきてこう、パーっと。」

「さすが秀吉だね。」

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ。」

クロスを捲ると、そこには汚い・・・もとい趣がある箱が。

え？ お世辞を言っても無駄？ そんなこたあない・・・はず。

「でも、これを見られたら店の評判はガタ落ちね。」

島田がもつともらしいことを言ってきた。確かにこれはなんとか出来るレベルじゃない。食品を扱う店としては最悪だ。

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸のうちにしまっておいてもらえるさ。」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、きつと。」

「本当に大丈夫か？ 何か営業妨害対策を練っておかなきゃ駄目なような、」

「わざわざ成績最低のFクラスにそんな妨害が来ると思う？」  
「確かに……………」

明久にしてはまともな……………いや、いい意見だったな。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

まあ、学園祭のレベルとしては充分の完成度。これなら成功してもおかしくない。

「……………飲茶も完璧。」

「おわっ。」

ビビった。かなりビククリした。

音もなく背後に立つムツリーニ。その手には皿の上にいる、飲茶が。

「ムツリーニ、厨房の方は準備OKか？」

「……………(コクコク)(ススツ)」

どうやら味見をしてほしいようだ。よし遠慮なく頂こうじゃないか。

「うわぁ……………美味しそうだな……………」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの。」

姫路、島田、秀吉が手を伸ばし、作りたてホカホカの胡麻団子を頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう。」

と、絶賛。やっぱり女子だな。甘いものには目がないな。秀吉を除く。

「明久、俺らも貰おうぜ。」

「それじゃ、頂こうかな。」

「……………（コクコク）」

ムツツリーニが残った団子を俺らに差し出す。楊枝がないので、ちよっと下品だが素手でたべよ。

俺が手を伸ばして胡麻団子を一口かじったとき、明久が感想を言うてくれた。

「ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても————んゴバっ。」

明久の口からありえない音が、ってこれはもしかや俺もやばい————んゴバっ！

そして俺も明久と同じように、夢を見た。ああ、あの頃は無邪気に

はしゃげて、楽しかったな。あ、死んだ爺ちゃんが川の向こうで手を振ってる。

「今からそつちに逝くから、ちょっと待ってね、じーちゃん。」

「拙いよ！ ナオが逝きかけてる！ 戻ってきて、ナオ！」

「うーん……あなたのために歌うことが、こんなにも辛いことだとは。」

「起きて！ 起きてよナオ！ 某世界征服組織の幹部みたいな寝言を言っていないでさ！」

「あ、明久……」

「戻ってきたんだね！ ナオ！ 僕、心配し」

「皆に夜中ご飯あげるから、皆怪物になっちゃったじゃないか！」

「それは映画のグ○ムリンでしょ！？ 大丈夫！？」

「……うーん……まだ駄目かも……もうちよい寝かして。」

気持ち悪い……うえ。

「うーっす。戻ってきたぞー。」

あ、坂本が帰ってきた。く、来るんじゃない！ 坂本！

「あ、雄二。おかえり。」

「ん？ なんだ、美味しそうじゃないか。どれどれ？」

そう言くと坂本は何の躊躇もなく、明久の食べかけの殺戮兵器を、食べた。

「……たいした男じゃ。」

「雄二。キミは今、最高に輝いているよ。」

「？ お前らが何を言っているのかわからんが……ふむ  
ふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛  
すぎる味わいがとっても んゴパっ」

あ、なんか既視感。<sup>デジャブ</sup>

バタっ。ゴン！

さ、坂本が……。俺もあんな感じで倒れたんだろうか？

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

明久、坂本の目がどこを見ているのか分からないくらい虚ろなん  
だ。

「ふっ。何の問題も無い。」

床に突っ伏したまま、坂本はそう返事してきた。いや、かなり拙い  
展開になってきたような……

「あの川を渡ればいいんだろう？」

それはきつと三途の川だ。

「坂本！ その川は拙い！ 渡ったら戻れなくなっちゃっ！」

まさか、半分であるの威力だとは……。

姫路、恐るべし殺戮化学兵器。……って言ってる場合じゃ  
ない！

「え？ あれ？ 坂本君はどうかしたんですか？」

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫。」

島田たちは今までトリップ状態だったため、現状に気付かない。幸運なのか、不幸なのか。わからない。

「ちょっと足が攣ったみたい。おい、ゆーじー、おきろー。」

明久がおどけた口調で姫路たちに話しているが生死は五分五分といったところか。

「明久、言い訳考えておけ。」

「え、ナオ？」

「ここは、俺に任せろ。」

笑って明久に言うのが正直、まだ腹の中で起爆剤が燻っている状態だ。俺も色々と拙いが、ここは任せてもらおう。

「わかったよ。」

「お婆ちゃんの知恵袋、その351！ スクリューハイラルロケット

ト

「ナオ！ 長いよ！」

「 エクスプロージョン！！！」

ドカバキゴシャ！ フィーン……………ドンガラガッシャーン！！！！

「うげごはあうっ！ ゲホゲホっ！」  
「戻ったぞ！」

よし、これでもう大丈夫なはずだ。

「雄二、足が攣ったんだよね？」

「足が攣った？ バカを言うな！ あれは明らかにあの団子のー  
ー」

（・・・もう一つ食わせるぞ。）

「足が攣ったんだ。運動不足だからな。」

（・・・明久、いつかキサマを殺す。）

（・・・上等だ。殺られる前に殺ってやる。）

笑顔の内に不穏当な会話が発生中。こんな二人は召喚大会のペアである。

こんな調子で大丈夫なのか？ こいつら？

そういえば俺のペアの紹介がまだだったな。

ふふふ、俺のペアはなんと・・・秘密だ！

「次回に乞うご期待！」

「・・・ナオ。どうしたの？」

「いや、なんでも？」

第18話 ひとり言は人に見られてはいけない(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 3

・ 姫路の特製胡麻団子を食べる - 3

・ 夢の中、懐かしき人たちとの再会 ± 0

・ 知恵袋、使用により坂本の命を救うことに成功 + 1

現在の青春ポイント合計 + 1

## 第18話 ひとり言は人に見られてはいけない

「あのさ、優子。」

「何？どうしたの？」

「お願いがあるんだ。」

「お願いって……何？」

「一緒に出てくれないか？召喚大会に。」

「え？……私と？」

昨日の帰り道、俺は優子に召喚大会のペアになってくれないか頼んでみた。

なぜなら、ペアになってくれそうな奴が優子しかいないからだ。

俺って友達少ない、とか自己嫌悪に陥っていると涙が出そうな台詞を聞いた。

「ごめん。私、代表と組むことになってるから……」

「まじか……」

優子とならいけると思ったのにいゝ。

まあ、しょうがない。ここは諦めて、他の、例えば須川とかに頼んでみるか。

「ナオも召喚大会に出るの？ ナオも副賞目当て？」

「うん？ まあ、そんなところだな。ところで“ナオも”ってことは、そつちも？」

「そうよ。代表が彼氏と行くんだってさ。」

なるほど。坂本の死のカウントダウンは既に秒読み段階だったってことか。

危なかったな……このことに気付かなければ結婚は確定だ。

「ナオ、副賞目当てってことは誰かと行きたいの？」

「え？ えー、と。」

拙い。この“計画”については誰にも知られてはいけなくて、坂本が念を押していたな。でも、学園長に渡すだけだし、誰と行こうというわけでもない。でも作戦は作戦。優子にも同じことを言うわけにはいかない。

「なに？ 言葉に詰まるってことは、私に何か隠し事でも……」

「いや！ そういう訳じゃないんだ！ ええーと、あ、相手は……」

お、思いつかん！ いやあー！！ 誤魔化せるかどうかわからない！  
どうすれば……

「あ、相手は」

「相手は？」

「ひ、秀吉……」

うわあー！！！！ 適当に言っちゃった！！！！ てか、嘘だつてバレ  
バレだろ！

「そんな！ どうして！ 秀吉なの……」

「嘘！ ごめん！ 本当は違うから……」

でまかせで言ったとはいえ、これじゃまるで同性愛者みたいじゃないか。

というか、秀吉は男だぞ？

「じゃあ本当は誰なの？」

「言えない……これだけはどうしても無理。」

ここで言ってしまったら、明久たちに示しがつかない。優子には諦めてもらおう。

「わかった……一緒に出てあげるわ、召喚大会。」

「うえ?! いきなりなんで!？」

「そのかわり、準優勝以上だったら誰と行くか、教えてね。」

「なにい!？」

なんて奴だ! ちょっとお断りして、

prrrrr、ピッ!

「あ、代表? 召喚大会のことなんだけど私とペア変えてもらっていい?」

『……うん。別にいい。でも、いきなりどうしたの?』

「ナオがね、一緒に出ないかあー、って言ってきてさ。出てあげようって思ったの。」

『……わかった。他の子を探す……そっちも頑張ってるね。』

「うん。ホントにごめんね? ありがと、じゃあねー。」

……ピッ。

「だってさ。」

「だってさ、じゃねえよ！」

うがぁ〜！ 早急に手が打たれてしまった！

仕方ない。出ることにしよう。まったくもう……。

「まあ頑張ろうな、優子。」

「うん！」

こうして、俺は優子と召喚大会に出ることになったのであった。回想終わり。

「というわけだ！」「だから誰と話してるの!?!」

いや、悪い悪い。ちよっとね〜。

第19話 ヒーローが放つ必殺技って何で最初に撃たないんだろっ？（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 1

・優子と召喚大会に出ることになる + 2

現在の青春ポイント合計 + 3

## 第19話 ヒーローが放つ必殺技って何で最初に撃たないんだろう？

「喫茶店はいつでもいけるな？」

「バツチリじゃ。」

「……お茶と飲茶も大丈夫。」

一抹の不安がよぎる。あの超高威力兵器が混ざっていないか、とおそらく、作られたのはあれだけのはず。うん、きつとそうだ。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリー二に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな。」

「そうだったな。俺も優子と待ち合わせをしてから行くか。」

「なんだ、ナオ。結局ペアは木下の姉か。やることはしつかりやっているじゃないか。」

「どーも。そっちはどうですか？」

「思い出したくもない……。というか記憶から消したい。」

「ははは……まあ、幸運を祈るよ。」

俺にはどうにも出来ないからね。つっても、この作戦は俺にもかなり重要な役回りがあるから勝たないわけにはいかない。だから、なんと少しでもこいつらには勝ってもらわなければいけないのだ。

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あってね。」

「もしかして、賞品が目的とか……？」

「うーん。一応そういうことになるのかな。」

島田の探るような視線が痛い。意外に勘が鋭いな……まあ、詳しく言つと賞品と設備の交換だけだな。

そういえば、白金の腕輪って賞品があるらしいけどあれはどういうものだ？

召喚獣限定解除装置の方は、確か召喚の度に召喚獣に一つだけ能力を付けられる指輪というものだった。

能力はSpeed、Power、Defense、Feedback（以下略）。

他にも沢山の能力を使えるらしい。Fの能力に至っては明久と同じようにフィードバックがくるらしい。

意味あるのか？ と思っただけどババア曰く、『観察処分者の気持味が味わえるなんて滅多にないからね。いい機会だろう』とのことだ。

「……………誰と行くつもり？」

「ほえ？」

島田が明久に聞いて……………ってこれは攻撃色！

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っただけですか？」

「だ、誰と行くって言われても……………」

行く相手もないもんな、明久は。じゃなくて、作戦をバラす訳にはいかないし、どうする？

「明久は俺と行くつもりなんだ。」

答えに詰まっていると、すかさずフォローが入る。

「え？ 坂本とペアチケットで、『幸せになりに』行くの……………」

「？」

「………つてももの凄い誤解されてる！」

「俺は何度も断っているんだがな。」

え？ 何？ 裏切り？

「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が………」

「ちよつと待て！ その『やっぱり』って言葉もおかしいが前提条件が間違ってるぞ！ それに秀吉は男だ！ あと秀吉も寂しそうな顔しない！」

お前らはだから色々誤解されるんだろう！

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持ったほうが………」

「それができれば明久だつて苦労はしてないさ。」

「坂本！ 余計に誤解されるぞ！ フォローになつてねえし！」

バカだろ！ あとで色々大変な目に遭うぞ？

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久。」

「………くつ！と、とにかく、誤解だからね！」

「どこの小悪党だよ。」

そんなツツコミを残して、俺たちは教室を後にしたのだった。

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます。」

俺と優子は自分達の試合まで時間があるので、明久の試合を見ることにした。

「坂本君たちで、本当に勝てるのかしら？」

「明久は召喚獣の扱いに秀でているけど、坂本はどうだろう。」

代表と言っても所詮はFクラス、たかが知れている。でも、自分のこととなるとトンデモナイ力を発揮する奴だからな。

「あ、始まるよ。見ようよ。」

「お、ホントだ。」

中央のステージには明久たちと相手が立っている。

相手はBクラスの奴らだ。見た目だけなら明久が勝つとは到底思えない。

「あ、始まった。」

さて、どんな感じかな……って、うわぁー……。

不良が女の子をイジメているようにしか見えない。明久はまだしも、坂本なんて相手に攻撃すらさせてないじゃないか。

「坂本君ってさ、なんか危ないよね……………」

「否定はしない。でもなんであんなのにA代表が惚れたのかが理解できない。」

「同感だわ……………」

「あ、決着着いた。」

『……………勝者、坂本・吉井ペア。』

最後に相手を殴り飛ばし、Fクラスチームの勝利だ。でも、凄く不服そうだな……………って当たり前か。俺だってやだよ、あんなのと戦うの。

「ナオ、次はアタシ達の番だよ。早く行くっつ？」

「おう、そうだな。あ、そうだ優子。」

「? どうしたの?」

「最初の試合は手っ取り早く済ませたいから、俺に任せてくれないか?」

「いいけど、何するの?」

「見ればわかるよ、ほら行くっつ。」

「っ、っん。」

さて、行くか……………

ヒーーーーーン!!!

ガガガガガガ!!!

「グオー！」

「ギャー！」

「ナ、ナオ。凄すぎ。」

「俺も初めてみた。ここまで凄いとは思わなかった。」

自分でもビックリだよ。この威力はちょっとおかしいかもしれない。俺たちは一回戦の相手を一秒もかからずに倒した。正確に言うと、俺だけしか攻撃していないが。

「でも、ゴメンな？ あんまし出番なくて。」

「ううん。別にいいの。ナオ、とっても格好よかったよ。」

「あ、ありがと。優子。」

「う、うん。」

『俺らを無視してイチャついてんじゃねえよ!!!』

あ、ごめん。早々にやられてしまった駄キャラの二人。

『『チクシヨウ！ 出てきて一秒でやられる俺らってなんなんだよ！』』

駄キャラです。そんな駄キャラに使う時間すら惜しい。ので割愛。

「じゃあ、俺は喫茶店があるから行くな。」

「あ、うん。あ、良かったら後でAクラスの喫茶店にも来てね。」

「それなら、俺たちの所にも後で来てくれよ。飲茶美味しいから。」

俺は食ってないけど。

「わかったわ。じゃあ、後でね。」

「おう、じゃあな。」

そうして俺たちは自分の教室に戻っていった。

第19話 ヒーローが放つ必殺技って何で最初に撃たないんだろっ？（後書き）

一回戦でナオが何をしたのか、それは決勝戦でわかります。  
何が起こるかわかりませんね。僕は早く書きたくてうずうずしています。

次回の更新もお楽しみに。

第20話 喫茶店で中華料理って………（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 3

・ 姫路の料理が混ざってないか、不安がよぎる - 1

・ 準優勝の賞品に対して興味がわく + 1

・ 友人の戦闘をみて吐き気を覚える - 1

・ 対戦相手を瞬殺。爽快感を覚える + 2

現在の青春ポイント合計 + 4

第20話 喫茶店で中華料理つて……

俺が一回戦から教室に戻ると、なにやら教室の方が騒がしくなっていた。

『マジで……ねえ……机だな！……れで……食い物……』

なんだなんだ？ 騒がしいぞ。どうしたんだ？

ゴシヤあつ！

！ な、なんだ今の音は！

急いで教室に入ってみると、見覚えのない三年の先輩が教室の隅に吹っ飛ばされていた。

雄二の拳によつて。

「つて、何であつ！！」

「よう、ナオ。一回戦は勝てたか？」

「あ、うん。楽勝だったよ……つて違うだろ！ なんだこの状況！」

「落ち着け。営業妨害があったただけだ。よし、次の交渉術だ。」

『ふ、ふざけんなよこの野郎……！ 何が交渉術ふぎやあつ！』

あ、蹴っ飛ばした。それにしてもすげえ威力……中学生のとき喧嘩に明け暮れていただけあるな。それにしても、この二人は一体誰なんだ？

「そして“キックでつなぐ交渉術”です。最後には“プロレス技で締める交渉術”が待っていますので。」

「わ、わかった！　こちらはこの夏川を交渉に出そう！　俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！　お前、俺を売ろうと言っのか!？」

坊主頭の先輩に、モヒカンの先輩。

「変な頭だな。」

「何だと!!！」

やべ！　思わず口からポロっと……

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

あ、坂本が敬語をやめた。常夏コンビって……ネーミングセンスあるな。

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらっ。」

「そうか。それなら」

「おいっ！　俺もう何もしてないよな!？　どうしてそんな大技を」

あ、あれはかの有名なバックドロップの構え……!

「って、それはさすがにやりすぎ」

「げぶるあっ！」

「って本当にやりやがった！」

痛そう……リアルに痛そう。

「これにて交渉は終了だ。」

「お、覚えてるよっ！」

倒れた相棒を抱えて捨て台詞吐く先輩たち。坊主先輩の方は髪が少ないから直接ダメージが頭にきたはずだ。当分、営業妨害にも来ないだろう。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな。』

『折角美味しそうだったんだけどね。』

『食ったら腹壊しそうだからなあ。』

ちっ！ 客の雰囲気は怪しくなってきた。営業妨害の効果は高かったようだ。一人、席を立ってこの場から出て行くこととする人がいた。教頭の竹原先生だ。

なぜ教頭のような奴がこんなところへ？ 汚い………もとい Fクラスなのに。

『店、変えるか。』

『そうしようか。』

『あ、お客さん！』

一人目が席を立ったことから次々に客が席を立っていく。集団心理というやつだ。

こうなると悪評は嵐のように学校中に広がっていくだろう。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたの  
で、暫定的にこのような物を使ってしまう予定です。ですが、たった  
今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい。」

坂本がそう言うと、向こうから秀吉たちや男子数名が立派なテーブルを持ってきている。あれは……演劇部のテーブルか。これでお客の目の前でキッチンと衛生面について改善されれば、お客も悪評を流そうとは思わないだろう。

「そして、今からシェフ浅斬による中華料理が振舞われるとのことなので、皆様ごゆっくりとお楽しみ下さい。」

よし。ここで俺が中華料理を作って披露すれば、店の評判はうなぎのぼりに……って

「勝手に決めてんじゃねえぞ！ こらあっ！」

「お前、料理は得意だったよな？」

いや、得意だとか、そういう問題じゃなくてだな……

「頼む。ここは店の評判のためにも、一肌脱いでくれ。」

そういう問題じゃないんだ。俺は……

「……わかったよ。頼まれてやる。」

「ありがとう、ナオ。恩にきる。」

「そのかわり、後で色々と手伝ってもらうからな！」

ふふふ……。覚悟しておけよ。どうなっても知らないからな！

「何だ？ 手伝えることがあれば協力しよう。」

「ありがとさん。じゃあ俺厨房行ってくるよ。」

「俺もそろそろ行くか。おい明久、手伝え。」

「うん？またどこかに行くのか？」  
「ああ。」

坂本は悪そうな笑みを浮かべてこう言った。

「テーブル調達だ。」

厨房に入った俺は、ある一つの問題に直面した。

「分からん………。麻婆豆腐しか分からん……。」

俺のできる中華料理は麻婆豆腐だけだということだ。

「さっきは、勢いで言っちゃったけど俺、中華料理はあんましゃったことないしな……。」

うーっ！ どうしよう！ 何にも考えてなかった！

「そ、そうだ。ムツツリー二なら……。」

あいつさえいれば、何とかなるはずだ。

「おい。ムッツリーニ、お願いがあるんだけど。」  
「・・・今忙しい。」  
「？なにしてるんだ、ムッツリーニ？」  
「・・・製作中。」

そういうとムッツリーニは、持っていた中華服を掲げた・・・  
って

「なんで？」

「・・・企業秘密。」

「ふーん。でさ、お願いがあるんだけど、中華料理のレシピが欲しいんだけど見つけてくれないか？」

「・・・忙し」来週、俺のお気に入りの一品を渡そう」わかった。すぐに準備する。」

さすが、エロにおいては誰にも負けない、“ムッツリーニ性職者”なだけあるなよし。これで問題は無くなった。とりあえず麻婆豆腐だけでも作っておくか。

「それにしても・・・」

さつきから客が少なくなったような。気のせいかな？

「まあ、いい。さつきと作るか。」

風評については大丈夫かと思ったけど、意外に営業妨害が効いているな。でもこれからきつと回復していくだろう。さて、麻婆豆腐、作りますか。

## 第21話 物忘れが激しい俺だった(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 4

・喫茶店に営業妨害が入る。でも撃退する + 1

・変な頭の二人を目撃。ショックを受ける - 1

・中華料理を作る羽目になる。でも作り方知らない - 1

・ムッツリーニの協力により作り方の本を入手 + 2

現在の青春ポイント合計 + 5

## 第21話 物忘れが激しい俺だった

「ナオ、ちょっと良いかの？」

「ん？ どうした、秀吉。」

俺はムツツリーニから貰った参考書（どこから持ってきたんだ？）を元に、色々な料理を作っていた。  
五品目を作ったときに、秀吉から声をかけられた。

「ちょっと力仕事を頼まれてくれんかの？」

「力仕事？ 何をすればいいんだ？」

「この場所にテーブルがおいてあつての。とつてきて欲しいのじゃ。」

「別に良いけど、なんでこんな場所にテーブルを置いてあるんだ？」

「ああ、それはじゃな、雄二と明久が応接室からパクってきてそこに隠したからじゃ。」

「マジかよ。それで、今あいつらはどこに？」

「次は職員室そばの休憩室を攻めるそうじゃ。ワシはそっちに向かうからナオはそっちに行つて持つてきてくれんかの。」

「あまり気乗りはしないが、しょうがない。行ってやるよ。」

「おお、そうか。では頼んだぞい。」

まったくあいつらは大変だな………それに付き合わされる俺って一体何なんだよ。

そうこうしているうちに、二回戦の時間が始まりそうだったので、俺はその場所からテーブルを持つてくることにした。

「ん？ あれは確か・・・・・・・・」

俺がテーブルを運び終わった後、優子呼びにAクラスに来たときだった。Aクラスに見覚えのある二つの頭が入っていった。

確か・・・・・・・・常夏コンビだっけ？ どうしてAクラスに・・・・・・・・  
って客としてだよな、普通。

「それにしてもなんか怪しいな・・・・・・・・」

「どうかしたの、ナオ？」

「おうわっ！？」

不意に声をかけられた。その声の主は優子だった。

「いや、ちょっとな・・・・・・・・って優子、そのカツコ。」

「え？ あ・・・・・・・・これのこと？」

そついうと優子はその場で一回転して見せた。メイド服、だ。黒を基調とした生地、白のエプロンドレスがとってもよく似合っている。可愛い、と一言では表現できなかった。

「えっと・・・・・・・・その・・・・・・・・なんとというか・・・・・・・・」

「どうしたの？ この姿を見て何も無いとは言わせないわよ。」

言葉を失った……。褒め言葉すら浮かんでこない。

「なにか言ったらどうなの？」

「へ？ 優子、ちょっと待て。なぜ俺の間接を決めようとしてるんだ？」

「ナオが何も言わないから、声を出させてあげようと思って。」

「は？ 待て待て。そんなことをしたら褒め言葉どころか、断末魔の叫びが、」

「えい！」　ゴキヤ！バキヤボキヤ！

ぎゃああああああつ！！

「どう？　言う気になった？」

「わかった！　なんか言うから力抜いてくれ！」

折れるって！　マジで！　こんなじゃ褒め言葉どころか、可愛いの一つも言えないって！

「お前って奴は、どうしていつもそうなんだ！」

この前、帰り道でちょっと可愛い女の子をチラ見ただけでこの有様になったことがある。

なんでここまでして、俺の感想が聞きたいんだよ。

「もう、ナオが鈍感だからよ。」

「はい？　なんだそりゃ。」

俺より明久の方が鈍いだろ、絶対に。

「まったく……じゃあ、改めて。」

「う、うん。」

「優子、凄く似合ってるぞ。」

「あ、あ、ありがとう。」

「ほ、ほら！　二回戦行くぞ！」

「ちょ、ちよつとナオ！　引つ張らないでよ！」

俺は優子の手を引っ張って二回戦会場に向かった。

恥ずかしさのあまり、Aクラスに入っていた常夏コンビのこともな  
んか忘れて……

第22話 忘れ物って必要の無いときに思い出すことが多くない？（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 5

・悪友の手伝いをする - 1

・再度、変な頭の二人組みを発見する - 1

・優子のメイド姿を目撃 + 4

・臨死体験一歩手前に陥る - 2

現在の青春ポイント合計 + 5

## 第22話 忘れ物って必要の無いときに思い出すことが多い？

「で、二回戦は五秒たらずでかたづけしてきた。」  
「おう、それは良かった。」

俺は優子と二回戦を終え、教室に戻ってきていた。俺と坂本は二回戦が終わった者同士で軽く談笑をしていた。なぜならテーブルを綺麗にしたにも関わらず、喫茶点には客が少なかったからだ。

「いやー、敵が弱すぎて話しにならない。」

「そうなのか。まあ、俺たちも結構簡単に勝負はついたな。」

「へえ〜。相手はどここのクラスの奴？」

「Bクラスの根本とその彼女、Cクラス代表の小山だ。」

「BとCの代表なのによく勝てたな。」

「まあな。俺と明久の実力ならこんなものだろう。」

さすがだな。相手が代表なのにどうやって勝ったんだろう？

「それにしても、写真集を出したときのあの根本の顔……………最高に笑える。」

「ストップ、坂本。お前一体何をした。」

「なあに、ちよつと小細工を利かせただけだ。なんの問題も無い。」

「まさか、この前の戦争のときに撮った写真集か？」

「そのまさかだ。いや、あんなに利くとは思わなかった。まさか破局までするとは……………」

「根本……………不憫な奴だ。」

彼は一回戦で負けた方がよかったのかも知れない。自分のためにも。

「そんなことよりも、喫茶店に客が来ないことのほうが重要だな。」  
「確かにそうだな。営業妨害があってもこの客の無さはちよっとお  
かしい気がする。」

「ナオもそう思っていたか。やはりこれは何かあるな。」

うーん。何か忘れているような……。そうこう考えている  
うちに、お客さんが一人来た。

「おっと、客か？」

そう言うと坂本は、ドアの前に行きはじめた。そして、ぶつかつた。

『お兄さん、すみませんです。』

「いや。気にするな、チビツ子。」

『チビツ子じゃなくて葉月ですつ。』

相手は小さな女の子か？

「あれ、雄二は誰と話しているの？」

「おう、明久。どうやら久しぶりの客だ。」

でも、なんでそんな小さい子がこの店にきたんだろう。

「んで、探してるのはどんなヤツだ？」

教室のドアは開いたが、坂本に隠れていてよく見えないな……

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ。』

「この、ロリコン野郎が。今モテてないからって、そんな女の子に声かけてんじゃねえよ。」

『うるせえっ！』

おっと、口が滑ってしまった。面倒になりそう、と思ったが珍しくあいつらは攻撃してこなかった。

目の前に女の子がいるからだろうか。それならその女の子に感謝だな。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ。』

「お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？」

『あう………。わからないです………。』

「？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、特徴は？」

名前がわからない相手でも探してあげようとする坂本の優しさが感じられる。

意外に子供好きなのかもしれないな。

『えっと………。バカなお兄ちゃんでした！』

すんげえ特徴だな、オイ。

「そうか………。沢山いるんだが？」

坂本は該当する人物を探して、そう言った。

その中に俺も含まれてんのか？ そうだったらマジでボコすぞ。

『あ、あの、そうじゃなくて、その………。』

「うん？ 他に何か特徴があるのか？」

『その……すつごくバカなお兄ちゃんだっただんです！』

『『吉井だな』』

「ご指名だぞ、明久。」

「というか、泣いてないか？ 明久。」

「全く失礼な！ 僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！

絶対に人違い

「あつ！ バカなお兄ちゃんだつ！」

「おうい、明久。思いつきり抱きつかれてるぞ。」

「絶対に人違い、がどうしたんだ？」

「……人違いだと、いいなあ……」

「全く、明久は。一体何人の女を誑かせれば気が済むんだ？」

「ナオ！ 何を言うのさ！ 僕は女の子に何もやましいことはしてないよ！……って、キミは誰？ 見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「話をはぐらかした上に最低なことを言いやがったよ、こいつ！ デリカシーのカケラも無いよ！」

「え？ お兄ちゃん……知らないって、ひどい……」

「あ、マズい！ この子泣きだしそう！？」

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！ バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きな

が来たのに！」

この子、凄いな。純粹な言葉で的確に明久の急所を抉り取ってる。ある意味、才能だ。俺もフォロワーをいれよう。

「明久　じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「泣かないで。バカなお兄ちゃんはバカなりにバカやってんだからから多めに見てやってくれないか？」

「ナオまで！　一体僕を何だと　」

『勝ったわよ、アキ。』

『すみません。二回戦終わりました！　明久君。』

あ、姫路たちが帰ってきた。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに　」

「逃げろっ！　明久！　死にたいのか！」

「へっ？　ナオ、どうし　」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「じゃあっ！？」」

遅かったか………生きててくれ、明久。

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから。」

「「こ、こうですか？」」

明久の首に鋭い衝撃が走る。時間の問題だ。

「ちよつと待つて！ 結婚の約束なんて、僕は全然  
「ふえええんつ！ 酷いですつ！ ファーストキスもあげたのに！  
つ！」

「坂本は包丁持ってきて。五本もあれば足りると思う。」  
「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」  
「お願いひまふつ！ はなひを聞いてくらはいつ！」

このままだと明久が滅多刺しの変死体で見つかるだろう。

「あー、島田に姫路。そのくらいにしてやってくれないか？」  
「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちよつと待つてな  
さい。」

「二本も一本も駄目！ そんなことしたら、明久が死ぬから！」  
「美波、ナオの言うとおりだよ。そういうのはよくないと思う。」  
「わかつたわよ！……………もうちよつとだったのに。」

危ないところだった……………もう少し遅かったら本当に殺ら  
れてたな。

それにしても、この子は一体誰なんだ……………？

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

え？ 今、なんと仰いました？

「ああっ！ あのときのぬいぐるみの子か！」  
「なんだ、明久。やつぱり知り合ってたんじゃないか。」  
「そのときはちよつとドタバタしてたから、忘れてた。」

「？ 何があつたんだ？」  
「ちよつと、ね。」

明久の意味深な台詞。……………うーん、気になるな。

「お兄ちゃん、思い出してくれましたか!？」

「うん、そっか。葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ!」

さっきの泣き顔とは打って変わって笑顔の葉月ちゃん。なんかこう、小さい子が笑うと、和むね!

「あれ？ 葉月とアキって知り合いなの？」

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるの何も、ウチの妹だもの。」

「「へ?」」

葉月ちゃんの顔をよく見ると、どこことなく島田に似ている気がする。元気そうな雰囲気とか、ちよつと勝気な目の辺りとか。

「吉井君はズルいです……………。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？」

私はまだ両親にも会ってもらっていないに……………。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃってたり……………」

姫路……………お前は何を言ってるんだよ。

最近、姫路もこのクラスに侵されてきたのか、壊れてきている気がする。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん! めいぐるみありがとうでした

っ！」

葉月ちゃんがしつかりとお辞儀をした。礼儀正しくて、あの学園長とは大違いだよ。

「こんにちはは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！ 毎日一緒に寝てます！」

「良かった。気に入ってくれてたんだ。」

「姫路、あの子って？」

「前に会ったときに、ぬいぐるみをプレゼントしてあげたんです。」

「へえ。そうなんだ。通りで仲がいいと思った。」

みんななんだか、子供好きが多いな。俺は弟がいるから、あんまり好きかどうかは分かんないけど。

「ナオ。そういえば、君にも弟っていたよね？」

「おう。ちょうど、葉月ちゃんと同じ歳くらいの弟だ。」

「ふーん。そうなんだ。」

「あの、バカなお兄ちゃん。」

「なんだい、葉月ちゃん。でも、その呼び方は感心しないな。もっと」

「カッコイイお兄ちゃん』とかにしてくれないかな？」

「はいですっ！ カッコイイバカなお兄ちゃん！」

呼び方の変更を求めても、無駄なようだ。それだったらまだ前の方がマシだったような。

「で、どうしたの。葉月ちゃん。」

「そこのお兄ちゃんの名前はなんていうんですかっ？」

「え？ 俺のこと？」

「はいですっ！」

なんで俺の名前なんか気になったんだ？  
しかもいきなりだな、オイ。

「俺の名前は浅斬直貴。ナオ、って呼んでくれてもいいよ。」

と、いつも通りの自己紹介を言った俺だが、

「浅斬って、もしかして“駿くん”のお兄ちゃんですか？」

ここでなぜか俺の弟の名前がでてきた。

「え？ 葉月ちゃん、駿のこと知ってるの？」

「はいですっ！ クラスが同じなんですっ。それに、さっきまで一緒にいましたっ。」

「えっ！？ 駿がここに来てるの！？」

駿のやつ……来たいなら来たいって言えばよかったのに。  
あいつも可愛いやつだよな。

「さっきまで駿くんのお父さんとお母さんにここまで連れて来ても  
らったんですけど……」

「葉月ちゃんストッブ！ 危険な要素が出てきたから、その話は後  
にしよう！」

なに！ 両親も来ているだと！ そんな話、聞いてないぞ！  
というか、いつ帰ってきやがったあのバカ親！

「あの、ナオお兄ちゃん？」

「帰ったらぶっ飛ばし ってなに？ 葉月ちゃん？」

「お店に人が少ないのって、きつとあの噂の所為だよ。」

「あの噂って？ なにか外で聞いたの？」

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って。」

思わず、言葉を失いそうになった。

確かに先ほどまではそうだったがクロスの下も、キチンと綺麗にしたはずだ。

ここで、俺は先ほどまで忘れていた疑問を一つ、思い出した。そういえば、さっき常夏コンビニを見かけたな……。

「坂本。」

「どうした、ナオ？」

「きつと、外でまた営業妨害をされているはずだ。」

「ああ。今、俺も同じ事を考えていた。探し出してシバき倒すか」

坂本が確信に満ちた顔立ちで顎に手をあてた。

「営業妨害って、あの常夏コンビニ？ まさか、そこまで暇じゃないでしょ。」

「どうだかな。ひとまず様子に行く必要があるな。」

「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと。」

場所は恐らく、あそこだろう。

「常夏コンビニがいそうな場所なら心辺りがあるぞ。」

「本当！？ ナオ！」

「葉月もその噂を聞いた場所を知ってるですっ！」

「葉月ちゃんも？ それで、どこから聞いたの？」

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

「なんだって!? 雄二、それはすぐに向かわないと!」

「そうだな明久! 我がクラス成功のために、(低いアングルから綿密に調査しないと!)」

それを聞いた明久たちは全力ダッシュ。

おーい、そんなことしなくてもあっちのお店は逃げないよ。

「つて、話し聞けよ! 待ってくれ!」

俺は明久たちを追いかけ、Aクラスを目指したのだった。

第22話 忘れ物って必要の無いときに思い出すことが多くない？（後書き）

次回のあらすじ。

Aクラスに向かうと、会いたくもない二人組みがナオを待ち受けていた（常夏せんぱいじゃないよ？）

そこで、一混乱起きるのだった……

**第23話 思春期の子は、何かと大変（前書き）**

前回の青春ポイント合計 + 5

・根本に同情 - 1

・クラスメイトの守備範囲が広すぎることにビビる - 2

・小さな女の子が中華喫茶に来店 + 2

・和む、癒される、ほのぼのする + 2

現在の青春ポイント合計 + 6

### 第23話 思春期の子は、何かと大変

「明久、ナオ。ここはやめよう。」

「ここまで来て何を言ってるのさ！ 早く中に入るよ！」

「？ どうしたんだ、坂本。普通にAクラスに来ただけだろ？」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだからこそ勘弁してくれ！」

なにを言ってるんだ。さつきまでの元気はどうした？ 俺らがやって来たのは、Aクラスの喫茶店『ご主人様とお呼び！』だ。ご主人様なんだかメイドなんだかハッキリしないメイド喫茶だ。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね。」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

坂本が抵抗してるうちに、女子三人も追いついてきたようだ。

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから。」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

明久が坂本を説得していると、指が擦り切れんばかりにシャッターを切る男がいた。

「……………ムツリーニか？」

「……………人違い。」

「厨房はどうした、厨房は。」

「……………クラスのため、敵情視察に来ている。」

お前もかよ……………。最近の敵情視察はローアングルでの女の子の撮影らしい。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている女の子が可愛そうだと」

「……………一枚百円。」

「2ダース貰おう　可愛そうだと思わないのかい？」

「明久、普通に注文してるぞ。」

なんだよ、その、『しまった』みたいな顔。止めに入るまでは良かったけど、これじゃ本末転倒だ。

「ムツツリーニ、明久がさっき言ったように盗撮はいけないと思うぞ？　やっぱり隠れてコソコソ撮影なんて、男らしくないと」

「……………木下優子の写真は一枚二百円。」

「1グロス貰おう。」

「……………1グロスはさすがに多い。」

「じゃあ、全種類分の金額を払おう……………いくらだ？」

「……………五千六百円。」

「ありがとう　男らしくないと思わないのか？」

「ナオ、君もしてるよ。」

はっ！？　口と手が勝手に！？

「……………そろそろ当番だから戻る。」

ムツツリーニは写真を渡した後、教室の方に帰っていった。まさかプリントまで終わらせてるとは……………流石だ。

「まったく、ムツツリーニも困ったもんだね。」

「ああ、まったくもって明久の言うとおりでな。」

呟きながら、さりげなく写真をポケットに仕舞い込む俺たち。

「吉井君たち、その写真をどうするつもりなんですか？」

あ、バレてた。やばい。

「やだな。もちろん処分するに決まってるじゃないか。」

「そうだよ、姫路。別に家に帰った後、パソコンに取り込むとか、そういうことは決してしないぞ？」

「それよりも、姫路さん。お店に入るう？ もうすごくお腹が減っちゃったよ。」

俺たちは互いに誤魔化しながら、店に入るうとする。

「あ、そうですね。入りましょうか。」

「うんうん。早く敵情視察も済ませないと　　写ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」

「なんだと！ それは本当か、明久！」

畜生！ 男の足ばかりだと！ どれどれ………。なんだ。普通に優子が写ってるじゃないか。安心安心………。つて、ちよつと待てこの写真、ここに写ってるのはウチの両親じゃないか！？

『やっぱり見てるじゃないですかっ！』

『う、ごめんなひゃい！ くひをひっぱらないで！』

明久の拷問なんて知ったことか！ 逃げるのが優先的だ……。

「あれえ、ナオじゃない？ あれ。」  
「ん？ おお、本当だな。おい、ナオ、一緒にここでなんか食べないか？」

。 気付いた上に声をかけてきやがった！ 無視だ、無視………。

「ナオ、声かけられてるよ？ 行かなくていいの？」

「ん？ ナオツテダレ？ ワタシハベツジन्दスヨ？」

「あ、もしかしてあれってナオのお兄さんとかお姉さん？」

「あの二人をどう見たら兄弟に見えるんだよ！ 両親だよ！ 両親  
！」

明久の目はおかしいのか？ 二人とも四十だぞ。

「坂本、さつきは悪かった。ここから一緒に逃げ出そう。」

「ああ、ナオ。この地獄から逃げだ。」

「………あ、雄二。」

「あれ？ ナオじゃない。何してるの？」

俺たち二人の退路は断たれてしまった。もう、逃げ場はない。

「坂本、一緒に行こう。もう逃げ場は無いよ。」

「ああ………ナオ。」

俺たちは店内に渋々入っていった。

「……………おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様。」

明久たちと店内に入ると、凄く綺麗な霧島さんが出迎えてくれた。

「……………チツ。」

坂本も渋々ながら入店してきた。霧島さんは俺らと同じように、

「……………おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダ  
リン。」

ちょっと、いや、かなりアレンジされていた。

「お席にご案内します、お客様。」

そして優子が席まで案内してくれた。

「ナオ。両親のところに行かなくていいの？」

優子が俺に声をかけてきた。

「うん。行きたくない。」

「即答しなくてもいいじゃない。」

行きたくないものは、行きたくない。なぜなら、俺はあの二人が大キライだからだ。

「そこまで嫌なのはなにか理由があるの？」

「ある。それはあれを見ればすぐにわかる。」

「あれって？」

俺は両親のいる客席に指をやった。

『はい、あくん。パパ？』

『あくん。うくん、やっぱママのあくんはおいしいなあ。』

『でしよ〜？』

「あれを、家でもやられてる俺の身になってくれ。」

「耐えられないわね。私なら家出するわ。」

「姉さんはあれが嫌で、今は一人暮らしをしている。」

「納得ね。」

まあ、あれが大丈夫なのは弟くらいだろう。でも、ここ最近会っていなかったからやっぱり話でもしておくか。俺は両親のいるテーブルに行くことにした。

「優子も一緒に来てくれないか？」

「へっ？　なんで？」

「一人であそこになんて、行けない。」

「意気地なし。」

「何とでも言え。優子が来てくれたら落ち着く。」

「……わかったわよ。しょうがないんだから。」

「じゃあ、来てくれるならこれだけは守ってくれ。」

「な、なに？」

「……俺の親は、色々と危険だということをお  
いて欲しい。」

## 第24話 貸し借り、ご利用は計画的に（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 5

・メイド喫茶に入る（7割優子目当て） + 2

・優子のメイド写真ゲット！ + 2

・両親を発見 - 3

・そして声をかけられる - 2

・両親のところへ行くことと決心する + 1

現在の青春ポイント合計 + 5

## 第24話 貸し借り、ご利用は計画的に

「ひ、久しぶりだね。母さん、父さん。」

声をかけたはいいが最初の一言目で裏返ってしまった。

「おお、やっと来たか。さっきから声をかけていたのに何で来てくれないんだよ？」

行きたいヤツがいたら、名乗り出て欲しいくらいだ。

「いや、ちよつと緊張しちゃつて。」

「なんだ。お前も案外、可愛いところがあるな。ところで、こちらの従業員さんはどなたかな？」

「あ、え〜と。こいつは俺の…… “友達” の優子だ。」

「なんだ、“友達”なのか。てっきり彼女さんかと思ったよ。」

「！う、うるさいな！ところで、なんでこんなところにいりゆんだよ！」

「動揺しすぎだろ、ナオ。」

ち、畜生！ だから来たくなかったんだ！このペースについて行けるのは世界中さがしても弟くらいだよ。

「か、彼女だなんて……！ そんな……」

「お前もあんまり真に受けてんじゃねえよ……」

「まあまあナオ。いずれそうなるかもしれないだろ？」

「父さんはちよつと黙ることを覚えた方がいいと思う。」

いい加減、このテンションにも飽きた。

「んで、なんでまた俺の文化祭になんか来たの？ てか、いつ帰ってきた？」

「仕事が予定よりも早く終わっちゃって早く帰ってきたの。」

俺の母さんがゆっくりとした語調で喋る。

母さんはいつもこんな調子だから、若い子に間違われて困っちゃうとか言ってた。

ありえん。

「じゃあ、いつまた仕事に戻るの？ てかもう二度と帰ってこなくていいよ。」

「もう、ナオったら冷たいんだから！ そんなんじゃ女の子にモテないぞ〜？」

「余計なお世話だ！ もうお願いだから、帰ってくれ……………」

「いやよ。あ、じゃあナオが彼女作ってきたら帰ってあげよっか？」  
「そんな短時間で出来たら苦労しない」

その瞬間、優子と目があってしまった。……………なんとというか、  
気まずい。

「あれれえ〜？ やっぱ二人とも、デキてるんじゃないの？」

「……………！ そ、そんなわけないだろ！」

「はいはい。素直じゃないんだから、ナオちゃん可愛い〜！」

「優子、この人の言うことを真に受けちゃ」

「私がナオの彼女に……………。は、恥ずかしい……………！」

ダメだこりゃ。真に受けすぎて優子がおかしくなってる。

「優子ちゃん、だったかしら？ ナオのことよろしくね！」

「俺の同意もなしにそういう会話進めてんじゃねえ！」

「はい！ 私、精一杯頑張ります！」

「うおい！ 洗脳でもされてんのか！？ いつもの優子じゃねえっ  
！」

「ナオ、私は頑張るわ！」

「おかしいことに気付け！ そしてそのことに恥じてくれ！」

「それじゃナオ、またね。」

「この状況下で俺を置いてくなよ！ どうすんだよコレ！」

俺一人で何とかできるとは思えない。できたとしても、後が大変だ。

「まあ、なんとかなるんじゃない？ あ、そうそう。」

「？ どうかしたの？」

「その子、大事にするのよ。」

「…………お、おう。」

「そいじゃあね。」

ああ、行ってしまった…………。

どうすんだよ、この優子。

「ま、まずはデート？ それともプロポーズ？」

「待て、色々と順序が抜けている。じゃなくて起きろ！ 優子！」

「ふへへ…………。はっ！」

「…………お前一体何されたの？」

「一緒に…………ちよっとだけお茶したときに、お話したくらい…………よ。」

優子がトリップしてる所なんて、初めて見た。  
色々と心配になる行為が多々みられたな。……………将来的に。

「大丈夫か？ 優子？」

「……………忘れて。」

「ゆ、優子？」

「……………さっきのことは忘れてえっ！」

「ごへうがっ！ ごふっ！」

一瞬、視界が、反転した。と思ったら死んだ親戚やおじいちゃんが  
川の向こう岸でえへへへへへ。

……………はっ！

「優子……………何すんだよ。」

「……………だって恥ずかしかったんだもん。」

照れ隠しに俺を一撃目で臨死体験させる優子。可愛いヤツだな、と  
か冗談すら言えないほど今のは危なかった。

「照れ隠しに臨死体験させられる俺の身になってくれないか？」

「ご、ごめんなさい……………」

「気をつけるよ。そんなんじゃ彼氏ができないぞ？」

「いいもん。そのときはナオになってもらっから。」

「……………！ ごほっ！ ごほっ！」

ビックリさせんなよバカヤロー！ また心臓が止まると思っただろ  
！……………いろいろな意味で。

「そんなことより会計大丈夫なの？」

「ふえ？」

「だってあの二人支払いしてないわよ？」

「．．．．．Reality?」

「うん。ナオが払うしかないわよ。」

「．．．あ．．．の．．．力．親．．．．．」

「？ ナオ、どうしたの？」

学生に、支払いを、させるだとお．．．．．

『あんのバカ親あああああつ！』

怒り爆発。学生に奢らせるとはあの社会人の頭はどうかしてるんじゃないかと思う。

支払いは結局俺がすることになった。

畜生．．．．．俺も何か食おうと思ったのに．．．．．

## 第24話 貸し借り、ご利用は計画的に（後書き）

総合評価が100を突破だぜひゃっほっうっ！  
これを糧にしてみっと頑張りたいと思います！

**第25話 草食系男子、肉食系男子、女装系男子？（前書き）**

前回の青春ポイント合計 + 5

・両親のペースに持っていかれる - 2

・優子とそのペースに持っていかれる - 2

・支払いをさせられる - 2

現在の青春ポイント合計 - 1

第25話 草食系男子、肉食系男子、女装系男子？

両親の食事代を払い、俺は明久たちのテーブルに戻ってきたはずだが、

「あれ？ 明久たちはどこに行ったの？」

いなかった。

「あ、あそこじゃない？」

優子が指差した場所を見ると何故か明久たちがジャンケンをしていました。

なんでジャンケンしてんの？

あ、明久が負けた。

『あつち』

『その手に乗るかつ！』

『向いて』

ブスッ！

あ、いやな音。

『ぎいやああっ！ 目が、目があつ！』

『ホイ！ ……ふっ。俺の勝ちだな。』

もの凄く理不尽な勝ち方だな。つて、そんなんじゃねえよ。なんでジャンケンしてんだ？

どっかの太佐並みに叫ぶ明久を横目に坂本に聞いた。

「なんでジャンケンしてるの、坂本？」

「ふっ。これから明久の面白い姿が見れるぞ。」

「と、言うത്？」

「今から女装させてあそこにいる常夏コンビをぶちのめす。」

「ぶちのめすだけでもヤバいのにな女装までさせんのか？」

「大丈夫。きつとバレないはずだ。」

「ふーん……。で、本音は？」

「女装がバレて明久が女装趣味を持っているという噂が学園中に広まって欲しい。」

「お前らは本当に親友なのか？」

歪んでいる。クラスも、代表も、この世界も。

そんなことをして本当に大丈夫なのか？

「ナオもやるか、女装？」

「遠慮しておく。」

「まあ、そういうな。きつと面白いぞ？」

「なに俺まで巻き込もうとしてんの！？ やだよ、そんなの！」

「大丈夫。恥ずかしいのはきつと最初だけだ。」

「や、やめろ！ ゴフツ！（バタツ）

あれ？ 力が入らない……。後ろを見ると、優子が立っていた。

「これでいい？ 坂本君。」

「あ、ああ。でも、そこまでしなくても良かったんだがな。」

「だって私だって見たいもの。ナオの女装姿。」

「ゆ、優子……お前……」

「ごめんね？ ナオ。でも、大丈夫よ。」

なに……が……大丈夫……なんだ……？

「ナオならきつと似合うよ。」

そついう問題じゃない、と思ったのは俺だけじゃないはずだ。さっきのこと、まだ怒ってる？

「こ、この上ない屈辱だ……」

「同じく……」

坂本から連絡を受けた秀吉が俺たちのメイクと着付けを数分でやってくれた。

凄いけど、全然嬉しくない。し、ありがたくない。

「では、ワシは喫茶店に戻るぞい。存分に悪党をのしてくるが良い。」

「ん。りよーかい。」

「普通にぶっ飛ばすだけなら問題ないんだけどなあ。」

女装してるし、俺たち。これで誰か他の知り合いにあったりしたらもう二度と、外を歩けない。

やはり、両親に帰ってもらったのは良かった。あんな親でも息子がこんなバカやってるとは思わないだろう。二 A の教室に入る俺たち。周囲の視線が鋭いのは気のせいだ。いや、気のせいだと思いたい。

『とにかく汚い教室だったよな。』

『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな。』

変髪ツインズ（俺が命名）はまだそんなこと喋ってんのか？

あいつらにとってはただの嫌がらせでも、俺たちにしてみれば大事なクラスメイトの命運をかけた喫茶店なのに。絶対に、許さない。

「「お客様。」」

俺と明久は女性らしく、最高の声色で相手を騙すように声をかけた。こいつら、絶対に叩き潰す。

「なんだ？」

へえ。こんなコもいたんだな。」

「結構可愛いな。」

相手の舐めるような視線。絶えろ！ じゃなかった堪えろ、俺！  
明久はこんな空気に堪えられるのだろうか？

「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

明久はそう言つて二人を立たせた。

「掃除？ さつさと済ませてくれよ？」

俺と明久は顔を見合わせ、頷きあい、そして、

「ありがとうございます。それでは

「ん？ なんて俺の腰に抱きつくんだ？ まさか俺に惚れて、

「ん？ なんて俺と腕なんか組むんだ？ まさか俺に惚れて、

一息おいて、

「くたばれええっ！」

「げばああつ！」

「げふううっ！」

明久はバックドロップ、俺は一本背負い（受け身なし）成功。

坊主先輩は本日二度目の脳天痛打、モヒカン先輩は腰骨を強打だ。

「き、キサマは、Fクラスの吉井に浅斬………！ まさか女装趣味が

チツ！ 俺も明久みたいにバックドロップにしておけばよかった！  
まだ、息の根があったとは。仕方ない、応援を呼ぶでしょう。

「こ、この人、今私たちの胸を触りました！」

「ちよつと待て！ 背負い投げする為に当ててきたのはそつちだし、だいたいお前たちは男だと　　ぐぶあっ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

痴漢退治という大義名分を引っさげて坂本が登場。

「何を見ていたんだ！？ 明らかに被害者はこつちだろ！」

蹴っ飛ばされたモヒカン先輩が叫ぶ。

「黙れ！ たった今、コイツはこのウエイトレスの胸をもみしだいていただろうが！ 俺の目は節穴ではないぞ！」

正直、凄く節穴な瞳だと思う。

「ウエイトレス。そつちで倒れている男は任せたぞ。」

「え？ あ、はい。わかりました。」

明久が坊主先輩にトドメを刺す為に、持っていたブラを頭に付けた。

瞬間接着剤で。

「さて。痴漢行為の取調べの為、ちよつと来てもらおうか。」

一方では指を鳴らしながらモヒカン先輩に近付く坂本。連行、のちの拷問でどうしてこんなことをしているのか、じっくり吐かせるつもりだろう。

「くっ！ 行くぞ夏川！」

「こ、これ、外れねえじゃねえか！ 畜生！ 覚えてる変態めっ！」

坊主先輩は頭にブラをつけたまま走り去って行った。

「逃がすか！ 追うぞアキちゃん！ ナオちゃん！」

「了解！ でもその呼び方は勘弁して！」

ちなみにナオちゃんとは俺の幼かった頃の呼ばれ方である。  
今はあまり気持ちのいい呼ばれ方ではない。

「ところで坂本、この会計は？」

「俺たちは何も頼んでいないからな！ 姫路たちに任せりゃ平気だ  
！」

坂本がそれでいいならいいけど、

「……お会計は、野口英世を一枚か、坂本雄二を一名のど  
ちらかになります。」

「坂本雄二を一名でお願い。」  
「……ありがとうございます。」

本当にいいのか？ 千円で売り飛ばされてるけど。

「明久！ 奴らは四回に逃げたぞ！」

人のこつた返す中で坂本が叫ぶ。

「ごめん！ やっぱアキちゃんをお願い！ なんだか周囲の視線が刺さるんだ！」

「わかった！ 吉井明久 もとい、メイドのアキちゃん！」

「キサマ絶対ワザとだな！」

スカートを翻しながら階段を走る俺たち。四階は確か三年の教室。こっちにとつたら敵だらけと考えていいだろう。

「三 Aに入っていたのが見えた！ こっちだ！」

坂本が近くの教室へと突っ込んでいった。

教室全体を暗幕で覆っていることからお化け屋敷だということがわかる。

「いらつしやいませ。三名様ですね？」

「ああ、はい。そうです。」

「ナオ！ 会計なんかしてたら逃げられるぞ！」

「じゃあ先に行って！ 払ってから行くから！」

「おうっ！」

そういうと、坂本たちは奥へ消えていった。さて、三名でいくらだ？

「六百円です。」

「あ、はい。わかりました。」

それにしても周りの視線が辛い。さっさとこの暗闇に飛び込んで行きたいくらいだ。

「お客様って、お綺麗ですね。何年生の何組ですか？」

「………What？」

この人の目はおかしいんだろうか？ 俺は男だぞ？  
まず、綺麗な評価基準がわからないんでなんとも言えんが。

「ああ、そうですか？ ありがとうございます。」

ここは一先ず、礼を言ってさっさと

「写真を撮ってもいいですか？」

「ダメです。」

「そんな即答しなくても……」

そんなことをしたらこの学園で俺は女装好きのレツテルを貼られて  
しまう！

それだけはなんとしても回避しなければ！

幸い、俺の女装はかなりの完成度だ。よっぽどのことがない限り、  
大丈夫だろう。

「あ、本当だ。このコ可愛いね。何年生？」

「本当であ〜。可愛い！ ねえねえ、何年生？」

「こんな可愛い子、この学園にいたっけ？ 外の子じゃないの？」

「バカ。メイド服なんか学園祭以外で着ないでしょ？」

「あ、そっか。」

拙い。このままだと俺の女装の評価がもの凄いことに。さっさと戦  
線離脱だ。

「あの、中に連れを待たせているので入っていいですか？」

「ああ、ゴメンね？ そうだ。君、どこで働いてるの？」

「え〜と。服装を見て頂ければわかると思います。それでは。」

パシヤっ！

誰だ今勝手に撮影をしたヤツは！ どうしてくれんだ！ オラ、ケ  
ータイ出せやコラあ！ と言おうと思ったとき、奥から『へ、変  
態だ！』と言う声が聞こえた。

その声の所為で、俺は入る気が失せた。

「あの、やっぱり私入るの止めておきます。怖そうなんで。」

「そう？ わかった。じゃあ二人分の四百円を払って行ってね。」

「わかりました。」

俺は四百円を出し、その場から消え入るように、教室に帰っていつた。この服どうしよう。着替えは教室で良いとして、返すときが気まずいな。まあ、何とかなるだろう。気楽に行こう。気楽に。気楽に。でも、後ろでフラッシュの音がしたみたいだけど、どうしようか。

第26話 チャイナドレスはカワイイより綺麗だと思っ(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 1

・女装させられる - 3

・常夏コンビを撃退。気分が良くなる + 2

・女装姿を褒められる。悪い気はしない + 1

・写真を撮られる - 1

現在の青春ポイント合計 - 2

## 第26話 チャイナドレスはカワイイより綺麗だと思う

「で、三回戦は不戦勝じゃったと？」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ。」

「ウチの店で出た客じゃないよな？」

その後、明久たちは急いで三回戦の会場に向かったんだが相手が棄権したらしい。

え？ 俺の試合はどうしたって？

聞くまでも無いだろ。一秒で片付けてきた。

「ならば、済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか？」

「そうだな。でも、そう簡単にいくかなあ？」

「任せておけ。考えてある。」

坂本がそう言って取り出したのは、

「チャイナドレス？」

刺繍も見事に決まっている水色と白のチャイナドレスだった。

「中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ。」

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これなら確かにインパクトはあるじゃろうな。コレを宣伝用に」

確かに姫路や島田たちが着たらインパクトは絶大だろう。王道だけど、悪くない作戦だと思う。

「ああ。コレを　　明久とナオが着る。」

「坂本、やめて……！　メイドの次にそんなことをしたら俺たちはきつと本物だと思われちゃう！」

この噂をこれ以上広げてしまったら、噂の女装転校生！　とか言う記事を書かれてしまう！

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらおう。」

「あ、なんだ。良かった。」

俺と明久が安堵の声を洩らす。いや、本当に着るのかとビックリしたよ。

「ワシが着るのは冗談ではないのわいの……？」

「まあ、本番になったらスイッチ入るから大丈夫だつて。」

「そうかのう？　そうかのう？　ワシは男だと言っておるのに。」

「はいはい、大丈夫。優子を見慣れてる俺にとつたらお前は男だよ。」

「もうこの学園にはワシの性別を把握しておるのはナオだけじゃ……」

秀吉も大変だな。優子に似てるというだけでも大変なのに。

「たつただいま〜！　つて、なんだアキつてばメイド服脱いじゃったんだ。」

「あ……残念です。可愛かったのに……」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな〜。」

と、さきほどの三人組が帰ってきた。人の気も知らずに好き勝手言いやがって……

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ?」

「そうだぞ? お前らにもそれ相応のことをしてもらうからな?」

にこやかに笑いかけ、獲物を逃がさないようにする。ふっふっふ・・・。。逃げられると思うなよ?

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げのために協力してもらおうぞ」

坂本がチャイナ片手に退路を断つ。少なくとも島田は抵抗するだろう。

「な、なんだか三人とも、目が怖いですよ・・・?」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・」

若干引き気味なエモノ二匹。残念だが仕留めさせてもらう!

「やれ、明久!」

「オーケー! へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛みあつ! マジすんませんでした! 自分チョーシくれてましたっ!」

「って、やられんの早っ! 弱っ!」

島田は明久に近寄られた瞬間、腹と頬と腿を目にも止まらぬ速さで殴った。

どうしてこの学園は女子のほうが攻撃力が高いんだろう?

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ? 前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど。」

島田が言い訳をする。まあ、そうだよ、普通。

「店の宣伝の為に、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

「大好　　愛してる。」

「…………お前って嘘ついたことあんの？」

お茶を濁そうとか、そういうのは一切みられない発言だな。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ。」

「そ、そうですね！　お店の為にすしね！」

「明久のおかげだな。」

「え？　僕は何もしてないよ。姫路さんたちがやる気なのは、お店の為なんだから。」

「…………お前がそれで良いならいいんだけどな。」

これだからバカは…………早く自覚してくんないかな。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？　葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い…………？　あ、うん！　手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

なんて良い子なんだ。島田もこれくらい素直だったらいいのに。

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの方は数が」

「明久、その問題はすぐに解決するぞ。」

「え？ ナオ、どうし」

「……………！！」（チクチクチクチク）」

「ム、ムツツリーニ！ どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？ つていつかさっきまでいなかったよね！？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな。」

なんだろう。本当は凄く格好良い台詞のはずなのに。  
今は何故だか格好悪い。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね。」

「いや、今着替えてもらいたい。」

「「え？」」

坂本の一言で二人の声が八モる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ。」

三回戦からは一般の客も観戦できるようにしている。  
確かにこれを着て登場すれば宣伝効果は抜群だろう。

「こ、これを着て出場しろって言うの……………？」

「流石に恥ずかしいです……………」

二人はチャイナ片手に思案顔になってしまった。

まあ、ただでさえ見せ物みたいなのに追加でチャイナ着ながら出場  
というのは屈辱以外の何ものでもないだろう。

「二人とも、お願いだ。」

明久が頭を下げた。それほどまでに姫路の転校を阻止したいのだから

う。

「明久……お前本当に　　チャイナが好きなんだな・

……」

「坂本、空気ぶち壊しだぞ。」

頼むから吉井が姫路の為を思って言った一言を台無しにしないでくれ。

「もしかして吉井君、私の事情を知って　　」

「仕方ないわね。クラス設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

姫路は感づいたようだが島田によって遮られ、良い返事を返してく

「あ。は、はいっ！　これくらいお安い御用です！」

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ。」

「オツケー。任せておいて。行くわよ瑞希。」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて、二人は教室を出て行った。あつちはあの二人に任せてもう大丈夫だろう。

「………できた。」

「わ、このお兄さん凄いです！」

いつのまにかムツツリーニはチャイナドレスを縫い上げていた。まさに高速、いや、神速とも言える速さで縫っていたからな。下心が

絡んだムツツリー二に不可能はないようだ。  
つくづく底の知らない男だと思うよ。

「ふむ。それでは着替えるとするかの。」

「ちよ、ちよつと秀吉！　ここで着替えるの！？　きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ！」

「明久、秀吉は男だぞ。そういう扱いはそろそろやめろよ。」

「……最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじやが。」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう。」

「うん。雄二の言うとおりでだよ。秀吉は性別が『秀吉』で良いと思う。男とか女とかじゃないさ。」

「お前は一度ぶっ飛ばされないとその頭に入っていないか？」

「い、痛いよ、ナオ！　ず、頭蓋が割れる！」

明久の頭部を自慢の握力で握りつぶした。でも力加減はしておいた。

「んしょ、んしょ……」

「……！！（ボタボタボタ）」

「は、葉月ちゃん！　こんなところで着替えちゃダメだよ！　ムツツリー二ガ大量出血で死ぬから！」

鼻血のはずなのに頸動脈を切り裂かれたような出血量だったが何故かムツツリー二は幸せそうだった。

第26話 チャイナドレスはカワイイより綺麗だと思っ(後書き)

最近買ったゲーム ・パタポン3

ハマり過ぎて更新まで遅れてしまった……

本当は二十八日に更新予定だったのに大幅にロスしてしまいました。  
続きも頑張って書くから応援よろしくね!

特別企画 『総合評価100突破記念』〜雑談編 作者@キャラ〜

「こんにちは！ この作品の主人公、浅斬直貴です。」

「そしてこの作品の製作者、ミカヅキです〜！」

「ここでは総合評価ポイントが100を突破したとの事で、作者ミカヅキがこの作品のキャラと話していきたいと前々から思ってたらしいです。」（ナオ）

「いえ〜い！」（作者）

「今日はこんな調子ですが普段はもっとしっかりしています。ていうかしっかりして欲しいですよ。」

「まあ、君も似たようなところあるんじゃない？ 似たもの同士だもんね！」

「……否定はしたいが、俺は作者がモチーフで出来ているそうだからな。似ているところがあってもなんら不思議に思うことはないよ。」

「そういうこと！ このナオ、というキャラは俺がモチーフ！ ドジなところも俺から作り上げています！」

「いきなりテンションあげてんじゃねえよ！ ……俺だつて好きでドジやってんじゃねえんだよ……」

「しょうがないよ。あれは全て実話なんだからさ。」

「と、いつか、作者ってどれくらいドジなの？　ちょっと気になるぞ。」

「え？　あ、そうそう、ナオも階段からよく落ちるじゃん？」

「ナオ』も』ってことは作者も？」

「そう。いや、気をつけておいても落ちるときは落ちちゃうんだよね。まあ、君と同じくらいドジ？」

「ぐっ……。もっと器用になりたい……。」

「その意見はこの物語りの作風が崩れちゃうんで却下の方針で。」

「せめてちょっとだけでも……。」

「いいじゃん。これからもっと面白くしてあげるからさ。」

「例えば？」

「オリジナルストーリーを作ろうと思ってる。優子と君の×××な話とかは？」

「それはなんて良い話なんだ！　今すぐにも作ってくれ！」

「いや、そんな急がなくても……。」

「でも出来ないことはないだろ？　頼むよー！」

「じゃあ、今やっている清涼祭編が終わったら作り始めるよ」

「さすが作者！ 分かってるねえ〜！」

『……………アンタたち一体なんの話をしてるの？』

「じ、この声は〜！」

「……………ゆ、優子！ き、来てたのか。」

「まあね。だって作者と話せる機会なんてなさそうだったから。」

「突然の登場ですが嬉しいことを言ってくれましたね。俺も話しかかったですよ。」

「随分うれしそうね？」

「作者が優子をヒロインに選んだ理由って一番キャラの中で好きだかららしいよ。だから今回の雑談にも優子を選んだそうだ。」

「そういつて貰えて嬉しいわ。ありがとう、作者さん。」

「どういたしまして。ナオも優子さんのこと好きだよね？」

「「ぶほっ〜！」」

「あ、二人がむせた。」

「な、な、なに、いきなり言ってるのよ！ そんなわけないでしょ〜！」

「そ、そうだぞ。作者は言って良い事と悪いことがあ、あるぞ?」

「ごめんごめん。そうそう、優子さんはオリジナルストーリーとか作って欲しい?」

「え? 結構話が急だけど。まあ本編では出番もあまりなかったし、作れることなら作って欲しいかな?って思ってるけど?」

「Ok、分かりました。貴女のためならいくらでも作って差し上げますよ!」

「そう? じゃあ、……………(ヒソヒソ)」

「おい。なに喋ってんだ、優子?」

「いや、それは考えつかなかったな……………。ちょっと難しいかも。」

「そう……………。残念ね。」

「おい、そろそろ読者が話しについていけなくなるぞ。」

「あ、じゃさ。読者に『こんなストーリーが良い!』って意見を貰うのはどうかな?」

「それは良い考えね。読者の意見を取り入れるのも悪くはないわ。」

「話し聞けよ! とうか聞いて! お願いだから!」

「ナオ、どうした？ らしくないぞ。」

「そんなことはどうでもいい。俺と優子の×××な話はどうなるんだ？」

「まあ、それはまた今度ということぞ。」

「なんでだあつ！」

「だって×××より読者が普段どんなストーリーを考えているかの方が興味があるし。というか大丈夫か？」

「？ なにがだよ？ こっちの話を聞いて」

「いや、後ろ向いてみる。」

「後ろ？（クルツ）」

「.....！！（TTTTTTTTT）」

「.....」

「ゆ、優子。どうした？ そんな怖い顔して.....」

「なあに？ ×××な話って？」

「そ、それはだな！ えつと.....」

「ナオが考えたオリジナルストーリーです。」

「あ、てめつ俺を売るのか！　って優子！　俺の肘はそつちに曲がらな、」

ボキヤツ！

「終わったわ。話を続けて、作者さん？」

「あ、ああ。じゃ、じゃあ今日から次回のオリジナルストーリーの募集をします。応募方法は感想欄にこんなストーリーを連載してくれ！　や、こんなストーリーの方が面白いぞ！　ってヤツを投稿してくれ。その原案にもとづいたものを俺がオリジナルとして連載します。選び方は俺の興味を引かれた原案に候補を絞っていつて最終的に良かったものを作ります！」

「いまは清涼祭をやってるから終了後に決めたやつを連載するのよね？」

「そう。まあ集まらないのは悲しいからこれを見る人は是非投稿して下さい！」

「復活！だ……………」

「お、やつとか。そろそろ終わりだから挨拶するぞ？」

「ええっ！？　もうかよ！　もうちょっと待って」

「優子さんも準備はいい？」

「いいわよ。いつでも言ってる。」

「じゃあ、せーの、」

「無視かよ!」

「」「」「これからよろしくお願いします!……!」「」「」

と、いうわけで原案の募集が成り行きで決まっちゃいました。

みなさん、一体どんな思想をお持ちなんでしょうか？

気になりますね……

清涼祭も頑張つて終わらせてオリジナルを作りたいです。

いまから楽しみです！

## 第27話 FFF団の実力(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 2

・チャイナドレス、眼福じゃあ〜！(Fクラス全員) + 2

・ムッツリーニの手先の器用さに驚く + 1

・ムッツリーニ出血多量で処置をするために - 1

現在の青春ポイント合計 ± 0

## 第27話 FFF団の実力

「君。注文をしてもいいかな？」

「はい？ 少々お待ちくださいね。」

俺は厨房班だったが人が増えてきた所為かホールも兼任で回っていた。やっぱ中華服は男を惑わせる成分が含まれているに違いない。あとメイド服も。そんなとき、不意に教頭の竹原先生が声をかけた。

「というか何でまだいるんだ？ さっき帰ったと思ったのに。」

「ご注文をどうぞ。」

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を。」

「かしこまりました！。お時間が少々かかるのでお待ちくださいね。」

それにしてもこの人はなんか嫌いなオーラが出てるなあ………  
こういうときの俺の勘は結構当たるんだよなあ。階段落ちのときに  
よくなるよな。

「それと聞きたいことが幾つかあるんだが、いいかね？」

「はい？ 何でしょう？」

聞きたいことだと？ 怪しいな………  
取り敢えず注意しておかなきゃな。この人は危険人物（自己判断）  
だからな。

「このクラスに吉井明久と浅斬直貴という生徒がいると聞いたのだが、どの子かわかるかな？」

「え？ 浅斬は俺ですけど………。あ、ちなみにあそこで接客してるのが吉井明久です。」

身構えていた分、意外な質問だったから拍子抜けしちまった。でも、教頭が俺たちに何の用だろう？

「ああ、そうかい。彼が 吉井君（笑）か。」

「先生、いくらアイツがバカだからといって、言っていていいことと悪いことがありますよ？」

人の名前に（笑）とか酷いだろ。

「ああ、それはすまない。だか、私はどうしても教え子である彼のことを吉井君（馬）とは呼べなくてね。」

「あいつ、普段なんて呼ばれてんすか………？」

（馬）ってバカってことだよな………？  
どう考えてもバカって単語しか思いつかない。

「浅斬、厨房の土屋からアキと一緒にウーロン茶の茶葉を持ってきてくれないか？ だって。」

「ん、わかった。先生、ちょっと用事があるんで行ってきますね。」

「わかった。では後でこの場所に来てくれないか？」

「はい？ あ、はい。わかりました。」

場所まで指定して俺に何のようだったんだ？  
というか、明久に用はなかったのか？

「浅斬、アキもう行っちゃったわよ？」

「はいよー。すぐ行く。」

ま、今は喫茶店の方が大事だし後で行けばいいや。  
ストックのある空き教室に向かうとしよう。

「で、何でこんな状況になってんの？」

「あ、ナオ。丁度よかった。」

空き教室に入ってみると何故か明久がチンピラに絡まれていた。  
それにしてもいつ攻撃してもおかしくないような雰囲気だな。

「いや、ちょっとね。」

「なにしたんだ、一体？」

「いや、なにも。」

「どっちだよ！ というかなんでだよ！」

なにもしないでこんな怖そうな連中が明久みたいなヤツに絡むかよ。  
でもそんな時にまた、空き教室のドアが開いた。

「おい明久。ムツツリーニが茶葉のほかに餡子あんこも急いで持ってきて

くれと」

「あ、雄二も。本当に丁度よかった。」

三人を見て眉をひそめる坂本。まあ普通そうだよな。こんな柄の悪い連中。

「よくわからないけど、雄二たちと喧嘩がしたいみたいなんだ。だから、あとは宜しくね。」

「なんだそりゃ？」

「おい、明久。俺たちにだけ面倒ごことを押し付けるつもりかよ？」

戸惑う俺たちを教室に押し込む明久。扉まで閉じやがって……  
・めんどくせえな。

「おい明久。これは　ああ、そうか。そういうことか。」

「やっぱ坂本は理解が早くて助かるな。」

「はっ。それほどでもない。」

『コイツらどうする？』

『命令には含まれていないが、面倒だしやっちまおうぜ。』

面倒なのはこっちだよ。じゃ、さっさとやりますか。

「坂本。」

「ナオ。」

「……やるぞ。」

「坂本。全員気絶しちまつてるから、後は俺に任せて材料を持って  
いってこないか？」

「ああ。時間も惜しいし、そうさせて貰おう。」

チンピラの癖に喧嘩の仕方也不知道なのか？ 瞬殺に等しかったぞ。  
逆に坂本は喧嘩慣れしてたな。

「雄二、この連中なんだったの？」

「さあな。売れ行きがよくなったFクラスへの妨害だろ。」

明久が坂本に声をかける。ただの営業妨害だったらいいんだけどな。  
さっきの常夏コンビの営業妨害のほうがまだ優しいくらいだ。

「じゃあ、そっちは頼んだ。こっちはボツキリと聞かせてもらうか  
ら。」

「ナオ、普通そこはじっくりとかじゃないかな？」

「いや、必要だったらそういうこともするぞ？」

「明久。ここはナオに任せて喫茶店に急ぐぞ。」

「あ、うん。若干不安が残るけど。」

さあて、明久たちも行ったことだし、こっちも作業に取り掛かるか。  
楽しい楽しい尋問タイムだ

「おい、お前ら。」

「う……う……う……う……」

「起きろってーのっ！」

ポツキリ！ とまではいかなかったが良い音はした。

ゴンー！

「うぎゃあああっ！」

「あ、起きた？ じゃあこっちの話聞いてもらえる？」

「う、うう、一体なんだ……」

「質問第一。なんでこんなことをしたんですか？」

俺は一番最初に気になっていたことを聞いた。理由もなければこんなことをしないはずだ。

「へっ。誰が言うか！」

「ふーん。あつそ。じゃあ、今から選択肢をやるから選べ。」

「選択肢だと？」

「営業妨害をしたお前への罰だ。この中から選ばせてやる。」

一、女装させられて商店街を歩き回らせる。

二、女装させられて学校内を歩き回らせる。

三、女装させられて店内で接客をやって貰う。

「どれがいい？」

「どれも嫌だろ普通！　というかなんで選択肢が女装させられるしかないんだ！」

「じゃあ、メイド服とチャイナ服、あ、あとスクール水着なんかがあるぞ？」

「い、いやだ！　そんなもん着たくねえ！」

ここで逃げ道を作つてやると、人間はそれにすぐる様にして逃げるからな。

「じゃあ、どうしてこんなことをした？　喋れば無罪放免だ。」

「くっ……頼まれたんだよ。」

「誰にだ？」

「さあな。だが、この学校の教師だつてことはわかつたぜ。」

この学校の教師……信じたくない話だな。だがコイツらが嘘を言つとも思えないな……

「どうしてその依頼を受けたんだ？　お前たちにとつたら何のメリットもないはずだぞ？」

「金だよ、金。やってくれたら二十万は支払ってくれると言つていた。」

「なるほどな。金欲しさか。よくある手だな。」

そんな大金を払つても成功させたかつたんなら、よっぽど喫茶店を潰したいらしい。

そんなやつ……俺が絶対許さない。

「ありがとう。これで尋問は終了だ。」

「それなら早くこの縄を解いてくれ！ 喋ることは喋っただろ！」

「無罪放免とは言ったが縄を解くとは言っていないぞ？」

「なんだと！ この卑怯者！」

「卑怯？ それをお前たちが言うか？ ちなみに罰を与えるのは俺じゃないし。」

「なんだと？」

まあ、もう手は打ってある。楽しみにしておけ。

ガラガラガラッ！

「おい、浅斬。話とはなんだ？」

「というか、早く教室戻らせてくれよ。姫路さんたちのチャイナ姿見てたいからさ。」

処刑方法はコイツらに任せてしまおう。

「おう。用件を話したらすぐに行っていていいぞ。須川に福村。」

もつとも、用件を話したらそれどころじゃないだろうけどな。

「用件というのはだな……今ここに三人組いるじゃん？」

「ああ。なぜか縛られているが。」

「そんなことより姫路さんの」

「この三人組は先ほど姫路たちにナンパをしてアドレスを入手していたんだが、」

「「死刑だ……！」」

おーっと。いきなり死刑判決が下ったぞ。お大事に。

「な、なんだコイツら……………」

「なんかヤバそうだぞ!？」

ヤバいのは俺もそう思う。

「福村、今すぐに全部隊をここに集結させる。緊急異端審問会を開く。」

「はいっ、須川会長。直ちに。」

「じゃあ、ここは任せてもいいか？」

「ああ、任せておけ。Fクラス全員で血祭りにしてやる。」

血祭り、という単語を聞いた三人の顔は青ざめていた。

「それは良かった。じゃあ、俺は行くぞ。」

「ああ……………なに？ 灯油の発注が遅れているだど？」

犯罪臭がするので早めに教室を出よう。教室から出た俺は、入れ替わりでFクラスの連中に会ったが……………皆、目が血走っていて危ない雰囲気だったな。

ドアを閉めたとき後ろから、

『……………ケータイは細断機にかけてバラバラにしる。復元できないようにするんだ。』

って聞こえた。ちょっとやり過ぎだったかな？

## 第27話 FFF団の実力（後書き）

感想の欄がちょっとずつ増えてきているのが嬉しい作者です。

この小説を書いてから結構な時間がかかったな〜と最近思いますね。  
ん？ 時間………？

そうだ！ 次回のオリジナルストーリーは二本立てにして、  
一方は読者のオリジナル、もう一方は俺が考えた時間にまつわるス  
トーリーを作ろう！

みなさん、今から頑張って考え始めますので応援よろしくです！

ある読者の意見から更新日時を一定にした方がいいとのこと、  
これからは次回の投稿日時をここで決めたいと思います。

次回投稿は金曜日、10日で行きましょう！

第28話 嫌いな物 一生懸命な人を邪魔する人間（前書き）

前回の青春ポイント合計 ±0

・ 明久の普段の呼ばれ方に（笑） +1

・ 喧嘩するはめに、でも久しぶりだったから楽しかった +1

・ チンピラを処刑、いい気味だ +1

現在の青春ポイント合計 +3

## 第28話 嫌いな物 一生懸命な人を邪魔する人間

チンピラたちの処刑をFクラスの面子に任せた俺は教室に戻ってきた。

帰った後、召喚大会の四回戦が近かったのであんまりいる時間はなかったが。

「明久たちも四回戦か。そろそろ強い相手が出てきて苦戦する頃だろうな。」

優子と合流して四回戦に向かう俺たち。

「そうね。ナオは苦手な教科ってあるの？」

「苦手な教科？」

俺が苦手といえる教科……………一つだけあるな。

「数学……………かな？」

「それで400点台出せるアンタの底が知れないわ……………」  
「言っておくけど、中学校の頃は酷かったぞ。」

「どのくらい酷かったの？ どうせ100点満点中80点とかその辺だったんでしょ？」

「明久の点数が笑えるくらい、だ。」

「そんなに酷かったの！？ なんで？」

話にならなかったよな。あの頃は。

他の教科も全然駄目で、高校なんて本当は行けるわけなかったんだ。

「勉強しなかつたんだ。そんだけ。」  
「勉強しなかつたって……じゃあ何で今はできるの？」  
「高校は入る前に死に物狂いで勉強したからな。一日に何時間も。」  
「それだけなの？ でも、それって凄いことじゃない。」  
「凄くないよ。だって勉強しなかつた分のツケがそのまま受験勉強に移動しただけなんだから。逆にちよつとずつでもやれば良かったって、後悔してるくらいだよ。」

入試三ヶ月前、俺はこのままじゃヤバイな、って思つて勉強をしはじめた。

だけど頭に入っていない公式なんか覚えようとしたって、正直無駄だと思つてた。  
でも、あいつのお陰で俺はここまでの成績を取ることが出来た。元気にしてるかなあ。

「ん？ どうしたの、ナオ？」  
「あ、そろそろ会場に着くぞ。」  
「むう………なんか怪しいわね？」  
「そんなことないから、早く行こうぜ？」  
「………わかつたわ。急ぎましよう。」

俺の、昔の思い出だ。大切な、思い出。  
優子にはまだ話さなくていいだろう。

いつか話す日が来ると思うから………

「あつ！ 行くの忘れてた！」  
「えっ！？ 何を？」

四回戦が終わり、教室に戻ろうとしているところだった。  
竹中先生に指定された場所に行くの忘れていた。  
四回戦終わった今から行っても大丈夫かな？

「悪いっ！ ちょっと用事思い出したわ！ ちょっと行かなきゃいけないんだけどいい！？」

「い、いいけどこの後どうするの？ 一緒に回らないの、清涼祭？」  
あ、そうだった。この後、回る約束してるんだった。  
どうしょ？ あ、そうだ。優子にはちょっと待ってもらえばいいんだ。

「中華喫茶でちょっと待ってもらえないか？ すぐに戻るからさ？」  
「うーん、いいけど……すぐ帰ってきてね？」  
「おう、わかった。すぐ戻る！」

優子には喫茶店に待ってもらった後、教頭の指定された場所に向かうと竹中先生が待っていた。

「全く……待ちくたびれましたよ。何時間待たせるつもりですか？」

「はあっ……すみません。で、用というのはなんですか？」

「ああ、そうだったね。ちよつと頼まれて欲しいことがあるんだ。」

「頼まれて欲しいこと、ですか……？」

なんだ、一体？ 教頭自ら俺に頼みごとなんて。

「あなたには召喚大会で負けて欲しいんです。」

「……はい？」

耳を、疑った。

今、教頭は俺に負けて欲しいと言ったのか？

なんで、そんなことを？

「もちろんタダで、ということではない。特別にAクラスに入れてあげよう。君は振り分け試験のときに名前を書き忘れたようだからね。どうだい、悪い話ではないだろう？」

「な、なんで俺にそんなことを言うんですか？ それに今からAクラスに『俺だけ』入れたら周りから不審がられますよ。」

言葉に詰まる。どんなことを言っているのか、わからない。

「そんなもの、後で私が何とかする。取り敢えず、君には負けて欲しいんだ。それさえしてくれば後は私が全て君の面倒を見よう。」

「い、嫌です。そんなことをしたら今まで戦ってきた人たちに失礼です。それに」

そこまで言ったときだった。

教頭の顔色が変わった。

「君に拒否権はない。私の言うことにさえ従っていればいいんだ。」  
いきなりだったので、何を言おうとしたのか飛んでしまった。

「そうだね。君がどうしても嫌がるというなら、それ相応のことをしてでもその首を縦に振らせてやる。」

「!? 何をするつもりだ!」

「なあに、簡単なことさ。すぐに分かるだろう。」

どういうことだ? そう思ったときだった。

P r r r r r ! P r r r r r ! P r r r r r !

俺の携帯電話が鳴った。

「出た方がいいんじゃないか?」

教頭が不敵に笑う。まるで自分の勝ちを確信しているかのようだ。  
俺は携帯電話の通話ボタンを押した。

「もしもし?」

『ナ、ナオ!? 良かった。出てくれて。』

「どうしたんだ、明久? やけに慌てて。」

『姫路さんたちが連れ去られたんだ!』

「なんだって! それは本当か!」

『うん! あ、あと秀吉のお姉さんも連れて行かれたって!』

「優子もだと!？」

なんて野郎だ! 人質をとるなんて!

俺が断つても余裕だったのはそういうことだったのか……!

「どうだ? これで少しは言うことを聞く気になったか?」

「……………明久、すぐにまた連絡入れる。」

『えっ!?! ナオ、どうし』

ブツッ! ツー、ツー、ツー、

俺に協力をさせるためにここまでのことをするなんて……  
こちらもそれなりの対応をするしかないのか……

「教頭先生、分かりました。……………あなたの言うことを聞き  
ましょう。」

「ふん、最初から大人していれば」

「……………何でも言いつと思いませんか?」

「!?!」

「あなたの性格が、今の行動でよく分かりました。あなたは最低で、醜悪で、俺の大っ嫌いな人間だ！ そんなヤツに手を貸してまで自分のクラスを変えようだなんて、そこまで俺の心は弱くない。」

「貴様……!! 断るのか!?!」

「当たり前でしょう？ アンタのようなヤツの下で働くわけじゃないでしょう。」

「お前のパートナーがどうなってもいいのか!?!」

「それで脅したつもりか？ こちらにも仲間がいることを忘れないでくれ。」

「ふん、たかがFクラスだろう？ それがどうしたんだ?」

教頭が鼻で笑うように言ってくる。

その台詞、忘れんじゃねえぞ。

「とにかく、俺はアンタの下で働くなんて反吐が出る。俺を怒らせたことを後悔するなよ?」

「それはこちらの台詞だ。お前こそ後悔するなよ。」

教頭側の人間は徹底的に叩き潰してやる。

たとえ、相手がどんなに強いやつでも。

俺の仲間たちを邪魔し、傷つけるヤツは、絶対に。

ピッ！ P r r r r r . . . . .

「もしもし？ 明久か?」

『ナオ、さつきはどうして切ったの?』

「ちよつとな。で、どこに連れて行かれたって?」

『ああ、うん。学園近くのカラオケボックスに居るってムツツリー二が。』

「わかった、すぐに向かう。お前たちもすぐに向かってくれ。」

『言われなくてもそうするよ。ナオも早く来てよ?』

「当たり前だ。優子が攫われたんだ。行かないでどうする。」

『それでこそ、ナオだね。』

「ああ、すぐに向かうから先に着いたら待っていてくれ。」

ピッー

竹中教頭の言うとおりになってたまるかよ。

絶対に、許さねえからな……

明久の居場所に向かう最中、俺はもう一度ケータイを出してある番号をコールした。

P r r r r r . . . . . ピッー!

「あ、父さん? いきなりで悪いけど友達がピンチなんだ。“アレ”を持ってきてくれないかな?」

『“アレ”……? ああ、アレか。』

「すぐに持ってきて欲しいんだけど……今どこにいる?」

『良かったな。今、丁度家に居るところなんだ。バイクですぐに持ってきてやる。待ってる。』

「ありがとう。すぐに持ってきてね。」

「また、あの頃みたいに喧嘩か？」

「いや、今度は友達を守るためだよ。喧嘩じゃない。」

「中学のときみたいにやり過ぎるなよ？ あの後、始末が大変だったんだから。」

「大丈夫。今度の相手は手加減しないから。二度と立てなくしてやる。」

「警察沙汰にならないようにしておけよ？ じゃあすぐ向かうからな。」

「お願い。じゃあね。」

相手は先ほどのチンピラたちだろう。

手加減はしない。教頭に目にも見せてやる……………

## 第28話 嫌いな物 一生懸命な人を邪魔する人間（後書き）

今回の話はどうでしたか？

ちよっとシリアスが入ってしまいましたけど……ダメでしたか？

この話は彼の過去の出来事への伏線を張るお話でした。バカテスにあるまじきシリアスでもすみませんでした。

次の話は浅斬家の“アレ”がでてきます！

“アレ”ってなんだ？ っと思う人はたくさんいると思いますが次回のお楽しみで。

ちなみに次回の投稿は11日で行きたいと思えます！  
お楽しみに！

第29話 その背中に背負った不幸の歴史を、斬る（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 3

・教頭が黒幕だということを知る - 1

・優子たちを人質にとられる - 3

・仲間の大切さを再確認する + 3

・久しぶりにアレの準備をする + 1

・教頭の計画を叩き潰すことに燃える + 2

現在の青春ポイント合計 + 5

## 第29話 その背中に背負った不幸の歴史を、斬る

「ここが優子たちが連れ去られたカラオケボックスか……」

俺は明久たちと合流し、優子たちが連れ去られたとされるカラオケボックスまで来ていた。

「ところでナオ、その背中に背負ってるのはなに？」

「ああ、これか？ さつき父さんに持ってきてもらったもの。企業秘密だが、まあ後で分かる。」

「お前ら、そろそろ乗り込むぞ。」

「お、おい！ ちょっとは待ってくれよ。」

この場所がわかったのはムツツリーニが仕掛けた盗聴器のお陰らしい。

「……なぜ持っているのかは知らないが。」

「さて、かるくお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様？」

「いや、今日は王子様になる気はない。」

「ほう？ どうしてだ？」

「ちよつとな。今日は王子様じゃなく……鬼になる。」

「鬼……？ それは今、背負っているものと関係あるのか？」

「まあな。俺の過去の副産物だ。そんなことより早く助けに行こうぜ？ 何かされていたら大変だ。」

「……それもそうだな。行くとするか。ムツツリーニ、タイミングを見て裏から姫路たちを助けてやってくれ。」

「……わかった。」

ムツツリーニが頷く。やはり、あんなヤツに負けるわけにはいかない。

昔と同じ事をしてはいけないんだ……

「雄二、僕らはどうするの？」

「王子様の役目は昔から決まってるだろう？」

「王子様の役目って？」

「そんなの、決まってるだろ、明久？」

「お姫様をさらった悪者を退治することさ……！」

『さてどうする？ 坂本と 吉井だったか？ そいつら、この人質を盾に呼び出すか？』

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな。』

『それにもう一人、名前は知らないが厄介なのがいるらしい。さっ

き吉井を動けなくさせに行つたとき、こいつらが徹底的にやられたらしい。』

『ああ。しかも遠くのダチから聞いた話なんだが、かなり危ない奴らしい。できればもう一度事を構えたくはないんだが……。』  
『気持ちはわかるがそもいかないだろ？ 依頼はその三人を動けなくすることなんだから。』

ムツツリーニの受信機から、音楽に混じつてそんな会話が聞こえてきた。

依頼、ということやはり教頭絡みだろう。

(雄二、この連中つて)

(ああ。先ほどの奴らとその仲間つてどこか)

『お、お姉ちゃん……。』

『アンタたち！ いい加減葉月を放しなさいよ！』

受信機から聞こえてきたのは島田の声。

状況から察するにきつと葉月ちゃんを盾にとられてなにも抵抗できないところ、だろう。

『お姉ちゃん、だつてさ！ かつわいいー！』

『ギャははははー！』

中の人数は先ほどのチンピラも含めて10人だろうか？

まあ、いい。全員捻り潰してやる。

(待て、お前ら。勝手に行動するな。気持ちはわかるが、まずは人質の救出が先だ。ムツツリーニがうまくやるまで待っている)

(……了解)

坂本の言うとおりだが、俺の我慢がいつ解かれるかは時間の問題だ。

『……灰皿をお取替え致します。』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺はコッチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ！ズリー！それなら俺二番ね！』

部屋からは下品な笑い声が響き渡る。

『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせてください！』

『そうよ！早く島田さんの妹を返しなさい！』

優子と思わしき声が聞こえてきた。

チンピラに反抗している状況だろう。

『だつてさ。どうする？』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

『やつ！さ、触らないで』

『ちよつと！こつちにこないで！』

優子たちが一生に残る心の傷を受けようとしている。それだけが一番、耐えられなかった。

『ちよつと、やめなさいよ！』

『あーもう。うっせえ女だな！』

『ぎゃあっ……』

ドン、という何かを突き飛ばした音と島田の悲鳴。数秒遅れて聞こえてきたのは、重なる優子たちの悲鳴と騒音。テーブルを巻き込んだような、ガシヤアアンなんて音だった。それだけで、俺の怒りの引き金を引くには充分だった。

(明久)

(ナオ)

「行くぞ。」

(おい、お前たち!)

坂本の声が遠い。一瞬で遠くまで来たように感じる。

「おじゃましまーす!」

明久の第一声。入ってきた俺たちを見て、みんなキョトンとしている。

「よ、吉井君?」

「アキ……………」

「ナ、ナオ……………」

中では大体想像通りの光景が繰り広げられていた。良かった。まだ誰も怪我とかはしてないようだ。

「ハア? お前誰よ?」

入り口の男が声をかけてくる。この男は一番最初に明久に殺られる

だろう。

「それでは、失礼して……………」

明久は彼の手首を軽く握り、

「死にくされやああっ！」

「ほごああああっ！」

股間を思い切り蹴り上げた。

相手はその一撃だけで白目を剥いて失神していた。

「コイツ、吉井って野郎ともう一人だ！」

「テムエら、よくも美波に手を上げてくれたな！ 全員ブチ殺してやる！」

明久、なんか決まってるな……………よほど頭にきたんだろう。

……………俺も人のことを言える立場では無いが。

「て、てめえ！ ヤスオに何しやがる！」

「オイ、お前。」

「ああっ！？ なんだテムエは！」

俺はコイツの声をしっかり覚えていた。

……………優子に大変なことをしようとしたヤツだ。

「何しやがる、はこっちの台詞だあつ！」

俺は背中の袋の中の物を取り出して相手の顔面に叩きつけた。そして隙だらけの相手に蹴りを叩き込んだ。

顔が陥没したんじゃないのか？　と思うほどの鈍い音が響いた。

「ほごおおおっ！」

「優子になんて事をしようとしてくれてんだ、テメエらはよおっ！  
全員血祭りだ！」

チンピラはその場で倒れ伏せた。いい気味だ。

「ナ、ナオ！？　それは！？」

俺の手にしているものを見てその場の全員が声を上げる。  
手にしているもの。それは

「刀だ………！」

誰か一人がそう言った。周りの空気が張り詰める。  
そう、これが俺の過去の副産物。鞘から引き抜くことができない不  
幸の刀。

この刀は家に代々伝わる『サチギリノタチ幸斬太刀』だ。  
どんな幸運も斬り捨ててしまつと云われる、何とも迷惑きわまりな  
い刀だ。（鞘からは抜けないが。）

だが、この刀は俺の幸運を斬ったりはしない。父さんは不幸の刀だ  
と言ってるが、それは違ふと思ってる。だから今回の事件は、無事  
に終わる。俺はそう信じている。

今のは鞘で殴っただけだが、それだけでも十分効果がある。

「刀を持っていようが関係ねえ！ どうせ模造刀だ！ ぶち殺せ！」  
「はっ！ 甘く見られたものだな！」  
「ぐおっ！」

一人が突撃してきたのを軽く左に動いてかわし、持っている鞘で後頭部を殴った。

そして、体勢を崩したところで渾身の蹴りを放った。

「おらああっ！」  
「ごはあっ！」

その一撃で壁に直撃したチンピラは気絶した。

だが、それは相手の神経を逆なでする以外のなにものでもなかった。

「たった二人で調子くれてんじゃねえよ！」  
「舐めてんのか！」  
「・・・・・・・・っ！」

残りの数人が俺と明久を取り囲む。

「明久！ ビビるなよ！」  
「ナオこそ！」

俺は明久とアイコンタクトを取り、背中合わせになった。

「どんな相手が来ようとも、」  
「それが仲間を傷つけるようなヤツなら、」

「ぶつ飛ばす!!!」

だが、この人数だとさすがに勝てるかどうか不安だ……俺と明久でも、ギリギリかもしれない。チンピラの一人が俺たちに飛び掛ってきた。でも、そこに、助っ人が現れた。

「やれやれ……この阿呆が。少しは頭を使って行動しろってのっ！」  
「げぶっ！」

坂本の一撃によって先ほどのチンピラのように壁に叩きつけられていた。

「雄二っ！」  
「坂本っ！」  
「貸しイチ、だからな？」

そう言いながらも、他の相手に拳を叩き込んでいる。いいパンチしてる……あ、今度は膝が鳩尾に入った。

「で、出たぞ！ 坂本だ！」  
「坂本まで来ていたのか！」

坂本を見て連中が浮き足立つ。

この状況でたたみかければ、いける。

「お前たちよお。このお嬢ちゃんたちがどうなってもいいのかア？」

「バカなお兄ちゃん！ 助けて！」

「ナオ！ 助け むぐうっ！」

向こうの奴らが葉月ちゃんと優子を羽交い絞めにしていた。  
アイツら………許さねえっ！

「いいか？ おとなしくしているよ？ さもないと、ヒデエ傷を

「………負うのはお前。」

ゴインツ

「あがぁっ！」

白目を剥いて倒れる葉月ちゃんを羽交い絞めにしていた外道。

その後ろ、そこにいたのはムツツリー二だった。クリスタルの灰皿を振りきったポーズで立っていた。

確かに宣言通り酷い傷を負ったようだ。

「て、てめえ！」

「お前の相手は俺だろ？ 余所見してていいのか？」

「っ！？」

ゴッー！

「っ！っ！っ！」

ムツツリー二に気をとられていたチンピラは俺の右ストレートによつて呆気なく倒れた。

俺を前にして余所見する余裕があるとは思わなかったようだ。

「な、ナオ・・・・・・・・怖かった・・・・・・・・！」

「おついつー!？」

チンピラから開放された優子は、俺に抱きついてきた。

お、おおおおお落ち着け、俺！ 深呼吸、深呼吸・・・・・・・・

ああ、いい匂いがするなあ・・・・・・・・じゃ、なくて！

取り敢えず、俺は優子から離れた。

「ありがとう、助けに来てくれて・・・・・・・・」

「・・・・・・・・べ、別に当たり前のことをしたただけだ。」

「うん。でも、それが嬉しいの。」

「・・・・・・・・優子、何もされてないか？」

「うん、大丈夫。何もされてないよ？」

「そうか・・・・・・・・よかつたあ。」

俺の体を包んでいた緊張感が、スツと消えた。

体が酷く痺れている。少し頭も痛い・・・・・・・・ん？ 頭が痛い？

よくよく考えてみると後頭部が痛い。こんなとこ打ったっけ？

振り返ってみると チンピラの一人が俺のことを殴りつけていた。

「くっ！ これでも倒れないか！」

チンピラの一人がそんなことを言ってる。

いい雰囲気だったのに……………この野郎。

「……………い・ふ・きだった……………のに。」

「あ？ こいつなんか言ってるぞ？」

「いい雰囲気だったのに……………！！ くだばれえっ  
！」

グキヤバキヤ！

「ギヤアアアっ！ 腕が！ 変な方向に！」

「優子！ ちよっと待ってる！ コイツらシバき倒した後でもう一  
度 ！」

って良く考えたらここ危ないじゃん！ まだチンピラいるし。

てか、変なこと口走ってるし！ 誤魔化さなきゃ！

「 もう一度あとで清涼際回ろう！ だから早く学校に戻って  
る！」

「えっ？ でも ！」

「いいから！ 俺なら大丈夫！」

そついいながら俺は向かってきた奴らに片っ端から殴りつけている。

「……………わかった！ 後で戻ってきてね！」

「おっ！」

そついうと、優子たちはカラオケボックスから出て行った。

「くはははは！ それにしても丁度良いストレス発散の相手ができ  
たな！ 生まれてきたことを後悔させてやるぜええっ！」

「さ、坂本？……………明久、さっきの試合で坂本って何かあったのか？」

俺が始末する前に坂本は残りの三人をボコボコにしていた。あんなに顔の怖い坂本、久しぶりに見た。

「いや、さっきの四回戦の相手が霧島さんだったからちょっと、ね。」

「また何かしたんだろ？」

「まあ、そうだね。でも勝つためには仕方なかったんだ。」

「そうなの？　まあ何にせよ、優子たちが怪我とかしなくて良かったよ。」

「そうだね。警察沙汰じゃすまないもんね。」

それもそうだな。心からそう思う。

「よし、終わったぞ。」

「……………って早っ！」

チンピラは一人残らず床に倒れていた。

……………教頭も頼んだ相手が失敗だったな。

「ナオに明久、早く学校に戻るぞ。」

「了解。ほら行こうぜ、明久？」

「あ、うん。」

後で坂本には、黒幕が教頭だったことを伝えなきゃな。

それにしても、昔と同じことにならなくてよかった。

それだけは、この刀に感謝してもいいのかもしれない……………

第29話 その背中に背負った不幸の歴史を、斬る（後書き）

アレとはナオの家に伝わる刀でした。

その刀は、これからもナオの幸福を斬っていくでしょう。

でも、窮地に立たされたとき、その刀は力を発揮する……

……みたいな感じの設定で行こうと思いました！

ナオの過去に何があったかは、まだ内緒にしておきましょう。

オリジナルストーリーには違うネタを使います。まあ時間をコンセプトにしますが。

次回の投稿は……何日がいいかなあ？

じゃあ、14日の火曜日にしましょう！

お楽しみにしてくださいね？

第30話 大丈夫（俺たちは）、問題ない（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 5

・ 『サチギリ幸斬タチノ太刀』を使ったことによって青春ポイントが無くなる  
- 5

・ チンピラを叩き潰した + 2

・ 初めて、この刀に感謝する + 1

現在の青春ポイント合計 + 3

### 第30話 大丈夫（俺たちは）、問題ない

誘拐騒ぎの後、喫茶店に戻った俺たち。

そこは今、俺たちの貸しきり状態になっていた。

「明久、ナオ、そろそろ来る時間だぞ。」

テーブルでウーロン茶に口をつけていると坂本がそんなことを言うてきた。

「来るって、誰が？」

「ババアだ。」

ババアというと、学園長のことが。

おそらく、先ほどの連れ去り事件に関したことだろう。

「学園長がわざわざここに来るの？」

明久が坂本に聞いた。

まあ学園長が一生徒のためにわざわざ教室まで出向くなんて、普通はないだろうからな。

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせる』ってな。」

「話しねえ……。ダメだよ雄二。一応は目上の人なんだから、用事があるならこつちから行かないと。」

「用事もクソも……この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと。」

「坂本。それについてちょっと話があるんだが……。」

「ん？ なんだ、ナオ？」  
「実はだな……先ほど……」

俺は先ほどの教頭とのやり取りを話した。

「なるほど……そんなことがあったのか……」

「ああ。こっちはこっちで大変だったぞ？」

「今回の事件を裏で手引きしていたのが教頭となると、俺の推理とは少し異なるな……」

「坂本の推理、っていうと？」

「俺は黒幕がババアだと踏んでいたんだが、ナオの発言から思うに教頭はこの召喚大会で俺たちを負けさせたらしいからな。何か、理由があるみたいだな。」

「……やれやれ。賢いやツだとは思っていたけど、まさかその考えにたどり着くとは思っていなかったよ。」

そのとき、教室のドアが開き学園長が入ってきた。  
学園長は俺らの用意してあった椅子に腰を下ろした。

「まあな。俺たちだけを擁立するなんて効率が悪い話だと思っただけだからな。」

「確かに。事情を話せば優勝者に譲ってもらったことだってできたはずだな。」

「？ ナオ、今は一体何の話をしてるの？」

「バカは黙っとけ。それで、教頭のことなんです。」

「ひ、酷い！ ナオが僕のことを凄い勢いでバカにしてる！」

明久。話が分からないならちよつと黙ってほしい。

「そうさね。教頭が狙っているのは、私の学園長職の失脚だろうね。」

「？ それと、召喚大会の何の関係してるんですか？」

「賞品に問題でもあったんだらうな、多分。」

坂本の台詞を聞いた途端、学園長が苦虫を噛み潰したような表情になった。

「どうやら凶星らしい。」

「はぁ………。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……。」

でも、賞品の問題っていったら如月ハイランドのペアチケットなんじゃ……。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ。」

「ペアチケットじゃない！？ どういうことですか！？」

明久が声をあげる。まあ普通そう言うだろうけどね。

「アタシにとつたら生徒が勝手に結婚させられようが関係ないのさ。」

「となると、もう一つの賞品、『白金の腕輪』か『召喚獣限定解除装置』に問題があったってこと？」

「ああ。あの特殊能力がつく指輪と腕輪だっけ？」

少し調べたが、腕輪については二種類あるらしい。

一つはテストの点数を二分にして二体の召喚獣を呼び出すことのできる腕輪。もう一つは先生の代わりに立会人になって召喚用のフィ

ールドを作ることが出来る腕輪。

こっちは使用者の点数を消費してフィールドを展開するらしい。

「……………その両方に欠陥があったからさね。」

苦々しく顔をしかめる学園長。

技術屋にとって新技術の失敗は耐え難いことなのだろう。

「だが、その欠陥もアンタらが上位に入れば問題なくなるんだがね。」

「と、言つと?」

「その『白金の腕輪』は入出力が一定水準を越えた時に暴走するようになってしまつてね。高得点者なんかが使つと、すぐに暴走を起こしてしまつような代物なのさ。」

「なるほど……………つて、それじゃあ俺が優勝したら暴走しちゃうじゃん!」

「その点については大丈夫だよ。優勝者と準優勝者の賞品については選択が可能だからね。吉井や坂本たちが白金の腕輪を使ってくれば大丈夫さ。」

「え? そうだったの?」

「ああ。だからアンタたちが両方とも二位以上に入ってくれば暴走を起こさずに済むからね。」

「なるほど。だからわざわざ俺たちを擁立するような真似をしたのか。」

俺らに勝つてもらわないと腕輪が暴走を起こして、学園の信用が失われてしまうからな。

そうなる学園長は今の職を失い、教頭がその座に就くことになつてしまつ。

「それに、指輪のほうにも問題があつてねえ。今度は逆に高得点者じゃないと暴走するようになってるんだよ。」

「そうだったのか……じゃあ、俺たちが上位に入ることによってその両方の機械の暴走が起こることを防ごうとしたのか。」

「なるほど。だから教室の改修を渋ったりしたのか……」  
「雄二、どういうこと?」

明久が雄二に説明を求めている。  
このくらい、自分で理解してほしいと思う。

「だからな……俺たちのような『優勝の可能性を持つ低得点者』と『優勝の可能性を持つ超得点者コンビ』がいれば、優勝後のデモンストレーションを暴走なしで行うことができるだろ?」

「だからそつちの吉井や浅斬みたいなヤツが一番都合がよかつたつてことさ。」

「? よくわからないけど、褒められてるってことでいいのかな?」

「いや、違う。お前らはバカだけど勝てそうだからこいつらを召喚大会に行かせれば問題解決、うっしっし、のような感じでバカにされてる。」

「なんだとババア!」

「説明されないとわからない時点で終わってると思うんだが……」

明久たちはFクラスでも、試召戦争に出ればかなりの実力を発揮するやつらだ。

そんな戦闘慣れしている明久を召喚大会で使うのが一番都合がよかったのだろう。

「ちなみに、指輪は全教科で300点越えをしていなければ使用することはできないよ。だからそれは浅斬用に、と思つてね。」

「まあ全教科で平均的に高得点が出せるヤツなんて、この学園でもAクラスの高得点者か、ナオぐらいだからな。」

「それならここまで来たんだし、決勝戦までコマを進めたいところだな。」

「だが、そもいかない。」

「雄二、それはどういうこと?」

「教頭だ。先ほどのナオの話を聞いているならわかると思うんだが。」

「明久……いい加減理解しような?」

「し、失礼な! これでも半分くらいは理解してるよ!」

本当にそうか? と思ったけどこれ以上話がややこしくなるのは嫌だったので聞かないことにした。

「俺たちの邪魔をするってことは、腕輪や指輪の暴走を阻止されたら困るってことだろ? そんな学園の醜聞をよしとするヤツなんて、うちに生徒を取られた他校の経営者ぐらいだろうが。」

「だからそれに便乗して学園長の失脚を狙ってるのが教頭、ってことだろ?」

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、いまさら隠すわけにもいかないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。」

近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いはなさそうだね。」

「それじゃ、僕らを邪魔してきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは、」

「教頭の差し金だろうな。」

あの時は本当にマズいと思ったからな……ん? マズい?

「学園長、これってかなりマズいんじゃないですか?」

「僕も　　かなりマズい話だと思っんですけど？」  
「そうさね。学園の存続が懸かっている話になるね。」

試験召喚システムというものは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われている。そんな不安定な時期に暴走なんて起こしたら、学校自体がなくなってしまうだろう。

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を話して回収したら  
」

「明久。ここまで来てしまった以上、後戻りはできないぞ。お前らの次の対戦相手を知っているか？」

俺は小さな冊子を取り出し、トーナメント表を広げて見せた。  
書き込まれているトーナメント表を追っていくと、明久たちの対戦相手は、

「常夏コンビ……!!」

「そう。やつらは教頭側の人間。ここで勝たなかったら準優勝までが確実なものになってしまう。」

これじゃあ回収はどころか交渉すらできない。

「悪いが、アンタたちにはなんとしてでも優勝してもらっしかないんだよ。」

学園長の表情も硬い。事態はかなり深刻なところまで来ているようだ。

「まさかこんなことになっているとはな。」

坂本もここまでの話は予想外だったようだ。

「明久、坂本。こっちは心配ないが、お前らはそんな点数で大丈夫か？」

「……大丈夫だ、問題ない。」

「そうだよ、ナオ。僕たちに任しておいて。」

「本当に大丈夫か？」

「本当本当。さ、雄二。聞きたいことは聞けたし、今日はもう帰ろう。」

「そうだな。家に帰ってやることもあるし 明日も早いしな。」

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね。」

そう言つて学園長は帰つていった。

「坂本、作戦でもあるのか？ 相手は常夏コンビとはいえ、一応 A クラスの人間だぞ？」

「作戦なんかない。」

「それじゃあなおさら。」

「それでも、勝つてみせるぞ。」

坂本が、この表情を再びしてきた。俺は、この顔を何度も見てきた。そして何度もピンチを切り抜けてきた。また、この顔に懸けてみようと思つた。

「もつとも それは俺の相棒次第だがな？」

「雄二。あまり僕のことを舐めないでくれないかい？」

「明久、その言葉は信じていいのか？」

前にも聞いたような気がしたんだが……

「ナオ。あまり心配するな。俺だって最初は遊びだったが、今は本気だ。それに」

「そうだよ。心配なんてすることないよ。だって」

「常夏コンビは俺（僕）たちの実力で潰してみせるから……」  
「……」

俺は、明久たちからここまで力強い言葉をもらったのは初めてかもしれない。

明久をただのバカだと思っるのはやめたほうが良いかもしれないな。

「……ここで負けたら承知しないからな？」

「もちろんだよ。あんなのに負けてたまるかってんだ。」

「そうだな、明久。それじゃあ俺らもそろそろ行くか。」

「あ。最後に一つだけ言いたいことがあるんだが、いいか？」

「奇遇だな。俺もだ。」

「あれ、雄二も？ 僕も丁度言いたいことがあったんだ。」

俺らは互いに顔を見合わせ、こう言った。

「」「決勝戦でまた会おう・・・！！」「」

こうして、俺たちの学園祭初日は幕を下ろした。

そして、俺たちの静かだった闘志は、激しさを増していったのだ・・・

**第30話 大丈夫（俺たちは）、問題ない（後書き）**

えーと、次回は決勝戦に関わる話です。

それぞれがどのような五回戦を繰り広げるのか、楽しみにしてくださいね。

次回の投稿は17日ですので皆さん見てくださいね。

・・・まだ終わりませんよ？

みなさんに聞きたいことが一つあります。

皆さんは暇なとき何をしていますか？ というそれだけの質問です。これを見ている方がいましたら感想欄に投稿お願いします。

この質問には重要な役割も入っているので是非ともお願いします！

第31話 譲れないもの(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 3

・誘拐騒ぎ解決、教室でひと段落 + 1

・大人の汚いところが見える - 1

・優勝までのモチベーションが上がる + 2

現在の青春ポイント合計 + 5

### 第31話 譲れないもの

「優子。今日は大丈夫だったか？」

「え？ あ、うん。大丈夫。でもナオが来てくれなかったら今頃どうなってたかわからないけど。」

明久たちと別れた後、俺は優子と一緒に下校していた。

あのとき、間に合わなかったらどうなっていたか……今思い出しただけでも鳥肌が立つよ。

「それとね、ナオ。助けに来てくれたとき、すっごくかつこよかったわよ？ ……惚れちゃっぐらい……」

「ん？ なんか言った、優子？」

「いや、聞いてなかったならいいわよ。」

「そうか？ なら、いいや。」

何か小さい声でボソボソ言っていたような気がしたんだけど……

「それにしても坂本君と吉井君、準決勝まで進んだんでしょ？ 凄  
いよね。」

「ああ、まあな。あいつらにも譲れないものがあるみたいだからな。」

ここで、もし明久たちが負けてしまったらどちらかの機械の暴走を止めることができなくなる。

そうになったら、姫路の転校を阻止するどころか俺たちまで転校だ。

「……？ ナオ、『あいつらにも』ってことはナオにも譲

れないものがあるの？」

「えっ？ あ、いや、それは……………」

参ったな。別にそんなつもりで言ったんじゃないが……………  
そういえば如月ハイランドのペアチケットは勝てば俺らにくれるぞ  
うだ。

学園長はどうでもいいと言っていたし、有効に使わせてもらおう。

「そうだな……………一つ、ある。」

「それは？」

「優子を如月ハイランドに誘うことかな？」

「え……………!？」

「本当は勝つまで言うつもりはなかったんだけど、負けたとき恥ず  
かしいから……………って、優子？ どうした？」

優子が驚いた顔のまま固まってしまった。

それに顔が真っ赤で、まるでトマトみたいだな。

「おーい、優子？ 大丈夫か？（ブンブン）」

「……………」

ダメだ。反応がない……………

どうしたら……………そうだ。なにか反応することを言ってみよ  
う。ふざけ気味に。

「優子……………今日は一段と可愛いね。」

「……………」

「いつもだったらここで、『何言ってるのよ、バカ!』とか言うん  
だけだな……………。今日のはちょっと重症だな……………」

他のショックなことを言ってみるか？

「優子。如月パークのチケット、誘うのはお前じゃなくて秀吉にしようかと」

「ダメ！ 私が行く！ 秀吉なんか生かせない！ じゃなかった行かせない！」

「あ、ああ。まあそれは良いけど。……いま字がおかしくなかった？」

「ほ、本当？ ごめん、ちょっと取り乱したわ……」

あの字だと秀吉は殺されることになるんだが……  
まあいいや。優子が元に戻ったし。

「優子。でも次で勝たないとお前を誘えないぞ？ 坂本たちだけじゃなくて俺らも頑張らないとな。」

「そ、そうね。でも、次の対戦相手は凄く強いらしいわよ？」

「ん？ その相手って？」

「えーつと……」

優子が冊子を広げて対戦表を確認する。

「3 Aクラスの……遠藤って人と服部って人ね。」

「知らね。一応まだ転校生なんで。」

「バスケット部所属……って書いてあるわ。」

「へえ〜。そうなんだ。」

バスケット部は転校初日にちょっと覗いてから一度も見てないな。

どんな先輩なんだろ？ 常夏コンビみたいのじゃないと良いけど。

「まあ誰であろうと倒すぞ。な、優子？」

「うん！ がんばろうね、ナオ！」

次の試合、どうなるんだろう。

優子は強いと言ってるけど実際のところどうなんだろう。

少なからず、燃える相手とやりたいな」と思った今日だった。

次の日の朝。俺と優子は早い時間から学校に来て、補充試験を受けていた。

そして次の対戦相手について話していた。

「優子、次の試合は本気でいかなきゃ勝てないぞ。」

「え？ どうして？」

「ほれっ、ムツツリーニから貰った相手の資料。」

「わっ。」

俺は優子にムツツリーニから貰った資料を投げた。

「ええつと……ええ！？　なによこの成績の良さ……  
！」

資料には相手の成績が書かれている。

そこには相手の日本史の成績が表示されていた。

両者とも、日本史の点数は400点を超えていた。

「だろ？　今度ばかりはいつものヤツ一発目で撃つても勝てないと思っ。」

「どうしよう……私、日本史はあまり得意じゃないの……」

「大丈夫だって。俺がいるし、それに……ほらっ。」  
「？　なにこれ？」

俺がポケットから出したのはお守りだ。

去年神社で買ったやつが家から出てきたのだ。

「お守り。必勝祈願のやつ。」

「……これで勝てたら苦労しないわよ。」

「まあそうだけど、俺らは負けられないよ。それとも、ペアが俺じゃ不安か？」

「……ううん、不安じゃない。」

「じゃあ、頑張ろっぜ？　ほら、一緒に如月ハイランドに行くんだろ？」

「うん……私も足引つ張らないように頑張るね？」

「おう。それでこそ優子だな！」

優子も元気を取り戻したようだ。

それにしても、対戦相手の先輩……強くないか？

常夏コンビはそこまでの成績じゃないと聞いているが……

それにしても差があると思うんだが。  
でも、ここで負けるわけにはいかない。ここまで来てしまったんだ。  
勝つしかない。

「この勝負、譲れないな。」

「なにか言った、ナオ？」

「いいや、何でもない。」

「？」

そう。この勝負は負けるわけにはいかない。

学園の存続、教頭の陰謀、俺のプライド（？）、全てが懸かったこの勝負……………

「決勝戦でまた会おう……………か。」

様々な人間の運命が懸かった清涼祭……………

ここで勝利の女神が微笑むのは、教頭か、俺たちか、その真相は……………

### 第31話 譲れないもの（後書き）

次回、準決勝開始です。

『あれ、こんなキャラいたっけ？』みたいなのは俺が考えました。ちなみにナオの準決勝の相手は俺の先輩がモチーフです。

まあ頭も良かったし使ってみようかなと思い、ナオとの準決勝の相手に選びました。

今回、優子の出番が最近少ないなあと思い、今回の話を出しました。リアルなバカテスでももっと出番があっても良いのに……

次回、日曜日か月曜日投稿です。頑張ります。

第32話 準決勝直前の皆（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 5

・優子、照れる、可愛い + 2

・対戦相手が強敵だと知る + 1

・この試合……負けられない + 2

現在の青春ポイント合計 + 10

### 第32話 準決勝直前の皆

「それじゃ準決勝に行くのでしょうか。」

「じゃあ俺らもそろそろ行くぞ、明久。」

「そうだね雄二。美波、僕たちは抜けるけど大丈夫？」

「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。ここが大事なんだからね？」

対戦相手はかなりの強敵。

お互いに気の抜けない試合になりそうだ。

「後で私たちも応援に行きますね。」

今日も男を惑わす魅惑のコスチュームの姫路たち。

ここ最近の売り上げが好調なのは、きつとそれが大きく関係しているからだろう。

「ここまで来たからには決勝まで抜かるでないぞ？」

「……優勝が懸かっている。」

「わかってる。試召戦争の時みたいなへマはしないよ。ね、雄二？」  
「やれやれ。耳が痛いな。」

「俺もドジ踏まないようにしないとな。」

秀吉たちが突き出した手に拳を当て、俺らは会場へと向かった。いよいよ準決勝なんだな……気合を入れなくちゃ。

「試合前に妨害が来るかもしれないって思ってたんだけど、結局何もなかったね。」

「もう小細工が通用しないと思ったんだろ。それに、店にはナオた

ちがいたしな。」

「あのスタンガンは一体どこで……」

「明久。それに突っ込んだら負けだ。黙っておけ。」

試合前は俺とムツツリーと秀吉で警備をしていた。

あいつらはスタンガンを持っていたが……。どこで手に入れたんだろう？

違法品じゃなきゃ良いが……

「あとはもう何も無い。勝って決勝に進むだけだ。」

「そうだね。」

「そうこう言ってるうちにもう会場だぞ、二人とも。」

「あれ？ 本当だね。」

「じゃあ、俺らはここでお別れだ。お互いに頑張ろう、ナオ。」

「言われなくとも頑張りますよ。そっちなこそ頑張れよ?」

「ああ、絶対に倒してみせる。」

「それじゃあ、俺はこっちだから。」

準決勝はフィールドが二分されていて、隣り合って試合を行うことになる。

どちらかの試合に干渉を行うことはできないが、真横でその試合をみることが出来る。

「下手な試合するなよ？ 横で見てるからな?」

「ナオ、僕をあまり見くびらないでくれよ? これでもテストはできたほうさ。」

「それなら安心だ。気をつけるよ?」

「ナオこそ、気をつけてね?」

「おう。あ、優子をそこで待たせちゃってるから行かなきゃ。じゃあな。」

「あ、うん。じゃあね。」

明久とも別れを告げ、俺は優子の下へ駈けていく。

「いよいよだな、優子。」

「そうね。負けちゃった代表のためにも頑張らなくちゃね。」

「さ、早く中に行こう。観客が待ってる。」

「うん。みんなにいいところ見せないかね？」

「おうよ！」

それぞれの思いが懸かったこの大会……  
負けるわけにはいかないな。

『さて皆様。長らくお待ち致しました！ 試験召喚システムによる召喚大会の準決勝を行います！』

準決勝からはアナウンスの人が変わったのか、聞き覚えのない声だ

った。もしかするとプロを雇っているのかもしれないな。世間の注目を集めているし、充分に考えられる。

『出場選手の入場です！』

「さ、入場してください。」

先生に背中を押される。

俺と優子は顔を見合わせあって、観衆の前に歩いていった。

『今回、準決勝に残っているのは三年Aクラス所属、常村・夏川コンビと遠藤・服部コンビです！そして対する相手は二年Fクラス、坂本・吉井コンビと浅斬・木下コンビです！皆様拍手でお迎え下さい！』

観客が盛大に拍手をしてくれる。

準決勝でここまでの盛り上がりなら、午後から行われる決勝戦も凄いことになりそうだ。

『それではルールを簡単に説明をします。試験召喚獣とはテストの点数に比例した』

アナウンスがルール説明に入る。

もう十分に知ってることだから、俺らは聞き流して対戦相手を見ていた。

一人は俺より背が高く、もう一方は少し俺より背が低いといった風貌だ。

まあ一言で言うと特徴が無く、常夏コンビと比べるとフツー？ってところかな。

「こんなヤツらが本当に強いのかしら？ 言うのもなんだけど、弱

そう………」

「優子。そういうことはあまり言っちゃダメだぞ？ 後々あんな感じになるから。」

そう言っただけは左を指差した。

「あんな感じ？ 何が」

『残念ながら、お前の言葉なんてAクラス所属でも理解できないだろうよ。まずは日本語を覚えてくるんだな。サル山の坊主大将。』  
『て、テメエ、先輩に向かって………！』

左には険悪なムードで挑発しあっている坂本と坊主先輩がいた。

「………ごめんなさい。気をつけるわ。」

「わかってくれれば良いよ。あんな風になったら俺はきつと止められないからな。」

「そうね………」

あちらの口論はだんだんエスカレートしていった。  
なぜあんなに坂本は敵を作ることが多いんだろ………？

『まったく………常村と夏川にも困ったものだよね。何で俺らがこんなところに出てこなくちゃいけないんだよ。』

『そうだよな。ここに出て俺らにメリットないし、受験勉強も滞っちゃうし。いいことないよな。』

『まあでもあんなに頼まれたら流石にしょうがないな、って思うけど………』

相手の遠藤先輩と服部先輩が会話をしている。

なるほど。あの二人は自分たちがもし決勝までいけなかったときの

保険のためにこの二人を大会に出させたのか。  
なら、勝つことは難しくはなさそうだ。

「優子。あつちは勝利へのモチベーションが低い。力で一気に押し切れば、勝てるぞ。」

「そんなにうまくいくかしら？」

「多分……うまくいかな？ ま、力で一気に潰してしまおう！」

「要するに作戦はないってこと？」

「……さ、試合だ、優子！ 気合入れるぞ！」

「む、無視された……！ こんな調子で本当に大丈夫かしら……？」

あはは……。坂本みたいに考えられたら良いんだけど。

俺はそこまで頭良くないし、考えたところで無駄だろう。

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

説明が終わり、審判役の先生が俺らの間に立った。

「『試獣召喚』」

掛け声をあげ、それぞれが分身を呼び出した。

向こうの装備は海賊風の格好で、見た目はジャック・○パロウ？  
見たいな感じ。

武器はカトラスと叫んだこれまた海賊風の武器だ。  
そして相手の点数が表示される。

Aクラス 遠藤正也 えんどうただや & 服部弘雪 はっとりひろゆき

日本史

432点

&

412点

さすがAクラス所属。Aクラス内でも中々の点数だろう。ここまでの点数を取れる人はAでもあまりいないと優子が言っていた。

「君たちってAクラスとFクラスなんですよ？」

遠藤先輩の方が話しかけてくる。

「そうですね、それがどうかしましたか？」

「いや、ここまでどうやってこれたのかなあ、と思って。」

「普通に実力ですけど、なんか文句ありますか？」

「実力か……じゃあその女のこの方に注意してれば大丈夫か。」

「それはどういう意味です？」

「だって君、Fクラスでしょ？ 良くてもそこそこの点数しか取れてないんですよ？」

相手は俺が転校生だからか、こちらの戦闘力を知らないらしい。やはりFクラスだから舐められているようだ。

「そうだと良いんですけどね。まあ一つだけ忠告しておきます。」「なんだ？ 言ってみろよ。」

「人を肩書きだけで判断しちゃダメですよ？」

それは俺だけじゃなく、明久とかにも言えることだ。  
あいつのことだ。必ず勝つだろう。  
だからこちらもそれに答えなきゃな。

Fクラス 浅斬直貴 & Aクラス 木下優子

日本史 505点 & 396点

「「なっ!」「」

点数表示の後、向こうの二人が声を上げる。

「「こちらの本気を見せてやるうぜ、優子?」

「ええ、そうね。確実に仕留めてあげるわ。」

そう言うと、優子の召喚獣のランスを振り回した。  
仕留めるって……怖いな。

「大丈夫だ! まだ勝てないわけじゃない!」

「そうだ! 点数が離れていようがこちらは三年。操作の技術で上  
回ってみせる!」

Fクラスの実力を再認識させてやるよ。

「Fクラス最高得点者、浅斬直貴。その実力をとくと見せてやる・・・！」

こうして、準決勝が始まるのだった・・・

### 第32話 準決勝直前の皆（後書き）

次回、ホントのホントに準決勝。

なんか前フリが長くなっちゃって2話に分けることにしました。

できるだけ早く投稿したいなあ……。なんて思っていたりするので、次回からはさらに頑張りたいです。

次回、木曜日までに投稿しますね。もっと早くなるかも？

第33話 準決勝、戦闘開始・・・！（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 10

・ 勝つぞー！ + 1

・ 先輩二人が強いことが明確になる - 1

・ 日本史の点数が良かった + 2

現在の青春ポイント合計 + 12

### 第33話 準決勝、戦闘開始………!

「毎回アンタの点数見るたびに私なんかが本当にAクラスでいいの  
かなって思っちゃうわ………」

「今回は結構うまくいったからな。お前んとこの代表にだって負け  
やしないぜ?」

「本当。そうかもね。」

「まあそんな話はおいという。優子、ここまで来たからには勝たな  
きゃだめだよなあ?」

「言われなくとも。私たちの力で叩き潰してやりましょう。」

「………優子。最近言動が危なくなってきたる気がするんだ  
が………」

俺やFクラスと付き合っていると、みんなこんな感じになるのかな・  
……  
それなら注意しないと弟も真似しだしたら大変だ。

「よそ見してて良いのかっ!」

「おっと!」

相手の遠藤先輩がこちらに斬りかかってきた。

危ない危ない………もうちょっとでザックリいくところだっ  
た。

「優子! 分担して相手と応戦だ! 俺はこの先輩を引き受ける!」

「わかったわ! 気をつけてよ!」

「そっちこそ!」

優子と声を掛け合い、同時に相手に斬りかかっていく。

俺は100点ほど相手と離れているから一撃で吹き飛ばすことも可能だ。

だが相手の召喚獣は400点を超えて腕輪を装備している。

相手の腕輪の能力もわからないのにむやみに吹き飛ばすのは危険だ。

「どうしたんですか、先輩。吹き飛ばしちゃいますよ？」

「くっ！ テメエ、本当にFクラスか……！！？」

「はい。そうですけど、あなたたちより点数が高いのは、なぜでしょうね。」

「くっそ！ 三年舐めるなよ！」

そう言うと、俺の刀を弾き飛ばした一瞬に間合いを詰めた。

「もらったあ！」

「中々ですね。でも、攻撃パターンが読まれてますよ？」

「なにっ　！」

俺は腰からもう一本刀を取り出し、敵の一撃を防いだ。

そしてそのままその刀を横に薙ぎ、相手を吹っ飛ばした。

「ちいっ！ こうなったら、奥の手だ！」

「ま、待てよ遠藤！ 俺まで食らっちゃまうだろ！」

「じゃあ早くどいて！ 吹き飛ばしてやる！」

「優子！ 何か来るぞ！」

「これが相手の腕輪の能力……！！！」

先輩の召喚獣の手首が一瞬だけ輝いたかと思うと、召喚獣の目の前に大砲が設置された。

つて、大砲！？ どこまで海賊仕様なんだよ！

「撃てええっ！」

そういつと大砲からどでかい大砲の弾が飛んできた。

「やっべ！ 優子。避けるぞ！」

「あわわわっ！」

俺と優子はそれぞれ左右に逃げた。そしてその中心に大砲が落ちてきた。

ドカーン！ パラパラパラ……

着弾した瞬間。半径数メートルはあたり一面、火の海になった。直撃をすることはなかったが、爆風で互いに吹き飛ばされた。今で少し点数を削られたか……

「なんて能力だ……！」

「どうだ！ 思い知ったか！」

「だが、まだ甘いな。」

「何だと……！」

「その能力は近くにいた相手だと効果あまり見込めないようだ。それなら、」

接近戦で勝負するのみ！

俺はそう思い、一気に先輩の召喚獣と距離を詰めた。

そして横に一闪、切り裂いた。

「くっ………そお！」

相手の召喚獣は致命傷は避けたが、わき腹をやられて力なく立っている。

そろそろスパートをかけるか。

そう思った俺は、先ほどの大砲での一撃を思い出し行動に移った。

「どうした先輩？ またあの大砲は撃つてこないのか？」

挑発しながら俺が言う。大砲を撃つて来い………！

「そんなに死にたけりゃ、お望みどおり撃つてやるよ！」

相手の召喚獣が再び大砲を設置し、撃つ準備をした。よほど感情的になりやすい人なのだろう。すぐに撃つ準備をしてくれた。かかった！俺は心の中でそう思った。

俺は敵に悟られぬよう、ゆっくりと手を背中の方に伸ばし、

「吹き飛ばやあつ！」

相手の召喚獣が大砲を放つ刹那に、刀を大砲に向かって放り投げた。そして刀は出てきた瞬間の大砲の弾に当たり、爆発した。

………先輩の召喚獣と一緒に。

ドカーン！ パラパラパラ………

「ぐわあああつ！」

「遠藤！」

「さあ、残るはアンタ一人だけ？」  
「くっ……！！」

ここまできたら勝った同然。

優子と二人で攻めれば勝ちは確実

「これでも食らええっ！」

「つていきなりいつ！？ あぶなっ

」

ドゴーン！

「なんて一撃だ……」

相手は腕輪の効果、巨大化でカットラスのサイズを自分の身の丈の十倍ほどにした。

そして大上段の構えから振り下ろしたのだ。

その一撃で地面が軽く抉れるほどの破壊力である。

「次はハズさねえぜ！」

「しょうがない……。優子ちょっとこっちに……」

(ゴニョゴニョ)

「いいわ。任せて。」

優子と話し終え、相手を見た。

俺は背中の束から刀と小太刀を取り出し、頭上に一本放り投げた。

「っ！」

相手が刀に気を取られた瞬間、俺は小太刀を相手に投げた。

「　　っ！」

ガキン！

相手は大きなカッタラスを振って俺の小太刀を防いだ。だが、それが命取りだ。

「はあああっ！」

「っ！？」

後ろからは優子がランスを持って構えているのだから。

「くっ！　一発目と小太刀は囷か！」

そのとおりさ！　一発目の刀は小太刀を投げるための囷。そして小太刀は優子を背後にまで行かせるための囷。背後に回った優子が最後にトドメをさすという作戦だ！

「くっ……ここで負けるとは思わなかったな。」

最後に服部先輩が言う。

「これからはFクラスへの認識を改めてもらえますか？」

「……おう。考えといてやるよ。」

「ありがとうございます。優子。」

「わかった。」

そして優子がランスを突き刺し、この勝負は俺らの勝ちとなった。

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

「いいいよっしやああー!!!」

向こうのステージでは明久たちが歓喜の声を上げていた。勝ったんだな、俺ら。

ふと向こうに目をやると、明久と目が合った。

(ビシッ!)

(ビシッ!)

俺らはグッジョブのサインを送り互いにたたえあった。

次は、決勝。相手は明久たちだが、手加減は無用。

今までののは序章にしか過ぎない。

決勝戦での俺は一味違うということを明久に目線で伝えようとした。まあ伝わったかどうかはわからないが、きっと伝わっているだろう。

俺は出口に向かって歩き出したのだった………

第33話 準決勝、戦闘開始……！（後書き）

準決勝、決着つきましたねえ。

やっとここまで来たんだって感じだ……

まあそんなこんなで準決勝だけしか出てこなかったあの先輩二人はこれから出そうかなあと思案中です。

もっと出番あげろよ！ 可愛そうだろ！

と思う人は俺に文句言ってくださいね。番外編だかなんだかで出してあげますから。

では次回は……決勝戦までの前フリを上げます。

そして投稿日はえ〜と、金曜日！ できれば金曜日に出したいと思  
います！

お楽しみに！

第34話 うーん、女子って複雑！（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 12

・相手にとって、不足なし！ + 2

・相手の腕輪の能力にビビる - 1

・勝利！ 先輩方、まだまだだね！ + 2

現在の青春ポイント合計 + 15

### 第34話 うーん、女子って複雑！

外に出た俺は優子と別れ、明久たちと話していた。これで俺たちは優勝に進出することが確定した。

「やっぱお前らも捨てたもんじゃないな。本当に決勝まできやがって。」

「ははは。ナオ。僕らのこと舐めてたの？ 自分で言い出したことはちゃんとやるって。」

「まあ明久にしては上出来な試合だったな。特に最後はな。」

「あ、雄二もやっぱりそう思う？ 僕にしてはよくできたほうだと思うんだ。」

「ああ。明久の空っぽで、スツカスカの脳みそにしては上出来だな。」

「そうだね。雄二のヘナチヨコで読まれやすい作戦に比べたらよくできたよ……！」

ゴゴゴゴゴゴゴ……！！

お前ら。折角勝ったんだからもうちょっと仲良くできないのか？ このままだと決勝であっさり負けてくれそうだな……

「あ、そういえばナオも決勝進出おめでとう。」

「へっ？ ああ。どうも。」

不意に明久に褒められた。

ビックリした……。いきなりで反応に困った……

「ところで、次の試合って何時から？」

「午後の一時からだ。」

「午後から？　じゃあさ。その間は喫茶店の手伝いをしないか？」

「そうか。でも俺らはちょっとパスしたい。睡眠時間が少なくてな

．．．．．

「僕も．．．．．ふあゝ．．．．．」

二人が揃って欠伸をする。昨日はよほど勉強したと見える。  
だからこそ先ほどの試合にも勝てたのだろうけど。

「しゃーないな。だったら少しどこかで寝て来い。島田たちには俺から言っておくから。」

「ああ。助かる．．．．．じゃあ二時間後くらいに起こしてくれ。」

「了解。じゃあゆっくり休んでこいよ？」

「ありがと、ナオ．．．．．zzz．．．．．」

「明久。ここで寝るな。」

「ハッ！」

「それじゃあ屋上でも行ってきたらどうだ？　空も晴れてて気持ち良いぞ？」

「じゃあ、そうさせてもらおうとしよう。行くぞ、明久。」

「わかった．．．．．」

二人は眠い目を擦り、屋上への階段を昇っていった。  
俺は教室に戻って島田たちに事情を話した。

「わかったわ。そのくらいの時間なら大丈夫よ。」

「まあ、俺も手伝うからさ。決勝までは。」

「．．．．．そっか。アンタたちは決勝まで行ったのよね．．．．．」

「はあ……」

「？　どうかしたのか？　溜め息なんかついて。」

「いや、なんでもないので……なんでもないので……」

「……ほほう。明久絡みのことを見た。」

「っ！？」

「図星？　ああ。ペアチケットのことか。」

きつと、自分で勝ちあがって手に入れたかったんだろなあ。

恋する乙女は辛いねえ……

「はあ……アキがあそこまで進んじやったから坂本と行くことが確定しちゃってるのよねえ……」

「ストップ。その誤解を解かせてくれ。お前らは色々なとこまで勘違いしている。」

「どういうこと？　アキは坂本と一緒に幸せになりに行くんじゃないの？」

「その可能性は0%だ。きつと坂本がA代表を誘うと思う。」

「そういえば付き合ってるものね……」

「そのとおり。だから今度の休みにでもお前が普通に誘ってみたどうだ？」

「ちよ……いきなり何てこと言うの！？　アキが私と一緒に行きたいなんて言うわけないでしょ？」

島田って自分に自信がないのか？

この反応を見る限り、明久は島田のことをなんとも思っていないように聞こえるぞ。

「どうしてそう言いきれる？　少なくとも明久はそんなこと言わないと思っぞ。」

「えっ？　それってどういう」

「はいつ。サービス終了う〜。質問コーナーはここまで！」

「えっ!? ちょっと、もう少し」

「ダメツたらダメ! 少しは自分で考えて、自分でどうしたいのか行動してみる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあ、頑張れ。」

俺はそれだけを言い残して厨房に入っていった。

『胡麻団子二皿にウーロン茶二つ大至急!』

「あいよ。」

注文が入った。決勝戦まで休む暇はなさそうだ。

「頑張る。」

決勝戦。楽しみになってきたな・・・・・・・・

第34話 うーん、女子って複雑！（後書き）

今回は何故か、島田の出番がありました。

なぜこんなことになったのか？ 真相はわかりません。

というか、忘れました。

まあ細かいことはほっておこう！

今回はマイペースに投稿したいので、適当な日にします。  
なるべく早く投稿しますので応援よろしく！

第35話 大丈夫？ そういつ時は手のひらに入って字を書いて……………

前回の青春ポイント合計 + 15

・なぜ、二人は親友なんだろう？ - 1

・なぜ、島田は自分に自信がないんだろう？ - 1

・なぜ、俺は……………ぐおおおっ！ (あんなアドバイスを  
したんだろう?) - 2

・とういうか、アドバイスになっていたか - 1

現在の青春ポイント合計 + 10

第35話 大丈夫？ そういう時は手のひらに入って字を書いて……………

「よう。よく眠れたか？」

「うん。おかげでぐっすり。」

「喫茶店のほうはお前らだけで大丈夫だったのか？」

「もちろん。大盛況だったよ。」

「悪い…………少しは手伝ったほうが良かったな。」

「いやいや。俺はお前たちと本気で勝負したいからな。このくらい、大丈夫大丈夫。」

「そう？ それならいいんだけど、美波たちに悪かったなあ。」

お前はどんだけ人に優しいんだよ。

少しは自分のことも考えた方がいいと思わないのか？

「ああ。それなら大丈夫だ。さっき事情を説明したら『アキったら、しょうがないんだから』って言ってたから。」

「そう？ それなら安心だ。」

「ナオに明久。そろそろ試合の時間が迫ってる。行かないとマズいぞ。」

「マジで？ あ、本当だ。」

他の教室の時計を見ると、あと十分程度で一時になりそうだった。

「急ぐぞ、明久。間に合わなかったら不戦勝扱いだ。」

「そうだね、雄二！ ナオも急ごう！」

「あ、俺は優子と一緒に行くから先に行つて。」

「遅れないでね！」

「おう！」

俺たちはそれぞれの方向に走っていったのだった。

さうして、優子の所に……と。

そんな時、教頭室を通り過ぎようとしたらこんな会話が聞こえてきた。

『……こうなったらお前たち、何かネタを掴んで来い。じゃないと推薦状の話はナシだ。』

『だ、だけど俺たちだって頑張ってたぜ？ そこをなんとか、結果を残さないという意味はないのだよ。わかるかね？ 失敗したら自分で取り返す。それが社会の常識だ。』

『……わかりました。頑張ってみます。』

……マジか。

やっべくな。まだ諦めてなかったか。

ここまでしつこいならこちらもそれなりの対応を取るしかないな。

俺はケータイを取り出し、ムツツリー二に電話をかけた。

「あのさ、ムツツリー二。ゴニヨゴニヨ……ってある？」

「……. . . . . なくはないが、用意が面倒。だから、」

「わかった。俺のお気に入りで手を打とう。」

「……. . . . . すぐに用意する。……. . . . . で、どこに仕掛ける？」

「教頭室でヨロシク。OKOKわかった。んじゃーね。」

ピッー

決勝まで時間がない……. . . . . 急ごう。

『皆様！ 本日はおこしいただいて、本当にありがとうございます！  
す！ ただいま、一時をもって召喚大会決勝戦を開始いたします！』

会場のほうから大歓声があがる。  
やっぱり決勝戦だけあって、盛り上がり方も半端じゃないな。

「？ 優子、どうした？」

「や、やっぱり緊張するね……………決勝ただけあって。」

「そうか？ 別に準決勝とかと変わらないような気がするんだが。」

「そんなことないわよ……………アンタって神経太いわね……………」

そんなことを思ったことはあまりないんだが……………  
もしや、俺がKYだからか……………！？

「いやそんなはずはない……………と思いたい……………」

「いきなり頭抱えてなに唸ってるのよ？」

「いや、ちよつと考え事を……………」

「？ ふーん。」

『出場選手の入場です！』

「あ、そろそろ入場だぞ。」

「本当？」

優子と一緒に入り口に向かう。

そして段々と優子の顔がガチガチになっていった。

「本当に大丈夫か？ ガッチガチじゃないか。」

「だ、大丈夫、大丈夫。こ、このくらいどうってことないんだから。」

「

そう言うてはいるが、優子はやはり緊張していた。  
意外にビビりなんだ……………

「はあ……………しょうがないな。ほら。」

俺は優子に手のひらを見せた。

「？ な、なに？」

「手。繋いどいてやるよ。それなら緊張しないだろ？」

「ええっ！？ そ、そそそんなことして、も、もらわなくても！」

「嫌か？ じゃあ別に」

「で、でも人の気持ちをも、む、無駄にはできないし、べ、別に繋いであげても……………」

「どっちだよ……………」

顔を真っ赤にしながら喋る優子。

可愛いなあ、やっぱ。ホントに可愛い。

「ほ、ほら。手。」

「ん。はいよ。」

俺は出された手を握った。

軽く握ると優子が強く握り返してくる。

「い、行くわよ。」

「おう。」

中に入ると観客が盛大な拍手で迎えてくれた。

あ、Fクラスの連中見てるかも……………手を繋ぐのはやめとい

たほうが良かったかも。

「ナオ。来たね。」

「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ。」

そこで二人に声をかけられる。

坂本と明久はすでにステージ上に立ち準備は済ませていた。

「いや、ちよつとな。こいつが緊張しちゃってて。」

「ちよつ………!?!? 言わなくてもいいでしょ!」

「へえ〜。そうなんだ。秀吉のお姉さんってそういう面があったんだね。僕、怖そうでも怒ってるイメージしかないからちよつと意外だな。」

「………怒ってるイメージ? 意外?」

あ、やべ。地雷踏んだ。

「アナタは私がいとも怒ってるように見えるんだあ………別に怒ってるわけじゃないのに。」

「あ、いや別にそういう意味で言ったわけじゃ」

「ナオ。吉井君は私が相手をするわ。一撃で決めてあげる。」

「いや。ちよつと手加減してあげないか? フィードバックが、」

「そんなの関係ないわ。私に殺らせて。」

さ、殺気!?

このままだと俺も巻き込まれかねない!

「わ、わかった。好きにやれ。」

「ちよつとナオおっ!? 僕が命の危険に晒されようとしているに  
もかかわらず、助けないつもりか!」

「いや、今はお前の命より自分の命のほうが大事だ。大丈夫！もしもの時は葬式に行ってやるから！」

「その心配の仕方は間違ってるよ！？ 今助け」

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

アナウンスで召喚が促された。

これで明久の逃げ場は完璧に絶たれた。

「ナオ……君の事は許さないよ……！」

ぐっ！ 明久から黒いオーラが！

マズい！ 謝った程度じゃ許してもらえそうにないぞ。どうすりゃいいんだ！

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！」」

二人が召喚獣を召喚した。

俺にも逃げ場はない。ここで勝たなきゃ男がすたる。

「優子、頑張ろうぜ？」

「ええ。さつさと吉井君を串刺しにしたいわ。」

「言動、気をつけてくださいね。Aクラスの優等生さん。」

「はっ！？ ……そ、そうね。気をつけるわ……」

こんな調子で明久たちに勝てるかな……無策で勝てるほど甘くはないはずだ。坂本も何らかの作戦があるはず。

「「試験<sup>サモン</sup>召喚!!!」」

俺たちも召喚獣を出した。

戦力差はかなりあるが、相手はそれをカバーするような操作力がある。

それなら力は五分五分なはず。こちらにもあちらにも勝機があるだろう。

ついに来た決勝戦。

ここまで来たからには負けるわけにはいかないな。

第35話 大丈夫？ そういう時は手のひらに入って字を書いて……

今日はナオにちょっとだけ恋愛(?)っぽい要素を出してみたりしました。

え？ ナオと優子がくつつくのはいつかって？

俺もわからないよ！ まあ、そのうち出るから期待に胸膨らましておけw

次回の投稿は水曜日か木曜日で行きマース。

応援よろしくね！

PS

このPSってなぜだか使いたくなるよね！

第36話 決勝戦だよ！ 全員集合！（前書き）

前回の青春ポイント合計 +10

・ 決勝戦一歩手前の皆のムード +1

・ 陰謀が見え隠れ -1

・ ガチガチに緊張 -1

・ 優子も緊張してた。可愛かった +2

・ 手を繋いだ。え？ 大胆だつて？ 知るか！ +3

・ 決勝戦開始！ +2

現在の青春ポイント合計 +16

### 第36話 決勝戦だよ！ 全員集合！

「行くぞ、明久！」

「応っ！」

二人が突っ込んでくる。

ちなみに決勝戦は総合科目なので二人とはかなりの差がついている。だがそれを上回る操作力を二人は持っている。

「おりゃあっ！」

「くっ！」

明久の召喚獣が縦に木刀を振ってきた。

俺は刀を横にして一撃目を防いだ。だが、

「そこだあああっ！」

坂本がスピードを活かしたナックルでの一撃を放ってきた。息の合った二人のコンビネーション攻撃はかなりの物だった。俺は持っていたもう片方の刀を防御に使った。

「やはり一筋縄ではいかないな、ナオ。」

「そうだね、雄二。」

「中々やるじゃん。二人とも。」

だが、こちらにももう一人いることを忘れないで欲しいな。

「はああああっっ！」

「!?!? うわああっ!?!?」

ちっ。避けられたか。

明久は背後から来ていた優子の一閃をかるうじてかわした。

「不意打ちだったのによけるなんて、案外やるわね。」

「僕だって伊達に観察処分者じゃないさ。このくらいの攻撃、よけられて当然さ。」

「なら明久。これならどうだ!」

ブンツ!

「まだまだだね、ナオ! そんな攻撃当たらないよ!」

俺の攻撃をいとも簡単にかわす明久。

くそっ。操作力が高い所為か、攻撃が当たらない……………それならば……………腕輪の力で潰してやるよ!

「行くぜ、優子! あのワザ使うから下がってる!」

「オーケー! いつでも良いわよ!」

「ヤバい! 明久! アレが来るから準備しておけ!」

「え!?!? わ、わかった!」

俺は召喚獣の腕輪の効果を使った。

さあ、よけられるかな……………?

「剣ノ舞!」



「やるな。どうやってよけた？」

「ふっ。俺たちがここに来るまで何も考えてなかった様に見えるか？」

「そんなことはないが、まさかこれをよけられるとは思ってなかったよ。」

「ふっ。浅はかだったな。お前らの試合を見ていれば、こんな事くらい容易に予想できる。」

「見たのかよ。何試合目だ？」

「一試合目からずっとだ。おかげで攻略方法がだいぶわかったぞ。なに！？」

攻略方法だって！？ 俺ですら知らなかったのに！

「お前の腕輪は直線的に俺たちに飛んでいく。だが横っ飛びでよけてもウエーブするように正面に飛んでいくことが二試合目でわかった。そこで三試合目で何か方法はないかと思って、もっと細かいところに注目してみたらわかったことが一つ、あった。」

「わかったこと？」

「……床下から二十センチには刀が飛んでこないんだ。」

「なんだとおっ！？」

「その様子だと気づいてなかったようだな。腕輪の攻略法がわかった今、俺らはお前らより優位な所にいる。この勝負、もらったな。」

畜生……そうだったのか。

……でも、まだ俺には秘策がある。まだ使わないが。

「優子！ 一回普通に攻めるぞ！ お前はどっちを攻めたい？」

「私は吉井君をやるわ！ ナオは坂本君をお願い！」

「オーケー！ ザックリやってくれ！」

「ちよつ、ナオ！ 僕を殺す気！？」

「そのとおり！ まあ頑張れ！」

「チクシヨー！」

でも正直、優子じゃ明久に勝てないと思う。

明久は召喚獣の扱いに長けている。優子じゃ多分、歯が立たないだろう。

「というわけで坂本。お前の相手は俺だ。」

「腕輪の能力はもう使ってこないのか？」

「さあな？ というか普通そんなの敵に言わないだろ。」

「それもそうだ。」

「早くかかってこいよ。嫌ならこっちから行くぞ！」

俺は坂本の召喚獣に攻撃を仕掛ける。

「ふっ、その程度か！」

「くっ！」

あっさりかわされる。

畜生・・・・・・・・やるじゃん。

「まだまだあああつ！」

「うおおおおつ！」

ここから俺たちはどちらにも引けを取らない攻防を繰り広げていくのだった・・・・・・・・

「はあっ！ はあっ……………！」  
「ぜえっ！ ぜえっ……………！」

くそ……………勝負がつかないな。もう三十分は経ったんじゃないか？

それでも相手は体力があるのか実力はほぼ互角。  
このままやっていたら埒があかない……………。

「きゃあっ！」  
「！？ 優子！」

『おおーっと、ここでAクラス木下優子さんが戦死！ 残るは浅斬選手のみとなってしまう！ さあ勝負はどうなってしまっんでしょうか！』

優子がやられたか……………  
集中力が切れたか、操作でミスでもしたのだろう。

「ふう。なかなか手強かったね。なんとか勝てたよ。」  
「この前とはエライ強くなってんじゃないか、明久。」

「まあね。さあ、ナオ。残るはキミだけだよ。」  
「くっそ……………」

優子がやられた今、勝つためには剣ノ舞を使うしかないか……………  
でも剣ノ舞を使うと俺の点数から半分の点数が引かれる。  
勝負は一発つきり。確実に当てなければいけない。

「剣ノ舞！」

だが、一発なら確実にどちらかに当てることができる……………

「明久あつ！」

「オーケー！」

二人は攻撃をよけるためか、その場に伏せた。

……………それが命取りだ！

「！？ あ、待って雄二！ しゃがんだら」

「喰らええええっつ！！！！」

「な……………」

ドスッ！ドドドドドド……………！！

坂本には決まったか。

「くっ……………！ まさかそう来るとは……………！！」

「ふっ！ まだまだだったな、坂本お！」

「まさかそう来るとは思わなかったよ……」

剣ノ舞には、実はもう一つ刀を発射できる方向がある。

それは

「まさか、上空から降ってくるとは思わなかった……やられたよ。」

上空。それがもう一つの発射方向。

他の試合では一度もこの方法で撃つたことはない。

だから坂本はこの方法に対する対処方法が立てられていなかった。

「くっ……雄二がやられるなんて……!?」

「さあ明久。残るのはお前だけだぜ？」

「ナオ……流石だね。僕もそれほど点数が残っていないよ。」

「

ここで一気にケリをつける！ と言いたところだが俺の残りの点数もそれほどない。

次の一撃で決着が着くだろう。

「これでついに決着だね。」

「ああ。明久。次はお互い一撃で決めよう。」

俺たちは木刀と刀を構えた。

そして、ほぼ同時に斬りかかった。

「明久あああっ!!!」

「ナオおおおっ！！！！」

ブオン！ ザクツ！ ドシュツ！

・・・・・・・・バタツ。

召喚獣が倒れる。一瞬の時間が止まる。

・・・・・・・・・・・・・・・・アナウンスが沈黙を破るように叫んだ。

『勝敗が・・・・・・・・決まりました！ 勝者は ！』

『勝者は Fクラス、吉井明久・坂本雄二コンビです！』  
「いいいよっしやああー！！！」

ウワアアアアアアアアアア！！！！！！

観客からの歓声が上がる。

「……………あーあ。負けちゃったよ。」

「ナオ。いい勝負だったね。」

「ああ。超悔しいけどな。」

俺が明久の召喚獣の左腕を切り落とした。

だが明久はそれより早く俺の召喚獣の体に木刀を突き立てた。  
結果、俺と優子の敗北だ。

「ナオ。さつきはやってくれたな。」

「坂本……………。負けたよ、お前らには。」

「いや、ほとんど明久が頑張ったようなものだ。俺は最初のワザの  
よけ方だけで後は何もしてない。そんなことより、お前はあっちの  
心配をしなくて良いのか？」

「あっち？」

坂本が示したほうを見ると、優子が泣いていた。

「坂本。ごめん、行ってくる。」

「おう。頑張れよ。」

「そのニヤついた顔が気に入らないけど行ってくるよ。」

俺は坂本の元を離れて、優子の下に走っていった。

優子はトボトボと出口のほうに向かっていった。

あ、コッチ見てる……………気まずいな。

出口に入った時、優子がいきなりこんなことを言い出した。

「……………ごめんね？」

「……………いきなりどうした？ 謝ったりなんかして。」

「私がやっぱり足引つ張っちゃってたから……………」

「別にそんなことないぞ？ お前だって頑張ってくれたじゃないか。」

「

「ううん……………吉井君なんかにやられちゃったりした。頑張

ったって言えない……………」

相当負けたのがショックだったみたいだな……………

ちよつと落ち着かせなきゃな。

「あ……………その、なんだ。実は一つお前に隠してるものがあつてな。」

「隠してること……………」

「言いにくいな……………俺、実はさ。決勝出る前ガチガチでさ。さつき手を握ってもらわなかったら、冷静に勝負できてなかったと思う。」

「ナオも緊張してたの？」

「恥ずかしい話、その通りだ。手握ってもらった瞬間、なんつーかさ。緊張が収まったというか、なんと言うか、まあお前がいてくれたのは無駄じゃないってことを言いたかっただけさ。」

「……………そう？」

げっ、やっべ。涙目でそんなこと言われたら、なんか、変な気分になるじゃん……………！

「お、おう。あ、そうだ。この後表彰式あるから行かないと。」

「わ、わかった。そ、そうだよ。いつまでも泣いていられないし、頑張らないとね！」

優子が笑顔で返してくる。

やっぱ、優子は笑顔でいなくちゃ優子じゃないよ。

「さ、ほら。行こうぜ優子！」

「うん！」

「元気出していこうぜ！　これから色々大変なんだから。だって  
さ　　」

俺らの清涼祭は、まだ終わっていないんだから！

第36話 決勝戦だよ！ 全員集合！（後書き）

決勝戦終了。如何でした？

ナオの腕輪の能力、結構自分は気に入ってるんですけど、皆さんはどう思いましたか？

え？ 別に……ってそんなこと言わないで欲しいです。

あと何回か投稿して清涼祭編は終了ですね、多分。

次回投稿は金、土、日のどれかで行いたいと思います。

こっから頑張ってスパートかけて清涼祭編の幕を下ろしたいと思えます！

皆さん、応援ヨロシクお願いします！

### 第37話 休息は必要です(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 16

・Fクラス親友コンビと対戦 + 2

・剣ノ舞、発動!(通常) + 1

・そしてミスる - 3

・俺でも知らない攻略方法があつた - 3

・剣ノ舞、発動!(上方向) + 2

・明久との一騎打ち! + 3

・決勝戦敗北 - 4

・涙には男を惑わせる成分が含まれている - 3

・終わらない清涼祭 + 3

現在の青春ポイント合計 + 14

### 第37話 休息は必要です

表彰式と軽いデモンストレーションを終え、俺らは教室に戻っていた。

「ナオ。お前は午前中頑張ってくれた。だから今から遊んで来い。」  
「へ？ マジで？」

手伝わなくちゃな〜と思った矢先、坂本は俺にそんなことを言ってきた。

そんなら善は急げ、だ。早いとこ行こう。

「ああ。午前中は俺たちも寝ていたし、お前はちゃんと働いていたからな。そのくらいあいつらに言っても、あの様子なら大丈夫だろう。」

「あいつら？」

坂本の指差した方を見ると、

『皆さん、頑張りましょうね！』

『うおおおおっー！ 姫路さーん！』

『一緒に頑張りましょうー！』

『結婚してくださいー！』

……あれなら俺一人が抜けても大丈夫そうだ。

「それならお言葉に甘えて、そうさせてもらおうかな。」

「ああ。『好きな相手』と存分に楽しんでくるといい。」

「ぶっ！ げほっ、げほっ！ い、いきなり何言いだすんだよ！」

「ふっ、凶星か。まあ、せいぜい楽しんでくるんだな。」

「ちっ……！！言われなくてもそうするつもりだ！」

「おー怖い怖い。じゃ、頑張れよ。」

そういうと坂本は店内に消えていった。

全く世話焼きな野郎だ……

あいつも霧島と仲良くやればいいのに。

「何か言ったか？」

「うおおっ！ い、いや、何も！」

いきなり坂本が出てきやがった。

どうしてわかったんだ？ 勘が鋭すぎる……

「っと。早いところ行かなきゃ……」

折角もらった時間だ。無駄にするわけにはいかない。

優子SIDE

「……………優子。もう上がっていい。」

接客が終わった後に、代表に声をかけられた。

「えっ？ でも、代表。まだ人がいっぱい」

「……………昨日もいっぱい働いてくれた。だから、休んできて……………」

「……………でも」  
「……………昨日も、優子は休めてない。だから、今日こそ休むべき。」

代表はなんて優しいの？

それなのにどうして坂本君は逃げるのかしら……………？ 謎だわ。

「……………うん、わかった。お言葉に甘えさせてもらっね。」

「……………うん……………浅斬によろしく言っておいて。」

「わかった……………って、どうしてナオが出てくるの？ 私まだ何も言っていないよ？」

「……………優子の考えてることくらい、お見通し。」

……………やっぱり代表には敵わないわ。

本当にお見通しね。

「wak伝えておくわ。他にはある？」

「……………もう十分。早く行って……………」

「わかった。ありがとう、代表！」  
「……………うん。」

さて。早くナオに連絡しなきゃ。

ケータイを出した私はナオの番号をコールした。

p r r r . . . . .

……………出ないわね。

きっと仕事が忙しいから気づかないのかしら？

p r r r . . . . .

うーん。さっき電話したときはすぐに出たのに。  
あの時も仕事だったらしいけど……………

p r r r . . . . .

……………それにしても出るの遅くないかしら？  
もう出ないのかな……………？

「優子。」

「ひゃっ…！」

「？…どうした？ 変な声出して。」

「い、いきなり声かけないでよ、バカ！」  
「????」「ごめん。」

び、びっくりした………!  
いきなりだったから、変な声出ちゃったし………  
それに、どうしてここにいるのかしら？

「そ、そういえばさっき電話したのに出てくれなかったのは何で？」  
「へっ? ……あ、ケータイ電池切れた。」

「もう、しっかりしてよね！ 心配しちゃったじゃない。」

「ああ、ごめん。じゃあさ、優子。お詫びといったらあれなんだけ  
ど………」

「な、なに？」

お、お詫び？

別にそんなことしてくれなくてもいいのに。

「今から俺ともう一度、一緒に清涼祭を回ってくれませんか？」

ここで私は、二度目の変な声を出した。

「優子、どっか行きたいところある？」

「んー、今は特に。回ってるうちに思いつくでしょ。」

「それもそうだな。じゃあ、中華喫茶で休憩でもする？」

「いいわね。昨日はあんな事件だったから、結局何も頼めてないの。」

俺と優子は一時間ほど動き回っていた。

優子が少し疲れたので中華喫茶で休憩をすることになった。

昨日は好きなものを頼んでいいと言っていたが誘拐事件のおかげでそれも出来なくなってしまった。

だから休憩場所にFクラスの中華喫茶を選んだのだ。

「いらっしやいませ！……って、ナオじゃないか。あ、

それに秀吉のお姉さんも。」

第一声、聞こえてきたのは明久の声だった。

「よう明久。売れ行きはどうだ？」

「大会のおかげでそりゃ凄いことになってるよ。猫の手も借りたくらいだよ。」

「手伝うか？」

「いやいや。ナオは秀吉のお姉さんと仲良くやってよ。注文票取ってくるから席に座ってて。」

「おう、わかった。あ、じゃあとりあえず胡麻団子二つだけ頼むわ。」

「了解。すぐに持ってくるね。」

そういつて明久は厨房に消えていった。

「胡麻団子、楽しみだな！」

「えっ？ ナオは食べたこと無いの？」

「あ、いや、あるにはあるんだけど……」

あれは胡麻団子ではなく、バイオウエボン化学兵器だ。

「ふーん？ そうなんだ。」

「おっ、ナオじゃないか。来てくれたのか。」

坂本に声をかけられる。

「……なんだそのニヤけ顔は。」

「よう。大変そうだな。」

「まあな。そっちも大変そうだな。」

「全然楽しいから別に問題はない。」

「そうか。それならいいんだが。」

「こんにちは、坂本君。代表とは仲良くやってる？」

「ハハハ。ナニヲイツテイルノヤラ。」

痛いところを突かれた坂本は言葉が何故かカタカナのなっていた。

「ああそうだなオ。食べ終わったら早いところ出て行ったほうがいいぞ。」

「ん？ なんで？」

「あの殺気に気づかないとは、余程楽しんでいるようだな。」

はい？ 殺気？

『あ、浅斬の野郎……俺らが働いている間になんてうらやましいことを……!』

『俺の木下姉妹との甘い生活計画をよくも……!』  
『八つ裂き、ヤツ裂き、ヤツザキ、やあああつうううぢあああきい  
い……!』

「優子。食べたらずぐに出るぞ。」

「え? どうして?」

「どうしてもだ。わかった?」

「う、うん。いいけど……」

「ナオ。胡麻団子持ってきたよ。」

「お、来たぞ、優子。」

明久が胡麻団子二皿を両手に持ってやってきた。  
とても美味しそうだ。早く食べてみたい。

「どっぞ、ごゆっくり。」

「ゆっくりする余裕はないんだが……」

明久は胡麻団子置いて他の客の接客に行ってしまった。

「さ、食べよう優子。きっと美味しいから。」

「うん。それじゃ、はい。」

「ん? どうした?」

「あーん。」

「???!?!?!???!?!?!?!?!」

「そんなにビックリしないでくれる!?」

い、いや待て! 今そんなことをしたら !

『ん？ おいアレ見てみるよ。まさか、『はい、あーん』をやつて  
るわけじゃないよな？』

『まさか。この中でやるということは死と同義語だぞ？ そんなこ  
とわざわざやるわけないだろ？』

『そうだよな。もしやったら紐なしバンジーじゃ済まないよな？』

『ああ。済ませるわけないだろう・・・？』

俺の死が確実なものとなる・・・！

だが、ここでやらなかったら後で優子に何されるか・・・！  
やつても地獄、やらなくても地獄。

どうしたら・・・！！

『やつちまえよ。やらないで殺されるよりマシだろ？』

『ダメだよ！ 悪魔の言葉に惑わされちゃダメだ！ ーここはやらす  
に後で優子を言いくるめた方が生き残る確立が高い！』

俺の中で天使と悪魔が戦ってる・・・

ここで勝ったほうの言うことを聞くとしよう。

『んだと天使！ 俺の言うことが聞けないのか？ 後で優子に関節  
技喰らっても知らないぞ？』

『そつちこそ！ 僕の言うことを聞かないとクラスメイトに酷い目  
に会うぞ！』

これじゃあ決着が着きそうもないな・・・  
どうにかして

『じゃあさ。この場から逃げるっていう選択肢はどう？』

この声は      リュー君！（説明しよう！      リュー君とは死神である！      主人公設定を見てね！）

『そうすれば両方から逃げられて楽になるよ？』  
『そうか！      なるほど！』』

なるほど……ってそれだと両方から酷い目に会うじゃないか！

納得しかけたけどそれだったら天使と悪魔のどちらかを選んだほうがまだマシじゃないか！

お前やつぱりあの時みたいに俺を殺そうと

「ナオ？      どうしたの？」

「いや、俺の中にいる天使と悪魔と死神が、」

「そんなこと言ってごまかそうとしても無駄だからね？      はい、あーん。」

「くっ……！！」

腹を決めるしかない……！！

ここはやはり悪魔の意見が一番合理的だな。

お前の意見、使わせてもらっぜ……！！

「あ、あーん……！！」

「そんなに力を込めなくても……」

パクッ！

ザワザワッ！

『まさか本当にやるとは思わなかったぜえ……浅斬い……』

「……！」

「彼のものに、反逆の罰を与えねばな……！！！」  
「ヒヤハハハッ！ 八つ裂きだあつあああ！」

この場にいたら色んな人に迷惑がかかってしまう！  
とりあえず！

「優子！ ごめん！」

「えっ！？ どうし」

「この埋め合わせは必ずする！ ごめん！」

「ちよつと、どこいくのー！」

「逃がすなあっ！ 追ええっ！」

「サーチ&デース！」

「デストローイ！」

優子との甘い休憩時間は、恐怖の実践戦闘訓練に早変わりしたので  
あった……

### 第37話 休息は必要です（後書き）

今日はいつものFクラスな感じを出してみました！  
といってもこの話のタイトルどおり休息は必要です。  
休んでる暇なんかないけどね……。はあ。

休み欲しいよー！

そんなこと言っても仕方ありませんが。

今回は学園長に報告する？ところです。

そして投稿日は水曜日までに投稿します！

お楽しみに！

第38話 やられたらやり返す、これ世間の常識？（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 14

・休憩をもらう + 1

・優子と清涼祭巡り。 + 2

・恐怖！ 純粹な、はい、あーんの破壊力 + 3

・恐怖！ 純粹な殺意のFクラス - 4

・その場から逃亡 - 2

現在の青春ポイント合計 + 14

### 第38話 やられたらやり返す、これ世間の常識？

「くっそ……………手加減って物を知らないのかあいつら……………  
……………」

Fクラスのメンバーからの追跡を逃れた俺は空き教室に隠れていた。

「げっ……………！ 優子からメール超来てる……………」

ケータイを開いてみると新着メール欄に十件ほどメールが入っていた。  
た。

内容は……………さっきどうして逃げたの、か。

先ほどの殺気に何故気がつかなかったんだろう。

「とりあえず、連絡しておくか……………」

さっきのことは謝つとかないな。

そう思ったとき、電話がもう一度鳴った。

相手は……………明久か？

「もしもし。」

『あ、ナオ？ もうすぐ清涼祭が終わるよ。』

「え？ マジか？」

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各  
生徒は速やかに撤収作業を行ってください。』

ほ、本当に終わった……………！

逃げるのに夢中で時間とか全然考えてなかった！

後で優子に謝らないと本格的にまずいな……

『そうそう。雄二が学園長に報告に行くって言ってたよ。ナオも一緒にいこう。』

「ああ、行く。けど少しかかるかもしれない。」

『どうして?』

「カクカクシカジカというわけで優子に殺される。」

『なるほど……。だったらお姉さんも一緒に連れて行けばいいじゃないか。』

「えっ? それ大丈夫なの?」

「一応まだ秘密は秘密だし、言わないほうがいいんじゃないか?」

『雄二が別にいいって。秀吉とムツツリーニも来るみたいだから大丈夫だと思うよ。』

「そうか。なら説得のついでに優子も呼ぶとしよう。」

ピッー

さてと。優子に連絡するとしよう、

「で、どういうわけなの？ 逃げたりして。」  
「それには色々とあってだな……………」

優子と合流した俺は説得に苦しんでいた。

「もう……………恥ずかしがらなくてもいいのに。」

「別に恥ずかしいとかそんなんじゃないやなくて、えーと、Fクラスのやつらがだな、」

「言い訳しないでよ！ もう……………!!」

「あー、なんて言えばいいんだ……………あ、明久！ ちょっとヘルプ！」

説得に時間をかけていると明久たちがやってきた。

坂本に秀吉、ムツツリーニも一緒に。

いつもどおりのバカ騒ぎメンバーだ。

「あれ？ 秀吉じゃない。ていうか、そのカッコ……………」

秀吉はなぜかチャイナ服のままだったが。

「姉上ではないか。どうしてこんなところにおるのじゃ？」

「そっちこそどうしたのよ。ていうか、アンタはまたそんな格好して。また殺されたいの？」

「姉上の普段の格好に比べたらまともだと思っただけじゃが。」

「何ですって……………！ アンタのチャイナ服よりはマシよ……………!!」

普段の格好？　なんだそりゃ。

あ、坂本が面倒くさがつてるな……………  
早いとこ話をつけないとな。

「あー、それはだな。今からわかると思う。ここがどこだと思っ？」

「どこって……………廊下？」

「廊下じゃな。」

「そこじゃなくて……………こっちだ。」

俺は一点を指差した。

「学園長室前だ。」

「失礼しまーす。」

「邪魔するぞ。」

ノックと挨拶をして……………って、

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

「そう？ きちんとノックをして挨拶をしたけど？」

「もうちよつと敬意を払えよ。失礼だろ。」

「やっぱりFクラスってちよつとおかしいわ……」

明久は前にも注意を受けたはずなんだがな……

まあ、坂本よりはマシだけど。

「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねえ。」

学園長の登場だ。

さすがに最高責任者なだけあって優子たちも緊張してる。

「あ、学園長。優勝の報告に来ました。」

「言われなくてもわかってるよ。アンタらに賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい。」

中身はこんな酷いババアなのに緊張する必要なんかないのに。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ。」

優子たちを見て吐き捨てるように言う。

「……何か文句でもあるんだろうか（怒）」

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい  
拝んでもばちはあたらなはずだ。」

「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね。」

つまらなさそうに鼻を鳴らす。本当に可愛くないババアだ。

まあ、可愛いのは優子だけで十分だけど。

「それで、腕輪と指輪は返却したほうがいいですか？」

さつき見たけど、腕輪と指輪は高得点を出したときに召喚獣が装備する金の腕輪と違って、召喚者自身が装備するものだった。

腕輪はメカニカルな感じで、指輪は貴族とかが着けてそうなダイヤっぽい見た目だったりする。

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ。」

「え？ ナオ、不具合ってどういうこと？」

「そういえば優子は知らなかったっけ。この腕輪と指輪はちよつと欠陥品で、腕輪は高得点、指輪は低得点者が使うと暴走するんだ。」

「そうだったんだ……だからナオはここに私を呼んだんだ。」

「まあ、そういうことだな。」

説明も済んだし、早いとこ話を終わらせて欲しいものだ。

……ん？ 坂本が何か呟いているな。

「坂本、どうした？」

「いや、どうしてあいつらが俺たちとババアがつながっていると知っていたのかが気になっていてな……」

あいつらとはきつと常夏コンビのことだろう。

今更そんなことを気にしても無駄のような気がするが。

いや、待てよ？ そういえば最初この部屋に入ったとき、教頭が部屋の隅に視線を……

……凄く、嫌な予感がする。

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二とナオがこれをゲットするっていう取引を学園長と」

「待て明久！ その話はマズい！」

「え？」

坂本が真剣な顔で怒鳴る。まさか……………！

「……………盗聴の気配。」

「マジでか！」

ムツツリー二の言葉を受け、坂本が学園長室の扉を開け放った。すると、複数の足音が遠ざかっていくのが伝わってきた。

「やられたか！ 追うぞ明久！」

「ちよつ……………雄二、どういうこと!？」

「盗聴だよ、明久……………！ あの連中はここに盗聴器を仕掛けてたんだ……………!」

「なんだって!？」

「というと、今の一連の会話も聞かれていたってことよね……………」

優子がゆっくりと喋る。

もし、そうだったとしたら、

「録音とかされてて公開でもされたら、みんな仲良く転校、ハイ、サヨナラ、ってことになるな。」

「……………!」

全員が俺の言葉に息を呑む。

「今までの苦勞が水の泡とか、俺は嫌だからな。お前らはどうするんだ？」

「急いで後を追おう！ 秀吉とムツツリーニ、それに秀吉のお姉さんも協力して！」

「うむ！」

「……………（コクリ）」

「わかったわ。仲良く転校なんて、嫌だもの。」

みんなは揃って学園長室を飛び出す。  
俺はその前に確認することがあるな。

「この辺りか……………？」

「なにをしているのさね。アンタは。」

「いや、盗聴器が仕掛けられている位置を把握しよう」と、

確か、教頭が見ていたのはこの辺だったはず。

「お、あったあった。」

「どうしてある場所がわかったんだい？ そんなわかりにくい場所で。」

「教頭がこの辺りを数回ほど確認していたんでね。すぐにわかった。」

まだ、これには情報が残っているだろう。  
ぶっ壊しておけば、平気だろう。

「……………ナオ。」

「うおわっ！ ムツツリーニか。どうした？」

「教頭室に仕掛けた『アレ』はどうする……………」  
「？」

「あ、アレ？ ちゃんと録音できてた？」

「……………バツチリ。」

「あんたらは一体何の話をしてるんだい……………」

学園長が聞いてくる。

ふっ……………何を言っているのやら。

「まあ、やられたらやり返すのが、世間の基本ですからね。」

やられたことは、徹底的にやり返す。

これ、常識でしょ？

第38話 やられたらやり返す、これ世間の常識？（後書き）

感想ページに優子可愛いよと書かれていて、メッチャ嬉しかった作者です。

今回は前回の後書き通り、報告の場面を出しました。

次回、一混乱起きます。

次もオリ展開混ぜ込む予定なので、頑張りたいと思います。

次回投稿は金曜日くらいまでには投稿したいです。

これからも、応援よろしく！

### 第39話 盗聴、ダメ、絶対(前書き)

前回の青春ポイント合計 +14

・清涼祭、終了 - 2

・なぜか秀吉がチャイナ服のまま - 1

・盗聴発覚！ また転校になる確立が！ - 3

・やられたら、やり返す(ジャ アン原理) + 2

現在の青春ポイント合計 +10

### 第39話 盗聴、ダメ、絶対

「明久、今どこ!？」

『放送室! でもやつらはいなかったよ!』

「了解! 俺はとりあえず外を探してみる。発見したら即効連絡で!

『オーケー!』

ピッ!

急いで見つけないと大変なことになる。

俺は急いで外に出た。

「あれ? 浅斬君じゃないですか。どうしたんですか?」

「おつ姫路。ちょうど良かった。あのさ、変な頭の先輩二人組みを見かけなかったか?」

「えっ? うーん……見ていないですけど。それよりも吉井君を見ていませんか? さきほどからずっと探しているんですけど……」

「え? 明久ならさっきまで放送室にいたけど……」

あ、でも今は別の場所にいるかもなあ。

「そうですか……まったく吉井君たらしようがないですね。」

「で、どうして明久を探してたんだ? 何か用でもあったのか?」

「あ、いえ。大した用事じゃないんですけど待ち合わせをしていたのに来てくれなくて……後で吉井君にはちゃんと怒っておきますから。もう、約束を忘れちゃうなんてどうしようもない吉井

君ですね。」

姫路はそう言っただ怒ったような表情を見せた。

こいつは明久がどうしていないのかを知らないのか？

「何で明久が約束の場所に来なかったかわかるか？」

「え？ いえ、知りませんが……何かあったんですか？」

「お前のためだよ、姫路。」

「わ、私のため、ですか？ それはどういう」

「自分が今どういう状況にいて、どうなりそうだったのか。そして明久がそれを知ったらどういう行動を取るのかを考えたら簡単にわかるんじゃないのか？」

「あ………！」

なんかやっとなんかあったって感じだな………

「んじゃ、俺も用事があるからまたな。」

「あ、はい………」

姫路もわかったようだし、早いとこ常夏コンビを見つけてなきゃ。

「ムツツリーニ、あいつらが行く場所の予測はできるか？」

闇雲に探しても見つからない。

そう思った俺はムツツリーニにヤツらがいそうな場所の見当をつけてもらっていた。

そうするとムツツリーニは双眼鏡を取り出し、ある一点を見てこういった。

「……………見つけた。」

「何！？ どこに!？」

「……………清涼祭のために設置された放送機材がある、新校舎の屋上。」

屋上か……………

幸いまだ準備に手間取っているようで、放送はまだ当分できそうにないようだ。

「なるほど……………だったらさ、教頭室に仕掛けておいたヤツをさ……………(ゴニョゴニョ)」

「……………それはいい考え。すぐ準備する。」

さすがはムツツリーニだ。

機械のことは全く分からない俺だが、こんな俺でもムツツリーニの機械に対する技術力は凄いと分かる。

ここまでできたらプロの域だ。

「つと、そうだな。明久たちにも言っておかなくちゃな。」

俺は『吉井明久』の番号をコールした。

『もしもし、ナオ！ 見つかった！？』

「ああ。新校舎の屋上にいた。」

『なんだって！？ その距離だともう間に合わないよ！？』

「大丈夫。俺とムツツリーニで対策を練ってある。安心しろ。」

『そ、そうなの？ でも、二人だけで大丈夫なの？』

「一応な。でも、放送が終わったら機材をぶっ壊して欲しいんだ。それ以上放送できないように。」

『この場所から放送を止めるには、どうしたら』

やはり、俺らがあかしらの行動を取って機材を壊すしかないのか。でもそれだと常夏コンビに見つかってしまっしな……

『ナオ。機材の破壊は任せて。必ずやってみせるから。』

「明久！ できるのか？」

『もちろん！ 任せておいて！』

「よし！ 了解したぜ！」

ピッー

これでは俺らが屋上で放送機材に細工するだけだな。

「教頭に一泡吹かせてやろうぜ、ムツツリーニ？」

「……………この学園は気に入ってる。」

「それは女子の制服が可愛いからか？」

「……………黙秘権を主張する。」

「わかったわかった。じゃ、その学園を潰そうとしているヤツには、

痛い目見てもらわないとな？」

「……………もちろん。」

ムツツリーニ愛用、盗聴機でな……………！

### 第39話 盗聴、ダメ、絶対（後書き）

はい次回はあの話（ちょっと変えて）を投稿したいと思います。

オリジナルストーリーは今、構想を組み立てているところなんで、楽しみにしてね！

次回投稿は日曜日くらいまでには投稿できるように頑張りたいです！  
これからも応援よろしく！

第40話 グーで殴ると自分の手も痛くなるよ(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 10

・ 姫路に常夏コンビの場所を聞くが有力な情報は得られず - 1

・ 明久つて、なんでモテるの? - 3

・ ムッツリーニは機械のプロ + 2

現在の青春ポイント合計 + 9

## 第40話 グーで殴ると自分の手も痛くなるよ

「常村。準備できたか？」

「大丈夫だ。へへっ。これが流れりや俺たちの逆転勝利だな。」

「そうだな。それじゃあ早速流すか。」

「おう。そうだな！」

(ムツツリーニ。頼んだ！)

(……………任せておけ。)

『……………ああ、学園の皆！ 今から話すことをよく聞いてくれ！』

常夏コンビの一人、モヒカンの方が放送を行っている。

その間にムツツリーニが中に放送機材の中に入っているテープと、ムツツリーニが盗聴したテープを入れ替えた。

『今からあるテープを流す！ これは学園に関わる大事なものだ！ 皆は心して聴いてくれ！』

そして、モヒカン先輩は放送機材の再生ボタンを押した。

(来るぞ、ムツツリーニ……………！)

(……………心配するな。)

『……………えとは……………よ……………や……………った……………』

スピーカーから音声が聞こえてくる。

その声の主は

『学園長を失脚させることができれば、私の地位は一気に上がるだろう。やはり、あの不良たちにFクラスのヤツらを襲わせたのも無駄ではなかったな。』

「な、なんだこれ！？ スピーカーから教頭の声が！？」

その通りだ！

ムツツリー二には事情を話し、教頭室に盗聴器を仕掛けてもらっていた。

そして先ほど入れ替えたテープは教頭室で録音したものだ！

この放送が流れたことによって、教頭の信用はガタ落ちになるだろう。

「常村！ どうしてこんなもん流してんだよ！ 俺らの推薦状の件が取り消されちまうじゃねえか！」

「俺だつてこんなもの流すつもりはなかったよ！ どうしてこんなものに………！ とりあえず今は間違いだつたと放送で

ー

おーっと。そうかないぜ？

俺はケータイの送信ボタンを押した。

すると、

『いくよ雄二！』

『やれつ明久！』

『ファイヤー！』

「急いで訂正を

おおおおっ！？」

「どうした常村！

何か問題でも

ゲエツ！？

マジかよおっ

!？」

「とにかく伏せるおおっ!!」

花火が飛んできた。

ドオン！ パラパラパラ

「あいつら……まさか花火を使うとは……」

破壊は任せるといつていたが、まさか花火を使うとは思わなかったぞ。

後で聞いたが明久は打ち上げ花火アタック（そのまんま）と名づけたらしい。

つて、冷静に考えるとそれってマズくないか？

「ムツツリーニ！ 逃げるぞ！ ここにいたら俺らまで巻き込まれるぞ！」

「……了解。」

こんなところにいたら爆発に巻き込まれて死にかねない。

俺たちは屋上から脱出した。

すると、教頭室のほうからも凄まじい爆音が聞こえてきた。

「まさかあいつら……」

P r r r r r !

するとケータイに着信が入った。  
画面には明久が表示されていた。

ピッ！

「おい明久！ 破壊に花火を使うなら事前に言ってくれ！死にかけるところ」

『ナオ！ 今どこ！』

「はあっ？」

随分焦っているみたいだが、どうしたんだ？

「ええつと、屋上に続く階段だけど……」

『じゃあ今すぐそのまま下に降りてきて！ そうしたらすぐに会えるから！』

「えっ？ 何でここじゃ」

ブツッ！ ツーツー

切れた……

しょうがない。俺から行ってやるか。

「ムツッリーニは放送機材の破壊の確認と、教頭室の状況の確認に行ってくれ。」

「……了解。」

俺は明久と合流するために階段を降りていった。

さっきは急いでるみたいだったけど、どうしたんだろう？

そんなとき階段を降りている最中、前から坂本と明久がやって来た。

「おい、明久！ 今そっちに」

ツルツ

あ、やべ。

「久しぶりにこのパターンかよっ！」

「ってナオ！ ちょうどいいところに………ってああああっ！」

俺は階段を転がり落ちていった。そして、

「ぶべらっ！」  
「がくほっ！」

坂本と明久に直撃した。

そのまま階段を転がり落ちて行く俺たち。そして壁にぶつかったところでようやく止まった。

「ナオ！ どうして落ちてきたりしたんだ！」

「どうしても何も坂本！ 足が滑っただけだ！」

「えばって言うな！ ってこんなことしてる暇はなかった！

早くしないと鉄人が来て

『お前は西村先生と呼べと何度言えば分かるんだアアアッ！』

「ぐけぶっ！」

「さ、坂本おっ！？」

「ゆ、雄二！？」

さ、坂本が五メートルくらい吹き飛ばされたぞ………！  
しかも、この声は

「さて、お前たち。これで逃げ場はなくなったな。観念しろ。」

生活指導、筋骨隆々、鉄拳制裁の西村先生の声だ………！  
しかも、顔を見る限りめっちゃ怒ってるよ！？

（あ、あああ、明久！？ なんで西村先生はあんな怒ってんだよ！  
？）

（ナオもさつき見てたでしょ！？ 花火の打ち上げと教頭室の爆破  
だよ！）

(なんでそんなことしてんだよ馬鹿あ！ 怒るに決まってるだろそんなの！)

(そうでもしなきゃ機材の破壊はできなかったし、ちやうど逃げたところにナオが降ってきたんだよ！ 捕まっただのはナオがいけないんじゃないか！)

(んだと！)

「浅斬。お前も共犯か？ お前が屋上から来たことといい、さっきの放送といい、お前から以外がするとは思えん。」

「ち、違うんですよ先生！ 僕は学園の存続の為に、」

「存続だと！？ 馬鹿を言え！ たった今お前らが破壊したばかりだろうがあ！」

「ひでぶっ！」

「明久あ！？」

西村先生の拳によって吹き飛ばす明久。

なんて破壊力だ……！ 食らったらひとたまりもない！

「さて、残るはお前だけだ浅斬。大人しく、生活指導室に来てもらおうか？」

「くっ、い、嫌だ！ 俺は無実だ！」

こんなところで連れ去られてたまるかあああつ！

「おりゃあああああつ！！」

俺は渾身の一撃を西村先生の腹に叩き込んだ。

どうだ……？

「……はっ。そんなものか。次はこちらの番だな……」

・!  
」

ま、全く効いていない……だど。  
どんな体してんだこの教師は！ 本当に人間か！？

「ふんっ！」

西村先生が拳を構え俺に突き出した。

次の瞬間、俺の視界が真っ暗になった。

そして目が覚めたとき、そこは生徒指導室だった。

俺の初めての清涼祭は、嬉しさ、怒り、哀しみ、楽しさの入り混じる壮絶なものとなった。

「……それでお前たち。どうしてあんなことをしたんだ？ 言うてみる。」

「「「学園の存続のためです！！！！」」」

「まだ言うか！」

そして今日の清涼祭の思い出は、恐怖と痛みで埋め尽くされていた……

#### 第40話 グーで殴ると自分の手も痛くなるよ(後書き)

打ち上げ花火アタック！ やってみたいですね。

夏といえば花火。でも最近は大きな花火を見に行っていないません。息抜きしたいぜ・・・と思う作者でした。

今回の話はどうでしたか？

特別に変えたところはあまりないですけど、自分的にはうまくできたと思います。

ちなみに清涼祭は次回か次々回ぐらいで完結、そこから番外編、後にオリジナルストーリーとやっていくつもりですので応援よろしくお願いします！

次回の投稿は、水曜日で行きたいと思います。  
みんな、見てね！

〜第二部閉幕〜第41話 お酒は二十歳になってから！（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 9

・スピーカー変更作戦成功！ + 2

・打ち上げ花火アタック（明久命名）！ + 3

・落下（二文字だけで何が起こったかわかった分かったアナタは凄  
い） - 3

・恐怖！ 鉄人生活指導（という名の鉄拳）フルコース！ - 3

現在の青春ポイント合計 + 8

〜第二部閉幕〜 第41話 お酒は二十歳になってから！

「西村先生……俺まで殴ることないじゃないか……！」

「ナオも殴られたってことは、遂に鉄人にFクラスの危険人物として数えられたね！」

「なんだとおっ！ 冗談じゃない！」

「それにしても、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか。」

「うん……僕も随分と殴られたよ……」

「俺も……あ痛てて……」

結局逃げ切ることはなく、捕まってしまった俺たち。

あの人、絶対霊長類超えてるよ……

「それにしても、よくあれだけの事件を起こしたのに嚴重注意で済んだな。」

教頭室爆破という凶悪犯罪者でもしないようなことをやってのけたのだから、良くて停学悪くて退学 と思つてたんだけど、実際は嚴重注意という拍子抜けするほど軽い処分だった。

「どうせ学園長が裏で手を回したりしたんだろうな。」

「今回の処分のこと？ そうだろうね。そうじゃなければこんなに軽い処分なわけないもんね。」

「確かにな。まあこれで貸し借りはなくなったわけだし、ギブアンドテイクってやつだろ、坂本？」

余談だが、教頭室に花火が飛び込んだおかげで、修繕という名目でガサ入れが始まったそうだ。こうなると学園長は徹底的に教頭を調

べ上げて、その尻尾を掴むだろう。

まあ何にせよ、学園が平和になったのは良いことだ、うん。

「む。やっと来たようじゃな。遅かったのう。」

「……………先に初めておいた。」

「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさ。」

俺らが集まったのは近所の公園。

他のFクラスのメンバーも既に一緒になってワイワイやっている。

これはこれで店とかでやるより楽しそうだ。

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう。」

「……………(コクコク)」

「……………コイツと同じ扱いとは不本意だ。」

「それは僕の台詞だよ……………」

「お前ら。俺もいることを忘れてくれるなよ？」

俺、ただでさえ転校生なんだから周囲の目が……………

「ナオにいたっては『謎の天才転校生』、『超不運のテロリスト』、

『××××』など様々な噂が立っておるからのう。」

「ナニそれ!? 特に最後のやつ!」

「ははは、ナオ。お前も遂にFクラスの一員だな!」

坂本が缶ジュースを片手に俺に話しかけてきた。

「うるさいなあっ!……………少しは自覚あるけど。」

「ははは! まあお前も飲んだらどうだ? いっぱいあるし、片付けないとな。」

「・・・・・・・・それもそうだな。よし、今日だけちよつとハメ外すか！」

俺は束になつてる缶ジュースから一本取り出し、一口飲んで・・・  
・・・つて、

「ぶほおっ！ ゲホゲホ！ ごほっ！ ごほっ！」

なんだこりゃ！ 物凄くマズイ・・・！！

缶を良く見ると、『大人のオレンジジュース』つて・・・誰だ！ オレンジジュースと間違えて買ってきたやつは！

俺は極端に酒を飲むことができない。

なんていうか・・・拒絶反応のようなものが出たりする。

「ハッ！ 殺気！」

「・・・・・・・・雄二。私に黙ってこんなところで何しているの・・・  
・・・？」

あれ？ A代表じゃないか？

ここまで坂本を追いかけて来るなんて、余程坂本のこと好きなんだな。

いや、一途と言つべきか・・・

「しょ、翔子！ ま、待て！ これはただの打ち上げのようなもので  
」

「・・・・・・・・それとこれとは別。何で私には言ってくれなかったの？」

「いや、お前はそもそもクラスが違つと、」

「・・・・・・・・許さない。」

あ、アイアंकローだ。

パキユツ

小気味いい音がした後、坂本は動かなくなった。

……合掌。

「坂本君も素直じゃないわよね。もうちょっと仲良くすればいいのに。」

「なんだ優子。お前もきてたのか？」

「うん。代表についていたらこの公園に着いてね。そしたらFクラスの皆がいるから。」

「坂本に発信機でも付いてんじゃないのか……？」

「うーん、その可能性は否定できないわね。あ、Aクラスのメンバーも来てるのよ？ 愛子とか、久保君とか。」

確かに周りにはAクラスとFクラス同士が一緒になって騒いでいる。一応アルコールを含んでいるわけだし、気分が変になるのは仕方ないか。

「あ、このジュース貰うね？」

「おう……って、優子！ 実はそれお酒だから飲まないほうがいいが、」

ゴクゴクゴクゴク……

って、メツチャ凄い勢いで飲んでる！

喉でも渴いてたのか？

「ゆ、優子？ 大丈夫か？」

しばらくして、優子の顔が赤くなっていった。

……完璧に酔ったな。

「ナオおっ？ これ、苦いねえ〜？」

「大丈夫か？ 凄く酔ってるみたいだけど……」

「らいじょ〜ぶ。酔ってなんか、にやいんだから。」

「うんうん、わかったから。その喋り方で一目瞭然だからな。」

「むう〜……信じてないわね……？」

優子がジッと俺を見つめてくる。

うっ……可愛いかも。

「ねえっ？ ナオって好きな子とかいるの？」

「へっ!？ い、いやなんと言っか……その、いきなり過ぎて……」

酔ってる所為とはいえ、こんな質問がいきなり出てくるとは思わなかった。

それにしても、酒って以外に酔いやすいものなのかな？

周りを見回してみてもテンションの高い人が多いし、やはり日本人は酒に酔いやすいと、

『ムツツリー二君の分からず屋っ!』

『・・・・・・・・・・・・・・・・!!!(ブシャアアアアッ)』

『しょ、翔子! これ以上は・・・・・・・・!! 許してくれ!』

『・・・・・・・・私に黙っていたことを後悔しなさい・・・・・・・・』

『・・・・・・・・ウチが少し目を離したら、その隙に一体何をして・・・・・・・・!』

『え!? み、美波! 違うんだ! これは別に何も・・・・・・・・』

『!』

みんな酔ってないな。いつも通りだ、うん。

え? 常識って何? 食えんの、それ?

「ふあ〜っ・・・・・・・・眠い、かも・・・・・・・・」

「あれ、優子眠いの?」

「そうっばいかも・・・・・・・・ふあ〜っ・・・・・・・・」

アルコールに弱いのか? 飲んですぐに眠くなる人とかいるらしいしなあ。

ベンチに座っていた優子はウトウトと眠り始めた。

「優子、ここで寝るなよ?」

「うーん・・・・・・・・じゃあこっやって寝る。」

そういうと優子は俺を膝枕にして眠ってきた。

・・・・・・・・って、ヤバイだろおおっ!!!!

何がヤバイって、周りの目とか、俺(の理性やら本能)とか!

「ゆ、優子!? そういうのはちゃんと自分の心に決めた人に

」

「・・・・・・・・(すーすー)」

「……………い、いや？ 別に残念とかじゃないぞ？ ちょっと変なこととか考えてないよ？」

でも、この心に残ったモヤツつとしたものは一体なんだろう……………

「……………全く、しょうがないな……………秀吉！ お前は酔ってないか？ 酔ってないなら優子を家まで送って行って

「大丈夫、問題ない。」

「秀吉！ 爺言葉を使え！ 酔っているとはいえそのネタはもうちよつと後で使え！」

やたらカツコいいこと言うと思ったら×××ダイネタじゃないか！ わからない人いたらどうするんだよ！

そのネタはもつと後でも使えるんだ！ だからここで使いすぎちゃいけない！

秀吉もあんな調子だし、優子はしばらくここで寝かせるとしよう。落ち着いた俺はさっきの優子の言っていたことを考えていた。

「それにしても、好きな人が……………」

俺は優子の質問を思い出した。

「好きな人はお前だ、って言ったらどういつ反応するのかな？」

きつとビツクリするだろう。

でも正直なところ、俺は告白するのが怖い。理由は単純。振られるのが嫌だからだ。

だから今はまだ、言葉にすることができない。

「俺がもつちよつと勇氣あればいいんだけどさ。」

膝の上に乗っている優子の頭を撫でた。

でも、こんな終わりも悪くないかな、なんて思っていたりする。

そんなこんなで俺の清涼祭は幕を下ろしたのだった……

『』』』……このまま終わると思うなよ、ナオオ……  
『』』』

まあ、このまま終わるとは思ってなかったけど。  
後日、俺とFFF団との因縁の戦いが起こったのは言うまでもない  
だろう。

〜第二部閉幕〜第41話 お酒は二十歳になってから！（後書き）

皆さん、お酒は二十歳になってからにしましょうね？

そんなこんなで第二部閉幕しました！

遂に終了いや〜長かった！

人の心って難しいですね〜、陰謀とか、策略とか。

意見や感想、この表現はおかしいんじゃない？ っるのがあったら遠慮なく言ってください。

お待ちしております！

それでは！ 読んでくれた方々ありがとうございました！

次回は番外編です。お楽しみに！

番外編 F代表とA代表が遊園地へGO！ な話 〳前編〳（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 8

・打ち上げ特有のムード + 2

・お酒、ダメ、絶対 - 1

・優子、可愛い、マジで + 3

・俺の常識の崩壊 - 2

・優子の寝顔 + 3

・波乱の予感 - 3

現在の青春ポイント合計 + 10

番外編 F代表とA代表が遊園地へGO！ な話 前編

二年F組 浅斬直貴さんのコメント

昔俺が中学生の頃、俺の親友が言ってました。

『ナオ。男ならよ、何か一つでも一番になれるようなものを持ってなきゃダメだぜ？』

そんな親友に一言、言いたいです。  
俺、こんなんでいいのか………？

以上、

【ドジっ子ランキング？1】

【正義感が強そうな人ランキング？1】

【目立つ転校生ランキング？1】

【校内いい人ランキング？1】

の四冠を達成した『目立つのはあまり好きじゃない男』浅斬直貴さんからのコメントでした。

尚、転校生で一番モテそうなランキングでもノミネートされていましたが、ある一部の団体よりかなりの苦情が殺到したため除外となりました。

.....

「明久。」

「ん？ なに、雄二。」

「そういえば、例のチケットはどうした？」

「例のチケットって 如月ハイランドのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。今週末がプレオープンの日のはずだが。」

「丁度身近に結婚を考えている人がいたからね。その人にあげたよ。」

「そうか。そんなヤツがいるなら如月グループの都合のヤツらも大喜びだろうしな。」

「そうだね。うまくいけば全員が幸せだもんね。」

「その連中、うまくいきそうなのか？」

「うん。後は時間ときっかけの問題だと思っただ。」

「そうか。うまくいくといいな。」

「大丈夫。きつとうまくいくよ.....」

P r r r r r

「はい。浅斬　　って明久か。どうしたこんな休日の朝早くに。」

『今日、面白いことが起こるんだけど一緒に見に行かない？』

「面白いこと？　なんだそりゃ。」

『雄二が如月ハイランドに……………（ゴニョゴニョ）』

「それはいい考えだな……………！　すぐに準備しようじゃないか！」

『あ、ちなみに人手が足りないから誰か手伝える人を一人くらい探しておいてくれる？』

「勿論だぜ！」

『じゃあ、また後でね』

ピッ！

「なあ優子。今日は一緒に如月ハイランドに行こうぜ？」

「えっ！？　きよ、今日！？　やだ、まだ何も準備してない……………

……………」

「あーごめん。説明が少なかった。如月ハイランドに行って、あることを手伝おうぜ？」

「て、手伝い？　なにするの？」

「ん？　とある二人のきっかけ作りだつてさ。」

「こちら、コードネーム転校生。お馬鹿さんは応答してください。」  
『どうぞー。』

「ターゲットを確認。こちらの準備は完了した。大至急スタッフとの作戦を実行しろ。」  
『了解。これから作戦に移ります。』

P r r r r r ! P r r r r r !

「? どうしたお馬鹿?」

『ごめん、僕のケータイだ。非通知設定? はいもしも? どちらさまですか?』

> . . . . . キサマヲコロス<

『え!?! なになに!?! 本当に誰!?! メチャクチャ怖. . . . .』

ブツッ、ツー、ツー、ツー

「. . . . . 俺たち来世でまた会えるといいな!」

『ちよっ、ナオ! そういう冗談はやめてよ!』

「演劇バカさんに優等生さん、そちらの準備はどうですか?」

『お化け屋敷のセッティング完了しました。いつでもOKよ!』

『会場設営はバッチリじゃ。わしの演技にも抜かりはない。ところで、そちらの様子はどうじゃ?』

「おっと、そろそろ如月ハイランドに移動するみたいだな。」

『了解じゃ。わしも後でバックアップにまわる。ところでナオ。どうしてこのようなコードネームなんか付けたのじゃ?』

「いや。最近見たスパイ映画が面白くてその影響が。まあ、感じ出るだろコツチのほうか?」

『そうかのう?』

「そういうもんだよ。帰国子女さん、Fの女神さん。そちらの準備はどうですか?」

『バッチリです!』

『ウチもいいわよ!』

「エロ魔人さんも準備はいいですか?」

『………エロくはないが、準備はできている。』

「よし! やつらは後十分程度で目的地に着くだろう! スタッフの合図があり次第、本日の『坂本雄二と霧島翔子をくつつけちゃおうぜ! 作戦』を実行する! みんな、手を抜くんじゃないぞ!」

『『『『『了解!!』』』』』』』

「いらつしやいませ！ 如月ハイランドによろこそ！ チケットはお持ちですか？」

「……はい。」

「拝見しマース。」

チケットを受け取る係員。笑顔のまま一瞬固まった。

「……そのチケット、使えないの……？」

「イエイエ、そんなことはないですよ？ デスが、ちょっとお待ちください

私だ。例の連中が来た。ウエディングシフト

の用意を始める。確実に仕留めるための準備はいいか？」

『了解！ お馬鹿とエロ魔人に向かわせよう！ 俺もバックアップに回ろう。』

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は！」

「なんでもありません。気にしないでください。」

「……ところでウエディングシフトとやらは必要ないぞ。

入場だけさせてくれたら後は放っておいてくれる。」

坂本はやはり、そこを警戒してきたか。

というかバレバレなネーミングだったんだから警戒されて当然か。

「そんなコト言わずに、お世話させてください！」

「不要だ。」

「そこをナントカお願いしマース。」

「ダメだ。」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース。」

「やめろっ！ そんな事をすれば我が家は食中毒で大変な事になってしまっ！」

坂本が係員の脅迫におびえている。

これは明久の作戦なんだが………なんでこんなに効いてるんだろう？

本当に食卓に上がるわけじゃないだろうに。

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

『お馬鹿、GOだ！』

「………記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース  
」！

「………雄二と、お似合い………（ポツ）」

「お待たせしました。カメラです。」

丁度そこに明久がやってきた。

「アナタが持ってきてきてくれたのデスか。わざわざありがとうござい  
マス。助かりマース。」

「すまん。ちょっと悪いが電話させてくれ。」

P r r r r r P r r r r r

「ああ、すみません。僕の携帯ですね。はい、もしもし？」

あ、ヤベ。バレる。

『………いよう、明久。テメエ、面白い事してるじゃねえか  
………！』

「人違いですっ！」

ハァ、仕方ない。ヘルプに行くか。

「あ、待てコラ！ って離せ！ 係員！」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ（35歳）通称ステイブです。明久って人じゃないですよ？」

「黙れ！ 人種性別年齢氏名に堂々とウソをつくな！ しかもどう考えてもその名前で通称ステイブはありえないだろ！ ん？ 待てよこの声、まさか！ お前ナオか！？」

「いえ、違いますよ？ 自分はブランダラー・トランスファーン NAO！（28歳）です。浅斬とかいう人じゃありませんよ？」

ブランダラー！！ドジ トランスファーン！！転校生 NAO！！ナオ？

「ドジな転校生のナオ！ 思いつきり英語じゃねえか！ というか俺は浅斬とは一言も言っていない！」

「違いマース！ 彼は………エエツと、誰でしたっけ？」

「打ち合わせがなっていないだろう！ 従業員の名前も覚えられないスタッフがあるか！」

「そ、それでは記念写真をどうぞ！」

「無視するな！ ……って、カメラがあるということとはヤツも………翔子、すまんがちょっと我慢してくれ。」

「………??？」

そういうと坂本はA代表のスカートを掴み、軽く捲り上げていった。見えるか見えないか（これ重要）の高さまで持ち上がったとき、

「………っ！！（ギラッ）」

おいおい………キツネの着ぐるみがそんな動きしちゃダメだろ？

視界の隅で懐に手を伸ばした着ぐるみがいた。

「やはりムツツリー二も来ていたか。」

「マズイな。この様子だと坂本は他のメンバーも来ていることに気づいてるな……………」

「……………雄二、えつち。」

「なっ!? ち、違うぞ翔子! 俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ!」

「……………それはそれで、困る。」

「り、理不尽だああっ!」

「メキメキメキ……………」

「では写真を撮らせていただきますね。」

「はい! 笑っテ、笑っテ!」

「この状況で笑えるかあああっ!」

「はい、チーズ。」

「パシャッ!」

「じゃあムツツ……………エロ魔人。印刷よろしく。」

「……………了解した。」

特別加工も入れて、写真の印刷が終わった。

アイアンクローをぶつけている女と、それに悶え苦しむ男。その周りを幸せそうに祝福する天使たち。他人からしてみればどういった経緯でここから結婚に発展したのか頭にハテナを浮かべることだろう。

それによく見ると、二人とも顔が写ってないし、誰が誰だかわからない。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

俺は正直この発言に耳を疑った。

「キサマ正気か！？ コレを飾ることここになんのメリットがあると言うんだ！」

坂本、その意見に関しては俺も同感だ。

見に来た客はドン引き間違いなしだ。

「……雄二、照れてる？」

「この写真のどこに照れる要素がある！」

「ああっ！ 写真撮影してる！ ねえねえ、リユータ！ アタシらも撮ってもらおうよ！」

「オレたちの結婚の記念に、か？ そうだな。おい、係員。オレ達も写ってやんよ。」

坂本たちが話していると、俺たちに一組のカップルが話しかけてきた。

「すいません。こちらは特別企画でなので……」

「ああっ！？ いいじゃねーか！ オレたちはオキヤクサマだぞ！」

「コルア！」

「きゃーっ。リユータ、かっこいいっ！」

俺を威嚇するように睨み付けてくるチンピラ。

大丈夫。俺はスタッフなんだ。このくらいのクレームは対処できる。

「すみませんお客様。こちらはプレミアムチケット限定企画となっ

ておりますので貴方たちのような腐った顔面を写真館に飾るところの評判が悪くなってしまうです。」

あ、やべ。つい本音が。

『今オレたちのことを腐った顔面とか言わなかったかコイツ!』

『なによココのスタッフ! 全然接客がなってないんじゃないの?』

「ですから私が先ほどから申ししていますように、その面<sup>メン</sup>でこのパーク内をうろつくんじゃないやねえ、消え失せるカスども、と言っわけです。」

『もういいぜ! こんなやつ相手にしてらんねえ!』

『そーだね、リユータ! あとでクレームつけてやるんだから!』

そう言つて、土色カップルはどこかに行ってしまった。

まあ、当分ダイジョブだろ。

大丈夫じゃないのは……

「アイツらこの隙に逃げやがったな?」

坂本と霧島の姿が消えていた。

番外編 F代表とA代表が遊園地へGO！ な話 〳前編〳（後書き）

番外編突入。

今回もどうでしたか？ 今回はストーリーに沿って行きたいです。

そこまでの大幅な改編はないと考えてくださいね。

番外編 F代表とA代表が遊園地へGO！ な話 〳中編〵 (前書き)

前回の青春ポイント合計 + 10

・ 作戦参加 + 3

・ 写真撮影 - 2

・ 撮り終えた写真は……………なんといつか……………  
- 3

・ 土色カップルの相手をする事になる - 3

現在の青春ポイント合計 + 5

【坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座】

「坂本夫妻の、マル秘！ 恋愛テクニック講座！（パフパフ）」

「……おい、ナオ。コレはどういうことか説明してもらおうか？」

「……これは、私たち夫婦が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー。」

「驚いた。このタイトル、『』以外全部嘘のことしか書いてないぞ。」

「それでは私、浅斬直貴ことナオがA代表のアシスタントを勤めさせていただきます！ それではハガキの紹介をさせていただきますよう！」

「どうでもいいから俺を助けてくれ！ とうかたまには俺の話も聞け。」

「『突然ですが、仲良し夫婦の二人に相談です。』」

「ハガキの差出人よ、よく聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて、」

「『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないか心配ですどうしたらいいでしょうか』だそうです、A代表。」

「話を聞けといっているだろうがっ！」

「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない。」

「翔子よ。頼むから他人事だと思ってくれ……！」

「……浮気防止のために、用意するものは三つ。」

「浮気を防止するには道具が必要なのか……？」

「一つ目は『手錠』」

「はい、手錠ですね。」

ガシャン！ カシヨシヨシヨ……………」

「やめるナオ！ 俺に手錠をはめるな！」

「はい、私はアシスタントですよ？ 一切のツッコミは受け付けませんよ？」

「……………二つ目は」

「やっぱり聞く気はないのか。んで、二つ目は？」

「『エプロン』」

「これほどの屈辱は……………もう耐えられん……………！」

「そして三つ目は『ビデオカメラ』」

「A代表へ準備完了だよ。いつでもいいよ。」

「貴様何を撮るつもりだ！？ エプロンと手錠でドレスアップされた俺を撮って何が楽しい！？」

「……………その三つを用意して、夫に浮気の怖さを教えてあげるといい。」

「俺は今、何よりお前たちが怖い。」

「では以上、『バカなお兄ちゃん大好き（十一歳）』ちゃんからのお八ガキでした！」

「差出人小学生かよっ！？ 世も末だな！」

「……………ところで翔子。さっきのは冗談だよな？」

「……………すでに全国ネットで放送できる準備はしてある。」

「それだけは勘弁してくれえっ！」

……………

土色カップルの対応を終えた俺は坂本たちを見失ったことをみんなに報告していた。

「すまん皆。ターゲットを見失った。見つけ次第、接触をはかってお化け屋敷のアトラクションへの誘導を行ってくれ。」

『『『了解。』』』

みんなに現状を報告したはいいが、見失った坂本たちを見つけるのは困難だろう。

うーん。どうしたものか……

俺は自販機で紅茶を買って一息ついていた。

「あ、ナオ。」

「あ、優子。」

俺がベンチで休憩を取っていると優子が話しかけてきた。

「もう。休んでないで代表たち探すの頑張ったら？」

「さっきからずっと探してるけど疲れたからちよっと休憩してるだけ。優子もちよっと休憩すれば？」

「……そうね。私もちよっと疲れたし、そうさせてもらおうわ。」

優子はそう言って自販機で俺と同じ紅茶を買ってきた。

「最初に如月ハイランドに行こうって言ったときは嬉しかったのに、話を聞けば代表同士のデートの手伝いだなんて。」

「その辺はゴメン。明久がどうしても成功させたいって言うから……」

「……」

「別に平気よ？ でも、二人で行きたかったなあ。」

「じゃあこの作戦が成功したら、最後に二人でアトラクションにこっか？」

「本当！？ じゃあ頑張つて成功させないとね！」

「おう！ じゃあ休憩はこの辺で終了だな。」

「そうね。」

俺と優子はそれぞれ別方向に歩いていった……が、

「ナオ！ ちょっと来て！ あっち！」

優子が急いで戻ってきた。

「どうした、優子。坂本たちがいたのか？」

「い、いたにはいたけど……アレ。」

「アレ？」

優子が指差した方向を見ると、坂本と霧島の姿を見つけた。

『そこまでだ！ 雄二 じゃなくて、そのブサイクな男！』

『その頭の悪そうな仕草……明久かつ！』

そこには如月ハイランドマスクットに扮した明久と姫路もいた。

だが、明久が着ている着ぐるみの頭が……前後逆だった。

あつ、今明久を見て小さな男の子が泣き出しちゃった……

『失礼なっ！ 僕 じゃなくてノインのどこが頭悪いって言う

んだ！』

『黙れ！ 頭部を前後逆につけているヤツをバカと言って何が悪い

「！」

そのツッコミに対して俺は何もフォローできないよ明久。

『……雄二、ノイちゃんはうつかりさんだから。』

『うつかりで頭部が前後逆になる生物がいたら自然界で即座に淘汰されるだろ！』

そのツッコミに対してもフォローを入れることはできないよ。なぜなら……思いっきり凶星だからだ。

「Fの女神さん、その目の前のバカに自分に何が起こっているか教えてやれ。」

『わ、わかりました。……明久君。頭が逆です！早く直さないと坂本君にバレちゃいます！』

『うわっ、しまった！ どうりで前が見えないと思った！』

前が見えないのにもかかわらずここまで歩いて来れたお前は一体何なんだ……？

侮れないやつ……

しょうがない。もうどうせバレーしているなら俺が出て行くか。

「はい、すみません。お待たせしました。」

「またナオか……別に待ってなどいない。」

「坂本雄二さん、お化け屋敷に言ってください。」

「代表……じゃなくて坂本翔子さん。お化け屋敷だと彼氏に抱きつき放題ですよ？」

優子も坂本夫妻？の応援に積極的だな。

「……雄二、お化け屋敷に行きたい。」

「汚いぞナオ、翔子を使って罠にハマようなんて！ それと翔子を勝手に入籍させるな！」

「……大丈夫、すぐ坂本に変わるから。」

「くっ……！ 彼女連れで来るくらいなら、お前も俺と同じように来ればよかったものを……。」

まあ、こんなことされると分かかって行くバカはいないだろう。

「それではこちらにサインをお願いします。」

「なんだ、これは？」

「誓約書です。坂本にとっては危険だからな、一応。」

「そんなに危険なのか？ だがまあ、面白そうではあるな。」

そう言っつて坂本は誓約書に眼を通した。

### 【誓約書】

1 私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。

2 婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。

3 どのような事態になっても離縁しないことを誓います。

「……はい雄二。実印。」

「あ、朱肉はこっちにありますよ？」

「俺だけか！？ 俺だけがこの状況がおかしいと思っているのか！？」

俺がやられたら正直、おかしいじゃ済まないと思っけどな……

「冗談だよ。誓約書はいいので中に入っちゃってください。」

「……うん。冗談。」

「カーボン紙を入れて移しまで用意しているくせに冗談と言い張るのか？」

大丈夫だって。俺は100%嘘だと思ってるから。

これを渡してきた優子やスタッフの顔は真剣<sup>マツ</sup>だったけど。

「それでは、A代表。お邪魔になりそうなのでそのカバンを預かっておきましょう。」

「……お願い。」

それにしても大きなカバンだな。

一体何が入っているんだ？

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい。」

「このカバンを？ わかりました。気をつけましょう。」

零れる？

余計に何が入っているのか気になるな……

「……では、恐怖の世界をお楽しみください……」

「……雄二、行こう」

「痛だだだっ！ 腕がねじ切れるっ！」

肘関節を取られながらも坂本は中に入ってしまった。

「……………こちら、転校生。演劇バカさん、ターゲットがこちらに向かいました。怨嗟の声の演出を行ってください。」

『了解したのじゃ！ 腕が鳴るのう！』

「存分にやってくれ！」

「……………怨嗟の声？ それってどんなの？」

「ん？ それはだな、坂本自身の声をアトラクション内に流すだけの演出だ。」

「それだけで効果あるの？ 坂本君はそういうの大丈夫なんじゃない？」

「いや、ちゃんと対策をしてあるさ。そろそろだぞ……………」

「？ そろそろ……………」

ギャー……………！！！！

「ほらな？」

「な、中で一体何が起こってるのかしら……………」

「優子も後で入ってみる？」

「や、やめておこうかしら……………」

その後坂本が出口から出てきたとき、本当に恐ろしいモノを見たような顔をしていた。

皆さん、この世で一番怖いものは何だと思えますか……………？  
この世で一番怖いもの、それは 人の心です。

『しよ、翔子、待て！ アレは断じて俺の声じゃない！』

『……………往生際が悪い。』

『おツツギゃああああ〜！〜！』

趣旨は違ったがとても楽しいお化け屋敷だったと坂本は思ったこと  
だろう。

番外編 F代表とA代表が遊園地へGO！ な話 〳後編〳（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 5

・優子とつかの間の休息 + 3

・シヨッキング！ マスコットのノイちゃんの頭が……！！  
- 2

・恐怖！ お化け屋敷での怨嗟の声！ + 2

現在の青春ポイント合計 + 8

「お疲れ様です。どうでしたか？ 結婚したくなりました？」

「アレと結婚を結びつけて考えることができるのはお前と明久くらいだ！」

「あ、やっぱり？ 俺もそう思ったんだけど明久が、『危機的状況に陥った二人の男女は固い絆が生まれる』言ってたからそのとおりにしたんですけど？」

「それは絆が深まる相手が襲ってくる相手じゃなければの話だろう！ 絆どころか溝が深まった気分だよ！」

「まあ個人的には楽しかったから別にいいか。それではそろそろお昼の時間ですので豪華なランチを用意しております。」

「ちよつと待て！ 今、お前の悪の一面が見えたぞ！」

そんなこと知ったことか！

それに俺はもともとこんな性格だしな。

「……あ、あの……」

「？ どうした、翔子？」

「……なんでも、ない。」

「??？」

「どうかしましたか？ 坂本様？」

「いや、なんでもない。それより、そのランチとやらはどこに用意してあるんだ？」

「それはこの先にあるレストランでご用意させていただきます。」

「おう、そうか。それは楽しみだな。」

俺はその後、坂本たちをレストランに案内したのだった……

「みんな、これがラストミッションだ。というか先ほどまでの茶番だと思え。コレが一番重要なミッションだ。準備はいいか？」  
『『『『『了解！』『』『』『』『』』』』』

こんなにも皆のノリがいいなんて、余程この作戦を成功させたらしい。  
俺も全力を出せなければ！

「坂本様。コチラでランチをお楽しみください。」  
「あ、ああ。」

坂本は言われるがまま、席に座っていった。

「演劇バカ、出番だ！」  
『了解じゃ！ワシの本領を發揮してみせようぞ！』

ここからの担当は秀吉なので俺は引っ込むとしよう。

「いらつしやいませ。坂本雄二様、翔子様。」

秀吉がボーイの格好をして俺と入れ替わるように出て行く。

「秀吉。ボーイの真似事か？」

「秀吉？ なんのことでしょうか？ 私はアンダー・ウッド（22歳）通称豊臣ですが？」

「その関連性MAXなネーミングセンスはどうかと思うぞ……………」  
・？ まあいい。こちらで確認させてもらおう。」

そう言つて坂本は携帯を取り出した。

マズい！ もともとバレてるようなものだが更にバレるようなことに！

「おおっと、手が滑つてしまいました！」

俺がそう考えた瞬間、秀吉は近くに設置されていた噴水に向かって自分の携帯をブン投げた。

ひ、秀吉！？ 演技のためとはいえ普通そこまでやるか！？

お前の演劇に対する気持ちは並大抵ではないのか……………感動した！

「ふ、普通そこまでやるか！？ アレもう確実に壊れたよな！？」

「なんのことでしょうか？」

それでも顔色一つ変えずに接客をする秀吉。

アレはもう演劇バカというより役者の鬼だな……………

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂

き、誠にありがとうございます！」

「そうこう考えているうちにイベント紹介が始まってしまった。俺も準備をしなければ！」

「なんと、本日はですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしゃっているのです！」

「えーと、マイクはこの辺りだっけ？」

「そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました！ 題して、『如月ハイランドハイランドウエディング体験』プレゼントクイズ〜！」

「オイ、聞こえるか？ 出入口を封鎖しておけ。」

『了解したよ、ナオ。』

俺の合図とともに出入口を閉鎖する重々しい音が聞こえてきた。これで、坂本の退路は完全に断ったぜ……！！

「本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えを頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けるというものです！ もちろん、ご本人様のご希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが。」

それに関しては坂本の判断に任せよう。

無理やり結婚させるのはなんだか気が引ける。

「ちなみに今回のクイズの出題者、如月ハイランドのスタッフのプ

ランダラーさんです!》

「どうも〜! スタッフのブランダラー・トランスファーNAO! です。今回はよろしく願いします。気軽にNAO! って呼んでくださいね!」

観客が俺を拍手で迎える。

坂本は俺を睨みつけてくるが、俺はそれに笑顔で返してやった。

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん! 前方のステージへとお進み下さい!》

「……………ウエディング体験……………頑張る……………」

「落ちて着け翔子! そういったものはきちんと双方の同意の下に痛だだだだっ! 耳が千切れるっ!」

A代表に引きずられるようにしてステージに出てくる坂本。  
ふふふ……………ココからが本番だぜ!

「では、第一問!」

俺が大きな声を出し、会場全体がクイズの雰囲気に含まれていく。  
そう、ココからが本当の地獄の始まりだぜえ……………?

「坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか?」

ピンポーン!

「答えをどうぞ、霧島様!」

「……………毎日が記念日。」

「やめてくれ翔子！ 恥ずかしさのあまり顔から火が出そうだっ！」  
「お見事！ 正解です！」

さすが、A代表だな。  
あの台詞を恥ずかしげもなく言えるとは……俺なら自信ないな。

「第二問！ お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？」

恐らく、坂本はウエディング体験を阻止しようと不正解を狙ってくるはずだ。  
それならこちらは

ピンポーン！

「鯖の味噌煮！」

強制的に正解させるのみ、だ！

「正解です！」

「なにいつ!?!」

ふっ……驚くのも無理はない。

俺が今、でっち上げたからな！

「お二人の拳式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定なのです！」

「待ていつ！ 絶対その別名はこの場でしたたる！ 強引過ぎるだろっ！」

「続いて第三問！ お二人の出会いはどこでしょうか？」  
「くっ………！ させるかっ！」

坂本がボタンに手を伸ばす。

「………させない。」

ブスッ！

「ふおおおっ！？ 目が、目があっ！」

ピンポーン！

「………小学校。」

「正解です！ お二人はなんとも仲睦まじい」

説明を続ける俺。

しかし、今の光景を見ていて仲睦まじいと思う客はこの中に何人いるかな………？

えっ、俺？ 俺は当然仲睦まじいと思ってるよ。じゃなきゃこんなことやるうとは考えないからな！

「第四問、張り切っていきましょう！ では」

ピンポーン！

なにいつ！？

見るとそこには既にボタンを押した坂本の姿があった。

「わかりません！」

なるほど……そうきたか。

どんな問題でもそれさえ言えば不正解になるという作戦だな？

だが……まだまだ甘いな、坂本！

「正解ですっ！」

「なんだとおっ!？」

「さすが坂本さんですね。問題の内容は、『宇宙の心理を解き明かすためにはどうしたらいいでしょうか?』というものでした!」

「なんだその問題!？」

この程度の事態は予測済みだ!

さあ、ラストの問題だぜえっ!

そう思ったとき、

『ちょっとおかしくな〜い? アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコ コーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜?』

そのとき、どこかで聞いた不愉快な声が会場に響いた。

この声……確か、

『あの、お客さま。イベントの最中ですので、どうか』

『ああっ!?! グダグダとうるせーんだよ! オレたちオキヤクサマだぞコルア!』

スタッフの制止を振り切つてステージ前にやってきたのは、先ほどの茶色顔のカップルだった。

グダグダとうるせえのはお前だろ……

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？』

ムカツク口調で俺に向かって話しかけてくるカップルの女。

「ダメです。」

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルアっ！ オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』

なんだこいつ………！

別にそんなこと誰も頼んでねえだろう、このボケがっ！

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたりしたらアタシらの勝ちってコトで！』

「そんな！ 何を勝手に

そついうとカップルの二人は俺のマイクを引つたくり勝手に話を進めた。

くっ、マズい！ 坂本はこいつらを利用して不正解になるつもりだ！

『じゃあ、問題だ。』

このままだと作戦が失敗に終わってしまう！  
みんな、ごめん………！ 俺がマイクを奪われたばかりに………  
………済まない、みんな。作戦は失敗………

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

会場、スタッフ一同、場の空気、全てが瞬間的に凍りついた。

俺はおもむろにケータイを取り出し、ヨーロッパと検索してみた。

ヨーロッパ【(ポルトガル) Europa】

六大州の一。ユーラシア大陸西部および付近の島々からなる(国名ではない)。ふつう、ウラル山脈以西、カフカス山脈以北、ボスポラス海峡以西をさす。欧州。エウロパ。Yahoo辞書から抜粋

「オラ、答えるよ。わかんねえのか?」

「おめでとうございます! 坂本雄二さん、翔子さん見事【如月八イランドウエディング体験】獲得です!」

「おい待てよ! こいつら答えられなかっただろ!?!」

「うっせえ! バカに構ってる暇はねえんだよ! 引っ込んでろ!」

「んだとっ! やるか!?!」

「似非さん、席に座らせといて! 強制的でいいから!」

「オーウ。わかりマシタ!」

似非(外国人)さんはカップル二人を強制的に席に戻すことが成功したのだった。

あの時点で気づくことができないなんて、なんて可愛そうな脳ミソなんだ.....

《ええ、先ほどは大変失礼しました！ それでは本日のメインイベント、ウエディング体験です！ 皆様、拍手でお迎え下さい！》

先ほどのカップルは今、自分の席に大人しく座っている。

だが、またいつ変なことを言い出すかわからない。注意してみておかなければ。

「ホラ、坂本。胸張って行ってこい。」

「くっ！ 覚えてるよ、ナオ……！」

「はっはっは！ そんなこと言ったられんのも今のうちだぞ？」

「……まあ、あくまでも体験だしな。適当に付き合っつてささと終わらせるさ。」

そう言いつつ、坂本はいつでも逃げ出す準備をしていた。

一応、扉は全部閉まっているが油断はできないな。

《それでは、新郎のプロフィール紹介を》

ここからは、ウエディングシフトのプランナーに任せるとしよう。それにしても体験とはいえ、プロフィール紹介まで付くとは。さすが大企業

《 省略します。 》

大企業……？ そんな概念が揺らぐほど、  
適当な説明だった。

《 それでは、いよいよ新婦のご登場です！ 》

この台詞を皮切りに、ド派手な音楽が鳴り響いた。  
スポットライトが動き、

《 本イベントの主演、霧島翔子さんです！！ 》

アナウンスと同時に幾重にも重なったスポットライトが壇上のある  
一点のみを照らし出した。

暗闇から一転しての輝きだす壇上。その一点に、みんなの視線が集  
中した。

そして、そこに映し出されたのは

『 ……綺麗。 』

静まり返った会場に響く誰のともわからない声。

その言葉は誰にも阻まれることなく、会場内に響いていった。

A代表のドレスは余程念入りに製作されたのか、床までの距離を計  
算された無駄のないギリギリの長さになっている。A代表が坂本に  
近づくまでの間、それは一度も床に擦れることはなかった。

「 ……雄二 …… 」

「 翔子、か ……？ 」

「 ……うん。 」

正直に言つと綺麗、という一言だけでは表せない美しさを霧島は放つていた。

動揺する坂本に、A代表はさらに問いかける。

「……………どう……………？ 私、お嫁さんに、見えるかな……………」

「ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない。」

「……………雄二……………」

「お、おい。翔子……………」

「……………嬉しい……………」

《ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えますが……………？》

そんなアナウンスが入る。

言われてみると、確かに肩を震わせている。

「……………ずっと……………夢だったから……………」

涙交じりの掠れた声。

《夢、ですか？》

「……………小さな頃からずっと……………夢だった……………私と雄二、二人で結婚式を挙げること……………私が雄二のお嫁さんになること……………私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……………」

思わず、もらい泣きしそうになってしまった。

ふ、不覚だ……………」

「……だから……本当に嬉しい……。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」  
観客の何人かも俺と同じように鼻を噉っているヤツがいる。  
こんな感動的な物語は久しぶりだな……

「翔子。俺は」

坂本がA代表の言葉に答える。  
そう思ったときだった。

「あーあ、つまんなーい！ マジこのつままないこのイベントお〜。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とかみせてくれな〜い？」  
「だよな〜。お前らのことなんてどうでもいいっての。」

声の主は最前列に陣取る先ほどの土色カップルだった。

「ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ？ なに？ キヤラ作り？ ここのスタッフの脚本？ バカみてえ。ぶっちゃけキモイんだよ！」

「純愛ごっこでもやってんの？ そんなもん観る為に貴重な時間割いてる訳じゃないんだケドお〜。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？ ギャグにしか思えないんだケドお。」

「そっか！ これってコントなんじゃねえ？ あんなキモイ夢、ずっと持つてるヤツなんていねえもんな！」

「え〜っ！？ これってコントなのお？ だとしたら、超ウケるんだケドお〜！」

……そろそろ、俺の我慢の限界だな……

「おい、その顔面土色カップル！ さっきから黙って聞いてりゃ、ウダウダと……！ 今すぐA代表に謝れ！」

『誰が顔面土色だ、コルア！』

「そのまんまだろうが！ 顔面土色！」

《そーだ！ ナオの言うとおりだ顔面土色！ 霧島さんに謝れ……  
……つて、アレ？ き、霧島さんは……？》

なにっ？

明久の声に気づいてステージの方を見ると、霧島の姿は見えなくなっていた。

シヨックを受けてどこかに行ってしまったのか？

こんなカスにかまってる暇はない！

「み、皆さん！ 花嫁を探して下さいっ！ お願いします！」

俺はアナウンスでそう呼びかけた。

スタッフも大慌てで動き始め、会場内も騒がしくなり始めた。

「さ、坂本！ お前も急いでA代表を」

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな。」

「え？ ちょ、坂本！ どこに」

……なるほどな。

俺はそこまで言いかけたが、坂本を止めることまではしなかった。

「ちょっと、ナオ！ 何で止めないのさ！ それに、あの野郎……

「・・・！」

「まあ明久。そう怒るな。ちょっと考えればすぐにわかるだろ？」

「ちよつと考えれば、って・・・」

「何でトイレが中にあるのにワザワザあいつは外に行ったと思う？」

それに、霧島のベールを持って。」

「あ。」

坂本はそのまま退場していく客に混じって会場を出て行った。

「あいつは人一倍、優しくて、素直じゃないやつだってコトさ。」

「そうだね・・・雄二らしいや。」

俺はその後、先ほどのカップル二人を捕まえて警察に突き出してやった。（営業妨害だもんね）

ただ、カップルを見つけたときカップルがボロボロだったのはい言っまでもないだろう。

「おい、明久。」

「ん？ おはよう、雄二。どうかしたの？」

お、この前のことかな？

「如月ハイランドでは随分と色々とやってくれたな。」

つて、思いっきりバレてるし。

まあ、あまり本格的な変装はしなかったし、当たり前か。

「あははっ。何を言っているのさ。僕は一日中家でゲームをやっていたんだよ？ 如月ハイランドになんて行けるわけないじゃないか。」

「・・・そうか。お前がシラを切るならそれでもいいだろう。」

「な、何を言っているのさあ。変なヤツだなあ。」

嘘がへたくソだなあ、明久は。はっはっは。

「ところでお前にプレゼントがある。」

「え？ なになに？」

「今話題の恋愛映画のペアチケットだ。『気になる相手』がいれば一緒に行くといい」

なるほど。坂本も坂本なりに感謝しているようだ。

ただ、このあとの明久が

「え？ そんなものもらっても、使い道に困るだけ」

『あ、アキっ！ そういえば、ウチ週末に映画を観たいと思ってたんだけど』

『あ、明久君っ！ 私も丁度観たい映画があつたんですけど！』  
『ほえ？ なになに？ どうして二人ともそんなに殺気だつてるの！？ このチケットは換金して生活費に痛だああっ！！ もげちゃ  
う！ 人体の大事なパーツが色々と取れる！』

大変な目に合うのは目に見えているがな．．．．．  
遠くから予想通りの悲鳴が聞こえてきた。

「ナオ。お前にもプレゼントがあるんだが．．．．．」

嫌な予感がする．．．．．

「一つ聞いていいか？」

「なんだ？ 言ってみる。」

「それは俺に害のない物か？」

「さあな。俺はその辺はわからないんでな。じゃあ、これがペアチケットだ。この前のデートと同じように、『秀吉の姉』と一緒に行くといい。」

「！！！！」

あ、あの野郎！

その部分だけ強調していったら．．．．．！

『．．．．．浅斬い．．．．．？ この前のみならず、また木下姉とのラブラブタイムを過ごすつもりかあ？』

『俺の木下姉妹に．．．．．よくも．．．．．！』

『おい、お前ら。準備はいいか．．．．．？』

ほーら、きたよ．．．．．

西村先生が来るまでの二十分間は、教室が戦場になつたのは言うま

でもないだろう。

番外編 F代表とA代表が遊園地へGO！ な話 〱後編〱（後書き）

長くて更新に時間がかかったちゃいました！  
楽しみにしていただけいた方はすみませんでした！

今回の番外編はいかがでしたか？

誤字脱字その他表現がおかしいなどありましたらどんどん言ってください。

やっぱり、女の子は笑顔が素敵なほうがいいですよね！

次回、もしかしたら時間がかかるかもしれませんがオリジナルストーリーです！

今、浅斬の少し昔の頃の話にするか、もっと他の企画にするか、新キャラ入れるか悩んでいます。

まあ観てからのお楽しみみてコトで！

次回も楽しみにしてくださいね！

くどきどき！ オリジナルキャラクター紹介！〜（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 8

・ラストミッション・・・・・・・・・・始動 + 3

・秀吉の演劇魂に感動 + 1

・土色カップルの妨害 - 3

・A代表のドレス姿・・・・・・・・・・綺麗 + 2

・またも妨害・・・・・・・・・・上等じゃねえか - 3

・ペアチケットを貰ったけど・・・・・・・・・・なんか疲れた - 3

現在の青春ポイント合計 + 5

くどきどき！ オリジナルキャラクター紹介！

「こんにちは、読者の皆さん！ 浅斬直貴こと、ナオです！」  
「そして、作者です！」

「くどきどき！ オリジナルキャラクター紹介！」

「ということで、今回はオリキャラ紹介なので俺が呼ばれたわけだが……なぜ俺？ 他にもたくさんいるんじゃないのか？ 明久とか、坂本とか。」

「なんでも何も、お前の転校前の友達が次回の話で追加される予定だからな！ 紹介の時はお前も一緒の方がいいかと。」

「！？ そんなの聞いてないぞ！？ というか前の学校のヤツってことは」

「はい！ ということで一気に紹介しちゃいましょう！」  
「無視すんなよ！」

名前 神咲亜矢かんとあや 誕生日 1月25日

身長 160cm スリーサイズは上から 86・57・81

血液型 B型

趣味 ・ 武道を少々

特技 ・ ヴァイオリン ・ 歌 ・ ゲーム ・ その他何でも

性格 ・ 明るい ・ 強引 ・ 意地っ張り ・ 何事にも積極的

好きなもの ・ 猫 ・ 楽しいこと

嫌いなもの ・ 退屈 ・ つまらないこと

容姿 ・ 髪は膝に届くかと思うくらいストレートのロングで金髪。

それを星の髪留めで纏めている。目は大きく、パッチリとしていて色はブルーである。

何事にも積極的に取り組む姿勢を崩すことがない。名家のお嬢様であるがそれを鼻にかけることもなく、誰とでも仲良くなれるようなフレンドリーな性格。『毎日が一大イベント』をモットーにしており、なにより退屈が嫌い。その所為でナオをトラブルに巻き込んだこともしばしば。前の学校ではナオと特別な関係だったらしいがその詳細は……？

名前 川村優かわむらゆう 誕生日 9月3日

身長 153cm スリーサイズは上から 80・55・77

血液型 O型

趣味 ・ 誰かのお世話 ・ お料理

特技 ・ お料理

性格 ・ おっとり ・ 明るい ・ 世話焼き ・ 優しい

好きなもの ・ 自分の料理を美味しそうに食べる人

嫌いなもの ・ 着ぐるみ（トラウマ）

容姿 ・ 髪はセミロングのピンク色（姫路くらいの色）。目の色はオリーブアイで優しい雰囲気特徴的。

家庭的で明るい印象が強い。弟妹がいて、からかわれることもしばしば。世話焼きな性格で前の学校では（姫路みたいに）お弁当を振舞ったりしたことある。料理の腕はナオより上をいき、プロの域に近い。小さな頃からナオとは幼馴染だったが、その詳細は……？

名前 水樹翔太 みづきしやうた 誕生日 7月24日

身長 166cm

趣味 ・ サブカルチャー全般 ・ ゲーム

特技 ・ 情報収集

性格 ・ テンションが高い ・ 落ち着きがない ・ エロい

好きなもの ・ エロ全般 ・ サブカルチャー ・ 素敵な女性

嫌いなもの ・ ノリが悪いやつ ・

容姿 ・ 茶髪で中肉中背。目はブラックで少し小さい。

前の学校ではナオのクラスメイトで、中学校時代からの悪友。落ち着きが無く常にテンションが高い。素敵な女性のためならどんなことでもする見上げた性根の持ち主。サブカルチャー通で、特にエロ方面では並々ならぬ知識を持っている（要約すると変態）。前の学

校でもナオと仲が良かったらしいがその詳細は……？

「おい……」（ナオ）

「なんだ？」（作者）

「本当に登場させるつもりか!？」

「当たり前だろ？ 今更なに言ってるの。」

「だって、本当にコイツら出したら俺が大変なことに……」

「頼む！ こいつらだけは登場させないでくれ!」

「嫌だね！ この企画練つてから三週間頑張つて考え抜いたキャラだぞ!？ 今更出せないとかありえないだろ!」

「というか、三週間ずつと考えてたくせにプロフィールだけで詳細は?ってなんだよ! 何割かは手抜きじゃねえか! そんなキャラ出すんじゃないよ!」

「手抜きとか言つな! もう出すって決めたら出すの! 反対意見は即却下だ!」

「そこを何とか……って、あれ? 他にも前の学校のヤツ

はいた気がするんだけど、出すのコイツらだけ？」

「いや、一応あと三人くらいいるんだけど、設定があまり思いつかなくて保留にしてある。」

「あと三人も……どいつだ？」

「まあ、それはこれからのお楽しみってコトで。」

「はあ……大変になりそう。」

「お前の過去も、このキャラたちで赤裸々に語ってもらおうとするか。」

「か、勘弁してくれ……!!」

「というわけで、次回をお楽しみに！」

「い、以上、『〴〵どきどき！ キャラクター紹介！』でした……  
……」

くどきどき！ オリジナルキャラクター紹介！〜（後書き）

次回オリキャラ登場！

ということで紹介しましたが、どうでしたか？

自分的には優子を推奨するんですが、恋愛はライバルがいたほうが燃えそうなので二人ほど女性キャラを追加してみました。

もう一人の男子はナオの悪友設定なのでたまに出てくると思います。

ナオが何故嫌がっているか、それはこれからの話で明らかになるので楽しみにしておいてくださいね？

くプロローグく 第41話 俺と変化と波乱の幕開け？（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 8

・キャラ紹介で波乱の予感 - 5

現在の青春ポイント合計 + 3

くプロローグく 第41話 俺と変化と波乱の幕開け？

「おーい、直貴！ ちょっと来てくれ！」

休日のある日、その事件は起こった。

「なに、父さん？」

今日は久しぶりに両親も帰ってきていて、優雅な休日……  
とまではいかなかったがそこそこ楽しい日だった。

「お前に電話だぞ。」

「電話？ 誰からだ？」

この電話が、全ての波乱の幕開けだった。

一瞬、優子か？ とも思ったがそれなら携帯にかけてくるだろうと  
思い、その選択肢はなくなった。

明久……も、たぶん同じだろう。他のヤツでもそうだな。  
一体誰だ？ と思いながら電話に出た俺。

「はい、今代わりました。浅斬直貴です。」

このときの電話は、俺の人生にとって忘れられないものとなっただ  
ろう。

「……ナオおっ！？ アナタどこに引っ越したのか連絡く  
らい」

「人違いです。」

ガツチャン！

「直貴？ どうしたんだ？ お友達からなんじゃないのか？」

「いや、人違いだった。誰かもわからなかった。うん、俺は知りません、あんな人。」

表面上では笑顔を作っている俺。内心、凄く恐怖を味わっているが。何であいつが！？ どうしてここの電話番号が！？

いや、『アイツ』なら簡単にその程度のこととはできる。くっ……  
……もう少し嚴重に注意をしておけば……！！

ビビビビビ！ ビビビビビ！

そうこう考えているうちに、またも電話が鳴り始めた。  
またかけてきやがった！？ くそっ、ここは無視をして……

「おっと、また電話だ。」

「あつ！ 父さん」

父さんは俺の言葉を無視し、受話器に手をかけてしまった。

「はい。もしもし？」

『あつ、こんにちは。私、“神咲亜矢”<sup>かんさきあや</sup>というものなんですけど。直貴君いますか？』

「いますよ。おい直貴、やっぱお前のお友達じゃないか。それとも

彼女か？」

「そ、そんなんじゃないし……！ ほら、どっか行ってる！」

「はいはい。邪魔者は退散しますよ。」

最悪だ………！

よりによってココの電話番号が知れるとは思わなかった。

俺は父さんから受話器を受け取った。

父さんはこのまま少し散歩に出かけるようで、さすがにヘルプを頼むにはいかない。

もう、腹を括るしか………！

「………い、今代わりました、直貴です………」

『ちよつと。さっきはどうしていきなり切ったりしたの？ 酷いじゃない！』

「ちよ、ちよつと気が動転しててだな………。あ、そうだ。元気にやってるか？」

『え？ うーん、アンタがいた頃とあんまり変わらないかな。まあ、元気よ元気。』

「そうか、それは良かった。んじゃ俺はこの辺で………」  
『切ろうとするな。』

「………はい。」

電話の相手は前の学校の友達、『神咲亜矢』<sup>かんぱきあや</sup>で、学級委員長を務めていたお嬢様だ。

お嬢様というがそんなじょそこらのお嬢様とは違い、こちらは本気<sup>ガチ</sup>のほうのお嬢様である。

こいつの父は有名な外資系の会社の社長。他にも有名な料亭や電気メーカー、銀行や保険会社も経営しているお嬢様の中のお嬢様だ。本人自身も合唱コンクールや絵画コンクール、その他諸々の大会な

どでも賞を取っている超ハイスペック人間だ。  
何故そんな人が俺に電話をかけてきているかというと

『もう。どうして元彼女が電話をかけてきたってのにそんな態度をとるかな？』

「元彼女だからじゃないのか……」

『どうしてそこ疑問系なのー!? ひっどい!』

コイツが俺の前の学校の学級委員長&友達(ついでに元カノ)であるからだ。

友達という表現は生易しいかもしれないが。

本当に会ったときから変わらないやつだなあ……

「ところで、何で電話なんかかけてきたんだよ。用があつたんじやないのか？」

『あ、うん。そうそう、用って言うのはね、』

どうせたまには連絡して来いとかそんな理由、

『アタシたち、そつちの町に引っ越すことになったからね?』

「そうなのか。それは大変…… What?」

……今、何と仰いましたか?

『だ〜からっ! 皆でこつちの町に引っ越すことになったの!』

「…… Really?」

『もうっ! 信じてないのならいいわっ! 後で覚えてらっしやい!』

ブツッ!

き、切りやがった……！！  
……ど、どういことだ。しかも『皆で』ってことはアイツらも来るってことか！？  
冗談じゃないぞ！ とうか何で皆で引越してくるんだ！？  
理由を考えていると、

ピンポン！

玄関から、チャイムの音が鳴り響いた。……  
非常にマズい。

俺は玄関の覗き窓を見た。

まさか電話番号のみならず、家まで既につきとめていたとは……  
……！ 舐めていた！  
とうか、さっきまで家にいたんじゃないのか！？  
居留守だ。居留守を使って……

ドッテン！

「あああああ！ 痛あああつ！！！」  
『ちよつと、大丈夫！？』

盛大にすつころんだ。  
自分のドジさが今更、悔しい……！  
今ので家にいること完璧にバレたので仕方なく俺は玄関に出た。

「よ、よう。」

「ひ、久しぶり。何ヶ月ぶりだったけ？」

久しぶりに見ると、やっぱりドキッとするもんだな……………

「そ、そんなに経ってないんじゃないか？」

「えへへ。やっぱりナオだ。変わってないね。」

「お、お前こそ変わってないな。」

「ああ、そうそう。さっきの話なんだけど……………」

「そうだ！ 皆で引越すって。」

「とりあえず、中で話してもいい？ 長旅で疲れちゃって。」

そう言うと、亜矢は靴を脱いで家に入ってきた。

「ああ。あ、何か飲むか？ 遠慮しなくていいぞ。」

「じゃあ、紅茶とかある？」

「んーと、一応、午前の紅茶とかあるけどいる？」

「あ、じゃあそれ貰おうかな。」

俺は冷蔵庫から紅茶を取り出して亜矢に出してやった。  
それを亜矢は一気飲みした。

「プハア！ 生き返る〜。」

「……………喉でも渴いていたのか？」

「朝から何も飲んでなかったからね。それはそうと、さっきの話。」

「そうだ！ 皆で引越すってどういうことだよ！」

「そんなに驚かなくても。地震よ地震。」

「地震？」

地震って言うと、最近起こった大地震のことか？

「そ。それでうちの町の地盤……だっけ？ が、酷くなっちゃって。それが改善されるまでの間、全員でお引越しになっちゃったの。」

「そうだったのか……だから皆こっちに来るのか。」

「そういうこと　ま、皆たぶんアンタが通つてるところに編入になるだろうから、覚えておいてね？」

「……それ、マジで言ってる？」

「？　大マジだけど？」

「……！！！」

そんなことしたら、ただでさえ大変な学校生活が更に大変じゃないか！

Fクラスに入ることはないと思うが、遭遇確立が格段に上がってしまっ！

「そ、それはもう決まったことなのか!？」

「えっ？　アンタの所って『文月学園』でしょ？　私たちはそこに編入になってるけど……?」

「も、もうダメだ……!」

「????」

頭にクエスチヨンマークを浮かべている友を尻目に、俺は大号泣したのだった……

くプロローグく 第41話 俺と変化と波乱の幕開け？（後書き）

はい！

なぜ新キャラが文月学園に編入することになったのかがわかる話でした。

この神咲というキャラ。この後どういう立ち位置になるのか謎な所です。

他にも二人いますが、それはまた次の話にしましょう。

え？ 優子の出番が少ない？

・・・・・・・・・・・・・・・・頑張って出せるようにします。

ということで応援よろしくお願いします！

第42話 不幸は連続して起こるものだ(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 3

・ 一本の電話 - 2

・ 恐怖を植えつけられる - 3

・ 台風あや接近の予感 - 1

・ 台風あやが我が家に侵入 - 3

・ 悲しきかな、転校生 - 4

現在の青春ポイント合計 - 10

## 第42話 不幸は連続して起こるものだ

「……………なぜ、こんなことに……………」

俺は昨日のことを思い出していた。

『そうそう。丁度明日から振り分け試験らしいから、できればアンタと同じクラスになりたいんだけど……………アンタは何クラス？』

『……………Fだけだ。』

『ええっ!?! 一番悪い所じゃない! なんで?』

『色々と事情があるんだよ。俺と同じクラスなんてやめたほうがいいぞ? 環境が劣悪だから。』

『???? 頭悪いだけじゃないの?』

『頭も悪いが、授業環境も最悪な場所なんだ。机がちゃぶ台だったり、席が畳だったり。クラスメイトも劣悪。だからこない方がいい。頑張ってA目指してくれ。』

『ふーん……………そうなんだ。』

あきらめていたと、思っていた。  
完全に、俺の油断だった。

「お前ら、よく聞け。今日から転入生が来ることになった。」

『『『うおおおっー！！！』』』

『先生！ 女子ですか！？ 男子ですか！？』  
「両方だ。」

『『『よっしやああっー！！！！ 女子来たああっー！！！！』』』

まさかな………  
きっと他の誰かが来たに決まってる。断じてアイツじゃない。うん、絶対そうだ。

「ナオ。一体誰が来るんだろうね？」

「断じてアイツじゃない。断じてアイツじゃない。断じてアイツじゃない………」

「？ ナオ、どうかした？」

「よし、じゃあ入っていいぞ。」

大丈夫。俺にはロングの金髪ストレートなんて見えていない。あれは幻覚なんだ………！  
俺は心の中で暗示をかけた。というか、かけてないと精神的にやつてられなかった。

「それぞれ、黒板に名前を書いてくれ。」

大丈夫。アレは見た目がソックリさんなだけで

「おはよう！　そしてクラスメイトの諸君！　私は神咲亜矢。　亜矢  
ってフレンドリーに呼び捨てでいいわよ。」

決定打来ちゃった………

『『『亜矢さ……ん！！！！』』』  
「はい」

しかもさり気なく気に入ってるし………  
俺のクラス、ダメかも。

「私の名前は、『川村優』かわむらひゆうです。趣味はお料理です。」

つて、ええっ！？　優も一緒かよ！？　アイツ頭いいハズだろ！？

『質問で〜す！』

「あ、はい。なんですか？」

『得意な料理は何ですか！？』

『結婚してください！？』

『彼氏はいますか！？』

「ふええっ！？　えと、あの………」

一人質問がおかしなヤツいなかったか？

ゆ、優やめる。俺を見つけたからってそんな目で見ないでくれ。  
くっ、小動物みたいな顔しやがって………

「みんな。転校生が引いてるぞ？　今優しくしておいたほうが後で

いい思い出ができるかもしれないぞ?」

そして助け舟を出してしまう俺って一体……

『ごめんなさい! 川村さん!』

「あ、別に気にしないで? 怒ってなんかないから。」

『ありがとうございます〜!』

このクラス、本当にダメかも。

俺に言われる前に気づいてくれ。

「俺の名前は、水樹翔太。みずきしょうた翔太って気軽に呼んでくれ!」

あ、翔太だ。

こいつもココに来たのか……ってことはアイツら、狙って入ってきたな?

「よっ、直貴! 久しぶり。」

『『『久しぶり???』』』

クラスのほとんどが疑問符を上げる。

そして俺を見る。そしてそれが辛い。

「おお、翔太か。お前も俺と同じクラスだなんてな。」

「イエス! 俺も同じクラス! Yeah!」

「『イエー』じゃない。どこの国の人だ、お前は。」

『浅斬。お前もしかして知り合いか?』

「一応な。全員俺の前いた学校出身だ。」

『』』』後で覚悟しておけよ 『』』』

コイツらはアイツらに好かれたくないのか？

「それでは、お前たち。好きな席に座ってくれ。それでは今日も一日勉強に励むこと、いいな？」

西村先生がちゃぶ台への着席を促す。その後西村先生は教室から出て行った。

好きな席と言われて、各自席に着く。着いたはいいが……………

ザワザワザワ！！！！

「なんでお前らは俺の周りに座ってたんだ？」

「ん？ 嫌なの？」

「いや、あんな亜矢……………嫌とかそうじゃなくてだんな？」

周りを見ると、すでにカッターを構えているクラスメイトの面子が……………ふっ、上等じゃねえか。

「亜矢、優、翔太。このクラスでの生き方をみせてやる。」

「……………え？」

『つしゃあつ！ 行くぞ、お前ら！』

『』』』応っ！！！！』』』

そこから俺とクラスメイトとの大乱闘は教師が来るまで続いたのだ  
った。

「ナオ。ちょっといいか？」

「何だ、坂本？」

戦闘を終えた俺に坂本が話しかけてきた。  
ふう……………いい汗かいたぜ。

「お前の友達……………でいいのか？ どのくらいの戦力をもっ  
てるんだ？」

「試召戦争のことしか頭に無いのか、お前は。」

「まあいいだろう。お前もAクラスの教室には興味があるだろう？」

「無いわけじゃないけど……………」

ここまで頑張ったけど、正直優子とクラスが変わるのはなあ……………

「んで？ 戦力だっけ？」

「おお。どんな教科が得意だとか、そういうのでも構わん。」

「んーと。全部、かな？」

「全部だと？」

そう。亜矢と優には苦手教科など無い。

むしろ、全てが得意教科のようなものだ。

「何でそんなヤツらがこのクラスに？ 何かワケでもあるのか？」

「いや。多分、あいつら俺とクラス一緒にするために名前の記入でもしなかったんじゃないのか？ 本来ならAクラスに行ってもおかしくない頭の持ち主だからな。」

「そんなレベルのヤツが、三人も……」

「あ、翔太は微妙かも。アイツはDかCくらいの实力だ。」

ただし一つだけ、アイツにも秀でた部分があるんだけどな。

「そうか。だが、かなりの戦力アップは見込めそうだ。話してくれてありがとうな、ナオ。」

「いやいや。これで勝利への道に一步近づけたならいいさ。」

そう言っつて坂本は去っていった。

「ねえ、ナオ。ちょっといい？」

今度は明久か。

やっぱ亜矢たちのことか？

「ん？ どうした明久。」

「あのさ……あの転校生ってナオの友達なんですよ？」

「そうだけど、それがどうかしたか？」  
「なんて羨ましいんだ……！」

話に脈絡が無いから一瞬ビックリしたぞ、おい。  
それに羨ましがる要素なんて別に無いと思う。

「あれ？ ナオ君、その子お友達？」

「げっ、優！」

「なによ、その『げっ！』、って。酷い〜！」

「普通の反応だと思うが。あとクン付けで呼ぶな。」

「ナオ君、さすがにそれは酷いと思うよ？」

明久まで……！！

味方を失った気分だ……

「ナオ君。紹介してよ。」

「へ？ あ、ああ。こいつの名前は吉井明久。学校一のバカで『観察処分者』っていう学校一、不名誉な肩書きを持っているヤツだ。」

「ちよ、ナオ！ そんな紹介の仕方は無いんじゃない!？」

「はっ！ 本当のことを言っただけが悪い！」

「なんだと!？」

「ちよつとナオ君。喧嘩は良くないよ？ 吉井君も。」

取っ組み合いになりそうな雰囲気は優が止める。

ちっ、仕方ないな。優の顔に免じて今日の所は許してやろう。

「明久。優は俺の前の学校のクラスメイトで、幼馴染だ。」

「幼馴染だって!? 余計に羨ましいじゃないか！」

「う、羨ましいだなんて。そんな……！」

「待て。俺には何が羨ましいかわからない。」

「ナオ！ キミの目は節穴かい！？ こんなに可愛い幼馴染がいるのに！」

「か、可愛くなんか無いよっ！？ わ、私、今まで一度も彼氏いたこと無いし！？」

「落ち着け優。言わなくていいことまで喋ってるから。」

そんなに取り乱すほどのことでもないだろ？

何をそんなに焦ってるのやら……

「ナオにこんな可愛い幼馴染がいるなんて。はあく。叫んだらお腹空いちちゃったよ。」

「……お前また食って無いな？」

「欲しいゲームがあつてね……それまでは粗食でいくつもりだよ！」

「そんな誇らしい顔で言われても困る。それに飯はちゃんと食べ。」

お前の場合は命に関わる。

「え？ 吉井君ってご飯食べない人なの？」

「食べてない。」

「失礼な！ 塩も砂糖も」

「はいはい。それは舐めるが表現的には正解だ。意地張るな。」

「……あの良かったらでいいんですけど、お弁当作つてきてあげましようか？」

「え？ 本当？ 塩と砂糖と水以外の食事なんて久しぶりだよ！」

本当にコイツはどうやって生きているんだろう。

たまにそんな疑問が浮かんでくる。

「それより明久。いいのか？」

「へっ？ 何が？」

「後ろ。」

「後ろ？」

ゴゴゴゴゴゴ………！！！！

わーお。すんげえ怖い顔した姫路と島田なんて久しぶりに見たよ。

「ア〜キ〜？ 転校生と仲良くなるのはいいけど、ウチらも混ぜてくれないかなあ〜？」

「ちよ、美波？ 腕が反対方向に曲がっちゃいそうなんだけど………！！？」

「そうですね〜明久君………？ 私たちに黙って女の子と食事の約束をするなんて………」

「じゃあな明久。弁当の話はちゃんと皆にも話しておくから、お前はそこで二人と話しとけよ。」

「ちよつ、ナオ！ 助け」

「明久君？ 話はまだ終わってませんよ？」

「ウチも終わってないわよ？」

………「」愁傷様。

「おもしろい子だね！」

「………最初は俺もそう思った。」

最初はアイツから声をかけてきたんだっけ。

「じゃあ今は嫌いなのか？」

「いや、全然。むしろ尊敬してるくらいだ。」  
「ふーん？ 何で尊敬してるの？ あ。頭がいいとか？」  
「頭のデキはクラスの中だったら確実にビリだな。」  
「？ じゃあ何でそんなに尊敬してるの？」  
「うーんと、そうだな。『他人に対してもバカになれる』ってところかな。」  
「??? よくわかんない。」  
「そのうちわかるさ。ほら、そろそろチャイム鳴るぞ。」  
「あ、本当だね。じゃあまた後でね？」  
「おう。」

そう言っつて優は自分の席に戻っていった。  
さてと、俺も戻るか。でもその前に

「姫路に島田。そろそろチャイムだぞ。」  
「あ、本当ね。」  
「ちょっとやり過ぎちゃいましたね。」

俺の発言で二人は自分の席に向かっていった。  
さーて。この床に落っこつてる血塗れモザイクの塊はどうしようか。

「……………おい、明久。チャイム鳴るぞ？」  
「せめて最後に美味しいソルトウォーターが飲みたかったよ……………」  
「……………」  
「せめてもっとマシな物を願え！」  
「あべしっ!」

なぜ最後に飲みたい物が塩水!? もっと高級なモン考えろよ!

「ほらチャイム鳴るぞ? 早くしろよ。」

「うん、ちょっと待って。」

ゴキッ、ゴキン

「OK。行こうか。」

「俺いま人生で初めて、外れた間接元通りにしたヤツみたぞ。」

「そう？ 日常茶飯事だからなんか慣れちゃって。」

明久が幸せになれる日が来るのは、きっとずっと未来なんだろうな  
あと思った。

## 第42話 不幸は連続して起こるものだ（後書き）

とりあえず、弁当を皆で食べるフラグを立てました。

えっ？ 姫路のときみたいだった？ 大丈夫、その辺は考えて・・・  
・・・ある。うん。

えっ？ 今回も優子が出てきてないって？

だって、忘れてたんだもん！（なんか夏休みの宿題を忘れた小学生  
みたいな）

今回は登場しますので、優子さん好きな方は必ず見てくださいね？

という感じでやって行きますので応援よろしくお願いします！

第43話 世界とは自分の知らない所で回っている(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 10

・ 亜矢たちが俺らのクラスにきちやっただぜ - 3

・ しかも馴染んじゃってるぜ - 2

・ 優の弁当を食べることになる + 3

・ 間接の着脱って、可能だっけ? - 1

現在の青春ポイント合計 - 13

### 第43話 世界とは自分の知らない所で回っている

「優子。お前のところは転校生が来たか？」

現在時刻は放課後。

俺はいつもどおり優子との会話を楽しんでいた。

「二人。Bクラスとかには六人ぐらい入ったらしいけど。」

「マジかよ。Bクラスにそんなに戦力が入るとはな……………」

「ナオの所は？」

「……………誰も入ってこなければ良かったのに。」

俺は先ほどの亜矢の様子を思い出した。

あの調子じゃクラスに溶け込むのに時間はかからないだろう。

でも、それが怖い……………!

「なにそれ？ 変な人でも入ってきた？」

「変というか、知り合いというか……………」

「変な知り合い？」

「別にそういうわけでもないけど……………」

とういが見ず知らずの人間によく変とか言えるな。

「じゃあ、どんな子？ 教えてもらっても別にいいでしょ？」

「んーと、それはだな、」

俺が説明しようとした瞬間だった。

『直貴いゝ！』

後ろから波乱の気配が。

「……………これはひじょーにマズい。」

「？ ナオ、呼ばれてるわよ？」

「気のせいだ。行くぞ。」

アレに構ってしまったたら、お終いだ。

『直貴いゝ！』

「ねえ、無茶苦茶呼ばれてるんだけど。」

「気のせいだ。気のせい！」

アレに構ったらもうお終いだ。

無視を決め込め。無心になるんだ……………

『直貴いゝゝゝ！』

「もう、アレは答えてあげたほうがいいんじゃない？」

「アイツに構ったら絶対に後悔するぞ！ いいのか？」

俺がそういつたときだった。

「返事しなさい！」

「いぶあつ！」

とび蹴りが飛んできた。

別名ドロップキックともいわれるプロレス技である。良い子の皆は絶対に真似しないでね！

「返事くらいしなさいよ！ もう！」

「う、ごめんなさい……………」

返事ができなくなる体になる所だったぞ。

というか、とび蹴りされたのに何で俺が謝ってんだよ！

「ナオ、もしかしてこの人が……………」

「そ。転校生の一人だ。神咲亜矢っていいとこのお嬢様だ。」

「どうも〜！ 転校生の神咲亜矢です！ 亜矢ってフレンドリーに呼んでね？」

「あ、はい。私は木下優子。Aクラス所属よ。こっちも優子、って呼んでくれると嬉しいわ。」

初対面で早速打ち解けたか……………？

それにしても、背骨と腰骨が変な角度に曲がった気がする。

そうだ。明久のさつき使ってた技を使えば……………

「で、直貴。優子さんとはどんな関係なの？」

腰骨から行くか……………おりゃあっ！（ボキッ）

「ええっ！？ ど、どんな関係って……………！」

「だって、一緒に下校してて何も無いとは言わせないわよ？」

おっし。腰骨は何とかなった。

次は背骨……………せいっ！（ビキッ）

「な、ナオとはその、と、特に何も無いって言うか……！」  
「その動揺っぷり。怪しいわね？」

ヤバイ！ 背骨が余計に変な角度に！  
どうやって戻せば……！！

「ほ、本当になにも……！！」

「無いの？ 何にも無いなら私が直貴のこと狙ってもいいってこと？」

「そ、それは……！！」

よし、いいぞ！ 次は反対方向に捻れば……よっ！（「キツ」）

「いいの？ だったら私、手は抜かないわよ？」

「……！！？ だ、ダメよ！ そんなの！ な、ナオは私の……」

だ、ダメだよそんなの！

背骨は治ったけど今度は腰骨がまた変な方向に……

「そんなに言うなら勝負ね！ 私とアナタ。どっちが先に直貴と彼女になれるか。負けたほうは金輪際直貴のことはあきらめる、どう？」

「……！！」

くっ、こっとなったらとっておきの技で、

「直貴はちょっと黙ってなさい！」

ゴキヤッ!

うおおおおおおつ!

「……………わかったわ。その話、受けて立ちましょう。」  
「そうこなくっちゃね。じゃあ、また明日ね、優子さん。」  
「ええ。亜矢さん。」

おつ、今の一撃で全部直ったっばいぞ。  
動かしてみるか。

「よつと。あれ? 亜矢は帰ったのか?」

優子と何か大事な話をしてみたんだけど、なんだろう?

「ナオっ!」

「うおえっ!? どうした、いきなり大きな声なんか出して。」

「私、頑張るから!」

「えっ? あ、うん。そうか。わかった。」

何をだ?

色々やっていったから状況の理解ができん。

「立派にやってみせるから!」

「お、おつ。応援してるぞ?」

何のことだか知らないがヤル気になってるっばい。

ここは応援すべきだろう。

「う、うん。ナオにそう言ってもらえると、自信が湧いてくるわ。」

「そうか。うまくいくといいな。」

「うまく……はう。」

バタン！

「優子！？ どうしていきなり倒れて、というか顔が真っ赤だぞ。大丈夫か！？」

なんかマズイこと言ったか俺！？

「な、ナオと、うまく……はう。」

「優子……！？」

亜矢と絡んだ人は、みんな波乱が起きることを身をもって知った一日だった。

優子SIDE

今日は、大変な放課後だった。

ナオの友達の、亜矢って人が今日は私に声をかけてきた。

『そういうことなら、勝負ね！ 私とアナタ。どっちが先に直貴の彼女になれるか。』

最初聞いたときはビックリしちゃった。

だって、ずっとこのままの関係が続くと思ってたから。

それが、あの人の提案で、変わるかもしれない。

ナオと私が、恋人同士になる。

そう考えただけでも顔が真っ赤になりそう。

でも、負けたら金輪際、ナオのことを諦めなきゃいけなくなっちゃう。

それだけは、絶対に嫌。

『お、おう。応援してるぞ？』

ナオにこんなこと言われたら頑張るしかないわよね。  
あの亜矢って人に負けるわけにはいかないんだから。

「頑張らなくちゃね。」

だって、ナオは私のことを面と向かって可愛いと喋ってくれた唯一の人だもの。

自分のためにも、ナオのためにも。全力を出さなくちゃね。

「姉上。風呂が空いたぞい。入らんのか？」

「!? ちょっと！ ノックぐらいしなさいよ秀吉！」

「既にしたのじゃが……聞こえておらんかったのか？」

「えっ？ そうだったの？」

わ、私としたことが……不覚だわ。

「別に姉上があの本を読んでおろつが、ワシは別に気にしないがの。」

「……何ですって？」

「ん？ 姉上が別にボーイズがラブな本を読んでもワシは別に気にしてないと、ちがつ、あ、姉上！ そつちの間接はそちらに曲がらな」

ギャー……！！

「ふうっ……さ、シャワー浴びてこよ。」

とにかく、頑張らないとね。

あんなのに負けてたまるもんですか。

### 第43話 世界とは自分の知らない所で回っている(後書き)

さて。自分の欲望のまま、優子を出してみましたか……なんだコリヤ。

勢いというものは恐ろしいですね。

まあ、亜矢は優子のライバルということが確定しました。というか、前々から決めてました。

優子ファンの皆さんは全力で優子を応援してください！

亜矢ファン(いるかな?)のかたは、亜矢を全力で応援してあげてください！

そんなこんなでやっていきますので、皆さん応援よろしくお願いします！

**特別番外編 弁当パニック！ ～前編～（前書き）**

前回の青春ポイント合計 - 13

・ドロップキック跳な蹴を食らう - 2

・背骨と腰骨に異常が発生 - 1

・優子、倒れる。何故か顔真っ赤 - 2

現在の青春ポイント合計 - 18

特別番外編 弁当パニック！ ～前編～

世界は、俺の知らない所で回っていたようだ。

「直貴く？ 一緒にお昼食べない？」

時刻はお昼。

昨日の背骨バキバキ事件の次の日である。

何故か亜矢が俺に積極的に話しかけてくるようになった。

ザワザワザワッ！

「………何故に？」

「一緒に食べたいから。」

はあ………皆の殺意がヒシヒシと伝わってくる。  
俺に飯を食べさせないつもりか？

「悪いが食べるなら皆で、だ。昨日優が弁当作ってくるって言うてたからな。おい、明久！」

「んっ？ どうしたの、ナオ？」

明久は丁度ソルトウォーターを飲んでいる所だった。  
ていうか、食べ盛りの高校生が昼飯それだけだったら死ぬぞ。

「どうしたのじゃないだろ。飯だよ飯。昨日優に頼んだだろ？」

「ああっ！？ そっか。」

忘れてたのかよ。

「折角わたしが誘ってあげたのに……」

「？ だったら皆で食べるか？」

「もういいわ。別のところで、」

何だよ。気が変わるのが早いなあ。

「昨日話してた優子も呼ぶ予定なんだけど。行かないなら、」

「行くわ。」

「って、ええっ！？ どっちだよ！」

乙女心は判りませぬな……

「優！ 弁当あるか？」

「もちろん！ 自信作だよ！」

「本当？ 楽しみだね、ナオ！」

優の弁当はプロ級にうまいからな。

明久ほどではないが楽しみだな。

「坂本に秀吉にムツツリーニ！ お前らも一緒に来るだろ？」

やっぱりアイツらにも声をかけておいた方がいいだろう。

この面子だけだと、後でクラスメイトに何されるかわからないからな。

「？ いいのか。俺らも一緒に貰っても。」

「大丈夫だよ。優は皆で食べるときは量をかなり多めに作って

くるからな。」

「それでは、一緒に頂くとするかのう。」

「……………楽しみ。」

皆も優の弁当に興味があるらしい。

まあ姫路のときみたいにはならないから安心して食べる

「あの、明久君。」

「ん？ どうしたの、姫路さん？」

「じ、実はですね。私もお弁当を」

「お前ら！ 明久は切り捨てるぞ！」

「了解した！！！！」

「ちよつと待つてよ！ 僕だけに処理させる気かい！？」

当たり前だ！ 自分の身が最優先だろ！

「あ、皆さんの分もありますから良かったらいかがですか？」

「……………これは死亡フラグと受け取っていいんだろうか。」

「ああ、それはいいな。でもそれは明久だけに食わしてやってくれ。最近食べてないようだからきつと腹が減ってるはずだ。」

「いやいや雄二。姫路さんのお弁当だよ？ 我慢しないでこっちで一緒に食べようじゃないか。」

「いやいやいや、明久。遠慮しないで一人で食って来い。俺たちは屋上で細々と食べてるさ。」

「いやいやいやいや、雄二。僕と一緒に」

「いやいやいやいやいや」

キツ！（メンチの切り合い）

このままだと昼休みが終わってしまう。  
しょうがない、止めるか。

「もう！ 喧嘩するくらいなら皆で一緒に食べましょよ！」

どうしてここで亜矢が出て来るんだよ。

さすがイベント大好き女。俺より先にでしゃばるとは。

「しょうがないな。ここは神咲さんの意見を尊重して皆で食べよう  
じゃないか！」

「くっ！ 明久、テメエ……！」

「じゃあ、ココで食べるには狭いだろっから、屋上にも行こうぜ  
？ 今日快晴だしな。」

「それもそうですね。」

俺はそこで提案を出した。単純に外で食ったほうが美味しそうだからだ。

他にも意味があるがな。

そう。これが、俺が生き残るための作戦だ！

「じゃあ、人数は多い方がいいから俺は優子を誘ってくる。」

「な、ナオ！ 君だけ逃げようって言うのかい……？」

「俺らが来るまでに時間がかかるだろうから、先に食っても構わ  
ないからな？」

「この裏切り者め！」

「はっ！ 信用されてた憶えは無い！ じゃ、後は頑張れよっ！」

俺はダッシュで廊下に出た。

優子を呼ぶことを口実にして、姫路の料理から逃げる。

これが俺の作戦だ！

『この裏切り者お〜！』

教室の方からそんな声が聞こえてくる。

優子は本当に呼ぶつもりだが、それは姫路の料理が無くなってからの話だ。

俺だけ生き残り、優子との甘い昼休みを手に入れてみせる！

「……………直貴を落とすのは難しそうね……………」

「

ガラガラガラ

「ゆっうつ〜！

昼飯でも一緒に

「

俺がAクラスの教室に入った瞬間、

ガッ!

扉のレール部分に躓いた。

「わっほい?!?!?!」

「きゃあっ!」

あ、やべ。誰か巻き込んだじゃった。

「す、すいませんでした、って、優子。」

「ちよっと、いきなり誰、って、ナオ。」

ぶつかった相手は、俺のお目当て木下優子さんだった。(気が動転して何故か説明口調)

って、ちよい待ち。この体勢……

「もう、どうしていきなりぶつかってくるわけ? 痛かったじゃない。」

「ご、ゴメン優子。ちよっと転んじゃって。」

「アンタはどうしてそう何度も転ぶの? 注意力がちよっと足りないんじゃない?」

「あのさ、優子。」

「えっ? なに?」

「注意力が足りないのはお前のほうだと思っぞ。」

「へっ?」

俺と優子の体勢。とんでもない体勢になっている。

俺が転んだことにより回転力が生まれ、優子が巻き込まれた。その優子が俺を押し倒すような形になっている。

「優子も強引だな。嫌がる俺を無理やりこの形にするなんて。」

「ちょ、ちよっと！ 転がってきたのはナオでしょ！ 何でアタシが無理やりこの形にしたことになるの!？」

「さて、冗談はこのくらいにして、」

「冗談!？ 冗談にしては心臓にかなり悪いわよ!」

「それを言うくらいなら、早くどいてくれると嬉しいんだが。」

「!？ ……ゴメン。」

俺の発言を受け赤面しながらも立ち上がる優子。

ぶつかっておきながら言うのもなんだけど、メッチャ可愛い。

「今なんかいやらしいこと考えてなかった?」

「いや、これっぽっちも。」

「本当? ならいいけど。」

なんて勘が鋭いんだ。

立ち上がった瞬間のスカートの翻りとか、見えそうで見えない感じとか。

男心をくすぐりすぎだ。

「で、何の用なの? まさか何も用が無いなんて言うんじゃないんでしょうね?」

「ん? 用が無かったら来ちゃいけないのか?」

「べ、別にそう言ってるわけじゃ ……ないけど。」

何か最近優子がツンデレになってないか?

「で、用って言うのは一緒に昼飯を食べないかって話なんだけど。」  
「行くわ。」

「即答かよ!?!? . . . . . まあ、別にいいけど。」

優子にしては積極的なような . . . . .  
いつも通りか。うん。

「じゃあ、屋上に皆いるから一緒に行こうぜ。」

「皆って . . . . . なんだ。そういうことね。」

「? どうかしたか?」

「何でもないわ . . . . . 二人だけかと思ったの  
に。」

「さ、そうと決まれば . . . . . タイミングを計らなきゃな。」

「タイミング? 何かあるの?」

「まあ、な。」

俺はあの事件が起きてるとは思わなかった。

既に姫路の弁当は無く、俺が来る頃には大丈夫になっている予定  
だった。

まさか俺がいない間に、あんなことになってるなんて . . . . .  
. . . . .

「う、これは………!?!?」

目の前の惨劇に対して、俺は思わず声を上げた。

「ムツツリーニ………!?!」

一番最初の犠牲者は、ムツツリーニだった。

小柄な体は小刻みに震え、その身に何が起こったのかを懸命に伝えようとしている。

というか、死んでないよね!? 俺は友達が目の前で死んでいくのなんて見たくねえぞ!?

「な、ナオ………やっぱり、僕らには無理だったよ。」

「どうした、明久! お前らしくないぞ!」

「ふっ………。所詮、俺らは姫路の手の内で躍らせていただけだったんだ………」

「坂本まで! どうした、いつものガッツをみせる!」

「ははは………。ワシらは結局、こうなる運命だったんじゃない………」

「秀吉………! 一体何があったんだ。」

「直貴、お前は生き延びなきゃダメだぜ………?」

「翔太!? お前もいたのか!?!」

「………それは酷くない?」

名探偵でも困惑するようなこの惨劇。

きつと殺人をするためのトリックは無く、その弁当には純粹な愛情しか詰まってるんだろう。なのに、何故こうなったのか。その弁当に何が入っていたのか。真相はまだわからない。

最後に優子が、こう言った。

「……………何この空間。カオスだわ……………」

特別番外編 弁当パニック！ ～前編～（後書き）

ツンデレは男子がやるとカッコいいと思っている作者です。

女子はツンデレやるぐらいならストレートに気持ちを伝えたほうがいいと思うんですよね。

三次元でツンデレやられたら、絶対ウザいと思ってる。そんな私です。

さて、話がズレましたが今回の話はどうでしたでしょうか？

ちなみにナオは姫路の弁当の威力は一度しか食らったこと無いので（胡麻団子）あまりわかってません。ので、今回の事件ではつきりとわからせてあげようと思いました（笑）

女子の手作り弁当。文字だけでも相当の威力ですよ。

姫路さんの弁当は食べても凄そうだけどw

さあ次回は事件の真相が明らかになります。

たった一つの真実見抜く、見た目は普通。頭脳は中々。

その名も名探偵ナオ！ 見たいな感じで行く予定なので皆さん応援よろしくお願いします！

特別番外編 弁当パニック！ ～後編～（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 18

・乙女心は謎めいてる - 1

・姫路の弁当も食べることになる - 1

・ドキッ！ 優子が俺を押し倒したような形に…………… + 3

・ドキッ！？ 目の前でムッツリーニと翔太が…………… - 3

現在の青春ポイント合計 - 20

特別番外編 弁当パニック！ ～後編～

明久SIDE

「て、天気が良くてなによりじゃな～・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

秀吉が無理にテンションを上げようとしているのが、手に取るようにわかる。  
頷いていたムツツリーニも正直、震えまくっている。

「あ、シートもありますよ?」

姫路さんが大きいシートを取り出した。女性陣はわいわいと準備を始めている。

準備は万端、さて最初にやられるのは誰かな?

「姫路さんって、お料理も勉強もできるなんて凄いわねえ〜。」  
「い、いえ! 神咲さんにそう言ってもらえるなんて嬉しいです。」  
「本当に瑞希ってば、何でもできてうらやましいわね〜。」  
「ねえ〜亜矢ちゃん亜矢ちゃん。私はどうなの? お料理できるよ?」

「優も凄いに決まってるでしょ〜! こんなに可愛いんだし〜。」  
「かかか、可愛くなんて」

ドンドン女子は仲良くなり始めているが、僕らにとっては関係ない。  
今重要なのはこの場を生き残るための作戦だ。

(お前ら、今回限りは自分の身だけ考える。だが、女どもにもあの弁当は食わせてはいけない。)

(それはつまりこの男のグループで蹴落としあえてこと?)

(それは難儀な話じゃのう。)

(不可能に近い。)

「じゃあ皆さん、どうぞ！」

「私のお弁当も食べてね。」

そうこうしている間に準備が終わっていた。川村さんの弁当も姫路さんの弁当も前に並んでいる。

くっ………！ 僕らには作戦を立てる余地すらないのか！

「へえ、姫路さんのお弁当って美味しそうだな！」

そう思っていていられるのも今のうち………

「アレ？ 水樹君？ こんな所で何してるの？」

「えっ？ 酷いなあ。さっきから一緒にいたじゃないか。」

「水樹君って誰が呼んだの？」

「………(びっ)」

ムツリーニが手を上げる。

アレ？ いつの間に仲良くなったの？

「いや、それにしても康太は面白いヤツだな！ こんなにも話が合うとは。」

「………アノ話はまた、後で。」

「おう。ここには女子もいることだしな！」

女子がいるとできない話……？ 何だろう、凄くそそられるような。

この胸の高鳴りは何だろう……！ 僕も混ぜてもらいたい。

「じゃあ、早速ただこうかな！」

「ちょ、水樹君　！」

「（パク）」

バタンツ！ ガクガクガクガク

手遅れだ……！

水樹君は豪快に顔面から地面にフレンチキスをした。（詩的表現）

「……………」

「……………」

僕らは顔を見合わせて無言になっていた。

「わわっ、水樹君!？」

姫路さんが慌てて、配るうとしていた取り皿を落とす。

「……………（むく）」

水樹君が起き上がった。一命は取り留めているみたいだ。良かった。今回は僕らでも食べれそうだ。

「ふっ……この程度で死んでたまるか。俺には転校先で八レムを作るといふ野望がある……！」

そう言いながら水樹君は姫路さんに向けて親指を立てる。そんな野望があつたのか……

「あつ、お口に合いましたか？ 良かったですつ。」

なんてガツツなんだ、水樹君。キミは人間なのかい？ この転校生、侮れない。

（ほ、本当に大丈夫、水樹君？）

（……俺には、これが限界だ。）

（み、水樹君？）

「あら？ どうかしたんですか、水樹君？」

「いえ、僕は何かを食べるとすぐに眠くなっちゃう体質なので……（がくっ）」

そう言うと水樹君は地面に伏せていった。

やはり、水樹君でも姫路さんの弁当には耐えられないのか……

「……脱落者、一名追加。」

「今回もヤバそうじゃのう……」

「改めてみると凄い威力だな……」

これを見て、皆も恐れをなしたのか中々弁当に手をつけようとしな

「じゃあ優。このから揚げ貰うわね。」

「どうぞ、亜矢ちゃん。」

「わあ、川村さんのも美味しそうね。この玉子焼き、貰っていい？」

「どうぞ、島田さん。」

もう一つの弁当は完全なる安全圏内。是非とも頂きたい所だ。だが、

「良かったらどんどん食べてくださいね。」

この顔だ。姫路さんがこんな顔で進めてくるのに断るわけにはいかない。

「じゃ、じゃあ頂こうか……」

ここが、一番の修羅場だ。

なぜなら僕らは女性陣にこの化学兵器を食べさせないようにし、尚且つ自分も生き残らなければいけないからだ。水樹君の死を無駄にしないためにも。

「……」

「む。ムツリーニ？ どうし」

「……」 (パク)！

ボタン ガタガタガタ

「む、ムツツリイイーニイイー……!!」

自ら死に行くムッツリーニ。  
なぜそんな真似を!?

(くっ! やられた!)

(ゆ、雄二。どういうこと?)

(アイツは先にやられることによって、残りの弁当を俺らに押し付けようと考えたんだ!)

(何だつて!?)

(この場合、最後まで食いに行かなかったヤツが負けるということだ。)

(そ、そんな……!)

ということはこの勝負、早く死にに逝ったヤツが勝ちということか。でも、そんなの……

(ワシはさっきのを見て決心が着かん……)

(俺も、今を見てすぐに行こうとは思わない……)

先ほどまでに二人が犠牲となっている。

その光景を見ていたら、手が出なくなってしまうのは自然な反応だ。くっ……! どうしたらいいんだ……!

『じ、これは……!?!』

そこに、背中に死神を背負ったドジが現れた。

「な、ナオ……!?!」

ナオSIDE

俺が来た瞬間には、そこは既に阿鼻叫喚の地獄絵図となっていたのだった。

「弁当まだ全然残ってるじゃねえか……」

俺の作戦とは裏腹に弁当は全然無くなっていなかった。  
くっ！ 来る時間が早すぎたか……？

（ナオ。）

小声で優子に呼ばれる。

この状況について説明して欲しいのだろう。

（残念ながら、見ての通りだ。）

（見てわからないから聞いてるんでしょ？ ……土屋君た

ちどつしちゃったの？)

(そうだな・・・・・・・・一言で言うと姫路の弁当が原因だ。)  
(弁当って・・・・・・・・そんなに不味かったの？)

不味いだけなら俺も食ってるよ。

(死に至る危険性がある薬品が入ってると思われる。)

(死・・・・・・・・！ 何でそんなものが？)

(アイツの実力だ。それ以外なんとも言えない。)

(実力で片付けていい問題じゃないわよ！?)

俺だってそう思ってるよ。

でも、それ以外なんて言っていないから見つからないんだ。

(とりあえずお前は姫路の弁当を絶対に食べるなよ。耐性の無いお前じゃ瞬殺だ。)

(瞬殺・・・・・・・・)

優子が生唾を飲み込む。俺の伝えたいことは以上だ。  
さて、ココからどうするかだな・・・・・・・・

「わ、ワシはこれを貰おうかの！」

「えっ！？ ひ、秀吉ちよ」

秀吉はから揚げを一つつまみ、自分の口に放り込んだ。

「(パク)」

ドン！ ゴシヤアアアアア！！！ ガタガタガタ

ひ、秀吉………!!

俺は秀吉の食べたから揚げを一つつまんで匂いをかいでみた。

………薬品臭がする。これにやられたのか。

「ど、どうしたんですかあつ!？」

姫路が慌てて秀吉に声をかける。

これは見るだけでも十分な恐怖を植えつけられるな………

「大丈夫だ、姫路! 秀吉は全身痙攣の持病もちなんだ。だよな、優子?」

だがここは姫路を傷つけるわけにはいかない!

「えっ!? あ、うん。そう。持病もちなの!」

「だ、大丈夫ですか? そんな病気を持っていたなんて………  
やっぱり、クロロ酢酸の入れすぎが良くなかったんでしょうか………  
……?」

クロロ酢酸：脂肪族カルボン酸の一つで、酢酸の塩素置換体にあたる。潮解性の無色結晶。工業的にはトリクロロエチレンを90%硫酸中を通し加水分解することにより製造する。人体に触れると皮膚、粘膜を冒す。 辞書抜粋

(い、今クロロ酢酸って言わなかった!?)

(お前の気のせいだ。黙って優のほうの弁当食ってる。)

(そ、そんなこと言ったって………!)

きつと秀吉は一番のハズレくじを引いたようだ。  
だが、俺らはこの全部を何としても食べなきゃいけない。  
きつと秀吉より負担がでかいだろう。

(秀吉・・・・・・・・・・！先に逝くなんて・・・・・・・・・・)

(明久、これを切り抜ける方法は無いのか！？)

(無いね。この場では先に食べて、先に逝ったヤツが勝ち組だよ。)

(くっ・・・・・・・・・・！選択肢が一つしかないなんてありえねえ！)

どうやって生き残るか。

考えを巡らせるんだ・・・・・・・・・・そうだ！

確かクロロ酢酸は水酸化ナトリウムで中和できたはず・・・・・・・・・・  
ってそんなものあるわけ無いだろ！

「ど、どうかしましたか？ あ、もしかして・・・・・・・・・・」

ヤバイ！ 姫路が何かに気づいたぞ。

もしや自分の料理の殺傷性に気づいてくれた

「味が薄かったですか？」

薄いわけ無いだろ！？

むしろもつと濃度を薄めてくれよ！

「あ、でしたらここに、『特性のふりかけ』がありますので良かったらおにぎり等に使ってください。」

俺、猛ダツシユ。

「おおっと、ナオ。どこに行くのかなあ？」

ガシィ！

「明久………テメエ………！」

「ふっ………一人だけ逃げようなんてそんな甘っちょろいとさせるわけ無いだろ？」

くっ………！ 掴まれた。

逃げれねえ！

こうなりや明久、お前が生け贄だ！

「ひ、姫路！？ 向こうでUFOとUFOが正面衝突してるぞ！」

「……ええっ!?」「……」

女性陣は全員、俺の指差した方向を見た。  
チャンスだ！

(どらああっ！)

「ごえふっ!?」

その一瞬の隙を突き、俺は拳を明久の鳩尾にクリーンヒットさせた。

(坂本！ 弁当を！)

(わかった！)

俺は坂本から弁当を受け取ると、

(飲みこめええっ！)

(もごおっ!?)

明久の口に流し込んだ。

俺は吐き戻そうとする明久の口を押さえつけた。

そして数秒たった後、明久は動かなくなった。

「ごめん、見間違いだったよ。」

「あ、そうだったんですか。」

「もう、ビツクリしちゃったじゃない。」

「ゴメンゴメン。」

こんな古典的な手に引つかかるとは思わなかった。

けどそのお陰で、危険物は処理できた。これで安心して優の弁当を食うことができる。

「あれ？ もう食べちゃったんですか？」

「あ、うん。明久が今の一瞬で『姫路さんの弁当は僕が食べる!』、  
って言って全部食べてた。」

「ほ、本当ですか？ 良かったです。」

坂本がアイコンタクトを取ってくる。

(お前も案外鬼畜だな。)

(いやいや、そんな。)

(褒めては無いがな。)

(まあいいけど。あ、そういえば坂本。)

(ん、なんだ?)

(お前、霧島にココで弁当食べること言ったのか?)

(.....)

死亡フラグが立ちました。坂本、生きて帰ってこいよ。

「それじゃあ、優のほうの弁当も貰おうかな。」

「あ、うん。どうぞ。」

あ、でもその前に、

「お前ら、早く起きろ。優の弁当食っちゃまうぞ。」

明久はもちろん秀吉や、翔太、ムツツリーニ声をかけた。

コイツらさつきからまともなもの食ってないからな。

「……………気持ち悪い。」

「それは気分がいか？俺がいか？後者だったらぶっ飛ばすぞ。」

「……………前者。」

「だったら食べたほうがいい。少しは気分が良くなるはずだぞ。」

「……………わかった。」

渋々だが、箸を取るムツツリーニ。

そして一つ、玉子焼きを食べた。

「……………!？」

「ど、どうですか？美味しいですか？」

「……………これは、どこに嫁がせても恥ずかしくない味。」

「おい。そんなに旨いのか？」

坂本がムツツリーニの言葉に反応する。

先ほどから恐怖の料理しか見てないから、こちらが気になったのだろっ。

「どれ、一つ貰おうか。(ヒョイ)」

坂本がおかずを一つまみとって自分の口に入れた。

「……………!? なんだっ、マジか!？」

「お前も驚いたか、坂本。中学生のときよりさらに上達したな、優。」

「えへへ。その鮭のしょうが焼きは自信作なんだ。」

優が坂本の反応を見て嬉しそうに話す。

前に振舞ってもらったときよりも明らかにレベルが違う。

「なにになに? そんなに美味しいの?」

「あ、吉井君。」

お、復活したか明久。

意外と早かったな。

「ところでナオ。どうして僕はココにいるんだっけ?」

「マズい! 記憶障害を起こしてる! とりあえずこれ食べて落ち着け。」

「ほぐつ。(もぐもぐ)……………!?」

お前もわかるか。このレベルが。

「……………全て思い出したよ。」

「そうか、それは良かった。」

優の弁当には記憶を取り戻す効果があるらしい。

今度俺も試して見るか。

「ナオも食べるよね？」

「おう。」

そういうと明久は俺に一番大きい鮪のしょうが焼きを皿に取ってくれた。

「お、サンキュー。」

「遠慮しないで食べていいよ。」

「？　そ、そうか。じゃあ、遠慮なく、（パク）」

どこか明久の様子が不自然だった気もするが、俺は鮪のしょうが焼きを食べた。

俺の記憶は、この瞬間で途切れるのだった……………

ナオ。僕は全てを思い出したよ。  
キミが僕に無理やりあの化学兵器バイオウエボンを食べさせたことも。

「あれ？ 私の持ってきた『ふりかけ』がありませんね？ どーい  
つちやっただんでしょう？」

「ああ、姫路さん。それは僕が貰ったよ。」  
「え？ どうしてですか？」

反射的に、ナオを殺るため、と言いそうになったがここはグツと我慢だ。

「あまりにも美味しそうだったからつい。他の場所でも使わせてもらうよ。」

主に、憎いやツの暗殺用に。

「あ、喜んでいただけたんですね？ 良かったですっ。」

そんな顔されると、こっちは残念な気持ちになってくるよ。

「うーん……何が起こったのじゃ？」

「あ、秀吉。（天国から）戻ってきたんだ。」

これ以上時間がかかったら心肺蘇生をしようと思ったけど、大丈夫  
そうだ。

「うーむ。なにやらきれいな川やらその先に見えるお花畑やら、色  
々なものを見た気がするのう……」

もうちょっとで向こう岸だったようだ。  
危ない危ない。

「あ、そういえばそのお花畑には翔太殿がいたのう。」

「雄二！ 今すぐ水樹君に心肺蘇生の準備を！」

「わかった！」

僕は翔太君に心臓マッサージを施した。

すると体は血色がよくなり、水樹君は一命を取り留めた。

「ありがとう、吉井君たち。もうダメだと思ってた。」

「これぐらいお安い御用だよ。いつも経験してるしね。」

「こんな修羅場をいつも経験してるのか？」

まあ、臨死体験は生易しくは無いけど。

「それよりも皆で川村さんのお弁当を食べようよ。お腹空いたでし

よ？」

「おろ？ 直貴は？」

「そこで寝てるよ。気分が悪くなったんだって。」

まさか、ふりかけがあんなに効くとは……………

死ななければいいけど。

「それなら皆で食べるか。ナオには悪いが食べないともつたいないしな。」

「そうだね。もつたいないもんね。」

「では、頂くとするかのう。」

「……………」(コクコク)

「じゃ、俺も食べますか。」

僕は川村さんのお弁当を心ゆくまで堪能したのだった。

## ナオSIDE

『いや、川村さんって料理が本当に上手だね。あの鮪のしょうが焼きどうやって作るの?』

『あ、それはね。まず鮪を一口サイズに切って……』

( ……あの二人、仲いいなあ。 )

『 ……あの二人、お似合い。』

『かもな。ま、姫路と島田に新たな恋敵が登場したって所だな。』

( ……姫路と島田が凄い怖い顔してる。 )

『明久君ったら……川村さんにデレデレしちゃって、はし』

たないですね!」

『そうね。後でお仕置きしてあげなくちゃ。』

(……………あれ? 何か凄くふわふわしてる。と  
いうか、あそこで寝てるのは……………俺?)

『ねえ、亜矢さん。さっきからナオが寝たまま動かないんだけど……………』

『嘘!? 直貴? 生きてる!?!?』

(……………俺、死んだのかな……………魂が体  
から離れてるし……………)

……………

「って、ダメだろおおおおおおつ!?!?」

「うわっ!?!?」

あ、危ない所だった……………  
もうちょっとで地上からおさらばする所だった。

「ナオ、大丈夫? 気分が悪そうだったけど……………」

気分の問題じゃなくて、意識とか魂がヤバかったなんて言えない。

「優のお弁当が美味しすぎたのかしら?」

美味しいはずなのに、意識が飛んだのは何故だろう。  
……………ダメだ。思い出せない。

「あ、ナオ。起きたんだ。良かった。」

「明久……俺一体どうしちゃったんだぼろろろろろ。」

「ナオ!? いきなりどうしたの!?!」

吐き気が止まらない。

「まだ腹の中に残ってるのかも……」

「? 何の話だ?」

「い、いや、何でもないよ。」

俺が寝ている間に優の弁当は全て無くなっていた。

しかも、その後の俺の体調は最悪。放課後になっても俺の吐き気はおさまらなかつた。

優子も心配してくれているが、原因がわからないしなあ……

「ねえ、ナオ。どうして鮪のしょうが焼きを食べた後、急に寝ちゃつたの?」

「鮪のしょうが焼き?」

ああ、あの明久がくれたヤツか……待てよ?

明久がくれたアレに、何か混入していたのか?

だとすると、

「なあ優子。明久が俺に料理を取ってくれたときに不自然な動きは無かつたか?」

「え? うーん、しっかり見てはいないけど、何か粉のようなものをふりかけていたような……」

ドンピシャだ。

「……………あの野郎……………」  
「な、ナオ？」

殺す気かあああああああああ！！！！

**特別番外編 弁当パニック！ ～後編～（後書き）**

お気に入り登録数が100件に到達しました！

これも皆様のお陰です。これからもよろしく願いします！

弁当パニック編、終了です。

よく考えると、別に名探偵でもなんでもなかったような。

むしろ被害者な感じになりました。もっとこうした方がいいなどの意見を受け付けていますので、皆さんどうか感想お願いします。

さあ次回はいよいよ強化合宿です！ 清涼祭以上に盛り上げようと思っっていますので、皆さん楽しみにしてくださいね！

応援よろしく願いします！

くバカドジお気に入り100件登録記念座談会

「おろ？ まだ作者は来てないのか？」

俺はとある焼き肉店の一室に来た。

作者がこの作品のお気に入り登録件数が100件に到達したから、そのお礼がしたいとこの場でこの場に俺を呼び出したんだ。

「それにしても遅いな……呼び出しておいて遅刻とかどんだけズボラなんだよ。」

だから新しい彼女が出来ないんだよ。

「何か言ったか？」

「うおわっ!？」

俺がズボラと言うや否や、いきなり天井から姿を現した。というか、そこから登場する必要は無くね？

「何でそっから出てくんだよ！ おかしいだろ!？」

「いや100件に到達した嬉しさでテンションが最近おかしくてな……よつと。」

「天井に居たくなるってどついうテンションだよ!？」

そんなテンションになることは俺の人生では一度も起こらないことを願っている。

「さて、じゃあ始めたいと思います。でもその前に二人だけって淋

しくない？」

「確かにそうだな……。他に誰か呼んでないのか？」

「いや、誰も呼んでないぞ。誰か呼びたいヤツとかいないのか？」

「うーんと、じゃあ優子でいいか？」

「いや、優子さんはこの前呼んだから却下で。あ、秀吉くんにしよう。決定！」

「俺の意見は前面無視ですか!？」

だったら最初から聞くなよ!？」

ガラガラ

「うむ？ こころはどっじゃ？」

「って、もう来たよ!？ さすが作者。」

「はっはっは。もっと褒めてくれても構わんぞ？」

「いや、生理的に無理。」

「どういつ状況!？」

まあ、作者だけあってさすがの一言に尽きるけどな。

「おお。ナオではないか。このようなところで何をしておるのじゃ?」

「ん？ 何か作者がこの小説のお気に入り登録数が100件に到達したからお祝いだって。」

「よくわからんが、凄いことをしたのじゃな？」

「まあ、そういうことだ。秀吉も座れ座れ。」

「そっじゃな。では、お言葉に甘えさせてもらうとするかの。」

常識人なだけあって違和感なくこの場に入ってきたな。  
ま、ツッコミしなくていいから楽だけど。

「じゃあ、秀吉くんも来た所で、乾杯といこうじゃないか。」

「あ、それ秀吉の分ね。」

「おお、用意がいいの。まるでワシが来るのをわかっていたようじやな。」

「まあ、細かいことは気にしないで、カンパーイ！」

「乾杯（じゃ）！」

ゴクゴクゴク……

「ぶはあー。やっぱり夏場はサイダーだね！」

「一応、未成年だからな。」

「そうじゃの。」

「うるさいなあっ。細かいこと言うなよ。」

「ああ、すまぬ。ここは楽しくいくところじゃったな。」

「そうそう。そうなんだよ秀吉君！」

作者はサイダーでも酔いそうな体質だな。

「ところでいきなりなんだけど、秀吉くんって彼女欲しい？」

「本当にいきなりだな!？」

脈絡が無さ過ぎるだろ!？

「実は読者の一人が秀吉に彼女が出来るかどうか気になってるっぽい人がいてな。日ごろの感謝も込めて、その人のために一人オリキ

「ヤラを作ろうと思ってるんだけど、どう?」

「そうか。そんなことがあったのか。」

「どうと言われてもじゃなく……難しいのう。ワシは今演劇に一筋じゃからの。当面の彼女とやらは必要は無いぞい。」

「そうか、そんなに欲しいか!」

「今の話の流れでどうしたらそこに行き着くんだよ!? 今の話一ミリも聞いてないだろ!？」

作者の思考回路は俺ですら疑わしいものになっているな。本当にこの作品を作った人なのか?

「それでは秀吉くん。お前の好みの女性のタイプを聞かせてくれ!」  
「恥ずかしいのう……」

「秀吉。ここでお前が大人になればこの作品の幅が広がるだろ?

「ここは一肌脱いで、お前の好みのタイプを聞かせてくれ。」

「ナオ……お主、少しニヤついていないかの?」

「そ、そんなことは無いぜ? こんな面白い……もとい、新しい仲間が出来るかもと思うだけで楽しい気分にならないか?」

「お主今楽しいと言わんかったか!？」

聞こえてたか……まあいい。

何だかんだ言つて秀吉は優しいから答えてくれるはずだ。

「しょうがないのう……ワシの好みの女性のタイプは読書が趣味で、大人しい子が好みかの。あ、後は常識人なところかのう?」

「確かに俺らの周りには常識人がいないからな……」

「秀吉くんを異性として好きそうな人もいなそうだしね。」

「それは言わんでくれ……」

確かに秀吉は女として認知されるか、第三の性別秀吉として認知されるかのどちらかだからな。

「ところで作者。そのくらいの情報でキャラクターなんて作れるのか？」

「おお。ちよつとの情報があつてもそこから話を膨らませていけば結構簡単にできるぞ。」

「そういうもんか？」

「そういうもんだよ。ほら、ドンドン飲もうぜ、食おうぜ？ 今日全部俺のおごりだ！」

「「本当か（の）！？」」「」

なんて気前がいいんだ！ こうしちゃいられない！

「すみませーん！ 店員さん、俺特選和牛のタンを一つ！ あ、塩で！」

「ワシは特選和牛の肩ロースを二人前で頼もう！」

「お前ら加減を知らないな！？」

その日は、満足のゆくまで焼肉を堪能したのだった。

「あーあ。またしばらくバイト三昧だな……」

くバカドジお気に入り100件登録記念座談会く（後書き）

この小説を投稿してから随分と経ったことを実感しました・・・  
・  
いやゝ案外ここまでの道のりは長かったですね。

100件に到達したときの私のテンションは、テストで満点を取ったときより激しいものだったと、友達が言っていました。（＋終始ニヤついていて気持ち悪かったそうだ）

ま、そんなこんなで秀吉に彼女を作ることが決まりました。  
オリキャラ作るのって、本編で言ってる以上に難しいんですね。  
だけど、それ以上に作るのが楽しいから作っちゃうんですけど（笑）

さて、これを作ってる間に総合評価が300を超えました！  
皆さんに感謝感激、感無量です！

これからも精進して、もっといい作品を作れるように頑張りたいと思います！

〜第三部開始〜 第44話 人からの相談事はしっかり答えてあげよう(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 20

・ 作戦失敗。弁当たんまり残っている - 1

・ 姫路の弁当ウエボンの破壊力に、驚く - 3

・ 記憶障害に陥る - 3

・ 全て思い出して怒り爆発 - 3

現在の青春ポイント合計 - 30

〜第三部開始〜 第44話 人からの相談事はしっかり答えてあげよう

「兄さん！」

「ん？ どうした、駿<sup>しゅん</sup>。」

忘れがちな設定だが、一応俺には弟がいる。

コイツが可愛いんだよ、本当に。……俺って本当に兄バカだな。

いや、ブラコンって言うのか？

「兄さんってさ、彼女いるの？」

「ぶっ！？」

さすが小学生。聞きたいことはオブラートに包まずストレートに聞いてくるな。

いきなりでビックリしたぞ。

「いきなりどうしてそんなこと聞いたんだ？ ビックリすんだろ。」

「あ、うんゴメン。なんとなくなんだけどね。」

「なんとなくで聞くなよ！？」

興味本位だけかよ。

この知りたがりな性格は一体、誰に似たんだろう。

「まあ、いないわけではないな。」

「それって亜矢さん？」

「断じて違う。」

「即答しなくても……亜矢さん別に悪い所無いじゃん？」

大アリだろ。いや、でも確かに性格を除けばそうだろうな。顔もスタイルも、才能だって十分すぎるほど持ってる。

「そうは言っても俺はアイツが苦手だしな。」

「僕から見たら、仲がよさそうに見えるけど?」

あんな跳び蹴りをしてくる女のどこを見たら仲良くしてるように見えるんだ?

「じゃあ、お前はいるのか? 好きな人の一人や二人。」

「二人はいないけどね。いるよ。」

「お、いるんだ。それってどんな子?」

「兄さん……年下に手を出すのは良くないと思うよ?」

「別に手なんか出さねえよ!? お前は兄をなんだと思ってんだ!」

とつか手を出しそうに見えるのか、俺……?

「まあいいか。んーと、同じクラスの子でね、すっごく可愛いんだ!」

「まあ、可愛いかどうかは主観の問題だからな。お前がいいと思えば別にいいさ。」

それはFクラスのヤツらを見ればよくわかるだろう。

「名前はね、『葉月ちゃん』って言ってね。」

「その人の苗字はもしかや島田さんではないですか?」

「何で判るの!?!」

運命とは、偶然によって決まるんだろう。  
これは兄としてしっかりと応援しないと。

「ま、応援してるぜ？ 頑張れよ。」

「兄さんも協力してね？ 大人のデート術とか。」

「ゴメン。俺、そういうのは一切持ち合わせてないんだ。」

正直、そういうのはよくわかんない。

「兄さんもいるんでしょ？ 頑張つてね。」

「お前にそういわれると頑張れるよ。」

そうだな。

今週の学力強化合宿で、優子との距離をグッと縮めるんだ！

「ファイター、オッス！」

「兄さん、つるさい。」

俺が転校してきてはや数ヶ月。

近頃は暑さも増してきて、早くも初夏の訪れを感じさせている。少し先に待つ夏と過ぎ去ろうとしている春の交響曲のようだ。

心地好い日差しに、広く澄み渡る青空。涼しくも夏を感じさせる爽やかな微風。

そんな爽やかな朝。俺は翔太とムツツリー二で

「ムツツリー二。ミニスカっていうのはな、ミニであるからこそあの可愛さが生まれるんだ！」

「いや、直貴。お前はわかってないね。ミニにするくらいなら穿いてない方がいいに決まってるだろ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何かを着ているからこそ、チラリズム的要素が生まれる。」

エロ談義に花を咲かせていた。

何故そんな話をしているかって？ まだ女子が来ていないからだ！話題に困る高校生の健全な男子は、たまにはこういうエロトークに花を咲かせるのもいいだろう。

「なるほど、そういう考え方もできるのか。さすがは康太だな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ただし、膝上が十五センチまでのミニを希望する。見えるか見えないかのギリギリ感が・・・・・・・・」

「康太！ お前は最高だぜ！」

翔太はムツツリー二といつの間にか仲良くなっていた。

きつと、話が合うのだろう。

翔太もエロの方面に関しては物凄い知識量だからな。

「おっと、女子が来た。そろそろ話すのを……………」

『やはり爆乳より貧乳のほうが需要があると』

『……………くらいが丁度いい。』

話がヒートアップしてきて、俺の声なんて届いていないようだ。

この場にいたら何か誤解を受けそう。早々に立ち去るとしようかな。俺はそそくさとその場を後にした。

『おっはよう！ 諸君！』

『『おはようございま〜す！ 亜矢さ〜ん！』』

亜矢の元気な声に反応する変態クラスメイトたち。

この風景にも慣れたなあ〜。

「直貴！ おはよう！」

「朝からテンションが高いやつだな。」

「えへへ〜。このクラスに來ると、急にテンションが上がってきちゃってね。」

どういうテンション？

「そうか。このクラスの雰囲気が入ったのか。それは良かった。」

俺はいまだに馴染めてないような気もするけど。

というか、どうやったらコイツらを気に入れるんだ？

『あの野郎……………！ 朝から亜矢さんに話しかけてもらいや

「がって………!」

『うらやま………いや、けしからんな! 朝から女子とイチヤイチヤなど!』

『即刻死刑に………』

怖いし。

「じゃあ亜矢。また後でな。」

「あ、うん。じゃあね。」

自分の席に戻っていく亜矢。

これで俺の危機は過ぎ去ったぜ。

「それにしても、気持ちのいい朝だな。」

風が吹きぬけ、いつものかび臭い教室とは一風変わった雰囲気になっている。

俺は窓際に向かい、窓を開けた。

今日もいい一日になりそうだ。そう思ったときだった。

『最悪じゃあーっ!』

上からバカの大声が聞こえてきた。

「………今日も大変な一日になりそうだ。」

「ナオにムッツリーニ。ちょっといいか？」

「ん？ どうしたんだ坂本？ 今にもその窓からダイブしそうな勢いだが。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・顔色が悪い。」

凄く気分が悪そうだな。

いや、気分が悪いというよりこう・・・・・・・・なんか大変なことになるたつて感じだな。

「もしかして、霧島との結婚式の式場が決まったとか（笑）？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

えっ？ なに？ 「冗談で言ったつもりだったんだけど。凶星？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何があった？」

ムッツリーニが坂本に聞く。

「ああ、実はだな・・・・・・・・」

「ナオ！ ムッツリーニ！ ちょっと話があるんだけど。」

明久の声が聞こえる。だけどその前に、

「後にしろ。今は俺が先約だ。」

「あれ？ 雄二？」

明久から声がかかるとは思っていたが、坂本が先だな。

「ムツツリーニ、何の話？」

「……………雄二の結婚式が近いらしい。」

「雄二と霧島さんの結婚式？ そんな既に決まってることより、僕が校内のみんなに女装趣味の変態として認識されそうってことのほうが重要だよ！」

その話はやめる……………俺にも同じような不幸が舞い込んできそうだ。

「なんだと？ お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」

「黙れ妻帯者！ 人生の墓場へ還れ！」

「うるさいこの女装狂！ とつとつメイド喫茶に出勤しろ！ 勤務時間に間に合わなくなるぞ！」

何だよこのレベルの低い言い争いは。

「……………」

「……………」

「……………傷つくくらいならお互いに言い合わなければいいのに。」

明久が目には涙をためている。

・・・・・・・・・・・・・・・・バカだなあ。

「そつだよ、泣くなつて。」

「な、泣いてないね！ これは朝食食べた塩と水が目から出てきただけさー！」

「・・・・・・・・お前またちゃんと食ってないのかよ？ そんなんじや優に嫌われるぞ？」

「そ、そう？ じゃあ今度からしっかりしたのを作ってこようかな・・・・・・・・」

「おい。お前のノロケなんかどうでもいいから、話していいか？」

おっと、そつだった。

「で、何があつたんだ？」

「・・・・・・・・俺の捏造されたプロポーズが利用されそうなんだ。」

・・・・・・・・What？

「今朝、翔子がMP3プレイヤーを隠し持っていてな。」

「プレイヤー？ それなら雄二だって持ってきていたじゃないか。」

「問題なのはそこじゃない。中に入っていた音声だ。」

・・・・・・・・犯罪臭がする。

「アイツは機械オンチでな。そこで怪しく思って没収してみたら、そこには俺の捏造されたプロポーズが録音されていたんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はムツツリー二を見た。

だけどもツツリーには俺じゃないと言わんばかりに両手をブンブン

した。

「けどまあそのくらいならいいんじゃないか？ 個人で楽しむくらいなら。」

「そ、そうだよね！ 霧島さんってば、可愛いねっ！ そんな台詞を記念にとっておきたいだなんて」

「いや、婚約の証拠として父親に聞かせようとしていたんだ。」

洒落にならんな………

「で、でも、まだ結婚ぐらいの話でよかったじゃない！ 僕はもう、あのペースだともう子供ができてもおかしくないと思ってたよ。」

「………明久。笑えない冗談はよしてくれ………」

マジ？ 笑えないの？ まさかもう結婚まで秒読み段階？

「まあ、プレイヤーは没収したが、中身はきつとコピーだ。オリジナルを消さないことには………」

そういいながら坂本はプレイヤーを取り出した。それはどう見ても再生専用のプレイヤーだな。

「そんなわけで、ムッツリー二にはそれを録音した犯人を突き止めて欲しい。翔子は機械オンチだから、きつと実行犯が別にいる。きつと盗聴術が長けた人間の筈だ。」

なるほど。それならその犯人はムッツリー二にも当てはまるわけか。俺はもう一度ムッツリー二をみたが、やはり手をブンブンさせて否定した。

ま、ムッツリー二はそういうことをしないヤツの筈だ。きつとしな

い、うん。

「んで、明久は一体何があつたんだ？」

「あ、簡単に言うとな。僕のメイド服パンチラ写真が全世界にWE  
B配信されそうなんだよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・What？」

「ゴメン、気が動転してた。端折りすぎたね。要するに」

### 事情説明中

「そんなわけで、その写真を撮った脅迫犯を突き止めて欲  
しいってわけなんだ。」

「なんだ。明久も俺と同じような目に合ってたのか。」

「お前ら苦労してるなあ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・脅迫の被害者同士。」

「こんなことで仲間ができても・・・・・・・・」

脅迫や報復が日常茶飯事起こる高校生って一体・・・・・・・・

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取っ  
てしまった。HRを始めるから席についてくれ。」

そこに西村先生が入ってきた。

手にはしおりが入っていると思われる箱を抱えている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・とにかく、調べておく。」

「俺も明久の身边を洗つてみて、どんなヤツに恨みを買われるか調べてみるよ。」

「すまない。報酬は今度お前の気に入りそうなお本を持ってこよう。」

「僕も最近手に入れた秘蔵のコレクションその二を持ってくるよ。」

「……………必ず調べ上げておく。」

「その台詞、忘れるんじゃないぞ?」

やはり、ムツツリー二を懐柔するにはその手が一番なのだろう。俺も気合が入ってきたぜ。

さて、早いとこ席に着こう。清涼祭以来、西村先生の俺に対する扱  
いも厳しいものになっている。

気をつけないとすぐに怒られるからな。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認を怠らないように。まあ旅行に行く訳ではないので、勉強道具と着替えさえ持っていけば問題ないはずだがな。」

軽くしおりをめくってみる。

四泊五日の時間をフルに使って勉強に集中するという文月学園独特の合宿だ。

だが、不安なのは弟のことだ。俺のいない間は両親が様子を見に来てくれるらしいが、それが不安だ。

何を吹き込まれるかわかったもんじゃない。

「集合の時間と時間だけはくれぐれも間違えないように。間違えた場合は置いていかれることになるからな。」

確かにみんなでお泊りなんて楽しいイベントに一人だけ置いてけぼりだなんて悲しすぎる。

バラバラとしおりを捲り、集合時間と場所を確認する。

俺らが今回の合宿で向かう卯月高原は少し洒落た避暑地で、この町から車で四時間。電車やバスで五時間といった長距離にある。

「いいか、他のクラスと集合場所を間違えるなよ。Fクラスのお前たちの集合場所は」

Aクラスの優子とかはリムジンバスとかの超豪華設備で行くらしい。俺たちはFクラスだし、良くて通常バス。悪くて教師の引率で向かうといったところかな？

「現地集合だからな。」

『『案内すらないのかよ！ あんまりだろ！？』』

あまりの扱いの酷さに、全級友が涙した。

これが・・・・・・・・Fクラスの扱いか・・・・・・・・

〈第三部開始〉

第44話

人からの相談事はしっかり答えてあげよう（後書き

第三部スタート！

この話は私がバカテスの中でもかなり気に入ってるストーリーの一つです！

やはり、合宿というところあの夜の独特の雰囲気はたまりませんよね？  
今回も色々巻き起こそうと考えている予定なので、楽しみにしてください！

余談ですが、合宿中に少し小さなイベントを起こそうと考えてます。  
二日目の昼とかに。  
どんなイベントを起こすかは秘密ということ。

ま、そんなわけで待ちに待った合宿です！  
皆さんの感想をお待ちしております！

第45話 アイスの食べすぎには注意しよう！（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 30

・強化合宿・・・燃えるぜ + 3

・久しぶりの穏やかな朝 + 1

・そしてエロトーク + 1

・窓の外からバカの叫び声が - 2

・色々大変なクラスメイトに同情 + 1

・Fクラスの扱いの酷さに涙 - 1

現在の青春ポイント合計 - 27

第45話 アイスの食べすぎには注意しよう！

「直貴・・・・・・・・・・・・・・・・私と優子さんと、どっちを選ぶの？」

「亜矢さんと私・・・・・・・・どっちを彼女にするの？」

「「答えて・・・・・・・・？」」

俺がこの二人のどちらかを彼女に選ぶ・・・・・・・・  
究極の選択。

「俺は・・・・・・・・！！」

俺は・・・・・・・・！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

ん・・・・・・・・

俺は体を起こして、時計を見た。何か夢を見ていたような……………

……？  
今何時だ？

7：21

……………ん？ ちよつと待て。

俺は眠い目を擦り、もう一度時計を見た。

7：22

……………

「やばああああああっ！！！！！！？」

マズい！？ アイツらとの駅の集合時間は確か七時半だった！  
あと八分しかない！

「ヤバイヤバイヤバイ！！！」

俺は階段を駆け下りた。

ツルツ

そして落ちた。

ゴキッ！

「あああああ！！ 痛っだ！！」

「あれ？ 兄さん今頃起きたの？ もうすぐ集合時間になっちゃうよ？」

駿が声をかけてくる。

「そう思ったなら起こしてくれよ！ 不親切な弟だな！（ボキッ）」  
「そんな理不尽なこといつてる暇があったら、さっさと着替えちゃったほうがいいんじゃないの？ というか、よく外れた関節戻せるね？」

「この前覚えたんだよ。よく外れるから………って、はっ！  
？ こんなことしてる場合じゃなかった！」

初日に寝坊で行けませんでした、とか洒落にならねえ！  
俺は手早く服装を整え、時間を確認した。

7:25

走っても間に合わねえ。

こうなったら………

「父さん！ いる！？」

「おう、いるぞ。どうした？」

「アレ借りるわ！」

「おいおい。無免許運転で捕まって余計に遅刻とか、そういうのはやめろよ？」

「そんなの百も承知！」

俺は自分の荷物を持って、ガレージに急いだ。

「ほら、カギ。」

「ありがとう！ 駅に置いてくから後で自分で回収しておいて！」

「わかったから、ホラ、早く行け。」

「了解！」

ブオオオオオン！！

俺は全速力で走り出したのだった。

くっ………久しぶりに乗ったな………！

『安全運転を心がけるよお〜！』

後ろからそんなことを言ってきたが、知ったことか！  
タイマー時計を見る。

間に合え・・・・・・・・！！

明久SIDE

「全員来たか？」

「いや、後はナオただだよ雄二。あと一分しかないけど、遅刻かな？」

「・・・・・・・・・・寝坊。」

「浅斬には真面目なイメージがあったんだけどね。」

「そうですね。こうゆうイベントは絶対に来そうな印象があるんですけど・・・・・・・・」

美波たちが言うように、僕もそういう印象があったけど……  
ナオに限ってそういうことは無いと思うんだけどな……も  
しかして本当に寝坊なのかな？

「直貴ってさ、前の学校でもこんなことがあってさ。」

「そうそう。ナオ君その後すぐに来たんだけど……」

「なにで来たと思う？」

翔太くん、神咲さん、川村さんが僕らに聞いてきた。

うーん……

「え？ 車とかで送ってもらったんじゃないの？ じゃなかったら、  
ダッシュできたとか。」

「あ。あれ、直貴じゃない？」

「えっ？ どこどこ？」

僕は指差したほうを見た。

すると、前方から。

ブオオオオオオン！！

猛スピードで突っ込んでくるバイクが見えた。

「……………川村さん。まさか、アレじゃないよね  
？」

「ううん。多分アレだよ。ナオ君、去年もあんな感じできたもん。」

「ま、まさかね……………」

ギャギャギャギャ！

そのバイクは僕らの目の前に来ると急停車した。  
バイクの主はヘルメットを取って、僕らにこう言った。

「ごめん！ 寝坊した！」

「だからってそれで来るなよ！？」

車窓を流れる緑の多い風景。いつもの街とは違った景色が見える所  
為か、遠くの町まで来たような錯覚を起こしそうだ。  
電車に乗って数時間で随分と景色が移り変わっていた。

「あと二時間ぐらいはずっとこんな感じかな。」

俺の正面に座る優が携帯電話をしまつ。地図でも見て時間計算でも  
してたんだろう。

「ナオ。二時間もあるし、何か面白いこと無い？」  
「ん」と、ちょっと思いつかないな。」

ちなみに翔太とムツツリー二は向こうの席でエロトークに熱中している。

俺も混ざりたかったが、周りの目が気になるので参加はしなかった。惜しい所だった………

「雄二は？ 何かない？」

「鏡がトイレにあつたぞ。存分に見てくるといい。」

ぶっ………！

「それは僕の顔が面白いと言いたいのかな？」

「よ、吉井君の顔は別に面白くないと思いますよ？」

「あ。俺も優に一票。」

「いや、違う。明久の顔は割と 笑えない。」

「それにも一票。」

「ナオは一体どっちの味方なの!？」

「ん？ 俺はどっちにも味方してないぞ。」

俺は面白けりゃ十分だ。

「ナオ君もあんまり酷いこと言っちゃダメだよ？」

「いや、俺が言いたいのは明久の後ろのヤツのことだ。」

ちよつと明久をビビらせてやるか。

さつき通り道にお墓もあつたことだし。騙すには丁度いいだろう。

「俺が面白いと言ったのはお前の守護霊のことだ。」

「そうそう。さっき墓から憑いてきてたな。」

「守護霊？ 雄二とナオにはそんなものが見えるの？」

「ああ、見えるぞ。血みどろで黒髪を振り乱した珍しい守護霊だな。」

「ええっ!? う、嘘だよ、ナオ君？」

優……お前もビビるなよ。

でも、お前確かお化けとかダメだったよな。

「それに関してはどう考えても僕を守ってないよね？」

「安心しろ。半分冗談だ。」

「あ、なんだ。ビックリしたよ。」

「本当は茶髪だ。」

「そこは一番どうでもいいよね!? とうか、川村さん泣きそうだけど大丈夫？」

「だ、大丈夫。このくらいヘーキ……………」

優の顔色が悪いのでこのテの話はもうやめておこう。

そこからしばらく窓の外を眺めていると、明久が島田に声をかけていた。

「美波、何読んでるの？」

「ん、これ？ これは心理テストの本。100円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの。」

心理テストの本か。道理で漢字の読めない島田が本を読めるのかわかったよ。

それにしても、面白そうだな。

「島田。それ、俺もやっていいか？」

「面白そうだね。美波、僕らにもその問題出してよ。」

「え？ なになにに心理テスト？ 私も混ぜて！」

亜矢が途中で入ってくる。

本当にこういうの好きだよなあ。

「うん。いいわよ」

そう答えて軽くページを捲る島田。

適当なページを見つけて、読み上げていった。

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げてください』。」

色のイメージ？ 想像でいいってことか？

「『？緑？オレンジ？青』それぞれが似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

緑とオレンジと青だけ？

うーんと、緑は………優でいいや。オレンジは明るい印象があるから亜矢で。

最後に青は………優子かな。クールな印象があるし。

「俺は順番に、『緑 優 オレンジ 亜矢 青 優子』って所だな。」

「私は、『緑 翔太 オレンジ Fクラスの皆 青 直貴』みたいな感じかしら？」

「ん……順番に、『緑 美波 オレンジ 秀吉 青 姫 路さん』って感じかな。」

「おい明久。秀吉は男だと何度言えば」

ビリッ!

……し、島田……?

どうして心理テストの本をど真ん中から引き裂いてんの……?

お前の腕力どうなってんの。本当に女子か?

「み、美波さん? どうして本を真ん中から引き裂いているのです

」?

「どうして……」

「はい?」

「どうしてウチが緑で瑞希が青なのか、説明してもらえる?」

うわっ!? 物凄い殺気!

これは下手に答えたら、臨死体験まっしぐらだぞ!

「ど、どうしてと仰られましても……」

「怒らないから正直に言ってみて?」

ヤバイ! 島田の表情がドンドン恐ろしいことに!

これは正しい答えを出さないと明久の命は無いぞ。

「前に下着がライトグリーンだったから。」

さよなら、明久。

「坂本、窓開けて。」

「捨てる気！？ 僕を窓から捨ててどうする気！？」

「島田。窓からゴミを捨てるな。」

「坂本、それはフォローしてるつもりなのか？」

「いいのよ、ゴミじゃなくてクズだから。」

「どうしよう。僕、ここまで酷い扱いを受ける久しぶりだよ。」

「大丈夫。吉井君はゴミじゃないから。」

「ありがとう川村さん……………僕の味方はキミだけだよ！」

……………なんか仲いいな、あの二人。

今度、探ってみるか。

「どれどれ？」

「あ！ ちょっと！？」

坂本が先ほどの心理テストの片割れを拾い上げる。

「緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青は  
なるほど  
なあ。」

ん？ ということは優が友達で、元気の源が亜矢。青が何だった？

「さ、坂本！ 返しなさいよ！」

「悪い悪い。面白そうだったもんで、つい借りちまった。」

「坂本。青はなんだったんだ？」

「気にするな。そうだな、俺も混ぜてもらおうか。」

「ええ〜？ 教えてくれよ。」

「また今度な。」

「坂本もやるのね？ それはそうと、さっきの問題に深い意味はないんだからね！」

「ああ。わかってるって。」

青はなんて書いてあったんだろう……？  
後で旅館にいたら聞いてみるか。

「ワシも参加していいかの？」

「お、秀吉。お前もやるか！」

「別にいいけど。」

ん？ なぜか島田の顔がまた怖く……

「それはありがたい……。ところで明久よ、さっきの答えなのじゃが、『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』とのことじゃが、オレンジでイメージするのは誰じゃ？」

「秀吉。」

「……少し、嬉しいから困る……」

「秀吉！？ お前はそんなだから女に間違われるんだろ！？」

自覚持てよ！？ そんなじゃ味方がいつか消えるぞ！

「ムツツリーニと水樹君は参加しないの？」

「いや。あそこまでトークが白熱しておるから、声がかけて辛くての。」

ああ。さっきのエロトークか。

まだやってんのかよ。

「あの、私もいいですか？」

「そうだね、皆でやるよ。」

「ところで美波ちゃん。さっきの『青で連想する異性』って

「

「……教えない、絶対に。」

「そ、そんなぁ……。」

「はぁ……。ま、いいわ。第二問いくわよ。」

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を2つ挙げて下さい』だって。」

坂本 5・6

秀吉 2・7

明久 1・4

姫路 3・9

俺 8・10

「この順番だそうだ。皆それでいいか？」

「……いいよ。」

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ」

坂本 「クールでシニカル」

秀吉 「落ち着いた常識人」

明久 「死になさい」

姫路 「温厚で慎重」

俺 「優しいがドジっ子」

と、言った。

「ふむ。なるほどな。」

「常識人とは嬉しいのう。」

「温厚で慎重ですか。」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかった？」

「さっきのことまだ怒ってんじゃないのか？」

「やっぱり？」

まあ、普通の反応といえばそうなんだけども。

それにしても、「優しいがドジっ子」ってどういうこと？

報われていませんね、って言われてるみたいじゃん……

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ」

坂本 「公平で優しい人」

秀吉 「色香の強い人」

明久 「惨たらしく死になさい」

姫路 「意志の強い人」

俺 「黒い一面を持つ」

と言った。

「秀吉は色っぽいのか。」

「姫路は意志が強いそうじゃな。」

「坂本君は優しいそうです。」

「ねえ、僕の罵倒エスカレートしてなかった!？」

「お前が悪いんだ。諦める。」

「そんな! 酷いつ!」

ま、お前がいけないから俺は知ったことじゃないね!  
そうこうしていると、

「……………(トントン)」

不意に肩を叩かれた。

「お、ムツツリーニ。楽しかった?」

「……………有意義な時間が過ごせた。」

「おう! 凄く盛り上がったぜ!」

「そうか、それは良かった。で、何のようだ?」

「時間だよ、時間。もう昼だぞ?」

「……………空腹で一時中断した。」

そついわれてみると、確かに腹が減ったな。

携帯電話で時間を確認すると、今は1時15分。確かにもう昼飯時  
だ。

「確かに良い頃合じゃの。そろそろ昼にせんか?」

「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし。」

確かに宿でご飯が出されるからな。

ココで食べておかなきゃな……って、ヤバ。忘れてきた。寝坊して焦って来たからなあ……

「あ、お昼ですね。それなら」

ビシッ

姫路の発言に空気が凍りつく。マズイマズイマズイ……

「実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら……」

予感的中。姫路が取り出したのは大きなお弁当箱だった。

彼女の好意はとても嬉しい。だが、その弁当は戦場などでは相手の命に関わる、新感覚テイストで出来ている弁当箱ポイズンボックスとなってしまうている。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ。」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまったの。」

「……調達済み。」

「俺も自分の分があるんで、姫路さんののは頂けないわ。」

坂本・秀吉・ムツリーニ・翔太は自分の弁当を用意していたか。

俺は持ってないし、このままだと俺が姫路の弁当を貰うハメに……

……！！

「そういうわけで、明久にでもご馳走してやってくれ。」

「そうか！ まだ明久が残っていたか！」

「これなら俺も姫路の弁当を回避できるぞ！」

「ごめん。実は僕もこうして惣菜パンを、」

「おっと、手が滑った（パシッ）」（坂本）

「……………足が滑った（グシャッ）」（ムッツリーニ）

「真実は、いつも一つ！ シュート！（ゴッ！ ヒュー）」（俺）

「ああっ！？ パン！ 僕のパンが窓の外に！」

「ゴメンな明久。俺も自分の身を守るために必死なんだ……………」

「こうなったら……………おっと、ゴメン雄二。僕

も手が」

「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな。」

「……………！！（メンチの切り合い）」

「ここまできたら俺はどうやって逃げるかな……………」

「このままだと明久と一緒に地獄行きだ。」

「ナオ！ さっきの心理テストでキミは優しいって言ってたよね！

？ 僕を助け」

「すまん明久。俺には出来ない。」

「俺の普段見せない本当の顔は黒い一面。ここで見せるとしよう。」

「姫路。明久は先ほども言ったように惣菜パンで飯を済ませようとしていた。こういうった食事は栄養バランスに欠けるから、姫路のよ

うなバランスのいい食事が明久には必要なんだ。」

「そうですか！ わかりました！」

「さよなら、明久……………」

「ナオ！ よくも！」

知るか！ 俺は自分の身だけが無事ならそれでいいんだ！

「吉井君、お弁当なくなっちゃったの？」

「このっ …… えっ？ なに川村さん？」

「良かったら私も食べるかなあ〜って思って作ってきたんだけど……………いる？」

優はそう言うと、おずおずと自分の包みとは別の包みを取り出した。あれは、別に作ってきたのか？ それにしては量が多いような……………？

「本当、川村さん！」

マズい！ このままだと俺だけが姫路の弁当を食べることに！

「あのさ！ 優、その弁当を俺にくれ！」

「えっ？ う、うん。別にいいけど……………」

「ズルいぞ、ナオ！」

先ほども言った通り、俺は自分の身さえ無事ならそれでいいんだ！

「吉井君に食べて欲しくて作ったんだけど……………」

「ん？ どうかしたか優。」

「うっん！ 何でもないよ！」

そうか？

でも心なしが顔が暗いように見えるんだが……

「……………アキ。良かったらウチのお弁当も食べてみる？」

「ありがとう！ 美波も分けてくれるんだね！ それならいっそのこと、皆でお弁当を広げて少しずつ摘まもつよ！」

くっ！ 悪あがきしやがって……………！

「わ、ワシとムツツリーニは向こうの席なので遠慮させてもらおうかの。」

「……………！！(コクコク)」

「お。俺も向こう側だから……………」

翔太と秀吉とムツツリーニは逃げたか。

まあいい。これで犠牲者が減った。

「俺も遠慮しておこう。自分の分があるしな。」

「雄二。そんなこと言わずに」

「そうか明久！ 俺の弁当も食ってみたいか！ それなら食べ！」

「もごあっ！」

ナイス口封じ！ さすが坂本だ！

「(ごくん) うまい。もしかしてこれ、雄二の手作り？」

「……………悪いかな？」

「いや、別に……………」

ふーん。坂本ってガサツなイメージがあったけど、以外に器用なんだな。

おっと、明久が俺を標的にしようとしてるな。

「ナオも一緒に」

「食らえ！ 優の手作り弁当、玉子焼きアタック！」

「むごおっ！」

よし、成功だ。

「どう……？ 吉井君？」

「（ごくん）」

凄い。僕の作ったヤツなんか比べ物にならない

いくらい美味しい。」

「そう？ よかったあ……」

優の夢は料理人だから基本的な家庭料理は勿論、和食に洋食。中華にヨーロッパ系料理と何でも作れるからな。本当に凄いヤツだよ……

「それじゃ、はい。ウチのもどうぞ。」

島田も明久に弁当を差し出す。

優にはやや劣るが、オーソドックスな弁当でとてもうまそうだった。

「それじゃ、早速。」

明久はシューマイを一つ手に取り、口に放り込んだ。

「あのね、その……。勇気を出して言うけどね……。そのシューマイなんだけど、実は、アキに食べてもらおうと思っ  
てね」

「ん？ なに？（もぐもぐ）」

おっ。独自の工夫でもしたのか。どんな隠し味を入れたのかな？

「二つに一つは辛子を入れてみたの。」

「キミはバカかいつ!？」

隠す気が無い殺意が隠し味だったな。

明久が辛さで悶え苦しんでいる。

「明久。それはある意味ラッキーかもしれないぞ。」

どういうことだ？

「……………味覚が破壊されている今なら食えらんでも言いたいのか？」

でも姫路の弁当ってクロロ酢酸とか入ってたから、味が問題じゃなかったような気がするんだけど……………

「姫路さん、弁当貰うねっ！」

「あ、はい。一杯食べてくださいね。」

「いっただっきまーす！」

俺はこの後、止めればよかったと後悔した。

第45話 アイスの食べすぎには注意しよう！（後書き）

アイス食べ過ぎてお腹壊し気味な作者です。

つつい食べすぎちゃいますよね？

さ、そんなことは置いておいて今回はどうでしたか？

ナオはバイクの運転が出来ます。過去に色々あった子なんでその過去はもつと先で出そうと思ってますのでお楽しみに！

えっ？ 一番最初の夢はなにかって？

それは何でしょうね？ これから起こることを表しているのかもしれませんね〜（笑）

ま、企業秘密です。

出来る限り速いペースで更新していきたいので頑張りたいと思います！

皆さん応援よろしく願います！

第46話 三階から落ちたら内臓破裂は覚悟しろ(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 27

・夢を見る + 3

・寝坊する - 1

・心理テストをする + 3

・昼飯を忘れる - 1

・姫路の弁当が………! - 3

・明久のおかげで危機回避 + 2

・明久が意識不明の重体に - 2

現在の青春ポイント合計 - 26

## 第46話 三階から落ちたら内臓破裂は覚悟しろ

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『電車が止まり駅に降り立つと、不意にめまいのような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵な事が起きるような、そんな予感がしました。』

教師のコメント

環境が変わる事と良い刺激を得られたようです。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出がたくさんできる事を願っています。

土屋康太の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈の様のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだっただろうか。』

教師のコメント

乗り物酔いです。

## 坂本雄二の日記

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだなと、感慨深く思った。』

## 教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければ、もっと違った香りがしたかもしれませぬ。

## 浅斬直貴の日記

『先ほど気を失った明久を担ぎながら駅に降り立ったとき、俺も坂本と同じように大きく息を吸い込んだ。すると、どこか酸っぱい香りが俺の鼻孔をくすぐった。普段の街の香りとは違う、とても痺れる香りだった。そのおかげか、この強化合宿に対するやる気が出てきたばろろろろろ。』

## 教師のコメント

土屋君のを貰ってしまったようですね。深く吸い込まなければ、そのやる気も無駄にはならなかったのではないでしょうか。

.....

昼の弁当から数時間。

今、俺たちがいるのは強化合宿でお世話になる宿の一室だ。

ここでは俺、明久、秀吉、坂本、ムッツリーニ、翔太の部屋割りとなつた。

もう夜も深まり、時間的には夕飯も終わってそろそろ風呂の時間だ、と思う人もいるだろう。

俺らはまだ部屋の中。

なぜまだ風呂に行つてないのかというと.....

「明久あつ！ 生きろおつ！ まだ死んだらダメだアツ！」

明久が風呂より先にあの世に逝きそうなので、心肺蘇生を行なつていた。

「ナオ！ AEDを持ってきたぞ！」

「ナイスだ坂本！ 早く明久にそれを！」

「わかつてる！」

ちなみに、AEDは自動体外式除細動装置じどうたいがいしきじよさいでんせうしゆきの略だ！

「すまない.....僕はもうここまでだ。フランソワに、愛していると伝えてくれ.....」

「誰だよ!? フランソワって誰だよ!?」

「マズい！ 前世の記憶が蘇ってる！ 早くこれを.....！」

そこまでやばい状況なのか………！

「1・2・3！」

ドンッ！

「思い起こせばあの時、林檎を食べなければ、このような食中毒などにはならなかったものを………」

「マズい！ 食中毒で死ぬということが過去の記憶と今でリンクしてる……！」

というか、前世でも食中毒で死ぬとか運悪すぎだろ！？

「もう一度だ！ 1・2・3！」

ドンッ！

「もう、言い残すことは無い。これで、僕は安心して逝けるよ………」

「ヤバい！ クライマックスに入ったぞ！ このままだと死ぬぞ！」

「………ここは俺に任せろ！ おばあちゃんの知恵袋その五！ 鳩尾ストレート！」

ドゴッ！ ゴキヤ！ フッ………ドゴーン！

「ゴホッ！ ゲホゲホッ！」

「よし！ 戻った！ これでもう安心だ。」

「なんだ今の技！？ 明久が空中に浮いたと思ったたら次の瞬間に壁に叩きつけられてたぞ！？」

おばあちゃんは武道の達人だった。俺よりはるかに凄い能力を持つてる規格外人間だ。

その人が俺の幼少期に師匠として俺の武術を………って、その話はまた今度でいいか。

「とりあえず、これで大丈夫だ。良かったな、明久！」

「………ここは………？」

「合宿所だ。意識を失ってから随分と経ったが………無事そうで何よりだ。」

「まさか僕の命がそこまでの状態になっていたなんて………」

それより、AEDが効かなかったのはビビった。

それほどまでに姫路の弁当は恐ろしいのか………

「明久、無事じゃったか！ 良かったのう………お主がう

わ言で前世の記憶が蘇ったときは、正直もうダメじゃと………」

「

「いや」。吉井を見ると、本当に食わなくて良かったと思うよ。」

「お、秀吉に翔太。戻ったか。」

部屋に入ってきた秀吉と翔太が胸を撫で下ろす。

俺もこれが効かなかつたら、諦めて喪服に着替えてる所だったよ。

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋で一緒なんだよね？」

「うむ。ここにいるメンバーとムツツリー二を含めた六人でこの部屋を使うのじゃ。」

そういわれて部屋を見渡す明久。

六人で使うには丁度いいくらいの部屋の大きさだ。

「ところで、ムツツリー二はどこに行ったの？ 覗き？ 盗撮？」

「友人に対してそんな台詞がサラッと出てくるのはどうかと思うのじゃが……」

「しょうがないよ。そんなこと言われてもおかしくないことアイツはしてんだから。」

「じゃあ、どこに行ったの？」

「お前と坂本のための情報収集だよ。」

「情報収集？」

ガチャッ

「………ただいま。」

「お、戻ったか。」

「………明久。無事で何より。」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう。」

「………情報も無駄にならずに済んだ。」

「情報？ 昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな。」

「お、そうそう。俺も明久の分の情報を仕入れてきてたんだった。」

「ナオも？ ありがとう。」

そういうと俺は自分のカバンからファイルを取り出し、ザッと目の前に並べた。

「これが島田や姫路に好意を持っている人間のリスト。そしてこっちが明久などに好意を持つてる人間のリストだが……ま、俺の見立てでこっちのリストに犯人はいないと思うから後で捨てるわ。」

「ええっ!? なんで!? 気になるじゃないか!」

「ん? 俺は別にどうでもいいからこれはしまつて、と。」

「酷いっ!」

ま、そのリストには島田や姫路。それに優も載つてたりするから、あまり見せたいとは思わないな。男子とかもいたりするから、見たら嬉しさとシヨックが入り混じった感情になることだろう。自分の幸せは自分で掴め! ってことさ。

「島田のファンはえくと、清水……さん? って人を中心としたグループで形成されていて、姫路はFクラス男子がほとんどだな。」

「そのファイルは後で僕にくれるよね?」

「いいけど、貰ったあと姫路のファンを片っ端から殺すなよ?」

「ちっ! バレてたか。」

「……俺も話していいか?」

「ああ。ゴメン、ムッツリーニ。」

ムッツリーニはそう言うと、ある機械を取り出した。

「……昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた。」

「おおっ。さすがはムッツリーニだね。」

「……手口や使用機器から、明久と雄二の件は同一人物の犯行と断定できる。」

「そうなのか。まあ、そんなことをするヤツなんて何人もいないだろうし、断定しても間違いはなさそうだな。」  
「というか、俺らの学園にムッツリー二と犯人二人いるだけでも酷いと思うんだが。」

普通、一人いてもおかしいくらいだ。

「それで、その犯人は誰だったの？」

「……………（プルプル）」

「あ、やっぱり犯人はまだわからないの？」

「……………すまない。」

「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝したいのに。」

まあ、今日まででそこまで調べられたなら上出来だ。

後は数日、もう少し調べれば犯人はすぐに浮かんでくるだろう。

「……………」犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある『ということしかわからなかった。』

「……………お前は一体何を調べたんだよ？」

どういふ調査方法をしたらそんな結果が出てくるんだよ。

普通名前とか、顔とか。そういうのじゃないか？

「……………校内に網を張った。」

そう言ってムッツリー二は小型の録音機を取り出した。  
なぜ持っているかはあえて聞かないが。

ピッ 《……………らっしゃい。》

「ふむ。ノイズが酷いが確かに女子の声と判別できるな。」  
「校内全てを網羅したのなら仕方ないだろう。音質や精度に拘る必要はないからな。」

辛うじて聞こえてくる声は女子だとわかるが、それ以外の点で人物を特定できそうなものはなさそうだ。

《……雄二のプロポーズを、もう1つお願い。》

こちらは口調と独特の話し方から見て、霧島さんであることがわかるな。

「しよ、翔子……！ アイツ、もう動いていたのか……」

「余程早く手に入れたかったんだろうな。お前も愛されてるな、坂本。」

「冗談じゃない！」

そこまで否定してるけど、A代表のどこがそんなにダメなんだろう。別に悪い所なんか無いのに。

《毎度。二度目だから安くするよ。》

《……値段はいつでも良いから、早く。》

《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃ明日 と言いたいと

ころだけど、明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で》

《……わかった。我慢する。》

「あ、危ねえ……。強化合宿があって助かった……」

「タイムリミットが来週まで延びたみたい。良かったね雄二。」

「といっても土日ほとんど行動できないから、実質あと四日だな。」

「……………それで、こっちが犯人特定のヒント。」

先ほどとは違う声の人だが、商品を扱ってる人は同じ口調だな。

《 相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら酷い目に遭うんじゃないですか？ 》

《 ここだけの話、前に一度母親にバレてね。 》

《 大丈夫だったんですか？ 》

《 文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだから。 》

《 それはまた…………… 》

《 おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？ 》

そのあとは他愛もない商談がいくつか続いただけだった。

「……………わかったのはこれだけ。」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か。」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな。」

「口調は芝居がかってたけどな。」

まあこれだけでも十分な情報だな。

お尻の火傷なんかわからないだろうけど。

「犯人がわかる重要な情報だけだね。仮にスカートを捲くってまわ

つたとしても、わからない可能性があるし、うん．．．．．  
「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなあ．．．．．」

「お前らさ。真面目な顔して女子の尻を見る方法考えんのやめてくれない？」

赤外線カメラって．．．．．どうしているんだよ。

「お前たちさつきから何の会話してるんだ？ 女子の尻がどうか．．．．．？」

「本当じゃのう。よからぬことを考えておるのか？」

そんな俺らの不穏当な会話を聞いて翔太と秀吉が声をかけてきた。翔太は多分、女子の尻を見る方法に興味があつたんだろうけど。

「ああ、それはだな。 (以下略) 」

「そうじゃったのか。それにしても、尻に火傷とは．．．．．」

「なんとも興味深い話だな！」

「このド変態が。」

「酷いつ!？」

でも、本当にわからないなあ．．．．．

「翔太を犠牲に、女子風呂に突入させようか？」

「それはさすがに．．．．．そうだ！ もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久、俺は電車の中でも秀吉は男だつて言つたよな？」

「いひゃい、いひゃい！ くひをひつはらないれ！」

「そつだぞ明久。しかもその方法でも確認することは不可能だ。」

「ふえ？ どういう意味？」

そういう明久にしおりを渡す坂本。  
何か書いてあるのか？

「どうして無理なのさ？」

「3ページ目を開いてみる。」

合宿所での入浴について

|           |      |      |   |    |      |        |
|-----------|------|------|---|----|------|--------|
| ・男子ABCクラス | : 20 | : 00 | } | 21 | : 00 | 大浴場(男) |
| ・男子DEFクラス | : 21 | : 00 | } | 22 | : 00 | 大浴場(男) |
| ・女子ABCクラス | : 20 | : 00 | } | 21 | : 00 | 大浴場(女) |
| ・女子DEFクラス | : 21 | : 00 | } | 22 | : 00 | 大浴場(女) |
| ・Fクラス木下秀吉 | : 20 | : 00 | } | 21 | : 00 | 個室風呂？  |

「……………くそっ！ これじゃ秀吉に見てきてもらっことができない！」

「女子風呂どころか男子風呂にも入れないな。」

「そういうことだ。」

「どうしてワシだけ個室風呂なのじゃ!？」

他にいい考えはないのか、とうんうん唸っている時だった。

ドバン!

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい!」

凄い勢いで俺らの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと入ってきた。

「な、なにごとじや!?!」

「木下はこつちへ! そつちのバカ五人は抵抗をやめなさい!」

先頭に立った島田が、咄嗟に窓から脱出しようとした俺らに機先を制そうとしたときだった。

「わっ! バカちよ、明久! それ以上押したら!」

ガッ!

『ギャー! ギャー!?!?!?!?!?!』

「あつ!? ナオが落ちた! ここ三階だから受身も取らなかったら即死もありえるよ!?!」

「くっ! 明久、ナオは捨てる! アイツは丈夫だからきつと生きてるはずだ!」

「そんな……!」

「ちっ、一人取り逃がしたか。まあいいわ。念のために下にも部隊を置いてあるし。」

「下にも部隊? ところで、この状況は一体どういふこと?」

「ギャーーーーー!!!」

ドゴシヤッ!

ボキッ!

「ああああああつ!! 痛つだ!!」

明久の野郎……! 押すから落つこちまつたじゃねえか!  
とりあえず、外れた関節を……よつ。(ゴキン) という  
か、良くこの程度で済んだな。さすがギャグ補正。  
それにしてもあの女子の人数……何があつたんだ?

「直貴……まさか本当に来るとは思わなかったわ。」  
「本当ね、亜矢さん。まさか盗撮して本当に逃げてくるなんて……」

ん? 盗撮?  
つて、この声……

「亜矢に優子じゃないか。こんな所で何してんだ？」

暗闇の中から聞こえた声は亜矢と優子だった。

「何って………逃亡者を捕まえることだけど？」

「それに、その逃亡者がアンタだしね。」

「俺が？ 何かの間違いじゃないか？」

「ま、とりあえず逃げられないようにしないとね。」

そういつて優子は俺に近づいてきたと思ったら、

ボキッ、ゴキッ、ボキ、ボキン

俺の両脚の関節と両腕の関節を外した。

「ふぬおおおおっ!?!」

「悪く思わないでね？」

「何も身に覚えがないのにこんなことされて悪くないかと思えるか  
っ!」

くっ! 腕の関節も外されてるから自分で戻せないし………!

「女子風呂にね、CCDカメラと小型集音マイクが仕掛けられてた  
の。」

「………はいっ?」

「だからね。アンタたちがこれを仕掛けたんでしょ？」

「いやいや、待て。するヤツなら覚えがあるが、俺らはずっと部屋  
にいたぞ?」

ん、待てよ？ そういえばムツツリー二は外に出ていたか？  
まあいいや。黙っておこう。

「はあ………いつかするんじゃないかと思ってたけど、本当に盗撮するとは………」

「待て。何でそれが仕掛けられていたからって俺らの所為になるんだ？」

「直貴ったら。普段は女の子に興味がありませんって顔してるくせに、こういうことはしちゃうんだ………」

「………お前ら。本当に怒るぞ。」

人が怒らないからって調子に乗りやがって………！

ゴキッ

「ったく。お前らな。俺らがいつも問題ばかり起こしてるからと  
いって今回の件も俺らが主犯とは限らないだろ！」

「だって、証拠がここにキチンと、」

「それが俺らの物だって証拠はあるのか？」

「「あ。」

もうやだ、この子達………

「ご、ごめんね直貴？ 大した証拠もないのに疑っちゃって………

………」

「わ、私もごめんなさい。」

「信じてくれたか？」

「ええ。疑っちゃってごめんね?」

「いや、いいんだよ。わかってくれば。」

とりあえず、この場は何とか収められそうだ。

あいつらも無事だといいが……無理かもな。

「もう一度聞くけど、本当にやってないのよね、ナオ?」

「勿論! そんな覗きなんてやるくらいなら、直接お前たちにエロいことした方がまだ……はっ!」

やば! 墓穴掘った!!

フォローを……!

「えーっと。した方が、個人的にはいいと思っただぜ?」

……この後、俺は無差別攻撃を食らって地に伏せたのだった。

第46話 三階から落ちたら内臓破裂は覚悟しろ（後書き）

どうも！ 作者のミカヅキです！

ナオは三階くらいの高さから落ちても、脱臼程度で済みます。  
ギャグ補正がかかっているとはいえこんなキャラにする予定じゃなかつたのに………

オリジナルな展開も入れたいと思いますので、楽しく読んでいただけたらなあ〜と思っています！  
更新ペースを落とさないように頑張っていきますので、皆さん応援よろしく願います！

第47話 落ちる所まで落ちたら後は這い上がるだけだ(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 26

・明久が意識を取り戻す + 2

・犯人の目星が付く + 2

・落下(これだけで何が起こったかわかったらあなたは凄い) - 3

・自業自得でOSHI OKI - 1

現在の青春ポイント合計 - 26

## 第47話 落ちる所まで落ちたら後は這い上がるだけだ

「……………つふ。ふふふ。ふふふふ……………」

「ねえ。ナオがさつきから気持ち悪く笑ったまま表情を変えないんだけど……………」

「きつと下で大変な目にあってきたんだろ。それよりさつきの話だ  
が。」

……………体が、動かない……………」

先ほどの自業自得だが、それにしてもあんなにやらなくてもいい  
じゃないか……………!」

「それにしても酷い濡れ衣だね。僕らが覗いたって証拠もないの  
に。」

先ほどの件に関して、こいつらは証拠不十分で開放されたいらしい。

「ワシはなぜか被害者側に立たされたのじゃが……………?」

「こつなりや俺たちで真犯人を捕まえるぞ!」

「……………(コクコク)」

「康太がそういうなら俺も参加だな!」

「……………で、ナオはどうするの?」

「しばらくこのまま放置でいくか。」

「嫌だアツ!? もう間接を外したりはめたりを繰り返さないでく  
れえっ!」

「……………大変そうだね。」

しばらく優子と亜矢がトラウマになりそうだ。

「……さて、見苦しい所を見せたな。この私、浅斬直貴もその作戦に参加しようではないか！」

「ナオ。キミは休んでたほうがいいよ？ 足がまだガクガクじゃないか。」

「ふっ！ これは武者震いだ！ 別に優子が怖いとか、亜矢を恐れるとかそんなんじゃないからな！」

「姉上によほどの恐怖を植え付けられたようじゃな。ワシでも辛いというのに。」

「ま、まあこの件に関しては自業自得だから、優子たちを攻めるつもりはないけどさ。物には限度つて物が……」

「喋りがしどろもどろになってきたの。」

くっ……秀吉まで……！

「で、でも俺もついていかなきゃ大変だろ？ お前らだけで教師たちを説得が出来るとも思えないし。」

「それもそうだね。……うん、ナオ。一緒に行こうか。」

「よし。メンバーも揃った所で早速、俺たちの理想郷アガルタに突入するぞ！」

「「「おっしゃー！！」「」」

く回想シーンく

その作戦は、俺がまだ痛みに顔をゆがめていたときに決めたものだ

った。

「今日はいつも以上に生命の危機が多いよね。」

「……………見つかるようなへマはしないのに。」

「孝太。その発言はかなりギリギリだぞ。」

あはは。お星様だ〜。

「雄二、大丈夫？ さっきから黙ってるけど。」

「……………上等じゃねえか。」

「え？ 雄二、どうしたの？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやるつもりじゃねえか。」

うふふ〜、ヒヨコさんが俺の周りを回ってるよ〜。

「まさか、本当につて……………」

「ああ。そのまさかだ。あっちがそう来るのなら、本当に覗いてやるつもりじゃねえか！」

「坂本おっ！ お願いだから俺をこれ以上危険な目にはあわせないでくれよ！」

「あ、ナオが正気に戻った。」

「ナオ……………男にはやらなければいけない時があるんだ。」

「それが女子風呂を覗くことでなければ止めてねえよ！ お前はこれ以上自分の身を危険に晒す気か！？」

そんなもの、もっと頑張って情報を集めれば風呂なんか覗かなくてもいいのに。

そこに行き着かない時点でキミは代表失格だ。

「俺にはもう、時間はないんだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎ

だと思っていたが……向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやるうじゃないか。」

それに加えてこんな意見に辿り着いちやう時点で代表失格だよ。いや、Fクラスの代表にふさわしいのか？

「ああ。でもやっぱりそっちが本命なんだ。覗くことが本命だと思つてた。」

「お前はバカか。」

こんなヤツにバカ呼ばわりされた。

代表としての技術力は認めているが、こう面と向かってバカと言われるとムカつくのはなぜだろう。

「それにしても、雄二は霧島さんのことになるとやる気が凄いよね。どうしてそこまで頑張るのかって不思議に思うくらい。」

「……実はこの前、いつものように翔子にクスリをかかされて気を失つたんだが。」

「ごめん。その前置きからイロイロと厳しいと思う。」

「目が覚めたらヤツの家に拉致されていたんだ。」

ムカつくとか言ってた自分が恥ずかしくなってきた。

坂本がそこまで追い詰められていたとは……

「ふうん。そこで霧島さんの両親と挨拶したとか？」

「いや、そうじゃない。ただ、ヤツの家に。」

婚約を強要されたとか？ その程度ならいつもやられてるような……

……

「俺の部屋が用意されていたんだ。」

それはある意味、結婚より致命的だと思う。

「あんな台詞を聞かれたら、間違いなく俺は、俺の未来は……」

「すまない坂本。今回の件ではお前のために全力を出そう。」

でも、普通なら彼女にクスリをかがされて、平気で喋れる男っていないよな？

「……女子風呂の場所なら確認済み。」

「OK。なぜ知っているのか、とかその辺の細かい所にはつつこま  
ずにいこう。」

「……助かる。」

「よし！ そうとわかれば覗きに行くよ！ 雄二、起きて！」

「ぐふっ！ はっ!?!」

「時間がないね。急ごう。」

「そうじゃな。走るかの。」

あ、ちょっと勇気がなくなっ……ふふふふ……

「君たち、止まりなさい！」

その声の主は、科学教師の……

「布施先生じゃないですか。もう夜も遅いし、早く寝たらどうですか？ 明日も授業があるわけですし。」

「あ、そうですね。じゃあちよつと……ってそんなわけないでしょう！」

「おお、ノリツツコミ。高等技術だ。」

あれを咄嗟に出来る人がいるなんて、ちよつと感動だ。

「ナオ。感動してないでブチのめすぞ！」

「それもそうだな。」

「さ、坂本君に浅斬君！？ 私は一応教師ですよ！？」

今回ばかりは協力すると誓ったし、俺の成績が落ちてもどつっことないしな。

それに、これはこいつらの濡れ衣を晴らすための行為だ。あとで真犯人を突き出せば先生も納得してくれるだろう。

「行くよ雄二！ 正義は僕らにあり！ この前の補習の恨みをくらええっ！」

「思いつきり私心で行動してんじゃねえか！」

「明久よ！ 罪を晴らすためにここまで来ておるのに、罪を増やしてどうするのじゃ！？」

これだからバカは……フォローに入るか。

明久の拳が布施先生に向かって突き出され、

「ひいひいっ！ さ、試獣<sup>サモン</sup>召喚っ！」

教師が召喚した召喚獣に阻まれた。

「ちっ………！ 厄介だな。教師用の召喚獣は物に触れるのか………！」

「そのようだな。」

見た目は小さいが、召喚獣の力は通常の人間の何倍もある。

油断すると、あっさりと捕獲されそうだ。

「ふう、間に合いましたか………。まあ、吉井君が《観察処分者》に認定されるまでは雑用を自分たちでやっていましたからね。物に触れる方が色々都合がいいんですよ。こういった若者の暴走を止めなければいけない場合もありますし。」

ということとは明久と同様に召喚獣の扱いに長けているってことが、益々以って厄介だな。

「ひ、卑怯じゃないですか！ 自分たちが作ったテストで召喚獣を呼びだしたら強いに決まっていますよね！」

「正式な勝負じゃない物に卑怯も何もありませんし、それ以前に自分たちが一方的に暴力を振るおうとしたことを棚に上げていませんか………？」

「大人は卑怯だ。そうやっていつも詭弁で僕らを騙そうとする。」

「それに、教師もちゃんとテストを受けているのですよ？ 他の学年の先生の作った問題で。」

え？ そうなの？

てつきりグウタラしているのかと……

「え、そうなんですか？」

「そうなんですよ。『教える側にもそれに相応しい学力が必要だ』  
というのが学園長の方針ですからね。」

あのババアも伊達に教育者やってないってことか。  
侮れないな。

「さて、それでは大人しくしてもらえますか？」

「いや、その話を聞いて逆に安心した。」

「はい？」

「だって手加減しなくてもいいんだろ？」

ふっ……化学は俺の得意分野ってことを忘れてるな？  
じゃあ、全力で行かせてもらおうでしょう

「お前ら。ここは先に行ってくれ。布施先生は俺が倒す。」

「一人じゃ無理だよ！ 僕も残るよ！」

「ダメだ。もしかしたらこの先にも教師が待ち受けてるかもしれないだろ。そのための戦力として行ってくれ。」

ま、多分一人じゃきついだろうけど。

というか、勝てないと思う。

「ふむ。ではワシが残るとするかの。」

「秀吉……お前……」

「わかった。秀吉がいるなら安心だ。明久、先を急ぐぞ。」

「うん。わかったよ。」

「直貴、気をつけるよ？」

「……………理想郷で待つ。」

そういうと、四人は先に行った。

さて、布施先生が相手じゃ油断は出来ないな。

「ところで秀吉。何で残ろうと思ったんだ？」

「大方、ナオはこの勝負を勝てなくてもいいと思っておるのじゃろ？」

「流石は演劇部のエースだな。俺の演技なんてお見通しってわけか。」

秀吉の言うとおり、俺はこの勝負負けてもいいと思ってる。

一つの理由は面倒くさい。

もう一つの理由は……………

「お主は正直、かなり姉上を怖がってる様子じゃったからな。この状況で本当に覗きなどしたら、それこそ終わりじゃからな。」

「優子だけならまだしも、亜矢もいるからな。」

亜矢は武道を少々やっているが、アレを少々と呼べるのはアイツの父親くらいだからな。

俺ですら無傷で戦うのは不可能だ。

「ま、ここまで来たらやるしかないか。秀吉もいることだし。」

「さて浅斬君、話は終わりましたか？」

「待ってくれるなんて親切ですね。こっちは頼んでないのに。」

「まあ私も一応教師ですからね。卑怯な真似はあまりしないようにしたいものです。」

「言ってる……………試獣召喚！」

「行くとするかの……………試獣召喚！」

|               |      |     |      |           |
|---------------|------|-----|------|-----------|
| 『化学教師<br>木下秀吉 | 布施文博 | V S | Fクラス | 浅斬直貴<br>& |
| 化学            | 663点 | V S |      | 534点<br>& |
| 91点<br>』      |      |     |      |           |

点数がおかしい。

俺ですら見たことがない点数だ。

「うわーやっぱ教師だわ。勝てる気がしない……………」  
 「本当じゃな……………」  
 「そう思うならこういった行為もやめて欲しいんですけどね。」  
 「だけど、諦めるわけにはいかない。行くぞ秀吉！」  
 「わかったのじゃ！」

『うおおおおおおおっ！！』

廊下に俺たちの怒号が飛び交ったのだ……………

「ではこの文、『私たちは覗きをしようとしたことを深く反省します。』を書け。文法や単語を間違えていたなら何度でもやり直しだ！ 終わったものから部屋のシャワーを浴びて寝ても良し！」

ま、普通こうなるよね。

俺と秀吉は布施先生にアツサリと負けてしまい、ここ指導室で反省させられていた。

「先生。終わりました。」

「読んでみる。」

「I am deeply reflecting trying peep into the girl bath. (私は女子風呂を覗こうとしたことを反省しています)」

「浅斬。お前はこうも勉強が出来るのにもかかわらず何でこういつた事件を起こすんだ？ それも英文で書いてみる。」

それは……自分でよくわからないな。

多分楽しいからなんだろうけど、今ここで書くとな怒られるしな……

あ、そうだ。

「Insists on one's right to keep silence. (黙秘権を主張します)」

「よくそんな言葉がわかるな……まあい。お前にこれ以

上英文をやらせても無駄だ。早く部屋に戻って寝る。」

はぁ………やっと終わったよ。

補習ってやるだけで疲れる………

『吉井、それを読んでみる。』

『I'm sorry. I want still to pe  
ep.』

『和訳してみる。』

『すみませんでした。私はまだ覗き見がしたいです………ア  
レ?』

『まだ指導が足りんようだな………』

『ちよ、西村先生! ごめんなさい! これは文法を間違えただけ  
で………!』

アイツらもまだ終わる気配がなさうだし、先に部屋に戻るか。

俺は指導室を出て、階段を上った。

「アレ? もしかしてナオ?」

ビクッ!

その声に驚いて振り返ってみると、そこには風呂上りの優子がいた。  
きつと、さっきの騒動で後半組みと一緒に入っていたのだろう。

でもそれとこれとは関係ない。今、俺がすることは………!

ダッ! (俺、もうダッシュ。)

「ええっ!?!? ちょっと、何で逃げるのよ!」

「とりあえず今は来ないでくれ! ト라우マになりそうだから!」

先刻の間接の着脱を思い出す。

……痛みが蘇るようだ。

「さっきのことまだ根に持ってるの!?! 終わったあとでも謝ったでしょ!」

「そういう問題じゃなくてだな! 俺はお前のこと あっ!」

ツルツ

ふっ……お決まりだな。

この運命はもう決まっていたことなのか……

「おああっああ!」

「えっ!?!? ちょっと!」

ドゴシヤッ!

案の定、床に叩きつけられる俺の体。

でも、いつも階段から落ちたときとちょっと様子が違った。

「あ……?」

体が動かない・・・・・・・・あ、やば・・・・・・・・ちよつと打ち所が悪かったかも・・・・・・・・頭から落ちたからなあ。火曜サスペンスばりの転落だったし。段々と、俺の意識が闇に沈んでいく・・・・・・・・

「ナオ！？　ちよつと、大丈夫・・・・・・・・！」

優子の声が聞こえたのも、そこまでだった。

第47話 落ちる所まで落ちたら後は這い上がるだけだ（後書き）

どうも、ミカツキです！

誤字脱字等ありましたら指摘のほうをよろしくお願いします。

最近ナオを落としてばかりですね。ちょっと可愛そうになってきました。

自分で言うのも何ですが（笑）

この後は少々オリジナルはいりますので沢山の方に読んでいただけたらなあ〜と思っています。

感想をお待ちしております！

第48話 自分の気持ちには正直になろう(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 26

・痛い・・・痛いぜ - 1

・覗きに加担 + 3

・教師陣の召喚獣にアツサリやられる - 1

・優子と遭遇 - 1

・火曜サスペンスばりの転落 - 1

・後頭部強打により、気絶 - 1

現在の青春ポイント合計 - 28

## 第48話 自分の気持ちには正直になろう

暗闇。無音。無機質。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・あれ？　ここはどこだ？

確か俺は・・・・・・・・・・痛って。

不意に後頭部が痛み、揺れた。

ああ、そっか。階段から落ちて、頭打って気絶してたのか。

それならここは、廊下かな。暗いし。

誰にも見つけてもらえなくてそのまま放置されてた、って所か？

そこで頭を起こそうとすると、頭の下に微かに感触が残った。

「・・・・・・・・ん？」

よく見ると、俺の視界の先にも何かある。

暗闇に目を慣らそうと、目を細めていくと、

「・・・・・・・・優子・・・・・・・・？」

俺の頭を膝の上に乗つけて、今にも瞼を閉じそうにしている優子がいた。

風呂上りなのか髪の毛も少し湿り、シャンプーの匂いが漂っている。

「・・・・・・・・ん・・・？　あ、起こしちゃった？」

「あ、いや。別に・・・・・・・・痛って。」

「頭大丈夫？　酷く打ってたみたいだし・・・・・・・・」

ああ、そっか。

確か階段で優子に会って、それでダッシュで階段駆け上がって……

そして落ちた、と。

「アンタってドジのくせに階段なんて駆け上がったからこんな目に遭うのよ。」

「面目ないな。」

そっか。あの時は気が動転してたから。

「つんと。今、何時だ？」

「あ、起きないで。今見てあげるから。」

「じゃあ頼んだ。」

大分暗いし、結構時間が経ったと思うんだけど……  
というか、俺がずっと気絶してる間はずっと優子がいてくれたのか？

「十時くらいかしら。」

俺が補習をしていたのが八時半くらいだったから、気絶したのが九時くらいか？

約一時間。ずっと俺の様子を見ていてくれたのか……

「悪いな。」

「いいわよ。時間見たくらいで、」

「いや、その話じゃないんだ。」

「えっ？」

少し、自分に素直になってみようか。

「さっき逃げたりして、悪かった。」

「え、あの。その、私も少しやりすぎちゃった所もあるし……」

「いや、それだけじゃないんだ。……実はさ、さっきまでお前のことちょっと嫌いになってた。」

「……それ本当？」

「というか、トラウマになりそうだった。あの時の優子の顔を鏡で見せてやりたいくらいだ。」

まるで鬼のよう、とまでは言えなかったが。

「……ゴメンね？」

「別にいいよ。謝らなくても。謝りたいのはこっちなんだからさ。」

「でも……」

「そうだな。一つ位は俺の素直な気持ち、聞いてもらおうか。」

「……？」

あの時逃げたのは、ただ怖かったんじゃない。怖いだけなら別にいいんだ。

「あの場は逃げようと思ったのは、ただまた酷い目に遭いそうとかそんな軽い気持ちじゃないんだ。」

「……」

「カツコ悪いよな。ちょっとあんなことされた位で一人の女の子から逃げちゃったんだぜ？」

「……ナオ……」

「俺さ、……優子のこと嫌いになりたくなかったんだ。」

「……！」

さっきも言ったように、ただ怖い目に遭うだけなら別にいいさ。でも、それで、もし優子のこと嫌いになっちゃったりしたら、そっちのほう怖い。

「俺はただ単に、お前のことを嫌いになりたくなかったただけなんだ。だから、あの場は逃げた。なのに優子は逃げようとして気絶した俺のことずっと見ていてくれただろ？俺、そんな優しいヤツを嫌いになるうとしてたのか、って思ったら、恥ずかしくて……」

「だからもう一度だけ言わせてもらう。……さっきは逃げたりして悪かった。」

俺の台詞を聞いて優子の顔が段々と明るくなっていくのがわかった。段々、恥ずかしくなってきたな……

「……ありがとう。」

「そう、それ。優子はやっぱり笑顔でなくちゃ。」

優子は笑顔が一番だ。

「それはそうと優子。」

「？なに？」

「そろそろ部屋に戻らなくていいのか？」

「ん……しばらくこのままがいい……」

「わかった。」

わかったけど……

よくよく考えると、優子は薄着で風呂上り。

さっきまでは意識してなかったけど、ここからの視界は男の俺から

すると・・・・・・・・格別。

「どうかした？」

「い、いや。別に・・・・・・・・あ、そうだ優子。」

「なに？」

「今さ、俺たち本当に覗きをしようって計画立ててるんだけど・・・・・・・・」

流石に怒られるかな、と思ったけど、返ってきた答えは結構アツサリしていた。

「それが本当なら大変ね。急いで振り返りにする計画を立てなくちゃ。」

「おいおい。案外落ち着いてるな。」

「そんなことないわよ。そっちが覗きに来るなら全力で止めなくちゃいけないだろうし。」

「ま、俺らにも色々と事情があるしこっちも全力で覗きに行かなくちやな。」

「・・・・・・・・私は、ナオにだったら見られてもいいんだけど・・・・・・・・」

「へっ？ 今なんて言った？」

「何でもないわよ！」

ん？ 何を言ったんだろう・・・・・・・・？

でもやっぱり、この膝枕での体勢ってドキドキするな。というか、優子だからドキドキするのか？

こんな優子の入浴シーンを見るためなら、どんなことでも出来る気がしてきた。

結局、この膝枕は優子の気が済むまで続いたのだった・・・・・・・・

「坂本。今帰ったぞ。」

「おうナオ。あれ？ お前は俺たちよりも早く帰ってきてたはずじゃないのか？」

「階段から落っこちてノビてた。」

「そうか。それは災難だったな。」

それにしても、優子のあの姿……。瞼の裏に焼きついてはなれない。

あの後、優子は自分の部屋に戻っていったが……。質問攻めにされなきゃいいけど。

「あ、ナオ。お帰り。」

「おう明久。ムツツリー二と翔太はもう寝ちゃってるみたいだな。」

「うん。あの二人と僕はかなりの時間がかかっちゃってね。シャワーを浴びたらすぐに寝ちゃったよ。」

「何じゃナオ。お主今頃帰って……。うむ？」

ん？ 秀吉が俺を見て何かに気づいたぞ？

「……………(ジー)」

「どうした秀吉。俺に何か付いてるか？」

「……………(スンスン)」

「!？」

「ひ、秀吉!？ いきなりナオの匂いなんか嗅いでどうしたの!？」

秀吉は俺の襟の近くに顔を近づけて、匂いを嗅いできた。

い、いきなりなんだ……………?

「……………姉上のよく使うシャンプーの匂いがするの……………」

「……………」

「!？ ひ、秀吉! ちょっと、そこまで行こうか!」

俺は秀吉の肩を掴んで部屋の隅に連れて行った。

「お主……………姉上と何かしたのか？ まさか……………」

「お前が考えてるような“( )?? ?」バキューン

!」 “なこととかはしてないから!」

「そこまでとは考えておらんかったが、まさかそこまで進んでおるとはのう……………」

「あー!! もう! ちゃんと話してやるから誤解すんのはやめてくれ!!」

「なんだ？ 何の話だ？」

あ、やっべ! デカイ声出しすぎて坂本に気づかれた!

「……………ネタになりそうな話の予感。」

「ナオ。僕らよりゆっくり帰ってきた理由って？」  
「直貴、お前まさか！」

とうにかさつきまで寝てたムツツリーにと翔太も起きだしてきやがった！

このままだとさっきの恥ずかしい出来事も赤裸々に語ることに・・・

「あー、えー。・・・もう勘弁してくれー！」

「『逃げた！』『逃げた！』『逃げた！』」

俺はアイツらが諦めるしばらくの間、ずっと部屋での鬼ごっこを楽しんだのだった・・・

優子SIDE

「・・・優子、お帰り。」

「あ、うん。ただいま代表。」

ナオと話した後、自分の部屋に戻ってきた。  
何も聞かれないといいんだけど……

「……………？ 優子、顔がちょっと赤い。」  
「えっ！？ そ、そう？ ちょっと暑いからかしら……………あ  
はは。」

嘘！ 顔赤くなってたの、私？  
恥ずかしい……………

「……………それと優子。なんで帰ってくるのが遅かったの……  
……………」

「！？ え、えーとね、それは……………」

た、大変。いきなり聞かれた……………

「ちょ、ちょっとおトイレに……………」

「……………それにしても、長かった。」

「なにになに？ もしかして好きな男の子に夜這いでもかけに行っ  
たの？」

「あ、愛子！ そういう冗談はやめてよね！」

笑いながら声をかけてくる愛子。

夜這いなんてかけに行くわけ……………な、ないわよ。多分。

「でも、今の動揺の仕方はちょっと怪しかったかな？」

「そ、そんなこと、」

「……………確かに。今のはちょっと怪しい。」

こ、これ以上聞かれると私の身が持たない……………！  
何か別の話題……………そうだわ！

「だ、代表。そういえば代表の彼氏の坂本君っているじゃない？」  
「……………うん。」

「な、何か噂だとまた覗きをするとか言ったらしいんだけど。」  
「……………それは本当？」

あ、やばいかも。ちょっと代表の目の色が変わった。

「で、でも噂だし、今日のカメラはナオたちが仕掛けたものじゃないから、多分大丈夫じゃないかなと。」

「……………浮気は許さない。」

「あはは。覗きに来てくれるなんて嬉しいね。僕、楽しくなってきたかった！」

「覗きをされて嬉しいと思うのは多分、愛子だけだと思うわ……………」  
「……………」

何はともあれ、話をそらすことに成功したわ……………

「じゃ、じゃあ私は寝るわね。」

「……………優子。話はまだ終わってない。」

「そつだよ優子。さっきはなんで遅れて帰ってきたの？」

そらせてなかった！？ むしろ興味津々になってる。

「だ、だから本当に何でもないんだってば〜！」

「……………ムキになってる。」

「優子、顔が赤くしちゃってカワイイ〜！」

結局、この後私は質問攻めにされていると大変な一日となった。

## 第48話 自分の気持ちには正直になろう（後書き）

どうもミカヅキです。

この話を作ったなら不思議と恥ずかしくなってきたやいました。  
自分でもこれはないかな？って思ってたんですけど、結局そのまま  
投稿してるし（笑）

自分では結構できてたかな？って思うんで、感想どしどしお待ちし  
ております！

第49話 口は災いの元だから注意してくれ！（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 28

・優子から逃げて自己嫌悪になる - 1

・自分の気持ちに正直になる + 3

・優子の笑顔が見れた + 3

・優子に膝枕をしてもらう + 3

現在の青春ポイント合計 - 20

## 第49話 口は災いの元だから注意してくれ！

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました。』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強する事で姫路さんに得られるものがあつたよ  
うでなによりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイ  
トになるかもしれない人たちと交流を深めておくといいでしょう。

土屋康太の日誌

『前略。夜になって寝た。』

教師のコメント

前略はそうやって使う物ではありません。

## 浅斬直貴の日記

『今日は英語に重点的に勉強することが出来た（だからここから英語で書くことに挑戦してみたいと思います）。 It was possible to become honest myself. I'm feeling today. However, it is understood that honesty will destroy my body. To behave responsibly, I want to become it.』

## 教師のコメント

英文で日記とは良く考えましたね。この場も勉強に使おうと考えたのはとてもいいことだと思います。あなたに何があったのかは知りませんが、自分の気持ちに素直になれることはいいことです。身を滅ぼすと書いてありますが何が起こったのでしょうか？

643

## 吉井明久の日記

『全略。』

## 教師のコメント

浅斬君のような熱心に英文で書かれたものを見た後だと、あまりの豪快すぎる手抜きに言葉が出なくなりました。

今日は自分の気持ちに正直になることが出来ました。だが、その発言が自分の身を滅ぼすということもわかりました。自分の発言に責任を持って行動できるようにになりたいです。

.....

「.....雄二。一緒に勉強できて嬉しい。」  
「待て、翔子。当然のようにオレの膝の上に座ろうとするな。FKラスの連中が靴を脱いでオレを狙っている。」

強化合宿二日目は本格的な勉強がスタートする日だ。  
今日の予定はAクラスとの合同学習。  
学習内容は基本的に自由で質問があれば周囲や教師に聞いてもOK。  
いわゆる自習だ。  
そのため机の並びも生徒同士が向かい合うような形になっている。

「でも、なんで自習なんだろう？ 授業をやってもいいと思うのに。」  
「なんだ。明久は授業のほうが好きなのか？」  
「いや、自習のほうが気が楽でいいよ。やらなくてもいいわけだし。」

いや、やらなくちゃダメだろ。

「授業なんざやるわけねえだろ、頭を使え馬鹿野郎。」

俺らの会話を聞いて、坂本が霧島から逃げようと隣にやってきた。霧島もついてきたが。

膝の上に座ろうとする霧島とそれを押しのけようとする坂本。見ていて飽きないな。

「やらない？ どうして？」

「ナオや転校生たちは大丈夫だがな。明久、お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

「むっ。失礼な。雄二は理解できないかもしれないけど、僕にとっではAクラスもFクラスの授業も大差ないよ。」

「だって明久はどっちの授業だろうと理解できないもんな。」

「ナオの馬鹿！ 凶星だよ畜生！」

やっぱりなあ。そう思ってたよ。

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから。」

「なるほど。そういうことか。」

「???？」

「翔子、それだけじゃ明久には伝わらんぞ。つまりだな、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタルの強化が目的だから、授業はさして問題じゃないということだ。」

A代表の説明に坂本が補足を入れる。

息もぴったりだし、本当に結婚式は近いかもしれない。

「あ、代表ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」  
そこに聞き慣れない声が聞こえてきた。  
誰だ………？

「工藤さん、だっけ？」

明久が少女の名前を口にする。  
………知らないな………？

「そつだよ。キミは吉井君だったよね？ 久しぶり。えーと、キミは………？」

「俺は浅斬直貴だ。苗字でも名前でも、ナオとでも好きに呼んでくれ。」

工藤？さんは俺の自己紹介を終えるとニツと歯を見せて笑った。  
ショートヘアと相まって、その仕草はとても爽やかだった。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。得意な教科は保健体育の“実技”。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物シュークリームだよ。」

「へえ、保健体育で実技か。運動神経がいいんだな。」

実技を強調したのはなぜだ。あっち方面でないことを祈ろう。  
それと、特技に関しては絶対に突っ込まないぞ。突っ込んでたまるか………！

「ん？ どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、

その……………」

ぶっちゃけ、特技でもなんでもないとと思う。

「あ、さては疑ってるね？ なんなら、ここで披露してみせようか？」

「この場でそういうこと言わないでくれないか？ シュークリームが好きとか、そういう普通の会話をしてくれ。」

工藤は自分のスカートの裾を摘んでみせた。

隣ではなぜか坂本が目をおさえてのた打ち回っていた。

A代表の指がチョコキになってるのは『……………浮気はダメ』……………きつと関係ないはずだ。

「……………明久、ナオ。工藤愛子に騙されないように。」

「あれ？ ムツツリーニは随分と冷静だね。僕でもこんなにドキドキしているんだから、とつくに鼻血の海に沈んでるのかと思っただのに。」

血の海ならともかく、鼻血の海って台詞は人生初だよ。

色々と苦労してんな……………主に性的方面で。

「……………ヤツは、スパッツを穿いている！」

「な、なんだって！？ 工藤さん、僕を騙したね！？」

「いや、別にそんなに残念がらなくてもいいだろ。」

むしろ残念なのは『俺は目を突かれ損じゃないか……………』コイツだろ。

「ん？ 浅斬君は残念じゃないの？」

「いや、これっぽちもというほどでもない。」

本当は興味心身だが。

それを表に出そうとすると、色々とクラスメイトの目が気になるからな。

「ふーん……じゃあ、優子のパンチラの方がいいの？」

「ごふっ！ な、ななな、な……！」

「あ、動揺してる。やっぱり凶星？」

こ、この子は一体なんなんだ……！！

優子の方がいいかだって？ 言われなくてもいいに決まってるんだろ！

「昨日は優子から色々聞いたよ？ とっても面白かったよ。」

「待ってくれ。優子が一体何を言ったんだ？」

出来る限り小声で喋る俺。

優子……やっぱり質問攻めにされてたか。

「内緒だよ。それにしても優子のタイプがこの子だとは……  
もっとお高く留まった、レベル高い子だと思ってた。」

「ん？ どうした工藤？」

「いや。なんでもないよ。」

何か言われたような気がしたけど、気のせいかな？

「……工藤。俺は騙されないぞ。」

「あはは。さっきのことばれちゃった？ さすがはムツツリー二君。まあ、特技ってっわけじゃないけど、最近凝っているのはコレかな

「？」

そう言いながら彼女が取り出したのは………小型録音機！？

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば」

小型録音機をカチカチと弄る工藤。

少し間を置いて、内蔵されてるスピーカーから音声が聞こえてきた。

ピツ 《工藤さん》 《僕》 《こんなにドキドキしてるんだ》  
《やららない？》

「わああああつ！ 僕はこんなこと言ってるよ！？ 変なものを再生しないでよ！」

「ね？ 面白いでしょ？」

工藤が悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「そうだな、確かに面白いな。俺には理解できないが。」

その直後に背後から、

「……………ええ。最っつ高に面白いわ。」

「……………本当に、面白い台詞ですね。」

鳥肌が立つほどの殺意を感じた。

「瑞希。ちょっとアレを取りに行くの手伝ってもらえる？」

「わかりました。アレですね？ 喜んでお手伝いします。」  
「ちょっと待ってくれ島田に姫路。アレが何かを教えてくださいませんか？」

机に勉強道具を残したまま学習室を出て行く二人。

「……………アレって何だろう……………？」

その姿を見ていると、入れ違いで秀吉が首を傾げながら入ってきた。

「秀吉、どうかしたか？」

「いや。先ほど、島田と姫路に石畳を運ぶのを手伝ってくれ言われたのじゃが、何かあったのかと思つての。」

「さよなら明久！ 今日部屋に戻れないかもな！」

「ナオ！？ やめてよそういうこと言うの！」

「俺も運ぶの付き合つてやろうかな？」

「冗談やめてよ！ 僕の命が風前の灯火だつていうのに！」

まあ、戻れないって事はないかもしれないが。

それにしてもコレは可哀想だ。

「工藤……………このままだと明久の身が危ない。お願いだからやめてくれ。」

「そうだね、じゃあ次はこっちにしようかな？」

ピッ 《俺は》 《このままだと》 《授業》 《が》 《理解できない》 《工藤》 《保健体育の実技》 《を》 《教えてくれ》

「ちょっと工藤！？ 何やっちゃってんの！？」

「え？ だって吉井君を標的にするのをやめてくれって言ったから。」

「俺を標的にしろとも言っていないぞ！」

さっきの会話文の所為で奇跡的に俺が変態に聞こえるぞ！

「工藤。さっきのは消してくれ。これを誰か他の人に聞かれたら俺は」

何かの気配を感じた。

後ろを振り返ってみると、

「直貴？ 今の、なに？」

「昨日はちよつとカッコいいかかって思った私が馬鹿だったわ・・・」

亜矢と優子に目が合った。

「これはだな・・・断じて俺が言ったんじゃないんだ。」

「今の声、完全に直貴だったわよね？」

「そうね。完全にナオだったわね。」

「それは工藤が俺の声を勝手に間接を捻り上げないでくれ！ うっ

！？ 腕だけじゃなくて足にも関節技が！？ 激痛が！？ ちょよ、

亜矢！？ 関節技がかかった状態でドロップキックなんてしたら腕がもげふううっ！！？」

そこまで言った後、俺はドロップキックを食らって床に伏せた。

「工藤。これ以上は俺の身が危ない。勘弁してくれ。」  
「どうやったら手足バキバキのグチャグチャ状態で話せるの？ 本来ならモザイクがかかってるよ？」

現在、俺の体は皆さんにはお見せすることが出来ない状態だ。  
一応手足のもげている所はないが、見た目がR15指定状態だ。早いところ戻そう。

「うつ……………（ゴキヤベキヤグチャゴシヤ）……………ふう。戻った。」

「ナオ。大分、その……………絵についてきたね！」

「黙れ！ 普通の人間が“（、・）?? ?”バキューン！〜”なことになって生きていられるのは俺ぐらいだ！」

「生きていられる時点で普通の人間じゃないと思うんだけど……………」

「ぐっ!? 心の傷をえぐられた気分だ……………」

それにしても、トラウマになりそうだ。

優子のこと嫌いにならないようにしてるのに、嫌いになりそう……………

亜矢にいたっては論外だ。

「そ、そうだ工藤さん。」  
「ん？ なに、吉井君？」

ん？ 明久が工藤に何か聞こうとしてる………  
そこで坂本と目が合った。

(明久は工藤に何を聞こうとしているんだ？)

(工藤が例の犯人かもしれないからな。明久に探りを入れさせてる。)

(いや、その可能性はないと思うんだけど………)

(？ なぜだ？)

(リストに載ってなかった。明久のにも、姫路たちのにも。)

俺が調べた明久の周りの異性。つまり、最近転校してきた優と、第三の性別として扱われてる秀吉を除いた姫路と島田のファンのリストだ。

このなかに工藤の名前はなかった。つまり犯人の確立は極めて低いということだ。

(そうか。だが容疑者には挙げておこう。万が一という場合もあるしな。)

(まあそれに越したことはないんだが………明久を早く戻した方がいいぞ。下手なこと喋らない内に。)

(それもそうだな………って、遅かったようだな。)

(なに？)

「キミが 僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

「お前はどこの変態だよっ!？」

「あべしっ!？」

下手なことっていうか、セクハラ発言じゃねえか！

「お前はレディーに何を言ってるんだ！ しかもお尻を見せてって……普通は絶対に聞かない質問だぞ！」

「あははっ。吉井君はお尻が好きなの？ それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな？」

工藤はこんな台詞を聞いても爽やかに笑っている。  
なんて器がでつかいんだ……

「く、工藤さん！ コレは誤解だ！ 僕はお尻が好きなんじゃなくて！」

「お尻が好きじゃないならそんな質問しないよな？」

「流石だな明久にナオ。まさか録音機を目の前にそこまで言うとはな。」

「へっ？」

ま、待てよ？ 録音機って確か……！

「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ。」

ピッ 《僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》

ピッ 《工藤》 《お願いだから》 《俺に》 《お尻を見せてくれ》

「ひあああっ！ これは合成すらされてない分ダメージが大きいよ！？ お願い工藤さん！ 今のは消してください！」

「坂本お!? 何されるかわかってたんなら教えてくれよ!」  
「キミらって、からかい甲斐があって面白いなあ。つつい苛めた  
くなっちゃうよ。」

ピッ 《お願い工藤さん!》 《僕にお尻を見せて》

「うああんっ! 僕がどんどん変態になってる気がするよ!」

ピッ 《工藤》 《絶対に》 《お尻を見せてくれ》

「絶対についてなに!? どういう状況だよ!？」

もうこれ以上は俺の堪忍袋の緒が切れるぞ!  
そう思ったときだった。

「……………今の、何かしらね? 瑞希。」

「……………なんででしょうね? 美波ちゃん。」

そこに石畳を持った姫路と島田が帰ってきた。

明久の運命もここまでだな。

「……………島田さん? その石畳を数枚いただけるかしら?」  
「私も、もらえるかしら?」

俺もだけど。

「いいわよ、亜矢さんに木下さん。一緒に馬鹿をお仕置きしましよ  
う。」

「優子でいいわよ。島田さん。」

「じゃあ優子。私も美波って呼んでもらえる？」

「わかったわ、美波。」

あはは・・・変な所で結束力が生まれてるぞ。

「皆！？ これは誤解なんだ！ 僕は問題を起こす気はなくて、ただ純粹に《お尻が好き》ってだけなんだ　　って待つて！ 今のは途中に音を重ねられたんだ！ お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！ あとそつちの皆も笑つてないで助けてよ！ 特に雄二！」  
「明久、大丈夫か！？ 待てよお前ら！ 明久は工藤の《お尻が見たい》だけなんだ　　ツてゴメン明久！ やられた！ 待て皆！ 俺は無関係だ！ 特に《優子》《の》《お尻が見たい》ってやめてくれよ！ そこでやるのは反則　　！？ うおっ！？ 石畳が俺の膝の上に！」

殺す気か！？ 痛みが尋常じゃない・・・！！

「・・・・・・・・・・工藤愛子。おふざけが過ぎる。」

「ムツツリーニ！ 助けてくれるの？」

「・・・・・・・・・・うまくやつてみせる」

「恩に着る！ 流石は俺らのムツツリーニだ！」

そう言うともツツリーニも工藤と同じように録音機を構えた。

そうか！ そうやって工藤のことを同じように追い込むつもりか！

「姫路さん、美波よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二》《の》《が好き》ってム

ツツリイニイーツ！ 後半はキサマの仕業だな！？ うまくやる  
って、工藤さんより僕をうまく追い込むってことなの！？」

訂正。工藤と同じように明久を追い込むつもりだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・工藤愛子。お前はまだまだ甘い。」

「くっ！ さすがはムツツリー二君・・・・・・・・！」

二人は互いに睨み合って火の粉を散らせている。

そんなことするくらいだったら俺らを巻き込まないで二人でやれば  
いいのに。」

「アキ、そんなに坂本のお尻がいいの・・・・・・・・？ ウチじゃダ  
メなの・・・・・・・・？」

「前から分かっていたことですけど、そうはつきり言われるとシヨ  
ツクです・・・・・・・・」

「吉井君って・・・・・・・・そうだったんだ・・・・・・・・」

優子も変な勘違いをし始めている。

これは俺が誤解を止めるしか・・・・・・・・

「禁断の恋ね・・・・・・・・！」

なぜだろう。一瞬だけ優子が遠い存在に見えた。

「ムツツリーニ。俺のときは絶対にフォローしてくれよ？」

「・・・・・・・・次は、もつとちゃんとやる。」

「本当か？ まあいい・・・・・・・・優子に亜矢！ 俺の話を聞いて  
くれ！」

「なによ、直貴。」

「なに？ ナオ。」

よし。話はちゃんと聞いてくれるようだ。

「さっき言ってたのは、本当は《特に》《優子に亜矢》《の》《お尻が好き》ってだけなんだ。それに《吉井》《のも》《坂本》《のも》《好き》ってムツツリイニイ！？ テメエちゃんとやるの意味わかってんのか！？ 後で捻り潰してやるから覚悟しろよ！」

「な、ナオ？ アンタまさかそっちの趣味が……！！」  
「亜矢あつ！？ お前はなんて誤解をしてるんだ！？」

俺までそんな噂が流れるなんてショックすぎるぞ！

「皆はどうして僕らを同性愛者扱いするの！？ 僕らにそんな趣味は」

ない、と明久がフォローをしてくれようとした瞬間で学習室のドアが開いた。

そこにはある女子が険しい目つきで立っていた。えーっと、アイツは確か……

「同性愛を馬鹿にしないで下さいっ！」

そうだ。清水美春だ。

どこかで見た面だと思ったら、確か島田のファンリストに載っていたな。

そして熱烈な島田ので、リスト中の要注意人外？1のヤツだ。

「み、美春？ なんでここに？」

「お姉さまっ！ 美春はお姉さまに逢いたくて、Dクラスをこっそ

り抜け出してきちゃいましたっ!」

ドリルのようにロールした髪。

俺はこの特徴からリストで見たとき、コイツのことをドリル頭と呼ぶことに決めている。

そんなドリル頭は島田を見つけるとや否や、どっかの怪盗並みのジャンプで島田に飛びついた。

不二子ちゃん! そんな声が今にも聞こえてきそうだ。

「須川バリアー!」

「け、汚らわしいです! 腐った豚にすら劣る抱き心地ですっ!」

バリアーにされてしかも罵倒された須川。

・・・・・・・・とぼつちりとしか言いようがない。

(須川・・・・・・・・今度なにか一緒に旨いもんでも食いに行こうぜ。

俺の奢りでいいから。)

(ありがとう・・・・・・・・浅斬。)

そんな須川は目に涙をためて上を向いていた。

・・・・・・・・ドンマイ。

「酷いでお姉さま・・・・・・・・。美晴はこんなにもお姉さまを愛

しているというのに、こんな豚野郎を掴ませるなんてあんまりです。

・・・・・・・・」

泣くな、須川。

お前にもきつといいことあるぞ。

「ちょっと美春! こんなところで愛してるとか言わないでよ!

アキに勘違いされちゃうでしょ!？」

いや、勘違いも何もないと思うんだが……

「君たち、少し静かにしてくれないかな？」

そんな中、凜とした声が学習室に響いた。

確かアイツは……

「あ、ごめん久保君。」

そうだ。学年次席の久保利光だ。

知的に眼鏡を押し上げる、クールな姿が印象的だな。

「俺からも謝るよ。すまん久保。」

「吉井君と浅斬君か。とにかく気をつけてくれ。まったく、姫路さんといい島田さんといい、Fクラスは危険人物が多くて困る。」

ちよつと引つかかる物言いだったが、別にその通りなので今更否定もしない。

でも、坂本やムツツリー二より先に挙がるのはちよつと意外だな。

「それと、同性愛者を馬鹿にする発言はどうかと思う。彼らは別に異常者ではなく、個人的嗜好が世間一般と少し食い違っているだけの普通の人たちなのだから。」

「え？ あ、うん。そうだね。」

「なるほど。確かにそういう考え方も出来るな。」

でも、確かコイツ明久のファンリストに載ってたよな……  
要注意人外リストに挙げておくか。

「ほら美春。くだらないことで騒いでないで自分の学習室に戻りなさい。」

「くだらなくなってます！ 美春はお姉さまを愛しているんです！ 性別なんて関係ありません！ お姉さま、美春はお姉さまのことが本当に」

「はいはい。ウチにそっちの趣味はないからね？」

まだ興奮状態にあったドリル頭を教室の外に追いやる。

そのまま自分の学習室に戻ってくれるといいんだが……

「……性別なんて関係ない、か……」

久保の意味深発言が聞こえる。

それは自分に対して言ってるのだろうか……？

「性別なんか関係ない、ですか……」

「あのね姫路さん。そのセリフを呟きながら僕と雄二を交互に見るのはやめてもらえないかな？ 知つての通り、僕は《秀吉が》《好きなんだ》ってちよつと！？」

ひ、秀吉も巻き込まれた！？ このままだと大惨事に！

「待てよお前ら！ 自分たちが何を考えてるかわかってんのか！？

俺は《優子》のことだよ！ ってマジで勘弁して！」

これは一応本当だから否定し辛い！

痛いところを突いてきやがって……！！

「あははっ！ 浅斬君って面白いねえ〜！」

「な、ナオ？ 私の何を考えてるの……？」  
「だあああつ！ もう勘違いすんな！ 俺は《特に》《優子》《の》  
《お尻が見たい》んだ！ もう勘弁して！」  
「覚悟しなさい直貴っ！」  
「うおおっ！？ 亜矢の蹴りが空気摩擦で熱を帯びてる！」  
俺を殺す気か！？

「な、ナオ！？ アンタなんてこと言ってるのよ！」  
「い、いや！ 俺が言ったんじゃないんだ！ 確かに見たいか見たくないかと聞かれれば見たいに即答だが、ってそんなことしたら間接が外れる！ そして亜矢！？ おま、だから跳び蹴りはダメってごふうっ！？」

意識が飛びそう。つーか、痛い。

「ああっ！？ ちょっとナオ！ 大丈夫！？ こうなったら《久保君》《雄二と》《交互に》《お尻を見せて》違っ！ どうしてこんな場面で久保君のお尻を見る必要があるのさ！ 僕は」  
「少し待ってくれ吉井君。時間はかかったが、色々わかったよ。」

色々わかった？ 久保はこの状況で明久の言ってる意味がわかったのか？

「久保君！ 君にはしっかり伝わったんだね！」  
「物事には順序というものがあるんだ。」  
「わかってた……この程度で終わると思ってたよ。そして順序云々の前に人として間違ってることも！」  
「アキ、アンタやっぱり女より男の方が……」  
「だからどうして皆僕をソッチの人にしようとするの！？ 落ち着

いて僕の話聞いてよ!」

騒がしい教室内のざわめきに俺らの声が打ち消される。

結局、この馬鹿騒ぎは西村先生が怒鳴り込んでくるまで続いた。

.....

「優子。ちょっとコレ聞いて?」

「ん? どうしたの?」

ピッ 《俺は》 《優子》 《が》 《好きなんだ》 《付き合っ

て

「.....何コレ?」

「え? 優子が喜ぶと思って。」

「それ、くれる? なんだったらお金払うけど。」

「べ、別にお金はいいよ。」

「ありがとう優子。」

「う、うん。お役に立ててボクも嬉しいよ。」

「.....工藤優子。」

「うひゃあっ!? む、ムツリーニ君!? どうしたの?」

「.....そのコピーを取らせてくれ。」

「い、いんだけど.....コピーしてどうするの?」

「・・・高く売れる。」  
「？」  
「・・・なんでもない。」

第49話 口は災いの元だから注意してくれ！（後書き）

どうも！

最近メガネが大破した作者です！

強化合宿ではナオと優子の絡みを多くしています。

前回のオリジナルでもそこまで出番がありませんでしたし……

・ドンドン出していこうと思います！

皆さん、応援よろしくお願いします！ 暇があれば気軽に感想欄に

アドバイスなどをお願いします！

第50話 団結してるときの人のテンションは異常だ(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 20

・少女、工藤愛子あらわる - 1

・工藤さん、俺をからかわないでください - 2

・ゴキヤベキヤグチャゴシヤ - 4

・もう、工藤さんにはコリゴリだ - 3

現在の青春ポイント合計 - 30

## 第50話 団結してるときの人のテンションは異常だ

「……亜矢たちの所為で飯が不味く感じた。」

「直貴……また何かやらかしたな？」

「本当だよ……ま、僕はカロリーが取ればいいけど。」

「ナオに明久、それに翔太も。作戦を立てるからこつちへ来い。」

俺たちにとって地獄のような学習時間や夕食も終わり、翔太や明久と一緒に自室に戻ってきていた。

そして入浴時間も迫ってることなので、犯人を捕まえる算段を立てようと話していた。

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど……」

「その可能性は高いだろうな。」

「それじゃ、一気に工藤さんを取り押さえる？」

「いや、それは避けたほうがいい。犯人じゃなかったときが怖い。」

「それもそうだな……それを見えていた犯人が証拠を処理する可能性もあるしな。」

工藤はあのリストに載ってなかったし……犯人である可能性もそこまで無い。

録音機を持っているという状況証拠だけで犯人に仕立てるのは少し無理があるしな。

「あんなに怪しいのに手が出せないなんて……」

「例の火傷の痕を確認できたら良いのじゃが……」

「場所が場所だしな……」

「いつそ、怒られるのを承知でスカート捲りでもしてみる？」

「お前はさつき自分の身に何が起こったか覚えてないのか？」

「ああ、そつか……………」

そんなことしたら、先ほど以上の凄惨な結末が待っていることだろう。

「……………それにヤツは、スパッツを穿いている……………」

「げ。そういえばそうだった。」

スパッツを穿いているならスカートを捲つての確認は不可能だ。つーか、捲る勇気が無い。

「……………確認するには女子風呂を覗くしかない。」  
「やっぱりそうなるんだね……………」

「なあ、お前ら。覗く以外の方法を考えようとは思わないのか？」

覗きつて一応犯罪だからね？

「なんだ？ ナオは覗きに興味が無いのか？」

「いや。無いわけじゃないんだが、あまり気乗りしなくてな……………」

「……………」

「ま、まさかナオ……………」

「も、もしかして……………」

「本当は……………」

「????？」

「「ソツチの趣味があるとか?」「」

「ねえよ!？」

男になんて興味ねえよ! あるとしたら久保とかだろ!?

「俺が好きなのは普通に、」

「秀吉のお姉さん。」

「そうだ！俺は優子が、って何言わすんじゃないやあつ！？（フォン）」

「（ドギヤツ）（ごぶっ！？）」

なにを言わせてんだコイツは！？

ああ……………凄いい恥ずかしい……………！

「なるほど。やっぱりそうか。」

「ちょ、坂本！これは誤解で！」

「まあ薄々感じてはおったが、そうハッキリ言われると弟として困るのう……………」

「秀吉まで！ ちよつと待てよ！」

「……………（パシヤツ）」

「ちよつと待てムツツリーニ。今、なんで俺の写真を撮った？」

「……………ナオの慌てた顔なんて、滅多に撮れない。ファンに高く売れる。」

「お前は人を商品にしてんじゃないやねえ！」

ということも他にも俺の写真が……………？

「と、とにかくだ！ムツツリーニ。俺だけは絶対に撮るなよ！」

「……………わかった。控える。」

控えるってことは撮らないわけじゃないんだよな？

「ま、ナオをからかうのはこの位にして、作戦を立てるか。」

「作戦とは言うが、あの場所はただの広い一本道じゃったからのう。正面突破しかないと思うぞい。」

「確かに女子風呂の前の廊下には遮蔽物が全く存在しないしな。辿り着くのですらキツイってのに。」

「そうだな。作戦を立てる時間もないし、基本は正面から攻める以外はないな。」

正面突破だと昨日のようにまた叩き伏せられてお終いだろつ。そんな状態で攻めきれるとはとても思わない。

「だが、方法がないわけでもない。」

「え？ 作戦があるの？」

坂本が不敵に笑う。

こういうときの坂本の顔って、本当に楽しそうだよなあ……………

「要するに、正面突破を成功させればいいんだ。」

「いや、それが出来ないから困ってんだけど……………」

向こうの戦力は布施セン一人に大島先生一人。それに鉄人先生が一機だ。

対するこちらの戦力は俺を含め元神童、演劇馬鹿、エロ馬鹿二人に馬鹿一人。

一人一人まとまってかかったとしても、最後の鋼機動兵器TETSUJINにコテンパンにされて終わりだ。

「正面突破しか方法がないのなら、それを成功させるだけの戦力を揃えたらいい。質は向こうが上でも、数で上回れば勝機はある。」

「えっと、つまり覗き仲間を増やすってことかな？」

「そうだ。」

「なるほど。作戦とは呼べないが、単純でいいんじゃないか。」

そのとき丁度、扉からノックの音が聞こえ、須川を先頭にFクラスの面子が部屋に入ってきた。

「坂本、俺たちに話って何だ？」

Fクラス全員なだけあって人数が多い。部屋に収まりきらないくらいだ。

「よく来てくれた。実は皆に提案があるんだ。」

『提案？』

『今度は何だよ？ 正直疲れてて何もやりたくないんだけど。』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえな。』

全員ダルそうだが無理もない。今日一日は勉強漬けで疲れているんだ。

この状態からやる気を見出せるとは思えないな……

「皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ。』』』

突っ込まない。絶対にツッコミを入れないぞ。

俺はKYだがその辺のことはわかる男だ。うん。落ち着け、俺。

「昨日オレ達は女子風呂の覗きに向かったんだが、卑劣にも待ち伏せをしていた教師達の妨害を受けたんだ。」

卑劣って言ってるけど、本来覗こうとしているこっちのほうが卑劣な筈なのに。

『ふむ、それで？』

誰もツッコミを入れないのか？

だが俺はKYだがその辺はわかる（以下略）だから落ち着け、俺。

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷アガルタの光景。どうだ？」

「乗った！」

たりららっ たっ たっ

変態仲間が増えた！ 戦力が40人ほど増えた。

俺のクラスへの残念度が40ほど増えた……

「今から隊を5つに分けるぞ。A班は俺に、B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリー二と翔太、E班はナオにそれぞれ従ってくれ！」

「了解っ！」

「いいか、俺たちの目的はただ一つ！ 理想郷アガルタへの到達だ！ 途中

で何があるとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め！

神魔必滅・見敵必殺！ ここが我が行く末の分水嶺だと思え！」

「おおおおおおおっつっ！！」

「全員気合を入れろ！ Fクラス、出陣でるぞ！」

「おっしやああああーっ！！！」

そんな気合テンションで大丈夫か？

一抹の不安を抱えながらも、Fクラスと俺たち覗きに対する気持ちは一つになっていった……

第50話 団結してるときの人のテンションは異常だ(後書き)

宿題が未だ終わっていない作者です。

一応これからも投稿していくつもりですが、更新ペースが遅れるかもしれません(泣)

宿題頑張っで終わらせて、早く安定して投稿できるように頑張ります！

以上、三日月からでした！

第51話 逃げるが勝ち、逃げちゃダメだ、あなたはどっち派？（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 30

・ムッツリーニに写真を撮られる - 1

・俺にもファンがいることがわかる + 2

・崇高？ な目的のために、今、一つになった俺たちの気持ち + 3

現在の青春ポイント合計 - 26



「秀吉！ ここは任せた！」

「わかつたのじゃ！」

秀吉が布施先生と接触する。

人数が多いぶん、こちらにも勝機はある。

「吉井！ 木下のC班が布施と接触したぞ！」

「オーケー須川君。皆、秀吉がやりあっている間に一気に駆け抜けるよ！ 全員遅れないようにね！」

よし、俺はここから別行動だ。

違う廊下から回り込んで教師陣を回避する作戦だ。

「明久！ グッドラックだ！」

「ナオも頑張つてよ！」

俺らは食堂から女子風呂までの階段を指すといった経路だ。

このまま行くと、西村先生以外の教師はスルーできる作戦……  
の筈だった。

「あ、亜矢……！」

「あら、直貴。今からどこに行こうとしてるの………?」

食堂の通路の方には亜矢を含めた女子生徒陣が通路を塞いでいた。くっ………このままだと突破は難しい!

「亜矢………そこをどいてくれ。」

「却下よ。」

「総員一斉攻撃! それと必ず二人一組以上で戦うこと! また、相手が強い場合は何人でかかってもよし!」

『『『応っ!』』』』

「いきなり攻撃指示をするなんて………容赦ないわね。」

「はっ! 誰が相手であろうと、全力で倒すのみだ! 亜矢、かかっ  
つて来い!」

「いいわよ。その気力、先っばからへし折ってあげるわ。」

ふ………へし折るって単語が俺の恐怖を煽るぜ。

「んで? 教科はなんだ?」

「このフィールドは先生に頼んで数学にしてもらったの」  
「………マジか………」

やべえ。俺の苦手教科じゃねえか。本当に気力持ってた……

ま、まあ一応俺の得点は400か300後半になってる筈だ。  
勝てないわけじゃない。

「『試獣召喚!』」  
サモン

『Fクラス      神咲亜矢      VS      Fクラス      浅斬直貴  
数学              483点      VS                      361点  
』

「んなっ!？」

「そついえばアンタ、前の学校でも数学は苦手だったわよね？」

「お前……!      数学得意だったなんて聞いてないぞ！」

「というか俺もそこまで点数が高くない!

勝てる見込みがなくなってきた……!」

「くっ!      けどお前はまだ召喚獣の操作に慣れていない!      勝てない勝負じゃない！」

「そう?      それならやってみた……!」

「うおおっ!」

点数が100点近く離れている所為か俺の召喚獣の動きはとても鈍いものだった。

亜矢の召喚獣の剣が振り下ろされるスピードに、俺の召喚獣はギリギリで反応した。

「ふうん。当たるかと思ったのに。」

「は、早いな……!      思った以上の速度だ。」

亜矢の召喚獣は金色の剣に銀色の盾を持つ、西洋鎧に身を包まれた召喚獣だった。

見た目は凄く重そうだが、数学の点数もある所為か普通の召喚獣より格段にスピードが速かった。

「まだまだ行くわよ！」  
「くっ！」

素早く繰り出される連撃。防御するだけで精一杯だ

「それにしても動きが速い……！」

「初めて召喚してみたけど、案外簡単ね。」

「くっ……！！ 無駄に才能を持ちやがって！」

ちなみにコイツは名家のお嬢様。そんじょそこらのお嬢様とは違つと前にも言つた。

それは資産とかそういう家柄的な意味じゃない。

亜矢自身がハイスペックな人間であるからだ。

「コレでトドメをさしてあげるわ。」

亜矢の召喚獣は剣を大上段に構えた。

ここだ！

「ふっ！」

「!?!」

俺の召喚獣が亜矢の召喚獣の鎧に突き立った。

そんな大きい剣で大上段になんか構えたらボディを狙ってくれといつてるようなものだ！

「ここは通してもらつぜ。」

「……まだ、負けてないわよ？」

「なに？」

鎧には完全に刀が……まさか！

「くっ！」

刀を引き抜いてみると、そこには亜矢の召喚獣の姿はなかった。まさか、鎧の着脱が可能だったのか！？

「食らいなさいっ！」

「ぬおおおっ！？」

不意に左から刀突き出された。

咄嗟の出来事で反応が出来なかったせいも、俺の召喚獣の右の脇腹に剣が刺さった。

「ぐっ！」

「脇腹だけか……」

亜矢の召喚獣は鎧を外して、身動きの軽い服装となっていた。

剣と盾を床に置き、自分の装備は隠し持っていたとされる小刀だけとなった。だが……

「速さが先ほどとは桁違いだ……」

重い鎧を捨てたお陰かともあったスピードにさらに磨きがかかっている。

手傷を負っているこの状況で勝てるほど甘くないな……

万事休すか……！

明久SIDE

その頃……

「そこまでです、薄汚い豚ども！」

「清水さんお願いだ！そこをどいて欲しい！」

「ダメです！そうやってお姉さまのペッタンコを堪能しようなんて、神が許しても私が許しません！」

くっ。清水さんは誤解している！僕の目的は美波じゃないのに！

「違うよ！僕の目的は美波のペッタンコじゃないんだ！信じて！」

女子多数に囲まれている僕らに勝機はない！ここは清水さんを説得するしかない。

「嘘です！ お姉さまのペツタンコに興味がない男子なんているはずありません！」

「本当だよ！ ペツタンコは所詮ペツタンコなんだ！ 今の僕には美波の地平線のようなペツタンコより大事なことが右肘がねじ切れるように痛いっ！」

「黙って聞いていれば、人のことをペツタンコペツタンコと……  
……！」

清水さんの言い争いに夢中になって美波の接近に気付かなかったとは不覚だ。おかげで右腕が酷いことになってる。

「み、美波。今は入浴時間じゃ……？」

「忘れたの？ ウチと瑞希とかはFクラスだから後半組なのよ。」

もつとも、前半組のAクラスからも参加している人がいるみたいだけどね。」

三波が廊下の先を指し示す。目をやると、そこにはこっちに向かって手を振る女子の姿があった。

「やつほー、吉井君。何を見に来たのかな？ ボクを覗きに来てくれたのなら嬉しいんだけど。」

「工藤さん！？ そんな！ どうしてここにいるの！？」

脅迫犯であるはずの工藤さんが『……浮気は許さない。』  
こんなところにいるなんて『翔子待て！ 落ち着ぎやああああっ！』計算外だ。これだと彼女が犯人かどうかを確認することが出来ない！

「あ。さてはボクからこれを取り戻そうとしているのかな？」

例の録音機取り出し笑う工藤さん。まるで「全部知ってるよ」とでも言わんばかりの態度だ。

「工藤さん。質問なんだけど、どうしてキミは録音機なんて物を持つてるの？」

「勿論、先生の授業を録音しておいて後から復習をするためだよ。」

これはウソだろう。彼女はそんなに真面目に勉強しているようには見えない。

「それより、吉井君たちの目的は？　もしかして、脱衣所の盗み撮りとか？」

「く………！」

なんて白々しいんだ。目的は知らないけど例の盗撮だって工藤さんが犯人のくせに！

「じゃ、一つイイコト教えてあげるよ。」

彼女は僕らに近づいてきて小声でこう言った。

「まだ脱衣所には見つかっていないカメラが一台の残っているよ？」

「………っ！　工藤さん、キミは！？」

「ボクが仕掛けた訳じゃないけど、偶然見つけちゃってね。」

偶然見つけた？　ということとは、工藤さんが犯人じゃない？　いや、そんなことはない。きっと工藤さんが犯人な筈だ！

「さて、おしゃべりはここまで。そろそろ始めようか、ムッツリー二君？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかつている。」

いつの間にかやってきたムツツリー二。

「くっ・・・・・・・・！ この人数でここを突破するのは困難だ……  
……！」

何かないか、そう思ったときだった。

『うおおおおおつっ！！！！』

階段のほうから雄叫びが聞こえてきた。  
この声は・・・・・・・・！！

「な、なんですか！？」

「ナオ！」

ナオが別働隊を引き連れてやってきた。この場はなんとか突破でき  
そうだ！ よし、このまま押し込む準備を、

『ぎゃああああつっ！？！！！？』

落ちた。ナオだけが落ちた。あの場で落ちるなんて。なんてドジな  
んだ・・・・・・・・

『ぎゃああああつっ！！！！』

あ、落下地点の女子も巻き込まれた。これは運がいい。ナオには悪  
いけどこの場は突破できそうだ。

「ナオ！ 助けに来てくれて感謝するよ！」

「違う！ 俺も逃げてきた！」

「へっ？」

よく見ると、ナオの後ろの方でも女子の軍団が迫ってきている。口  
しって超ピンチじゃない？

「どうしてこんなことに！？ 進路も退路もないじゃないか！」

「仕方ないだろ！？ 俺じゃ亜矢に勝てなかったんだから！」

ナオSIDE

「直貴。覚悟しなさい？」

万事休すか……！！

て、待てよ。これって試召戦争じゃないし、敵前逃亡ってありかなら………!

「逃げるが勝ち!」

「あ、コラ! ちょ、ちょっと! 敵前逃亡は反則じゃないの!？」

「試召戦争でならな! ルール説明をよく聞いていたのは褒めてやるぜ! 逃げるぞ野郎ども!」

『『『心ッ!!!』』』』

この場は逃亡するのが吉だ!

「みんな! 逃がしちゃダメよ! 一人残らず捕らえなさい!」

『『『はいっ!!!』』』』

げえっ!?! 女子もついて来た!

でも俺は戦闘をこれ以上やれないし、どうしたらいいんだ!

「もついいお前ら! 適当に逃げる!」

『『『心ッ!!!』』』』

そう言ってみんなは階段を駆け下りていった………って

「下に行ったら逃げ場がないだろ! ちょ、待てお前ら!」

ッルッ

「定番だなチクショウってああああああああっ!!!!!」

コロコロコロ

『あ、浅斬っ!?! 俺らより先に逃げるなよ!』

「コレが逃げてるように見えるか!?!」

落ちてるだけだろ、ってあゝあゝあゝ ああっっ!!

「というワケなんだ。な? 色々俺も苦労してるだろ?」  
「でもさ。この場を切り抜けるいい訳にはならないよ?」  
「.....すまん。」

でもどつやってこの場を切り抜けるって言うんだ?

「気にするな! 女子の召喚獣なんかじゃ俺たちは止められない!」

「あつ！ 待つんだ須川君！ 注意するのは女子の召喚獣だけじゃないんだ！」  
「ん？」

須川は目の前に立つ西村先生を見て、立ち止まった。

「ああつ！ て、てつじ  
「教育的指導っ！」  
「ふぐうっ！」

そこに立ち塞がる西村先生は圧倒的な威圧感を放っていた。

『て、鉄人だと！？』

『ヤツを生身で突破しないといけないのか！？』

『バカを言うな！ そんなの無理に決まっているだろ！？』

一撃で須川君を床に沈め、ゆらりと間を詰めてくる西村先生。くっ……このままだと全滅だ！ 後ろからは亜矢たちの集団。この場に逃げ道というものはない！

「吉井に浅斬。やはりキサマらは危険人物だな。今日は特に念入りに指導してやろう。」

西村先生がまた間を詰める。もう全滅を覚悟したときだった。

「吉井に浅斬っ！ 諦めるな！ 悔しくてもこの場は退いて力を蓄えろ！ 今日がダメでも、明日にはチャンスがあるはずだ！」  
「す、須川君！？」

打ち倒された須川が鉄人の足にしがみついてその行く手を阻んだ。

す、須川……お前……！

「吉井たち。お前らはこんなところでやられちゃいけない……  
。鉄人を倒すことができるのは、《観察処分者》であるお前の召喚獣だけなんだから……。だから頼む……。この場は逃げて、生き延びてくれ！」

最後の力を振り絞り、須川が訴えかける。

「須川君！ 無理だよっ！ 皆を見捨てて逃げるなんて、僕にはできない！」

「明久。先に逃げてくれ。俺はここで……」

「な、ナオ？ どうしたの？」

「試獣召喚！」

幾何学模様が浮かび上がり、俺の召喚獣が姿を現した。

「……お前の退路を切り開く！」

「この手は離さねえ……。！ 吉井は俺たちの希望なんだ……！  
俺たちには欠かせないエースなんだ……！」

浅斬に皆、吉井の撤退を援護するんだ！」

「須川。指導の邪魔をするなっ。」

ゴシヤアッ！

須川に容赦のない拳の一撃が叩き込まれた。

アレではもう……

『吉井！ お前は召喚獣で女子を押しつけて走れ！ 向こうの召喚獣は俺たちが意地でも抑える！』

『この場の全員で血路を開く！ お前は振り向かずに駆け抜ける！』  
『死んだ須川会長のためにも、ここは行ってくれ！』

いや、死んでないから！ 須川まだ生きてるから！

「ま、そういうことだ明久。行け。」

「でも……！！」

「早く行け！ 俺たちの希望はお前だけなんだ！」

「……」 ナオ。わかったよ。ここは皆に任せる！ そして僕は必ず生き延びて……目的を果たす！ 行くぞ、モシ試験サ召喚っ！」

明久が召喚獣を出し、退路を塞ぐ女子の人垣に突っ込んでいった。そして、

ゴオオオオオオ！！ メラメラメラ……

燃えた。

「体が！？ 炎の中に全裸で放り込まれたように熱い！ というか痛い！？ がふっ……」

『吉井いいいつ！！』

『バカな！？ 一撃でやられただと！？ 誰の召喚獣だ！？』

明久が痛みのあまり気絶してしまった。

誰がこんな酷いことを！？

「ナオ君、覗きはダメだよ？ それに、吉井君も。」

「ゆ、優……………!!」

優が召喚獣を出して、俺の前に立ち塞がった。

その召喚獣は白装束に杖を持った白魔術師といった風貌だ。

「ナオ君も覚悟してね？」

「ふん！ 優なんか覚悟を決めるほど、俺の心は腐っちゃいない  
！」

「それなら……………これでも食らえっ！ えいっ！」

優はそういうと召喚獣に杖を構えさせた。

なんだ……………?

「『グランド・フレイム 大なるの炎!』」

「うっ!?!」

優が腕輪の発動コードを唱えた。って、いきなりいつ!?

召喚獣の杖先から、廊下を埋め尽くすような火炎の球体が出てきた。  
そして、

『『『ぎゃああああああっ!?!』』』

「うおおおおおっ!?!」

俺らの召喚獣ごと飲み込んで、燃え去った。

っ、強い……………!!

だが、まだ俺には女子を押しつけて逃げることが出来る!  
自分の身が一番)

「じゃあお前たち。」

俺の決意に対して、最後に西村先生が冷たく言い放つ。

「臨時補習室に来てもらおうか。」

この人に抵抗できるほどの気力を、もう俺たちは持っていなかった。

第51話 逃げるが勝ち、逃げちゃダメだ、あなたはどっち派？（後書き）

どうも！ 夏休みの課題が終わらない作者です！

頑張ってるけど終わらない、そんな毎日を過ごしています！

そんなことは置いておいて、今回のお話はどうでしたか？

亜矢と優の召喚獣が初お披露目でしたね。興味なかった？ そんなこと言わないでくださいね。

それではまた次回お会いしましょう！

応援、よろしくお願いします！

## 第52話 旅行の夜はなかなか寝付けない(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 26

・ 亜矢にボロ負け。数学はやっぱ無理 - 2

・ 逃げるが勝ち! + 1

・ ふっ………落下だぜ - 1

・ 須川の決意、無に帰す! + 1

・ 逃げちゃダメだ! と自分を奮い立たせる + 3

・ 優の腕輪………強すぎじゃね? 気力全部持っていかれる

- 3

現在の青春ポイント合計 - 27

## 第52話 旅行の夜はなかなか寝付けない

強化合宿三日目の日誌を書きなさい

土屋康太の日誌

『前略。』 ( 浅斬直貴に続く ) 『

教師のコメント

今度はリレー形式ですか。次から次へと良く思いつくものです。

浅斬直貴の日誌

『優子に大嫌いと言われてしまった。自分のどこがいけなかったのか？ それにずっと考えていると、覗きに集中できなくなってしまう。だがそこで須川の一撃を食らい、そこからの記憶がほとんどない。俺はどうしてしまったのか坂本に聞くと中略。』 ( 坂本雄二の続く ) 『

教師のコメント

優子さんとはAクラスの木下さんのことでしょうか？ 嫌いと言われてしまったことについては残念ですが、仲直りなどはいくらでも出来ますので頑張ってください。ところでなぜ記憶がないのでしょうか？

そこは坂本君が言ってくれるのでしょうか。とても気になります。

#### 坂本雄二の日記

『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺はあわててその手を押さえつけ、思いとどまるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫って妙な雰囲気なっており、ナオは部屋にいなかった。そこで……』 (吉井明久に続く)』

#### 教師のコメント

君たちに一体何があったのですが？ 浅斬君が略した部分がとても気になります。

#### 吉井明久の日記

『後略。』

#### 教師のコメント

ここでその引きはあんまりだと思います。

.....

翌朝。

「うっん…………朝か？」

いや、まだ日が昇りきってない。まだまだ暗いなあ。でももう目が覚めちゃったしな…………顔洗ってくるか。

確か水道は一階の食堂にあったはずだ。

そう思って階段を降りていく。落ちないように細心の注意を払って  
いこう。

ガッ

躓いた。

ゴロゴロゴロ、バキッ

「……………っ！痛い……………！」

まだ皆寝てる時刻のはず。ここで大声を出すのは迷惑だ……………  
！ 痛みを極限までこらえ、食堂に向かう。  
そこには、ちよっと思いがけない人物がいた。

「アレ？ ナオ。」

「……優子？」

髪を下ろした優子が顔を洗っていた。

なんというか………雰囲気違って見えて新鮮味があるな。

「こんな朝早くどうしたの？」

「昨日のことがあってうまく寝付けなかったんだ。」

結局、昨日は鬼の補習（+ 亜矢の拷問）を受け、夜戻ってきた俺たち。

補習はすぐに終わったのに、亜矢の拷問がそこから始まったものだから、俺の体力はほとんど底をついた。

寝覚めだって最悪だ。

「だって、アンタが覗きなんて真似するからでしょ？ 少しは亜矢さんの身にもなったら？」

「それにしても限度があるだろ。やりすぎだよ。」

「あら？ アンタにはそれくらいで丁度いいんじゃないの？」

「お前も自分でやられてみれば、俺の苦しみがわかるはずだ。」

拷問なんてしたくないけど。

「まったく………なんで覗きなんて真似するのかしら？ 理解できないわ………」

「俺もだよ。正直、なんで手伝ってるのかわからない。」

「なに言ってるの？ 自分も覗く側の人間のくせに。」

それもそうだな。何言ってるんだら俺。

「ま、男には譲れないものがあるってことさ。」

「？なにそれ？」

「大丈夫。俺は別に誰の裸見たって興奮なんかしないよ。というか見る気もないけど……………」

俺は突破した後は別に女子風呂を覗こうとは考えていない。  
だって、覗いた後が怖いからね（優子とか亜矢とか）

「な、なによそれ？ 女の子の裸見て興奮しない男子はいないですよ？」

んむ？ なんか別の所に食いついたぞ？

「いや。俺は別に……………」

「私のも？」

「へっ？」

「私のも興奮しないのかって聞いているの！」

「……………はあ？」

何の話だ？ 優子のも興奮しない？ それって、どういうこと？

「私の裸を見ても興奮しないのかって言ったの！ 恥ずかしいから何度も言わせないでよね……………」

「え？ うーん……………」

優子の裸……………ねえ？

「ちよ、ちよっと。あんまり見ないですよ……………」

「あ、ごめん。」

考えたことなかった。

そりゃドキドキする場面とかあったけど、いきなり裸とか言われても想像つかないな……でも優子は可愛いし、好きだ。好きな子の裸見て興奮しない訳ないだろう。

「凄く興奮すると思うぞ？ お前のなら。」

「！？ ば、バカ！ そ、そういう……は、恥ずかしいことサラツと言わないでよ！」

「え？ あ、ああ。ごめん。」

「もうっ……」

どうしたんだろう？ いつもの調子じゃないような……？

「じゃ、じゃあ私はこの辺で帰るわね……」

「おう。またな。」

優子はそう言っただけで自分の部屋に帰っていった。

さて、俺も顔を洗ってさっさと帰るか……

『……まったく！ あの豚どもの所為でまたお姉さまのベストショットを撮り逃しちゃったじゃないですか！』

ん？ なんだこの声……？

『それにしてもまたお姉さまのペタンコを狙ってくるのでしょうか？ それなら何か武器を見繕わなければいけませんね……』

『

この声は確かドリル頭……だっけ？ 今確かにベストショットがどうか言ってたな。

……これは調べる価値ありだぜ。

部屋に戻ってこのことをムツツリー二辺りに話せば、犯人の尻尾がつかめるかもな。

そう思っただ俺は自室に戻ってきた。きたはいいが……

「やめるのじゃ明久！ 花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ！」

「殴る！ コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

「なんだ！？ 帰ってきたと思っただら明久が坂本に花瓶を叩きつけようとしてるぞ！？」

一体どういう状況！？

「あ、明久！ とりあえず落ち着けて。な？」

「無理！」

「即答！？ 一体コイツになにがあった！？」

明久を止めようと腕を押さえつけるが、思った以上に力が強い。くっ………！ 最近すっかりと食事をしてカロリーが摂れているからか………！？

ガチャッ

「おいお前ら！ 起床時間だ ぞ………？」

「死ね雄二！ 死んで詫びるんだ！ あるいは法廷に出頭するんだ！」

「なんだ！？ 朝からいきなり明久がキまっているぞ！？ 持病か

!？」

「明久！　ここで坂本を殺れば、法廷に出頭するのはお前になるぞ！」

「ええい落ち着くのじゃ明久！　西村先生、すまぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

「……お前らは朝から何をやっているんだ。」

結局この騒動のおかげで清水のことすら忘れてしまった俺だった。

「雄二。そういえば昨日妙なこといわれたよ。」

「ん？　なんだ？」

寝起きのゴタゴタも終わり、現在時刻は朝食中。

明久は坂本にある質問をしていた。

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つからないカメラが一台残っている』って。」

「なんだと？」

「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やっぱり彼女が犯人じゃないかな？」

「あ。犯人といえなさ。朝こんなことがあったんだけど……」

俺は朝にあった清水の台詞を伝えた。

「そんなことがあったのか？ そうなると清水ってヤツもターゲットにする必要があるな。」

「……ベストショット。」

「ムツツリーニ。どうして鼻を押さえているの？ まさか想像だけで鼻血が出たとか？」

「……俺はエロになんて興味がない。」

「ムツツリーニ。嘘は吐けるものにしような？」

その台詞はお前の存在自体を否定するようなものだぞ。

「たとえ清水が犯人の可能性があっても、それを裏付ける証拠がないとダメだ。それには……」

坂本が口を開く。方法は一つしかない。

「……確認するしかない。」

「やっぱりそれしかないか……」

「見つけたい気持ちはわかるがチャンスは一度しかないぞ？ 見つけられなかったら最後。明久はネットアイドルに、坂本はA代表とのバージンロードを音速で駆け抜けることになるぞ。」

「うーん……手詰まりだね。」

「だが、工藤の情報はありがたいぞ。」

工藤の情報……っていうと脱衣場にカメラが残ってることか？

「それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子も確認できるからな。」

「……隠し場所なら5秒で見つける自信がある。」

正直、その一言はギリギリアウトだと思う。

「けど、そんなカメラが本当にあるのかも怪しいよ？」

「それは違うと思うぞ明久。盗撮や盗聴に長けている人物なら、カメラや盗聴器がド素人に見つかるような真似はしないはずだ。そうになるとカメラの仕掛け方は」

「……二段構え。」

そうだ。最初に見つかったカメラは罠。油断させておいて本命のカメラで撮影しようって魂胆だろう。

用意周到にも程がある。

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを撮りにいけば解決ってことだね。」

「ああ、そうか。その手があったか。」

それならわざわざ危険を冒してまで覗きをする必要はないな。

「だったら早速回収に行けば」

「……それは無理。」

「え？　なんで？」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・時間外だと脱衣場は嚴重に施錠されている。」

脱衣場に鍵？　初日のカメラの所為か。

なんか今までの行動が全部裏目に出ている気がするな・・・・・・・・

「諦めて今までどおりの方法を貫けてことか・・・・・・・・」  
「そのようじゃな。」

結局、あの包囲網を突破しないことには何も始まらないようだな。

「昨日の敗因は相手の戦力が俺たち以上に大幅に増強されていたことだ。そこで、こちらも更なる戦力の増強をしようと思う。Fだけでなく、他のクラスにもだ。」

「それはAも、Bも、Cも同様に覗きに誘うってことか？」

「まあそういうことだ。それに人数を増やせば、俺たちの保身にもなるしな。」

「僕らの身を守る？　誰から？」

「いいか？　今のところは未遂で終わっているから大した問題になっていないが、覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂に至ったとしても、例の真犯人が発見できなければ俺たちは処分を受けることになる。」

ああ、なるほど。それが一番の問題だな。

「そこで人数を増やして特定を難しくする。向こうだって戦いながらその場にいる全員の顔を覚えるのは厳しいだろうからな。」

なるほど。覗き仲間を増やしておけば、中途半端に俺らだけを処罰

することはできないってことか。文月学園は世界中から注目を集めているぶん、それだけバッシングも受けやすい。そんな状態で俺たちだけを処分したら、出来の良い生徒だけを鼻負してるといった批判を受けることになるだろう。それは学園側としては絶対に避けたい事態の筈だ。

「なるほど。流石は雄二。卑怯なことを考えさせたら右に出る人はいないね。」

「知略に富んできると言え。」

そうなると思う人数が必要になるな。女子風呂突破への重要なキ―にもなるし、多くの人数を集めておきたいところだな。

「じゃあ、まずはAクラスの説得からいくか。同じ手間なら早い方がいいだろうし。」

「Aクラスなら昨日の合同授業もあるしのう。話しやすいじゃろうて。」

「決まりだな。合同授業の間にAクラスと話をするぞ。」

「了解。ムツツリー二もそれでいいよね?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・問題ない。」

ということで、俺らはAクラスの説得に入ることが決定したのだった。

## 第52話 旅行の夜はなかなか寝付けない(後書き)

どうも！ 三日月です！

宿題が終わり、次は修学旅行の季節になりました！

学校は私にこの小説の更新をさせたくないのでしょうか？ ムカつくくらいイベントが山積みです！

でも、めげずに更新をしていきたいと思えます！

次の話もこの後すぐに投稿したいと思えますので、皆さん見てくださーいね！

これからも応援よろしくお願いします！

第53話 ニュータイプって、直訳すると新しい型って意味だよな？（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 27

・まあまあ爽やかな朝 + 2

・優子に会う 髪型がちよっと違ってていつもと違う雰囲気 + 3

・清水の怪しい声……犯人発見に近づいたぜ + 2

・朝っぱらから明久がキまっている…… - 1

・覗き仲間を増やそう！ + 2

現在の青春ポイント合計 - 19

第53話 ニュータイプって、直訳すると新しい型って意味だよな？

覗き仲間を増やすため、俺らはAクラスに説得を持ちかけるとい  
作戦をとることを考えた。

「とうわけで明久。Aクラスの説得にいつてくれ。」

「うむ。明久ならば適任じゃな。」

「……………頼んだ。」

「お前なら、きっとやれるさ。」

Aクラスの説得に明久が選出された。

「あ、うん。別にいいけどさ、どうして僕なの？」

その理由は簡単だ。簡単だが……………

「……………」

理由が理由なだけに、口に出せない俺たちだった。

気まずい空気になってしまった俺たちは視線を逸らす。

「あ、あのさ。なんだか凄く嫌な感じがするんだけど……………  
大丈夫だよな？」

「そ、そうじゃな。一応、久保はおぬしに悪意を抱いてはおらんと  
断言できる。」

「秀吉の言つとおりだ。俺らは色々と問題を起こしているから、久  
保にはあまり好かれていないんだよ。」

「それだつたら僕も一緒になつて問題起こしてるから、あまり関係ないんじゃないかな？」

「……彼に悪気はない。」

「なんで皆してそんなに奥歯にものがはさまつたような言い方をするの？ 淒く行きたくなくなつてきたんだけど……」

だからといってこの場で久保の説得に成功しそうなヤツはいない。彼は女子風呂の覗きになんて、きつと興味はないのだから。だからこそ、明久に行つてもらつししか希望がないんだ。

「明久、早く行つてこい。」

「え？ 雄二、でも……」

「大丈夫だ。この中ではお前が一番久保に好かれている。」

それはきつと、異性？ としてだろう。

「自分に自信を持って。お前ならやれる。」

「あ、うん。」

「……ただし、いざという時はコレを使え。」

坂本が明久のポケットにあるものを押し込む。明久はそれを確認した。

スタンガン（二十万ボルト）

「どうして同じ学校の生徒にお願いをしに行くだけでスタンガンを持たされるの？」

「明久。ちよつと心配だ。俺もついて行ってやる。」

「ナオがついてきたいほど心配なことがあるの!? 余計に怖いよ！」

「大丈夫だ明久。何があってもお前が俺を守る。」

「どっかの映画みたいな台詞言わないでよ!? 言っておくけどそれ死亡フラグだからね!？」

「お前たち、早く行け。」

すみません。ちょっと調子乗りました。

「そ、それじゃ、行ってくるね。」

俺たちは久保のいるところへと向かう。

流石に学年次席だけあって、久保は参考書を片手に真面目に勉強していた。本当にこんな頭の良さそうなヤツが明久のことを……

「あのさ、久保君。ちょっといい？」

「吉井君に……浅斬か。僕に用なんて珍しいね。とりあえず座ったらどうだい？」

そう言っただけで久保は自分の横にわざわざスペースを空けた。

……一人がけの椅子に三人で座るのは不可能に近いぞ？

「それじゃ、こっちの空いている椅子を使わせてもらおうよ。」

「俺はいいや。用件はすぐに終わるし。」

「そうか。まあ、キミがそうしたいのであればそれでも良いが。」

「ところで、お願いがあるんだけど」

「引き受けよう。」

「実は　　って早っ!」

やばい。久保が軽く理性失いかけている。

「いや、すまない。少し冷静さを失っていた。話を聞かせてもらえるかな？」

「あ、うん。実はその……」

「遠慮なく言ってくれ。」

久保は真摯な態度で明久に接する。

「……裏の顔が見えてなかったらとても良いヤツのはずなのに。あの情報を見てしまつてから、もうまともな目でコイツを見ることは出来ないのかもしれない。」

「その……女子風呂を覗くのを手伝つて欲しいんだ！」

「断る。」

「やっぱ即答か……」

なんとなく予想はしていたが……やはり協力してはくれなかったか。

明久の力でもダメなんだ。この後の説得もうまくいかないだろう。

「女子風呂を覗く？ キミたちは本気でそんなことを言っているのかい？」

「う……。そ、それにはワケがあつて……」

「見損なつたよ吉井君。人の集まりにはルールがあり、それを守ることで社会が形成される。だから、人として間違つたことをしようとするキミは社会に不適合な人物だと言える。もうすぐ社会に出ようというのにそんなことでもいいのかい？ そもそも、入浴中の女子の身体を見ようという考え自体が不潔だよ。」

完璧な理論武装。この壁を崩せるヤツはいないだろう。

久保はそのまま不機嫌そうに鼻を鳴らすと参考書に没頭し始めてしまった。こつちの言葉に耳を貸してくれそうもないし、これ以上の交渉は不可能だといえるだろう。

「明久。諦めて戻ろうか。」

「そうだね……。邪魔してゴメンね久保君。それじゃ、僕はこれで。」

「あーあ。これに協力してくれれば明久の好感度が上がったのになあ。」

わざと久保に聞こえるような声で言う。

少しでも反応を示してくれれば、後にも覗きに参加してくれるだろう。

「っ！……………人として間違ったこと、か……………」

よし。ある程度の反応を示してくれた。

後は久保の気持ちの整理を待つだけだな……………

「明久。どうだった？」

「ごめん。失敗だったよ。」

「いや、そんな危ないことはしてないんだけど。」

いや、正直に言うと試召戦争での宣戦布告より危ない交渉だと思う。

「そうなる则他のクラスの交渉を迅速に進める必要があるな。」

「それはそうだけど、今は一応授業中だよ？」

「それはわかっている。だが、全クラスに声をかけるとなると休み時間程度では全然足りないからな。なんとしても抜け出すしかない。」

「  
西村先生に目をつけられたら、うまくいくものもいなくなってしまう。  
なんとしても見つかるわけにはいかないだろう。」

「じゃあ、俺は一緒に行かない方が良いな。あまり大人数で動くと見つかりやすいし。」

「それもそうだな。じゃあナオはここに残って、鉄人に気を取られないようにしてくれ。」

「おう。頑張るよ。」

そういつて皆は静かに教室を出て行った。よし、西村先生には気付かれていないようだ。この調子で行こう。だが、やはりそう巧くいくものではなかった。

「アレ？ 直貴、坂本君たちは？」

亜矢が話しかけてきやがった。

くっ………！ 妙に鋭いな………

「トイレに行くとか言ってたな。」

「秀吉さんもないけど、皆で行ったの？ 女の子なのに。」

「亜矢。秀吉は男だ。次にそんなこと言ってみる。俺が」

「言ったら直貴が私になにをするの？」

「えと………俺がだな………」

やべ。咄嗟に言ったから何も考えてなかった。  
うーんと………これならいいだろ。

「俺とお前が付き合ってた頃の恥ずかしい秘密を全部バラす。」

ピシッ

あ。ヤバ。そういえばコイツらにまだ俺と亜矢が昔付き合ってたこと言っただけじゃなかった。

空気が、冷たくなっていた。

『（爆発しろ）』

「え〜？ 別に言われても困らないよ？」

『（焼け死ぬ）』

自分で自分の首を絞めるとは、このことを言うんだらうか。

「くっ……えと、じゃあ……」

「乱暴する？」

「しねえよ!? 断じて！ だだだ、誰がお前なんかこそそそ、そんなこと！」

「あゝ動揺してる。かつわいい〜！」

『（被爆しろ）』

付き合ってるときだってそんなことしなかったぞ……  
あゝもうやだ！ 亜矢と絡んでると調子が出ない！

「もうどっか行け！ こっちに来るな！」

「え〜？ 冷たい〜。」

『（亜矢さんに近づくなこの下郎）』

「冷たくて良いから自分のところに戻れ。」

「……わかったわよ〜……」

「……ちょっと言い過ぎたかな……？  
いや、亜矢だし別にいいや。そんなことよりも……」

「あつさぎつりくうくん？ 覚悟はいいかな？」

「亜矢さんの先ほどの話……詳しく聞かせてもらおうか  
あゝ！」

「焼殺爆殺刺殺絞殺溺殺抹殺瞬殺滅殺……ケタケタケタ……  
……！」

「お前ら……過去に捕われているようだ  
新しい恋も出来ないぞ？」

「とりあえずこの場を収めようとする俺。ここで目立つのは相当マズ  
イ。」

「これの所為で明久たちがいなくなったのがバレたら余計に困るし。」

「なんだと？ それはキサマがそのようにして女子を誑たぶらかすから我  
々に巡ってこんのだ！」

「『そうだそうだ！』」

「あ、そういうえは最近の雑誌には物静かで、優しい男性がモテると  
書いてあったな。」

「『……』」 (静かになって上を向くF  
クラスの面子)

「あ、肩に糸くずがついてるぜ？ 取ってやるよ。」

「そういうお前にもついてるぜ？ 取ってやるよ。」

「単純なヤツら……」

「ガシィッ」

不意に肩を掴まれる。誰だよ……（クルッ）

「……………ねえ……………ナオ？　ちよつといいかしら？」

優子が凄<sup>レ</sup>い笑顔で立っていた。……………なんで？

「優子？　あのさ、痛いからちよつと腕、放してくれないか？」

「ナオつて、亜矢さんの彼氏だったの？　そこのところ詳しく教えてくれないかしら？」

「うん。わかつたけどさ。腕、放してくれないか？」

「どこまでいったの？　A？　B？　C？」

「だから腕を放せつて言つてんだよお！　血色がだんだん悪くなつてきてるのが見えないの！？　ちなみにAもBもCも全部未体験だ！」

だんだん色が薄黒くなつてきたいる……………！　血がいつてない……………！

腕を開放してくれと言つた俺とは正反対に、優子の腕を絞める力が強くなつていった。

「怒つてんの？　怒つてんのか？　だったら何で俺なんだよお！！

やられる俺の身にもなつてみる！　優子のバカっ！」

「…………………………」

……………ん？　動きが止まった？

優子は一瞬動きを止めた。俺が悪くないことをわかつてくれたのか……………？



はっ!?!? . . . . .これはもしや . . . . .  
俺は。今、一番考えたくない、最悪な答えを導き出した。

これは、俗にいう振られたって状況か . . . . .?  
. . . . .?

第53話 ニュータイプって、直訳すると新しい型って意味だよな？（後書き）

どうも。三日月です！

ナオに波乱の予感……どうなるのでしょうか？

これからが強化合宿本番！ 今までのウォーミングアップだと思  
ってください！

感想お待ちしております！

第54話 ストレスは溜めずに発散しよう！（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 19

・久保に覗きの話を持ちかけ、失敗 - 1

・亜矢にからかわれる - 1

・優子に今月最高の一撃を食らう - 3

・優子に「ダイキライ」と言われる - 5

現在の青春ポイント合計 - 28

## 第54話 ストレスは溜めずに発散しよう！

「結局、手を貸してくれたのはD・Eクラスだけじゃったな。」

「仕方ないだろう。Bクラスは代表が代表なだけにまとまりがないし、Cクラスは代表が小山だしな。男子連中がしり込みするのも無理はない。」

「けど、D・Eクラスが協力してくれるだけでも昨日より状況が良くなったよ。」

「まあそうじゃな。女子側とて入浴の為に半数しか出てこられんじやろうし、教師を抑えることが出来ればなんとかなるじやろ。問題なのは……………」

……………俺は灰だ……………

「この、灰のようになったナオを戻さんことにはなにも始まらんじやろう。」

「そうだね。でも、僕らがいない間に一体何があっただらうね？物凄く暗いし……………」

「困ったな……………ナオは突破力があるから今回の作戦に不可欠なんだが。」

「ふふふふ……………」

どこがいけなかった？ 言い方か？ それともあのバカって言ったところか？ ああ。心当たりが多すぎてどれがどれだかわかんなくなってきた……………

……………今回は、無理かもしれない。」

「康太。そんなこと言うなよ？ 俺もついでるからさ。」

「アレ？ 水樹君いたんだ？」

「……………俺の扱いつて酷くない？」

うあくもう寝る……………二度と起きない……………

「ああっ！ ナオが布団を取り出して完璧に寝る体勢になった!？」

「引つpegがせ……………! くっ! 接着剤でくつついてるみたいになつてるぞ!？」

「あく。直貴の完全引きこもりモードだな。」

「なにそれ、水樹君？」

「極度のストレスが溜まると布団からしばらく出てこなくなるとい  
う、直貴の子供みたいな特徴だ。」

「……………なにそれ？」

「まあ、余程のことがないとこんな状態にはならないけどな。一体  
何があつたんだ？」

好き勝手なこと言いやがつて……………!

俺は……………俺は悪くないんだ!!

「ちよ、ナオ!？ どこに行くの!？」

俺が布団から飛び出て出口の取っ手に手をかけたときだった。

ガッ

「ガフツ!？」

扉が急に開いて、鼻筋に強烈な一撃をくらった。

痛い……………!

「あれ？ 浅斬か？ すまない、今は一大事なんだ。あとで謝る。」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

須川が飛び込んできた。

コイツは人に痛み背負わせておいて謝りもしないのか・・・・・・・・!!

「須川君、どうしたの？ 作戦開始まではあと少し時間があるはずだけ。」

「やられた！ 大食堂で敵が待ち伏せをしていたんだ！ 今は戦力が分断されて各階に散り散りになっている！」

「なんだって!?!」

この野郎・・・・・・・・!! 俺の話も聞かないで勝手に話を進めやがって・・・・・・・・!!

「・・・・・・・・ん？ 須川!?! 危ない！」

「ん？ どうした水樹 がふっ!?!」

ドサッ

その場に沈黙が流れる。

「な、ナオ!?! 何でいきなり須川君を気絶させたの!?!」

「・・・・・・・・み・ごろ・しだ・・・・・・・・」

「え?」

もう、俺はこのイライラを止められない!

「皆殺しじゃああああっ!!」

「「「はああああああっ!?!」「」」

「バン！」

俺は扉を蹴破って外に走り出したのだった………!

明久SIDE

「ナオ、どうしちゃったんだろう………?」

アレはちょっと、いや、かなりマズいんじゃないかな?

「ああ。ちょっとあれは異常だったな………」  
「あれは余程心に傷を負っているように見えるぞい。」

雄二や秀吉の言ったとおり、あれはナオの普段とる行動からは想像もできない。一体彼に何が起こったんだろうか? またFFF団に何かやられたのかな?

「ヤバイな………」

「ん? どうしたの水樹君? 確かにあれは見た目的にもヤバかつ

たと思うけど……」

水樹君は真剣な顔をして、一言一言話していく。余程のことがあるんだろう。しつかり聞いておいた方が良いかな？

「直貴は極度のストレスや外的要因が加わると、手がつけられなくなる。基本的にはしない暴力のリミッターが完全に外れるんだ。」

「ええっと、それはつまり……」

基本的には暴力を振るわないナオが、それをするってことだから……

「暴れん坊になる？」

「表現が生易しい。一言で言うと、昔の直貴のようになる。」

「昔のナオ？ それってどんなの？」

昔のナオ？ 言われたこともないし、聞いたこともないな……

「直貴から聞いたことないのか？ 結構有名なはずなんだが……」

「いや、ないな。何かやらかしたのか？」

雄二が確信に迫る。ああ、そういう感じなのかな？ てつきり僕的にはどこかの大会で優勝したとか、そんなもんだと思ってた。

「直貴は昔、複数の不良グループを暴力でねじ伏せた実歴があるんだ。そのときのような状態になると思う。」

「……その話は本当か？」

「ナオに限ってそんなことするなんて……思わなかった。」

ナオってそんなことしてたんだ……。今度から言葉遣い気をつけようかな？

「多分、本気を出せば西村先生と良い勝負できるんじゃないか？

というくらいのだ。でも、本気を出すと理性の枷がなくなるから、暴力に加減が出来なくなる。多分それは召喚獣にも言えることだ。」

「諸刃の剣だな。その状態で外に出たつてことは……。」

「その状態で外に出たつてことは……。」

「わからないのか？ お前は。」

「えと、手加減ができないから、戦死者が増えるだろるね。……」

「……あれ？」

「そうだ。多分、敵味方関係なく戦闘を開始して、相手を襲い始めるだろう。」

それってかなりまずい状態なんじゃない？ だって、そんなことしたら僕らの味方が全員やられちゃうよ。

「だが、これを利用すれば女子風呂の覗きに一步近づくぞ。」

「え？ どうして？ 味方がやられちゃうかもしれないだよ？」

「味方がやられても、敵がいなくなれば俺たちの目的は達成されたようなものだ。しかも鉄人と渡り合える能力を持っているなら、お前をワザワザ使わなくても良いだろう。」

「それはそうだけど……。」

雄二はあくどいなあ……。ナオの身体の心配というものをしないのかな？

とにかく、ナオ、大丈夫かな……？

『おおつ！ 浅斬！ 来てくれたのか！？』  
『こつちは布施先生で手一杯だ！ 女子も何とかしてくれ！』  
『皆！ 浅斬が応援に来てくれたぞ！ もう一踏ん張りだ！』  
『『『応っ！』』』』

こんなヤツら……………

「試獣<sup>サモン</sup>召喚……………！」

『あ、浅斬君が来たわよっ！ 皆、今取り掛かっている相手は捨てて、浅斬君に集中攻撃よ！』

『『『了解っ！』』』』

女子が一斉に俺を取り囲んできた。……………良い度胸じゃねえか。

『『『うりゃああああっ！』』』』

ガキイン！

「……………遅えんだよ。」

『『『え？ きゃ、きゃあっ！』『』』』

ズバン！

俺の召喚獣は目にも止まらぬ速さで女子の召喚獣を斬り捨てた。

『Fクラス 浅斬直貴 VS D・Eクラス 女子数十名  
化学 764点 VS 平均242点  
』

『な、700点オーバー！？ そんなの勝てるわけないじゃない！』

『流石だな浅斬！ その調子で俺らのことも助けて  
』

「剣ノ舞。」

『え？ ちよ、浅斬？ それ腕輪の特殊能力の  
ぎゃああああ  
っ！？』

『ぎいええええっ！！』

『うおおおおっ！！』

俺は間髪いれずにFクラスの面子ごと、腕輪の能力で布施先生の召喚獣に刀を飛ばした。

「あ、浅斬君……仲間を犠牲にしてまで覗きを成功させた  
いんですか……?」

『浅斬い!? お前はなんで俺らまで巻き込んでんだよ!』

『そつだぞ!? もうちよっと周りを ごげぶつ!?』

『ぐぶつ!?』

『はあ!?』

ドサドサドサッ

「……あ? 何か言ったか?」

『……』 (土下座)

『……』 (土下座)

『……』 (土下座)

「あ、コラ! 待ちなさい!」

布施先生の声すらも、耳に届かない。次は下だな……!!

「うわぁ・・・・・・・・これは酷いね。」

「台風の後だな、こりゃあ。」

僕らは先ほどまでナオがいたと思われるフロアに来ていた。そこではFクラスの男子の何人かが中央で倒れていて、数十名が部屋の隅に固まっていた。

『なんだアイツ・・・・・・・・人間じゃねえ・・・・・・・・！』

『極悪非道だ・・・・・・・・！』

『福村が、福村が意識をもどさねえよう・・・・・・・・』

な、何があつたんだろう？ 聞くのすら怖い。

「お前たち、一体ここで何があつた？」

『あ、浅斬が！ここに倒れたいるヤツらをボッコボコに・・・・・・・・』

『・・・・・・・・！』

「それは何時のことだ？」

『丁度今さっきだが・・・・・・・・あれは手をつけられたモンじゃないぜ・・・・・・・・』

余程の恐怖を植えつけられたのか、話してる最中も小刻みに震えている。

うーん、ちょっと怖くなってきたなあ・・・・・・・・



だ)  
すると奥の方からまた、

『ぎゃああああっ!!』

という悲鳴が聞こえてきた。

「また誰かやられたのか？」

「いや、待って雄二。この声……ナオじゃない？」

どこかで聞いたことある声だと思ったら、それはナオが階段から落下した悲鳴だった。というか、この状況で落ちるとは……ナオのドジは暴力的になっても健在だね。

「雄二、打ち所が悪かったみたいだ。気絶してる。」

「本当だな。ここまで無傷だったのは奇跡に近いが、味方もほとんどやられているしな……」

気絶しているナオを抱き起こし、壁に立てかける雄二。……見た感じ、戦争で死んじゃった人みたいだ。ピクリともしない。

「さて、本番はここからだ。行くぞ！ 明久！」

「って、ええっ!? 今は僕らしかいないよ!? この状況でどうやって先に進むって言うのさ!？」

雄二、遂にトチ狂ったか!？」

「言っておくがな明久。俺たちは面が割れているんだ。どうせここから行かなくとも、後で名指して呼び出し食らって補習行きだ。どうせならやるだけやって終わらせた方が良いだろ？」

「あ、確かにそうだね。」

確かに面が割れているなら放送で呼び出される可能性もある。それだったら今、敵が少なくなっているこの状況で戦ってみれば、女子風呂まで辿り着く可能性がないわけじゃない。

「そうと決まれば急ぐぞ、明久！ 俺らの桃源郷ヴァルハラが待ってるぞ！」  
「そうだね雄二！」

うおおおおつ！！

僕らは同時に走り出し、階段に続く曲がり角を曲がった瞬間だった。

「覗きの加担者は補習う！」

「ぐげぶつ！？」「」

待っていたのは、鉄人の太い腕だった。

「お前らは今日も懲りずに来たようだな。よろしい、今日はたっぷり可愛がつてやる……………！」

この後の展開は、想像しなくてもわかるだろう。

俺は目が覚めると、なぜか補習室にいた。

自分が何をしていたのか、どうしていたのかは全く覚えていない。覚えていたのは階段から落ちて、その後には後頭部を強打したところだけだ。

なのになぜか……

『……………!』

『……………!』

『……………!』

補習室にいる皆は、俺に熱い視線を送ってきている。(特に福村など)

……………なぜに？

「ナオ、覚えてないの？ 階段から落ちる前は凄いことしてたんだから。」

「ああ。鉄人がいるところまで生きてて欲しかったくらいだ。そしてこんな補習に付き合うことにはならなかったはずなのに……………」

本当に、俺が気絶する前は何があったんだ？

「お前たちい！ 次はこの文を書け！ これを終えたものから帰って良いぞ！」

「西村先生、終わりました。」  
『『『早っ!?!?』』』

俺は英文を書き終わると、さっさと補習室から出ていった。

『お前たち、読んでみる。』

『『『We want still to continue p  
eeping!?!?』』』 (僕はまだ覗きを続けたいです!?!)

『なぜ貴様らはそういうときだけ英文が書けるんだ!』

『『『ぎゃあああああっ!?!?』』』

バカなヤツら………終われば早めに帰れるのに。

俺は絶対に落ちないように、最善の注意を払いながら階段を昇った。  
また落ちて気絶とか洒落にならないからな………

俺はやっとのことで階段を昇りきり、自室に向かっていった。

そこで俺は自室の前で、今一番会いたくない人を見つけた。

「ゆ、優子………!」

優子はしきりに扉をノックして、中に声をかけている。ど、どうしよう………! さっきのこともあるけど、今は部屋に戻ってゆっくりしたいし………!

俺は今、人生で一番の………ええと、何かをどうにかしようとしている!(たとえば思いつかない)

声をかけるか否か悩んでいると、優子は人が部屋にいないので諦めたのかその場を後にしようとしていた。俺はそのとき、一瞬だが優子が悲しそうな顔をしているのを見てしまった。

・・・・・・・・その顔を見たとき、俺は自然と声を出していた。

「優子。」

「!?!?・・・・・・・・な、ナオ・・・・・・・・?」

優子は最初誰もいないと思っていたのか、酷く驚いていた。そんなことを今考えてよかったのか、それは酷く愛おしく見えた。

「どうしたんだ、こんな時間に?」

「ちよ、ちよつとお散歩に・・・・・・・・」

「嘘吐け。さっきまで俺たちの部屋をノックしてだろ?」

「う・・・・・・・・」

言葉に詰まる優子。きつと見られていたことに気付いてないんだろ。俺が核心に迫ると、聞いてもいないのにドンドン喋って言った。

「べ、別にさっきはナオにちょっとやりすぎちゃったかなって、怪我してたらアタシの所為になるし、その辺も踏まえてここに来たの! 別に心配だったとか、そういうのじゃなくて・・・・・・・・!」

「そうか。心配してくれたのか。ありがとう。」

「だ、だからそうじゃなくて・・・・・・・・! もっつ!」

こういうのってツンデレって言うのか?

なんだ、結構グツと来るな・・・・・・・・

「じゃあな。散歩に来ただけなんだろう? 俺は部屋に戻るから。」

「あ・・・・・・・・」

別に嫌われてるんだ。これ以上深く関わる必要もないだろう。

俺は部屋の扉に手をかけた。

「ま、待って……………」

そうすると、優子が俺の服の裾を摘んできた。

「少しぐらい、まだ話さない？」

「えっ？……………えーと、別に良いけど。」

話？ 何だろ？

「じゃあ、ごっち……………」

俺は優子に引っ張られるがまま、ついていったのだった。

第54話 ストレスは溜めずに発散しよう！（後書き）

どうも三日月ですっ！

ただいま修学旅行中ですが、予約投稿で行なっています。

次に投稿するのは帰ってきてからなので、楽しみにしてください！

以上、三日月でしたっ！

**第55話 恋愛の当事者は皆鈍感だ（前書き）**

前回の青春ポイント合計 - 28

・暴走モード突入 - 2

・落下により、暴走モード終了 - 2

・ツンデレ優子 + 3

・優子との会話 + 2

現在の青春ポイント合計 - 27

## 第55話 恋愛の当事者は皆鈍感だ

明久SIDE

「全く、鉄人の補習には困ったものだね。正座が板についちゃったよ。」

「俺もだぜ。畜生……足が痺れた。」

僕と雄二は鉄人の鬼の補習を終え、自室に戻ってきていた。

ナオの暴走からは数時間ほど経ち、もう夜遅くといった時間帯になるうとしている。

「それにしても覗きが出来た日が明日だけになっちゃったね。このままだと僕らは犯人を捕まえるどころか、覗き犯としての汚名を背負わされる目に……」

「バカかお前は。そうならないためにも、覗きを成功させるんだろうが。ビビってどうする。」

確かに雄二の言うとおりだ。だけどそう上手くいものではないところ最近でわかってきているのも事実だ。突破にはこれまで以上の力が必要だろう。……ん？ 力？

「そういえばさっきまで暴走してたナオは？ 補習は先に終わってたからもう戻ってきてると思ってたんだけど……？」

「確かにいないな。ま、どうせトイレにでも……おっ。帰ってきたか。」

ドアが開かれ、ナオが部屋に入ってきた。雄二の言うとおり、トイレだったかもしれない。

「ただいま……」

「？ どうしたの？ 随分と暗いね。」

「いや。暗いというかなんというか……まあ、そこまでたいたことじゃないさ。ちょっと疲れただけ。」

「たいしたことじゃない？ ……お腹でも壊したんだろうか？」

「夕飯の食べすぎは良くないよ、ナオ？ ちゃんと腹八分目に抑えないと。」

「明久。お前が何を考えてるかは知らんが、その考えは絶対にハズレだ。」

「え？ そう？」

「じゃあ何が原因なんだろう……？」

ナオSIDE

「少しぐらい、まだ話さない？」

「えっ？ ……えーと、別に良いけど。」

俺は鬼の補習（自分的には全然楽）を早々に終え、自室に戻ろうとしている所だった。そんなときに優子の姿を見つけ、声をかけた。

「じゃあ、こっちに来て……………」

優子に引っ張られ、ソファに座る俺と優子。二人がけで隣り合って座るような形だ。

嬉しさと気恥ずかしさが入り混じったような、奇妙な感覚に陥った。

「……………」

……………何で話そうって言ったのに黙るんだろう。恥ずかしい。

……………何か会話をしなくちゃ……………

「あのさ（ね……………」

声が、ハモってしまった。そこから更なる気まずさが二人を襲った。

「え、えーと。優子から、どうぞ?」

「な、ナオからで良いわよ?」

「そ、そうか。じゃあ、えーと……」

そこからふと考えた。

あれ? 別に聞きたいこととか何もねえや。

「ゆ、優子。えと。お前はさ……」

「な、なあに……?」

うっ……!?!? か、可愛い……!!

本能的にそう思ってしまった。

おかげで何て言ったらいいか忘れてしまった。

「優子は、さ……」

「うん。」

今はこの場には変な雰囲気漂ってる。いつ余計なことを口走るかわからない。

出来る限り、変なことは聞かないようにしよう。

「納豆にネギは入れる派? 入れない派?」

「……へ?」

しいいまったああああっ?!?!?!?

余計なこと口走るといつか変なこと言ってしまったああああっ

！？  
気が動転しすぎてしまって、変というか、この場に似つかわしくない質問をしてしまった俺だった。というか、正直今の質問はないと思う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぶつ。」

「あつ！？ お前今笑つたな！？」

まあ笑われるか馬鹿にされるかのどちらかにはなるとは思ってたけど。

「だって・・・・・・・・こんな状況でそんなこと聞いてくると思わなかったんだもん・・・・・・・・！」

「まだ笑ってやがる・・・・・・・・。かなり屈辱的だ。」

自分で言つただけだね。

「ナオつたら可笑的い！ もっと別のこと聞いてくるのかと思つた！」

「・・・・・・・・はは。確かにそうだな。」

自分でもまさかこんなこと言うとは思ってなかったけどね。

だが、この発言のおかげで少しだが雰囲気が悪くなった。（ちなみに俺は入れる派だ）

しばらくはこのままの雰囲気を楽しもうかな。

「あ、喉渴いてない？ 何か買ってきてあげようか？」

「え？ ああ、じゃあ頼んだ。」

この雰囲気のままかと思っただら優子が飲み物の購入を希望してきた。確かに少し喉が渴いている。緊張していた所為だろう。何か飲みたいな。

「あ、でも俺も一緒に行くよ。女の子に荷物持たせられないし。」

「そう？　じゃあ一緒に買いに行こ？」

「おう。」

先ほどの和やかなムードとは違い、また少し緊張した雰囲気が二人を包む。

そんなことを考えているうちに、気付くと既に俺と優子は自販機の前まで来ていた

「何飲むの？　ジュース？　コーヒー？　紅茶？」

「俺はコーヒーにしようかな。久しぶりに飲みたいし。」

ちなみに選んだ本当の理由はまだ起きていて優子と話をしていたいからである。

俺は小銭を入れ、エメラルドマウンテン（微糖）を購入した。

「私はオレンジジュースにしようかな……………」

優子も隣の自販機で同じように小銭を入れ、同じようにオレンジジュースを買った。

二人は自販機の近くにあるベンチに座りなおし、また同じように会話をし始めた。

「そついえば優子はさっき俺に何か聞こうとしてなかったか？」

「えっ！？　そ、そうだったけ……………？　そうだったかなあ」

「？」

何を誤魔化しているかはわからないが、何かを誤魔化そうとしているのはわかる。

あまり深くは突っ込まない方が良いかな？ でも何を聞こうとしていたのかは気になるな。

「本当は覚えてるんだろ？ 俺に何を聞こうとしてたんだよ。」

「べ、別にたいしたことじゃないよ？ 聞かなくても別に、」

「たいしたことじゃないなら別に言っても大丈夫だろ？ 大丈夫。

真剣に聞くから。」

俺がそう言っていると、優子は少し恥ずかしがりながらも口を開いた。

「そ、そう？ えっとね、じゃ、じゃあ……………」

俺は何気なくコーヒーのフタを開け、それを口に含んだ。

「ナオって好きな人……………いたりする？」

「ブゴハアツ！」

「ええっ!？」

あ、やばい気管に入った……………! 痛い……………!

例えるならプールで溺れたときの感覚だろう。

「げほっ! ごほっ! ごほん!」

「大丈夫!？」

優子。心配してくれるのは嬉しいんだけど、お前が近づくと質問の内容を思い出してまた嘔き出しそうだ。

「大丈夫だ。この程度の痛みに負けたら男が廢る。」  
「本当？ それならいいけど……」

というか鼻がツーンとしてるだけだから別にたいしたことはないんだけど。

「そ、それで……えつと……」

「質問の答えを聞きたい、か？」

「……」(ゴクゴク)

「うーんと、そうだな……」

好きな人は目の前にいるんですけど。って言うてみたいけど……

色々無理があるから、やめとこ……。俺ってヘタレだな。

(自己嫌悪)

「いるよ。誰とまでは言わないけど。」

「……そう。」

優子はちよつと淋しそうな顔をした後、持っていたオレンジジュースに口をつけ、一口飲んだ。

「……」(ぐびぐび)

一口……あれ？

「……」(ゴクゴク)

ナレーション間違えた。一気に飲み干した。

優子が飲み物を一気に飲みとは珍しい。あまり見たことないな。

「ナオ。もう一本飲みたいから買ってきてくれない？」

「え？ ああ。別に良いけど。」

俺は優子が買ったと思われるオレンジジュースをもう一本、買ってあげた。

「……………（バツ　ゴクゴクゴク）」

渡したと思ったら間髪いれずに飲み干す優子。

あれ？ 何か違う……………？

「ゆ、優子？　どうかし」

「もう一本。」

出される左手。その手は早くオレンジジュースをよこせと言ってるようにも見える。

……………って、おかしい！？　優子がおかしい！？　何かがおかしい！？

転がったオレンジジュースの缶。一つ拾い上げ、成分表、ラベルをじっくり見ると……………

『大人のオレンジジュース　アルコール度数高め　これを飲めば貴方も大人の仲間入り！』

「いくら旅館だからって、生徒がいるんだから自販機で酒売ってんじゃねえよ！？　どういう学校！？」

そういえば清涼祭のときも誰か間違えて買ってきたよな……  
これ、そんなに間違えやすいのかな？ でも、確かにラベルだけなら間違えてもおかしくない……

「ナオ！ もう一本買ってきなさい！」

「優子！ これはお酒だ！ 未成年は飲んじゃダメだ！」

「そんなことはどうでもいいから買ってきなさい！」

く、口調と性格が大変貌を遂げている！？

前は少しおかしいくらいだったけど今回は何か怖いぞ！？ アルコ  
ール度数高めだから！？

「酒の飲みすぎは中毒になる可能性があるんだから、」

「フンツ！（ボキッ）」

「オギヤアアア！！？？」

間接（右腕にあるヤツ全部）を一瞬にして外された。

くっ！？ アルコールで力加減が出来ないのか！？ ていうか痛い  
っ！

「優子ちよつと落ち着け！ 酔ってないなら少し休め！ な！？」

「………うー。ナオがそういうなら………」

酔っ払い気味の優子はもう一度ベンチに。俺はその間に外れた関節  
を戻した。

とりあえずこの酒乱優子を落ち着かせなきゃな………

「うにゃあー！！」

「どあぁあつ！？」

いきなり飛びついてきた。

あわばばばばばばばばばば！！！！（何が起こったのか事態の把握が出来ない俺）

「！？ \*X!？」（優子、とりあえず離れてくれ！

？ 俺の理性が!?)

「……………ナオはやっぱり亜矢さんが好きなの？」

「？」（え?）

それはどういう……………?

優子は俺を下敷きにしながら話を進める。

「だって自習の時だって、仲良さそうに話してたし。彼女がどうか、付き合ってるとか言ってたし……………」

ああ。そのことか。ちょっと誤解を招くような発言だったもんなあれ。

ここでその誤解を解いておかないと、後で後悔するだろう。

「そのことに関して言うとな。亜矢と付き合ってたのは昔の話だ。しかも、それはアッチが無理やり取り付けてきたものだ。」

「……………そうなの？」

俺が亜矢と付き合ってたのは、ほんの少しの間だけだ。亜矢は昔、俺をある事件に巻き込んだ。それに責任を感じた亜矢が無理やり彼女にしてくれと言ったのが始まりだ。

結局、その後もトラブルにたびたび巻き込まれるから、俺から別れ話を切り出したんだけど。

「そ。だから特別な関係だったとか、そういうのはないの。OK？」  
「OK……………」

とりあえず優子も落ち着き、誤解も解けた。これでめでたしめでたし？

待てよ？ と思い、最初の視点に戻す。

俺の体勢 ベンチに仰向けに倒されている

優子の体勢 俺に向かって羽交い絞めのような形

俺が優子に押し倒され、一歩間違えば“自主規制”な展開に発展する可能性あり

「そうなんだ……………！ 私にもチャンスあるかな……………」  
「？」

「ユウコ。トリアエズドイテクレナイカナ？ オレノリセイガモタナイ。」

「んー？ なんて言ってるかわかんないよー？」

優子はわざとなのか本気なのか、俺に段々顔を近づけてくる。

心なしか、服も着崩れて艶っぽく見える。もう少しで服の中も見えるほどだ。

「ん……………（むぎゅ〜）」  
「う……………おおっ！？」

優子に抱きしめられる。優子の鼓動が聞こえるくらいの距離だ。

正直、よく自分の理性が保たれてるなあ〜と思った。

「ナオ……………」

「優子……………」

二人の顔が近づいていき、ゼロ距離まであと少しというところまで迫った。

え？ なに？ これはもういいって良いの？ OKなの？ どういうことなの？

頭の中が真っ白になり、もう何も考えられなくなる。ええい！ もう、どうにでもなれ！

覚悟を決めたときだった。

「……………うん(こてっ)」

「……………へ？ 優子？」

「むにゃむにゃ……………うん……………」

俺に抱きついたまま眠りだす優子。

……………OK。これで良かったんだ。期待？ 何を言ってるんだ君たちは……………」

期待してたに決まってんじゃねえか！ バーカ！

だけど、この体勢は色々まずいって。だって、当たるところがガッツリ当たってるだよ？ 胸とか。その他モロモロとか。

「……………よっど。」

とりあえず優子を抱き起こす。ああ、いい匂い……………じゃねえ！ 俺は変態か！？

自分の反応に自分で突っ込みながら優子を壁に立てかけることに成

功。

ちよつと。いや、かなり名残惜しかったのは皆さん内緒の方向性で

「でもこの優子どうしようか？ 起こすわけにはいかないし……

……」

優子はぐっすり眠っている。時間も時間だし、部屋に戻さないと……  
……よつと。

俺は優子をそのまま抱っこした。(俗に言うお姫様抱っこである。)  
部屋まで持ってってあげるか……

「うーん……(ぎゅ)」

「ゆ、優子？」

優子を抱き上げると、落ちないようにしたいのか抱きつく力が強くなる。

……疲れる。精神的に。

優子の部屋の前にて。

コンコン

「誰かいますか？」

優子の部屋をノックする。

俺も眠いし、早く優子を部屋に連れて行こう。

『その声は浅斬君だね？』

「ん？ 工藤さんか？」

返事をしたのは工藤さんだ。優子と同じ部屋割りだったのか。

『そうだよ。あ、夜這いをしに来たなら優子はいないよ？ さっき出かけた時から帰ってこないんだ。』

夜這いなんかしにこないよ。絶対？ いや、多分。

「いや、丁度その優子を担いで来たところなんだが……」  
『あれ？ そうなの？』

工藤さんは部屋から出てきた。なぜ警戒気味だったのだろう。

「うわ。優子お姫様抱っこされてる〜！ っらやましいなあ〜。」  
「それはいいから優子を部屋に持って行ってくれ。結構辛い。」

ここまで来るのに腕が限界に近くなっている。

もういつ手を離してもおかしくない状態だ。

「そうなの？ わかった。じゃあそのまま部屋まで入ってきていいよ。」

「了解。」

部屋に招き入れられ、布団のある所に優子を下ろす。

「じゃあ、俺はこれで。」

「あ、ちよつと待って。一つ質問していい？」

「？ なに？」

質問？ なんだろ。でも工藤さんのことだ。きっと爆弾発言が来るはずだろう。

「優子のこと好き？」

「……………!？」

ホラ来た。爆弾というより、原子爆弾級のが。

「誰にも言わないなら別にいいかな……………？」

「ホント！ それで！ 誰々なの？」

「そこに寝てる。」

「……………あ、やっぱりそうなんだ。」

折角思い切ってカミングアウトしたのになんだその反応は。

「いや〜。だって浅斬君の反応とか行動見てたらそんなのすぐわかるよ。」

「そんなにわかりやすい？ マジか……………」

今度から気をつけよう。何か恥ずかしくなってきた。

「当事者も気付いてないみたいだね。あー勿体無いな。」

「何だつて？」

「いゝや。別に何も無いよ？ ほら、もう遅いし帰ったら？」

工藤さんに背中を押され、部屋を追い出される俺。

………帰るか。

結局、本当にそのまま部屋に帰った俺だった。

第55話 恋愛の当事者は皆鈍感だ（後書き）

最近話が思いつかなくて、グダグダしている作者です。

修学旅行終わってから話が全然思いつかないんです……

今回はかなりグダグダになっちゃったと思います。

それでも読みたい！ という方は読んでください。

あと少しあつかましいんですが、誰か私を応援してください！

以上、最近元気が出ない作者でした。

## 第56話 携帯電話は大切に扱おう(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 27 (今回、優子との会話時のみ得点割り増し)

- ・優子が本日最大のカワイさを発動 + 3 (+1)
- ・変なことを口走る - 1
- ・ドキドキがとまらない + 3 (+1)
- ・優子が爆弾発言投下 + 2 (+1)
- ・優子、俺が見た中で二回目の泥酔 - 1
- ・嬉しいハプニング + 3 (+1)
- ・誤解を解く + 1 (+1)
- ・ !? \* x + 4 (+1)
- ・優子に抱きしめられる + 4 (+1)
- ・期待を完全に叩き折られる - 3
- ・精神的に疲れる - 1
- ・工藤さんにかかわれる - 1

現在の青春ポイント合計  
- 7

## 第56話 携帯電話は大切に扱おう

「はあ〜……………」

疲れた……………色々。

「ナオ。溜め息つくとき幸せが逃げてくよ?」

「溜め息ついてなくてもお前は逃げてるけどな。」

「なんだと!？」

まあ俺もそこまで幸せだと思ったことはないけど。

「明久にナオ。喧嘩してないでさっさと話を続けるぞ。」

「あ、ゴメン坂本。」

現在は恒例の作戦タイムとなっている。明日はいよいよ合宿四日目。五日目は帰るだけの移動日だから、覗きのチャンスは明日で最後になる。

「今回も負けてしまったが、諦める気は毛頭ない。残るチャンスは明日だけだが、逆に言えば明日がまだ残っているんだからな。」

坂本の言うとおり、その辺ポジティブに考えないとやってられないだろう。諦めるのはまだ早い。

「そうだね。圧倒的な戦力差だけど、そんなの僕らにとってはいつものことだし。こういった逆境を覆す力こそが僕らの真骨頂だよね!」

「……………このまま引き下がれない。」

「そうじゃな。こんなことはFクラスに入ってから慣れっこじゃ。今更慌てるまでもないのう。」

皆の士気も高い。この場にはいないヤツらも同じような気持ちを持ってくれるはずだ。……一人足りないみたいだけど。

「あれ？ 翔太は？」

「……寝てる。補習が身体に響いたみたい。」

「ああ、なるほど。アイツ慣れてないもんな。」

俺も正直西村先生の補習はキツイと思う。

「まあ、翔太には期待してないから別にいいけど。」

「……お前って俺に冷たくない？」

「なんだ。やっぱり起きてたのか。だったらお前も作戦に協力して」

「パス。俺夜はいつも九時就寝する男だから。今日は寝るから後は明日で。」

そういうと翔太は布団に包まってそっぽ向いてしまった。付き合いが悪いなあ……

「まあお前らが諦めていないのなら、まだ手は残されている。」

翔太がいなくても別に大丈夫ということを言っているのだろうか？  
ま、いてもいなくてもあまり変わらないけど。

「流石は雄二！ 何か考えがあるんだね！」

「当然だ。俺を誰だと思ってる？」

「A代表を妻に持つ、Fクラスの元神童。」

「チヨキの正しい使い方を教えてやる。(ザクッ)」

「ぐわあああっつ!? 目があああっつ!」

坂本が俺の目に人差し指と中指をねじ込んだ。

「ま、まあ、でも今度はどんな作戦を考えているんだ?」

眼球の痛みに悶えながらも話を聞く俺。坂本のことだ。先ほどのよ  
うなグダグダな状態にならないように最善策を施すはずだ。コイツ  
を信じるほかないしな。

「正面突破だ。」

信じた俺がバカだった。

「グーの正しい使い方を教えてやる。」

「ま、待てナオ! まずは話を聞け!」

ちっ! 折角の反撃のチャンスを……

まあ、考えた作戦の中で正面突破が一番効率がいいんだろう。

「要するに正面突破を続行するってことは、こちらの戦力を更に増  
やすってことか?」

「そうだ。向こうの戦力はもう頭打ちだ。アレ以上は戦力を増やせ  
ない。口惜しいことに今日は負けたが、おかげで相手の戦力を知る  
ことが出来た。これは大きいぞ。」

「……………他のクラスでの目撃情報も集めた。」

ムツツリーニが言ってるのはD・Eクラスからの情報提供だろう。

「向こうの布陣は教師を中心とした防御主体の形だが、色々と弱点がある。それがなんだかわかるか？」

「微塵もわからないね。」

「明久。パーの正しい使い方を教えてやる。（スパーン！）」

「ぶべらあつ！？」

俺の平手が明久の頬に吸い込まれていった。吸引力の変わらない、ただ一つの平手。（CM風）

「明久。ちよつとは考える。じゃあ坂本。詳しい説明頼む。」

「まったく……いいか？ 召喚獣を呼び出すフィールドには《干渉》というものがある。これは一定範囲でそれぞれ別の教師がフィールドを展開すると、科目同士が打ち消しあって召喚獣が消えてしまうというものだから。」

「要するに教師は余程開けた場所以外では複数人を配置することができないということじゃろう？」

「そういうことだ。」

へえ。《干渉》なんて初めて知った。

教師同士が近くにいけないとすると、ただの正面突破でも作戦に幅が広がるな。

「あ、坂本。ちなみに一つ聞きたいんだけど。」

「なんだ？」

「教師って何人ぐらいいるんだ？ 強化合宿に来てる人数でいいから。」

「正確な人数はわからないが、クラスの数の教師は来ていると思うぞ。」

「…….とすると7人は確実にいるな。」

結構多いな。

「そうして考えると、随分苦しい勝負だよね。鉄人と大島先生と、多分学年主任の高橋先生もいるし、勝てる確立は相当低いよね。」  
「きつと一番頭のいい教師は階段前に配置されるはずだ。無視できないし、潰すのが困難だとするとそう考えるのが妥当だろう。」

女子風呂を覗くには廊下前の階段を突破しなくちゃいけないし、色々面倒が多いだろう。

「俺たちの勝利の為には、どうしてももあるヤツを極力無傷で鉄人の前まで連れて行く必要がある。」

「あるヤツ？」

「お前だよ明久お前が鉄人と戦って勝利する。これはどうあっても外せない条件だ。」

「明久が《観察処分者》だからか？」

「そうだ。鉄人は最後の砦として女子風呂の前に陣を敷いているだろう。ここは先ほどと同じようにどうあっても通過せざるを得ないポイントだからな。だが、ヤツを生身の人間が倒すのは不可能だ。」

だからこそ、明久のようなものに触れる召喚獣が必要というわけか。明久が一番重要な役所だな。

「猛獣と人間は武器を持って初めて対等の敵たり得る。その武器を持ってるのは、明久、お前しかない。」

召喚獣はその見た目とは裏腹に力が物凄い。でも、普通の召喚獣は人を攻撃するどころか物にすら触れない。《観察処分者》である明久の召喚獣以外は。

「じゃが、階段の前にある主力部隊や、大島先生のいる所も必ず通過せねばならんのじゃろう?」

「ああ。大島はムツツリー二にやってもらうとしても、主力部隊と戦うには戦力が足りない。というか、今の戦力だとそこに辿り着くことすらできないな。」

主力部隊にはきつと優や亜矢、姫路や霧島に優子などそうそうたる面子が揃ってそうだしな。辿り着いたとしてもそこでやられるのがオチだろう。

「作戦成功の為にはどうしてもA・B・Cクラスの協力が不可欠だ。そこで、明日の作戦時刻まではその根回しに全力を注ごう。」

「要するにAとCクラスを仲間にするってことだろ? でも一度断られてんだし、そう上手くいくか?」

Bクラスは代表が代表だからまとまりがないし、Cクラスは代表が女子だからそういったものの取引自体が難しい。Aクラスにいたっては久保の協力なくしてA男子をまとめる技量が俺ら下位クラスにはない。

「そこをなんとかするのが俺たちの仕事だ。」

坂本はそう言って部屋に備え付けられていた浴衣を掲げた。

「……すまん。意味がわからないんだが。」

「そうだよ雄二。そんなのどうするの?」

「これを着せて写真を撮り、AとCクラスの劣情を煽る。うまくやれば覗きへの興味が湧いて協力を取り付けられるはずだ。」

「……お前の作戦って、そんなのばっかだな。」

「ほっとけ。」

そんなんだからA代表に目をつけられんだよ、とまでは言えなかった。

「でも、効果はありそうだしやってみるか価値はあるね。はい、秀吉。」

「……………またワシが着るのかのう……………?」

秀吉が少し不満げな顔をする。何度も着させられてるから慣れたのかと思つてたけど。

「安心しろ。秀吉だけじゃない。姫路と島田にも着てもらおう。それと、ナオは木下姉と仲がいいからな。そちらにも頼もう。」

「ワシ1人が着るのが不満とかそういうワケではないのじゃが。」

着ること自体に、秀吉は不満なんだと思う。

「それじゃ、明久。姫路と島田に連絡を取ってくれ。ムツツリーニはカメラの準備を。ナオは木下姉に連絡をしてくれ。」

「了解したよ。」

「あ、坂本。優子は今泥酔してるから協力は難しいと思うぞ。」

「ん？ 泥酔？ 何でそんなことに?」

「自販機に酒が売ってるブースがあつて、間違えて買って飲んだんだ。」

「なぜ学生が合宿をする場で酒なんて売ってるんだ？ まあ、それだと協力は難しいな。」

なぜお酒が売っているか考えてみよう。この旅館を買い取ったときにそういうものがあつて、撤去しないままにしてあるんだと俺は踏んでいる。

P i P i P i P i P i P i

【わかりました。お菓子とか持って、後で遊びに行きますね。】

「雄二。姫路さんは後で来てくれるって。」  
「わかった。」

明久の携帯に返事が返ってきたようだ。姫路なら説得しやすいだろう。問題はもう一方だな。

P i P i P i P i P i P i

【別にいいけど、こんな時間にどうしたの？】

「明久。それは島田からか？」  
「うん。でもやっぱり美波だね。警戒してるみたいだ。」

ま、島田じゃなくてもこの反応は普通だな。

「んじゃ、明久。後は任せた。」

ま、警戒は解こうと思えば解ける。頑張っってそれに見合った文章を作ればだけど。

明久が島田たちを呼んでいる間、俺は荷物の整理でもしよう。秀吉は隅っこでバナナ食べてるし、別に好きなことやっても……

「……………康太。ちょっとこれを見てくれ。」

「……………これは……………!」

「アレ？ お前さっきまで寝てなかったっけ？」

片付けしようと思ったら、翔太が起きていた。ムツツリー二を呼んで一緒に何か見ているみたいだけど……………一体何を見ているんだ？

「おうナオ。合宿の夜って言ったら……………これが定番だろ？」

「な……………! そ、それは……………!」

翔太が手に掲げていたもの、それは……………!

「合宿、夜の定番、その名も大人エロ本の参考書だ……………!」

「ほう……………! それはまた……………!」

翔太、ナイスだぜ……………!

「では、早速読むとしようぜ？」

「……………(コクコク)」

「おや、ムツツリー二？ エロに興味はなかったんじゃないのか？」

「……………時と場合による。」

「……………隠さなくてもいいのに。」

「じゃあ、開くぞ……………!」

「おう・・・・・・・・！」

一ページ目を開こう。そう思ったときだった。

ツルン（坂本がバナナの皮で滑る音）

ドタツ（坂本が明久を巻き込んで倒れる音）

バキツビリツ（坂本が明久の携帯と俺らの読もうとしていたエロ本を巻き込んでビリビリにした音。）

「すまんお前たち。何か踏んでしまった。また今度買って返す。それで明久。大変なこととはなんだ？」

「たった今キサマが作った状況だ。」

・・・・・・・・興醒めだ。

「はあ・・・・・・・・期待して損した。」

不幸だ・・・・・・・・

「・・・・・・・・ナオ。とりあえずもつ見るのやめようか。」  
「そうだな・・・・・・・・」

この状況で見たいと思うやつはいないだろう。本当にテンションが下がったな・・・・・・・・

『ゴぶつ。ななななんてことしてくれるんだキサマ!』

『黙れ! キサマも僕と同じように色んなものを失え! どりゃああーっ!』

『おわあっ! 俺の携帯をお茶の中に突っ込みやがったな!? これじゃ壊れて弁明も出来ないだろうがこのクス野郎!』

………というかさっきから何騒いでるんだアイツら?

「そうだなオ。携帯貸してくれないかな?」

「………なんで?」

「ちよつと弁明を。」

「………別にいいけど。誰に送るんだ?」

俺は持っていた携帯を渡す。坂本も弁明がどうか言ってたし、きつと何かメールでやらかしたんだろう。貸すことくらいどうってことない。

「ん? 大したことじゃないよ。あ、秀吉のお姉さんの名前って優子さんだったよね?(カチカチカチカチ)」

「うむ? そうじゃが。」

ん? 優子に? 何で優子に弁明のメールを送るんだ?

「送信………っと。」

【To: 木下優子 From: 浅斬直貴

優子、今夜はお前に大事な話がある。浴衣を着て俺の部屋に来てくれ。そうすれば………】

「ん？ 優子に一体なんてメールを　　ゴふっ。」

俺の口からありえない音が出た。

「おおお前なにやってんだよ！　これだと変な誤解されちまうだろ！？」

「ふん！　ナオも僕と同じ気持ちを味わえ！　とりやあっ！（ポチヤン）」

そついうと明久は俺の携帯をお茶の中に突っ込んだ。

「どうだナオ！　壊れて弁明も出来ないだろ！」

「・・・・・・・・ふっ・・・・・・・・お前はバカか？」

全く、明久のバカさには驚かされるよ・・・・・・・・

俺はお茶から携帯を取り出し、弁明のメールを打ち始めた。

「あ、アレ？　壊れて・・・・・・・・ない？」

「ふっ・・・・・・・・甘かったな明久。俺の携帯は・・・・・・・・防水だ！」

「な、何だつて!？」

最近の機種は良く出来てるよな。新しいやつは皆防水対応なんだから。

「ところで何があったんだよ。言ってみるよ。」

「うん。実はカクカクシカジカチデジカコジカというわけなんだ。」  
「なるほど・・・・・・・・だったら俺の携帯で弁明すればいいだろう」

が。」

「あ、そうだね。じゃあ借りるよ。」

明久に携帯を渡した。流石にもうしないだろう。明久のが終わった  
ら俺も優子に弁明のメールを

ガラッ (坂本が部屋のドアを開ける音)

ドゴッ (廊下にいた西村先生が坂本に拳を叩き込む音)

グシャベキグチャ (坂本がテーブルと明久を巻き込んで壁に激突  
する音)

「部屋を出るな。」

「りよ、了解です。」

動かない二人に代わって俺が返事をする。

坂本が弁明をしようとして外に出たようだ。西村先生がいるということ  
はこの部屋に対する教師側の警戒態勢は万全だな。というか教師と  
して生徒を殴ることはありなのか？

「明久。大丈夫か？」

とりあえず気絶している坂本は置いておいて、起きようともがいて  
いる明久を引つ張り出す。

「・・・・・・・・全然・・・・・・・・大丈夫じゃない・・・・・・・・」

明久は目に涙を溜めて言う。

「ん？ どこか打ったか？」

「違うよ・・・・・・・・もう終わりだ。」

「何をそんなに落ち込んでるんだよ。あ、そうだ明久。俺の携帯そろそろ返してよ。」

俺がそういうと、明久はなぜか押し黙ってしまった。指一本とも動かさずに。

な、何があっただんだ？

「あ、明久？」

「ごめんナオ・・・・・・・・不可抗力だったんだ・・・・・・・・」

そういつて明久は俺に右手を出して、

ポトツ (俺の真つ二つになった携帯を落とす)

「僕の弁明すら、できなかつた・・・・・・・・」

俺の中で、色んなものが終わってしまったような、そんな気がした。

## 第56話 携帯電話は大切に扱おう（後書き）

塾やら何やらで忙しい、そんな毎日の作者、三日月ですっ！  
今回青春ポイントが低くし過ぎてこのままのペースでいくと戻せな  
いと思い、今回ポイントの割り増しをしました。

ナオがよくわからない言語を言っていますが、その辺りはご想像に  
お任せします

テスト前の投稿はこれをラストにしたいと思います。続きはテスト  
終了後にしたいと思いますので、期待しててください！

ちなみに別の小説をただいま執筆中であります。別のものといって  
もこのバカドジのサイドストーリー集見たいな物なので、完成しま  
したら皆様見てください！

以上、最近自転車のチェーンがぶっ壊れた三日月でしたっ！

第57話 誤解を解くにはかなりの時間が必要だ（前書き）

前回の青春ポイント合計 - 7

・恒例作戦タイム + 1

・チヨキの正しい使い方 - 1

・間違いメールで大波乱 - 1

・携帯真つ二つ - 3

現在の青春ポイント合計 - 11

## 第57話 誤解を解くにはかなりの時間が必要だ

コンコン

俺らが西村先生の攻撃を受けた坂本の後片付けをしていると、控えめなノックが聞こえてきた。

「こんばんわ。明久君たち。」

「あ、いらつしゃい、姫路さん。廊下で鉄人に絡まれなかった？」

「西村先生はいましたけど、お菓子をあげたら通してくれました。」

そう言つて姫路は手作りと思しきお菓子を見せた。

「さらば鉄人。安らかに眠れ……………」

「「アーメン……………」」

「????」

俺たちは胸の前で十字を切り、天に祈りを誓った。  
西村先生、貴方の冥福を心から祈ります。

「ところで、明久君はどうして浴衣姿なんですか？」

「これ？ 部屋にあったのを着てみたんだけど、変かな？」

「いいえ！ そんなことはありません！」

「そう？ 良かった〜。」

まあ、姫路からしたら明久の浴衣姿なんてそうそう拝めるものじゃないからな。正直、写真や動画に収めたいと考えるくらいだろう。まあそこまでするほど姫路も落ちぶれてはいないだろうが。

「むしろ綺麗な肌や細い鎖骨が凄く色っぽくて、とっても可愛いですっ！」

前言撤回。彼女はもう、手遅れかもしれない。

「姫路。よく来てくれた。」

「こんばんは坂本君。お邪魔しますね。」

「早速だが、プレゼントだ。」

坂本が持っていた浴衣を姫路に手渡す。

「浴衣、ですか？　ありがとうございます。ところで話って……

……？」

「お願い、ですか？」

姫路が疑問符を上げる。

「うん。実はね、その浴衣を着た姫路さんの写真を撮らせてほしいんだ。」

「え……っ？」

姫路は困惑したのか目をパチパチと瞬かせた。まあ、普通いきなりこんなこと言われたら驚くよな。しかも相手は覗きをしようとしている人間だし。

「あゝ、その、なんて言うか……」

明久が説明に困ったのか、会話が途切れてしまった。このままだと、姫路は了承してくれる可能性が低くなってしまふ。それだけは阻止

しなくては。

「あゝ、姫路。明久はお前と一緒に写真を撮りたいといっているんだ。この合宿の記念に。」

「えっ？ そうなんですか、明久君？」

「えっ！？ あ、うん。そうなんだ！ 姫路さんと思い出を残したいなって思ってた。」

俺の機転により、姫路も俺たちの声に答えてくれそう。このままいけば撮影まで時間はかからないだろう。それに、姫路も嬉しいはずだ。

「心配しないでいいよ。僕も、秀吉も一緒に写るから！」

「…………コイツは本当に乙女心がわかってないな。どうしてコイツはそんなに鈍いんだろう。心なしか姫路も凄く残念そうだ。」

「…………まあ、明久君だから仕方ないですよ。それじゃ、ちよつと着替えてきます。」

浴衣を持って着替えに行こうとする姫路。

「そうだ明久。その写真を他のヤツに見せることを姫路に言わなくていいのか？」

「あ、それもそうだね。…………姫路さん、ちよつと待って。」

「はい？」

明久が坂本にアイコンタクトを送る。見せてもいいかの確認のことだろう。坂本は『教えないつもりだったのか？』というような表情を見せた。

「実は撮る写真なんだけどさ、友達とかに見せてもいいかな？」

「え？ 浴衣姿をですか？ そ、それは少し恥ずかしいです……

……」

「何を言ってるんだ姫路。浴衣姿程度で恥ずかしいと思っただら明久の存在はどうなるんだ？ “バカ”の上に“変態”だなんて、生きてることすら恥ずかしいことじゃないか。」

「話して秀吉っ！ 雄二の頭をカチ割ってやるんだ！」

「坂本！ 確かに明久は“バカ”だが、変態は言いすぎだろ！」

確かに明久はバカだけど、好きで変態やってるわけじゃないはずだ！

「ナオ！？ それはフォロワーのつもりなの！？ それだと変態の部分しか払拭できないじゃないか！」

「そうだなナオ。確かに“変態”は言い過ぎた。明久だって、好きで“変態”になったわけじゃないもんな。」

「明久。坂本だって言えばわかってくれるんだぞ。明久の“変態疑惑”はこれでお終いだ！ よかったな！」

「ねえ、二人とも。なんで“バカ”の方は否定しないの!？」

「だって本当にバカだから あっ！ つい本音が！」

ホントのことって、咄嗟のときにポロツと言っちゃうよな

「秀吉っ！ こんどこそ離して！ ナオの心臓を抉り出してやるんだ！」

「はっ！ やるか、明久？ 俺に勝負を挑むとは、とんだ“バカ”だなあっ！」

「バカバカうるさあああああいつ!!！」

明久が俺に飛び掛ってくる。それを俺は右に半歩ずれてかわす。

グニユ (明久がバナナの皮を踏む音)

ツルツ (滑る音)

ゴンツ (頭を地面に強打する音)

「……………明久。これがお前のバカといわれる由縁だ。」

「くおおっ！ 痛いっ！ 秀吉っ！ バナナは食べたらちゃんと皮を捨てようよ！」

「明久。それが実力というものさ。」

多分、俺が左に半歩よけてたら滑ってたのは俺だけだ。

「おい、お前ら。姫路が写真を見せてもいいと言ってくれたぞ。」  
「っていつの間に？」

姫路に一体どんな心境の変化が？ まあ別に写真が取ればいいんだけど。

「はいっ！ 少しくらいなら浴衣の裾をはだけでもいいですっ！」

「……………本当に一体どんな心境の変化が起こったんだ？」

「とにかく協力してくれてありがとう。それなら早速お願いできる？」

「はいっ！」

姫路は浴衣を持ってトイレに入る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（キュッキュツ）」

中の音が聞こえた途端、ムツツリーニが一心不乱にカメラのレンズを磨き始めた。

「・・・・・・・・ムツツリスケベだ。」

「・・・・・・・・そんなことはない。」

そこまで否定する必要はないと思うんだけどな。

「ま、お前が否定するならそれでもいいけどさ。・・・・・・・・あ、

そっだ。ムツツリーニ。」

「・・・・・・・・なんだ？」

「明久にご褒美をあげてくれないか。」

「・・・・・・・・ご褒美？」

明久はこのところ勉強を頑張っているし、西村先生を倒すのもアイツだ。だから少しぐらいの役得があってもいいはずだ。だから、

「明久と姫路のツーショットを一枚だけ撮ってあげてくれないか？」

「・・・・・・・・別にいい。」

ムツツリーニが小さく笑みを浮かべた。コイツはやっぱ、優しいな。そんなこんなで撮影も終了。ムツツリーニは鼻血の海に沈んで若干時間はかかったが、秀吉と姫路の浴衣姿をバッチリ写真に収めることができた。

これで明日の覗きに、一段と戦力が追加されるだろうと思って俺は

その後眠りに着いたのだった。

「……………ん？」

俺が寝ていると、布団の中に何者かが侵入してくる感触があった。気配にすら気付かなかったとは不覚だ。でもまあ誰か寝相の悪いヤツが俺の布団に入ってきたとかそんなところだろう。

「誰だ……………？」

布団の中がもぞもぞと動く。俺の目の前に顔を出したのは、

「……………むう……………」

秀吉だった。……………秀吉？ あれ？ 秀吉……………だよな。

俺は何かの違和感に気付く。

「……………可愛い……………」

なぜか秀吉がめちやくちや可愛く見える。

……………つてヤバイ！ 俺が暗黒面ダークサイドに落ちようとしている！？  
落ち着け俺！ 秀吉は男、秀吉は男、秀吉は男……………つて  
あれ？ なんかデジャブ……………

「んう……………」

俺が自分の大切な何かと葛藤しているとき、秀吉から吐息が漏れる。  
彼我の距離は数センチ。一歩間違えば大変なことになるのは明白だ。  
そこでもう一つ俺はおかしなことに気付く。

「……………酒臭え。」

漏れた吐息からアルコールの香りがした。

アルコールだと？ ということはこれは秀吉じゃなくて……………

「……………ゆう……………」

「ん……………」

……………返事をした。

つて、やっぱりこれは優子だ！ 返事したし……………でもど  
うしてこんな所に優子がいるんだ？ 時間はもう深夜を回っている  
だろうし。

「ナオ……………んつ……………(フニユ)」

「(あわばばばよ！？ 優子！？ きゅ、急にどつした！？)」

優子に軽く抱きしめられ、パニックに陥る俺。やわらかい二つのも

のが俺の身体に押し付けられ、その二つのものによって俺の理性がドンドンぶち壊されていった。と、とにかくこの状況はどうしておこった!? まず、優子がどうしてこの部屋にいるんだ? . . . . . つつても、原因は一つしかないか . . . . .

【To: 木下優子 From: 浅斬直貴】

優子、今夜はお前に大事な話がある。浴衣を着て俺の部屋に来てくれ。そうすれば . . . . .】

これだな . . . . . この内容が原因だ。そういえば結局弁明できずに終わってたな。

というか、『そうすれば . . . . .』って、どういうこと? 俺は優子になにをすればいいの?

「ナオっ . . . . .」

「! ? . . . . . な、なんだ? . . . . . 優子?」

「大事な話って、なに . . . . . ?」

優子が起き上がって俺と向かい合うような形で座る。まだ眠気があるのか、酔っ払っているのか、焦点が定まっていないうちにふらふらとしている。

ああ。さっきのメールの内容か。今になって明久の悪戯だったなんて、言い出せるわけがない。

「 . . . . . あ。い、一応勇気出してここまで来たんだから、何も言いか言わせないわよ . . . . . ?」

「あ、うん。そうだな。」

優子にそう言われてしまった。つっても別に大事な話なんてないし・  
・・・いや、待てよ。

よくよく考えるとこれはチャンスじゃないか？ 優子に告白するた  
めのチャンス・・・ではないだろうか。きっかけは明久の悪  
戯だが、この機会を逃すのは実に惜しいはずだ。

「えっと。ゆ、優子。」

「・・・うん。」

現状を見ると、皆は寝ていて疲れているのか起きる気配すらない。  
絶好のチャンスだ。

このままの関係をズルズルと引きずるくらいなら、今この場ですっ  
きりした方がいいのではないのだろうか。

俺は、決意を固めた。

「じゃ、じゃあ優子。今から大切な話をするから、よく聞いてくれ。」

「・・・う、うん。」

「えっと。お、俺はだな。お前のことが・・・」

「・・・(ゴクリ)」

そこまで言ったときだった。

ガチャッ

部屋の扉が開いた。

「・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・ナオ？」

突然のことに驚く俺。部屋に・・・・・・・・誰か入ってきた？

「優子。静かに。誰か入ってきた。」

「え・・・・・・・・・・？ 誰かって・・・・・・・・・・」

「きつと、お前と同じようにココに来たヤツじゃないか？」

「私と同じように・・・・・・・・・・ていうと・・・・・・・・・・」

考え始めて優子は顔を真っ赤にし始めた。

・・・・・・・・・・可愛い。

「優子。ちなみにお前は何を想像したんだ？」

「・・・・・・・・・・べ、別に（ゴニヨゴニヨ）したいとか考えてるわけ  
じゃなくて、その、なんていうか・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・優子は以外とエッチだなあ。」

ボキンゴキボキン

「・・・・・・・・・・うー！！」 声にならない痛み

「（か、勘違いしないでよね！ べ、別にナオが私にそういう気持ち抱いてたらこういうことしなくちゃなって思っただけで、深い意味はないから！）」

「（だからって関節外すなよ！ 痛いだろ！）」

いつもの優子ならここで言い返すなり関節を外してきたりするんだが、

「（え、痛かった？ ご、ごめんなさい・・・・・・・・・・）」

素直に謝ってきた。

「……………ごめん。俺もちよつとからかいすぎた。」

今日の優子はアルコールが入っている所為か、行動がいつもと違う……………調子狂うなあ。

ゴキツゴキンッ

いきなり明久のいる方から凄い音がした。

一瞬だったが聞き覚えのある音。俺は優子の方を見た。

「あ、アタシじゃないわよ!？」

「わかってるけど、聞き覚えのある音がしたんだよ。」

間接が外された後、証拠隠滅のためにもう一度ハメられたような音だ。

「あ。あれ島田だな。」

「(美波? なんで美波がこんなところに?)」

大方さっきの間違いメールのことだろう。

明久にその内容の真意を聞きにきたってところかな。

「(向こうは俺らに気付いていないみたいだし、おもしろそうだからこのまま黙って見てるか。)」

「(仕方ないわね。黙って見てあげましょうか。)」

そう言いつつも優子の顔は少しにやけてる。  
こういったイベントはやっぱり皆好きなんだなあ。

『アキ！ 邪魔者が起きちゃうでしょ！？』  
『むぐうつ！？』

もう起きてるなんて言えないよなあ…………この状況で。

『美波……………』  
『アキ……………』

おおっ！ 凄くいいムードだ！

このままいけばあんなことやこんなことが起こっちゃうかも…………

『せめて苦しまないように頼むよ……………』

ダメだ。明久にそんな展開を期待した俺がバカだった。あの野郎、  
島田が自分を暗殺しに来たと勘違いをしてやがるぞ。

『……………アンタってどういう思考回路してんの……………』  
『？』

島田よ。ここにいる皆はきつとお前と同じことを考えてるから大丈夫だ。

「（よ、吉井君って相当の大物ね……………）」  
「（いや。ある意味で稀有な存在なのかもしれないな。）」

天然記念物レベルのバカだと思う。

『困った………。今の僕に役に立ちそうなものがない……』

『その前にオレを助けようとする気はないのかっ!?!』

あれ？ 坂本も起きてたの？

よく見ると、坂本の上に浴衣姿のA代表が乗っていた。って、前がほとんどはだけてる!?! こ、これはまたとないチャンスだ! . . .  
. . . . . っであれ？ 急に視界が暗く. . . . .

ドブシュッ

「ノオオオオオオツツ!!?!?!?!」

「な、ナオ！ そ、そういうのは見ちゃダメなんだからね！」

目に激しい痛みが伴ってきた。は、速い. . . . .! 俺が気付くよりも早く俺の眼球に指を差し込んできやがったぞ優子のヤツ. . . . .!  
もはや超人的スピードだ!

「ちよ、ちよつと！ 水樹と木下以外は全員起きてるの!?! 早く言いなさいよねっ! というか優子!?! アンタも何でこんな所にいるの!?!」

「へっ? あ、いや。その. . . . .なりゆきで?」

そのいいわけは色々と苦しいと思うぞ、優子。

ちなみに俺はまだ視力が回復してないので現状をよく理解できていないが。

「な、ナオ！ 君も僕と同じ境遇だったんだね！」

「明久か？ お前、俺が優子に暗殺されるとでも思ってたのか？」

「だってあんなメール送っちゃったし、そうされるのは必然だと、」

「くたばれ。」

「なぜいきなりの罵倒！？」

幸せのつかみ所が全くわかってないな、明久は。というかこの騒ぎの所為で俺の告白が失敗に終わってしまったんだがどうしてくれるつもりだ？

「まあいいか。仕方ない。」

「？ 何一人で納得してるのさ。僕にもこの状況を詳しく説明してよ。何で僕が暗殺されなくちゃいけないのさ。」

「……」

全員が一斉に黙る。

それはお前が一番良く知ってることなんじゃないのだろうか？

まあ兎にも角にもこれで夜中の襲撃？ 事件は終了だ。西村先生に気付かれる前にお引取りを願うだけ はっ！？ 邪悪な気配！

バアンツ！

「お姉さま無事ですか！？ 美春が助けに (バアンツ！) 」

咄嗟の判断により、中にツインドリルを入れないようにすることが成功した。

厄介なヤツが来たなあ……

『ちよ、ちよつと！ どうして美春が入ってこようとした瞬間に扉が閉まるんですか！？』

「さあな。自分の胸にでも聞いてくれ。」

『この声……！！ あのドジな豚野郎ですね！ ここを開けなさいっ！』

「人のこと豚野郎なんて呼ぶヤツに誰が扉を開けるんだ！ それにここは男部屋だぞ！」

このドリル野郎……！！ あ、表現的にはこのドリル女あまが正解か。

なんでそこまで知らない人間に向かって豚野郎とか平然と言えるんだコイツは。

「み、美春……どうしてアンタがここに来るのよ……」

『お姉さまっ！ そこにいるのは判ってるんです！ さっきお姉さまのお布団に入ったら誰もいなかったから、もしかやと思ったたら……！！ やっぱりここに探しに来て正解です！』

コイツ、探しに来たきっかけが『布団に入ったら誰もいない』って絶対に普通じゃないよな。

合宿三日目で遂に我慢しきれなくなつて一大勝負に出してしまったのか。

「あ、危なかつたわ……。昨日で懲りたと思って完全に油断していたもの……」

「なに？ 昨日も来たのか？」

あ、侮れないな……。コイツに常識というものはないのか。

まあ皆そんなものは持ってないだろうけど。

『お姉さま！ 男の部屋に来るなんて不潔です！ おとなしく美春と一緒に裸で寝ましよう！ いえ、勿論イロイロするので寝かせませんけど！』

「やめるんだ清水さん！ それ以上の会話はムツツリーニの命に関わる！」

「……………！！（ボタボタボタ）」

「……………雄二、とにかく続き。」

「翔子、お前は本当にマイペースだな！」

「な、なんじゃ！？ 目が覚めたら姉上と女子がいる上に雄二は押し倒されてムツツリーニが布団を血で染めておるぞ！？」

「zzzz……………」

翔太は良くこのタイミングで寝てられるな！ ん、待てよ。確か翔太のカバンのどこかに……………

「明久！ このままだと西村先生に気付かれる！ せめてツインドリルだけでもおとなしくさせたいから、翔太のカバンから武器を出してくれ！」

「水樹君のカバンから！？ なんで武器なんてものを水樹君が持つてるの！？」

「この際そんなことどうだっていいからなにか出してこい！ そろそろ握力の限界だ！」

翔太はサブカルチャー通であるが故、色んなものをカバンに詰め込んでいる。麻酔銃やら、スタンガンやら普通の高校生が持ち歩くとしたら少々危険なものが盛りだくさんだ。そのなかにツインドリルを沈静化させられる物の一つや二つは入ってるはずだ。



『なにごとだっ!? 今の爆破音は一体なんなんだ!?』

「……………」

「ホラ見る! 結局明久の所為で西村先生に聞こえちゃったじゃないか!」

「そんなのナオがすっかりとしたもの指定してくれないのが悪いんじゃないか!」

「お前たち! 今は喧嘩している場合じゃないぞ! このタイミングで女子が見つかったら覗き事件以上の問題になるぞ!」

「とそうだった! このままだと女子が見つかってしまう!」

「明久の所為でこうなっちゃったけど、今は逃げるのが先決だ!」

「何だが納得いかない物言いだけどナオの言うとおりだ! とりあえずここは僕らに任せて!」

「女子が男子の部屋にいたなんてバレたら色々とまずいことになる。ここはなんとしても三人を逃がせ!」

坂本が全員を促す。

「ナオ。廊下に転がってる清水さんも見つかったらまずいよね。」

「ああ。早いとこ中に入れて西村先生に気付かれないうちに優子たちを持っていつてもらおう。」

それが一番いいだろう。それに俺たちの部屋の前でドリルが見つかったら何か言われるのは俺たちだ。

『吉井に坂本に浅斬い! お前らだとはわかっているんだ! その場を動くなよっ!』

バタバタしてるうちにもう一度ドスの利いた声が廊下から響いてきた。

「鉄人の声だ！ もうかなり近いよ！」

「時間が無い！ こうなったらオレが『必殺アキちゃん爆弾』で鉄人の注意を引きつけるから、その間に清水を連れて三人は部屋を出る！」

「わかったわ！」

「美波！ そこはわかつちやダメだ！」

というかなんだその技。初めて聞いた。まあネーミング的に明久が被害を受けるのは目に見えているが。

「まず僕と雄二とナオが飛び出して鉄人の注意を引きつける。その隙に三人はドアから出て一気に部屋まで走るんだ。いいね？」

「うん。……………ごめんね。ウチらの為に。」

「……………ありがとう。」

「……………お、お姉さま……………愛して……………います……………」

悔りがたし、ツインドリル。この状況下、尚且つ気絶しているこのタイミングでもなお島田にアピールするとは。見上げた根性の持ち主だな。

「……………ナオ。」

「優子。そんな顔すんなよ。俺まで悲しくなってくるだろ。」

「……………ありがとう。」

「この続きはまた今度な！」

「な、ナオ……………！」

俺はそう言っつて明久たちのほうへ向かった。さて、どう出る？

「雄二、行くよっ！」

「仕方ない、付き合っつてやる！」

明久が取っ手に手をかけ、一気に押し開けた。

バン！ ガスッ！

「ふぬおおっ！？ よ、吉井、キサマあああ！」

「げっ！？ 鉄人が扉で頭を痛打したみたいなんだけど！？」

「それはファインプレイだ明久！」

「いや、どちらかと言っつたらアウトだろ！？」

その分西村先生の殺意が明久に集中するようないきがするんだが！

「逃げるぞお前らっ！」

「了か」

そこまでは良かったが、計算違いが起きた。

西村先生が頭を打っつて出遅れたせいで、部屋を覗き込もうとしてい  
る。まずい！ このままだと中にいる優子たちが見つかっつてしまっ  
どうするどうする！？ なんとかしないと優子にまで迷惑がかかっ  
てしまっつ！ それに加えて坂本が明久の後頭部を掴んで必殺技の構  
えに入っつている！ それもなんとかしないと色んな意味で大変なこ  
とに！

「西村先生！俺らはこつちだぞ！」

俺の声に反応して西村先生がこつちを向く。よし、これでも食らえ！

「浅斬！貴様も共犯　　（ドパン！）ぐわあああつ！！　目  
がああああつ！！」

「ナオ！？君は一体何を投げたの！？」

「お菓子だ！」

「お菓子があんな破壊力あるわけじゃないか！　どんな劇薬が  
含まれているんだ！？」

「それは本人に聞いてみないとわからない！」

とにかく西村先生の目が潰れてる今がチャンスだ！

すかさず優子たちに指示を出す。三人は頷いた後、全速力で廊下を  
走っていった。

良かった。これでなんとか無事に

「浅斬。お前も遂に問題児の仲間入りのようだなあ……！！」

つて、俺たちが無事じゃねえや。この状況をどうにかしないと。

「明久！　時間稼ぎだ！」

「わかったよ！　鉄人、僕はこつちだよ！」

明久は浴衣の帯に手をかけながら西村先生に駆け寄る。西村先生は  
未だに見えていないのか明久のいる方向に顔だけ向けた。

「貴様は西村先生と呼べと何度言えば　　」

「どりゃあああーっ！」

すかさずその顔に脱いだ浴衣を巻きつける。

「こ、こらっ！ 何を、」

「おまけっ！」

そして上から帯で縛り付ける。

これで少しは時間が稼げるはずだ！

「今のうちだ！」

「吉井………。坂本……。浅斬……。覚悟は出来ているんだろうなあああっ！」

「出来てませんっ！」「」

とにかく逃げ切れるとは到底思えない。残る苦通鬼射<sup>クツキー</sup>はあと二つ。アレを目に食らっても正常なだから、体中が鉄で出来ているはずだ。効くのは体内だけ。

「坂本！ これを一つ渡す！ 西村先生の口に出来るだけピンポイントに直撃させる！」

「これはクツキーか！？ 物凄い腐卵臭がするんだが！？」

「気にするな！ 西村先生なら生きていられるはずだ！ せーのっ！」

ブオン！ ドパン！

「ふっ……。二度も同じ手を食つと思っか……。？」

「なに!?」

俺と坂本の投げた普通鬼射は西村先生の腕によって軽く叩き落とされた。

やられた!? このままだと捕まるっ!

「逃げるぞお前たち!」

「「応っ!」」

クッキーがなくなった今、とりあえず追いつかれないように走るのが最善策だ!

「どうする雄二!? 何とか鉄人を撒かないと!」

「どうするも何も、普通に走っていたら逃げ切れないのは目に見えてるだろうが!」

「だよね! 向こうは殆どバケモノだもんね!」

「だからといってどうやって逃げるかなんて思いつかないぞ!」

「任せる! こうなったら鉄人の入ってこられないような場所に逃げ込むんだ!」

「了解だ!」

って言ったたはいいけどそんな場所があるのか? そんなもの無いに等しいはずだが……

『どこに逃げようとも無駄だ! 観念して指導を受けろ!』

やばい! 某有名作家のリアル鬼ごっ より数段リアルな鬼だ!

逃げ場なんてどこにもないし、どうすれば……!」

「お前たち! こっちだ!」

「了解だあああつ！」

西村先生に追いつかれないように全速力で学習室の脇を駆け抜ける。

「ところで雄二、どこへ向かう気なの!?」

「男で教師の鉄人には入る事の出来ない場所、つまり　　女子部  
屋だ！」

「なるほどっ！」

「いやちよつと待て明久！　そういうのは自分の身体をよく見てから言え！」

若い女子が大勢寝泊りしている部屋。そこなら西浦先生すら入って  
くることは出来ない。思春期の女子が一堂に会するその場所は男子  
禁制の絶対領域。パーフェクトエリア そのど真ん中にパンツ一丁の明久が逃げ込めば

「　　死は、免れない……………！」

明久に残された選択肢は本物の“変態”になるか、地獄の“補習”  
だ。

この場合、俺なら後者をとるが。

「行くぞ明久っ！」

「絶対に嫌だっ！」

もう既にパンツ一丁の時点で恥とか無いんだから入っても大丈夫な  
気がするな……………

「く……………！　この期に及んでそんなことを……………！  
仕方ない！　明久、コレを着ろっ！」

坂本は明久に向かって何か投げた。……服か？なぜ持っていた……

「流石は雄二！以心伝心！」

「早く着ろ！」

「うん、ありがとう！」

眩しいほど綺麗な白の上着に膝上の短いスカート。靴下は紺のハイソックス。素早く袖を通し、ホックを止める。靴下も履いて、そう完璧だ！

「雄二、セーラー服の装着完了したよ！」

「って、なんでだああああっ！！！」

着る前になぜ気付かない！？お前の目は飾り物か！

「よし、これで逃げ込めるな！」

「待つんだ雄二！この格好はある意味全裸より致命的だ！」

「自分から着といてなに言ってるんだお前は！」

「それじゃ、ここからは別々で逃げるぞ。」

セーラー服を脱ぎ捨てる明久。そんな手間取るくらいなら着なきやいいのに。

「馬鹿を言っちゃいけないよ雄二。逃げるならどこまでも一緒さっ

」

「気色悪いっ！」

「こんな格好で一人にされてたまるか！」

「断る！そんな姿の変態と並ぶ気はない！」

「黙れ！ この姿が嫌ならおとなしく貴様のズボンをよこせえつ！」  
「貴様やはりそれが目的だったか！」

ああ。明久と坂本がズボンの引つ張り合いを始めてしまった。  
ここで俺がする行動は唯一つ！

バツ！ 俺、猛ダツシユ

逃げるが勝ち！ 明久の取っ組み合いが遠くなっていく。

『脱げっ！ 又ゲエエー！』

『脱ぐものかあーっ！』

『・・・・・・・・・・・・・・・・お前たち、  
何をやってるんだ？』

遠目で見づらいが、西村先生は明久たちのところで立ち止まっている。  
よし！ このままトンスラだ！

俺は全力で廊下を駆け抜けた。そして階段の手前に差し掛かったと  
き、

ツルッ

わっほっおおっうっうっ！ 滑った拍子で階段からダイブだ！

ゴン！

「先生！俺（僕）らは同性愛者なんかじゃありませんっ！」

目が覚めると、俺は見慣れた補習室にいましたとさ。

## 第57話 誤解を解くにはかなりの時間が必要だ（後書き）

ど、どうもこんにちは………三日月です。  
最近忙しさマックスでお送りしております………

テストも終わり、さあ小説だ！ と思ったのですがまだ残ってる課題に終止符を打つため、日夜頑張っていました。  
そしてその悪魔（課題のことです）を今朝、討ち取りました。

気付けば一週間近く経ってるじゃないですか！！（。口。ノ）ノ  
急いで仕上げようとした所為で水樹の設定が少々ゆがんだり、カバンにランチャーが入ってて、それに当たっても大丈夫な美春の件についてはギャグ補正ということで何とかやり過ごしてくれると嬉しいです。

時間が経つのは早い、ということので今回の後書きは終了です。

皆さん、感想お待ちしていますっ！

第58話 やらない後悔より、やる後悔(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 11

・浴衣つて響き、ドキドキするよね + 2

・秀吉が可愛く見えるデジャブが - 1

・と思つたら優子だった + 4

・優子に軽く(決して軽くはない)抱きしめられる + 4

・告白ムード + 1

・からの〜……………失敗! - 2

・優子に目潰しされる - 1

・ツインドリル襲来 - 1

・ランチャ - 爆撃 - 1

・西村先生にバレる - 1

・苦通鬼射爆撃 クッキー + 2

・リアルすぎ鬼ごっこ - 2

・セーラー服イン明久 - 1

・案の定落下 - 1

現在の青春ポイント合計 - 9

## 第58話 やらない後悔より、やる後悔

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい

姫路瑞希のまとめ

『他のクラスの人と勉強する事で良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使い易い参考書についても教えて貰う事ができたので、今後はさらに頑張っていきたいと思います。夜はいつものように騒ぎがありましたが、これはこれで私達の学校らしいと思います。ある人から内緒で素敵な写真も貰えて大満足です！』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつなくこなしている様子だったので、伸び悩んでいる科目があったと言うことには驚きました。本来なら先生が気付くべきなので申し訳ないです。ですが、無事に解決できそうなので何よりです。やはり姫路さんにはAクラスで学習する方が良い影響がありそうですね。次回の振り分け試験では是非とも頑張ってください。それと、バカ騒ぎについては悪影響を受けないように気を付けてください。

島田美波のまとめ

『三日目の夜のことが忘れられない。ウチはどうしたらいいんだろ。こんなことは誰にも相談できないし、アイツとはあれ以来話ができでないし……。瑞希の気持ちを知っているのに、これって裏切りになっちゃうのかな……。？ けど、ウチのは去年からの気持ちだから、こっちの方が先で……。ああもう！ どうしていいのかわかんない！』

#### 教師のコメント

一体何があつたのでしょうか？ 友達にも相談できないというのは尋常ではありませんね。良かったら先生に話してみてください。一応あなた方よりも長く生きてるので少しは力になれるはずです。ただ、気持ちと書いてあると言う事は恋愛の話でしょうか？

それなら先生の言えることは一つです。自分が後から思いだして後悔することのないように行動するのが一番です。色々と悩んで立派な大人になるのが学生の仕事ですよ。

#### 浅斬直貴のまとめ

『強化合宿では大変なことが数多くあり、思った以上に疲れた。初日は寝坊に始まり、覗き犯扱いに終わる。この世の中の理不尽さにとっても憤慨した。自分的には物凄く努力したつもりだったが、数学で亜矢の召喚獣に決定的な力の差が生まれるほど点が低かった。この合宿を通して感じたことは数学に対する能力のUPについて考えさせられる日になったと思う。もう一言を伝えるなら、なぜ召喚獣の扱いに慣れていない人間が自分よりうまいのだろうか。正直、才能というものについてはとやかく言うことはないと思ってはいるがこの差にだけは悔しさというものがある。悔しすぎる。後もう一言、

言うならば 』

### 教師のコメント

長すぎです。この合宿に対する気持ちの大きさはとても伝わってきますが、裏面どころか表紙にまでびっしりと書かれたら読むのが大変じゃないですか。もう少し人の気持ちを考えられるといいですね。

### 吉井明久のまとめ

『あまりに多くのトラブルがあつて驚いた。初日はいきなり気を失つて宿泊所に運ばれたので記憶がない。でも、死ななくて良かったという思いが身体から込み上げてきたのはなぜだろうか？ しかもその後は覗き犯の疑いをかけられて、自分に対する周りの見る目について悩まされた。勉強についても、女子風呂を覗く為に頑張ったけど、今のやり方でいいか不安も残るし、色々と考えさせられた強化合宿になったと思う。』

### 教師のコメント

そうですね。

ナオ 「って、先生！ もうちょっと親身に受け止めてあげてくださいー！」

### Fクラス一同のまとめ

『この合宿中に女子とイチャついていた者は、全て異端審問にかけたいと思う！ 正直に名乗りでて来た者については我らの仲間になることで処刑は免除しよう！ さあ、異端者はどこのどいつだ！？』

### 教師のコメント

人の恋路を邪魔するものは馬に蹴られて死にますよ？ 余計なことはしない方がいいと思います。

ナオ 「先生！ コメントがまとも過ぎます！ コイツらが言うてることのハードさに気付いてください！ さもないと明久たちが血の海に沈むことに ハッ！ 殺気ぎゃあああっ！！！」

.....

時刻は朝食。昨日の事件から補習も終えたがそれから全然眠ることはできなかつた。

俺らの直ぐ側、睡魔は常に背後に立っているような感じだった。

「むにゃむにゃ.....」

明久が目の前にあるカロリーすら差し置いて睡眠を優先するなんて、よっぽどなんだろう。

「起きろ、明久。眠いのはわかるがもう最終日だぞ？ お前らが気合を入れないでどうする？」

「そうはいったって……ナオは眠くないの？」

「なに言ってるんだ？ 俺は寝てるぞ？」

「へっ？ 何を言ってるんだよナオ。今喋ってるじゃないか。」

「これは寝言だ。俺は今脳の動きを止めてしつかりと睡眠をとってるぞ。」

「……ほ、本当だ！ 鼻ちようちんが出てる！」

俺の特技、『寝ながら何でもできる』だ！ 何？ くだらないって？ 知るか！

「何か気合が入ればいいんだけど……ふあ……あふっ……」

「流石に眠いぞ……」

「zzz……」

「あ、ナオが寝言すら言わなくなった。」

「zzz……」

「この状態で気合を入れると言われたところで、そんなものが入るわけ ふおおおっ！」

「もにゃ！？ イッテ！ 舌嚙んだ！」

思わず驚いて起きる俺。舌嚙んじゃったよ……

「ど、どうしたの雄二ー！？」

ダルそうにしていた坂本が手に持っている何かを見た瞬間一気に覚

醒していた。なんだ？ 何を見たんだ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・効果は抜群。」

「よう、ムツツリーニ。おはよう。・・・・・・・・と、その後ろにいるのは翔太か？」

『きゃっほおおおおおううううううっ！！』

わけわからん奇声を上げているがあれは多分翔太だろう。・・・・・・・・  
・覚醒中？ よくわからないが。

「ムツツリーニ。今しがた雄ニに見せたのは何じゃ？ えらく興奮  
しておるように見えるんじゃないか？」

「・・・・・・・・魔法の写真。」

ムツツリーニが誇らしげに胸を張る。コイツにしては珍しい。そう  
いった態度も取る時があるんだな。

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの？」

「・・・・・・・・（スッ）」

ムツツリーニが手に持っている写真を俺らに手渡す。さて、どんな  
ものが写っているんだ？

「魔法の写真だって？ 何を言っているんだか。僕らももう高校生  
なんだし、たかだか写真程度で気合が入るわけがないよね、ナオ？」  
「そうだよな明久。写真でいつも気合が入るなら毎日見てるよな？」  
「お主ら、見んのか？」

秀吉に言われて、視線をその写真に移す俺たち。

「ふおおおおおおうううっ!!」  
「ほう。これはまた……………」

ものの見事に覚醒した俺と明久。

ムツリーニが見せてくれた写真の一枚目は、昨日撮影した姫路と秀吉の浴衣姿だった。

姫路は上目遣いという女子の高等テクを使い、胸元が少し開いてた。これに覚醒しない男子はいないだろう。

「僕、生きてて良かった……………」

「俺ちよつと、向こう行ってくる。」

「え？ ナオ？」

「……………翔太。」

「おうナオ……………ようこそ!!」

『きゃっほおおおおおおうううっ!!』

思わず叫びに行ってしまうほど、俺の心は躍ってしまった。

くしばらくお待ちください

「んで、明久。二枚目は？」

俺は一通り叫んだ所で二枚目を見ようと思った。ムツリーニのとだからもう何枚か持っているんだろう。ふっふっふ……………」

よだれが止まらないぜ。

「えっと………」

渡された写真を捲ってみる。

すると今度は浴衣姿で迫るA代表にハーフパンツ姿の島田がツーショットで出てきた。

「きゃっほおお　　イッテ！　何するんだよ明久！」

「話が先に進まないでしょ！　ちよつと黙って！」

明久に諭されてしまった。

仕方ない。確かにうるさかったし、自重するか。

「それにしても凄いな……うまい具合に明久と坂本が写らないようになってるし、角度も完璧。もはやこれはプロが撮ったグラビア写真だな。」

全員が浴衣じゃないのはちよつと残念な気がするが、これはこれで悪くない。

「まだあるみたいだな。」

「そうだね次は　　」

次に写っていたのは、優子の浴衣姿だった。

「ごはあああつっ！！」

「ナオ！？　血なんか吹き出したりして大丈夫！？」

「大丈夫じゃない……問題ありすぎ……ゴふっ。」

「ここ、これはもう見せないで俺の懐にしまっけてしまいたいくらいだ！」

俺と対面していたときの優子だろうか？ すこし瞳がトロンとしていて、いつもの強気そうな感じとは違って妖艶に見える。というか浴衣も少しはだけているから色気百倍だ！

「ムツツリーニ。合宿終了後にこのデータを頂けるか？」

「……………お安い御用。ただ、値は弾む。」

「小切手でいいか？ ゼロは五つほど。」

「小切手！？ どれだけ欲しいのさ！」

「……………交渉成立。」

よし、これで合宿が終わった後もパーリィ ナイトだ！  
(自分で正直よくわかってない)

「あれ、もう一枚ある。なんだろ」

ラストの写真は セーラー服姿の明久。

「……………綺麗に撮れたので印刷してみた。」

「放して秀吉にナオ！ このムツツリの頭をカチ割ってやるんだ！」

「落ちて着け明久。よく撮れてるから別に恥ずかしくないって。」

正直、メツチャ痛いヤツだけど。

「驚いたぞムツツリーニ。まさかここまで凄い写真を撮るとは。」

先ほどまでとはうってかわって、目に輝きを放っている坂本が言う。コイツはあまり女子に興味を示さないはずなのにも拘らずこの反応。他のヤツが見たら興奮は間違いない。

「坂本はA代表の浴衣姿で興奮してたん  
蓋が割れる!!」

頭蓋が、頭蓋が、頭

「ナオ。もう一度言ってみる。」

「もう言いません！ すみませんでした！」

頭部を握られ痛み悶える俺。くっ………やっぱりきたか……  
もうちよつと慎重になればよかった。

「まあとにかくだ。これで増援も期待できるといつわけだ。」

「確かにこれで奮い立たないヤツはいないな。」

特に優子のは今すぐにでも頂きたいくらいだ。

「………これ、皆にも見せないダメかな？」

明久が本当に物欲しそうにその写真を見つめている。………  
大丈夫。俺もその気持ちはわかるから。

「明久。俺たちの目的を忘れるな。大局を見誤る人間に成功はないぞ。」

「う………それはそうだけど………」

坂本がいつも以上に厳しい目をして言った。確かに坂本の言うとお  
りだが、目的が目的なので見誤ってもいいと俺は正直思う。

「ごめん。確かに間違えていた。この写真は目的の為の手段だし、  
そんな未練は断ち切る。後でムツツリー二に1グロスほど焼き増し  
してもらっただけで我慢するよ。」

「一グロスって144枚だよな。」

「多すぎだろ。」

「未練タラタラじゃな。」

「ほっという欲しい。」

さてそんなことは置いておいて。

「それじゃ早速」

坂本がどこからかペンを取り出し、写真の裏に荒々しく何かを書き殴った。

『この写真を男子全員に回すこと。女子及び教師に見つからないように注意！ 尚、パクったヤツには浅斬直貴の名の下に“お婿にいけなくなるような”私刑を執行する。』

「……………なぜ俺……………？ といつかなんだよ、お婿にいけなくなる私刑って。」

「下半身、主に局部を集中とした暴打を行なう。」

「ひでえっ！？ っていうかそれをなぜ俺が執行しなきゃいけないんだよ。」

「お前は昨日の暴走事件で暴力に躊躇いが無い男と思われているはずだからな。俺の名前で出すより、お前の名前を出した方がよりパクられる確立が下がる。」

ヤバい。全く覚えてないから逆に俺が何したのかが気になる。最低でも殺人は犯してないといいなあ……………

「おい須川。コレを男子に順番に回してくれ。」

近くで食事をしていた須川は眠そうな表情を見せながら疑問符を浮かべていたが、写真を受け取った途端、

「ふおおおおおーっ!!」

覚醒した。

「ところで雄二。僕の写真はきちんと抜いておいてくれた？」

「安心しろ。あんなものを流したら士気がガタ落ちだからな。キツチリ抜いておいた。」

「そっか。それはよかったよ。」

「大丈夫だ。これはきちんとして俺が持っているから。」

「ああ、そうなんだ。でもなんでナオが？」

安心しておけ。これは俺が大事にしてくれそうな人の下に嚴重に持つていくから。ふふふ……これでえ覗きの成功確率が上がったぜ……! ふっふっふ……

「ちよ、ナオ？ 僕の写真どうする気？」

「え!？ あ、えと。き、企業秘密で。」

「怪しい……その後ろ手に隠したものを見せる!」

「あ! 待て引っ張るな アッ!」

俺が隠していた写真が明久の手に渡ってしまった。まずい……  
・アレには

セーラー服姿の明久(WITH パンチラ)が!

「えっと、じゅ、需要があるんだよ……」

「放して秀吉！ コイツの脳髓を引きずり出してグチャグチャにしてやるんだ！」

「ワシは何も見ておらんから！ とりあえず落ち着くのじゃ！」

なにはともあれ、ここに来て俺らの気分は最高潮に達っていた。

さて、どこかな……。つと。お、いたいた。  
俺はAクラス男子説得のキーマン、久保利光を手中に収めるために久保を探していた。

「久保くん？ 今暇かな？」

「見ての通り自習中だ。話しかけないでくれるかい。」

「おやおや。随分とお怒りのようで。」

ま、コレを見てそんなこと言っただけかな？

「全く……。君が来たということはこの前の話の続きだろうか？」

「僕は断ったはずだが。」

「確かにそうだったなあ。でも、もう一度俺の話聞いてくれたら同じ台詞が返ってくるとは到底思えなくてだな。また来てみた。」  
「……………何が言いたいんだい？」  
「それが知りたいなら、前に座ってもいいか？」  
「……………どうぞ。」

久保は警戒しつつも俺の話の聞く気になってくれたようだ。さて、作戦決行だ。

「よいしょつ　おっとと（ふわっ）。手が滑った。」

「？　何か落としたようだか」

久保は俺が落としたものを見て一瞬動きを止めた。そして軽く笑うところ切り出してきた。

「……………いやらしいことをしてくれるじゃないか。」

「……………それで手を打ってくれないか？」

「それは脅迫かい？　僕が彼のことを好きだということ了他の人間にバラすという。」

「いや、そんなことはしない。そんなことをしても俺には何のメリットもないからな。」

この場では協力を求めることが目的だ。無闇に脅迫なんかして、久保みたいな頭の良いヤツが素直に応じなかった場合が一番怖い。何されるかわからないからな。

「いいか？　これはあくまでも“お願い”だ。無理強い言ってなんとかしようと考えてるわけではない。しかもだ。成功報酬にはそれ以上のものを進呈してあげようじゃないか。」

「こ、これ以上……………だって？　そ、それは一体！」

「ここから先は企業秘密だ。この先を知るにはお前が俺らに協力するしか他ない。ま、その写真は前金だと思ってくれ。ちなみにお前が作戦に協力してくれなくてもそれはお前にやるよ。」

「……しかし僕は、」

「世間体が気になるのか？」

「……」

その気持ちは分からなくも無い。だが、それは個人の嗜好であるから俺がとやかく言う問題ではない。

「ちなみに、この覗きはなにも女子の裸を見ようとしてることを目的としているわけじゃないんだ。」

「？ それはどういう……」

「実はだな……（もしよもしよ）……という訳なんだ。」

「そ、そんなことを彼はされていたのかい!？」

俺は久保に事件の全貌を教えた。最初の覗き事件も、今なぜ俺らが覗きに躍起になっているかも、包み隠さず全部。

「なるほど……だから彼らはそこまで覗きに必死なのか。」

「ま、そんなところだ。」

「？ だが、その写真の流出を止めようとしているにも拘らずなぜ君はこの写真を僕にくれるんだい？ それじゃあ本末転倒じゃないか。」

確かにそうだ。そうなんだけど……

「それはそうなんだけどさ。お前はそんなことしなかな、って思ったから。お前は常識を少なからず持っているし、人の嫌がるような

ことはしないはずだ。まして好きな人のことになったら尚更だろう。

「……………」

「明久も同じように考えてるはずだ。」

「吉井君も……………」

「明久は少なからずお前に良い印象を持っている。ここでお前が覗きに加担してくれたなら、明久はお前のことを心の底から感謝するだろう。」

「……………なるほど。」

トドメだ。

「逆に考えてみるよ？ 世間体がなんだ。そんなものよりも自分が覗きに参加しておけばこんなことには、とそのことが終わったときに後悔するほうが嫌だろ。お前はやって後悔するよりもやらないで後悔する方が良いのか？ そんなことじゃこの先の人生においても一歩たりともお前に成長の機会は訪れないぞ。」

「……………」

「それでもお前が世間体を気にして、明久に協力しないというのであればそれはそれで俺は何も文句は言わない。その写真だけで幸せになるんだな。」

「……………」

決まった。久保は絶対に断らない……………と思う。

「返事はいつでもいい。ただし、終わってからじゃ遅いということ  
は肝に銘じておけよ？」

「……………僕は、どうしたら……………」

まあ悩むが良いさ。好きなだけ悩んで、そこで出た答えがお前にと

って一番良い結果なんだろうさ。俺はそれにどつどつ立つ立場じゃないから何も言わないさ。  
俺は席を立ち、その場を後にしたのだった。

カチツ　カチツ

時計の針が小刻みに鳴る。今まで気にしてなかった分、大きく聞こえるのは何かの錯覚が作用しているのだろうか。

「やっと、ここまできたな。」

「ああ、そうだな。」

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな。」

今日は殆どの時間を点数補充に費やした。根回しもできなく、写真がちゃんと全員に行き渡ったかどうか問題だろう。結果は始まってからわかるということだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・今日こそ借りを返す。」

その見た目とは反して大きな闘志を燃やすムツツリー二。あの写真は本人からしても会心の出来だったみたいで、ムツツリー二は昼間の補充テストを凄いい勢いで解いていた。今夜、ムツツリー二が狼になる・・・・・・・・！！

「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを始めるぞ。」

坂本が瞑っていた目を開ける。これが、ラストチャンスだ。

「オレ達がいるのは三階だから、三階・二階・一階・階段の手前・女子風呂前、の五箇所を突破しないと目的地にはたどり着けない。」

長い道になりそう。特に階段の手前には戦力が集中するだろう。ここは俺と坂本がある作戦を使って明久とムツツリー二を突破させる予定だ。

「三階の敵はE・Fクラスの仲間が抑えてくれる。二階の敵はDクラスが抑えてくれる手筈になってはいるが・・・・・・・・」

「Dクラスだけだと少々厳しいようじゃな。」

「その場所は確か理科だし、俺が行けたら良いんだけど・・・・・・・・」

「お前は主力部隊に当たってもらって予定だからな。Cクラスたちの援軍が来ることを祈ろう。」

ここで俺が力を使うことは許されない。主力部隊を突破するには全が必要だからだ。俺が少しでも消費をしたらその場の突破はかなり難しいものになるだろう。

「でも、ここまでできたならやるしかないよ。」

「勿論そのつもりだ。それで、二階を突破するとさっきも言ったが

」

「……強力布陣が敷かれている。」

「そうだ。学年主任の高橋女子やAクラス女子。恐らくここに姫路、翔子、工藤愛子、木下優子に加えて転校生軍の神咲亜矢や川村優もここにいると思われる。」

「優はともかく、亜矢はそこにいないと思うぞ。」

「ん？ なぜだ？」

「アイツはかなり好戦的だからな。突破部隊、つまり俺らを潰すために三階に配置されるはずだ。」

「そうか？ 俺なら絶対にそこに配置するんだが。」

坂本はアイツの性格を知らないからな。

「いいか坂本。亜矢が目の前に転がってる面白そうな玩具を目の前にして自分から仕掛けてこないなんて有り得ないんだ。」

「……本当にそうか？」

「絶対だ。部屋の目の前に立っててもおかしくない。」

「ふむ、そこまで言うなら信じるが。」

坂本は渋々俺の言うことを聞いてくれた。

まあ、亜矢の見た目からはそんなことをしてくるといつ予想すら立たないだろうしな。

「明久とムツツリー二を通す一瞬の隙はオレが作る。だが、翔子や他の女子をそのまま足止めできるかどうかは難しいと考えてる。その辺はしっかりと覚えておいてくれ。」

俺たちが優子やA代表、その他にいるかもしれない女子の相手をするのは正直かなりきつい。だが、昨日とは一味違う俺の能力を見せ  
てやる……覚えてないが。

「わかったのじゃが、もし足止めできねば……」

「ああ。明久とムツツリー二は前後を挟まれて終わりだ。作戦は失敗。俺は翔子に残りの人生を奪われ、明久は変態として生きていくことになる。」

「それは今と差ほど現状が変わってない気がするんだが……」

「なんてこと言うんだ。」

ごめん。言い過ぎた。

「とにかく、その場は根性でなんとかするしかない。A・Bクラスが協力してくれば何とか勝機はあるんだが。」

「ふむ。Aクラスはともかく、Bクラスは大丈夫じゃろ。きちんと全員が、特に代表格が女に興味を持っておるからの。あの写真が効くはずじゃ。」

「あははっ。秀吉の言い方だとAクラスの男子代表格は女の子に興味がないみたいだよ?」

「……………」

スルーの方向性で。

「と、とにかくだ。そこまで行ったら後はお前たちの仕事だ。わか  
ってるな?」

「……………大島先生を倒す」

「そして僕は鉄人、だね。」

「……………坂本。一つだけいいか？」

「なんだ？」

「翔太はどこに割り当てられるんだ？」

「あ……………」

忘れられてたな……………ていうか翔太の姿が見えないんだが。

「とにかく水樹はどこかにいてもらう。どこかだ。」

「忘れられる方も悪いけど、こういう対応も悪いと俺は思うなあ……………」

でも、本当にアイツどこに行ったんだ？

「……………大丈夫。水樹君がいなくてもきつとうまくいく。」

「当然だな。」

「じゃな。」

……………翔太。ドンマイ……………」

しかしこのメンバーなら何でもできる。不可能を可能にする力が俺らには、ある。

「ピッ

部屋の時計が鳴った。これは八時を告げる時報。戦闘開始のゴングだ。

「……よし。てめえら、気合いは入っているか！」

「……おうつ！」

「女子も教師もAクラスもFクラスも関係ねえ！ 男の底力、とくと見せてやるうじゃねえか！」

「……おうつ！」

「これがラストチャンスだ！ 俺たち五人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外に結果はありえねえ！」

「……当然だつ！」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣<sup>で</sup>ぞ！」

「……よっしゃあああああ！！」「」「」

強化合宿四日目二〇〇時。今、俺たちのプライドを巡る最後の勝負が始まるうとしていた。

## 第58話 やらない後悔より、やる後悔（後書き）

どうも三日月だったりします。

いきなりですが次回の話をします。なぜですか？ 自分が楽しみで仕方ないからですっ！

今回は覗き前半戦。この場ではナオ、もしくはその他が活躍する場面です。翔太も一応入ってます。というか何割か翔太の見せ場になりますので、翔太ファンの皆さん（いるか分かりませんが）は期待して置いてください。

順序が逆だとは思いますが今回の話はどうでしたか？ 久保君とのやり取りですこしでも納得していただける節があるなら貴方と私は同士です（笑）

後悔する前に、行動を起こせ！ ということです。

それでは感想お待ちしております！

以上、三日月でしたっ！

第59話 得意教科は数学です(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 9

・眠さのピーク - 1

・坂本が覚醒する + 1

・翔太が変な覚醒をする - 1

・俺も変な覚醒をする - 1

・優子の浴衣姿に思わず吐血 + 3

・久保を説得しに行く + 2

・好感触で説得を終える + 1

現在の青春ポイント合計 - 5

## 第59話 得意教科は数学です

問題 以下の問いに答えなさい

『打って変わってという言葉の意味とそれを使っての例文を考えなさい。』

姫路瑞希の答え

『意味：前の状態・態度と全く変わること。』

例文：昨日の天気とは打って変わって快晴になった。』

教師のコメント

正解です。この言葉は日常でもよく使うかもしれませんが、覚えておいて損はないでしょう。

吉井明久の答え

『意味：野球で球を打ってアウトになってチェンジすること。』

教師のコメント

確かにそれでもありますが、今回の問題ではあくまでも前の状態とは全く変わるといふことなのでその意味合いとしては間違っています。

土屋康太の答え

『例文：彼はクスリを打って、変わってしまった。』

教師のコメント

今すぐ病院に連れて行ってください。

.....

『いたわっ！ 主犯格五人組よ！』

『長谷川先生！ 向こうの五人をやります！』

部屋を出てすぐに長谷川先生（数学教師）率いる女子部隊が展開されていった。どうやら俺たちは一番の危険人物者としてマークされているようだな。

「ふん、雑兵共が。俺に敵うと思うなよ。」

試<sup>サモン</sup>獣召喚！

先行してきた女子二人に対して坂本自ら相手をする。まあ坂本にとつたら腕慣らしってとこだな。調子に乗ってた頃ならともかく、今の相手は坂本の敵じゃない。

『Eクラス 古川あゆみ & 源涼香 VS Fクラス 坂本雄二  
数学 83点 & 77点 VS 224  
点 』

「勉強してから出直してきやがれっ!」  
『きやあああーっ!』

坂本は素早い動きで接近し、それぞれにメリケンサックを叩き込む。たったの一撃で勝負はついた。試召戦争の経験すらないEクラスが勝てる相手ではない。

「流石だな坂本。間髪いれずに女子を葬るなんて、悪役う〜。」  
「それは違うぞナオ。俺はあくまでも障害として相手を倒したまでだ。」

「あはは。そっか。ごめんごめん。」  
でも、それを躊躇なくできるところが怖い。

「坂本君! 待ちなさい!」

倒された女子二人に遅れてグループの頭の長谷川先生が<sup>すが</sup>縋ってくる。でもその動き、遅いぜ?

「長谷川先生。残念ながらここは通しませんよ。」

長谷川先生と俺らのの間に入ってきたのは、我らがFFF団会長、須川亮とその他の面子だ。

「吉井、坂本、浅斬！ ここは俺たちに任せて先に行け！ 試獣召喚サモ！」

『『『試獣召喚サモっ！』』』』

壁を作るように須川たちが召喚獣を並べる。

「頼むよ須川君！」

「頼むぜ須川！」

「任せろ！ それより、きちんと鉄人を倒しておけよ！ そうじゃないとここを片付けた後で覗きにいけないからな！」

「わかつてるよ！ 女子風呂でまた会おう！」

須川に背を向けて走る俺たち。後ろからは教師を前に一步も退かないFクラスの勇者たちの怒号が響いてきた。

『翔子たん！ 翔子たん！ はあはあはああっ！！』

『島田のぺったんこおーっ！』

『姫路さん結婚しましょおーっ！』

『亜矢さんのナイスバディーっ！』

『木下姉妹の【自主規制】ーっ！』

皆死んでしまえ、と心の中で思ったのは内緒にしておこう。

「全員やられてしまえばいいのに。」

「まあ待て明久。そんなこと言って本当にやられたらどうするつもり」

そこまで言った時だった。

『『『ぐわあああつっ！！』』』

後ろから物凄い叫びが聞こえてきた。 . . . . . 本  
当にやられた？

「雄二！ 後ろから断末魔の叫びが！」

「なんだと！？ Eクラスは戦争慣れしていないから須川たちでもいけるはずなのになぜだ！」

. . . . . 俺の予感、的中って所かな。

倒された須川たちの前に立っていた女子。そいつが口を開いた。

「ったく。それでもアンタたち男？ このくらいの攻撃耐えられなくってどうするのよ。」

. . . . . 亜矢だ。やっぱり先陣を切ってここに来ていたか。

「あら、ナオじゃない？ ここで戦ってると思ってたのに。」

「. . . . . 俺たちは突破部隊みたいなもんだからな。お前こそ何でここに？」

「Eクラスさんだけじゃ心もとないから私が入ってあげたの。戦争慣れしてないって言うし。」

それはお前もだろ。

「畜生. . . . . 坂本。ここは俺に任せて先に行け。」

「だ、だがお前がないとこの先で」

「ここで全滅したいのか？」  
「……………」

このフィールドは数学。つまり亜矢の独壇場。この場では坂本の召喚獣ですら厳しい。ここで全員やられるよりも俺が残ってできる限り亜矢の点数を減らした方が得策だ。坂本は頭では判っているよ  
うだが、

中々行動に移せないようだ。

「大丈夫。必ず無傷でお前のところに戻ってやる。安心してくれ。」  
「……………くっ！ その言葉、嘘だったら承知しないぞ！ 行くぞお前ら！」

「え！？ でもナオが一人で、」

「これはあいつが言ったことだ。俺らがとやかく言うことじゃない。先を急ぐぞ！」

「う、うん……………ナオ！ アガルタ理想郷でまた会おう！」

「おうっ！」

さてと。明久たちは行った。しかし無傷で勝つとは言ったもの……

「話は済んだかしら？」

「ああ。わざわざ待ってくれるなんて良心的だな。」

「そう？ ありがとう。」

「これで心置きなくやれるよ。」

この間の勝負のお陰で、亜矢と俺には数学においてかなりの差がついていることはわかっている。この状況はかなりヤバイと自分でも思う。

「それにしても、無傷でアタシに勝つて言った？ この前のだってボロボロだったくせに、無傷でなんて勝てるわけないでしょ。」

そう。確かに亜矢の言うとおりだ。俺がこの状態で亜矢に勝負を挑んだ所で勝てるとは到底思わない。だが

「俺には曲げられない信念フライドみたいなものがあるんでね。行くぞ

試獣召喚サモンっ！」

「やる気みたいね 試獣召喚サモンっ！」

俺と亜矢はそれぞれ召喚獣を呼び出した。

『Fクラス 浅斬直貴 VS Fクラス 神咲亜矢  
数学 321点 VS 475点  
』

やっぱりそうか。今回は更に数学のデキが悪かったからそんなものか。このままだと勝つことはおろか、勝負にすらならない。

「あれ？ ナオ。勝てる自信があったから私と戦おうとしたんじゃないの？」

「ん？ それはやってみないとわからないだろ？」

この点数で勝つことはできない、と自分でもわかっている。だが、やるときはやらなくちゃいけないのが男つてものだ。

「余裕なんだ。でもさ、アンタじゃ私を倒せないわよ。点数差は100点差以上なんだから。」

「……………余裕なんかじゃない。俺だってそのくらいわかる。」

「そうね。点数を見て怖気づいちゃってるしね。」

それは、違う。だがなにかを言ったところでスイッチの入った亜矢を止められるとは到底思えない。絶対に勝てない点数差だってわかっている。だからこそ

「そうだ。この点数じゃ俺は絶対にお前に勝てない。だから

翔太。やってくれ。」

「え？」

「りょーかいつ。」

ズドンッ！

銃声が響き渡る。その直後、亜矢の召喚獣は

『Fクラス 浅斬直貴 VS Fクラス 神咲亜矢  
数学 321点 VS 0点』

戦死した。

「そ、そんな……！どこから！」

「お前はこの勝負がよいドンで始まるんでも思ってたのか？　これは“戦争”だぞ。卑怯な手段でさえ、それは有効なんだ。特に不意打ちってやつはな。」

翔太は部屋から出ずにずっと隠れていた。俺はそれを知っていてわざわざ亜矢に勝負を挑んだのだ。翔太は俺の点数を見て油断した亜矢の召喚獣を背後から撃ちぬいた。

打たれた場所は頭。勿論、亜矢の召喚獣は頭に防具をつけていない。一撃で戦死だ。

「くっ！　水樹ね！　卑怯よ！」

「言っただろう。これは戦争だ。卑怯もクソもない。暗殺者の一人スナイパーや二人、いたっておかしくないだろ？」

俺は冷たく亜矢に言い放った。たとえこれがどんなに卑怯だとしても俺は皆の、明久たちの意志を引き継いでいる。この勝負、どうやって負けるわけにはいかないのだ。

「翔太。お前の召喚獣の武器が銃でよかったよ。接近戦用のヤツだったら勝ち目はなかった。」

「いやいや。こっちこそトイレに行つてて悪かった。お腹が痛くて」

翔太がこちらに向かつてくる。一応先生の近くは通らずに。

俺は翔太の召喚獣の武器が銃なのは知っていた。きつとそれはコイツの趣味の影響だろう。まあそのお陰で宣言どつりに無傷で勝つことができた。

「さて、翔太。亜矢は消えた。残るは、Eクラスと長谷川先生だけだが……一人でやれるか？」

一度、翔太の召喚獣が姿を消す。亜矢の召喚獣を戦死にさせたからだろう。

「はいはい。俺を誰だと思ってるの？ “国際数学オリンピック元日本代表”だよ？ そんな俺がこんなヤツら倒せないわけないじゃん。」

「頼もしいな。じゃあ……ここは任せるぞ！」  
「おっつ！」

翔太に背中を任せて先に進む俺。アイツが俺より優れているのは知っていた。運動もできて、顔も結構かっこいい。性格がエロいのは本当に残念だ。そうじゃなかったら少しはモテるのに。

俺は翔太に背を向け、全速力でその場を後にしたのだった。

.....

「み、皆！ 亜矢さんはやられちゃったけど残りは一人よ！ きつと楽勝よ！ 試獣召喚っ！」

『『『試獣召喚っ！』』』

相手が召喚獣を出す。ざっと数十人はいるだろうか。

こんな状況で圧勝を考えているわけではない。まだ俺は召喚獣の操

作に慣れていない。俺が真っ先に考えたのはまず、どれだけ自分の体力を失わずにこの場を勝つか、ということだった。

『貴方って転校生なんでしょ？ それじゃあ召喚獣の扱いなんて慣れてるわけないわよね。』

『この状況で勝てると思わないことよ！』

『頼りになる浅斬君と一緒に戦えばわからなかったかもしれないのに。』

女子から俺に向けて威嚇とも取れる声が聞こえる。確かに召喚獣の扱いになんて慣れてなんかいないさ。最近来たばかりなのに。でも、俺だって足ばっか引っ張ってられない。俺だって、ナオのように人のために頑張れるヤツに俺はなるんだ。

「<sup>サモン</sup>試獣召喚。」

俺は応戦のため召喚獣を呼び出す。見た目は迷彩カラーの服に黒いジャケット姿といった風貌だ。背中に長距離用ライフル、腰に中距離型マシンガン、右手に22口径ピストルを攻撃装備に持っている。きつと俺の趣味が関係してるんだろうなあ、うん。

その点数は

『Eクラス 女子数十名 VS Fクラス 水樹翔太

数学 平均86点 VS 791点

』

『なつ………！ 791点！？ そんなの勝てるわけないじゃない！』

これが、国際数学オリンピック元日本代表の力だ。お前らが束になつてかかつてきたとしても、お前らじゃこの数学に対する俺のプライドは折れやしねえぜ！

「俺はこれから康太の応援にも行かなきゃいけないんだ………  
まとめてかかつて来いよ！」

俺とEクラス女子のプライドをかけた戦いの火蓋が今、切つて落とされた。

俺が階段を慎重に（これ重要）降りていくと、下の階からとある生徒たちの怒号が聞こえてきた。



階段を降りて気付いた。そういえばAクラスは来ただろうか。そんなことが脳裏に浮かんだ。  
「……………久保のことだ。まだ悩んでいるはず。  
俺は少し考えてからAクラスのいると思われる部屋に行ってみることにした。」

明久SIDE

その頃。

「……………雄二。悪戯はそこまで。」  
「明久君、ここは通しませんよ。」  
「翔子かっ!」  
「姫路さん……………っ!」

ナオと分かれてから数分経った頃。僕らは今、佳境をむかえていた。

「Aクラスがおらんようじゃな……」

周囲を見回した秀吉が悔しそうに言う。観察してみるとこの総合科目戦闘でも、離れたところの物理科目戦闘でも、Aクラスの生徒らしき姿は見当たらない。結局立ち上がったくれたのはBクラスだけだったのか……。

「アレ？ 浅斬君はいないんですか？」

「ああ、うん姫路さん。実はさつき神咲さんに数学勝負を挑まれていて、それで一度分かれたんだ。」

「そうなんですか。それなら大丈夫ですね。」

「へ？」

何が大丈夫なんだろう。ナオがここにいると何かまずいのだろうか。

「亜矢さんは私より点数が高いと言っていましたし、浅斬君がやられるのも時間の問題ですね。」

「なんだって!？」

そんな!？ 突破力のあるナオがここにこないと作戦は成功しないはずなのに!

「ちつ……! オマケに随分と用心深い布陣だな、クソっ!」

階段前の向こうの配置を見て雄二が吐き捨てる。階段の真ん前に高橋先生がいて、先生はそこを動く気配を見せない。その周囲に姫路さんや霧島さん、他にもAクラスの女子が何人が立っている。あくまで高橋先生は階段を通過しようとする者を打ち倒すだけみたいだ。先生があの場合を動かない以上、隙についての突破は難しい。

(雄二、例の隙を作る方法はどうなってるの?)  
(それは問題ない。が、通過した後で地下に挟み込まれる確率が高い。最低でもこの連中を引き付けておく程度の戦力がないと話しにならない。)

学年でも一位二位を争う二人に加えて、その二人の更に倍近い点数を持つ教師(ムツツリー二情報)が道を塞いでいる。他の人ですら気を抜けないのに、この状況はあまりにも厳しすぎる。BクラスはBクラスで物理の木村先生と英語の遠藤先生に手間取ってるようであ援軍は期待できない。

「……雄二。お仕置き。」

「くっ！ 根本バリアっ！」

「さ、坂本っ！ 折角の協力者にその扱いはあんまりじゃないか！？」

『Aクラス 霧島翔子 VS Bクラス 根本恭二きょうじ  
総合科目 4762点 VS 1931点』

ダメだ。霧島さんの召喚獣は格が違いすぎるBクラス代表の……

「誰だっけ？」

「根本だ！ 根本恭二！」

ああ、そうだ。Bクラス代表の彼ですら一撃で葬り去られるなんて。

「名前教えてやったのに頭の中で“彼”って言いやがったな!？」  
「さて、そんなことはどうでもいい。」  
「あっさりスルーかよ!？」

根本君なんて駄キャラに無駄に時間を使ってる場合じゃないんだ!

「さあ明久君。おとなしく降参して下さいね。」  
「くっ……!」

姫路さんが召喚獣を従えてこちらに向かってくる。近くでは同様に雄二が霧島さんに追い詰められている。

『もうこれ以上は無理だ……。姫路に霧島に高橋先生なんて勝てるわけがない。』  
『だいたい、姫路と霧島が入っていないのなら覗く価値がないじゃないか。』

残された男子たちの弱音が聞こえてきた。

「諦めちゃダメだっ! ここにいないってことは、木下優子さんや美波がお風呂に入っているはずなんだ! 覗く価値は十分にあるはずだっ!」

向こうもお風呂に入らずに過ごせるわけがない。つまり、ここにいない女子は今入浴中はずだ!  
そんな僕の励ましの言葉を聞いて、秀吉が驚いたようにこちらを向いた。

「明久。なぜここまで圧倒的に不利な状況にありながら諦めないのじゃ? お主は《観察処分者》じゃ。痛みของフィードバックもある。

そこまでして写真を取り戻そうとして、苦しい思いをする必要はないじゃろっ?」

秀吉の疑問はもつともだ。観察処分用の召喚獣で戦う以上、僕には召喚獣が受けた痛みが返ってくる。

ここまで圧倒的に不利な状況なら、恥ずかしい写真のことなんか諦めて余計な痛みを味わう前に投降するべきだ。でも

「でもね秀吉。そうじゃないんだよ。」

「そうじゃ、ない?」

秀吉の言っていることは違う。僕の行動する原理はそんな優しいものじゃないんだ。

「確かに最初は写真を取り戻すつもりだった。真犯人を捕まえて覗きの疑いを晴らすつもりだった。……でも、こうして仲間が増えて、その仲間たちを失いながらも前に進んで、初めて僕は気がついたんだ。」

「明久。お主、何を言って」

そう。僕はやっと気付いたんだ。僕は自分に嘘をついていたってことを。理由をつけて、本当の気持ちを隠してきたってことを。

いくら偽ろうとも、僕の目的はただ一つ。これこそが、貫くべき僕の信念

！

「たとえ許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない。正直に言おう。今、僕は純粹に欲望の為に女子風呂を覗きたい!」

「お主はどこまでバカなんじゃ!？」

もう脅迫なんて関係ないんだ! 真犯人ですらどうでもいい! ただ僕はあの写真に写っている女の子たちのいる伝説の地ヴァルハラを目指して突き進むだけなんだ!

「明久君。そこまでして私じゃなくて美波ちゃんのお風呂を覗きたいんですね……! もう許しません! 覗きは犯罪なんですからねっ!」

姫路さんが召喚獣に攻撃指示を出した。敵わないとしても、僕は自分の信念を曲げずに戦い抜いてみせる!

「世間のルールなんて関係ない! 誰にどう思われようと、僕は僕の気持ちに正直に生きる! 試験サモ召 ー!」

召喚獣を呼ぼうとした瞬間だった。その時、

『お前はとんだバカ野郎だあああああつっ!』

聞き覚えのあるドジの声が聞こえてきた。

その直後、

「どっえっ!」

とび蹴りが僕の背中にクリーンヒットした。せ、背中に穴があいたような感覚が……!」

「お前はどんだけバカなんだよ!? 自分の発言にもっと責任を持って!」

とび蹴りしてきたのは僕の予想通り、ナオだった。

「痛つてて……! ナオ! 遅かったじゃないか! どこで油売つてたんだ!」

「うるせえっ! それがわざわざ援軍を呼んできた人に対する台詞か! 捻り潰すぞ!」

ナオは怒りながらも僕を助け起こした。そんなことするくらいなら最初から蹴らないで欲しい。

「ナオ! 遅かったじゃねえか!」

「おうよっ! 援軍を呼んで、それで少し時間食っちゃまった!」

雄二がナオの到着により歓喜の声を上げる。そりゃそうだ。一人いるだけで戦力に大きな影響を与えるナオが戻ってきたんだ。これで僕たちの勝利がまた一歩大きく近づいた。

「な、なんで浅斬君がここにいるんですか!? 亜矢さんはどうしたんですかつ!」

「うん? ああ、そのことか。亜矢なら翔太の一撃を受けて戦死。ちなみに俺は無傷だ。」

「そ、そんな……!」

ナオの発言を聞いて衝撃を受ける姫路さん。そりゃそうだ。自分よりも点数の高かった人がその点数よりも低いと思われるナオに負けたんだから。これほどの恐怖はないだろう。

でも水樹君が神咲さんを倒した、って言ったところは意外だ。

「そついえばナオ。さっきから言ってるけど援軍って何のこと？」

先ほどから呼んで遅れたといっていたが、ナオが言っている援軍って一体……？

「おう。少しだけ時間はかかったが、連れてくることには成功した。喜べ。」

「話が見えないんだけど……？」

「もつとも、ついてきた理由はそれだけじゃないだろうがな。」

「へ？」

なんのことだろう？ そう思ったときだった。

『待たせたね、吉井明久君っ！』

どこかで聞いたことのある声が廊下に響き渡った。

「だ、誰ですかっ！」

ナオと今の声によって氣勢を削がれた形になり、召喚獣の動きを止める姫路さん。

「待たせたね、吉井君。君の正直な気持ちは確かにこの僕が聞き届けたよ。」

この声……！！まさかナオが言っていた援軍って！

「久保君っ！ 来てくれたんだねっ！」

「到着が遅れてしまつてすまない。踏ん切りがつかず、準備しながらもずっと迷つていたんだが……浅斬君やさっきの君の言葉を聞いて決心がついたよ。」

「決心が着いたつて、それじゃあ……！」

「ああ……今、このときより、Aクラス男子総勢二十四名が吉井明久の覗きに力を貸そう！ Aクラスの皆、聞こえているな？ 全員召喚を開始して吉井明久を援護するんだっ！」

『『『おおおーっ！！』『』』

たった今、この瞬間。僕の、二学年の男子全員の、覗きをしようという心が一つになった瞬間だった。

## 第59話 得意教科は数学です（後書き）

はい、三日月だったりします。

今回、翔太はどうでしたか？ ちよつとは皆の期待を裏切ることができたでしょうか？

前々から翔太は数学特化型にしようと考えていたんですけど、ストーリーの立案までに時間がかかって、最初に登場してから随分と紹介までに時間がかかったちゃいました。

その分、翔太の登場シーンはいつものヤツとは思えないような感じにしてありますので、喜んでいただけていたら嬉しいです。

今回はまあ、シナリオどおりに行きますがもしかしたら改変されるかも知れないですね。まあどっちにしても期待しておいてください。

あと、ナオの指輪は次回にはきつと登場させたいと思います！ 召喚大会からかなり時間も経っているので忘れちゃってる人も多いんじゃないでしょうか。大丈夫です。私も最初忘れてましたから（笑）

では、また次回お会いしましょう！ そして感想よろしく願います。（誤字脱字など）

以上、三日月でした。

第60話 SK5!! (戦闘開始、五秒前) (前書き)

前回の青春ポイント合計 - 5

・ 作戦開始! + 1

・ 亜矢、派手めの登場 - 1

・ 翔太で撃破 + 2

・ Aクラスの参加が見られずにショック - 1

・ 自分の気持ちに正直に + 3

・ 飛び蹴り - 1

・ Aクラス、覗き参戦 + 3

・ 二年男子の気持ちが、今ひとつに + 3

現在の青春ポイント合計 + 4

第60話 SK5!! (戦闘開始、五秒前)

「ちょこつとだけ前回のおさらい」

追い詰められた僕らに協力の手を差し伸べてくれたのは、Aクラス次席、久保だった。

「久保君！ 来てくれたんだね！」

「到着が遅れてしまつてすまない。踏ん切りがつかず、準備しながらもずつと迷っていたんだが……浅斬君やさっきの君の言葉を聞いて決心がついたよ。」

「決心が着いたつて、それじゃあ……！」

「ああ……今、このときより、Aクラス男子総勢二十四名が吉井明久の覗きに力を貸そう！ Aクラスの皆、聞こえているな？ 全員召喚を開始して吉井明久を援護するんだっ！」

「『『『おおおーっ！』』』」

こうして俺たちは崇高な一つの目的のため、心を一つにすることができたのだった。

そして今夜、最終決戦が始まつたりしなかつたりするんだぜ！

.....

ナオSIDE

「久保？ いるか？」

「ああ、浅斬君か。入ってくれたまえ。」

時間は少し前にさかのぼる。俺はまだ戦いに参戦していない久保に声をかけるべく、Aクラスの部屋に来ていた。

「いきなりで悪いんだが.....お前は参戦しないのか？」  
「.....」

いきなりだんまりか.....まあ無理もない。これは本人だけの問題だ。俺がとやかく言っても無駄だろう。

「もう準備はできているんだ.....」  
「なに？」

準備ができている、だと？

「ならなぜ、」

「僕にだって気持ちの整理ぐらいさせてくれ。僕だって、悩みぬい

てここまできたんだ。今更参加しないなんて言いやしないよ。安心してくれ。」

「・・・・・・・・時間ばかりそうか？」

「・・・・・・・・あと少し、待ってくれ。」

そんなことをしていたら時間が経って明久たちがドンドン不利になっってしまう。ここは早いところ久保に参戦させてこの状況を打開した方が良いはずだ。

「久保。終わってからじゃ遅いんだよ。明久はお前の参戦を望んでいるんだ。」

「吉井君がかい？」

「ああ。このまま時間が経てば、いずれ明久たちも不利になる。そうなる前にお前には来てもらいたいんだ。」

「しかし僕は、」

「いつまで引きずってる！細かいことについていつまでも捕われているようじゃ、お前には一生前に進むことはできないぞ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

俺は久保を焚きつけようとしてできる限りの努力をしなくては。

「とにかくお前はAクラスの男子全員を連れて階段前まで行くんだ。そうすれば、きっとお前の納得するような答えが待っているはずだ。」

「僕の、納得するような答え・・・・・・・・」

悩んでる暇はない。もう戦闘は始まっているんだ。こんな所でウダウダしてるくらいなら勉強してる方がまだマシだ。

「おら！ とつとつと行った行った！」

「うわっ!?! 浅斬君!?!」

俺は階段前まで久保の背中を押す。ちょっとくらい無理矢理なくらいがコイツには丁度いい。そうすればアイツの心にも響く声が聞こえてくるはずだ。

「全く君は……乱暴はよしてくれたまえ。」

「お前が嫌々言わなきゃこんなことはしてない。だからお前が悪い。」

「なんて理不尽さだ……。呆れるよ。」

「そんなことより、だ。決心ついたか?」

「……。まだ……。」

「ここまで来て何言ってるんだお前は。」

「……。しょうがない。最後の説得だ。これでダメなら諦めよう。」

「明久はな。最初覗きをするときお前と同じ気持ちだったと俺は思うんだ。」

「吉井君がかい?」

あくまでも俺の推測だが。明久はもう写真なんかどうでも良いはずだ。だからこそ、アイツがこの覗きに参加している本当の理由をコイツに教えよう。

「個人の理性、周りの目、世間体。理由をつけて、本当の気持ちを隠してきたってことだ。アイツは、自分の写真がばら撒かれることはもう問題じゃないんだ。」

「じゃあ、何が一体吉井君を突き動かしているんだい? フィードバックもあるのに。」

「それは、もうお前にもわかるはずだ。」

「それは一体」

そこまで言ったときだった。

「たとえ許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない。正直に言おう。今、僕は　　純粹に欲望の為に女子風呂を覗きたい！」

ほうら。聞こえてきたよ。バカの心からの叫びが。

「久保。これを聞いてまでお前はまだ悩むつもりか？　今、お前は純粹に何がしたい？」

「……………そうだね……………吉井君。僕も、決心がついたよ。」

久保の瞳に炎が映る。スイッチは入ったようだ。これならもう心配ないだろう。

「そうか。わかった。んじゃ、俺は行ってくる。」

「どこにだい？」

「あんのバカにちよっくら制裁加えにさ。それと久保。ここまで来てくれてありがとう。」

「……………ああ。」

俺は久保に最後の礼をし、明久に向かって走っていったのだった。

「ありがとう、久保君！ 君たちの勇気に心から感謝するよ！」  
「感謝するのは僕の方だよ。そうさ、君が言った通り、自分の気持ちに嘘はつけない。世間に許されない想いであるうとも、好きなものは好きなんだ……！」

よし！ 久保に変なスイッチが入っているがそんなことはどうだっていい！ 今重要なのは

「ここを切り抜ける力だけだああああっ！！」  
「雄二っ！ いまだよっ！」

俺の叫びに女子が一步後ずさりする。この瞬間を明久たちは見逃さなかった。

「わかっている！ 明久、ムツツリーニ！ 階段へ向かって走れっ！」

援軍に驚くA代表を抜き、坂本が高橋先生の前に走り出る。明久とムツツリーニもそれに続く。

「まさかAクラスまで参加するとは思いませんでしたが、問題はありません。ここは誰であろうと通しませんから　　試験召喚。<sup>サモン</sup>」

「高橋女史！　ここは通させてもらうぜ！　行くぞ　　起動つ！<sup>アウェイクン</sup>」

あれが坂本が召喚大会で手に入れた白金の腕輪の効果………！　初めてみた。坂本の腕輪の能力は、召喚フィードの作成。つまり

「干渉ですか………！　やってくれましたね坂本君………

・！」

「行け明久っ！　鉄人を倒して、俺たちを伝説の地まで導いてくれ  
！」

「任せとけっ！」

異なる二種類の召喚フィードが展開され、双方の効果が打ち消された。この場に召喚獣がない今、相手は生身の女の人。あいつらが脇を駆け抜けるなんて造作もない。

『吉井たちに続けーっ！』

他の男子も続こうとするが………

「く………！　吉井君と土屋君は逃がしましたが、あなたたちまで通しはしません！」

その時には再び召喚獣を呼び直していた。

「流石は高橋女史。判断が早い………！」

坂本が呻きを上げる。

「なに格好悪い声出してんだよ。アイツらが失敗すると思うのか？」  
「そういうわけじゃないが……」  
「んじゃ信用してやれ。それだけだ。」  
「……ああ！」

俺は坂本と一緒に高橋先生と周りの女子を倒すことになりそうだ。  
やれやれ、大変な最終日になりそうだ。

『高橋先生！ 私たちが何人か下に行つてあの二人を倒してきます  
』  
「そうですか。わかりました、お願いします。」

奥の方でそんな会話が聞こえる。きっと明久たちへの追撃係だろう。  
確かに下に行けば逃げ場はないし、何人かで仕留めに行つた方が効  
率はいいだろう。だが

「ま、まずい！ 他の女子がアイツらの追撃に向かつてしまった！」  
「そう狼狽えるな坂本。お前は気付いていなかったかもしれないが、  
実はもう一人、下の階に行つたヤツがいるんだぜ？」  
「なに？ そんなヤツいたのか？」

本当に気付かれていなかったのか。可哀想なヤツ……

「んまあな。」  
「信用できそうか、そいつは。」  
「できるも何も、この中にいるヤツでは一番使えるんじゃないか？」  
「そうか……なら安心だ。」

“アイツ”は、ムツツリー二のためなら全力を出せるだろうな。・・・負けてらんねえ。

「よし、坂本。今から度肝抜かせてやる。見てろよ？」

「は？ おい、お前は何を言ってる？」

「サモン試獣召喚っ！」

俺は召喚獣を呼び出した。

『出たわっ！ 浅斬君よっ！』

『得点の高い子から五人固まって倒しに行くわよ！』

『わかったわ！』

俺が召喚したタイミングでAクラスの女子がグループを作って俺を倒そうとしてきた。このタイミングで固まってきたのは失敗だったな！

「俺もお前たちと同じで召喚大会に出ていたことを忘れるなよなの  
フマニッシング 装着っ！」

俺は召喚獣に向かって発動コードを唱えた。

「こ、これはっ・・・！！？」

俺が先の召喚大会で手に入れた指輪。それは坂本のように召喚者自身がフィールドを展開するものとは違い、俺のものは召喚獣に直接特殊効果を及ぼすものである。その効果は

「まだ四つくらいしか教えてもらってないけど、効果を聞く限りこ

れが一番いいだろうな。行くぞ……機能、火炎っ！」

俺は機能を限定状態にした。その言葉を言った途端、俺の召喚獣の刀を炎が包んだ。

「ナオ！ それは!？」

「まあ見てなつて……行くぞ！」

「ええっ!？ きゃ、きゃあっ！」

俺は召喚獣を空中に飛ばせ、固まってる女子の召喚獣に向かって刀を振った。すると刀に包まれていた炎は召喚獣のほうに飛んでいき、相手の周りの地面に燃え移って炎の壁となった。

「ちよ、なによこれ！」

「気をつけて！ この炎に触れると召喚獣の点数が減っていくわよ！」

「くっ……遠くにいても少しずつ点数が……！」

火炎の能力は自らの武器に炎を纏わせるものだ。纏った炎は地形や召喚獣、その他のものに燃え移って相手の召喚獣の点数を減らしていく。いわば毒沼に長時間浸かっていると同じ状態になる。

「さあて。次は」

「!？ ナオ！ 前を良く見ろ！」

「ん？ 坂本、どうし どおおおおおっ!？」

俺は召喚獣を横っ飛びにさせた。すると

ゴオオオオオツツ!!

たった今俺の召喚獣がいた場所が大きな火炎球が飛んでいった。．．．俺じゃないよ？

「なんだ．．．．．避けられちゃったのか。」

「ゆ、優．．．．．お前かよ。」

放たれた火炎球の先にいたのは俺の幼馴染、川村優だった。優は召喚獣を従えてこちらに近づいてきた。．．．．．さっきの火炎球もコイツの召喚獣の技か。

「ナオ君って鈍いから絶対に当たると思ってたのに。なんか残念。」

「待て。それじゃあ俺がバカみたいじゃないか。」

「？」

「そんな、『いまさら？』って顔するのやめてくんない？ 結構傷つくから。」

俺のガラスのハートにヒビが。もう少し優しい言い回しにしてくれてもいいんじゃないかな？

「ま、ナオ君だし仕方がないか。でも、ここはナオ君でも絶対に通さないよ？」

「いや、優。ここは絶対に通させてもらうぜ。俺の実力にかけて。」

「ナオ。援護を。」

「俺一人で十分だ。坂本は高橋女史に専念してくれ。じゃないと倒せないだろう？」

すでにAクラスの人が何人か戦っているが、高橋先生は召喚獣の扱

いにとても秀でていているようで中々攻撃を当てることができないようだ。ここは坂本に行ってもらって、何か作戦を立てたほうがいいだろう。

「そのようだな……よし、わかった。ナオ、しくじるんじゃないぞ?」

「百も承知! さあ優。かかってきやがれ!」

俺は自分に気合を入れた。

「うん。手加減はしないよ?」

「はっ! そんなのいるか! 全力で叩き潰してやる!」

「そんなに言うならまずはナオ君から仕留めてあげるね? ここは絶対に行かせてあげないんだから!」

優の鋭い視線が突き刺さる。だが、ここで負けるわけにはいかない! ここで倒す!

「いつくぞおおおおっ!」

俺と優の、自分のプライドをかけた戦いが今、始まったのだ……

「ムツツリーニ！」

「……………作戦に変更はない。ここは俺が引き受ける。」

「無茶だよ！」

僕らは他の階より若干長い階段を駆け下り、伝説の地ヴァルハラへの最後の一本道へと辿り着いた。だが、目の前にいるのは教師ではなかった。

「ムツツリーニ君、待ってたよ。もしかしたら来ないんじゃないかと思ったよ。」

「土屋、お前はここでやられてもらう。」

工藤さんと体育教師の大島先生だった。作戦ではここでムツツリーニが残るはずだったけど、相手は保健体育の教師と保健体育ではトップクラスの成績を誇る工藤さん。流石のムツツリーニでも分が悪いだろう。僕も戦った方がいい。いないよりはよりはマシなはずだ。でも

「……………いいから行け。ここは、俺がやる。」

「でも!?!」

思わず耳を疑った。この二人相手に一人で戦うなんて！

「・・・・・・・・・・・・・・・・奴らには借りがある。」

でも、ムツツリーニの目は本気<sup>マツ</sup>だった。本気でこの二人に勝つ気でいる。学年トップクラスの生徒と教師の二人組みを相手に。

「本当にいけるの？、ムツツリーニ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・当然だ。」

尋ねる僕に小粋な笑みを返すムツツリーニ。コイツは自分の力が目の前の二人には負けることはないと確信している。そんなヤツを信じてやらないでどうするんだ！

「わかったよ！　ここは任せた！　代わりに僕は鉄人を倒す！」

ムツツリーニを残し、僕は廊下を走りぬけた。そんな僕を工藤さんも大島先生も止めようとする気配がない。

「ムツツリーニ君に免じて、ここは通してあげる。」

すれ違いざまに工藤さんにそんなことを言われた。

ムツツリーニ、負けるなよ・・・・・・・・・・！！

「土屋。お前には失望した。まさか教師相手に一人で勝てるなんて幻想を抱くとは。」

大島先生がムツツリー二に向かって声をかける。ムツツリー二は一言も発せず、ただそこに佇んでいた。

「大島先生が出るまでもないですよ。ホラ、援軍も来たみたいだし。」

『工藤さ〜ん！ 大島先生！ 援護に来ました！』  
『油断しないで一緒に倒しましょう！』

こちらの女子生徒は先ほどまで高橋先生の所にいた女子だ。明久と康太の追撃に来たのだらう。この場は余程通したくないらしい。

「ほら。この通りなんですから、大島先生は下がっていてもらっても大丈夫です。ムツツリー二君はボクたちがやりますから。」

「そうか。それなら工藤に任せる。一応俺も召喚獣を呼ぶが、後方で待機させて見学に徹するでしょう。」

「はい。任せちゃってください。」

この場を一人で切り抜けるには相当な力が必要だ。しかも相手は三人。それを倒したとしても残る相手は保健体育の教師と最悪のセツ

ディングになっている。

しかし、彼の目はまだ絶望に飲み込まれてはいない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・は、一人じゃない。」

小さく、しかし力強くムツツリー二が声を出す。

「うん？ なぁに、ムツツリー二君？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺は、一人じゃない。」

「どうしちゃったのムツツリー二君？ この状況で助けが来るとでも思ってるの？」

『『試<sup>サモン</sup>獣召喚っ！！』』

追撃に来た女子二人は召喚獣を出した。どちらも工藤や大島先生には劣るものの、強力な点数だった。それでも、彼の瞳の奥に映る炎は消えていない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺には、わかる。」

「何がわかっていうの？ この状況でわかることなんて、ムツツリー二君の敗北だけじゃなかな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・工藤愛子。お前は何もわかっていない。この状況で負けるのは」

ズドドンッ！！

重苦しい銃声が響く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「……………お前ら、女子だ覗かれる側ということに。」

その瞬間、他の二人の女子生徒の召喚獣から鮮血が溢れ出した。

「な、なに!?!」

「ちょ、これはどういことなの!?!」

工藤と大島先生は見えない方向からの攻撃に狼狽える。そのとき、ムツツリーニの方から、

《(ジジジ) 康太。敵の召喚獣の殲滅が完了した。後はお前の好きなようにやれ。》

「……………ラジャー了解」

そんな声が聞こえてきた。

「くっ! 誰っ! 出てきなさい!」

「……………工藤愛子。先ほども言ったが、俺は一人じゃない。仲間がいることを、忘れるな。」

「なるほど……………自身があつたのはそういうわけか、土屋。まさか暗殺者スナイパーがいるとはな。そんな武器のヤツ、Fクラスにいたか? どうだ、俺と一対一サシでやってみないか?」

大島先生は挑発するように言った。

《それは無理ですが、姿はくらいは見せてあげましょう。》

ゴワシヤアアアン！！

スピーカーから声が聞こえてくると同時に、天井の壁がごっそり落ちてきた。

「よいしょっ……と。よ、康太。」  
「……翔太、ナイス。」

出てきたのは、最近この学校に転校してきてFクラスに入った水樹翔太だった。大島先生は本当に出てくるとは思わなかったのか、少しビツクリした様子でこちらを見ていた。

「さて、大島先生。姿は現しましたよ？ 俺の名前は転校生の水樹翔太です。」

「ふっ……。先ほどの一撃は見事だった。しかし、俺たちの召喚を待つて狙撃した方が良かったんじゃないのか？ そうしたら全員をほぼ一撃で倒せたものを。惜しいことをしたな。」

「あ、それはちょっと違いますよ、先生。」  
「なに？」

間を置いて水樹は喋りだす。

「俺の仕事はここまで。追撃に来た女子を倒すこと。そしてアンタらを倒すのは……。こっからは康太の出番です。」  
「……ほう？ 転校生のくせに随分と威勢の良いことを言うじゃないか。だが、教師を相手に勝てるなんて幻想を抱くのはここまでだ。」

試獣召喚。

「ぼ、ボクも さ、試獣召喚っ！！」

相手は召喚獣を繰り出してきた。

『体育教師 大島武 & Aクラス 工藤愛子  
保健体育 501点 & 383点』

「この点数でもまだ俺たちとやりあう気が？ 大人しく負けを認める。」

「……が、決めた？」

「ん？ なんだ、土屋？」

「……ほう？ 土屋、そんなことを言っただけのも今のうちだぞ？」

「……試<sup>サモン</sup>獣召喚。」

地面にはおなじみの幾何学模様が浮かび上がり、その周りからは光があふれ出す。光る円の中から出てくるムツツリー二の召喚獣。その点数は

『Fクラス 土屋康太 保健体育 774点』

「……え？ ムツツリー二君……その点数、なに？」

「……信念は、不可能を可能にする。」

「な、774点だって！？ こんな点数を取れる人がいるなんて、

聞いたことないよ!」

「(ギリッ)土屋、貴様いつの間にかここまで力を……!」

ムツツリーニの点数を見て声を上げる二人。二人はその教師すら超越した点数に驚きを隠せないどころか、恐怖すら感じていた。

「康太。本当に危ないときは加勢してやるよ。」

「……………その必要はない。ここで二人とも潰す。」

「そうかい。んじゃ、そうなることを祈ってるよ。」

「……………時間がない。二人まとめてかかってこい。」

保健体育の、絶対に負けられないプライドをかけた、ムツツリーニの勝負が始まった。

「この気配は……」

後ろで召喚獣が展開された気配がする。ムツツリーニが戦闘を始めたようだ。

ここまで来たからにはアイツを信じるしかない。人のことを気にするより、僕は僕にしかできないことをするべきだ。

「皆、本当にありがとう……」

気がつけばそんなことを口走っていた。

不可能に思われた作戦も、多くの仲間たちによって成功に向かっていく。

あとは、僕だけだ。

現在時刻は二〇一五時。目的を果たすには最適のタイミング。そんな時にここに辿り着くことができたこの奇跡を、仲間全員に感謝したい。

「必ず、目的を達成してみせる。」

ここにあるのは、修羅の道。ここを抜けるのは相当困難だ。だがその先にあるものは、僕らの目を、身体を、心を癒してくれる桃源郷、ヴァルハラ伝説の地、アガルタ理想郷の光景。

「……やはり来たか、吉井。」

扉の前に立つ鬼。その名も鉄人。僕らの、最後の敵が目を開け、静かに構えを取る。

「勝負だ鉄人！ この僕の本当の力を見せてやる！」

「これこそが、長かった強化合宿の最終決戦だ！！」

第60話 SK5!! (戦闘開始、五秒前) (後書き)

ほい、三日月です。

今回はどうでしたか？ この回で貴方は誰を好きになりましたか？

「え？ ムツツリー二だつて？ そ、そんなバカな!？」

「で、でもさ、ホラ翔太だつてちよつとは活躍したし……ちよつとくらいは見てくれても……はい。わかりました。」

つてな感じで最初自分の中でもめてたんですが、別に誰でもいいだろーという感じで勝手に自分の中で終わらせました。

まあ大分長くなっちゃった分中身は頑張ったのできつと気に入って頂けたと思います。

次回、戦闘開始です。ナオの能力の二個目を登場させる予定なので「今から度肝抜かせてやる。見てろよ?」といった感じで行きたいと思います。

他にも言いたいことは山ほどありますが、これだけでもかなり長いので終わらせたいと思います。

感想お待ちしております!

以上、三日月でしたっ

第61話 卑怯なことは作戦だと思え。悪くはない(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 4

・指輪の能力開放 + 3

・火炎球が飛んできた - 2

・俺のガラスのハートにヒビが - 2

・優とのプライドをかけた戦い + 1

現在の青春ポイント合計 + 4

## 第61話 卑怯なことは作戦だと思え。悪くはない

ナオSIDE

「お願いっ！ 召喚獣っ！」

俺と優の戦闘が始まった。優は召喚獣に杖を構えさせた。

彼我の点数はほぼ互角。だが召喚獣の扱いが慣れていない分俺のほう有利だ。

しかし油断は禁物だ。それはもう最初の試召戦争で体験している。

優子との一騎打ちのときだ。あの時は最後降ってきたランスに気が付かなくて串刺しにされたんだっけ。懐かしいなあ……

「食らえっ！ えいっ！」

おっと。そんなこと考えてる暇はなさそうだ。

優の召喚獣の構えた杖から光が放たれる。何が起こる……？

ズオツ！！

「！？」

一瞬の間を置き、杖から火炎のつぶてが飛ぶ。それも尋常じゃない量の数だ。腕輪の火炎球も避けにくったが、これもこれで避けにくい。というか、遠距離で攻撃してくる召喚獣なんてあまり見たこと

ないぞ。

「出鱈目なヤツ……！！」

召喚獣に常に動き続けるように指示を出す。つぶては速度こそ遅いものの量が多い。続けて動き続けないとダメージを食らうことになるだろう。

「さつてと。どうしたもんか……」

こちらから攻撃をしようにも一向につぶてが止む気配がない。近づくと暇もない。きつと遠距離で戦うために作られた召喚獣なのだろう。

「なら……限定解除！」

キャンセル

解除コードを唱えると、俺の召喚獣の刀から炎が消えた。

「機能、モード風刃ブローっ！」

「ん？」

俺の召喚獣の刃に、風が舞った。近づけないなら……  
……遠くから攻めるのみ！

「行けえっ！（ヴォーン！）」

「ええ！？ そ、そんなのあり きゃあっ！」

優は辛うじて攻撃をかわす。よし、相手の攻撃が止んだ。

この能力は召喚獣の武器に風の刃を纏わせて相手に向かって飛ばす技。連発は中々できないが一発が早いからよけるのは困難だ。

そして攻撃が止まった今、俺は絶好の機会にあった。優の召喚獣は

攻撃を再開する素振りを見せない。

「もらったあつ！」

俺は召喚獣を接近させる。もう優の召喚獣の三歩手前くらいに来ていた。

「くっ………！」

優も召喚獣に再び杖を構えさせる。しかし俺の召喚獣は接近させるスピードを緩めない。ここでビビれば攻撃を食らうことになる。ここは一撃で決める！

「でりやああつっ！」

「きやあああつっ！」

俺は一切の迷いなく優の召喚獣を切り捨てた。今回俺に、一切の甘えはない。

「ま、負けちゃった………」

「召喚獣の扱いが慣れてないお前にとつたらよくできてた方じゃないのか？ 遠距離攻撃でそのことをカバーしてたようだったが実際に接近されるとそのことが丸わかりだ。」

やはり転校生。亜矢とは違い操作にまだ慣れていない優は攻撃だけで精一杯なはずだ。そんな優から一本取るのなんて簡単だ。

「やっぱり成長したんだな………ナ才君。小学校中年までは喧嘩で私に勝てなかつたのに。」

「んな！？ お、お前召喚獣の勝負と実際の喧嘩を一緒にするなよ

！それに、小学校の頃の話は今言つな！ 大体その時だつて俺が一人で滑つて転んで気絶して負けたからお前の実力じゃないだろ！  
・・・・・・・・・・・・・・・・！！（言葉にならない悔しさ）

自分でなに言つちゃってんだろ俺・・・・・・・・。俺が自己嫌悪に陥つてる中、優が会話を繋げる。

「ナオ君って昔から変わらないよね？」

「う、うるせー。喋り下手なだけだ。」

「それが変わらないって言ってるの。もう・・・・・・・・。」

お前は俺のお母さんか。

「ナオ！ 倒したか！？」

坂本に声をかけられる。戦闘が終わったように見えていたからだろ  
う。

「おう！ 今からそつちの援護に、」

「いや、いい！ 大丈夫だ！ 俺たちだけでここは抑えられそうだ

！ だからお前は明久の援護に行ってくれ！」

よく見るとAクラスの男子と坂本で高橋先生を丸め込むことに成功している。高橋先生の顔からも余裕はなくなっているし、明らかにこちらが優勢だ。ここで行っても問題はないだろう。

「了解！」

俺は再び優と向き合う。明久が西村先生に倒されないうちに向かわないと。

「優。そこを退いてくれ。負けは負けだ。俺は早く明久の所に行かなくちゃいけないんだ。」

「そうだね。今回は私の負け。いいよ、通っても？」

「よし、待つてる明久！」

召喚獣を従え、前に出る俺。

「優子ちゃんを倒せたらの話だけど……………ね？」

「は？」

すれ違いざまに優にそう言われる。その時

ブオン！

物凄い風きり音が聞こえてきた。

「!?!」

召喚獣の脇から長い槍のようなものが飛び出してきた。前方しか見ていなかった俺は召喚獣に回避動作をとらせることができず、その槍にわき腹を刺されてしまった。

「くう!?! 誰だ!」

俺は思わず声を上げる。不意の攻撃に全く反応ができなかった。優がさっき言っていたあの言葉……………。まさかこの槍は……………

「全く……油断するのは良くないわよ、ナオ？」  
「優子……！」

案の定、優子だった。きつと俺が優で疲弊した所を襲う予定だったのだろう。まんまと相手の思う壺にはまったというわけか……

「不意打ちなんて卑怯だぞ！」

「あら？ さつき亜矢さんに向かって『これは戦争だ。卑怯もクソもない』って言ったのはどこの誰だったかしら？」  
「くっ……！」

まさか俺が言った台詞をそのまま言われるとは思っても見なかったぜ……。しかし、幸いにも俺の召喚獣はまだやられていない。召喚獣の扱いにも最近慣れてきたし、倒させない相手じゃない。

「ここは通させてもらっぜ、優子！ お前なんか瞬殺だ！」  
「いいわ、ナオ。その台詞を言ったことに後悔させてあげる！」

強がったはいいが一瞬の判断ミスで命を落とすことなんて戦争では当たり前だ。ここは、なんとも気が抜けない一瞬になるだろう。

「速攻っ！」

俺が優子の召喚獣に一気に詰め寄る。優子の召喚獣は一步も動かない。この勝負、もらった！

「でええいー！」

ズバツ

召喚獣の上半身を切り裂く。これで優子は戦死に　　つて、あれ？  
よく見ると確かに刀を通過させたはずの優子の召喚獣がまだそこに  
立っていた。ば、バカな！？　確かに直撃したはずなのに！？

「ねえ、ナオ。」

「！？」

優子に声をかけられる。な、なんだ……………？

「召喚大会で賞品を貰ったのはアンタたちだけじゃないことを忘れないでね？」

「……………！　ま、まさか！？」

次の瞬間、優子の召喚獣がぼんやりとした霧もやになって消えていった。  
これは、指輪の特殊能力か！？

「ミラーージュ  
幻影……………説明を聞いたときにこれが一番じゃないかなっ  
て思ったの。」

「！？」

俺の召喚獣の背後から優子の召喚獣が突然姿を現す。なんだと！？  
も、もしかして召喚獣の実体を消す能力なのか！？　まずい。こ  
のままだと回避動作が取れない！

「これでお仕舞よっ！」

優子の召喚獣はランスを豪快に突き出す。くっ、こっとなったら！

「風刃ブローっ！」

「なっ！？」

間一髪のところ、優子の攻撃をかわす。くっ………。今は結構効いたな……。

「ちよ、そんな避け方あり！？」

「別にズルくはないだろ？ 自分の召喚獣に風の刃をぶつけて緊急回避をするくらい。」

風刃の能力は遠距離攻撃にもなるが、刃は召喚獣に当たるとその勢いでそのまま相手をその方向に吹き飛ばすことができる。それを応用すると自分の召喚獣でもその方向に素早く行くことができる。ダメージを少し食らってしまうのがたまにキズだが。

「もう、折角一撃で仕留めてあげようと思ったのに。それじゃ自分が不利になっただけじゃない。」

「そんなことはないぞ？ ダメージを食らっても戦死にさえならなければ後でどうにでもなる。」

「まだまだ余裕ってこと？ なら、これならどうかしら  
限定キヤ解除ンセル。」

優子が指輪の機能を外した。俺と優子の指輪は同じものだが、教えられてる発動コードが別物なので使える能力も別物だ。ちなみに優子と同じ能力を使いたいときは別の発動コードが必要となるので、それを知らなければ使うことはできない。

「モード機能、ライトニング雷鳴っ！」

「くっ！ 次はどんな能力だ………？」

優子が発動コードを叫ぶ。俺は次にくる攻撃に備え、優子の召喚獣を見る。次はどんな攻撃だ………？

「やああああっっ！（ビリッ）」

「？」

優子は召喚獣に武器を構えさせ、突きを繰り出させようとしている。でもそこに俺はいないのに、なにやってんだ？

「そんなところでなにやって」

その瞬間、俺の身体に危険信号が走った。何か、来る！

「右に」

「やあああああっっ！！」

咄嗟の判断により、召喚獣を右に飛ばせることに成功した俺。次の瞬間

バリバリバリ！！

雷が真横を通り抜けた。普通に避けていたら絶対に当たっていた………

「これも避けられるなんて………中々やるわね。」

「はっ。それほどでも。」

内心ガクブルだが。しかしあの高威力な一発を食らったら戦死は絶対<sub>絶対</sub>に免れない

『きゃああああっ！？』

『ゆ、由美！？ どうしたの！』

あ。後ろにいた女子勢の召喚獣に今の一撃が直撃した。アレはもう確実に戦死だろう。

「ああっ！ ご、ごめんなさい！ 今のはわざとじゃなくて  
「！」

優子が勢いよく謝る。まあ確かにこの場面で謝らない方がおかしいけどな。

さてと、反撃開始だ。どの能力でいくか……………  
よし。これで決める。

……………本気でいきますか。

「バイバイ、優子。」

「へ？」

「モード機能、リフレクト絶対反射。」

俺は発動コードを唱える。しかし俺の召喚獣の見た目に変化はない。

「え？ なにそれ。何も起こらないじゃない。拍子抜けだわ……………」

「」

「そう言っただけでも今のうちだぜ……。行つくぞおおおっつ！」

「な!？」

俺が叫んだと同時に召喚獣を前に飛ばせる。しかしその速さは先ほどの比ではなく、やっと目で追えるくらいの猛スピードだった。

「くっ! 発射！」

自分で考えていた以上に俺の召喚獣の速さがあったのか、優子は焦って召喚獣にランスを構えさせ発動コードを唱えた。そして先ほどと同じように電撃を放った優子。ふっ……その技に頼った時点で、お前の負けは確定だ!

電撃がわき目も振らずに俺の召喚獣に向かってくる。この場所では直撃は免れない。だが俺は召喚獣を優子に向かって飛ばし続ける。そして、電撃は俺の召喚獣の頭に当たり

キーン

何かが弾かれる音がした後、その電撃は

「え!？ ちょ、ちょっと ！」

自分の来た道を戻り、優子に一直線で戻っていった。

「きゃあああっ!」

もちろん電撃は優子の召喚獣に直撃。逃げる暇もなかった優子は自らの電撃で真つ黒焦げになった。

「ど、どうして!? な、何が起こったの!?」

慌てふためく優子。この技のトリックがわからず困惑しているようで、自分の召喚獣が倒されたにもかかわらずその方法の方に興味がいつているようだ。しょうがない。説明してやるか。

「召喚獣自身に全ての物質、技、力の向きを“反射”させる能力だ。これを応用することで様々な力の向きを変えて一方に集めることができる。例えば、スタートダッシュ時の蹴り出しの力の向きを一步方向だけに集中させることで物凄い速さを実現したり、相手の撃つた攻撃を全て反射させてそのまま相手に弾き返したりと応用方法はたくさんある。」

相手を殴った時に自分に返ってきた反動をそのまま相手に反射して、その技そのものの威力を高めたりとか、相手の攻撃そのものを無効化したりとか、使い方は色々だ。

「そ、それじゃ倒せないじゃない! 反則じゃない!」

「いや、それは違う。この反射は召喚獣の周りではなく表面に起きる能力。つまり召喚獣自身が持っている力は常に自分に返ってくるんだ。よって常に点数が減ることを意味している。時間が経てば自然に戦死、自動的にゲームオーバーだ。」

だから今の数秒で総合得点は30点くらい削られてしまった。今はもう限定解除キャンセルしてあるので得点の消費はないが、通常一秒に一点ずつ点数が消えていったのがわかる。使いどころに気をつけなくては。

「くっ……！ ここは私たちの負けね……。いいわ。ここを通りなさい。」

「……………」

「な、なによ。どうかした？」

「また誰かがズバツト切りかかってくるなんてことは？」

「そ、そんな何度もないわよ！ もう……。吉井君が待つてるんでしょ？」

その一言で目が覚める。そうだ、明久の援護に行かなければ。アイツは1人で戦ってる。迎えに行つてやらなくては。

「ありがと、優子。行かせてもらうよ。」

「もう……。気をつけてね？」

「敵なのにそういうこと言つて大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。だってナオは覗かないって信じてるから。」

「ゲホゴホッ！ ば、バカ！ なんだよそれ……………」

そ、そんな顔で言われたら覗くの躊躇っちゃうだろうが……。まあそんなことは置いといて。

「それじゃあ行くか。」

俺は優子の横を通り抜け、階段前まで辿り着く。……この下に明久たちが。急がなくちゃ……………」

第61話 卑怯なことは作戦だと思え。悪くはない（後書き）

どうも、三日月ですっ！

今回の話はナオの召喚獣勝負を沢山？入れてみました。もらった指輪もフル活用。もっと沢山アイディアがほしいなあ……

というわけで、今回からこの指輪の能力の募集をしたいと思いつつ！

アンケートみたいな感じで行きますのでよろしくお願いします。書いて欲しい必須事項は三つ。

？名前。ルビ振ってなんか格好イイやつがいいです。

？どんな能力か。例えば、電撃びりびりとか、一方通行だとか。（

あれ？ なんかデジャブ？）

？どの場面で使って欲しいか。結構これ大事です

を書いて感想に来てくださいっ！ お願いします！

次回は遂に最終決戦？ かも。知れませんが応援よろしくお願いしますっ！

以上、三日月からでしたっ！

第62話 恋はエスカレート……いや、エスカレーター式だ(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 4

・優に勝利! + 3

・優子に不意打ちされる! - 2

・優子の猛攻撃! - 2

・俺の切り札発動! 勝利 + 3

現在の青春ポイント合計 + 6

## 第62話 恋はエスカレート……いや、エスカレーター式だ

明久SIDE

「動きが鈍っているぞ吉井！」

「くうっ！」

鉄人との一対一の勝負。僕は腕輪の能力の二重<sup>ダブル</sup>召喚を使って戦っていたが、それでも鉄人相手に劣勢に立たされていた。

「ふっ！」

右腕に鈍い衝撃。まるでハンマーだ！ これはどつちが受けた攻撃だ？ 主獣か？ 副獣か？ ってまずい、攻撃の手を緩めると追撃が来る！ とにかく木刀を振って ダメだ！ 間に合わない！

今度は拳が、副獣の方に来る と見せかけて主獣！？ やばい、フェイクだ！

「ぐ、ふう………っ！」

鳩尾に鋭い痛みが走る。苦しみに耐えられなくなった僕は思わず廊下に背中から倒れこんでしまった。

「ここまでだな、吉井。」

決着はもう見えている、と言わんばかりに余裕を見せる鉄人。

分厚い筋肉の鎧に太い腕。こちらの攻撃は全く効いていないようだ。確かに召喚獣を二体同時に操るなんて不可能なのかもしれない。ど

うしてもどちらに指示を出しているかわからなくなって混乱してしまふ。いや、そもそも攻撃が届いたってダメージを与えられないなら意味がないじゃないか。

ここまでなのか………。諦めようとしたそのときだった。

「なに諦めようとしてんだこのバカ野郎があああああつっ!!」  
「ぐげぶっ!?!」

僕の背中にフィードバックとは違う、鋭い衝撃と痛みが走った。っ  
ていうかなんで!?! さっきの鉄人の一撃と今の一撃の所為で天国  
への階段五段飛ばしで上がったような……。

「なに諦めムード浸っちゃってんだお前は。」  
「ナオ……。蹴ることないじゃないか!」

僕の目の前には階段落ちでお馴染みの僕の級友、ナオが立っていた。  
ここにいるということは高橋先生やその他女子勢の包囲網を突破し  
てきたってことかな?

「うるせえ。この程度で諦めてるバカを蹴ってなにが悪い。そんな  
ことにも気付かないなんてお前は相当なバカだな。」

「だって攻撃が効かないんだよ? そりゃ諦めたくもなるじゃない  
か! それにバカバカ言うな!」

「バカにバカって言ってなにが悪いんだよこのバカ。」

「僕のどこがバカだって言うんだよ!」

「その諦めようとした気持ちはバカだって言うんだよ!」

「……。っ!」

ナオの言葉で動揺する僕。

「俺の知ってる明久はそんなバカじゃないはずだ！ 仲間の作ってくれた折角のチャンスが無駄にして諦めようとしたり、できないからそこで逃げ出すような最低なヤツじゃないはずだ！ 俺が知っているのは、どんなことから逃げ出さない、仲間を窮地から助け出したり、何もかもに一生懸命に突き進んでいく」

「ナオ」  
「そんな、かつこいいバカだったはずだあああああああ  
っ！！」

ナオが鉄人に向かって走り出していく。呆氣にとられていた僕はすぐに自分の心を取り戻した。

「ナオ！ ダメだよ！ 生身の人間が鉄人に勝てるわけない！」  
「浅斬いっ！ 恐れずに俺に向かってきたことには褒めてやる！  
だがこの俺に召喚獣どころか生身で挑んだことを後悔させてやろう  
！」

まずい！ 鉄人の拳がナオに！ このままだとナオがやられてしま  
う！ 召喚獣も間に合わない！ くっ一体どうすれば……………  
！

そうこう考えているうちナオは鉄人の攻撃を食らった。

「くっはあっ！」

「ナオ！ 大丈夫！？」

「さて、吉井。次はお前の番だ……………」

「くっ……………」

鉄人がにじり寄ってくる。くっ……………！ 何か策はないのか！

ナオSIDE

俺は西村先生の攻撃を食らい、床に沈んでいた。うあく……..  
やっぱ無鉄砲に突っ込んだのがバカだったのかな。体の節々が痛い。  
……

西村先生はじっくり近づいてきてこう言った。

「所詮、下心の為の集中力なんてそんなものだ。」

西村先生がゆっくりと近づいてくる。

くそつ。ここまでのなのか……..  
俺は体をゆっくり起こして  
西村先生を見た。折角みんなが作ってくれたチャンスを……..  
俺までも諦めようとしたとき、明久が何かに気付いた。

「そうかあつ！」

「？」

明久の目に炎が灯る。何かに気付いたようだ。なにに気付いたんだ・  
・・・・・？

くそっ・・・・・俺も召喚獣が物に触れるタイプだったら明久の  
力になれたのに。

・・・・・ん？ いや、待てよ？ 確か指輪に・・・・・  
・・・・・そうだった！

「よっしやあつ！」

「うわあつ！？」

全身のバネを使って一気に起きる。

俺にもできることがある！ 明久だけに良いカッコはさせないぜ！

「ほう・・・・・お前ら、まだやるのか？ 根性だけは人一倍だ  
な。」

西村先生は再び立ち上がった俺たちを見てどこか楽しげに口元を歪  
めた。どこまでも余裕のある態度だが、それもこの一瞬で終わらせ  
てやる！

「明久。なにを思いついたんだ？ 教えろよ。」

「そっちこそ。なにか思いついたみたいじゃないか。そっちこそ教  
えなよ。」

「なんとなくだがお前には言いたくない。」

「どういう状態？ まあいいや・・・・・鉄人。そ  
の余裕もここまでだ！」

明久が西村先生に食って掛かる。一体どんな根拠があつてそんなこ

とを言ってるんだ？

「鉄人、感謝するよ。さっきアンタは僕にヒントをくれた。」

「ヒントだと？」

「言ったじゃないか。『集中』って。」

集中？ そんなことをしたくらいじゃ西村先生が倒せるとはとても

「そう。集中だ。僕は二体の召喚獣でそれぞれに指示を出すから混乱するんだ。攻撃を別々の箇所に分散させるからアンタの防御を貫くほどの威力が出ない。だからアンタは倒れないんだ。」

「ほう？ 確かにそれはそうだな。だがそれがわかったところで全て防御すれば良い話だ。」

確かに西村先生は身体全体を筋肉の鎧で包まれている。だから一点集中でその鎧を崩そうと言うのか？ でもそれだけじゃ無理があると思うんだが………？

「そう防御されてしまう。だけど僕が今から行なう攻撃。拳、蹴り、木刀。主獣も副獣も、今から放つ全ての攻撃をただの一点」

どこだ………？

「鉄人。アンタの股間に、集中させる………！」

「き、貴様、なんて恐ろしいことを考えるんだ!？」

「それは流石に酷いだろ!？ 敵なのに思わず同情しちゃったよ!？」

「行くぞ! どりゃあああっ!」

俺の叫びも聞かず、西村先生の股間に殴り込みをかける明久。それは味方の俺から見ても恐怖を感じさせるもので、そのしつこさは何かに例えるとゴキジェットを直で当てているのに中々死なないGのようだった。

「……………あれ？ 何か違うような……………」

「ぬおおおおっ!?!」

「おらあっ!」

明久が攻撃を開始した。執拗に股間を攻める明久に西村先生は一切の余裕が顔から消えた。さて、俺もいきますか!

「試獣召喚っ!」

からの、装着っ!」

「あ、それは確か召喚大会のときの……………」

明久が少し驚いた表情を見せる。さあて、これからもっと驚かせてやるぜ!

「機能、物理干渉っ!」

俺は発動コードを唱えた。

「行けえっ、召喚獣!」

「む!? ぬおおおおっ!」

召喚獣に西村先生を殴り飛ばさせる。ふうん……………本当に殴ってるみたいだ。

「どうしてナオの召喚獣は人に触れるの!?!」

「ちよいとした能力さ! さあてドンドン行くぜ!」

「くっ………！ またあの学園長の仕業か。厄介なものを何個も何個も………！」

西村先生は少し息を切らせながら言う。

そりゃそうだ。俺は明久と違って点数が高い。力の強さはゴリラ並じゃ済まないだろう。

「明久！ お前もガンガン攻めろ！」

「おうっ！」

俺は通常攻撃。明久は西村先生の股間を狙うという物凄く姑息なポジションで攻めていった。卑怯？ そんなことはないですよ？ だって西村先生はあの体自体が卑怯なんだから！

何でダンプカーの衝突並のパンチを放つ俺の召喚獣の攻撃をいとも容易く防ぐんだ？ 規格外人間にもほどがあるだろ。

「これでトドメだ！」

俺は召喚獣にありつたけの力を込めさせて西村先生の鳩尾に拳をぶつけさせようとした。しかし、

「ふっ、甘いぞ浅斬！」

「なっ！？」

西村先生はここぞとばかりに拳を握り締め、向かってくる俺の召喚獣にクロスカウンターの要領で殴りつけてきた。

「ぐほっ！？」

「ナオっ！」

体の芯から痛みが打ち抜ける。こ、これが明久がいつも受けている痛みか………！

俺は今まで感じたことのない痛みに思わず吐き気をもよおした。

「ふっ、浅斬はフィードバックに慣れていないようだからな。これで終わりだ！」

西村先生は明久の召喚獣の攻撃をくぐり抜け、倒れている俺の召喚獣を潰しにかかった。確かに明久と違って召喚獣の操作にも慣れてない俺がフィードバック付きで戦うのには無理があっただろう。だが………甘い！

「キャンセル限定解除っ！」

「なにっ！？」

西村先生は拳を地面に叩きつけた。俺の召喚獣はもう物理干涉できる状態ではなかった。西村先生は攻撃をからぶらせた。しかも思い切り殴ったからその後の動きが鈍いのは誰か見てもわかる。そこに

「やれ明久アアア！！！」

「なにっ！？」

「うおおおおおっっ！！！」

後ろからの明久の追撃が加われれば

「しまっ」

「もらったあーっ！！！」

そう。俺の鳩尾への攻撃はこの攻撃の為の布石。西村先生が俺を潰

しに来させる為の策略だ。俺はまだ召喚獣の扱いにもそこまで慣れていないし、フィードバックへの免疫のようなものもついていない。だから西村先生は優先して俺のことを倒しに来ると思ったのだが当たり前だ。結果、西村先生は明久に背を向け俺を攻撃しに来た。だがそれが仇となった。

背後に向かってくる明久に防御をするのはかなり無茶なこと。明久の召喚獣の手刀が西村先生の無防備な首へと吸い込まれていった。

「ぐう………っ！ よ、吉井、貴様………」

ドサリ、と重たい音を立て、西村先生はゆっくりと床に倒れ伏した。

「明久………」

「ナオ………僕たちついにやったんだね………」

「ああ。」

身体中の力が一気に抜ける。フィードバックの痛みもそうだったがこんなに疲れるものだとは思わなかった。明久はこんなにも辛い仕事をいつもしていたんだなあ………

「さて、早速行こうじゃないか。僕らの理想郷に………」  
アガルタ

「おう。さて扉を はっ！ 邪悪な気配！？」

何かを感じ取り、殆ど本能のようなものだけでしゃがむ俺たち。すると先ほどまで俺たちの頭があった場所に何か音が立てながら通過していった。

あれは スタンガン！？

「お姉さまの操は渡しません………！」

「清水さん！」

「ツインドリルか！？ そんな危険物どうして持って………いや。もうそんなこといいや。考えるのすらメンドイ。」

「ナオが突っ込みの放棄！？ まずい、これは重症だ！」

「美春を無視しないでください！」

ツインドリルは再度俺にスタンガンを押しつけようと迫る。くっ、しつけえな………！

「というか何で俺！？ 明久だろ普通！」

「昨日からお姉さまの元気がないのも、美春に振り向いてくれないのも全て貴方のせいです！ 死んで美春に詫びて下さい！」

「なんていう八つ当たり！？ 俺特に何もしてねえのに！」

「男は皆敵です！ 生きるに値する価値なんてありません！」

「全人類の男を敵に回すような大胆発言！？ 俺もうお前の真意がわからない！」

「というか島田が気があるのは明久だろ！？ 俺じゃないだろうが！」

「昨日貴方が爆破などしなければお姉さまともっとお近づきになれましたのに………！ 許せません！」

「待てえっ！？ 爆破したのは俺じゃないし、それにあれはどう考えてもお前が悪いと」

「そんなことはどうでもいいんです！」

「前提から大否定！？ 明久コイツをどうにかしてくれ！」

「あ、ゴメン。思わず呆氣にとられてた。」

ぼう、っとしていたのか先ほどまで無表情だった明久。俺はもう殆ど力が残ってないつてのに………

明久がツインドリルからスタンガンを取り上げようと試みる。しか

しドリルはそれに屈することなくスタンガンをぶつけてこようとす  
るが、先ほどまでバケモノを相手にしていた明久だ。その動きを見  
切るのは容易いことだろう。

「このっ、このっ！」

「ほいほいつと。」

余裕で避け続ける。このままバッテリー切れを待てばいい、そう思  
っていた。

俺らの意図に気付いたのかドリルはポケットから何か取り出して俺  
らに突き出してきた。

「言うことを聞かなければ、この写真を公表します！」

「え？ 写真って うわっ！ 僕の恥ずかしい写真！？」

あれは明久の写真か！？ ってことはやっぱり

「まさか、清水さんは僕のが好き、だとか？」

「吐き気がします！」

「お前バカだろ！？ この状況だったら『お前が真犯人だったのか  
！？』ってなるパターンだろ！？」

どうしてそういうわけわかんない方向に話を持ってこうとするんだ  
コイツは！

「とうかどうしてそんな写真を撮ったんだ？ お前になんのメリ  
ツトがある。」

「お姉さまのチャイナドレスを撮ろうとしたらちよっどいい脅迫ネ  
タが通りかかったので撮影したまでです！ 男なんかに興味はあり  
ません！」

「……………なぜこの学園には性別の壁を考えない人間が多いのだから。」

「清水さんつてもしかして、お尻に火傷の跡があつたりする？」

「な、何故それを！？ さては盗撮や覗きをやっていますね！？」

盗撮や盗聴をやってる人間にそういうこと言われるとは思ひもしないだろう。」

「とにかく大人しくして下さい。写真をばら撒きますよ？」

堂々と俺たちを脅迫するドリル。もうダメだなコイツは……………

「よつと。」

「ああっ！ 返してくださいっ！」

一瞬の隙を突いてスタンガンと写真を奪い取る俺。全くこんな危険物……………

「こんな危ないもの持ってたらダメだろ？（ぺしっ）」

「あ痛！ な、なにするんですか！」

俺はドリルを軽くチョップする。一応女の子だしね。

「全く……………お前がこんなことをしていると知ったら島田が泣くぞ？」

「うっ……………！」

痛い所を突かれた、といった表情でドリルは黙ってしまった。

「今回はこれに懲りたらもうそういうことはしないんだな。わかったか？」

「くっ………！ お、お姉さまの顔に免じて今回だけは許してあげます！」

「そうか。だったら………ここで寝ててくれ。明久。」

「ほい。」

「へ？」

明久が肩に担いでるのは、翔太のカバンに入っていた黒光りをするアシ。

「ちよ、ちよっと！？ それ結構痛い」

「発射。」

「ラシヤー了解。」

チユドーン………！！

壁が軽く揺れる。ランチャーが至近距離で直撃した。これで当分再起はしないだろう。

「このくらいの罰は必要だよな？」

「ああ。このくらいは必要だな。」

多分死なないだろう。昨日も食らってたし、大丈夫大丈夫。

「これで全部片付いた、かな？」

「ああ。やっとな………」

悪の元凶は滅びた、と言わんばかりに顔を綻ばせる明久。余程嬉し  
いんだろうな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・明久。」

「よっ、直貴。」

背中から俺らのことを呼ぶ声。この声は、

「ムツツリー二に水樹君！ 無事だったんだね！」

「よっ。お前らにしては結構傷だらけじゃないのか？ 身体大丈夫  
かよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫。」

「いやぁー参った。Eクラスの時結構大変だったよ。」

足を軽く引きずるムツツリー二を翔太が肩を貸してやっている。

コイツらの全身からは疲労が見て取れるな。余程の戦闘だったのだ  
ろう。だがそれをおくびにも出さずに笑顔を浮かべている。

「明久にナオ、よくやったな。」

「坂本！」

「雄二！ それに皆も！」

後ろからは俺たちに協力してくれた男子のそうそうたるメンバーが  
来ていた。全員が自分の目的を達成できたことに満面の笑みを浮か  
べて。

「吉井。よく鉄人を倒してくれた。」

「お前が今回のMVPだ。」

「あ、いや。それはナオが手伝ってくれたからで、」

「いいだろう？ 別にそのくらい。ほとんどはお前のお陰なんだからな。」

そう。俺はただ手を貸しただけ。本当に凄いのはあそこまでの点数だけであのバケモノと戦っていた所だ。俺なら真似はできないだろう。

「それだったら皆の協力がなかったら僕はここまで辿り着けなかった。皆がMVPだよ！ ありがとう！」

大きな声で明久が呼びかける。この場にいる全員に、心から感謝するぜ！

「それじゃ、そろそろ行くか。」

坂本が珍しく顔を綻ばせている。コイツも健全な男子高校生なんだなあとつくづく思うよ。

「皆！ これだけ人数がいれば人物の特定も出来ないし邪魔も排除できる！ 停学や退学の処分もないから思う存分楽しんでくれ！」

『『『『』』』』』

廊下を揺るがす皆の大声。

確かにこれだけいけば人数の特定も………って、ちょっと待て。人数？ もしかしてこの場にいるのは二年生の男子全員か？ それだったら特定されるどころか全員停学にされても………！

「さ、坂本！ 待て、早まるな！」

「全員心して見る！ これが俺たちの勝ち取った栄光だ！」



俺はもと来た道を戻って部屋に行こうとすると、部屋の前に亜矢が立っていた。

「げっ………亜矢。」

「………なによ。その『げっ』って。」

だっていると思わなかったし………なにより卑怯な手で倒したのが恥ずかしい。

「覗きはどうしたの？ 見てきたんでしょ？」

「いや、それがなぜだかよくわからん状態に………」

「まあ入っていたのがあの学園長じゃ、仕方ないわよね。」

「………マジで？」

「マジで。」

あ、危なかった………！ 俺も一緒に覗いていたらと思うと、ゾツとするどころか吐き気が………！

「まあ覗かなかったのは正解だと思うわ。いろんな意味で。」

「あ、あはは………」

苦笑いしか出てこねえ。後で明久にどんなこと言って励まそうか………

「………ねえ、直貴。ちょっと聞いていい？」

「ん？ なんだ？」

「私の裸って見てみたい？」

「んな………っ!？」

動揺を隠せない俺。いきなりなにを言ってんだコイツは!？

「そ、そんなもん見たいわけない」

「あ、嘔吐いた。直貴って嘔吐くとちよっとまばたきが増えるのよね。」

「くっ………!」

面白いように手玉に取られる。もうコイツと話していると身が持たん  
………

「そんなのどうでもいいだろ！ ほら、もう部屋に戻れ。」

「もう………そんな冷たい態度じゃダメだぞ？ もっと女の子には優しくしないと。」

「うるせー。跳び蹴りしてくるお前に言われたくないね。」

あんなことされてたらその言葉自体に信憑性が出ないよ………

「そう？ じゃ、こんな感じで優しくされるのは？」

「はあ？ お前はなにを言って」

そこまで言って振り返ったときだった。

「ん………」

亜矢の顔が目の前にあった。そして亜矢は自分のそれと俺のそれを重ね合わせてきた。

頭が、真っ白になった。思考の停止、いや時が止まったようにも感じる。

柔らかな物が、俺の唇に触れた。

「ん……………ぷはあつ。」

亜矢がそれを離す。なにが……………起こった……………？

「恋人だったときもこういうことしなかったよね。どう？ 美味しかった？」

何も、反応ができない。思いつく言葉が、見つからない。どうしたらいいか、わからない……………

「ありゃ？ 無反応……………どうしたのかな？」

俺は何も考えられなくなった。特に、なぜこんなことになったのか、と。

「とうか、もうこんな時間。もうそろそろ部屋に戻らなきゃ。バイバイ、直貴。」

亜矢が何か言っているがそれも遠くでいわれているようにで頭に入っていない。

「あ、そうそう。」

亜矢が何かを言った。こんな状態でも、その言葉は俺の心にドシリと響いてきた。

「私……………直貴のこと、まだ好きだから。」

俺は不覚にも、その場で気絶したのだった。

第62話 恋はエスカレート・・・・・・・・いや、エスカレーター式だ（後書き）

どうも三日月ですっ！

今回はどうでしたか？ 主に最後。これは次回の章のときに明久のあの事件と同時刻進行で行くための布石だと思ってください。なぜ優子じゃないのかって？ だって、恋は障害があつた方が燃え上がるでしょ・・・・・・・・？

さて、この前も言いましたが指輪の能力の募集です！  
これに期限はないので、誰でも気軽にいつでも考え付いたものを教えてください！ お願いします！

そしてこれからも応援よろしくお願いします！

以上、三日月からでした！

〜第三部閉幕〜第63話 家事と喧嘩は俺の華(前書き)

前回の青春ポイント合計 + 6

・西村先生とのラストバトル! + 3

・フィードバックによる激痛 - 2

・西村先生に勝利! + 3

・ツインドリルを爆破。許されるよね? - 1

・いざ覗き! だが断る! - 2

・亜矢と遭遇。嫌な予感が……… - 1

・亜矢との接吻。直後の一言で精神崩壊 ポイント全部を吸い取られる

現在の青春ポイント合計 ± 0

〈第三部閉幕〉第63話 家事と喧嘩は俺の華

《処分通知》

文月学園第二学年

全男子生徒

総勢150名

上記の者たち全員を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

ついムラツときてやった。

今は心の底から後悔している。

〈とある生徒の反省文より抜粋〉

.....

↳ 停学中 浅斬家にて↳

駿SIDE

どうも。僕は浅斬直貴の弟、駿です。なぜ僕が語りべになっているかって？ なぜならそれは合宿から帰ってきた兄が

「ほえ.....」

終始こんな感じだからだ。

「.....兄さん？ どうしたの？ 強化合宿から帰ってきて停学食らってから様子がおかしいよ？」  
「おえ.....」

強化合宿で一体なにが.....？ 兄さんが肉体面じゃなくて精神面でやられるなんて.....

「兄さん？ あのこと……大丈夫？」

「ふえ……」

「ヤバい。これはもう末期症状だ……どうすればいいんだろ？」

ここまでの精神状態になるなんてどんだけショックなことがあったんだろう？ 放置したい所だけど僕は料理ができないし、父さんも母さんも当分帰ってこないし……仕方ない。ショック療法で……

「兄さん。ゴメンね？」

「むあ……ゴブルシャアアアア！？」

僕は部屋にあった金属バットを兄さんに力の限り叩きつけた。

「これで戻ってくれると良いんだけど。」

「うおお……！ 痛って……！」

「お？ 戻ってきた？」

よかった。兄さんが丈夫で。普通なら骨折とかしてるもんね。

「はっ！？ ここはどこだ？ 確か俺は……」

「お帰り、兄さん。」

二つの意味で。

「ああ、駿か。ただいま……ってどゆこと？ 俺は確か強化合宿で……」

「覚えてないの？ まあいいや。早くご飯作ってよ。もう夕方だよ？」

僕は兄さんのことより自分の食の方が大事だ。早いとこ兄さんに夕飯を作ってもらわなくちゃ。

「あ、ああ。ゴメン。今作るから待ってる……………」  
「うん。」

でも、どうしてこんなことになったんだろ？ 強化合宿で一体なに……………」

ナオSIDE

「……………はあ。」

あ、また溜め息ついちゃったよ……………。俺は開けた口を素早く戻した。

溜め息つくくと幸せが逃げるって言うし、気をつけよ。

「兄さん。今晩はなに？」

俺は学校で出された停学中の課題を全て終わらせて、駿のために晩飯を作っていた。

今日のご飯は………

「炒飯。」

「やった 早く作ってよ。僕もうおなかペコペコだよ。」

「はいはい………」

俺はお母さんか。と自分自身にキレのない、よくわからないツツコミをした。強化合宿の日のことが脳裏を過ぎる。どうしたらいいんだろ………

「兄さん兄さん。手元見てよ手元。炒飯の卵固まってるよ。」

「おっと、ゴメン。ありがと気付いてくれて。」

「いやいや。僕の晩御飯が不味くなるのを未然に防いだけだよ。」

自分のことばっかだな、お前。

「人に作らせるくらいだったらたまには自分で作ってみたらどうだ？ 俺が教えてあげるし。」

「いいよ。僕はできるだけ料理と関わらないで生きていきたいから………」

と、少し疲れたといった表情で駿が溜め息をつく。コイツは幼い頃、包丁で遊んで指一本切断したことがある。今は傷跡すら目立たなくなっているがやはりトラウマなのか包丁は見ただけで吐き気がする

らしい。

「僕に嫌なものあまり思い出させないでくれない？ 結構今でも怖いんだよ？」

「はいはい。別に包丁は使い方さえ覚えれば怖くはないからさ。今無理して覚えなくても良いよ。」

「じゃあいつ覚えれば良いのかな？」

「社会人になって自炊の難しさを学んでからだな。」

「なにそれ？」

まあわからなくてもいいか。そのときが来ればわかるし。

「ほら、できたぞ。」

俺は器に炒飯をとりわけ、駿の前に出してやった。

「おお。プロも顔負けのパラパラだあー！」

「優には負けるけどな。」

アイツは確か小学校のときに一度俺に料理を作ってきて物凄くダメだしされたから練習したそうさ。ま、正直に言うと俺がダメだしをしたときの記憶はもう残ってないが。

「ああ、優さんか。それならわかるよ。」

「だろ？ もうちょっと俺もアレに近づけたらなあって思うんだけど。」

「まあそんなことは気にしないで食べよっか。」

「おう。」

「というかもう頂いちゃってます。もぐもぐ……」

既に渡した炒飯を半分以上平らげていた。食に貪欲な自分の弟であった。食うの早すぎだろ。

まあ今はそんなことよりも……………

「それにしても……………はあ。」

「？ また溜め息？ 本当になにがあつたのさ。」

再度溜め息をついてしまう俺。

どうして亜矢が俺なんかを好きなんだろう？ そこが凄く謎なんだよなあ……………。俺のどこが良いんでしょうか？ お人好しだから？ 得しないよ別にお人好しでも。

「兄さん？ おーい、兄さん。」

そもそも俺は優子が好きなのであって亜矢じゃないし、でも優子は俺のこと好きかどうかかわからないし、亜矢はハッキリと俺にす、好きだつて言ってきたし、キ、キキキ、キスだつてしてきたし……………

「聞ってる？ 聞こえてないならまた金属バットで叩き起こさなきゃいけないるんだけど？」

で、でも優子だつて可愛いよな？ スタイルは……………まあいいんじゃないかな。優しい……………たまに見せる優しさが良かったり、笑顔が素敵だったり……………

「はあ……………また金属バットかな？」

でも亜矢は正直相手として悪くないし（二度目だけど）、しかも案外可愛いし、金持ちだし、スタイルいいし……………あ、でも親



俺が走り始めて二日が経過した頃だった。なかなか考えもまとまらず、俺はただ闇雲に走り続け迷子になっていた。明日までに帰れるかな？

その日の夜。日付が変わる少し前のこと。俺は町の裏路地を抜けた所で

『だ、誰かあつ！ 助けてください！』

『はっ。このオッサンビビってるぜ？』

『まあいい。さっさと金を置いていってもらおうか？』

典型的な不良の例が行なわれているのを発見した。……………

……………  
・これ、でも助けたら後が面倒だよね。漫画とかで定番だし……………  
……………

『だ、ダメです！ これは娘と仲直りする為の大事な……………』

『ゴチャゴチャうつせえぞ！ さっさとよこせ！』

『うわあっ！』

はあ〜……………しょうがねえ。少しリフレッシュでもするか。  
適度な運動は身体に良いって聞くし。

「ねえその二人。」

「ああっ？　なんだオメエ？」

「俺らになんか用でもあんのか、ああん？」

顔中にピアスがあり、正直人生で生きている中では絶対に一度も会いたくない部類のヤツらだ。  
まあ二人だけならなんとかなるかな？

「いや、用というほどの用じゃないんだけどさ。そこのおじさん嫌がってるし、やめてあげたらどうかな？」

「はあ？　なんだコイツ？」

「やっちまうか。」

不良二人は俺を睨み付けてきながら目の前まで来た。そして拳を俺に叩きつけようとしてきた。  
こういうタイプって、絶対に

パシ

『『は？』』

「俺は今……………さいっっっつに虫の居所が悪いだ。」

一番最初にやられるよね。

「おじさん、大丈夫？」

『はい、一応……』

二人をポツコポコにした後、俺はおじさんにお金を渡していた。

「ハイこれお金。取られてたやつでしょ？」

『あ、ありがとうございます！ 待っていてね、マイエンジェル……』

マイエンジェル……？ なんだろう。物凄く寒気が。

『あ、すみません。連絡先を覚えていただけないでしょうか？ 何かお礼を送りたいのですが……』

「ああ。別にそういうのはいいです。早く帰って家族を安心させてください。」

『そ、そうですね……そうさせてもらいます。本当にあり

がとうございました。』  
「いえいえ。」

俺は最後に手を振っておじさんとお別れをした。んじゃ、さっさと俺もランニングの続きを……

『応援を呼べ！ あと二十人は必要だ！』  
「!？」

大声に気付いて振り返ると、叩きのめした不良の一人が携帯電話で仲間を呼んでいた。

……ほくらね？ だから助けた後が面倒だって言ったんだ。その仲間は以外に近くにいたのか、一分もかからないうちにここに来た。……ざつと二十人はいるんだろうけど、この規模からするとおつといそうだな……

『テメエか。調子に乗ってウチらの仲間の金奪ったヤツは。』

調子に乗った覚えはないんだが。

「いや、別に最初に奪ったのはコイツらだからそれを取り返したって別に良いでしょ。」

『そんなことあ関係ねえんだよ!』

「すみません。そのギャグちよつと古いですよ?」

『ナメてんのかオメエは!? やるぞテメエら! こんなクズ一分もかけないうちに殺っちまいな!』

『『『うおおおお!』』』

はぁ……停学明けまでに帰れるかな? 相手も怒ってるし、時間はかかりそうだ……

## 停学明け

「ナオ。どうしたのその格好。ボロボロだよ？ おまけにその賞状・  
・・・?」

「あ、これ？ 町で噂の不良グループを全員ボコって警察に突き出したから。警視総監賞だって。」

現在時刻は登校時刻。俺は途中であつた明久と話しをしながら

あの不良を全員倒した後、警察を呼んだ俺もそのとき検挙されそうになったが助けたおじさんの証言により無罪放免。尚且つ町の無法者の一斉逮捕に協力してくれたとして賞を貰ったのだ。

「ま、なんとか助けたのは気まぐれだったんだけどな。」

けど、その所為で結局今日まで警察から出ることはできなかったんだけどね。おかげで服もボロボロのまんま出てきちゃったよ……  
・不幸だ。

「でもさ、なんでそんな場所にナオがいたの？ 自宅謹慎義務付けられてたじゃないか。」

「ん？ 明久、知らないのか？ ルールは破る為にあるんだぞ？」

「あはは。ナオがそれを言うんだ。でも課題だってドツサリ、」

「そんなの初日で終わらせた。」

「な、なんだと!？」

だってそこまで量のあるものじゃなかったし、一日もかからないで終わるだろあんなの。

そんな俺を驚いて見つめる明久。……コイツは別に多くなくてもやらないだろうな。

「はあ……でも、僕だってやれば、」

「やったのか？ お前が宿題を？」

「いや、僕はあくまでもやればできるという意味で話しているからであって、」

「その言い方から察するに、やってないのか？」

「……」

図星か……。まあコイツはそういうヤツだからな。それくらい予想できる。

「大丈夫だって。別にクラスのヤツは誰もやってないだろうからさ。」

「そつだよね……なら、いいんだ。」

その後、落ち込んだ明久を励ましたりなんだりしているうちに校門の前まで着いてしまった。結局はいつもの風景なのだが、停学明けで二週間以上も来ていない所為かなぜか懐かしく感じた。するとそこに

「あつ。明久君っ。」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。……………姫路か。なら、

「それじゃ明久。邪魔者は退散するとするな。」

「んな!？」

俺が茶化したように言っていると明久は見る見るうちに顔を赤く染めていった。ははっ。素直でよろしい!

『ナオのバカ野郎おお!』

「ははっ!」

遠くから聞こえてくる明久の声を聞き流しながら俺は校門を通った。少しうらやましいなと思いつつも今後の亜矢との関係について考えながら歩いていると、昇降口に向かう途中の道で俺はある人物に遭遇した。

「あ、優子。」

「……………」

俺を見つけた優子は終始無言でこちらを見つめている。……………怒って……………る?

「あの……………優子さん?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

話しかけても無言を貫く優子。俺、なにかしたっけ・・・・・・・・？  
そうこう考えているうちに、

「ナオ。」

「はいい!？」

いきなり声をかけられた。ちょっと強めの口調だったものだから声が裏返ってしまった。

「・・・・・・・・ちよつとこの高さまで屈んで。」

「・・・・・・・・え？」

優子は丁度自分の顔の高さくらいまで手を下げた。なぜ・・・・・・・・？

「いいから。」

「あ、ああ。いいけど・・・・・・・・？」

なにをされるかわからないこの状態で俺は膝を折って丁度優子の視線まで顔を近づけた。あ、わかったぞ。この後俺は首の関節を外されるんだ。だからわざわざこの高さまで首を下ろさせたのか。いや、優子は怖いこと考えるなあ・・・・・・・・

「・・・・・・・・ポロポロ」

「ちよ、ちよつと!？ 何で泣くのよ!」

「いや、この世界とももうお別れだと思つと、淋しくなってきたやつて・・・・・・・・」

思い残すことといえは駿の晩御飯を一週間作れなかったことかなあ．．．．．アイツ、きつと今頃は食べ物に飢えてるだろなあ。三日分しか料理残ってなかったと思うし。

まあここで逃げるようじゃ男が廃る。潔く死を迎え入れようじゃないか。

「さあ優子。思う存分やってくれ．．．．．！」

「え？ あ、うん．．．．．」

俺は来るべき死を覚悟し、目を瞑った。優子は俺の首に手をかけ

「ん？」

手が置かれたのは首ではなく肩だった。ここを外されても別に死ぬことはないなあ〜と思い、恐る恐る目を開けてみる。

目を開けた瞬間とほぼ同時だっただろうか。俺の肩が前にグイと引きよせられ、気が付くとそこには目の前に赤い顔をした優子がいて、

「　　つつ!？」

その一瞬で、俺の唇と優子のそれが重なり合った。

〜第三部閉幕〜第63話 家事と喧嘩は俺の華（後書き）

どうも三日月です！

今回は自分でストーリー考えていながら死にそうになりました・・・  
・・・いろんな意味で。

きつと優子ファンの皆様には大絶叫してもらえたことでしょう！

こちらはそれが狙いですからね・・・！！！！！！

個人的にはかなり重要な話になる予定なんで、次の章を楽しみにして  
いてください！

次回は番外編のプールの話です！ 時系列がちょっとズレていますが、あまり気にしないでください！

誤字脱字、その他指輪の能力などは随時募集をしていますのでたくさん  
さんの意見が集まると嬉しいです！

以上、三日月でした！

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 原因編 前書き

前回の青春ポイント合計 ±0

・ 停学を食らう - 3

・ 夜の街に旅立つ俺 + 1

・ 喧嘩でストレス発散 + 2

・ 賞状を貰う + 1

・ 優子と ± 0

現在の青春ポイント合計 + 1

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〈原因編〉

強化合宿の少し前の日のこと。ちょうど亜矢たちが引越してきた週くらいだっただろうか。

「ん？ 今日？」

「そう。泊りがけで僕の家で遊ぼうよ。雄二もいるし、親はいないからさ。」

週末の過ごし方について放課後話していると、明久が自分の家で遊ばないかと提案してきた。

正直暇だし、その誘いには乗っても良いんだが……

「楽しそうだけど、考えておくよ。なにか他に予定が入ったりすると困るし、弟だっているし。」

「ああ、そうだったね。じゃあいつでも連絡していいからちゃんと決めておいてね？」

「了解。んじゃまた今度な？」

「バイバイ〜。」

俺は明久に別れを告げて学校を出た。

俺は今までのことを思い出して見る。友達の家泊りがけで遊びに行くなんてしたこと……ない。うん。

「亜矢の家には遊びに行ったというか、拉致されたようなものだからアレはノーカンだな。」

一度だけ、亜矢の家に行ったことがある。行ったというか連れ去られてだが。亜矢の家はそれは物凄い豪邸で、入るのもためらうよう

な場所だったのを覚えている。あの時は本当に大変だった……

「私がどうしたの？」

「どうわっ!？」

不意に声をかけられる。張本人だ。

「直貴が私の名前を呼んだ気がしたんだけど……呼んだ？」  
「あのかな……どんな耳してんだよ？」

結構小さい声で言ったつもりだったんだけどなあ……なん  
てめざとい。

「私に不可能はないわ! たとえ火の中水の中！」

「よし、わかった。作業服を着ないで原発作業して来い。それでも  
お前は不可能はないと言い切れ」

「わかりました！」

「ってちよつと待て! あくまでも今のは冗談で って服を脱  
ごうとするな!? 俺が言ったのは装備をちゃんとしなくてそうい  
う場で生きていられるかなただけであって、別にそういうアレ  
じゃないんだ！」

シャツのボタンをドンドン外していく亜矢を見て慌ててその手を押  
さえる俺。コイツは俺を辱める為ならどんな手段も選ばないのか!?

「もう……だつて直貴が脱げつて言うから……」

「違う! 俺は脱げなんて一言も言っていない! ただ不可能なこと  
はお前にもあるだろということをお願いしたかっただけで、」

「もう、今日はつけてたから良かったけど、ブラをつけてなかった

ら大惨事だったんだからね？」

「お前はブラをつけてない日があるのか!？」

亜矢は皆がいる中で堂々と言い放った。幸い皆には聞こえてなかったようだがそんなこと女子がおおっぴらに言っただけならいいの!？ 俺も一応男だよ!？

「だってたまに胸がきつくなっちゃうんだもん。」

「待て。その台詞はある特定の人物、主に胸部に悩みを持つ人に心の傷を負わせることに。」

「その特定の人物って一体誰のことかしら、ナオ……………」

「え?」

声の主に反応して後ろを向くと、見慣れた顔が目につく。うしろえ!？

「ゆ、ゆうご? グビガじまる……………」

「誰のどこがなんだって?」

優子は物凄い笑顔で俺の首を締め上げる。こ、この状況は生命の危機だ! なぜこうなったのかの理解は一度置いておいてここはとにかく褒めなくては……………!

「優子。あ、あのな。お前の、」

「さっきブラがどうたら言ってたわよね?」

「うおおおお! 首がねじ切れるううう!! 優子様! 何でもいっこときくから話を、せめて弁明をさせてください!」

「そう……………じゃあちよつとだけ緩めてあげる。」

胴体との別れを告げそうになった俺の頭部はなんとか元々の状態に

留めることができた。あと少し遅かったら、俺は悲惨な末路をたどっていたことだろう。

「あんな優子。俺が亜矢と話していたのは、」

「私の下着の色についてだったわよね？」

「お前は余計なことを口に出すな！　って優子！　違う！　そんな気はサラサラないんだ！　だからまた手に力を込めるなああ！！」

「私、そういうことはいけないと思うんだけど………間違ってる？」

優しく俺に問いかけるもその手に力を緩めようとする気配はない。そんな真顔で間違ってる？と聞かれたら普通は間違ってるないと答えるだろう。だが今は俺の首は優子の一撃にかかっている。下手なことを行つて臨死体験、なんてことになったら間違っていたのは強制的に俺になってしまふ。

ここは、しっかりと応答しよう。

「優子。間違つてない。だけど俺が亜矢と話していたのはそういう話じゃないんだ。」

「ふうん。じゃあ何話してたの？」

「それは、」

「私たちの将来について。」

「……………」

もう、いいや。潔く死を認めよう。

「反論は？」

「もう……………いつそのこと殺せよ。」

ここはなにを言っても切り抜けられる気がしない。それなら男らし

く散っていった方が良いだろう。  
そんな俺に対し、優子は意外な態度を取ってきた。

「……………はあ。ま、ナオがそんな話するわけないか。」  
「へ？」

そつと俺の首から手を離す優子。め、めずらしい……………いつ  
もならここで確実に首に一発貫う所なのになあ……………一体ど  
んな心境の変化だ？

「でもまあ、ナオからあんなことを言ってきてくれたのは嬉しかったかな？」

「？ あんなこと？」

自分が言ったとされる発言で喜ぶ優子。ん？ 俺、なんて言ったっ  
け……………？

「まさかナオが、“なんでもいうことをきく”なんて言ってくれる  
なんて……………！」

このとき、俺はまさに思った。後悔後に立たず、と。

「それでは亜矢さん。私はこれからナオと一緒に買い物に行くの  
でこれで失礼。」

「なっ……………！」

やっぱりこうなるのか……………もうどうにでもしてくれ……………

・

結局、優子の買い物に付き合わされた俺は夜遅くまで荷物持ちをさ

せられることになったのだった……

帰り道。

「……………？　ねえ、ナオ。」

「なんだ？」

不意に話しかけられる。

「アレって誰に見える？」

そう言つて優子は前方を指差した。丁度学校の前辺りを指していた。

「アレは俺のクラスメイトのバカとその代表に見える。それがどうかしたのか？」

「今何時？」

えと。

「午後8時だが。」

「じゃあ下校中じゃないわよね？」

「そりゃそうだろ。」

当たり前のことを聞いてくる優子。こんな時間に下校させられるのは補習以外だったらありえないだろう。だが、大体この後どういう状況になるのかはわかりきっている。

「まあ考えられることはただ一つ。アイツらが今からしようとしてる。」

「え？ 何しようとしてるかわかるの？」

アイツらが今からしようとしていること。そんなのは

「バカなことに決まってるだろ？」

『コイツが悪いんです!!』

校舎潜入後、俺は宿直室前でそんな会話を聞いた。なにを話してるんだ……？

「ねえナオ……帰ろう？」

「ん？ どうした優子。こんな楽しいイベント黙って見過ごすわけにいかないだろ。」

明久たちが夜な夜な校舎に潜入して何をしているのか。……  
気になるじゃないか。

でも、こんな面白そうな状態でも優子は気が引けるようだ。まあ優等生が夜の学校に潜入するなんて本来ならありえないもんな。

「……見つかつたら怒られるし、それに……」

「それに？」

「ちょ、ちょっとだけ怖いというか……」

優子は少し青ざめている。確かに夜の学校という少し不気味な場所に長時間居るといのはあまり体験したくないものだろう。俺は全然平気だが。

パリン



「優子。上に行くぞ！」

「え！？ でも下が出口」

「そんなことしてたら追いつかれて、はいさようなら、だ！ 上に一度逃げて、それから撒く！」

階段を駆け上がる俺と優子。さあて、こっからどうする？

「貴様その声は浅斬か！？ 貴様も一緒に補習室送りにしてやろう！」

「いや、こんなに怖い鬼ごっこ初めてだ！」

「ナオ。その割には手汗が凄いわよ。」

「その辺は気にするな！ 逃げるが勝ちだ！」

俺は優子の手を引きながら廊下の突き当たりに辿り着く。背後からは鬼の気配。そこには一つの窓しかない。一触即発の絶妙なこの状況。仕方がない。この場から逃げ出すには

「ちよ、ちよつとナオ！？」

「そうら跳ぶぞ優子！ しっかり掴まってるよ！」

「ええっ！？」

優子を抱きかかえ、窓を開けた俺。そしてそのまま

「I can flyいいいい！！！」

「きゃあああああああつっ！！！」

飛び降りた。二階の窓から。

『なにっ！？ 跳んだだと！？』

西村先生もこの行動は予想外だったのか、反応できずに俺たちが先ほどいた場所で立ち往生していた。

俺は見事に着地し、出口を目指して走り抜けた。

「よっと……大丈夫だったか、優子？」

「ちょ、ちよっと……そういうことは、事前に言ってよね……」

少し息を荒くして優子が言う。まああんなこといきなりされたら誰でもビビるよな。

「ビックリした……」

「ゴメンゴメン。流石に怖かったか……でも逃げるにはこれしかなかったんだ。許してくれよ。」

現在は学校の門も抜け、道なりに走っている。時間も遅いし、このまま優子を送り届けてあげよう。

俺はそのまま優子を横抱き（俗に言うお姫様抱っこ）でそのまま家まで向かった。

「もう……別にそんなのいいのに。」

「ん？ どうした？」

「ううん。坂本君たちはどうしたのかなあって思っただけ。」

言われてみれば確かにそうだ。こんな夜中に学校に侵入なんてなにを考えてるんだか。

「きつと、なにかあったんだろ。それも凄くどうでもいいような感

じの。」

「そうね。あ、この辺で良いわよ。」

気が付くともう家の近くに来ていた。結構な距離を走った所為か腕も足もガクガクだ。優子もこの体勢は疲れるのだろうか。

「よっと……どこか痛いところない？ 大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫……心拍数以外は……」

「え？ どこだった？」

「な、なんでもない！ ほら。ね！」

「え？ あ、ああ……」

なんと言ったのだろうか？ よく聞こえなかったな……

「ほら、もう遅いし帰りましょう！」

「あ、ああ。わかった……ん？」

ピロリーン ピロリーン

俺の携帯がメールの着信を告げた。

「あ、ゴメン。メールだ。」

俺は携帯を開き、受信欄に目を通した。

「誰から？」

「んっと、明久からだ。えーと、なにになに？」

「メール掃除だよ！』だって……は？」

『今週末はナオもプ

「きっとそれは処罰の話ね。」  
「マジでか……」

逃げたときに素性がバレてたからだろう。畜生……あそこ  
で大声を出さなければ……全くめんどくさいったらありや  
しない

ピロリン ピロリン

「ん？ また来たな。なにになに……『掃除をするなら自由  
にプールを使っていいらしいよ』だ……と……  
……!？」

「？ ナオ？ どうしたの？」

よし、では早速。

「優子。来週末暇か？」

「え？ う、うん。暇だけど……」

「プールに行こう!」

「ええっ!？」

予想していた通りの反応だ。まあいきなりプールに誘われてOKを  
出す女子はいないだろう。

「え、ええつと……い、色々と準備もいるし、もう少し考  
えさせて。ね？」

そう言うと優子は自分の胸部へ視線を送る。なるほど。悩むほど悪

いスタイルしてるわけじゃないのに返事が快くないのはその所為か。

「そんなに気にするほど無いわけじゃないと思うんだけどなあ。」

「ナオ。アンタの間接上から順番に丁寧に外していくわ。」

「私のような下等な生物がナメた真似してすみませんでした。」

ここで優子の水着姿を目に焼き付けることができなくなるのは実に惜しい。この場ではいくらでも謝ってやる。だから、せめて水着姿だけでも拝ませてくれ……………!

「もう。女の子は準備が色々大変なんだからね? ……

心の準備とか。」

「へ?」

「なんでもないわよ。……………で? 何時に集合なの?」

「え? ってことは」

「勿論、行くわよ。吉井君たちがいるなら楽しそうだしね。」

よっしやああああああっ!! これで、優子の水着姿を拝むことができる……………!

「えっと。日時は決まってるけど、細かい時間とかはまだ決まってるから後で連絡するよ。」

「わかったわ。それじゃあまた今度ね、ナオ。」

「おう!」

俺はしっかりと返事をして、優子を見送った。

その日、俺は早く週末にならないかと心を躍らせていた。

そう、あんな事件に発展するとも知らずに・・・

どうも三日月です！

最近すっかり寒くなりましたね。

こんな状態でプールの内容考えるとか難しすぎでしょ。

でも、頑張って考えたいと思います！

ちなみになぜプールの回がここで来るかというと、ただ単に間違えたからです。すみません。

バイトの方もそのうち出したいのでその分四章までの道のりが遠くなってしまいました。皆さんには悪いですが、しばらくは3・5巻の番外編が続くと考えてください。

それと、お気に入り登録が200件を突破しました！

これも皆様のおかげです！

今まで応援してくれた方や最近の方、色々な方々に感謝したいと思います！

どうもありがとうございます！ これからも応援よろしくお願ひします！

以上、三日月でした！

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〔通常編〕（前書き）

前回の青春ポイント合計 + 1

・言動に注意しようと思った - 2

・優子に嵌められる - 2

・夜の学校に侵入 + 3

・そしてバレる - 1

・逃亡 - 1

・I can fly + 4

・週末が楽しみになる + 1

現在の青春ポイント合計 + 3

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〈通常編〉

時刻は午前十時。約束した場所には俺と明久。それとムッツリー二と姫路がいた。

「やあナオ。絶好のプール日和だね！」

「……………そうだな。」

「ねえナオ。皆はどんな水着なのかな？ 姫路さんや美波のも気になるし、神咲さんのも気になるよね！ 昨日はワクワクしちゃって中々寝れなかつたんだよ。ナオも皆の水着が楽しみだよな？」

「……………そうだな。」

「あはは……………ねえ、ナオ。まともな返事してよ。」

「……………そうだな。」

「やめてよ！ なんでそんなにテンションが低いの！？ 気分上げてよ。僕まで飲み込まれちゃいそう

じゃないか！」

このナオの異様なまでに低いテンションには、理由があった。

「ねえ、週末に学校のプールが貸切って本当？」  
「は？」

キツカケはこの一言だった。

週明けの教室。まだコイツには喋っていない情報がコイツの口から放たれた。……なぜ、そのことを知っている？

「亜矢、お前」

「直貴。そういうことはしっかりと私たちにも言ってくれないと困るじゃない！ この亜矢様の水着姿を拝めなくなったらどうするつもりだったの？」

壁に耳あり障子に目あり。この言葉が今とても身に染みた。

「……誰から聞き出した。」

「いやね〜。優しい貴方の幼馴染から聞いたんだけどお〜？」

「優のヤツ……！」

情報統制が取れていなかった。畜生……やはり優を誘うのはもっと後にすればよかった。

「なんで優には誘っておいて私には誘わないのよ。私だってそっい

うイベントに参加したいのに……酷いじゃない。」

「お前に言つと生傷が増えそうだからだ。それくらい自覚しろ。」

「私がいつ直貴に暴力を振るつたつていうの？ そんなこと生きて一度も、」

「お前どころかお前の親父にすら俺は殺されそうになつてるんだがこの説明はどうやつてつけるつもりだ？」

「うっ……」

亜矢が痛いところを突かれた、という風な顔をした。

一度亜矢の家に招待（という名の拉致）をされたときに、親父さんを紹介された。そのときの恐怖を今でも俺は覚えている……

「はぁ……一応お前も誘う予定だったから別にいいけどさ。」

「え？」

「全く。俺がお前を誘わないとでも思つてるのか？ 一応とはいえ俺の中ではお前は友達だつて思つてるんだから、その友達を誘わないわけないだろ？」

「直貴……」

こんなヤツでも楽しむなら大勢の方が良い。いないよりはいたほうがマシだしな。

「んで？ 当然俺も呼んでくれるんだよな？」

「うわっ。」

声をかけてきたのは翔太だった。なんて耳のいいヤツなんだ……

「翔太……言つておくがお前の分の席は用意してないんだ。」

「ここは速やかに帰ってくれ。」

「そんな！？　そこはさっきの神咲と同じようにお前も呼ぶつもりだったて言うところだろ！？」

「いや、俺お前のこと友達だと思ってねえし。」

「まさかのカミングアウト！？　俺の存在は友達未満！？」

別に本当に嫌いだから誘わないわけではない。俺が誘わなくてもコイツの同志、つまりムツツリー二が誘ってしまうだろうからその手間を取りたくなかっただけだ。

「そんな……水着の楽園が……」

「……あーもう、落ち込むな。来るなら別に来てもいいか

ら。」

「本当か！？」

「ああ。わかったらさっさと席に戻れ。そろそろ西村先生が来るから目をつけられるぞ。」

「おっつ。」

そう言うと翔太は自分の席に戻っていった。

「全く……」

「……ふふっ。」

なぜかそのやり取りを見ていた亜矢が笑い出した。なにが可笑しかったんだ？

「どうした？」

「いや？　直貴ってやっぱり優しいなあ〜って思って。」

「んな！？」

今のやり取りを見てか！？ どこが！？

「だって何気なく水樹のことも誘ってるし、アタシの時だって嫌々言いながらも結局誘ってるじゃない？ そういうのツンデレっていうのよね」

「だ、誰がツンデレだ！？ ふざけんなよ！」

くそ、調子狂うな………！

「もう………素直じゃないんだから。」

「お前にはいつも自然体で接しているつもりだぞ。これぐらい普通だ。」

「なるほど………ナオにとってツンデレは普通、っと。」

「そこ違つからな！？」

とにかく亜矢のペースに持っていかれる俺。このままでは身が持たない………！

「ほら！ 早く自分の席に戻れ！ もうすぐ西村先生来るぞ。」

「え〜？」

「え〜？ じゃない。早く戻った！」

「もう………」

亜矢は渋々ながら自分の席に戻っていった。ふう………これで俺の身にやっと安息が訪れ

「あ、そうだつ！ 私の水着には大いに期待していいわよ？」

去り際にそんなことを言われた。

安息なんて、訪れないのかもしれない、とそのとき思った俺だった。

「おはようじゃ、お主ら。」

「あ、おはよう。皆さん。」

木下姉弟（戸籍上は）が到着。秀吉も優子も今日のために水着を新調したそうだ。

いつ見ても優子は可愛いなあと思いつつ、今回の水着に大いに期待している俺だった。」

「ナオ。心の声が途中から口に出てるよ。」

「はっ!?!? しまった!?!?」

やはり亜矢が来るからといってテンションを下げてばかりいられない。ここは楽しんでおかないと損だろう。楽しむぜ、俺！

「よう優子！ 今日のお前の水着は大胆なのが良いとずっと昨日考えていゴふっ!?!」

鳩尾に鋭い衝撃が走る。優子が目にも留まらぬ速さで俺のことを殴っていた。ちよつと言い過ぎたかな………?

「もうっ！ ナオのバカ、スケベ、変態！」

「じよ、………冗談のつもりだったのに………がくっ。」

「ああっ!? まだ水着姿を拝んでもないのにナオが瀕死だ！ カムバアアアック!!」

「いや、まだ死んでないから。」

そんな冗談を交えながら話していると、次に来たのは代表夫妻だった。

「おいコラ待てや。今俺に対して凄く不快になることを考えなかったか？」

「いや、別に。」

なんて鋭いんだ。これは悪ふざけでも言わない方が良かったろう。自分のために。

「………私にとっては幸せ。」

「待て翔子。コイツがなにを考えたかわかるのか？」

「………私たちを見て普通の人が思うのは、いつ婚約するの

かということだけ。」

「そこに辿り着くまでのプロセスが色々すつ飛んでることに気付けない！ それと俺たちを見て普通の人が思うのは、せいぜい恋人同士ぐらいだろっが！」

「恋人同士であることは嫌ではないんだな。」

「………素直じゃない。」

そんな必死な坂本を見て俺とA代表が言う。これが墓穴を掘るというヤツか。

俺をそんな目で見るなああ！ という叫びが後ろから聞こえてくるがここは無視だ。俺は自分のことに専念しよう。決して面白いとかそんな理由ではない。断じて。

「あ、でも坂本。お前のことだからA代表には声をかけないできたのかと思っただけど、前回のウエディング体験で素直にでもなったのか？ 今回はやけに大人しいじゃないか。」

「ああ、そのことか。その理由は明久にでも聞いてくれ。俺はプールの鍵を貰ってくる。」

少し落ち着いた風と言う坂本。だけど自分では言いたくないらしく、坂本はA代表と職員室に鍵を取りに行くのを口実に逃げてしまった。理由って一体なんだ？

「なあ明久。なんで坂本は今回大人しいんだ？」

「あ、そのこと？ だって霧島さんになにも言わないで雄二が水着の女の子たちと遊んだとなると、そのあとの雄二の展開は言わずともわかるよね？」

「ああ、そうか。樹海の奥かコンクリ詰め海底、ぐらいが妥当だな。」

「そっいうことだよ。」

なるほど。A代表を呼ばないと確実な死が待ち受けているというワケか。アイツも大変だな。

「そういえば、ムツツリーニは？」

「ああ。それならあそこ。」

明久の指差した場所を見ると、視界の隅でなにかゴソゴソやっている人影があった。

「ムツツリーニ。どうし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（カチャカチャカチャカチャ）」

自分の級友が鬼気迫る表情でカメラを手入れしているこの図。なにかがおかしい気がする。

「あ、あのさ、ムツツリーニ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・今、忙しい。」

こっちに視線を送るのすら時間の無駄だという風に、口早に返事をするムツツリーニ。

「ムツツリーニ。準備は良いがどうせ鼻血の海に沈んじゃうんじゃないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・甘く見てもらっては困る。」

そう言いながらスポーツバックを見せるムツツリーニ。中身を見てみると言わんばかりに口を開けたバックの中に入っていたものは

「……………お前はドラキュラか？」

「……………違う。健全な証。」

中には大量の輸血パックが入っていた。どこでこんなに入手したのだろうか……………

「最初から鼻血を出すことは認めている辺り、今日は死ぬ気で挑むようだな。」

「……………準備は万端。」

鼻血の予防を最初から諦めているあたり男らしい。だが腹が立つのはなぜだろうか。

「まあそれならそれでいいか……………おつ。」

深く考えないようにしよう。そう考えたとき、前にも一度見たことのある車が校門の前に停車した。

車の運転席には黒の背広に、ダークなオーラを醸し出している運転手。助手席から聞こえてきたのは、いつも通りの騒がしい声だった。

「お待たせ！ ちょっと用事があったの。」

「悪い！ 時間がかかっちゃまった！」

「遅れてゴメンね？」

亜矢、翔太、優の三人が車から降りる。送ってもらったのだろうか。確かに俺は今コイツらが住んでるところを知らないし、運転手付きの亜矢の車で来たほうが道もわかって都合が良かったのだろう。

「あと一人か。」

「え？ まだ全員揃ってないの？」

亜矢が聞き返す。今着いたばかりだし、状況を把握したいのだろう。

「ああ。島田がまだ来てない。　　って、噂をすれば影、だな。」

説明をしようとしたときに、坂の下からポニーテールを揺らしながら歩いてくる姿が見えた。と、もう一人いるな。アレは確か

タタタタタッ

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」  
「わわっ!？」

そうだ。葉月ちゃんだっけ？ 清涼祭のとき以来だから忘れる所だったな。

葉月ちゃんは明久の背中に飛びつき、その驚いた明久の反応を見て楽しんでいた。

「ねえねえ！ あれって島田さんの妹さん？ 凄く可愛いじゃない！」

「亜矢。テンションをあげるのは良いが今の眼つきは獲物を見つけた鷹だ。襲わないように。」

亜矢は基本的に可愛いものに目がない。でもこの場合はロリコンが当てはまるのだろうか。

「くっ………！ むぎゅ〜〜………ってしたい！」  
「お前にそれをされたヤツは大抵呼吸困難に陥っていたな………」

「・

それにしてもこうして見ると結構な人数が集まったな。これなら退屈することはなさそうだ。

「あれ？ 坂本はまだ来てないの？ ウチが最後だと思ったのに。」

一番最後に着いたからだろう。わからないのも無理はない。

「いや、さつき鍵を取りに行ったんだ。そろそろ帰ってきてくと

おつ。ほら、帰ってきたぞ。」

話していると丁度坂本たちが帰ってきた。

「おし、全員揃ったみたいだな。んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ。」

坂本はキビキビと指示を出していく。そしていったん男女に分かれた。って、おいおい……

「こらこら。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ？ 霧島さんについていかないとダメだよ。」

明久が注意を促す。って秀吉は男だぞ！？ まだ認識を改めないのかコイツは。

「えへへ。冗談ですつ。」

「ワシは冗談ではないのじゃが……」

確かに秀吉は男だが、ムツツリー二と一緒に着替えたりしたらきつと彼は皆の水着姿を見る前に天国行きの特急列車に乗って逝ってしまっただろう。本人は悔いが残らないだろうが死人が出ると困るのは俺らだ。ここは秀吉には悪いが他の場所で着替えてもらっしかなない。

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下。」

「し、島田！？ ついにお主までそんな目でワシを見るように！？」

嫌じゃ！ 女子更衣室で着替えるのは嫌なのじゃ！」

「秀吉・・・・・・・・アンタも苦労してるのね。」

「あ、姉上・・・・・・・・」

頑なに女子更衣室を拒む秀吉。

そんなに嫌がられてもこちらで着替えられたらムツツリー二が・・・・・・・・

「それならいつそ別の場所で着替えちゃったらどうですか？ 木下君がそれで嫌じゃなければですけど・・・・・・・・」

優がぼそつとそんなことを言った。まあそれなら確かに文句はないだろう。

「ぬ、ぬう・・・・・・・・得心行かぬが、この際我慢じゃ・・・・・・・・水着姿を見せればきつと皆もワシの姿を見る目が変わるはずじゃ・・・・・・・・」

などとブツブツ良いながら、秀吉は持っている水着の入っている袋を握り締めた。さて、ここで事前確認だ。

「秀吉。ちなみにお前の水着はどういうものだ？」

「ああ、そうじゃったな。買ってきた水着じゃが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（くわっ！）」

秀吉の台詞に目を剥くムツツリーニ。おいおい、そんなに目を見開いたらドライアイになるぞ〜？

「トランクスタイプじゃ。」

「バカなあああっ！！！！」

同時に突っ伏すバカ二人。そこまでショックなのか……………

「うう……………男物なんて似合わないと思うんだけどなあ……………」

「本当に一度認識を改めさせる必要があるよな……………」

「全く。時間が勿体ないぞ。決まったならさっさと行くぞ。」

「あ、うん。わかった。」

こうして俺らはそれぞれの更衣室に向かった。

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〔通常編〕（後書き）

夢はライトノベルの大人買い。どうも三日月です。

最近は金欠気味で遊びにいけません！ 同情するなら金をクレ！

さて、次回はやっと皆さんの楽しみにしていた水着姿のお披露目です！

楽しみに待っていてください！

以上、三日月でした！

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 絶叫編 (前書き)

前回の青春ポイント合計 + 3

・ 亜矢も来ることになる - 1

・ ついでに翔太も - 1

・ 優子に鳩尾パンチされる - 2

・ バカな級友たちに呆れる - 1

・ なんだかんだで楽しくなりそうだなあ〜と思う + 2

現在の青春ポイント合計 ± 0

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 く絶叫編く

俺らが女子と別れて数分がたった頃

「なあ翔太。やめておいた方が良くと思うぞ？」

「なんだと直貴！？ ここまで来て諦めるのか！？」

現在場所は女子更衣室（よりちょっと手前の角のスペース）に俺らはいた。なぜこんな所にいるかって？ ……それは翔太が数分前にこんなことを言い出したからだ。

『女子更衣室覗きに行きたい人この指とまれ！！』

俺と明久と坂本は即反対。なぜなら、バレた瞬間例外なく俺たちはプール掃除のとき自分の血を洗うことになるからだ。特に坂本には本格的な死が待っているだろう。

「……………ここで死ぬのも存外悪くはない。」

「ムツツリーニ。その精神も悪くは無いと思うが俺はそれ以上に自分の命が惜しい。だから帰らせてもらおう。」

「直貴。ここで帰るなんて男じゃないな。こっ、もっとズバツといけよ。」

「その効果音は俺の頸動脈が掻き切られる音と酷似している気がする……………ていうか、覗くならお前たちだけで行けよ。俺まで巻き込む必要性はないだろ。」

「まあまあ。赤信号、皆で渡れば怖くないってことわざもあるだろ？」

「ねえよ！ そんなことわざー！」

もしそんなことをしたらその道路は信号機以外の物も真っ赤になるだろう。この場合、真っ赤になるのは俺たちだが。

「ってそんなに騒いだら誰かにバレる」

「誰よ、うるさいわね。」

突如扉が開き、中から亜矢が出てきた。

心臓どころか内臓が口から全部飛び出しそうになった。いや、物理的に不可能だけど。

(どどどど、どうすんだよ!? み、見つかったら死は免れないぞ!)

(そ、そうだ! 康太、お前の力を貸して っていねえ!?)  
どこにいった!?)

(うわ。もうあんな所まで逃げてるぞ!? 俺らもオサラバしないとこの世にオサラバすることになるぞ!)

(よし、わかった。ここはどちらかを囮にして逃げるって手筈で行こう。)

(そうだな。なら……………)

アイコンタクトで意思の疎通ができた俺ら。これで恨みっこは無しだ。

俺らは目を合わせ、タイミングを計り、そして

( (最初はグー! ジャンケンポン! ) )

ナオグー

翔太パー

負けた。

(……………)

(よし、後は任せた！)

……………この場合、俺のすることは決まってる。  
俺の性格、それは　　！

「亜矢あ！　こっちに来てくれ！　翔太が更衣室の覗きをしてるぞ  
！」

腹黒いことだ。

「ゲツ！？　テメエ直貴なんてこと言いやがる！？」

「なんですって！？　水樹、待ちなさい！」

「うおおおおお！！　直貴、覚えてるよ！！」

亜矢はまだ着替えてなかったようで、翔太を見つけるや否や猛スピ  
ードで追いかけていった。アイツの足の速さには俺でも勝てないか  
らな。ここは翔太を犠牲にして正解だったな。

「あっはっは。んじゃ、俺はこの辺で逃げるとしますか。」

自分の身が安全になり、余裕綽々で男子更衣室に戻ろうとする俺。  
だが

ガシッ

肩を不意に掴まれた。 . . . . 振り向いたら殺られる . . . . .  
・！  
俺はゆっくりと、前に進む。後ろを極力見ないように。

「ナオ。」

その一言で肝が冷えた。この底冷えするような鋭い声 . . . . .  
この声の主は . . . . .。俺は覚悟を決め、後ろを振り返った。

「亜矢さんがいなくなったから探しに行こうと思ったら . . . . .  
なんでこんな所にナオがいるのかしら？」

「や、やあ優子 . . . . . き、奇遇だね！」

物凄く良い笑顔で優子が目の前に立っている。 . . . . . 死亡フラグだ。

「奇遇？ 男子更衣室はあっちでしょ？ さっきまで坂本君たちについていったのに、どうして逆方向のこっちで会うのかしら？」

「あ、あはは . . . . . なんてだろうね。きつと偶然だよ、偶然 . . . . .」

相手の神経を逆撫でしないように . . . . . ゆっくりと立ち去ろう。そうすればこの場はなんとか逃げ切れるはずだ。

「そう . . . . . ならいいわ。早く坂本君たちの所に戻りなさい。」

「うん。そ、それじゃあ、」

俺が逃げる体勢を整えた丁度そのとき、最悪な事態が起こった。

「水樹、流石にもう観念しなさい。」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

翔太を捕まえた亜矢が戻ってきた。やばい・・・・・・・・。翔太の顔が原形をとどめていない。これは俺も捕まったらなにされるかわからないな・・・・・・・・！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「んなっ!？」

「? 水樹、なにしてるの?」

翔太が俺を指差してきた。ほとんど息も絶え絶えのこの状況で、前はなにを伝えるつもりだ!? やめろ、その口を開くなあ!

「・・・・・・・・直貴の指示で・・・・・・・・覗こうとしました・・・・・・・・」

そのとき、視界が急に暗くなった。・・・・・・・・この世にお別れを告げるときが来たようだ。

さらば、同士たちよ・・・・・・・・

その後、俺と翔太の悲鳴が校舎中に響き渡ったのは言うまでもないだろう。

## そしてその後

「やっぱりお前ら、ドジ踏んだようだな……」  
「うるせー！　ほとんどコイツの所為だ！」  
「いや。直貴が俺のことを犠牲にしなければこんなことにはならなかったね！」

俺らはその二人に顔の原型が留められないほどボコボコにされた後、結局着替えてプールに来ていた。

「まあナオだもんね。『ドジは死んでも治らない』、だよきつと。」  
「それはお前にも言えるな、明久。」  
「ちよつと待ってナオ。それどういうこと？」  
「お前には『バカは死んでも治らない』という言葉がお似合いだ。」  
「なんだと!？」  
「まあまあ二人とも。もうすぐ女子も来るだろうから落ちついて待つてろ。」

俺に飛びかかろうとした明久は途中、坂本の一言によって一応の落ち着きを取り戻した。

「しょ、しょうがないな……………ナオ、今回のところは許してあげるよ。」

「明久。」

「なんだい？」

「死ね。」

「やっぱりキサマは殺す！」

「やめろって言ってるだろうが！」

再び喧嘩が勃発しそうになった俺らを再び坂本が止める。く……………絶対に後でボッコボコにしてやる……………

「……………準備は万端。」

「うわっ、カメラの機材に大量の輸血パック……………大丈夫か？」

先ほど逃げ出したムツツリーニは大量の荷物を持ってやってきた。この状況でまだエロを優先するなんて……………コイツはホントに侮れないな。

「……………問題ない。イメトレを256パターン、昨晚済ませてある。」

「どんなパターンを考えたら256も出てくるんだ……………？」

どんなのがあるのか聞いてみたいもんだ。

「……………そして512パターンの出血を確認した。」

「最初のパターンより多いだろ。致死率200%じゃねえか。」

それを行なったのにもかかわらず来るなんて、どうやら今回ムツリーニは死にに來たようだ。

「お、誰か來たぞ。」

不意に坂本が呟く。顔を向けると小さな人影が……あ、葉月ちゃんか。やっぱり小学生だからスクール水着で大丈夫みたいだな。

「どどどどうしよう皆!? あれってスクール水着だよね!? そんなものを着た小学生と遊んでいたら逮捕されたりしないかな!」

「……………弁護士を呼んで欲しい。(ポタポタボタ)」

「あのな……………小学生相手に取り乱しすぎだろお前ら。」

なにをそんなに慌てることがあるのやら。坂本を除いた三人は小学生の水着姿に狂喜乱舞していた。

「お兄ちゃんたち、お待たせですつ。」

「いや、そんなに待ってないよ葉月ちゃん。」

「そうですか?」

「ナオ。懲役は二年で済みそうだね。」

「……………実刑はやむをえない。(ポタポタボタ)」

「冷静なフリして本性丸見えだろうが。もう少し落ち着けて言うてるだろ。」

それにしても島田の妹とは思えないな。主に胸の辺りが  
（ゴ  
キッ！）

ボタン（ナオが倒れる音）

「……………」

「ナオ。女の子を前にしてそういうこと考えちゃダメでしょ？ さ  
っきのことも含めて。」

「ゆ、優子……………」

誰の仕業かはすぐにわかった。神のごとき速さで俺の首を逆方向に  
曲げたのは、優子だ。

「皆。俺は今、仰向けなのか？ 身体は上を向いているのに顔が地  
面を向いているぞ……………」

「ナオ！ 葉月ちゃんも見てるか素早くその首を戻して！」

「むっ！？ ってことは『残酷的な描写が含まれています』の場面  
か！？ やばい、早く戻さないと……………って身体が逆方向だ  
からうまく戻せない！」

このままでは他のみんなの水着姿を拝むどころか生死に関わる。よ  
し、ここは優子にひたすら懇願しよう。助けて、と。

「優子様。どうかこの首を元に戻してはいただけませんか？」

「自分でやっておいてなんだけど、結構シユールね……………い  
いわ。顔上げて。」

顔を上げると、後ろに立っていた優子の姿が一瞬見え（ゴキッ）…

・・・！ (声にならない痛み)

「はい、これで元に戻ったわ。」

戻すならもう少し優しくして欲しかった。

「ったく・・・。優子、やるならもう少し加減をしてくれと前から・・・！」

「うん？ どうしたのナオ・・・？」

優子の姿に一瞬言葉を失った。

「あ・・・。この水着、似合ってる？」

「え？ あ、ああ。すっごく似合ってるぞ？」

「何で疑問系なのよ？」

「あ、えくと、その・・・。」

うまい褒め言葉が見当たらない・・・。

優子の水着は上下にフリルのついた、チュープトップタイプの水着だった。色はミントグリーンで、上のチュートップにはフリルが二段ついていた。これを普通の人を着たらなんとも思わないが、今回ばかりは言わせてもらおう。

「俺は今日死ぬな・・・。」

「い、いきなりなに言ってるの？」

「いや、優子がいつも以上に可愛かったから取り乱しただけ・・・。  
・・・って、あ。」

つい本音が。

「ななななに言ってるのよアンタはああああ！」

「そ、そんなつもりで言ったわけじゃにやいんだ優子！ 信じてくれって違う！ 今のはわざとじゃない！ 決して社交辞令ではなく本音がついポロツと……いたたたた！！」

「も、もう！ は、恥ずかしいわね……」

俺は恥ずかしいだけじゃなくて痛みも伴っているから、優子には早く落ち着いて欲しい。

『な、何よ。やっぱりこの格好、どこか変なの……？』

『い、いや。そんなことないよ！ その、凄く似合ってるよ！』

『え……？ アキ、それ本当……？』

『う、うん……。手も胸も脚もバストもほっそりとしていて、凄く綺麗だと脚の親指が踏み抜かれたように痛い……！』

『今、ウチの胸が小さいって二回言わなかった？』

隣ではいつの間にか来た島田が明久をボコにしている。俺もだけど、どうしてアイツはうまいこと褒めることができないのだろうか。謎だ……

そんな感じでみんなの水着姿を褒めていたら、次の刺客が現れた。

今度は……二人！？ ムツリーニは大丈夫か！？

「……………（ポタポタポタ）」

無言で鼻血を出し続けるムツリーニ。怖い……。いろんな意味で怖い。

そうしているうちに二人の刺客の内の一人は長い金髪を、もう一人は長い黒髪を翻し、まるでモデルのように優雅に歩いてくる。全てが高スペックで、波を思わせるようなその体つきを惜しげもなく晒しながら歩いてくるその姿は、とても現実のものとは思えないほど

に綺麗だった。(明久談だが)

二人の内の一人 霧島翔子ことA代表は自然な仕草で歩み寄ってきて

「……………雄二。他の子を見ないように。」

そのまま流れるような動きで坂本の両目を潰した。

「ぐあああつ！ 目が、目があつ！！」

「さすが代表ね……………。坂本君の目を潰す仕草まで綺麗だなんて……………」

「優子すまん。現実を見てくれ。今のは俺の級友が嫉妬に刈られた彼女に目を潰されただけにしか見えない。」

のたつつ坂本を見て心が痛む俺。悲しすぎる……………

「ほらほら雄二。雄二も霧島さんに言うべきことがあるでしょ？」

明久たちに褒められても嬉しそうなA代表。それが想い人である坂本なら尚更だろう。明久はこの状況でも何も言わない坂本の背中をドンと押した。

「翔子。」

「……………うん。」

緊張の一瞬。

「ティッシュをくれ。涙が止まらん。」

そりゃそうだ。

「このバカ雄二！ もっと他に言うべきことあるじゃないか！」

「視界を奪われて他に何を言えと!?!」

目潰されてるのに容姿を褒めろって言われてもそりゃ無理だよな・  
・  
・  
・

「ちよつと直貴。さつきから私のことはガン無視ですか？」

「ん？ ああ、亜矢か。居たんだ。(ボキツ)」

腕が逆方向を向いた。

「さつきから居たのに何で気付いてくれないのよバカあああつ！  
！」

「うおい!? 俺の腕元に戻せー！」

ショックを受けてどこかに走り出す亜矢。うーん、ちよつとデリカ  
シーが無さ過ぎたような気がするな……。後で謝っとくか。

「む、ムツツリーニ!? ムツツリイニーーー!!!」

「なんだどうした何があった!?!」

振り向くと、そこには大量の出血をし、床に伏せて死んでいるムツ  
ツリーニと翔太の姿があった。って翔太、お前もかよ……。  
一体何をそんなに

「危ない僕っ！（ブスッ）」

「はあっ!? 何してんだお前!?!」

明久が自らに目潰しを行なった。明久は何を見、て

「じはあっ!」

「ナオ! くっ……やられたか……!」

意識が遠のく……あれほどのものとは……覚悟し  
てもキツイ……ガクッ

遠くで声が聞こえてきたが、俺は意識が戻ってはこなかった。

そう、その生物兵器はその後俺たちを苦しめ続けるのだった……  
……

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 く絶叫編く（後書き）

はい、どうも三日月です。お久しぶりです。

風邪でしばらくの間死んでいました。最近投稿できなかつたのはその所為です。

いいわけになっちゃうかもしれませんが、ホントにきつかったです。すみませんでした。

次回からはこのようなことが無いようにします。

すみませんでした。

く以上、三日月よりく

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〱 残念編 〱 (前書き)

前回の青春ポイント合計 ± 0

・ 女子更衣室を覗くんだぜ + 3

・ やっぱりバレたんだぜ - 2

・ 首に起きた異変 - 3

・ 優子の水着姿 + 4

・ 第二の刺客、あらわる + 1

・ 亜矢を怒らせる - 3

・ 生物兵器が登場 + 1

現在の青春ポイント合計 + 1

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〈残念編〉

気が付くとプールサイドに横たわっていた俺。うーん、今はなんだったんだろう。

何をどうしてこうなったのか思い出そうとすると、鼻の奥が熱くなってきた。よし、深追いするとなさそうだからやめておこう。

「……………皆は？」

起き上がってみるともう既に各々を自分のしたいことをしていた。

明久はプールに入って姫路や島田と話しているし、坂本はまだプールサイドでA代表と会話をしている。ムツツリーニは翔太と何か話しているし、優子と亜矢は……………あれ？ 見当たらない……………

「って、端っこで何か話してるな？……………それも物凄く険悪なムードで。」

「は絶対に譲れない！ だいたい、後から来たくせに何言ってるのよ！」

「だって譲れないわ！ だいたい私が元カノなんだから先にアプローチしてたのは私でしょ！」

アレは話しかけない方がいいな。巻き込まれたらその先に待っているのは死だけだ。

触らぬ神に祟りなし。うん、よし。

「さーて、俺もなにか……………いやちよつと待て。一人足りないような……………？」

そう思い、もう一度プールをよく見渡す俺。前からすーっと、少しずつ見ていく。そうするとこの空間において地味なオーラを放っている少女が一人居た。優である。

俺はプールサイドで滑って頭を打たないように心がけながら優の近くまで寄っていき、話しかけた。

(明久たちの方を見つめて)「……………」

「……………」どうした？ 姫路たちに混じって明久と喋らなくていいのか？」

「え！？ あれ、ナオ君！？ お、起きてたんだ……………」

「起きてなかった方がいいみたいな言い方だな、それ。」

「そ、そんなことないって……………あはは。」

明らかに様子がおかしい……………なにか隠してるな？

「優。」

「な、なになかな？」

「明久のこと好きなの？」

「ええっ！？ そ、そんなわけないもん！ き、気のせいだよ〜！」

本当にコイツは昔からこうだな……………。隠し事ができないいうえに、素直すぎる。

「わかった。お前が明久のこと気に入ってるのはわかったから少し落ち着け。」

「わ、あわわわ！？ べ、別に気になつてないよ！？ 吉井君は確かにちよつとかつこいいかもしれないけど、私の料理褒めてくれたけど、凄く優しいけど、べべべべ、別に気になるとか恋愛とかそういう対象じゃ……………」

「よし、素直な所がお前のいい所だ。でも否定はしない方がいいぞ？ アイツ勘違いしやすいからさー、気をつけるよ？」

「べ、別に吉井君が好きだとかそういうのは一切なくて」

「俺はお前が明久のことを好きだなんて一言も言っていないぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

わかりやすさが目に見えてるぞ・・・・・・・・。昔から思ってたけど、やっぱアホだな。

「わかつたつて・・・・・・・・。協力はした方がいい？ いらない？  
自分でできる？」

「そんなお母さんみたいなこと言わないでよ！ もうっ！」

機嫌が悪くなったのか優はツンとした態度で向こうを向いてしまった。全く、素直じゃないな・・・・・・・・。

「ま、頑張れよ。幸いまだあの二人もそこまで明久に好かれてはいない。根気持つて一生懸命になることだな。」

「・・・・・・・・わかつてるよお・・・・・・・・」

うーん、本当に大丈夫だろうか？ 不安だ・・・・・・・・

優とは分かれて、そろそろプールに入るうかと思っただ矢先、

「ナオ！」

「直貴！」

「ん？ おお、優子に亜矢。．．．．．って、どうかした？ 物  
凄いい剣幕だけど．．．．．？」

不意に亜矢と優子に声をかけられる。さっきまで何かを話していた  
ようだったが、いきなりこっちに来て何をしようとしているのだろうか？

「ちょっと今から優子ちゃんと水泳勝負するから判定よろしく。い  
い？」

「え？ ちょ、待て、意味が」

「口答えしないの！ YESかハイで答えなさい！」

「Why? I don't Know what you mea  
n。」

「英語でごまかすな！ いいから答えなさい！」

「．．．．．YES．．．．．」

なぜだ．．．．．。あそこで話していたのは水泳勝負のことだっ  
たのか？ だとしても気合入れすぎだろ？ ．．．．．あ、なに  
かを賭けたとかかな？

まあ何はともあれこの場は早いとサラッと流して、俺もプールに  
入りたい．．．．．

「わかった。んじゃ向こうまで折り返してこっちまで来いよ。そし

て先にプールサイドにタッチした方が勝者だ。いいな？」

「もちろん！ 亜矢さんにだけは負ける気がしないわ！」

「それはこっちの台詞よ。私に勝負を挑んだこと、後悔させてあげるわ！」

うお〜・・・なんかに燃えてるな・・・。。優子の水泳能力がどれくらいかしらないけど亜矢に勝負を挑んだのは凄い勇氣だな。なにが彼女をそこまでさせるのだろうか・・・。

「ん？ なんだ、水泳勝負でもするのか？」

坂本が声をかけてきた。やっとA代表の呪縛から解放されたのだろうか。

しばらくして二人が準備体操をし始める。

「うん、そうみたい。だけど、なんか物凄い殺気立ってない？」

「そうだな。この勝負に対する執念のようなものが沸き起こってるみたいだが、お前何かしたか？」

「いや、今日は特に喋ってないからよくわかんないけど、向こうでずっと話してた。」

「ま、どうせお前絡みだろうからあまり考えるのも面倒くさいな。」  
「待て。なぜ俺絡みということは確定なんだ？」

まるで二人の賭けの対象が俺みたいじゃないか。全く、そんなことだったらどっちに軍配が上がっても俺の身に災難が降りかかるのは確定じゃないか。

そう思っていると、二人の準備は整ったようだ。こちらを向いて合図を待っている。

「さあて、んじゃ行くぞ。よーい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

二人ともそんなに険悪なムードにならなくてもいいのに、なぜだろう。

「スタート!!」

ズバァン!

二人とも絶妙なタイミングでスタートを切る。もう遠くに居るからよくわからないけど、二人ともフォームがメツチャ綺麗なのはわかる。

「二人とも凄い早さだな。尋常じゃないぞ。」

俺から見てもそう思う。二人の間にはほとんど差はなく、互角の勝負へとなっている。これはどちらが勝つか、わからなくなってくるところだ。

「てか、怖え・・・・・・・・」

二人とも真剣なのかどうかは別として主にオーラが怖い。いつも俺に放たれる殺気を互いに向け合ってるような感じだ。何でそこまで仲悪くなっただんだ？

「折り返したぞ。」

坂本の一言で我にかえる。おっと、そうだったな。集中して見てなかったらまた後で酷い目に……。って、待て。亜矢の様子が少しおかしい。折り返してすぐの辺りから全く動きが見えない。アレは

「 た、助け……。！」

「 ヤバイぞ！ 足が攣ったみたいだ！」

「 マジ！？ そんな漫画や小説みたいな展開ってあるのかよ！」

何はともあれ助けに行かなくては。俺は一目散にプールに飛び込んで亜矢の所に泳いでいった。

「 亜矢！ 大丈夫か って、しがみつくな！ 死ぬ！」

「 溺れる溺れる溺れる溺れる……！」

俺という掴める物体を見つけた亜矢は自分の生を優先したのか俺の身体にしがみついていた。

皆？ これは幸せに見えるという人もいるだろうが、実際にやられてみる。本気で死ぬぞ。

「 落ち着け！ とにかく首を鷲掴みにすると俺のぎどつがぶさがれるがらやべろ……！」

「 はあっ……。はあっ……。はあっ……。はあっ……。はあっ……。死ぬかと思った……。！」

「 ……。！」（息が！ 呼吸止まっているから！死ぬのは俺だから！）

亜矢に首を絞められ、お花畑が見え始めた。あ、やばい。プールで泳いでいたはずなのに川が見える……………

「あ、ゴメンね。首絞めてた。」（パツ）

「ひゅー……………はぁ……………!!!!」

落ち着きを取り戻した亜矢は俺の手をやっと離してくれた。即座に俺は一時的に止まった分の呼吸もするかのように身体に酸素を取り入れた。

「だ、大丈夫……………」

「お前は……………殺す気か!? 首はやめろって言ったよな俺!?」

「だって私の方が死に掛けてたんだよ!? あの状況だったら何にでも縋<sup>すが</sup>っちゃうでしょ!」

「だったら最初から落ち着け! 首に捕まるやつがあるか!」

危うくこちらが死に直面する所だった。

「だからさっきから謝ってるでしょ……………はぁ、まあいいわ。早く陸に あ痛っ!」

「……………馬鹿。攀ったばっかで無闇に動くな。また攀るぞ?」  
「そ、そんなこと言っただって……………」

動くともた痛みが襲ってくるのが怖いのか、亜矢はその場でオロオロしていた。

「あわわわわ……………」

不測の事態に弱いんだから全く……………

「・・・・・・・・つたく、しょうがねえな・・・・・・・・ほら、背中掴まれ。」

「え？ でも・・・・・・・・」

「陸まで運んでやるから早く背中に掴まれ。それなら痛くないだろ。置いてくぞ？」

「あ、うん。わ、わかった・・・・・・・・」

亜矢は渋々ながら俺の背中により、肩に手を回した。

(やばい！ 提案しておいてなんだけど、背中にヤバイものが！？ とにかくこれはまずい！)

亜矢を背負い、理性をなんとか保たせつつ岸まで上がる。しっかりしろ、俺・・・・・・・・

「あ、そうだ亜矢。さっきはゴメン。」

「え？」

「いや、さっき居たのにいないような扱いだら。そのこと。」

「あー、そのこと？ 別にいいのに。」

そう言うと亜矢は長い髪を振って否定した。細かいことを気にしない亜矢らしい返答だな。

「じゃあ改めて言うけど、お前の水着似合ってたぞ。」

「んなつ！？ いきなり何言って」

「さっきはお前がダツシユでどっか行っちゃったから言えなかったんだ。だから今言っただけ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん。うん。じゃあ、ありがと。」

じゃあって何だよ、と思っっているうちにプールサイドに着いた俺。

「えと、ここがいいよ。」

「おう。」

言われたとおりに亜矢を下ろした俺。もう少しこの感覚を味わっていたかったのは内緒だ。

「えっと……運んでくれてありがとう。」

「別にいいよ。で、大丈夫か？」

「あ、うん。一応もう大丈夫だけど……」

「なんだ？ まだどつか痛いのか？」

「ううん！ なんでもない！ なんでもないから！」

「？」

俺が心配すると亜矢は何かを隠すようにいった。意地でも張ってるのかな？ 我慢は身体に良くないけど、亜矢の性格上教えてくれないしここは普通に接した方がいいな。

「……バカ……ドキドキが止まらないじゃない……」

「ん？ 何か言ったか？」

「な、なんでもないですよーだ！」

「？ よくわかんねえヤツだな……？」

「……はあ……」

結局この勝負は保留。優子もこんな勝ち方じゃ納得できなかったそう、双方の合意の下勝負はまた後で別のものになったのだった。

「あれ？ プールを使ってるのは誰かと思ったら代表だったの？」

その後、泳ぎ疲れて休憩している所にあまり聞き慣れない声が響いた。

「・・・・・・・・愛子？」

A代表が動きを止めて声のした方を向く。明久と坂本も先ほどまで繰り広げていた死闘（水中鬼というらしい）を一旦中止して、同じ方を見た。

そこにいるのはボーイッシュな短髪の少女。っていうと、Aクラスの

「Aクラスの工藤か。どうしてこんな所にいるんだ？」

坂本が声をかける。

そうだ。Aクラスの試召戦争のときのムッツリーニの対戦相手だ。

優子に会いに行くときに話しかけられたりや、廊下でたまにすれ違  
うくらいのことはしてたな。

「ボク？ ボクは水泳部だから。」

「そうか。だが、今日は水泳部は休みになっていないはずだぞ？」

「うん。すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど  
人の声が出たから寄ってみたんだ。良かったらボクも混ぜて  
もらっていい？」

「ああ、別に構わないぞ。俺たちのプールってわけでもないし

」

言葉を区切って坂本が島田たちのいる方を指差す。

「 既に一人、誰か増えてるみたいだな。」

見るとそこには知らない女子がいた。

『お姉さまっ！ どうしてプールに行くのならミハルに声をかけて  
くれないのですか！？ ミハルはこんなにもお姉さまのことを愛し  
ていますのに！』

わーお。爆弾発言が聞こえてきたぞー。

『ミハル！？ アンタどうしてここにいるのよ！ プールで遊ぶな  
んて誰にも言わなかったはずなんだけど！』

『ミハルにはお姉さまを害虫から護る為の特別な情報網があります  
から！』

……あれは誰だろう？ 島田の知り合いではあるようだが、  
明らかに嫌がっている……。ま、俺に実害がなければ誰で

もいけどさっ！

「あれ？ 愛子、アンタ来てたんだ。」

「あ、優子もいたんだ。てことは浅斬君もいるの？」

「ちょ・・・・・・・・！！？ どうしていきなりナオが出てくるのよ！」

その通りだ。なぜ俺がそこに出てくる？ まあいいけど・・・・・・・・  
いや良くないか。

「どうした工藤。俺が何かしたか？」

「お、噂をすればだね。浅斬君、唐突だけど優子のことどう思う？」

「ちょっと愛子！？ いきなり何聞いてるのよ！？」

は？ えーと、それは水着についての感想だろうか。それならさっき言ったけと思っけど・・・・・・・・まあいいか。別に何度言っても同じだし。

「可愛いと思うよ。物凄く。」

「かつ、かわつ、いい・・・・・・・・！！」

「ふーん？ そうなんだ。良かったね優子。」

「・・・・・・・・う、うん・・・・・・・・」

俺に褒められてか顔を赤くする優子。そ、そんな可愛い態度取られ  
たら俺まで恥ずかしくなるだろ・・・・・・・・

「それじゃ、ボクは水着に着替えてくるね。」

「ん？ あ、そうか。わかった。」

返事をしない優子に代わって返事をする俺。ていうか、大丈夫か優  
子・・・・・・・・？

「あ、そうそう。」

工藤が途中で足を止めて、皆に聞こえるような声で

「覗くなら、バレないようにね」

と爆弾発言を残していった。

「これは本人公認の覗きつてことか？ 直貴、俺は行くぜ！」

「うわっ、いつの間に。」

エロの匂いをかぎつけて、どこからともなく翔太が登場。このときの行動力にはいつも驚かされる。

「僕も同じ意見なんだけど、別に行ってもいいよね？」

「うわっ、お前もか明久。」

いつの間にか背後に明久が立っていた。このときの行動力にも驚かされるな。

「まあ待てお前ら。よくよく考えてみるよ。今ここでそんな暴挙に出してみる？」

俺が後ろを指差す。

『……………雄二。今動いたら捻り潰すから。』

『ちょ、待て翔子！俺はまだ何もして』

『……………何かする気だったの？』

『待てそういう訳じゃな、ああああああっ！…！』

『明久君？ 余計な動きを見せたら大変なことになりますよ？』

『水樹。アンタさっきのことをまだ懲りてないのかしら？』

『ナオ。まだ死にたくはないわよね？』

この状況で迂闊に動けば待っているのはDEATHだけだ。

「ここはムツツリー二に託すしかない……ってアレ？ ムツツリー二は？」

そういえばこの最高の状況が揃っているにも拘らず、ムツツリー二の姿が見られない。おかしい、この状況だったらそこかしこで高速にシャッターを切る音が聞こえてもおかしくないはずなのに。

「康太なら、さっきから向こうで血液の補充にいそしんでるけど？」  
「……なるほど。どつりで静かなわけだよ……」

よく見ると、向こうでは血液パックを付け替えてる姿があった。  
カメラを構える余裕もなく血液の補充に忙しい姿がやけに哀れに見えた。

久しぶりの投稿です！

最近面談やらテストやら進路やら大変なことが増えてきました。

別にそれはいいんですけど、小説を投稿する時間までなくなってしまうのが嫌ですね。

早く卒業したい………

それはおいて今回の本編はどうでしたか？

亜矢とナオの絡みが最近少ないとの感想を聞きました。

自分のオリキャラを気に入ってくれる人がいてとても嬉しかったので、今回はいつもより多めにしてみました。どうでしたか？

気に入っていただけたら嬉しいんですけど。

さて、次回は遂に番外編最後です！

番外編が終わったら次に巻き起こるのはバカとドジと二人のペッタ  
ンコが繰り広げる愛の激闘です！

内容は勿論、多く頂いた指輪の能力の意見をたくさん出してほしい  
と思います！

これからも応援よろしくお願いします！

以上、三日月でした！

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〽終了編〽 (前書き)

前回の青春ポイント合計 + 1

・優の恋 + 2

・優子と亜矢の水泳勝負 + 1

・亜矢が溺れる - 2

・亜矢を助けるために溺れかける - 3

・背中に二つの爆弾が + 2

・女子二人追加 + 1

・本人公認の覗きに興味をそそられる + 2

・だが止められる - 3

・残念なムツツリー二に残念 - 1

現在の青春ポイント合計 - 1

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 〳終了編〵

しばらく遊んで、休憩のためにプールサイドのベンチに腰をかけた俺たち。ちなみに目の前では女性陣全員による水中バレーをやっている。

「あのさ、雄二にナオ。」

「なんだ明久。」

「どうかしたのか？」

バシツと水面にビーチボールが叩きつけられる音が響く。

「僕の気のせいかもしれないんだけど。」

「ああ。」

「？」

ズバン、と勢いよくサーブを打つ音が鳴る。

「何か皆、ヤケに険悪な雰囲気で水中バレーやってない？」

「大丈夫だって明久。アレは誰が見ても険悪だから。」

「ああ。俺にも険悪な雰囲気に見える。」

俺と坂本が答える。

『美波ちゃん！ 絶対に譲りませんからね！』

『上等よ瑞希！ スポーツでウチに勝とうなんて思わないことね！』

『ねえ優子！？ 顔が怖いよ！？』

『そんなの気にしないで優子！ ここは勝たなきゃダメなの！』

『優！ そつちいったわよ！』

『はわわわわ!? わふっ!?』

ボールよ割れる、と言わんばかりに全力で打ち込み合う女性陣。十五メートルの辺りから二面に分けて行なっているの、八人の女子がプール内に入り乱れている。その絵面は微笑ましいものではなく、真剣さが前面に押し出されたガチの勝負だった。

「ときに明久。」

「ん? なに、雄二?」

「この前俺がお前にやった映画のペアチケットはどうした?」

ん? 前に坂本とA代表で如月ハイランドのプロポーズ大作戦をしたときにお礼として明久に渡してたやつか?

『負けたほうが諦めるって約束、忘れてないわよね!』

『もちろんです! 美波ちゃんこそ負けても約束を破らないで下さいね!』

『そっちこそ!』

.....なんか、わかった気がする。

「姫路さんと美波が随分見たがつていたから、それなら二人で見てくるといいよってあげちゃったよ。」

「.....間違いない。それが原因だ。」

「100%お前の所為だな。」

「へ? なにが?」

自覚がない辺り、この馬鹿は一生治らないのかもしれない。

「それでナオ。そっちの転校生グループと秀吉の姉はなんであんな

に燃えてるんだ?」

「え? ああ。さっきの水泳の勝負の決着がつかないからじゃないかな。」

「その水泳は何が原因だったんだ?」

「さあ? 俺が聞きたいくらいだな。」

「ま、お前が鈍いのは今に始まったことじゃないけどな。」

「はい?」

誰が鈍いつて? まさか俺が? . . . . . いやいや、それはな  
いつて。」

「ふう. . . . . ところで、今のところは誰が優勢なのじゃ?」

疲れたのか、秀吉がプールから上がって俺たちのいるベンチに座ってきた。

「今のところは姫路のチームが優勢、もう片方はどっちもどっち  
て所だな。」

「んむ? それは意外じゃな。球技ともなれば島田の方に軍配が上  
がりそうなものじゃが。」

「姫路と島田が一對一ならそうだろうけどな。」

そういつて坂本は顎でそれぞれの陣営を差した。

姫路のいるところにはA代表が、島田のいるところではミハルと呼  
ばれる女子がそれぞれボールを追っている。

「なるほどのう。霧島は運動神経も良いようじゃな。島田と互角と  
は、なかなかやるではないか。」

姫路と島田だったら力の差は歴然だけど、それだけで勝負が決まっ

てしまったら島田も許せないだろう。パートナーもつけて力の差を埋めたって所かな。

「それにしても、島田の相方は動きが動きが不自然じゃな。故意に手を抜いておるように見えるのじゃが。」

「あ、秀吉もやっぱりそう思うか？」

一方の島田のパートナーことミハルはさっきからミスばかりしてる。サーブは全部外してるし、ボールが飛んできたら落とすか場外に飛ばしてしまう。構えや動きを見る限りだと下手には見えないんだけどなあ……

『美春。アンタ、絶対手抜いてるでしょ……』

『そんなことありませんお姉さま！ 美春はお姉さまの為に全力で（手を抜いていま）す！』

『これにはウチの大切な物がかかっているんだから本気でやりなさい！』

『はい！ 美春もお姉さまの為に本気で（手を抜いています）す！ あんなのとデートなんて、お姉さまの為になりませんから！』  
『アンタ、さてはウチを負けさせる為にこっちに來たわね……』

『！』

『ほらお姉さま！ ボールがきましたよ！』

『あつ！？ もう、早く言いなさいよっ！』

島田たちが言い争っているうちに、姫路の打ったサーブが二人の陣地に落ちた。

「はい、これで15点！ 一セット目はA代表さん&姫路さんチームの勝ちだよ！」

ちなみに翔太は頼まれもしないのに審判をやっていた。俺には裏があるようにしか思えないが。例えば上下に揺られる二つの大きなビーチボールを見るためとか……

「一セット目？」

明久が疑問系で問う。

「大方三セットマッチだろ。五セットもやるとは思えないからな。」

そこに坂本がすかさず答える。なるほど、確かにそうだな。五セットもやったら疲れてしまう。

「確かにそうだな。」

それにしても遊びの割にはかなり本格的にやってるなあ。コートチェンジもしてるし。

「お姉ちゃん、ファイトですつ。」

無邪気に姉を応援する葉月ちゃん。両チームに流れているこのムードについては全く気が付いていないようだ。まあ、気が付いたら気が付いたで面倒なだけだ。

「続いて二セット目いくよ。サーブは島田さんチームから！」

島田がいる方にボールが投げられる。島田はそれを拾い、パートナーに渡す。

「それじゃ、二セット目っ！」

「ああっ！ 手が滑ってしまいましたあっ！」

翔太の合図とともに宙に舞ったビーチボールは、なぜか俺の顔面に飛んできた。って

「危ねえっ!？」

紙一重のところできゃッチする。ってというか、結構な威力だな・・・

「はい、〇対一だよ。ナオ、ボール寄越せ。」

「お、おお・・・」

キャッチしたボールを何事もなかったかのように渡す。今の威力が出せるなら普通に勝てるだろうに、アノ野郎、手を抜いてやがるな？

「パートナーがあなのザマじゃ、島田の勝利はないな。」

先ほどの流れを見て、坂本が勝負の行く末をそう評した。

「そうだね。いくら美波が上手くても、一人じゃ勝ち目はないよね。」

「だよな。えーとアレだ、四面楚歌だ。」

「もはや勝負は見えたも同然じゃな。」

坂本の意見に皆は賛成する。あのパートナーが本気を出さない限り、勝ち絶対に見えてこないだろうな。

『・・・美春。もう一度言うけど、次のサーブからは本気を出しなさい。』

『ひ、酷いですお姉さまっ！ ミハルはお姉さまの為に一生懸命頑張っているというのに、その頑張りを疑うなんて！』

頑張ってはいることがわかるが、それは勝利にではなく敗北に対してだろう。

『下手な演技はいらないわ。よく聞きなさい美春。これが最後の警告よ。』

おおつと島田がなにか言い始めたぞ。でも、あのパートナーを説得するのは結構難しいことだと思っただけだなあ……

『お姉さま信じてくださいっ！ 美春はお姉さまに嘘なんてつきません！』

『いい？ ここまで言ってもまだ本気を出さないというなら』

『ですから、美春は本気を出しますと何度も、』

『ウチは明日から美春のことを、「清水さん」って呼ぶことにするわ。』

『……………』

「ねえ、今のサーブ見た！？ 垂直に変化したよ！？」

「どうやればビーチボールであんな芸当ができるのじゃ！？」

「もはや人間じゃねえな……………」

「流石の翔子もアレは無理だな。」

到底人間技とは思えない芸当をやったのけた少女は島田と抱き合いながら、

『お姉さまごめんなさい！ 美春は嘘をついていました！』

などと言っていた。確かにコイツが嘘をついていたのはわかった。でもなにかおかしい気がするの俺だけなのか？

「こうなると形勢は一気に逆転だね。」

「そうだな。可哀想だけど、この勝負は姫路に軍配が上がることはないだろうね。」

あ、またサーブが決まった。あの無敵サーブをどうにかしないと、向こうに勝ち目はないだろうな。さっきの動きとは雲泥の差だな。

「やれやれ。姫路も可哀想にな。折角のデートのチャンスが奪われるとは。」

隣で坂本が頬杖をつきながら退屈そうに呟く。

パァンッ！

その時、大きな破裂音がプールに響き渡った。

「むう。凄い威力じゃ。まさかビーチボールを割るほどとは。」

「え？今のビーチボールが割れる音なの？マジで？」

「うむ。島田の相方がサーブを打った瞬間に破裂したのじゃ。」

プールに視線を移すと、確かに水面にはビーチボール（の残骸）と思われる破片が浮いていた。先ほどの俺に飛んできたボールといい、アイツ、侮れないな……

「あ………！ごめんなさい。美春、ちょっと力を入れすぎ

てしまいました。代わりに探してくるので、お姉さまたちは休憩して下さい。」

そう告げると島田の相方はプールを出た。大方プール用具室に行つて同じようなものを探してくるのだろう。

「……ちょっと疲れた。」

「そうですね。ボールが見つかるまではお言葉に甘えて休みましようか。」

休憩の為に、バレーをしていた奴らはプールから上がってくる。そういえば優子や亜矢たちはどうしてるかな？ 見てみよう。

俺は先ほどまで見ていた島田たちのバレーと入れ替わるように優子たちの方を見る。そうすると、まだ決着がついていないのかこんな会話が聞こえてきた。

『 デュースが始まってから一体何点取り合つたっけ？ もう数えてないんだけど。』

『 さあ……？ でも、少なくとももう三十点はいつてるわね……優子さん。そろそろ休憩にしない？ 優がもう体力の限界なの。』

『 ふへへ……』

『 あ、そうなの？ 実は愛子ももうバテちゃったみたいで……』

『 優子……ボクもうダメ……』

『 じゃあ上がるっか？ 勝負はまた後でということ。』

『 そうね。』

話を聞くからに、優子と亜矢たちの体力に相方がついていけなくなつたところか？ 皆続々とプールから上がってくる。

髪を濡らしながら歩いてくる二人の姿に、少しだけだが変な気分になってしまう。こんな気分じゃダメだと頭をふり、すぐに冷静になるうとするがそれを阻止するかのようには亜矢が近づいてくる。

「ん〜？ ナオ、そんなに見つめてどうしたの？ あ、まさかこの私の姿で見惚れてたとか？」

断じて違う、と言い切れないので言葉が濁る。それに付け入るかのようにつけて亜矢が喋りかける。

「もう、素直になればいいのに。私の水着ジロジロ見つめて、いやらしいんだから。」

「んなつ！？ あ、アホか！ そんなわけないだろ！」

「本当に素直じゃないんだから、もう。」

「亜矢さん。あまりナオをからかつちゃダメよ？ それに、ナオだつて」

そこにすかさず優子の冷静なツツコミが入る。良かった。やっぱり優子だけは俺のことわかっていてくれて

「男の子のなんだから、そのくらい普通よ。」

「すまん優子。お前の中での俺のイメージって一体なんなんだ？」

自分の存在意義が揺らいだ気がした。ショックなことこの上ない。

「それもそうね。直貴だものね。そのくらい普通か。」

「やめてくれ。俺の普通がどんどん変態化していつてるぞ。」

ここまでくると中々戻すことは難しい。このままにしても俺がドンドン変態のレベルが貼られていくだろう。風評被害とはそんなも

のだ。

「ところで直貴はどうしてプール丸々貸切れることになったの？  
権力でねじ伏せた？」

「お前の親みたいなこと庶民の俺ができるか。というか、その意見  
が一番最初に出てくるなんて凄く怖いぞ。どっからそんな考えが出  
てくるんだよ。」

一番最初に出てきた予想が権力でねじ伏せるって、どんな独裁者だ  
よ。

「ナオが学校に不法侵入したのがバレて、その罰でプール掃除する  
ことになったの。その引き換えと言ったらアレんだけど、一日貸  
切にしてもらったのよね？」

「そんな身も蓋も無い言い方するなよ優子！ . . . . . まあそ  
の通りなんだけどさ。」

恥ずかしながらその通りなので全く反論ができない。くっ、優子だ  
って不法侵入したくせに。

「プール掃除？ それなら私たちも手伝おうか？」

亜矢がそう言うってくる。しかし、そうはいかない。

「その提案は嬉しいが俺らだけで充分だ。女子にそんな重労働させ  
るわけにはいかないし、なにより道具は男子の人数分しか借りてな  
いんだ。気持ちだけ受け取っておくよ。」

「そう？ それならいいんだけど . . . . .」

亜矢は渋々だが俺の意見を聞いて引き下がった。まああまり無理に

強要されたら手伝わそうかと思ったんだけど、その気配も無いみたいだし別に大丈夫だろう。………ん？

「……………」

そのとき、俺は本能的に何かを感じ取った。

『ア、ソウデシタツ。チヨットシツパイシチャツテ

』

後ろから声が聞こえてきた。ちょっと失敗しちゃって？

『ニンズウブンヨウイデキナカッタンデスケド

』

人数分用意できなかったんですけど、ってこれはもしかやいつものパターンか！？

俺の本能がこれはヤバイと語っている。逃走経路を確保しなくては

「（ガシッ）……………」

「ん？ どうした翔太。」

「ニガサナイヨ（笑）」

「は？ チヨット待てさっきのことまだ根に持って

」

「実は、今朝作ったワッフルが三つ」

その間に目まぐるしく行なわれていたアイコンタクトようだが俺は

知らない。

「第一回っ！」（坂本の声）

「最速王者決定戦っ！」（明久の声）

「ガチンコ水泳対決　っ！！！」（秀吉とムッツリー二の声）

「イエー！！」（翔太の合いの手）

「え？　は？　はい？」

あまりの急展開に全く状況が読み込めない。まさかこの最速王者決定戦ってというのは

「明久、ルール説明だ！」

「オツケー！　ルールはとっても簡単。ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です！」（本来の意味）

（この勝負は上位三名だけが姫路さん特製殺人ワツフルを回避できるという、自分たちの生死を賭けた溺れるより怖い水泳勝負です！）

俺たちは本来の意味だけが聞こえる。なんだこのニュータイプな会話方法は……

「アイツラの機転には助かったが、負けたら待っているのは死だけということか……」

この勝負には上位と下位に大きな差がある。上位に入らなければ、文字通りそれは死を意味する。

負けるわけにはいかないし、たとえ負けたとしてもそのワツフルが口に入るのは阻止しなければならぬ。

「バカなお兄ちゃんたち、突然どうしたんですかっ？ 急に水泳勝負だなんて、葉月ビツクリですっ。」

「葉月ちゃん。男にはね、時として大切なものを賭けて戦わないといけない時つてもものがあるんだよ。」

「ふえ〜。お兄ちゃん、かっこいいですっ。プライドを賭けた勝負つてやつですっねっ！」

明久が葉月ちゃんと会話しているが、この場合賭けているのはプライドではなく命だ。その命の重さを葉月ちゃんには知ってもらいたいが、それはまた免疫がついた頃に説明した方がいいかもしれない。刺激が強すぎるから。

「よくわかんないけど、この中で誰が一番速いのかは興味があるわね。」

「そうですね。体力なら坂本君が一番に見えますけど・・・」

「・・・動きの速さなら吉井や土屋に浅斬も引けを取らない。転校生の方は、見たことがないからわからないけど。」

どこからか暢気な声が聞こえてくる。俺らにとっては誰が一番速いのかなんて、どうでもいい。それよりも無事に明日また学校に行けるかどうかの方が重要なんだから。

「へえ〜、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ。」

工藤がスタート兼ゴール地点に立つ。25メートルプールだから、50メートル勝負は往復になる。

俺らは闘志を燃やしつつ、スタート位置に向かう。右には翔太、左には坂本がいる。

「はい、行くよ！ 位置について」

飛び込みの体勢についてふと思う。

この中で体力に自信があるヤツは誰だろう？ そいつを潰しておいたほうがいいんじゃないだろうか？ そうなると……

「よーい」

罰を免れるのは三人だけだ。翔太は正直、泳ぎが得意な方じゃない。ムツツリー二も出血多量で今日は弱っているから俺の敵じゃない。秀吉は勝たせてやりたいからスルーだ。となると俺の敵は今の隣の

「スタートっ！」

「くたばれえっ！！！！」

工藤の合図とともに、俺、翔太、坂本、明久は互いの目標に全力で蹴りを放っていた。

「ていうか皆同じ考えかよ！？ 下劣なヤツばかりだな！」

水面に飛び込まずに真横にいる俺に蹴りを入れるなんて、いい度胸じゃないか翔太………！

「てめえこそ卑怯な真似してくれてるじゃないかナオに明久！ この恥知らずが！」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ雄二っ！」

体勢を立て直し、そのまま乱闘に変化する俺たちの水泳勝負。

そうだ！ この混乱に乗じて俺はプールに飛び込もう。そうすれば

俺はあの殺人ワッフルから逃れることができる！  
そう思い、飛び込もうとしたとき

「くたばれ直貴いっ！」

「げぼえ！？」

翔太に盛大なフライングキックを食らった。くっ……油断したか！　こうなりや、とことんやってやろうじゃないか！！  
俺はプールから上がり、翔太に猛攻撃を仕掛けた。

『ねえお姉ちゃん。水泳なのに、どうしてお兄ちゃんたちはまだプールの中に入らないんですか？』

『見ちゃダメよ葉月。馬鹿がうつつっちゃうからね？』

遠くから失礼なやり取りが聞こえた気がする。

「あのさ、皆。取っ組み合いもいいけど、木下君とムツツリー二君はそろそろ折り返しだよ？」

俺が翔太にマウントポジションを取り、トドメを刺そうとしたところで、審判の工藤から全く美味しくない情報が飛び込んできた。

「おい明久！　ムツツリー二と秀吉がいつの間にか折り返して来ているぞ！？」

「ホントだ！　雄二なんかを相手にしてる場合じゃない！」

よく見ると秀吉とムツツリー二は既に折り返し、残り20メートルくらいのところまで来ていた。

「雄二！　このままじゃ僕らの負けは確定だよ！？」

「そうは行くかつ！ 俺はムツツリー二を止める！ 明久は秀吉をやれ！」

「了解！ ここは一時休戦だね！」

坂本たちは殴り合いをやめて、ムツツリー二と秀吉を止めにかかった。

「……………これはもしかチャンスでは？」

「今のうちに折り返しまでコマを進めておけば勝ち目はある！」

俺は翔太のマウントポジションを解き、プールに飛び込んだ。

その後、俺に続いて翔太も飛び込んだ。丁度、折り返しの近くまで来たとき、事件が起きた。

「げえっ！？ やべえっ！ ムツツリー二が出血多量で死に掛ける！？」

折り返しのついでに現状を把握しようとして水面から顔を出したときだった。よく見ると、段々と朱に染まっていく水面。殺人現場って、こんな感じなのか？

って、その前に何が起こった？ まさかムツツリー二、凄いもの見たんじゃ……………？

そう思っつてプールを見渡していくと、それはすぐに見つけることができた。

「き、木下っ！ とにかく胸を隠しなさい！ 土屋の血が止まらないから！」

「いいいいヤじゃっ！ ワシは男なのじゃ！ 胸を隠す必要はないのじゃ！」

なぜか秀吉の水着の上が取れている。全く、何をどうしたらそんな事態に陥るんだ？ アイツはいつも男だって言ってるのに。

「直貴……」

「あれ？ 翔太、居たんだ。」

気付くと翔太が横に立っている。翔太もこの事態に気付いたようだ。呆然と立ち尽くしてるしているようにも見える。

「お前も気付いた？ 全くアイツらも何やってるんだか……」

「……」  
「すまない……俺も逝く……」

「へ？」

そついうと翔太はゆっくりと倒れていき、水面に自分の血液をぶちまけた。

「お前もかよおおおおつっ!？」

「……愛子。救急車の手配頼める？」

「はい。やつぱりFクラスの皆は面白いね。」

「馬鹿なお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ。」

「秀吉には後でキツイお仕置きが必要みたいね……」

結局、二人は何度も峠を迎えながらも、俺らと救急隊員との懸命な延命措置により、一命を取り留めた。

明久SIDE

「全く、今日も大変な一日だったなあー……………」

プールからの帰り道、僕は一人で呟いた。

あの後、ムツツリー二は大丈夫だったみたいだけど、翔太君も結構ヤバそうだったし、折角の楽しい休みがこうも変なもので潰れちゃうと、なんだか悲しい気分になるな。

なぜ一人かというと、ナオは秀吉のお姉さんと神咲さんに連れ去られてどこかに行っちゃったし、雄二も霧島さんに連れ去られてどこかに行っちゃったし、僕と帰り道が一緒の人はこの辺りでいないから、結局一人で帰る羽目になったからだ。

今日のご飯は何にしようか、考えていると

「あの、吉井君っ？」

不意に後ろから声をかけられた。えーとこの声は確か、

「ん？」

ああ、川村さんか。どうしたの？」

僕に声をかけてきたのはナオの幼馴染、川村優さんだった。

「いえ、チヨットお願いがあつて。」

「お願い？ なにかな？」

川村さんが僕に用だなんて、何だろう？

「帰り道がこつちなのはわかってたんですけど、亜矢ちゃんがどこかに行つちやつて帰り道がわからないんで……教えてもらつてもいいですか？」

「ああ、そういうことか。うん、別に大丈夫だよ。」

そういうと川村さんは嬉しそうに近寄つてきた。転校生だし、道があまりわからないこの時期で一緒に帰れる人がいるというのも、有難いのだろう。喜んでくれて何よりだ。

「川村さんはどの辺に住んでるの？」

「ええつと……自分でよくわからないんですけど、多分この辺りだと思つんです。」

そういうと川村さんは小さめの地図を広げてある一点を指差した。

「ああ、この辺りか。それなら僕の家近所だね。途中まで案内してあげるよ。」

「本当ですか？ ありがとうございます！」

僕がそう答えると、川村さんは本当に嬉しそうに笑った。うん、この笑顔が見れるくらいなら道案内なんてお安い御用だよ。

そうして道なりに進んでいると、川村さんが話しかけてきた。

「えと……吉井君は付き合ってる人とかいるんですか？」  
いきなりの爆弾発言だ。

「あ、いやその！ い、いきなり変なこと聞いちゃってすみません！ ただ、姫路さんや島田さんと仲がよろしかったみたいなんで、どちらかと付き合ってるのかなあ、って思ってただけで」

「ええつと……別に、僕は今そういう人はいないよ。」  
「別に私が吉井君のことを気になってるとかそういうわけじゃ  
つて、え？ つ、付き合っていない？」

なぜ疑問符で返されたのだろう。不思議でたまらない。

「えつと……僕みたいなのが彼女がいるように見えるわけ  
ないでしょ？ 顔だつてそんな良くないし、勉強だつてできないし、  
いい所なんかないよ。」

「そ、そうなんですか？ い、意外でした……」  
そう言ってくれるなんて凄く嬉しい。僕みたいなのに社交辞令でも  
褒めてくれるなんて……

「川村さん……僕を煽おたても出てくるのは塩と砂糖と水だ  
よ？」

「えと、どういふ風に勘違いしたんでしょうか……？」

姫路さんですら僕のことを褒めるといふのはあまりないから、こつ  
いふ場合狙ってくるのは僕の財産かな？ いや、でも川村さんの性  
格でそういふことをしてくるとは考えにくいから

「あ、そうでした。」  
「？」

僕が下世話なことを考えていると、川村さんがカバンの中を漁りだした。

「はい、どうぞー！」

「……………えっと、これは？」

いきなり差し出される箱。これは何だろう？

「えっと、さっきは姫路さんも作ってきてくれてたんで、出しにくかったんですけど　ワッフルですっ！」

「……………僕に？」

……………今の行動といい、打算があるとは考えられない。もしかして川村さんは……………

「あ、もしかして甘いもの嫌でしたか？」

「いやっ！　そんなことはないよっ！　頂くよー！」

箱の中に入っているワッフルを一つ取り出して口に運ぶ。よく考えてみると、しばらく摂っていなかったカロリーだ。一つ一つ味わうとしよう。

「ど、どうですか？」

「……………」

心配そうに僕の顔を見る川村さん。その心配は別にしなくても大丈夫なくらい、ワッフルは美味しかった。

食感はフワツとしていて、それなのにしっかりとっている。味も甘すぎず、かといって薄いわけでもない。まさに絶妙なさじ加減だった。僕もお菓子は作ったことはあるが、ここまで美味しいものは中々作れるものではない。

「凄く美味しいよ、川村さん。」

僕がそう言うと、川村さんは余程嬉しかったのか顔を真っ赤にして俯いていた。恥ずかしがり屋さんなのかな？ ナオに今度聞いてみよう。

「このレベルならお店だって出せそうだよね！ どうやって作ったの？」

こんなに美味しいのならレシピだって気になる。今度自分でも作ってみたいと思うくらいだ。けど、川村さんは、

「そ、そんな！ 私なんてまだまだですっ！」

の一点張りだ。僕にそう言われて恥ずかしかったのか顔を上げようとしな。

「……ふーん、そうかな？」

うーん、そんなに言うなら別にいいけど……貰ったからには何かお返ししなくちゃいけないかな。

「じゃあ川村さん。何かお返しさせてよ。貰ってばかりじゃ悪いし。」

「そ、そんなことないですっ！ 今、道案内してもらってるじゃない

いのですかっ！　そ、それで充分です！」

「いや、それくらいは何かお返しさせてよ。道案内だって僕の近所だったからで、別にたいしたものじゃないさ。だから、お願い。なにかお返しさせてくれないかな？」

そこまで言うと、川村さんはまだ伏せていた顔を上げて、僕の方を向いてきた。

「そ、そこまで言われちゃったら、断れないです……」

「うん、ありがとう。」

「なんで吉井君がお礼をするんですか？」

「あ、それもそっか。」

「ふふっ。おかしい人ですね。」

「あははっ。」

確かに、僕がお礼を言うのは変な話だ。でもこの場合僕だってワッフルを貰ってるわけだし、言ってもおかしくはないはずだ。

「じゃあ吉井君。私に　」

川村さんが僕にお返しの話をしてきた。うーん、やっぱり何か欲しいものでもあるんだろうか。だとするとまたしばらく塩と水の生活が続いちゃうな。

「今度、美味しいものを食べさせてください。」

「え？」

返ってきたのは意外なものだった。え？　そんなのでいいの？

「別に、吉井君が美味しいと思っていれば何でもいいです。吉井君

が作った物でもいいです。吉井君が私に返そうと思っている気持ちがあるなら、私は何でもいいです。」

ナオの幼馴染とは思えないくらい、ちゃんとした子だなあ……

「そっか。うん、わかった。じゃあ今度なにか……そうだ。駅前にラ・ペディスっていうお店があるんだけど、そのクレープでいいかな？」

「はいっ！」

こうして、僕は川村さんにクレープをご馳走することになった。今度の強化合宿もあるので、奢るのはしばらく先となったが、それでも僕は川村さんの笑顔を見ることができて嬉しかった。

そうしてしばらく談笑した後、川村さんの家が見えてきた。

「アレですっ！ 私の家っ！」

「あ、そうなんだ。じゃあここでお別れだね。」

僕の家はもう少し向こうに行った所だし、川村さんとはここでサヨナラだ。

「今日は一日楽しい時間をありがとうございました！」

「いやいや、こちらこそ美味しいワッフルありがとう。」

今日は川村さんのおかげで最初よりは楽しい一日になった。お礼を言うのはこちらのほうだよ。

「じゃあ川村さん。また明日」

「あ、ちよつと待ってください吉井君。こっちに。」

「？」

川村さんが手をこまねいている。どうしたんだろう？

「……ちよつとだけ、しゃがんでもらえますか？」

「え？ 別にいいけど……？」

川村さんに言われたとおり、腰を屈めて彼女の高さに合わせる。どうしたんだろうと思うと

「今日は……楽しかったです。」

頬に、なにか柔らかい感触が伝わってきた。……

ん？ これは……なんだ……

……？

「吉井君。さつき自分で言ってたけど、吉井君が思ってるほど吉井君はかっこ悪くなんてないよ。むしろその……優しくて、かっこいいんだから。」

そっぴい残すと、川村さんは脇目も振らず猛ダッシュで自分の家の方面に走っていった。僕は何が起こったのかわからず、その場で立ち尽くしていた。

そして、週明けの朝。

「……………吉井、坂本、浅斬。ちょっと聞きたいことがある。」

現れるなり朝の挨拶もせず鉄人がその野太い声で僕ら呼び出した。

「断る。」

「黙秘します。」

「What?」

それに対して、僕らは拒否の構えを取る。

すると、鉄人はプルプルと震え始めた。

「……………どうして」

一度言葉を区切り、大きく息を吸う鉄人。

「……………どうして掃除を命じたはずなのにプールが血で汚れるんだ!? 鉄拳をくれてやるから生活指導室で詳しい話を聞かせろ!」

響くは廊下全体を揺るがすような大音声。

「説教なんて冗談じゃねえ！　むしろ死人を出さなかったことを褒めて欲しいくらいだ！」

「そうですね！　本当に危ないところだったんですからね！」

「俺だってこんなことになるとは思わなかったよ！」

「黙れ！　お前らの日本語はさっぱりわからん！　拳で語り合った方が早い！」

「ええい、この暴力教師め！　逃げるぞ二人とも！」

「了解っ！」

「貴様ら、今度は反省文とプール掃除では済まさんぞっっ！！！」

雄二とナオは必死の抵抗も空しく、鉄人に捕まる。

僕だけでも逃げなくては。そう思い、Fクラスの教室に飛び込む僕ですと

「……吉井明久に死の鉄槌を……！！！」

中には黒装束を身に纏った不気味なクラスメイトたち。

「吉井逃げるな！　貴様女子と一緒にプールに行った拳句、川村さんと一緒に仲良く帰宅したそうじゃないか！」

「そんなヤツを生かしておけるか？　否、そんなヤツには死刑がお似合いだ！」

「吉井明久に死の鉄槌を！」

「先生！　僕も指導してください！　この中に入った瞬間僕の命は風前の灯になります！」

今回だけは、本当に逃げられない。そう思った時には鉄人に捕まっていた。

殴られながらも一応事情を話すと、鉄人は溜め息混じりに一言、

「……………今度の強化合宿の風呂は、木下を別にする必要があるようだな……………」

などと呟いていた。

番外編 こんな休日も悪くない？ 血まみれプール日和 く終了編く（後書き）

予防接種で腕が痛い、どうも、三日月です！

今回の番外編は少しナオの転校生たちが目立っていたような感じですよ。

ももとのキャラが好きだった方、または優子ファンの皆様にはとてもすみません！

ですが次回はなんと、素敵な四巻です！

最近投稿に時間がかかっています、この小説はなにがなんでも終わらせませんので楽しみに待っていてください！

以上、三日月でした。

〜第四部開始〜第64話 友情ってなにそれ？ 食えんの？ (前書き)

前回の青春ポイント合計 - 1

・ 険悪ビーチボール勝負！ - 1

・ 顔面にボールが飛んでくる - 1

・ 垂直変化の技を見せ付けられる + 3

・ 自分の存在意義が揺らぐ - 2

・ 自分の生死を賭けた水泳勝負が勃発 - 1

・ 大乱闘勃発 - 1

・ 血まみれプール日和 - 3

現在の青春ポイント合計 - 7

〜第四部開始〜第64話 友情ってなにそれ？ 食えんの？

「……………ナオ、ちょっとこの高さまで屈んで。」

それが、全ての始まりだった。

目の前には見知った顔。

ピンで留められたその髪からは少し、柑橘系の香りがして。

そして、俺の唇には柔らかい優子の ダメだ。思考回路がスト  
ップしそうだ。

何が起こってるんだ。どうして優子がこんな、俺にこんなことをし  
てきたんだろう。

何もわからないまま、優子は俺から離れて、

「え、えと、き、聞いたから。」

「はい？」

聞いたから？

「あ、亜矢さんとの、その、キ……………キス、のこと。」

「え？ あ、ああ……………え？」

亜矢とのキス？ そ、それが……………え？

「放課後。」

「は？」

何もわからないまま、話が進んでいく。放課後？

「屋上で、返事、待ってるから。」

「え？ ああ、うん……え？」

そこまで言うと、優子は走り去ってしまった。

その不意打ちは、全くの予想外で、優子から離れたこの状況ですら頭の整理をつけるのは難しかった。

そんな頭の整理がつかないこの状況で

「危ないっ！」

そんな声が聞こえてきたと同時に、後頭部に鋭い衝撃が走った。今の声は……翔太？

だが目の前に現れたのは翔太ではなく、俺のクラスメイトたち。

そのクラスメイトたちは俺に何かするわけでもなく、ただ一言こう言った。

「You are executed!!」(お前を死刑にする)

直後、手を挙げて周りの皆に合図した。

「ちよ、待て!? 待ってください! 俺にも意味がわからな

ぎゃあああああっっ!!」

今までにない攻撃に、意識を落としそうになる俺。そ、そうだ翔太

！ さっきの声の主は翔太のはず！ 翔太、助けて！  
そう思っつて、攻撃の合間に翔太を探す。すると

『ねえキミ！ 俺と今度デートしない？』

ナンパしていた。つて、切り替え早すぎじゃない！？ 普通親友の  
生を優先するでしょ！？

「ちよ、助け　　っ！」

と、そこで俺は自分の意識を手放した。

『諸君。ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『宜しいこれより 二・F異端審問会を開催する！』

おおおおおおっ！ という声とともに目を覚ますと、そこはどこぞの魔術で生贄を捧げるときに使われる真っ暗な、そんな感じの空間だった。

「え？ あれ？ どこ、どこ？」

暗幕が引かれていてよくわからなかったが、畳の感触からするにここは教室だということはわかる。ということは、教団あたりで覆面姿で騒いでいるのはFクラスの面子だろうか。

「起きたかナオ。」

近くから聞こえたのは、我らが代表坂本雄二だ。だが代表としては似も似つかないその縛られた姿は、代表とはなん

ともいい難い。

「……………坂本、何やってんの？」

「……………お前らの巻き添えだ。」

忌々しげにその顔を歪めて吐き捨てる。いつものA代表に縛られているときは違った縛られ方で、今日は新鮮味があるな。まあ、冗談はさておき。

「で、巻き添えとは？」

「お前の所為で『寝ている間に翔子にキスされた』って話がアイツらにバレたんだ。とんだ迷惑だ畜生。」

「ほう、それは興味深い話だな。詳しく聞かせる。」

「人のことよりお前はどうかんだ、お前は。」

「へ？ 俺？」

そこでふと思い出す、優子の顔。あの時、アイツはどんな顔をしていたんだろうか……………？

『皆大変だ！ 坂本雄二に異端者の疑いがある！ 至急異端審問会の準備を始めるんだ！』

『あ、明久てめえっ！ 狸寝入りぶっこいてやがったな！？』

後ろからそんな会話が聞こえてくる。またバカやってるな……………

「全くお前ら。ここで喧嘩してる暇あるならこの状況を打破する為

の

『 被告、浅斬直貴の罪状を読み上げたまえ。』

やばい。俺が一番最初みたいだ。

「ふ、二人とも。とにかくこの場を脱出するのが先決だ。今は

」

『えー、被告、浅斬直貴（以下この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は強制猥褻並びに背信行為である。』

本日未明、甲が同二学年女子である木下優子（以下、この者を木優とする）に対して強制猥褻を働いていたところを我が同胞が確保。』

「『……………』」

それにしても、一体何なんだよ……………  
……………ん？ な、なんだ二人とも。その目は。

「ナオつて、やるときはやる男だったんだね……………」

「ああ。今回はかりは見直したぜ……………」

「ちよつと待て！？ 俺が遠い世界に行ってしまったみたいな顔をするな！」

それに、そのことについては俺からしたなんて一言も言ってないぞ！  
そんなことはいざ知らず、話はどんどん進んでいく。

『今後、甲と木優の関係に対して十分な調査を行なった後、甲に対して然るべき対応を』

『御託はいい。結論だけ述べたまえ。』

『キスをしていたので羨ましいであります！』

『うむ。実にわかりやすい結論だ。』

「『……………』」

「やめてくれ二人とも！ 俺をそんな目で見るなああああつっ！

」！



ないか。」

「この野郎！ 言うに事欠いて僕の取り得は肩たたきだけだ！？」

「その年齢で肩たたき！？ 反論するにしても他に何か取り得はなかったのか！？」

「もつとなんかあるだろ！？ 例えばほら……馬鹿なところか！」

「貴様らは絶対に殺すっ！」

縛られていなければ今にも飛び掛ってくるかのように、縛られた身体をしならせた。

「ミミズみたいに動くのはいいが、お前が島田とキスをしていたのは事実だ。証拠も押さえられているようだしな。」

「証拠って何？」

俺がそう言うと、一枚の写真が突きつけられた。

「……………裏切り者には、死を。」

写真を手に呟くそいつは、同じクラスメイトで我らが友、ムツリ―二こと土屋康太だ。いつもは盗撮オーラ全開の変態野郎のだが、いつもと違い今回は静かなる殺気を放っている。

そしてその手に握られているのは、右手には俺と優子の、左手には明久と島田の、それぞれのキスのシーンの写真だった。

「ええっ！？ これホント！？ あれは夢じゃなかったの！？」

「夢だったなら縛られるようなことはないんだがな。」

「俺の方こそ夢だと思いたかったよ……………。どうしてこんなことになったんだ？」

ボンヤリと頭の奥から記憶を呼び起こそうとするが、靄がかかったようにはつきりしない。

「お前ら。顔が真っ赤になってるところ悪いんだが、質問がある。」  
「ち、ちがつ……！これは、その、顔が熱いだけで……！」

「わかったわかった。んで、どうしてお前らはそんなことになったんだ？」

そう言われて深く思い起こしてみる。んー……  
ん？

「そんなの、僕が聞きたいよ。」  
「……」

「ナオには思い当たる節があるみたいだな。なにがあった？」  
「いや、あの、その、えーと……」

言いつらい……

「えと、その……亜矢に。」

「ん？ どうしてそこで神咲が出てくるんだ？」

「亜矢にも……その、キスされたことがあって、」

『会長。罪状が増えました。今すぐに死刑を実行するべきです。』

『よし、今すぐ実行しろ。』

『了解しました。』

「ちょ、待って！？ もう少し猶予をください　ぎゃああつああ

あああつつ……！」

俺がまさかのカミングアウトをした直後、殴る蹴るの暴行が始まった。

くっ！ 体勢が悪いから反撃が………！

「まあ、ナオがどうしてそんなことになったのか原因はわかった。明久、お前はどうかなんだ？ そのスポンジのような頭で考えてみる。最近何か様子がおかしかったとか、どこかに思い当たる節があるんじゃないか？」

「うん………」

明久。そんな悠長に考えてないで俺を助けてくれ。

「質問を変えよう。お前が島田と最後に会ったのは？」

「えっと………強化合宿の最後の夜かな？」

「最後の夜？」

「うん。皆が寝静まった後、美波がこっそり僕のところに来たんだよ。」

「………なぜおかしいと思わないんだ。」

理由がイマイチ聞こえない。なんだ？ 何があったんだ？

『血液ぶちまけるー！』

『血祭りじゃああっ！』

『言語道断じゃああっ！』

「げほっ！ ……てめえら、いい加減にしやがれ！」

『『『ふっ！？』』』

ドサツ、という音と共に崩れ落ちるクラスメイトたち。縛られながら放たれた俺のドロップキックは綺麗にヤツラの急所に吸い込まれていった。今の俺の現状を考えれば、今は正当防衛が成り立つはずだ。うん、よし。

あ、明久の話はどうなったんだろう。そう思って明久たちのいた方

を見ると、

メリイ…………ツ

何か、めり込む音がした。

「…………っ！ 顔が…………っ！ 顔の骨が陥没したよ  
うな感覚が…………っ！」

「なにが『わからない』だ！ 思い当たる節だらけじゃねえかバカ  
野郎！」

坂本が明久の顔面に蹴りを放っていた。まあ、なにか癩に障ること  
でもいったんだろう。そんなことより、

「話が掴めないんだが…………明久はなんて言ったんだ？」

島田にコイツが何を言ってこんなことになったのか、それを聞か  
なくては話が始まらない。

すると先ほどまでの経緯を話してくれた。島田と夜に会ったこと、  
そして明久が言った

「『雄二より好きだ』って。」

「『お前の比較基準はなんで俺（坂本）なんだ！？』」

この一言だ。

その言葉で告白されたいとはだれも思わないだろう。そんな会話を  
知ってか知らずか、この会の主催者である須川ががこちらを見  
て、話しかけてきた。

「異端者、吉井明久に浅斬直貴。汝らは自らの罪を悔い改め、裁きを受け入れるか？」

「待て！　そこに坂本が組み込まれていないぞ！　それも入れなけりやお前らこそ真の罪人になるぞ！」

「待てナオ！　折角俺だけ逃げられると思っていたのに何してくれてんだ！」

「ふむ、それもそつだ。坂本、貴様も罪を受け入れ、裁きを受けるか？」

坂本もターゲットの一員になった！　テツテレー

「あのさ、須川君。返事をする前に質問があるんだけど。」

「聞いてやろう。」

「裁きつて、何をするの？」

明久が尋ねると、その疑問はすぐに解決した。

「まず、灯油とライターを用意して」

「濡れ衣です！　僕ほど教義に順ずる信徒はいません！」

血相変えて自分の身の保身に入る明久。やれやれ、全く度胸が据わってないな。俺なら

「……………」  
（土下座）

徹底的に謝ってやる。

「ふむ、いい心がけだ。よし、それなら未だに罪を認めない吉井には自白を強要するまでだな。」

「言った！ 今いきなり『自白の強要』って言ったよ！？ この審判は無効だ！」

『そつだ！ 自白を強要しろ！』

『議事録を改竄かいざんしろ！』

「皆ノリで言っただけ！？ 普通こういうのは自白の強要が事実だと認めちゃいけないと思うんだけど！？」

このクラスには日本の法律が適用されていない独自空間か何か？

もの見事に基本的人権がどこかに行っちゃってしまってるぞ。

それにコイツらは本当に審問会の意味を知っているのだろうか。いや、Fクラスの生徒と言うことを加味すれば知らないという方が自然か。

「ええい、灯油とライターの準備はまだか！」

「自白させる拷問もそれなの！？ 要するにどちらもこんがり焼かれるって事じゃねえか！？」

「違つぞ浅斬。罪を認めない場合は自白用と断罪用の二回があるから、お前は一回分お得なんだ。」

「そんな洗顔フォームの増量キャンペーンみたいな売り文句で騙されると思ってるの！？ 結局は二回焼かれるか一回焼かれるかのどちらかだよな！？」

そもそも一回も二回も大差ないと思う。

「雄二！ 雄二も何か反論しなよ！ このままじゃ僕らは焼死体だよ！？」

「てめえら……やるならコイツらだけをやれ！」

「坂本……ありが っで違つ！そこは流れからして

『俺だけをやれ!』っていう場面だろ!？」

「その台詞、よく考えると僕らを買って自分だけ助かるうとしてい  
るだけじゃないか! 自分だけ良ければいいのにこのゲス野郎!」

あまりにサラツと言うから思わず坂本に感謝しかけてしまったじゃ  
ないか。

「男らしいじゃないか坂本。そこまで言うのなら、お望み通りコイ  
ツらをやってやる。」

そして未だに坂本の言葉に騙されている須川。

「気付く須川! このままだと被害者は俺らだけということに!」

叫んでみるが望みは薄そうだ。一度盛り上がったこの雰囲気は収ま  
る気配を知らない。

「では灯油の搬入が遅れているようなので、ここはひとまず吉井た  
ちに『特別バンジージャンプ』をやらせてみようと思う。」

「待て! それは前回ラブレターの騒動のときに行なわれそうにな  
った『紐無しバンジー』のことか!？」 「冗談じゃねえぞ!？」

それを人は死刑と呼ぶ。

「いや、惜しいが違う。似てはいるが、我々の使用としていること  
とは少し異なるな。」

「須川君。一応聞くけど紐無しじゃないとしたらその特別バンジー  
ってどんなものなの?」

流石に明久も自分の命運を賭けるこの状況で、口を出さずに入られ

なかったのだろう。それがどのようなものが聞いてきた。

「そうだな………。多くを説明すると吉井たちに余計な不安を与えかねないから、ヒントしか言えないが」

須川が暗幕で閉ざされた窓を見るように言う。

「一つのパラシュートしか持たせていない状態からの二人だけのスカイダイビング、とでも言うておこうか。」

「それはどちらかしか助からないような紐でやるっていうことか！？ 運もへつたくれも無いじゃねえか！」

「しかもそれだと助かった方には灯油とライターでの処刑が待ってるってことだよな！？ 結局は痛い目見るんじゃないか！」

この連中は本気でヤバイ。この場を逃れる為に今俺を縛っている口を切する方法はないか考えていると、

「お前ら。」

隣から坂本の声。

「え？ 何、雄二？」

「コレを使え。」

坂本が須川の目を盗んで、縛られている手で器用に何かを取り出した

「足に巻きつけるといい。」

自信満々に渡されたものを見ると………輪ゴムだった。

360度、どうやって捻って考えても、千切れて終わりだ。

「あのね雄二。嬉しいけど、こんなもの一本じゃ僕の体重は支えられないんだよ。」

明久が坂本を諭すように言うと、坂本は不敵な笑みを浮かべて答えた。

「バカだな明久。それだけじゃないさ。」

「え？ そうなの？」

そう言う坂本になんだが信頼感が湧いてきた。そうか、きっとコイツなら現状を打破する為のなにかがあるはず

「もう一本用意してある。」

自信満々に取り出されるもう一本の輪ゴム。

ああそつか。コイツ、きつと脳に重度の疾患を抱えてるんだ。だつたらこんなこと言はずが無い。

「あのね雄二。本数の問題じゃないからね？」

そうやってまた坂本を諭していると、

「……………停学明け早々、お前たちは何をやっているんだ……………」

朝のホームルームにやってきた西村先生が額に手を当てて溜め息をついていた。

「あ、先生！ ちょうどいい所に！ 助けて下さい！ 校内暴力です！ クラスメイトの虐めなんです！」

「違います！ これは校内の風紀を守るための聖戦です！ 吉井は不純異性交遊の現行犯なんです！」

正直、この間まで覗きだなんだやってたヤツらに不順異性交遊なんかでとやかく言われたくない。

だがそんなこと関係ないといったような雰囲気です。西村先生は話を進める。

「あー………。なんでもいいが、お前たちは点数補充のテストは受けなくてもいいのか？ 強化合宿の所為で男子はほとんど点数が無いに等しいだろう？」

西村先生が言ってるのは、試験を受ける為の申請のことだ。普通の授業の時間にテストを受けた場合は、先生の準備もあるので事前に申請が必要になる。このまま申請せずにいたら普通の授業になってしまっただろう。

強化合宿は知っての通り戦闘が多かったので点数を消費していた。だから、俺らもいずれば点数の補充をしないといけないかもしれない。だが今は

「……今はそれどころじゃありません！！」「」

そんなことより、この現状を解決する方が先決だ！！

「やれやれ。お前らがそういうなら構わんが……。とりあえず連絡事項だ。先週から行われていた召喚システムのメンテナンスだが、予定が遅れている。教師も動員して推進しているが、明日までは終わりそうにもない。その間は試召戦争が出来ないので注意

するように。以上だ。」

西村先生が何かを言って出て行ったが、そんなことはどうでもいい！  
今は専ら異端審問会だ！

「吉井、抵抗するな！ 往生際が悪いぞ！」

「くそつ！ 誰か助け そうだつ！ 姫路さん！ 姫路さんは  
！？ 優しい姫路さんなら僕を助けてくれるはず！」

吉井が藁にも縋る思いで声をかけた姫路は

「お願い姫路さん！ 僕を助けて！」

「美波ちゃん………やっぱり、明久君のことが………  
「ええつ！？ まだそれやってるの！？」

どこか遠い所に旅立っていた。きっと三十分は同じ台詞を吐き続けている気がする。

万策尽きたか、と腹を決めたその時、

「こ、これは一体何事じゃ！？」

教室の扉から希望の光が差し込んだ。

「秀吉！ 良かった………！ ずっと来ないから てつきり  
今日は休みなのかと。」

扉に手をかけた状態のまま、秀吉は俺らに声をかける。

「今朝は少々支度に手間取ってしまったがゆえに遅くなったのじゃが………。明久、お主らは朝から何をしておるのじゃ？」

確かに、朝っぱらから教室に暗幕が引かれていて、尚且つクラスメイトたちのほぼ全員が覆面姿だったら誰でも驚くだろう。

「木下。邪魔をしてくれるな。今我々は異端者である吉井明久と坂本雄二、並びに浅斬直貴の処刑を行なうところなんだ。」

遂に処刑されることが確定したようだ。ふう・・・・・・・・・・・・・・・・  
・意味がわからない。

「そうじゃったのか。しかし、雄二はわからんでもないのが、明久とナオは何をしたのじゃ？」

「よく聞いてくれた木下。異端者のこの二人はよりによって我らが聖域である文月学園敷地内で朝っぱらか二人のペツタンコと接吻などという不埒な行為を」

ガラッ

須川が喋っている最中に、秀吉が入ってきたドアとは別のドアが開いた。

そして、耳まで真っ赤になった顔を俯けてドアから入ってきたのは、問題の当事者である島田と亜矢だった。

「ゴメンね皆！途中で島田さんが学校の外に走ってくるのを見つけてちゃって、追いかけてたら遅刻しちゃった！で・・・・・・・・・・コレは一体どういう状況？」

そんな理由なんか聞いてねえよ、と言いかけたが、本人がいる前では言わない方が身のためだ。口からでかかったそれを飲み込み、別の言葉に変換しようと試みた。だが

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

教室内が水を打ったように静まり返る。いつもとは違うこの神妙な雰囲気、亜矢も皆も声を発せられずにいた。

「おはようございます皆さん。今日は諸事情により布施先生の代わりに私が授業を　　どうしたんですか皆さん？」

一時間目の授業の先生が、その様子を見て目を丸くしていた。

〜第四部開始〜第64話 友情ってなにそれ？ 食えんの？ (後書き)

実験で面白い出来事が全く起こらない、どうも三日月です！

今回は、前回のおさらいみたいな感じです。

それで次回から爆発させていきます！

楽しみにしてください！

あ、指輪の意見をまだまだ募集しておりますので、気が向いたら教えてください！

以上、三日月でした！

第65話 当たって砕けちゃいけません(前書き)

前回の青春ポイント合計 - 7

・優子とのキスハプニング! + × (採点不可&初期化)

・袋叩きにあう - 2

・二度目の袋叩きにあう - 2

・反撃。ちよつとスツキリ + 2

・事件の解決の兆しが全く見えない - 2

現在の青春ポイント合計 - 4

## 第65話 当たって砕けちゃいけません

### 【問題】

以下の問いに答えなさい。

『天下統一を達成し、刀狩令や太閤検地を行なった人物を答えなさい。』

姫路瑞希の答え

『豊臣秀吉』

教師のコメント

正解です。織田信長の家臣だったことで有名ですね。この問題は小学生や中学生でも幅広く取り扱われていますので、覚えておいても損はないでしょう。

Fクラス男子全員の答え

『『『木下秀吉！！』』』

教師のコメント

そう答えたくなる気持ちはわかりますが、不正解は不正解です。

島田美波の答え

『ちよんまげ』

教師のコメント

歴史に残る人をそんな一言でまとめないでください。

.....

なぜだろう。空気が重たい。

教室の中は普段からは想像もできないほど静かであった。いつもの騒がしいFクラスはどこにいったんだろうか。

一切の無駄口を叩かないクラスメイトたち。この異様な雰囲気にも先方も疑問を覚えつつも黒板にチョークで文字を書いていく。

「.....辛い。」

普通に生活しているだけのはずなのに、どうしてここまでデカイ問題にまで発展してしまったんだろう。正直な話、当事者じゃなければこういったイベントは大歓迎なのに。

「.....ん？」

視線を感じる。この状況で俺にコンタクトを取ろうとするヤツは、明久か雄二だろう。そう思っただけで、目が合ったのは 亜矢だ。

正直逸らしたかったが、アイツはこの状況を不審に思ったらしく、俺に疑問を問いかけてきた。

(ちょっと直貴？ どうしたのこの雰囲気は。いつもの楽しい感じはどこに行っちゃったの？)

(今までを楽ししいと思っていたお前に一抹の不安が残るんだが……まあ、カクカクシカジカ、という訳だ。)

俺は今朝起こったことの経緯を話した。でも、俺と優子のキスまでは触れていない。どうせ後でバレるだろうが、今は話すべきではないと思ったからだ。

(だ、だから島田さん、あんなに顔が真っ赤だったのね……)

(そういうこと。だから、お前もあまり妙な動きは見せないでくれ。)

『では須川君。この場合3molのアンモニアを得る為に必要な薬品はなんですか?』

『塩酸を吉井と浅斬の目に流し込みます。』

『違います。それでは朝倉君。』

『塩酸を吉井と浅斬の鼻に流し込みます。』

『流し込む場所が違うという意味ではありません。それでは、有働君。』

『濃硫酸を吉井と浅斬の目と鼻に流し込みます。』

『『『それだっ!!--!』』』

……この授業に違和感を覚えるのは今回が初めてじゃないが、やはり何か間違っている気がする。

(って、そういえば優は? お前いつも一緒に登校してるだろ。今日はまだ姿が見えないけど……風邪か?)

(優? えーと、今朝は私が寝坊しちゃって、先に行ってもらったけど……あの子、学校に来てから途中体調が悪くなって帰った、って聞いたわよ?)

多分、今回の事件の所為だろう。明久と島田のキスを目撃して、シヨックのあまり家に逃亡、ってところか。亜矢は後から来たみたいだし、その可能性は十分有り得る。

(ところで、なんでアンタまで目つけられてるの？ 今回の事件には全く関係ないでしょ？)

(……………)

言葉に詰まる。いきなり核心に触れすぎだろ。

(……………なにか隠してる？)

(……………正直に言ったら許してくれる？)

(内容次第よ。)

(……………鬼。)

ボキッ！

「では、浅斬君……………おや？ どうかしましたか？」

「いえ……………なんでも、ありません……………」

「では、薬品名を答えてください。」

「あ、えと……………カルシウムです。」

今の俺に必要な栄養素だ。

「浅斬君が間違えるなんて珍しいですね。では正解は……………」

(……………で？ 何があったの？)

(・・・全部お前の所為だ、この野郎。)

(残念。野郎は男に対して使う言葉で、女の場合は女おまというのが正しいのよ?)

(どっちでもいいけど、お前の所為なのには変わらない。)

人の揚げ足ばかり取りやがって・・・!

(それで、どうして私の所為なの?)

(・・・それはだな)

俺は亜矢とのキスのこと、そして今朝起きた優子とのキスのことを言った。

(・・・あちゃ。それじゃ完璧に私の所為だね・・・)

(そりゃそうだ。それに優子が何で俺にキスしたのか、わからないし。)

(わからない?! そこまでされてわからないの!?)

亜矢はなぜか驚きの表情を見せる。なぜ驚かれたんだろうか。驚いているのはこっちの方だと言うのに。

(直貴の鈍さは筋金入りね・・・)

(お前はどどういうことだかわかるのか? お前にされたときもそうだけど、本当にこういうことに免疫無くて・・・お前に聞くのもアレなんだろうけど。)

(それは優子ちゃんがアナタのことを好きだからでしょ?)

・・・待て。それはどどういうことだ?

(・・・・・・は?)

(いやだから、私が直貴とキスをしたって話を聞いて、自分も負けるわけにはいかないからそんな大勝負に出ちゃったんでしょ?)

(・・・マジ?)

(大マジよ。)

・・・俺は、お世辞にも自分のことがカッコイイだなんて思ったことは、無い。ましてや、モテたと思ったことなんて人生一度も無い。

そんな俺のことを、優子は好いている?

そう思っただけで、俺の脳をショートさせるには十分な起爆剤となつた。

『『『『もう我慢ならねえーっ!っ!っ!』』』』



ドリル頭はDクラスのはずなのに、なぜ現在授業中のFクラスの教室にいるんだろう。

しかし今の俺にはその気力すら起きない。いわば、生ける屍状態だ。

『清水さんいつの間に!? しかもどうして清水さんの言うこと聞いて卓袱台まで投げようとしてるの!? クラスメイトを大事にしようよ!』

『お前ら! 授業中だぞ!』

西村先生の一喝が入る。これがなかったら收拾がつかない事態にまで陥っていただろう。

こうして西村先生のおかげで事なきを得たクラスは無事に? 休み時間になっていったのだった。

それにしても……………

サクッ (カッターがナオに刺さる音)

「……………」

『お、おい。浅斬の野郎、さっきの授業から全く動きがねえぞ……』

『こちらとしては苦しむ姿が見たいんだが、ここまで無反応だと逆に哀れみが出てくるな……』

『もう標的を吉井だけに絞った方が良くないか？』

しかし、もう数十分もこんな感じだ。今まで刺さったカッターやボールペンは累計24本。流石に刺さったら痛みはずなのに、俺は声も上げずにただ放心してる。

理由は簡単。亜矢の一言が自分の中ではかなり思い負担になっているからだ。あの状況でキスをしてきた亜矢もそうだが、なぜ優子まで？ と言う疑念が俺からは消えなかった。

「……………おいナオ。大丈夫か？」

「あ……………坂本。」

そんな折、坂本が声をかけてくれた。だが正直に言うと、その優しさは逆に俺の心を破壊していると思う。

「さっきからいくつも痛々しい後が見られるが……………本当に大丈夫か？」

「大丈夫だよ……………問題ない。」

心のキズは深いけど。なんで、気付いてあげられなかったんだろう……………

「しかし、よくさっきの事件の間もよくじつとしてたな。お前ならすぐにツッコミをいれそうだったのに。」

「状況が状況だから……………まあ、しばらくすればなんとか

なるよ。」

「そういつならいいが……本題に入ろう。マズいことになった。こっちに来て一緒に会議をしてくれ。」

「……別にいいけど。で、なにかトラブル？」

どうしよう。正直、全然乗り気になれない。なにか今の気分を転換できるようなことがあればいいんだけどな……そんな都合よく起きないか。

「ああ。明久の所為で面倒なことになりそうだ。」

「面倒なこと？」

「そうだ。実は、Dクラスが試召戦争の準備をしているというものだ。」

まさか、他のBクラスに一発かますつもりなのか？ と思ったが坂本はそうではないと答えた。

ちなみにCクラスはAクラスに試召戦争で敗北しており、設備のリンクは一つ落ちてDクラスと同等になっている。だから、攻め込むとしたら残り二つのBクラスかAクラスしかない。

「お前の言うとおり、Bクラスだったら問題じゃないんだけどな。」

「Bクラスじゃないだと？ だとすると……」

一つの仮定が俺の頭の中で浮上した。

「……もしかして、Fか？」

「そうだ。」

「え、いや、でもどうしてだ？ そんなことしてもアッチには何の利益も無いだろ？」

「そうだ。何も利益がない。だが、向こうはそう考えてはいないよ

うだ。」

「それって……?」

思い当たる節が無い。何らかの恨みで来るとしたら、やはり強化合宿での覗き事件だろうか。あの一件は女子たちの間で相当な問題になってはいるらしい。隙あらば試召戦争と称して何をしてくるかわからないぐらいだろう。

「最初に言っただが、今回の件は『明久の所為で面倒なことになった』と言っただろう。わかるか?」

「……いや。イマイチ理解できない。」

「そうだな……話を直接聞かせたほうが早いかな。おい、ムツツリーニ。ちょっと来てくれ。」

すぐ近くにいたムツツリーニを呼び止める。既に坂本には何かを伝えただのか?

「……何?」

「先ほどのテープを聞かせてくれ。」

「……わかった。」

そう言うとムツツリーニはいつの間にか手に持っていた盗聴器のスイッチを押した。すると、先ほども聞いたか聞いていないような、女子生徒の声が聞こえてきた。

『全く、先ほどの反応といい、あの二人は本当に付き合っているのでしょうか? そうだとしたら、神がどんなに許しても、美春が許しません……!』

「ムツツリーニ、止めてくれ。この声を聞いただけで呪われそうだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここから面白いのに。」

少々残念そうではあったが、ムツツリーニは盗聴器のスイッチをオフにした。

「なるほど・・・・・・・・ドリル頭か。ヤツの所為で俺たちの設備が更に劣悪な物に変化しようとしている、と。」

「そういうことだ。」

「でも、アイツ一人でDクラスを動かすことができるのか？ そのまでの発言力の持ち主には見えないし、何より代表が反対するだろう？？」

「いや、そうでもないんだ。実は」

「あれ？ また何かトラブル？」

そこに今回の事件の発端、明久がやってきた。

「丁度いい明久。テメエの所為で面倒なことになった。どうしてくれるつもりだ？」

「え！？ ちょっと待って！ 何があったの！？」

「まあいいだろ坂本。つまり、こういうことだ」

そこで俺が経緯を話す。段々と話していくにつれて明久の表情が曇っていく。自分にこの事件の発端があると知り、ショックを受けているのだろう。

「そ、そんな・・・・・・・・。僕は全然そんなつもりは・・・・・・・・。！」

「ま、お前にそんな気はなくても、アッチはそう思っていないみたいだぜ。」

「それに清水が言っただけだろ？ 卓袱台だからナントカつて。お前と島田の席を離す為に俺たちの机をまたミカン箱にするつもりらしい。」

「試召戦争で負けたら設備はワンランクダウン。また授業を受けにくい最悪な時間が訪れるだろう。」

「け、けど、Dクラスだって全員が乗り気じゃないでしょう？ そんな目的でクラスの皆が関わる戦争をするとは思えないよ。」

「そうだ。だが、今の俺たちの立場をよく見てみる。何をして停学になったんだ？」

「………覗き事件か。」

「そうだ。今俺たちは集団覗きの主犯だ。普通の女子は俺たちに良い感情を抱いていない。むしろ自分たちの手で罰を与えたいと考えているくらいだろうな。」

Dクラスの代表は男子生徒。今の覗き犯のような状況では発言力は皆無といえるだろう。怒りに燃える女子勢と嫉妬に狂うドリル頭を抑えられるのも時間の問題だろう。

「雄二、攻め込まれたら勝つ自信はある？」

「苦しいな。うちのクラスの連中は朝からの騒ぎで点数補充ができていないし、女子生徒はわずかに三人だけ。川村は今日は休みのようだし、明日来るとも限らない。たとえ万全の状態であっても作戦が無ければ太刀打ちできないというのに、点数が残っているのが女子三人だけだとすると、余程の大どんでん返しがない限り、勝ち目は無いな。」

男子は今日の俺たちの行動の所為で点数補充ができていない。今日補充しないとその戦力は皆無に等しいだろう。

「つてなワケで、今回の試召戦争は回避する方が賢明だな。勝ったとしてもDクラス程度の設備じゃあまりメリットが無いし、折角貸しがあるクラスをわざわざ敵に回すこともないだろう。」  
「え？ 回避できるの？」  
「お前と島田次第だけだな。」

そう言うと坂本はあたりをキョロキョロと見回し始めた。

「どうかした、雄二？」  
「いや、島田が近くに居るかと思ってな」  
「美波ならさつき姫路さんと一緒に屋上に行ったけど。」  
なるほど。

「修羅場だな。」  
「修羅場だろうな。」  
「・・・・・・・・修羅場。」  
「え？ あの二人、喧嘩でもしてるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何を言ってるんだコイツは・・・・・・・・？  
これが素だとするなら、コイツは筋金入りのバカだ。

「それより明久、一つ確認しておきたいことがある。」  
「ん？ なに？」  
「島田とお前は付き合ってるのか？」

坂本がこの事件の核心に触れる部分を聞いた。確かにそれが本当な

ら、戦争の回避は難しくなるからな。

「僕の記憶だと、付き合っではない、と思う……………」

「はつきりしろやあああつっ!!」

「ほぐうッ!？」

明久にアッパーカットをぶつける俺。

コイツの曖昧な態度を見てると、腹が立ってきた。そんな適当な気持ちで恋人関係になるなんて、優の気持ちはどこにもって行けば良いんだよコンチクショー!

「ご、ごめんナオ……………でもそれは僕が送った間違いメールが原因で……………」

「送ったメールって……………」

確か、明久が須川に送ろうとしたメールを間違えて島田に送ったというものだったけ。

「うん……………その誤解がまだ解けてないんだ。」

「そうだったか……………だったら尚更早く誤解を解け。お前だつて誤解されたままは嫌だろ?」

「うん。勿論だよ。」

「そうか、誤解だというなら話は早い。」

坂本が顔を上下させながら言う。

「え? 何が?」

「Dクラスの試召戦争の話だ。島田の誤解を解いてお前らがいつもの姿に戻れば清水も大人しくなるだろう。そうすればDクラスは俺たちに不満はあっても、開戦するほどの意気込みがある核がいなく

なって、試召戦争の話は流れる。俺たちはいつもの日常を取り戻して万事解決というわけだ。」

なるほど。それなら設備も落とさず、そして明久の誤解も解けるといいうわけか。さすが坂本だ。この手に関してヤツの右に出るものはいないな。

「よし、じゃあ早速島田の誤解を解きに行くか。」

「了解した。」

「わかったよ雄二。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺も行く。」

こうして俺たちは島田の誤解を解くべく、屋上へと向かったのだ。た。

ナオたちが丁度説得に向かったときの時間のことだった。

私は布団の中にこもって半泣き状態だった。

「吉井君のばかあつ……………」

正直、浮かれていた。

やっと停学も開けて吉井君に会えると思っていたのに、どうしてあんなことに……………」

「もしかして停学の間二人は何か進展があつたのかな……………」  
「？」

先ほどのシーンを思い出そうとすると、急に視界がぼやける。いけない、さっき落ち着いたばかりなのにまた涙が……………」

「それとも私が知らないだけで、二人はもともとそんな関係だったとか……………」

そう考えると、なんて自分はバカだったんだろうと悲しくなる。二人の間柄も知らないで、一人で勝手に盛り上がっていた自分が恥ずかしい。

「……………キス、してたなあ……………」

また涙がこみ上げてくる。今日は親にも無理を言っただけで休ませて貰うことにした。それに、こんな悲しい気分ですら吉井君に会うことになると思うと、私には到底そんな勇氣はなかった。

まるで世界の全てが、自分を嘲笑つかのような、そんな陰鬱な気持ちになっっていく。

ピロリン　　ピロリン　　ピロリン

携帯にメールの着信が入る。もしかして相手は吉井君かな？　と思っただがそう考えるだけで、そのメールを見ようとする勇気が沸いてくるはずもなく、

「はぁ……………」

ただ溜め息だけが、口から出てくるだけであつた。このメール、一体誰からだろう？　吉井君はきつと今きつと忙しいから、私にメールなんてしてくるとは思えないのに。

恐怖よりも興味が勝り、携帯に手を伸ばす私。そして取つた携帯を開いて中身を確認する。

「……………なんだ。広告か……………期待して損した。」

携帯の受信ボックスを開けてみると、そこに書かれていたのはただの広告だつた。

正直、余計な期待をさせないで欲しい、と怒りに任せて思いつきり携帯を壁に投げつけようとする、

ピロリン　　ピロリン　　ピロリン

「はわあっ!？」

また携帯がなった。全く、また広告!？ 懲りないんだから……

……って、あれ？  
よく見ると広告ではなく、ディスプレイにはしっかりと名前が出ていた。それは自分が一番よく知っている相手だった。

《 メール受信完了

ナオ君 》

受信した相手の名前は登録の際、凄く嫌がられたが、今はあまり気にしていないという。

「……………ナオ君からか。なんだろ……………?」

ナオ君は今、学校にいるはず。学校にいるとしたら、勿論島さんと吉井君の関係のことも知っているだろう。そのことについてかな？ そして私が休んだことも……………  
そしてメールを見ると、予想通りのことが書いてあった。

『お前、今日の事件のことで休んだら?』

「……………むう……………幼馴染なんだからそのくらい察してよ……………」

なんて気が効かない幼馴染なんだらう。私はこんなにも傷心の身なのに。そう思ったらさきほどの悲しみは、今にはナオ君の無神経さ

に対する怒りに変わっていた。

「…………その通り、ですよ、バーカ……………っ。」

メールを打ち終え送信を完了すると、すぐさま返事が返ってきた。

『バカ言うな。あ、それと、事情が変わったんだ。しかもお前の良い方に話が転がっている。お前が明久を諦めるのは、まだ早いかな。』

明久、という字が出てきて私はドキツとした。吉井君の名前……………

事情が変わったとはどういうことだろうか。私の良い方に話が転がっている……………。続きを読むとスクロールしたが、そこでメールは終わっていた。なんてイジワルな幼馴染なんだろう。

「……………事情が、変わったって、ということ……………っ」と。

そして続きを催促するように素早く返信する。すると、次に返信されてきたのは、本当に幼馴染かどうか疑うかのような内容だった。

『部屋に閉じこもってるお前なんか誰が教えるか、バーカ。』

……………自分から言っておいて、なんでここで教えてくれないのか不思議でたまらなかった。亜矢ちゃんにどうやってオシオキしてもらおうか考えていると、すぐにもう一通のメールがきた。そしてそこに書かれていたのは

『そうだな……………今日明久と会う機会を一度だけ作ってやる。』

そのときに自分の気持ちを正直に表現することができたら、後はお前と明久次第だ。』

「……………吉井君と会う機会？ 私の気持ち？ 吉井君次第？  
そう考えると、きつとあまり悪い話の報告に来るとは思えない。良  
い方に話が転がっていると書いていたし、もしかすると……………  
まあなんだかよくわからないけど、とにかく吉井君を交えて事情は  
教えてもらえるようだね。ナオ君には放課後ここに来てもらって、  
しっかりと話してもらわなくちゃ。」

「……………ナオ君と話せて、少しはスッキリしたかな……………  
……………」

最初よりは気分が軽くなった気がする。ぶっきら棒でも、やはりア  
レがナオ君の優しさなのかもしれない。  
そうだ、後で何か作ってあげようかな。クッキーとか、そういった  
お菓子で良いかな。

私は部屋から出ると、階段を降りて台所へと向かったのだった。

## 第65話 当たって砕けちゃいけません（後書き）

はいどうも、三日月です。

最近すっかり寒くなりましたね！ え？ そんなことより次の話を早く書け、だつて？ ……すみません。

今回のストーリーは物凄く変える予定です。主に戦争開始のあたりでド派手にやって行きたいと思います。それに加えて、恋のお話の方も読者さんたちが満足できるような仕上がりになりたいと思います！

そして、今からバカドジキャラの主要ストーリーアンケートをしたいと思います。

主要ストーリーアンケートとは、次の閑話で出すオリジナルストーリーの主演を誰にするかというものです！ 何回か開催します。

今回選ぶメンバーはコイツらだ！

転校生チーム ・ 浅斬直貴 ・ 川村優 ・ 神咲亜矢 ・ 水樹翔太  
文月学園チーム ・ 吉井明久 ・ 坂本雄二 ・ 土屋康太 ・ 木下秀吉

この中で投票数が多かった上位二名に主演の座を渡したいと思えます！

さて、皆さんは誰に投票しますか？

クリスマス……あれ？　なんかズレてる特別話　前編

「直貴！　クリスマスは私の家でパーティを開きましょう！」

発端はこの一言だ。

今日はクリスマス一週間前。　我らFクラスに冬休みの概念は無く、いつも通りの補習だった。

そんな地獄の補習が一段落した時、脳内お祭りパラダイスの亜矢が、そんなことを提案してきた。

「いや、俺その日は家族と過ごす予定なんだ。だからその話は残念だけど断わらせていただきたく」

「ゴチャゴチャ言ってる暇あったら予定空けときなさい！　私の言うことが聞けないのなら……！」

ヤバイ。この目は強制的に参加させようとする感じの目だ。

「わ、わかった……。空けとくから。だからまたリムジンで拉致するのは勘弁してくれ！」

「わかったなら宜しい！　じゃあ、私は他の子を誘ってくるから、」

「あ、ちよつと待て。他の男子は明久たち以外は誘うなよ？」

「え？　どうして？」

「ほら、あつちを見る。」

「え？」

俺はFクラスの男子が溜まっているある一箇所を指した。

『クリスマスなんか中止しろおおっ！！！』

『クリスマスなんか燃えつきろおおっ！！！』

『爆発しろおおっ!』

『『『『おおおおおおおおおっ!!!』』』』

そこにはいるのは、黒装束姿のクラスメイト達。  
奴らは円陣を組んで奇声を上げていた。

「……………」

「な? あれを呼んだらどうなるか、想像すればわかるだろ?」

「うん。わかった。じゃあ、吉井君たちを、」

「あ、今行かない方が良さぞ。」

「……………今度は何?」

「修羅場だ。」

俺はまたも違う方向を指差した。そこにいたのは、

『あ、明久君はクリスマスのは暇ですか!? よ、よかったらその……………私と一緒に。』

『え? 姫路さん、どうし。』

『アキ! ウチと映画を見に行く約束はどうなってるのよ!?!』

『ええっ!? み、美波、それは話題にすらあがってなかったよ!?!』

『よ、吉井君っ! わ、私の家でパーティをしゅませんか!?!』

『川村さんも少し落ち着き。』

女子三人に囲まれ、慌てふためく明久の姿だった。  
モテる男は辛いな、明久……………

「そ、そうね。じゃあ、坂本君を、」

「アイツは誘わない方がいい。そうすれば、お前は一生坂本に恨まれることになるぞ。」

他の女の子にクリスマスのパーティに誘われたと知られたら、坂本は来年まで霧島の家から出てくることは無いだろう。いや、もしくは一生出て来れないだろう。

「……じゃあ、他に誰を誘えばいいわけ？」

「明久と坂本には俺から言っておくし、その他女子も俺から言っておく。後は……適当に見繕えば？」

「んむう……私が計画したはずなのに、なぜか直貴が仕切ってる……」

亜矢は少し膨れっ面になりながら、自分の席に戻っていった。

さて、亜矢は忘れていたみたいだが、残り三人もキチンと誘っておかないとな。

でもなあ……

俺はある一点を見る。

『うおおおっ！！』

「リア充爆発しろーっ！！」

「……裏切り者には、死を……！！！」

『クリスマスなんか中止じゃーっ！！』

そこには黒装束を身に纏った翔太とムッツリーニの姿が。

違和感無くあそこに入れる時点で、誘いたくはないんだがなあ……。誘わないわけにもいかないし、亜矢になんと言われるか……

ゆっくりと黒装束に近づいていく俺。ああ、段々恐怖心が沸いてきた。

「あのさ、ムッツリーニに翔太。お前らに話が、」

「……今、忙しい。」

「そつだ！俺らは今、神に祈りを捧げてリア充の撲滅を計ってるんだ！」

その願いは即却下されることだろう。

「そういうことじゃなくて、な。お前らにもクリスマススの居場所分け与えたくてだな。パーティの招待を、」

『「詳しく聞かせろ。」』

やばい。声がでかすぎた。須川にも聞こえていたみたいだ。

……しょうがない、コイツも誘うか。

「ちよつとコツチに来てくれ。」

俺は須川と翔太、ムツツリーニを黒装束の集団から遠ざけた辺りで話を進めた。

話を始めて数分。

「……浅斬。お前のことを友達として誇りに思うぞ……！ 亜矢さんのパーティに出れるなんて！」

喜んでいられるのも今のうちだ。

「というか、またやるのか……。直貴、どうして阻止できなかったんだよ？」

「無理だ。亜矢が怖い。」

「そんな……」

「？……………何があつた？」

「ああ、ムツツリーニは知らないよな。……………去年起こつた、あの惨劇を……………」

「知らない方が、幸せなのかもな……………」

「????？」

さて、ムツツリーニは誘つたし、後の道連れは誰がいいかな……………？

クリスマス……あれ？　なんかズレてる特別話　前編（後書き）

どうも、三日月です。

お久しぶりです。三週間ぶり？ですネ。

今回はクリスマスと言うことで考えてみましたが、間に合いませんでした……

でも、この話は今月中には完成させますので、お楽しみに！

クリスマス……あれ？　なんかズレてる特別話　中編

「え？　パーティ？」

「そ。亜矢の家でやるんだとさ。」

補習も無事に終わり、俺は今Aクラスにいる優子にパーティの話を持ちかけている。なぜ冬休み中の学校に優子がいるかというと、参加自由型の冬期講習があるからだそうだ。

「うーん、行きたいのは山々なんだけどなあ……」

「ん？　何か用事でもあるのか？」

「ちよ、ちよっとね……」

優子は少し節目がちになった。……何かあったのかな？

「まあいいか。……無理してくるものでもないしな。」

「？　どうしてそんなに黄昏てるの？」

「いや、ちよっとな……」

去年のことを思い出して、鳥肌が立つ。あのときは、忘れると言われても無理だろう。

「あ、それはそうと　　」……浅斬「どわおっ！？」

次の話題に移ろうとしたところで、不意にA代表こと霧島が現れた。本当に不意に出てきたから、一瞬心臓が止まるかと思ったぞ……

「な、なんだA代表……？」

「……そのパーティ。雄二も来るの？」

やばい。下手な受け答えしたら、坂本が死ぬ気がする。

「い、一応……誘う予定だけど……ダメか？」

「……誘っても良いけど、それなら私も行きたい。」

「ん？ ああ、そんなことか。それなら別に大丈夫だぞ。亜矢は来るものは拒まず、がモットーだからな。」

「……わかった。雄二には私から伝えておく。そして、私と一緒に行くから。」

「あ、ああ。その辺は自由……なんじゃないかな？」

坂本が縄で縛られてる姿が思い出される。うーん、楽しくなりそう  
だ。

「それって、ボクも行って良いのかな？」

「ん？ ああ、工藤か。」

次に声をかけてきたのは、短髪が良く似合う少女、工藤愛子だった。

「こんな所に浅斬君がいるから、気になっちゃって。」

「そうだな。工藤にも詳しい話をしておくか。」

そこから説明を交えて話を進めること数分。

「本当にボクも行っていいの？」

「別にいいぞ。亜矢の家は広いからな。……限りなく。」

「へ？ どうしてそこで悲しそうな顔をするの？」

「ああ、いや、気にしないでくれ。……気づいた時にはもう遅いか  
ら。」

「ちよっと!?! 最後に意味深な台詞を残さないでよ! 気になる

「で、優子は来なくて良いのか？」  
「聞いてないし!？」

まあ工藤さん。来ればわかるよ、アイツの凄さが。

「うーん……間に合いそうだったら行くね。」

「そうか、わかった。亜矢にもそう伝えておくよ。」  
「うん。」

優子は保留。工藤と霧島が参戦……と。よし、こんなもんで良いかな。後は明久たちを誘って終わりだな。

「さて、楽し……いや、面白いクリスマスになりそうだな……」

唇の端を少し吊り上げ、誰にもわからないようにほくそえむ。  
俺は軽快な足取りでFクラスの教室に戻っていった。

「ナオ……」  
「どうした。」

待ち合わせ場所に着いたとき、明久が話しかけてきた。ちなみに、場所は指定さえしてくれば亜矢の車が出迎えてくれるという、いつものVIPサービスだ。これが普通だというんだから、やはり亜矢はどこかがおかしい気がする。だから現在いるのは明久のマンションの下。

「ナオは、どうしてスーツを着てるの？」

明久は俺の服装に興味を持ったらしい。その理由を教えてあげようじゃないか。

「前回、俺が私服で行って後悔したからだ。」

「……それさ、どういうこと？」

「……ノーコメで。」

「……それ、事前に言ってくれない？ 僕、私服で来ちゃったんだけど……」

「大丈夫だ。他の皆にはしっかりと行ってあるから。」

そこでしばらくの沈黙。

「なんで僕には言ってくれないのさ！ 言ってくればスーツくらい……」

「用意できたのか？ 金の無いお前に。」

「う……」

図星のようだな。どうせ冬には新作のゲームがいっぱい出るからとか、そんな理由だろうけど。

「あんまり心配するな明久。亜矢の家にはお前のサイズに合ったスーツくらい二、三着はある。他の皆にだって一応俺みたいなスーツで来ても良いとは言っているが、私服で来ても後で借りれるとも言うてある。亜矢の家ではそういった類のことが多いから、別にお前みたいに私服で来ても良いんだ。」

去年行ったときは、俺も貸してもらったが……。一着が物凄く上等な物だから、そんなもの着て食事なんてできやしないけどな。

「……じゃあさ、なんで僕に心配させるようなこと言ったの？」

「面白そうだったから。」

「貴様をクロス！」

「ま、待て。一応スーツなんだから汚したらまずい。」

この後、亜矢に借りるなんて絶対にゴメンだからな。そうして少し過ぎすこと数分。また明久が話しかけてきた。

「ナオ。この待ち合わせ場所には僕ら以外に誰が来るの？」

亜矢は場所さえ指定してくれればどこで迎えに来てくれると言ってくれた。だからそれぞれの待機場所に

「んーと、ま、そのうちわかるだろ。」

「ふーん、そっか。」

「……誰が来ることを期待してるんだ？」

「ぶっ!？」

少しイジワルな感じで明久を問い詰める。今の不意打ちは結構効いたな。

「だ、誰って、そりゃあ……」

「あ、ちょっと待った。」

ピーッ

「……………」

「で、誰が来ることを期待してるんだ？」

「そんなボイスレコーダーで録音なんかしている状況で話せるかつ

!」

「あはは、ゴメンゴメン。」

人を弄るのはやっぱり楽しいなあ。

「大体、ナオこそ」

明久が俺に文句を言おうとした時、どこかを見て一時停止した。

「……………明久……………? どうした?」

そこから数秒、その原因が判明した。

「お待たせっつ!」

「お、優か。」

向こうから優が走ってくるのが見えた。

慣れない靴を履いている所為か、少し歩き方がおかしい気もする。よろよろときこちない足取りだ。

「そうだ明久。優を迎えに行ってくれ。」

「えっ、ちょ、ナオ　痛っ!!」

優のいる方向に明久を蹴り飛ばす。さてさて、見物だ……! しばらくして、明久は優の元に辿り着いた。

「えーっと、川村さん。……大丈夫?　歩き辛そうだけど……?」

「あ、吉井君　きゃっ!」

絶妙なタイミングで優がコケる。靴が不安定なヒールだからだろうか、優はそのまま前に倒れそうになる。

「あっ!」

前に倒れそうになった優を明久が見事に抱きかかえる。

……やばい、見ているこっちが恥ずかしいぞ。

「……………」

しばらく見つめあう二人。……ていうかさ。

「お前ら、俺がいることを忘れてない?」

「「はっ!」?」

慌てて距離をとる二人。別にそういうことは何時間してもらっても構わないんだけどさ、そういうことは……できれば二人きりの時にやって欲しいかなあ……

「あの、えっと、よ、吉井君……」

「だ、大丈夫だった？ 川村さん。」

「……はい。あ、ありがとうございませゅっ。」

優……。緊張しすぎて噛んでるぞ。

「さて二人とも。そんな恥ずかしい茶番はそろそろ終わりにしろよ。そろそろ迎えが来る頃だし。」

「「なっ!?!」」

俺に言われて赤面する優と明久。おーおー。熱いねえ。

「ナオ君のバーカっ!」

「はいはい、わかったから頭叩こうとするな。」

俺のことが気に食わないのか、ポカポカと頭を叩いてくる優。痛くは無いが、若干恥ずかしい……

「っつと、そうこうしている内に、お迎えが来たみたいだぜ?」

「……お迎え?」

道路の向こうからヘッドライトが輝いた。向こうから走ってくるぞいつは、閑静な住宅街には似合わないほどのべっとりとした赤塗りのフェラーリだった。

明久は目の前に止まったフェラーリに対して、『本当にコレがお迎え?』と驚きを顔に浮かべた。俺はそれに答えるように小さく頷く。

「……ナオ、神咲さんって一体何者?」

「さあな。でも、ただの金持ちでは無いことは確かだけだな。」

「そ、そうなんだ……」

遠慮がちに高級車に乗り込んだ俺達は、亜矢の待つ家へと向かったのだった。

車を走らせること数十分。亜矢の家の全貌が見えてきた。門の前まで来るとフェラーリは停車し、運転手がドアを開けてくれた。

「到着だな。いやー、前の家も凄かったけど、今の家も凄いなー。」  
「……ナオ。これって家なの？」

うーん……正直、これは家というよりお屋敷だな。まず、門がある。普通の家にある門とは違い、普通に二メートルくらいある大きさだ。門を抜けると、そこには広大な土地をふんだんに使用した庭があり、庭の中央には大きな噴水があった。俺らを歓迎するかのように大きな水しぶきを上げている。屋敷へと続く道にはバラだろうか。とても手入れが行き届いているバラの香りが、俺らを包み込むようにして迎えてくれた。

「これだったら最初からスーツとかで来るべきだったかも……」  
「まあ後で貸してもらえ。ほら、優もこっちこいよ。」  
「あ、うん。」

さて、三人到着だが　　おっと。主催者の登場だな。

「皆っ！　来てくれてありがとーっ！」

相変わらずテンション高いなあ……。疲れるし。

「あ、神咲さん。今日は呼んでくれてどうもありがとう」  
「ああっもっっ！　そんな挨拶いいからっ！　呼んだのは私なんだしっ！」

「え？　あ、うん……？」

明久が亜矢のペースに飲まれている……

「亜矢ちゃんっ！　いつもありがとーっ！」  
「うっんっ！　優の為なら、このくらい、お安い御用よっ！」  
「亜矢ちゃん！」  
「優！」

……なにこの茶番。

「……亜矢、さっさと入っていいか？　それと、あとで明久にスーツ貸してやってくれ。」  
「あ……なんだ。直貴は自分のスーツ着てきたんだ……。折角貸してあげようと思ったのに。」  
「ノーセンキューだ。絶対に。」

亜矢に貸しを作ったら、何されるかわかったもんじゃないからな。

「そんなこんなで数分が経過」

女子はドレスやら髪型のセットやら準備が大変なそうなので、優とは一旦ここでお別れだ。

優は余程楽しみなのか、ピョンピョン跳ねるようにお屋敷に消えていった。

「それで亜矢。他の皆はどうした？ まだ来てないのか？」

「いや、もうほとんど来てるよ。後来てないのは……坂本君と霧島さんかしら。」

ほう……？ 今日は来ないかもしれないな。

「ねえ神咲さん。あの車も神咲さんの用意したヤツ？」

「ん？ どの車？」

「今、丁度門の前に止まってる黒いベンツ。」

お、黒いベンツということは、イタリアなんかのマフィアが人を拉致する時によく使う車だな？

ベンツから降りてきたのは、まあ想像通りというか、なんというか

……

「……お待たせ。雄二、連れてきた。」

「おい翔子。せめて目隠しを取ってくれ。ここがどこだか把握ぐらいさせてくれ。」

降りてきたのは坂本夫妻だ。まあ本日も仲がよろしいようで、坂本が縄に縛られて、それをA代表が手綱に繋いで一緒に降りてくるといういつも通りの格好だった。

「よっ、A代表。遅かったな。」

「……仕留め……声をかけるのに時間がかかつちゃって。」

「おい翔子。今仕留めると言おうとしなかったか？」

気のせいですよ、旦那様。

「ところでナオ。これはどういうことだ？」

「ん？ A代表に話を聞かなかったのか？」

「話を聞くも何も、昼に商店街を歩いていたらいきなり何者かに襲われてな。気が付いたら車に乗せられていたというわけだ。」

なるほど。いつものパターンか。

「いや、今日はクリスマスパーティを亜矢の家でやるだけなんだが、迷惑かけたな。A代表がどうしてもって言うから、お前のことを任せたんだ。」

「なるほど、貴様が全ての元凶か。よし、今すぐ殺してやる。」

酷い濡れ衣だ。俺はA代表の乙女心に感動して、わざわざ頼んだのに……

「怒るなって。」

「怒るだろそりゃ！ あの時はおふくろも一緒に、今日の晩飯を買いに行つてた所なんだぞ！」

「なるほど。そりゃ楽しい時間を邪魔して悪かったな。」

親との時間を邪魔されて怒るなんて、坂本は意外に親孝行者なのかも

「アイツだけに晩飯を作らせたら……！　お願いだ頼む。せめて連絡だけでも取らせてくれ。」

何か表情がドンドン切羽詰った物になってくぞ……。何が起こるんだ？

「……お義母さんなら、私から伝えておいたから大丈夫。」

「翔子っ！？　お前おふくろになんて伝えたっ！？」

こんなに表情が強張った坂本、久しぶりに見たぞ……

「……そんなこと、ここじゃ恥ずかしくて言えない。」

「やめてくれ！　おふくろは勘違いしやすいんだ！　お前が何を言っただかは知らないが」

お、ここで言い返すのか？　坂本もやられてはっかりじゃいられないようだな

「クリスマスに七面鳥と間違えてカラスを出しそうになった母親を、お前は信用することができるか！？」

坂本には悪いが、そんなものは母親とは呼ばない。世間では一般的に悪魔という。

「……お義母さんつたら、そそっかしい……」

「そそっかしいで済ませられるか！　アイツには冗談が通じないんだぞっ！？」

「あー、坂本。その辺りで諦めてくれ。お前は既にエントリー済みだ。」

「くっ！ こんな所で死んでたまるかあああつ！」

「A代表。後は宜しく。」

「……うん、わかった。」

覚えてるよおおお……！ と言う声と共に、坂本は亜矢の屋敷に連れて行かれた。

「あ、相変わらず強烈ね……坂本君とその彼女の霧島さん。」

「まあ、あれも一種の愛の形……だと、俺は信じている。」

「そ、そっか……」

最初は衝撃的だったが、慣れれば大したこと無いな。うん、そのはずだ。

「……あのー、僕らもそろそろ中に入らない？ 皆揃ったんでしょ？」

明久が遠慮がちに問う。確かにずっと外にいるのも寒いし、明久はスーツに着替えなきゃいけないからもう入っても良いだろう。

「じゃあ亜矢。俺らも入らしてもらおうぞ。」

「あ、うんっ！ ようこそ、我が家へっ！ 吉井君はゲストルームにあるスーツを勝手に着ていって来て構わないからっ！」

亜矢は歓迎の言葉を並べた。

我が家と呼ぶには明らかに広すぎる家に、物怖じしながらも入っていく俺達だった。

クリスマス……あれ？　なんかズレてる特別話　中編（後書き）

はいもうすぐお正月ですね。

一年って早いです。残念なことに。

この小説も今年の四月に投稿し始めたのですが、早いものでもうすぐ一周年経っちゃうなあ……

ここまで応援してくれた皆さん、来年も応援よろしくお願いします！

クリスマス……あれ？　なんかズレてる特別話　後編＋プロローグ

ゲストルームに通された俺達は、他のヤツらと合流することになった。

「おつ直貴！　やっと来たか！」

「……………遅い。」

「ああ……………ここが亜矢さんの家……………」

中に入ると、翔太、ムッツリーニと今回のイレギュラー、須川が出迎えてくれた。皆、黒色のスーツを着用しており、ビシッと決まっている。ムッツリーニは小柄だから似合わない気もするが、そんなことは全く無く、しつかりと着こなしている。うーん、普段と違う格好だと違和感を感じる。

「あ、そういえば今回は須川君も一緒だったんだっけ。」

「そ。ムッツリーニと翔太に声をかけたら、聞こえちゃってさ。しようがないから参加させることにした。」

まあ、亜矢はその辺りは気にしない性格だから、別に良いんだけどさ。

「あれ？　雄二は？」

「ん？　そういえばいないな。」

広い部屋を見渡しながら明久が言う。そういえばさつきA代表に連れて行かれてたけど、どこに行ったんだ？

「ああ、坂本君ならさつきクローゼットの方に行ったよ。」

「クローゼット？」

「ああ、スーツか。」

「そういえばさっきの坂本の服装はいつもの私服だったな。」

「ま、当たり前か。さっきまで商店街で普通に買い物してたって言うてたし。亜矢に借りて着替えているのだろう。」

「それじゃあ明久も着替えてこいよ。クローゼットは奥にあるみたいだし。」

「なんだかこの家に入ることすらおこがましいけど、服まで借りちゃって本当にいいのかなあ？」

「大丈夫だって。良いつて言われてんだから素直に受け取っておくべきだよ。そうしなかつたら逆に失礼だって。」

「そうかな？」

「今更何を言っているのやら。別にそんなこと、どうだって良くなるのに。」

「早めに着替えるよ。亜矢に呼ばれる前に着替えておかないと、置いていくからな。」

「わ、わかつたって……」

俺が<sup>プレッシャー</sup>圧力をかけると、明久は奥のクローゼットに引っ込んでいった。

「それにしてもココの家も凄いなあ翔太。前の家も、広さだったらこっちも引けを取らないけどさ。」

「そうだよなあ……。金持ちの中でもこれは凄い方じゃないのかなあ？」

翔太は部屋を見渡して言う。確かにここにあるソファだってきつと外国で作った特注だろうし、翔太や須川、ムッツリーニが着ている

スーッだつて相当のものはずだ。

「まあ親が親だからな……………」

「そういえば直貴つて神咲の親父さんにメツチャ気に入られてなかつたっけ？ あ……………がたいが良い、ゴツイお父さんに」

「やめる翔太。…………正直、思い出したくも無い……………」

亜矢のお父さんの姿が頭の中から浮かんでくるが、それを打ち消そうと頭を振る。最初は超嫌われていたけど、あの事件以来はもう……………本当に最悪だ。

「思い出すなあ……………。あの頃のナオは今と違つて」

「やめる。その思いでは一生封印しておいてくれ。」

若い頃？ の俺の姿が思い出される。無茶ばっかやってたな……………つて、おっさんか。

「直貴、準備できたよっ！」

昔の、といつても一年前だが。を思い返していると、亜矢が準備の完了を知らせた。

「おお。わか……………。亜矢……………？」

「？ どうしたの？」

ええと……………幻覚だろうか。

「どうかしたの？」

「い、いや……………別に。」

くそ、どうしてだろう。亜矢が……綺麗に見える。

亜矢は全体的に赤やオレンジなどの暖色系のドレスを着ていて、髪型はいつもより高い位置でまとめられている。そして少し動くたびに香ってくるのは、柑橘系だろうか。柑橘系の香水が、俺の鼻孔をくすぐった。

「おおおおっ！！ 亜矢さん！ とてもお美しいですーっ！」

「えっ？ そう？ あ、ありがとう……」

須川が亜矢を褒める。

た、確かに今日はクリスマスだし、そう見える。しかし、亜矢が綺麗に見えるだなんて、きつと何かの間違いだ。

おっかしいなあ……去年だってここまで綺麗だなんて思わなかったのに。

「直貴、お前はなににも言わないつもりか？」

「はっ？」

翔太が背中を押してくる。おい、なに余計なことしてんだよ。

「ほら、神咲が期待してるだろ？」

「な、何にだよ。」

「お前が褒めてくれるのをだよ。ほら、お前のことをじっと見てるぞ？」

ふと視線を戻すと、亜矢が上目遣いでこちらを見ていた。

……や、やめろよ。そんな顔すんなよ。……どうして良いかわかんなくなんだろおおおおっ！！

「えっと……直貴。ど、どう……？」

「ど、どう……って?」

「わ、私のこの格好……に、似合ってる?」

「お、おお。い、いつもと違って、凄く新鮮だな。うん。」

言葉に困る。素直に似合ってるだなんて、言える訳ねえだろ……

「そ、そっか……そっかぁ……そうだよ、ね……」

俺が曖昧な返事をした所為か、亜矢は少しうなだれてしまった。うえっと……まずい。ちょっと酷いことしちゃったかな……

「直貴……お前って最低だな。」

「……返す言葉もございません。」

翔太に言われて自己嫌悪に陥る俺。や、やっぱりちゃんと言い直した方が良いよな……よし。

「あのさ、亜矢。お前のその格好さ……」

「えっ? なに?」

「その……その服、凄く似合「ナオ! 着替え終わったよ! 早くパーティに行こうよ!」……」

俺が亜矢に話しかけた丁度そのとき、スーツ姿の明久がクローゼットから出てきた。

……タイミング悪すぎだろ、明久……

「……えっ? あれ……な、なにかな? 僕、何かした?」

「明久。皆お前のスーツの似合わなさにドン引きしてるんだ。だから早くその汚い顔をしまえ。」

「それ、スーツ関係なくない?」

そこに先ほどの私服とは違い、スーツに身をまとった坂本も出てきた。

完全に亜矢を褒めるタイミングを失ってしまった……

そこで空気を読むように須川が言った。

「……あゝ、えっと、皆。そろそろパーティーの方に行かないか？  
準備もできたみたいだし、待たせちゃ悪いだろ？」

この時ほど、須川をいいヤツだと思ったことは無いだろう。俺らはしばらく変な雰囲気のまま、女子達が待つ大広間へと向かったのだ。

「ナオ、さっきはその……何かゴメン……」

「いや、いいさ。もうなんか……どうでもよくなってきたから。」

大広間に向かう途中の廊下で、明久が言う。

「あの……あそこで一体何があったの？」

「聞くな……恥ずかしくなるから。」

「そ、そっか……わかった……」

もう何か悲しくなってきた……！

「ほ、ほら、大広間に着いたみたいだよ？」

「おお……」

もう最後までこのパーティーに入れる気がしない……

「あっ！ ナオ君！ やつと来たんだねっ！ そ、それと、吉井君も……」

大広間に来ると、優が一番最初に声をかけてきた。

「優か……気合入った格好してんな。」

「えっと……川村さん。その格好……」

明久は優のドレス姿に見入っていた。まあ無理も無いかな。俺から見ても綺麗に見える。

優はナイトブルーを貴重としたドレスで、身体のラインが出やすいような仕様になっているものを着用していた。耳にはアクアマリンのピアスがついており、優のような子供っぽいヤツでも大人っぽく仕上がっていた。

「吉井君……？ あっ！ まさかどこがおかしかった！？」

「優、明久はまだ何も言っていないぞ。」

「あっ……！！」

顔を真っ赤にして俯く優。わかりやす過ぎだろ……

「ど、どうかしたの？ 川村さん？」

コイツもコイツで鈍いし……ムカつく！

「明久。女の子が折角上等な服着てんだから、何か言ってあげたらどうだ？」

「えっ！？」

「ちよ、な、ナオ君っ！？」

優が真っ赤な顔で驚く。おーおー、茹でダコみたいだ。

「余計なこと言わないでよっ！」

「照れんなって。別に減るもんじゃないんだし。」

「もーっ！」

優は膨れっ面でそっぽを向いてしまった。ありゃりゃ、ちょっと奇めすぎたかな……？

「えと、か、川村さん？」

「な、なんですか、吉井君。」

「そのドレス、凄く似合ってるよ。」

「あ、ありゃ、ありがとっございませ……！！」

俺に言われた時より更に顔を真っ赤にする優。このままにしておく

と、倒れちゃうんじゃないか？ と思うくらいだった。

「ア〜キ〜っ？ 川村さんにばかりじゃなくて、私達にも何か言  
って欲しいんだけど？」

「あの、明久君……。私達のドレスは、どうですか……？」

「おっ、姫路と島田も気合が入ってるなあ。」

向こうから島田と姫路がやってきた。

島田はオレンジを基調としたドレスで、首には恐らくエメラルドで  
あるうネックレスを下げていた。

姫路は自分の髪と同じピンク色のドレスで、耳には多分、ピンクダ  
イヤモンドだろうか？ 確か物凄く高価なものだが、それをつけて  
いる。

二人はそれぞれの服を物凄く上手く着こなしていた。きっとスタイ  
ルも良いからだろうか。全く違和感がない。

「わあ……！ 二人とも、凄い似合ってるよ！ 特に美波は胸がい  
つもより大きく見えるかと思っただら僕らの左腕が悲鳴を上げながらそ  
のまま逆方向にいいっ！」

「誰がいつも胸が小さいですって！」

「す、ストップだ島田。これから皆で立食会だ。そんな場で死体な  
んか出してみる？ 飯が不味くなるだろうが。」

「ナオ。それは僕をフオローしているつもりなのかい？」

そんなジョークをはさみながら島田と姫路、優のドレス姿を愛でて  
いると、そんな俺達に次の刺客が現れた。

「……お待たせ。」

「おお、A代表……と、その夫、坂本雄二。」

「誰が夫だ！」

A代表こと霧島翔子さんは、夫の坂本雄二を（縄で）引きつれてや  
つてきた。

霧島が着ているのはラベンダーカラーのドレスで、深い髪の色をし  
た霧島にとてもよく似合っていた。髪形もいつもとは違っており、  
長い髪はポニーテールにしてまとめられている。

「坂本。今日のA代表に対して何か一言どうぞ。」

「ふざけるなっ！ この状況で何かいえるとしたら、それは助けて  
以外にも」

「……雄二は本当に素直じゃない。」

「うおおっ！ 助けてくれええっ……………！」

坂本は引きずられながら、どこかに行ってしまった。

……………えっ！？ もしかして今回の登場はここだけ！？ ……も  
う少し弄ってあげればよかった。

『ムツツリー二君っ！ キミはいつも理論ばかり』

『……………ちゃんとした知識も無いのに、それに挑むのは愚の骨頂。』

『もっっ！ ムツツリー二君なんかこうだっ！（ちらっ）』

『……………卑怯なっ……………！（ブシャアアアア）』

後ろでは物凄く、怪しい会話が繰り広げられていた。

ああ、もうなんだかよくわからなくなってきた……………。

「はい皆っ！ お静かに！ 今からパーティーの開会式を始めるわ  
よっ…！」

亜矢が広間全体に通るほどの大声で叫ぶ。

「え、本日はこのパーティにお越し戴きまことにありがとうございますとござ  
います！ 皆！ 今日飲んで騒いで、好き勝手やっちゃっていい  
わよ！ はい、挨拶おわりっ！」

結構適当な説明の後、皆は本当に適当に騒ぎ始めた。

明久は日ごろの分のカロリーもここで摂取するかのようにならぬに食ら  
いつき、明久のことが好きな女子勢はなんとか話をしようと頑張っ  
ている。

ムツツリー二は既に血まみれだし、それを介抱しようとしている翔  
太も工藤にやられて血まみれだし、坂本はA代表にアイアンクロー  
食らって血まみれだし………って、血まみれになりすぎだろおっ  
！？ お前騒いで良いとは言ってたけど、血まみれにして良いとは  
言っていないだろ！？

「あ、亜矢？ この後、片付けとか大丈夫か？」

「え？ ああ、うん、全然平気よ？ 大掃除も兼ねて、業者に任せ  
ていっぺんにやるつもりだから。」

「ああ、そうか。なら大丈夫だ……で、だ。もう一つ聞きたいこと  
がある。」

「え？ なあに？」

亜矢はこちらを見て首をかしげる。

「随分楽しんでるようだが……アレはやるつもりなのか？」

「え？ アレ？」

亜矢は更に首をかしげる。……忘れてる？

「ほら、去年もやったアレだよ、アレ。」

「ああ、アレね。勿論やるわよ?」

今年もやるのか……アレ。

「直貴は楽しみじゃないの?」

「えつと……実はすんげえ楽しみだったりする。」

「本当? 良かったあ……去年はあんまり楽しそうに見えなかったから、今年もコレで良いのか不安になっちゃって。」

亜矢はさっきの落ち込んだ顔とは違い、一転して笑顔になってみせた。……やっぱり、亜矢は笑顔の方が似合ってるな。……そうだな、よし。

「亜矢。」

「ん? なに?」

「そのドレス、凄く似合ってるぞ。」

「っ!?!? あ、ありがと……!?!」

亜矢は顔を真っ赤にして俯いた。普段こんなこと言い慣れてないけど、この時くらいは別に良いかな。

しばらくの間、俺は亜矢との会話を楽しんだのだった。

《プロローグ〈新年パーティバトル編〉》

皆も場の空気に馴染み、立食会も中盤に差し掛かった頃だった。

「さあ皆！ よく聞いて！」

亜矢が騒ぎ始めた。毎年恒例のあのイベントをやるのだろう。

「これから私の家で毎年行なわれているゲームを始めるわ！」

「え？ ゲーム？」

「えーと、プレゼント交換などでしょうか……？」

姫路がおずおずと手を挙げる。ふ……相変わらず甘いな。そんな普通過ぎるものを、亜矢がするわけ無いだろう……？

「ふふふ姫路さん。ハズレよ？」

「そ、それでしたら一体何なんでしょうか……？」

亜矢が勿体つけて話していく。

「……今年、我が家で実行するのは……なんと、『サバイバルゲーム』ですっ！」

「……ええええええええええっ……！！……？……？……？……？……」

転校生達以外の叫び声が、大きな屋敷に響き渡った。

「新年もバカドジをよろしくな！」

「ナオ？ いきなりどうしたの？」

「その場のなりゆきとオチが見つからなかったからだ！」  
「なんだそりゃ？」

クリスマス……あれ？　なんかズレてる特別話　後編＋プロローグ（後書き）

どうもすみません！　間に合いませんでした！

ごめんなさい！　すみません！

謝ってばかりでも仕方ないので次回の宣伝入れます！

次回、サバイバルゲーム勃発！

亜矢の屋敷で皆は一体どんなバトルを繰り広げるのか……見所は言えませんが、そうですね……書いて言うなら、暗殺者ですかね……

おっと、あまり言いすぎると次回の楽しみがなくなっちゃうので、この辺でさようならです！

今年もよろしくおねがいします！



《まずは、基本的なルールの確認です！ この『サバイバルゲーム』とは、ここにいるパーティ参加者のメンバーの全員がこのお屋敷内にて戦っていただき、そして最後まで残った方が勝者という単純な遊びです！》

「えと……戦うとは、具体的にどういうものなのでしょうか？」

おずおずと姫路が司会者に聞く。まあ普通の女の子は知らなくて当然か。サバイバルゲームなんて物騒な遊びやろうなんて考える女子は、やっぱり亜矢だけだな。

《はいっ！ このサバイバルゲームでは基本的に、銃を使って戦っていただきます。そして勝負の舞台は先ほども言いましたが、このお屋敷。このお屋敷を縦横無尽に駆け巡り、そして敵を見つけて打ち抜いてください！ それが実際に死亡してしまうような位置や回数であればアウトとなり、退場でございます。》

「アウトになる位置は具体的にどこだ？」

坂本が聞く。ここはルールの中でも重要な部分だからな。坂本は策略家だし、この辺の細かいルールは気になるのだろう。

《具体的に一発でアウトになる場所を申し上げますと、頭や心臓などですかね。それと被弾数が5を超えますと、状況的には大量出血で死亡となり、アウトとなります。》

「それにしても……銃ですかあ？ な、なにか危なそうですね……」

姫路は武器に対する危険について気になっているようだ。確かに初見だと、銃やら何やら怖い単語が並んでるし、危なく感じるだろう。

《その辺りには心配しなくても大丈夫でございます。この銃の弾は

プラスチック製の安全な物なので、目などにゴーグルをしていただけでは全く危険はございません。》

「あ、そうなんですか？ それなら安心です。」

姫路が少し笑顔を見せる。ま、弾より実際に問題になるのは体力の方なんだけどな。

この屋敷はかなり広い。俺の見立てだと、文月学園がすっぽり入るくらいの大きさは持っているだろう。それに庭を足すと、かなりの広さになる。だからそれを動き回るとなると、確かに弾の安全性は重要だが、それ以前にこの広い屋敷を動くのに相当な体力が必要ということになってしまふのだ。

《ゲーム開始前、一度皆さんにはジャージに着替えていただきます。動きやすいですからね。そしてその後、皆さん一人一人に模型の拳銃が渡されます。》

「も、模型の拳銃って……模型は、模型よね。」

島田がルールに疑問を感じている。甘いな、そんな軽いシステムを亜矢が用意するか？ いや、しないな。そんな妥協を亜矢が許すはずは無い。

《模型と言われましても重さや質感、そして弾を込めた時の感触は本物ソックリとなっています。ですから、皆さんには本物同然というわけですね。》

司会者が武器についての説明を終えた。ふむ、ここまでは去年のものと同変わらないみたいだ。

《さてここまでは去年と同じようなのですが、ここで新ルールです。前回はご参加して戴いた皆さんも、今回初参加の皆さんもしっかり

聞いておいてくださいね。》

おっと、新ルールか。しつかり聞いておかないと、後で困るからな。

《新ルールは今回、他の武器がこのお屋敷に複数隠されているというものです！ 単発式の拳銃より優れたものが隠されておりますので、皆さんは敵の手に渡らないうちに入手して勝負を有利に運んでくださいね。》

「えっと……隠されている武器ってなんですか？」

明久が司会者に聞く。

あ、確かにそれ俺も気になるな。もしかしてランチャーとか？ いや、そんな翔太のカバンみたいなことがあるわけ無いか。

《それは皆さんが見つつけてからの楽しみです！ 武器は一種類ではありませんので、皆さんこそぞって探してみてください！ 他に何か質問はありませんか？》

「はい！ 自前の武器は使用可能ですか！」

翔太が図々しいお願いをしてきた。それはダメだろ……

司会者は亜矢と相談をした後、こう言ってきた。

《一種類までならOKだそうです。》

「っしやああつ！」

「マジかよ!？」

ええっ!? それ翔太だつたら絶対にランチャー持ってくるじゃん！ 勝てるわけないじゃん！

《他には何かありますか？》

「あ、ボクがしてもいいかな？」

ここまでほとんど無口だった工藤が口を開く。

《はいどうぞ。》

「すつごく図々しい質問かもしれないんですけど、最後まで残った何か賞品とかは出るんですか？」

お、皆が一番気になることを聞いたな。確か前は、某ネズミの国の一日貸切券だったかな？ 去年は翔太が優勝だったけど。さて今年は何が賞品なんだろう。

「良くぞ聞いてくれたわ工藤さん！ 今回の賞品はなんと……」  
「どんな願いでも、一つだけ叶えてみせる」でーすっ！

「……な、なんだと……？」

男性陣が騒ぎ出す。亜矢のヤツ、本気出してきた……！  
女性陣はまだ状況がつかめていないようで、皆目を丸くしてキョトンとしている。

《詳しい説明をさせていただきます。今回の賞品は『神咲グループの力を使って、どんな願いをも叶えてみせる』というものです！  
これは勝負に勝った人、つまり最後まで残っていた方が受け取れるものです！》

「あの…… 具体的にはどんなものを叶えてもらえるんですか？」  
《それは本当に何でも宜しいです！ 欲しいものがあるんですしたら、それを購入のち、プレゼントさせていただきます。有名な大学に入りたいのなら、そちらの学校の学校長さんとお話させていただきます、絶対にご入学させていただけるように手を回します。お金持ちになりたいと仰るのなら、神咲財閥の総力を結集して、一生困らないよ

うに金銭面についてサポートをさせていただきます。》  
「本当になんでもアリだな……」

巫矢ならその程度のこと、造作も無いだろう。その気になれば世界だって掌握できるかもしれない。いや、流石にそんな危ない思想を持ったヤツがこの中にいるわけ無いよな。

「……………ムツツリハーレム王国の建国も可能。」

いや、違う意味で危険なヤツはいるが。というか、それだとムツツリじゃないじゃん。

《他に質問がある方はいらっしゃいますか？》

「……………はい。」

霧島が手を挙げる。結構説明したはずだけど、まだ何かわからないことでもあるのか？

《ああ貴女は……………。前回のウェディングギフトでは、随分とご迷惑をおかけしました。》

どこかで『全くだ……………』という声がした。きっと坂本だろう。如月ハイランドでは楽しい……………いや、どちらかといえば苦しいウェディング体験をしていたからな。無理もない。

「……………いい。気にしてないから。」

《ありがとうございます。これからもグループ如月をよろしく願います。それで、ご質問とは何でしょうか？》

「……………好きな人と結婚させてもらうことも可能？」

あ、坂本の表情が固まった。

《はい！ もちろんでございます！》

そして次の一言で顔の色が一瞬で真っ青になる。これはキツツイなあ……

《そのような場合も、神咲財閥の各部署で手を打たせていただきます！ 部署には結婚プロデューズを担当としている場所もございますので、そちらをご利用頂いてまいります。そこでは結婚に至るまでの過程も完璧にサポートさせていただきます。例えば彼氏が浮気性で困っているからなんとかして欲しい、金銭面に不安がある、両親族同士のいざこざなど、言っていただけさえすれば全て解決させてもらいます。結婚に至るまでの障害も全て取り除かせていただくので、心配は要りません。どんなことがあっても、彼との結婚を実現させてみせます！》

それは、たとえ彼氏がその結婚を嫌がったとしても絶対にさせられてしまうのだろうか？ だとしたら、坂本は大ピンチだ。

《どうでしょう？ ご理解いただけただけでしょうか？》

「……ありがとう。」

《前回のこともありますし、個人的にはあなたに勝利して欲しいです。頑張ってください。》

「……うん、頑張る。」

おいおい、司会者がそんなんでいいのかよ……

「ナオ……嘘だよな？ 全て嘘だと言ってくれ……！」

坂本が本気で泣きそうな顔をしてこちらを見てきた。ここは本当のことを言うか……

「ああ、全て本当だ。お前が負けて、A代表が優勝なら、お前は絶対にA代表と結婚することになる。」

「……やっぱり、本当なのか……」

坂本が今にも首を吊りそうな勢いだ。ここはやっぱり嘘というべきだったのかな？

でもこの大人数で戦って、A代表が優勝できるという確立はかなり低いんだがなあ……そこに気付いてもらえると良いんだけど。

「……上等じゃねえか。」

「へ？」

坂本の目が、先ほどまで虚ろだった目に光が灯った。

「この勝負、絶対に俺が優勝してみせる……！　そして、翔子とのこの生活ともおさらばしてやる……！」

坂本は何かスイッチが入ったように考え事を始めた。きつと、勝つための算段でも立てているのだろう。話しかけて怒りでもしたら面倒だな。そつとしておこつ。

《ではルール説明も質問もここで締め切らせていただきます。では皆さんは一度ゲストルームに戻り、各自動きやすい服装などに着替えてください。》

司会者が促し、皆はゲストルームに戻っていった。

……さて、今回も楽しいパーティになりそうだ。

ゲストルームに戻ると、ジャージと拳銃と腕時計が用意されていた。

「ねえナオ。神咲さんって本当に何者？」

明久がゲストルームに戻った時間聞いてきた。

「それ、さっきも言ったと思う。」

「いや、本当に何者？」

「俺にも良くわからないが……一つ言えることは、ただの金持ちではないことぐらいかな。」

「それさっきも言ったよ……」

だって本当に良くわからないのに、答えられるわけ無いだろ。

「……でも、俺もここまで本気出してくるとは思わなかった。アイ

ツ、何考えてやがんだ？」

「でも神咲さんって、お祭り好きじゃないの？」

そう、明久の言うとおり亜矢はお祭り大好き、年中脳内カーニバル女だ。アイツはいつも本気だが、ここまで本気を出すことは珍しい。そこまでテンションが高いつてことなのか、それとも何か他に狙いがあるのか……それは亜矢にしかわからない。

「ときに明久。お前は優勝したら何を願うんだ？」

「えっ？ ……うーん、考えてなかったなあ。結構急な話だし。」

「彼女をください！ とかは？」

「なにそれ？ 確かに欲しいけど……。僕の彼女なんかになってくれる人なんかいないと思うよ？」

ほう？ それは皮肉かな？

明久は全くわからない、といった感じで首をすくめた。

「……まあお前が鈍いのは今に始まったことじゃないしな。」

「ん？ 何か言った？」

「なにも？」

ごまかすと、明久は着替える為にクローゼットに向かった。

俺は黒いジャージを手取る。

「そういうナオは何をお願いするの？」

横にいる明久は俺が聞いてきたように、同じように質問してきた。

「俺？ 俺はな……俺が優勝したら教えてやる。」

「あつずるい！ 僕には普通に答えようとしたのに！」

「知るか。俺は俺、お前はお前だ。そんな細かいことどうだって良  
いだろ？」

「うわっ、酷っ!？」

正直、これは勝つまで言いたくないなあ……恥ずかしいし。

あ、恥ずかしいといえば。

「明久。」

「ん？なに。」

「優とはどの位まで進んでるんだ？」

「ぶはっ!？う、わっ　　!」

青いジャージの下を着ようとしていた明久は、今の質問の所為で足  
がもつれて倒れた。

「動揺しすぎだろ……」

「う、うるさい！ ナオには関係ないだろっ！」

「ふーん、そっかぁ……」

ま、明久は少なからず優のことを意識しているということか。今の  
質問だけでそこまでわかるとは、やはりバカは恐ろしいな。  
俺は黒いジャージに着替え終わり、模型の銃に弾を込めた。  
前回同様、弾はリボルバー式。入れ忘れてしまったら大変なことに  
なる。今のうちにやっておかないとな。

《皆様、着替えは終わりましたでしょうか？　しっかりと腕時計も  
してくださいね。それで時刻や現在の進行状況、脱落者数などが表

示されますから忘れると大変なことになりますよ。》

弾を込めている最中。突如スピーカーから声 flowed。さっきの司会者のようだ。

現状を把握するための腕時計だったのか。だとしたら確かに忘れただら大変だな。

俺はしっかりと腕時計を装着した。

《準備が終わりましたら、指定された場所にそれぞれ散ってください。そこからスタートとなります。》

着替えが終わった俺達は、指定された場所に移動した。俺は庭の奥の方でスタートすることになった。

ここからだと言敵の位置が把握し辛い上に、不意打ちをされやすい。最初は移動して、身を隠したほうが無難だろう。俺はスタート地点付近の林に身を隠した。

《それでは皆さん、準備は宜しいでしょうか？ それでは　　スタートです！》

ビー！　という不快な音と共に、俺らの生き残りをかけた勝負が始まった。

勝てるかどうかかわからないが、自分の力を尽くすしかないな。

**新年！ お屋敷サバイバル！ 前編（後書き）**

はい、前回の続きです。

今回は亜矢の金持ちらしさを存分に見せることができましたと思います。  
今回は単純にバトル、戦闘が多いです。

坂本の戦略や翔太の射撃技術、ムツツリーニの隠密行動などが目白  
押しです！

次回をお楽しみに！

新年！ お屋敷サバイバル！ 中編

開始から数十分。現状を維持したまま俺はスタート地点付近で隠れていた。

「さて、どう動くか……」

下手に動くのは得策ではないが、こうやって無意味に時間を過ごすのも良くない。そうこうしているうちに、相手に特殊な武器が渡ってしまう可能性があるからだ。

「ちよっくら、様子見で動くか……」

俺は壁に背を向けながら辺りを窺う。今のところは人の気配は無いみたいだが……

「……！ 殺気！？」

周りに気を配っていたはずなのに、不意に何者かに狙われている感覚に陥った。ちなみに、殺気を感じできるようになったのはFクラスに入ってから殺気を受ける回数が増えたからだ。

転校してから、いろいろな経験を積んでしまったような気がする……

「どこから　　っど！？」

そのとき、俺の頬を銃弾が掠めた。今のはきつと掠っただけだから被弾には含まれないだろうが、相手がこの付近にいるということは確かなものになった。

「今の入射角度からすると……向こうからのようだな。」

俺は向こうの方にある木の一番上に視点を移動した。すると、一瞬だがスコープの先端、つまりレンズ先が光を受けて輝いていた。

「この精密な射撃能力は……！ 翔太、お前か！」

俺は木に向かって問いかける。ついでに拳銃を向けることも忘れていなかった。

「ちっ。一撃で仕留めようとしたのに、外すとは思わなかったよ。」

木の上からは翔太の声がした。やはり、あの距離の射撃を誤差数センチで済ませることができるのは翔太しかない。

「威力重視で来ると思ったが……まさか長距離ライフルだとはな。」

「バズーカだと次弾装填までにタイムロスが出るからな。こっちの方が正確性があるんでね……」

そういうと翔太は再び射撃体勢に入った。黒い銃口が再びこちらに向けられる。

長距離の武器は接近すると照準が合わせ辛い。ここは接近しながら立ち回って、隙を突いて一発打ち込むしかない。俺は前傾姿勢になり、間合いを詰めるように足を前に出そうとした。

「はっ！」

「！？」

俺が一步前に出ようとした所に、数十発ほどの弾丸が打ち込まれてきた。なるほど……ロスが少ないって言うのはこういうことか……！

「引き金を押し続けていればその間は弾が出続けるタイプなんでね。距離はライフル級だが、弾の数はマシンガンとほぼ同等。さらに俺は木の上からの遠距離射撃、お前は単発式の銃だけ。この状況でお前の勝ち目は無いぜ、直貴！」

「くっ！」

弾丸がまるで雨のように襲ってくる。俺は咄嗟に壁の影に姿を隠した。くっ！ これじゃあ近づくことはおろか、反撃すらできない！

「隠れてばかりじゃ、木にいる俺を仕留めることはできないぜ？」

「てつめえ！ 卑怯だぞ！」

「今回は賞品が賞品だからな。手加減なんかしてられっか！」

姿を消したと同時に射撃の雨が止む。くっそ……容赦ねえな。今回の賞品が余程効いているらしい。これじゃ迂闊に飛び出すことすらできないぞ。

「くっそ……なにか翔太の射撃を防ぐことができる物があれば良いんだが……」

けどそんな都合よく盾でも落ちてるわけもないし……っ、ん？ 壁の後ろに後ずさりしていると、足に何か感触が伝わってきた。そこにはなんと上に『Present』とかかれた箱があった。こ、これはもしか……！

「どうした直貴。もう終わりか？ そこにいたら一生勝てないぞ！」

あっはっは！ と高らかに笑う翔太。ふん、そんなこと言ってもらえるのも今のうちだ……！ 俺は箱からそれを取り出し、翔太のいる方に向かつて投げつけた。  
これで、勝負だ！

「ん？ なんだアレ？」

転がっていったそれは最初に俺が居た位置くらいに転がっていった。そして

カツ！

「うおっ！？ ああっ！ 目が、目があああっ！？  
あああっ！？」  
だあ

ドサツ

そして、翔太は木から落ちた。  
それは強烈な閃光を放ち、一時的に翔太の目を潰した。箱の中に入っていたのは、爆発すると鋭い光を発生させる閃光玉だった。

「隠されていた道具が閃光玉だとは……思いもよらなかったな。」

確かに攻撃能力は無いが、相手の視界を奪えばそれは勝ったも同然だ。しかも翔太は今の拍子に木から落ちて、身動きが取れない。今しかチャンスがないと考えて良いだろう。

「ここでリタイヤだ、翔太！」

未だ目が見えていない翔太に対し、ここぞとばかりに接近する俺。前回はコイツの勝ちだったが、今回ばかりは譲らないぜ！

俺は翔太の頭部に銃口を向けた。これで仕留めることができる、そう思った時だった。

「ぐおっ！」

「!?!」

《水樹翔太さん、アウトです!》

どこからか先ほどの司会者の声が聞こえた。きつとどこかの監視カメラかなにかでチェックされているのだろう。亜矢の家だし、それくらいおかしくない。

いや、今はそんなことはどうでも良い。問題なのは

「くっ!?!」

不意に俺の肩に銃弾が当たる。

くっ……! 辛うじてかわせたけど、肩に当たっちゃまった……!

「ふうん。今のをかわすなんて、流石は浅斬君だね。しっかりと頭を狙ったんだけどなあ。」

「く、工藤……!」

翔太を死亡に、俺を被弾させたのは、緑の短髪にジャージが良く似合う女子、工藤愛子だった。

きつと俺達が戦っている所でも見つけたんだろう。この状況に乗じて、二人とも葬ってしまう作戦でも立てたのか? なんて酷いことを考えるやつなんだ……!

「……翔太。俺負けるの嫌だからコレ借りるわ。」  
「くそつ。持っただけドロボー……」

恐らく一番最初にやられたであろう翔太は、地べたに伏せたまま動こうとはしない。まあ前回の優勝者がこんな所でやられるとは思ってもみなかっただろう。

俺は翔太からライフルを受け取った。

ジャキッ

そのとき、不穏な音がした。

「食らえっ！」

「げ！ 工藤、それは……！」

工藤は拳銃のほかにもう一つ武器を持っていた。それは

「二丁もマシンガン持ってやがる……！」

工藤はその小柄な体には似つかわしい、黒光りする二丁のマシンガンを両脇に抱えていた。そ、それはまさか、特殊な武器か！？

「さっき外に出た時に箱の中に入ってね、弾がそんなに無いから拳銃の方で浅斬君たちを倒そうと思ったんだけど……よけられちゃったし、やられるくらいならここで使っておいたほうがいいかなって。」

「だからって俺相手にそんな本気出さなくても……！」

ここで負けたら話にならない。こちらも翔太のライフルを持っていくが、弾数が明らかに違う。マシンガンには精密な射撃はできないが、それを上回る弾数で圧倒してくる。この状態じゃ明らかに不利だ。

「どうだー！」

「うおおおおおっ！」

乱射される弾の中を全力ダッシュでぐり抜ける俺。掠りはカウントされないようだし、動き回ってできるだけ当たらないようにしよう。俺は広い庭を最大限利用して、工藤の放つ弾丸を避けていった。

「だあああっ！！！」

俺は力の限り走りまくる。そうすること数秒、やっとマシンガンの弾が無くなってきた。

「……………うーん……………中々当たらないなあ。」

「はあっ…はあっ…もうヤバイ。体力がもう……………」

マシンガンの猛攻からは逃げ切ることができたが、流石にもう逃げ回る体力は残ってない。序盤でやられるのは悔しいが、ここまですもしれない……………

「しょうがない。拳銃で狙おうか……………」

工藤はマシンガンを下ろし、拳銃に持ち替えた。俺は先ほどまで逃げ回っていた元気は無く、速度の速い弾丸を避けることは困難になっていた。

「ばいばい、浅斬君……」

「くっそ……」

ここまでなのか……

俺は動くことを諦め、両手を挙げて立ち尽くす。

そして、辺り一帯に銃声が響き渡ったのだった。

明久SIDE

「あ、水樹君がやられた。」

僕はお屋敷の中の一つの部屋、数あるゲストルームの一つからスタートした。スタートして数十分経ち、僕が通路を移動している頃、時計から水樹君が早速やられたという情報が入った。

「遊び程度かと思ったら、皆思ったより本気だなあ……。まあ賞品が賞品だからだろうけど。」

神咲さんの言ったとおり、本当に何でも叶えてくれるのだろうか？  
そしたら僕は、1位になったら何を願えば良いんだろう？  
欲しいゲーム？？ 生活費？ うーん……

「ま、そのときになったら考えればいいか。うん。」

あんまり深く考えすぎて、結局1位になれなかったら嫌だし。  
そうして少し通路を進んでいると、奥の方から人の気配がした。僕  
は咄嗟に近くにあった銅像の後ろに隠れる。誰だろう……？

「むう……。道が入り組んでいて、わかり辛いもう……」

あ、この爺言葉はもしや秀吉かな？ 声の主がわかり、少しほつ  
しながら銃口を下ろす。流石に秀吉相手に不意打ちは酷いかな。し  
っかり姿を現してから戦おう。なんてっ たって女の子だし。

「む？ この失礼でバカな気配……！ もしや、その銅像の影に  
いるは明久か！？」

前言撤回。即刻倒してしまえばよかった。

「流石は秀吉、よく僕のスマートで爽やかなオーラに気が付いたね  
？」  
「いや、ここまでバカな気配を感じさせるのは明久以外おらんじゃ  
ろうて。」

若干涙目になる僕をよそに、秀吉は更に続ける。

「既にやられたとばかり思っていたのじゃが……意外じゃの。」

大丈夫、僕。悔しくなんか無い、悔しくなんか無いんだ……！  
表面上は平静を取り繕っている僕でも、秀吉にかかればそんなこと  
はお見通しみたいで、少し意地悪く笑った。

「すまぬ、相手がお主とわかったら少し安心してしまつての。今の  
は冗談じゃ。」

「あ、ああ。そうだったんだ……もちろんわかつてたよ？」

な、なんだ。冗談だったのか……。またいつもの調子でボロクソ言  
われるのかと……

「お主は物凄くバカじゃ。」

「秀吉。女の子だからって、もう手加減はしないからね？」

「ちよつと待つのじゃ。ワシは男じゃ。」

互いに文句をぶつけ合う。ここは一步も引かない気構えで行こう…

…！

そして互いが互いのことを馬鹿にすること数分。

「つと、そうじゃ。ここでお主と出会つたのも何かの縁、ワシはお  
主をあまり敵に回したくは無い。ここは、途中まで同盟を組まない  
かの？」

「ほえ？ 同盟？ なにそれ？」

不意に秀吉が提案を持ちかけてくる。同盟ということは、仲間にな  
るといふことかな？

「まあつまりは協力し合わぬかということじゃ。この大人数では最  
後まで残ることはおろか、一人倒すことすら難しそうじゃからの。」

「ああ、やっぱりそういうことか。」

秀吉がゆっくり問いかける。確かに、それも一理ある。最後の方まで残るには他の皆も倒さなくちゃいけないわけで、ナオや雄二だっている。そんな強敵と戦うのは正直一人じゃ難しい。できれば数人でいきたいところだ。

「うん、わかった。秀吉の言うとおり、ここは同盟を組んだほうが良さそうだね。」

「うむ。そう言ってもらえてなによりじゃ。」

秀吉がにっこり笑う。よかった、喜んでもらえたようだなによりだ。僕は拳銃をホルダーに入れ、秀吉の前を歩く。

「じゃあ秀吉。僕は……って、秀吉？」

「ちよつと前を向いておいてもらえるかの、明久。」

僕がこの後の作戦について聞こうとすると、秀吉はホルダーから拳銃を抜いた。ん？ 敵でも居たのかな？

そう思つて前を見回してみたが、この広い通路には僕と秀吉しかない。どうして拳銃を抜いたのだらう。それを秀吉に聞こうとして、

「ねえ、秀吉」

声をかけようとしたところ、ふと一つの推測が浮かび上がった。

もし、この仲間関係ということが全て秀吉の嘘で、演技だったら？

今、この場で僕は秀吉に背を向けて、拳銃も抜いていない。秀吉はここで僕を殺るには、絶好のタイミングなのではないかと。

そこまで思考した時には、身体が既に動いていた。

ズガン！

秀吉の銃の銃口がこちらに向いた状態で発射された。くっ！ やっぱり同盟という言葉は嘘だったのか！

「流石は明久じゃ。この距離をかわすとは……………」

「……………あと一秒でも秀吉の策略に気が付くのが遅かったら、やられていたけどね。」

くっ、秀吉までこんな卑怯な手を使うなんて……………！ お金はやはり、人の心を乱すの物のようだ。これは僕が最後まで残って、この戦いに終止符を打つしかないな。

「食らえ秀吉っ！」

「食らうものかっ！」

僕は秀吉のから空きになった胴体目掛けて弾を数発撃ち込んだ。秀吉はそれを察していたかのように、半歩後ろに下がり、無駄の無い動きで僕の銃弾をかわした。

「ふうむ……………今度の演目は銃を使ったものが良いかもしれぬな。火薬も使えば、結構派手なものになる。」

賞品のかかっているこの勝負のときにも、秀吉は演目を考えていた。流石は演劇バカ……………こんなときにも自分の部活のことを考えているなんて……………！

「だけど、それが命取りだ！」

僕はまた拳銃を構えなおし、壁際にいる秀吉に向けてまた数発撃ち込んだ。しかしそれも見抜かれていたかのように、秀吉は華麗な動きで僕の弾をかわした。

「ふっ、まだまだじゃな、明久よ。」

「くっ！ もう一回……！」

そう思って再び引き金を引いた。しかし

カチンッ

「？ あ、あれ……？」

引き金を引いても弾は出ず、乾いた発射音が出てくるだけだった。も、もしかして、弾切れ！？ くっ、六発までしか連続で撃てないなんて、聞いてないよ！ いや、確かに弾は六発までしか入らなかつたけど……

「隙アリじゃ。」

「っ！？」

秀吉は僕が弾切れだとわかると、自分の拳銃を僕のいる方に向けてきた。くそっ、このままだとやられる！ そう思った僕は、一時的な退却を思いついた。よし、これならいける！

「秀吉っ！ 後ろっ！ 危ないよっ！」

僕は嘘を吐いた。無論、後ろには何も無い。でもこれで秀吉が後ろに注意を向けてくれれば一瞬の隙が生まれる。その隙に僕はこの場から逃げ出すという作戦だ。けど、これには欠点がある

「……………後ろには壁しかないのじゃが？」

そう、秀吉は壁際にぴったりくっついていていた。これじゃあ確認する必要もない。くそっ……………万策尽きたか……………！

「ワシがこの状況で後ろを向くかとも思ったのか？ それは随分と浅はかな考えじゃな。」

秀吉は銃口を向けたまま溜め息をつく。く、くそ……………一生懸命考えたのに、バカにされるなんて……………！

でもこのままじゃ本当に負けてしまう。せめて、何か他に武器があれば良いんだろうけど……………ん？ 他の武器？

僕はもう一度秀吉のほうを見た。秀吉の手には……………握られた拳銃。……………これだっ！

「さらばじゃ、明久よ。」

秀吉は引き金を引いた。そして銃弾は僕目掛けて直進してくる。この時を待っていた！！

「うおおおおっ！！！」

秀吉が銃弾を放ったと同時に僕も足を前に出す。最初の一撃は僕の右肩に直撃した。けど……………！！

「肩は致命傷じゃないから、アウトにはならないはずだっ！」

さつき司会の人が出ていたけど、即死じゃない場所に当たった場合は5回当たるとアウトになる。これは裏を返せば5回になるまで当たっていても大丈夫ということ、つまり4回までは他の場所に当たってもアウトにはならないということだ！

「な、なんじゃと!?!」

秀吉は今の一発で仕留めたつもりだったのが、既に銃口を下ろしていた。そして再び銃口を上げなおしたときには既に、僕は秀吉の目の前に居た。

「もらったあああああっ!!」

「なんじゃと あっ!?!」

僕は秀吉の手から拳銃を奪い取り、秀吉の頭部目掛けて弾の入った銃を打ち込んだ。そして弾丸は、なす術も無く立ち尽くしていた秀吉の頭部にヒットした。

《木下秀吉さん、アウトですっ!》

「っしやああああっ!!」

「くっ……」

アウトの宣告を受け、その場に崩れる秀吉。しかし一時はどうなることかと思っただけど、一瞬の隙が勝利に繋がったみたいだ。

「今回は最後まで騙しとおせなかったワシの負けじゃ……流石は明

久、行動力は人一倍じゃな。」

悔しそうに僕を見る秀吉。それでもギリギリまでわからせなかった秀吉も流石だと思う。あの時、秀吉が僕に銃口を向けるのが少しでも早かったら、きつとアウトになっていたのは僕の方だろう。

「秀吉も流石だったよ。最初は全く気が付かなかったもん。」

「それはそうでも結果がこれでは、ワシは何を言った所で負け犬の遠吠えじゃ。さあ、早く全員倒してくるのじゃぞ?」

「えっ?」

「応援しておると言ってるのじゃ。頑張ってくるがよい。」

「秀吉……」

秀吉は僕に向けて笑顔を放つ。うっ……少しクラツときてしまった。この場を早く立ち去りたいような気もしてくる。じゃあ秀吉の応援も受けたことだし、次の標的ターゲットに移ろうかな。あ、そっだ。

「あ、ちなみに秀吉は何をお願いする予定だったの?」

「うむ? 賞品かの?」

「うん、そう。僕はまだ決まって無くてさ……」

「そうじゃのう……自分で作るには手間もかかるし、ワシは演劇の衣装でも頼もつかと思ってたんじゃが。どうじゃ? 参考になったか?」

「流石は秀吉だね。ありがとう、参考になったよ。」

なるほど、秀吉は自分の好きなものを貰おうとしていたのか。じゃあ僕もそっいうものにしようかな。

「それじゃあ僕は先に進むね。じゃあね、秀吉。」

「うむ、頑張ってくるのじゃ。」

僕は秀吉に別れの言葉を言うと、先ほどと同じように長い廊下を進んでいったのだった。

## NO SIDE

『こちら正面玄関。現在亜矢お嬢様が始めたゲームの進行状況はどうなっていますか？』

「はいこちら監視室。現在は三名の脱落者が出ており、このままいけば最高でも三時間程度で終わるでしょう。」

『了解しました。それでは、引き続き正面玄関の監視を続けます。ゲームが終了次第、声をかけてください。』

「わかりました。手を抜かないように。」

『了解しました。』

通信が途絶える。ここは、神咲家の防犯カメラを一斉に取り仕切る管制塔のような場所だ。そこには現在ゲームの司会者とその管制塔

を取り仕切る監視者たちがいた。

そして今の会話は正面玄関、つまり先ほどナオたちが入ってきた場所にいるゲートの監視にあたっている人たちだ。あそこは立地的に監視カメラを置くことが困難なので、人員を配置してその代わりを務めている。

「さて、監視に戻りましょうか……」

監視室のリーダーがもう一度ゲームの監視をしようとしたところだった。

ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！

突然防犯用のブザーが監視室に鳴り響いた。

「なにっ!?!」

防犯用ブザーが鳴るということは、普段敷地内に不審者や不審物が進入してきた時、敷地を取り囲むように配置されているセンサーに触れるということ。しかし、現在行なっているゲームをする為にこちらのセンサーは切ってあった。

つまり、センサーを切ってあるこの状況でブザーが鳴るということはありえないのだ。

しかし、他にもブザーが鳴ることはある。監視役の誰かが防犯用スイッチを押すか、屋敷内の電力信号線の断裂が原因などで鳴るのだ。けれど、電力信号の線の断裂はありえない。なぜなら、このゲームの為に一度点検を行なって不備は全て直しているのだ。

その状況でまたブザーが鳴るということは、監視役の誰かが防犯

用スイッチを押したということだ。

「!? 正面玄関から!」

リーダーには正面玄関からの通信が入った。

『こちら正面玄関! やられました!』

「誰にやられた!？」

『身代金目的の武装集団です! 相手は武器を所持しています! すぐにゲームを終了させ、子供達を非難させてください!』

「了解した! 直ちに連絡を入れる!」

通信を切断したとほぼ同時にマイクのスイッチを入れ、放送を入れようとした時、事件は起こった。

「!? 電源が入らない……!?」

「リーダー! 電気回路を落とされました! 現在非常電源に切り替えています!」

「くそっ! 相手の思う壺じゃないか!」

机を叩く音が響く。その音に監視室の全員がハツとなる。ここはもうサバイバルゲームをする楽しい空間ではなく、本物の武器を持った集団が跋扈する恐怖の館へと変貌していた。

「……大至急このゲームを中止させるんだ……! 誰一人怪我をさせることなく、無事に家に送り届ける!」

「……はいつ!」

慌しくなる監視室。ゲームの中止を口頭で伝えるため何人かは監視

室を出て行ったのだった。

新年！ お屋敷サバイバル！ 中編（後書き）

どうも三日月です。

次回、後編が始まります。次回でラストです。

ドンドン忙しくなってくる中、こういうお話が投稿できる時間も僅かになってきました。マジで忙しいです。

でも、この話を完成させてから入試に挑みたいです。頑張ります。

無事合格して、更新日時を安定させたいと思います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0343s/>

---

バカとテストと召喚獣～ドジな天才？あらわる～

2012年1月14日13時54分発行